

デリシャスパーティー♡ プリキュア ~破壊者の食べ歩き~

ライノア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自身の記憶と代償に不老不死と破壊者の力を得た転生者 門津咲夜。彼は数百年もの時を超え、数々の世界を救ってきた。そんな彼が訪れた世界の舞台は、各国の料理が集う町『おいしいなタウン』。

だが、この町にはとある陰りを見せていた。それは味が急激に変質し、数々の料理店が閉店及び休業に追い込まれていたのだ。

そんな中、咲夜は私立新鮮中学校の生徒としての役割を与えられ、その際に定食屋 なごみ亭の一人娘 和実ゆいや、この世界の料理を司どる不思議な美味しい異世界 クッキングダムから来た捜索隊長 ローズマリーといった数々の仲間と出会い、全ての料理を独り占めしようとする目論むブンドル団に立ち向かって行く。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

4 / 13 二十六話投稿完了。二十七話執筆中… 暫くお待ち下さい。

目次

第一章：食事の顔は三度あり

主人公設定資料

1

第一品：ご飯は笑顔♡変身！キュアプレシヤス／悪魔のエース□変身！仮面ライダーディケイド

11

第二品：さようなら、ゆい…！マリちゃんの決意／ディケイド数十変化！擬（なぞら）うカメンライド！

44

第三品：コメコメのおつかい！迷子で大騒動！！／咲夜の手助け！コメコメおつかい大作戦！！

72

第四品：膨らむ この思い… キュアスパイシー誕生！／吠えろこの気持ち、パムパムの本音！

104

第五品：仲良くなりたいのに…！ここね、初めてのお友達！／ジェントルーの助っ人！？トレジャーズナイパー ディエンド！

138

第六品：学校！怪物！大パニック！？狙われたエビフライ！／敵か味方か！？破壊者の天敵、キバラー！

171

第七品：強火の情熱！煌めいてキュアヤムヤム！！／目覚める最後のエナジー妖精！正しい加熱の仕方！！

195

第八品：ちゆるりん卒業！？おでかけ！おいしーなタウン／笑顔を活かすS p i r i t！探検おいしーなタウン！！

232

第九品：噛み合わない二人？ここねとらんの合わせ味噌！／ディケイド弱体化！？分割された破壊者の力！

259

第十品：泣かないでレシピッピ…誕生！ハートジューシーミキサ／プリンの味を返せ！時を越える新必殺技！！

300

第十一品：ジェントルーの罠！ゆいとらん、テストで大ピンチ！？／隠し味のイメージ！？明かされる衝撃の真実！

332

第十二品：小さじ一杯の希望！ジェントルーの本当の心／激情なる
進撃！囚われた希望の救済！！ 354

第二章：菓子併せ喰い

第十三品：奪われた思い出を守れ！明かされる拓海のコールド／食物喪
失は突然に!!ナルシストルーとソルトルー！ 395

第十四品：初恋ってどんな味？恋する気持ちと拓海のコールド／初恋
ノーウェイクアツプ!!古代の戦士と味覚の王子！ 423

雄大 設定資料

第十五品：ドキドキ！ここね、初めてのピクニック！／ソロもぐ
ちゃんを見抜け！キバレ、旋律のピクニック！ 464

第十六品：らんらんって変!!肉じゃがと嘘／ウソツキは誰だ!!独り
善がりの真実を見抜け！ 497

第十七品：四人目のプリキュア!!あまねの選択／ソルトルーの付け
足し!!凶敵、融合バグスター!! 531

第十八品：私、パフェになりたい！輝け！キュアファイナーレ！／僕
の旅の行く先は僕だけが決める！破壊者と怪盗の最強コンビ!!

563

透翼 設定資料

第十九品：皆でデコレーション！お兄さんへの贈り物／破壊者流デ
コレーション!!美味しいバグスターの刻み方 598

第二十品：あまねのマナーレッスン！憧れのレストラン！／四人目
の旅仲間！キバーラ、完全復活 631

冬美 設定資料

第二十一品：この味を守りたい…！らんの和菓子大作戦／付け足す
金の力！雷のライジングフォーム 675

第二十二品：ブラペ引退!? 伝説のクレープを探せ! / 無力な自分を
振り払え! ウオブリーの置き土産 710

第二十三品：ここねの我儘!? 思い出のボールドーナツ! / 過去の鎖
をぶっ壊せ! ドラゴンスタイルの真骨頂! 747

第二十四品：コメコメなんか知らない! 波乱のピザパーティー! /
喧嘩もすれば危険に当たる!? 新たな仮面は白狐! 782

ジュブリー 設定資料 837

第三章：歩く道筋に絆あり

第二十五品：新たな怪盗!? にこにこキャンプでござす! / お化け不
祥事案件!? 四身一体、クライマックスフォーム! 839

第二十六品：ここねの約束! ピーマン大王へ挑戦 / 嫌いを好きに!
冬美の克服大作戦 877

第一章：食事の顔は三度あり

主人公設定資料

門津咲夜^{かどつさくや}

生年月日（転生前）：2002年8月2日、2008年8月2日（デパブリ世界の設定）

年齢：13歳（自称）、百歳以上（本年齢）

学年：私立新鮮中学校1年3組（一話〜三話まで）↓2年3組（四話から）

身長：170.0cm

口癖：「大体分かってきた」、「如何って事はない。単なる気紛れだ」「それな。同意はするぜ（誰かが可愛いと言った時のみ）」

一人称：俺

二人称：お前

好きな食べ物：ゼリー飲料、栄養食品、飲料食品

嫌いな食べ物：牡蠣（腹を下したため）

趣味：音楽観賞、口笛、ゲーム

家族構成（転生前）：父（離婚）、母、祖父、祖母、叔父、叔母

特典：仮面ライダーディケイド、不老不死（…と言っても歳を取らなくなるだけ）

役割：私立新鮮中学校の生徒（バトミントン部所属）

ICV：まだ未定

自身の名前と記憶を代償に仮面ライダーディケイドの特典を手にした転生者で、本作の主人公。

丸刈り頭と尻にある大きな黒子^{ホッロ}が特徴。

名前の由来は仮面ライダーディケイドの変身者 門矢 士の振^{もじ}り。

自由闊達でマイペースな性格。誰に対しても尊^{そん}大な態度で接するが、自分の事より他人の事に気配りをする程の優しい性格。人に指示される事は自分に取っては性に合わないが、自分が思った事を言った

り、やらかしてしまつた事は直ぐに謝るといつた素直な一面を持ち合わせる。

俺様などころもあるが情に熱く、どんな状況においても喜怒哀楽に叱咤激励の言葉を投げ掛ける程の格言をかます。

一方で、命を粗末にする及び踏み躪ろうとする様な行為は一切許さず「道を踏み違えた奴は同情しない主義」、「殺そうとするならば人生ごと本気で潰す」、「無慈悲を与えてやる」などと発言したりと容赦はしない。

理由があるとはいえど女性やオカマ、子供だろうと拷問紛いに殴るのを平然とするが、命の大切さを教えたりと相手を改心させようとする人間味のある行動を取ったりしている。

数百年も旅をしてきた為か、他人の長過ぎる本名は『自分に取つて地獄だ』と啖呵を切る程嫌っている。

また、マスコットキャラの様な可愛い生き物には目が無く、エナジー妖精の中ではコメコメを『頑張り屋で良い子』という理由で推している。因みに転生前で好きな動物はウサギと猫。

ゼロデイケイドライダー

ネオデイケイドライダーが旅をしていく内に進化したデイケイドライダー。何でもありのオーパーツで、怪人の撃破に必要な属性も代替出来、ライダー以外の敵も浄化可能となっている。

イエローグリーンของドライバー本体にはゼロワン、セイバー、リバイスのライダーズクレストが刻まれており、サイドハンドルにはシアンの縁取りが施され、ベルト左右にある神秘の印 シックスエレメントはネオと同様マゼンタとなっている。また、銀の縁取りの赤いレンズがドライバーの中心に埋め込まれており、カラーリングは仮面ライダーリバイス サンダーゲイルを思わせる。

仮面ライダーディケイド（ゼロディケイドライダーVer.）

身長：192cm

体重：83kg

パンチ力：23.6t

キック力：52.8t

ジャンプ力（一飛び）：60.8m

走力（100m）：2.6秒

通称：ゼロディケイド。スペック設定は初期のディケイドからネオに加算された数値を二倍にしたもの。

だがこれはディケイドライドウオッチによって本来の力が半分となっただけに過ぎず、若し本来のスペックとして半分のみも足されたら、パンチ力47.2t、キック力105.6t、ジャンプ力（一飛び）121.6m、走力（100m）1.3秒となる。

また、ネオとは違い、白いディケイドライダーと同様能力を余す事なくアタックライドやフォームライドも健在。カメンライドは1号からリバイスまでの主役ライダーだけではなく、二号ライダー以降のライダー、派生形態や最強フォームは疎か、究極フォームにも変身出来る（本編、劇場版、スピンオフ、ハイパーバトルDVD）。

その為、ディケイドライダーのバックル中央の秘石 トリックスターによってライダーの力を解放すると共に制御可能で、肉体の限界を越えて死ぬデメリット性を持つG4、呪われたベルトで変身後に灰化するカイザ、キバ以上に装着者への負担が大きく資格の無い者が変身した瞬時に死亡するダークキバ、変身者の身体に負担が掛かり死亡する危険性・可能性があるイクサ、変身しただけで命を削る竜玄・黄泉、ハザードレベルが限界値を越え消滅する畏れがあるグリスブリザード、格ライダーの暴走形態にも問題なく変身出来る。

余談だが小説、S.I.C、ファイナルステージ、番外及びリメイ

ク作、戦闘描写の乏^{とほ}しいライダーのカードも存在する。

第六品以降未鑑賞の方はネタバレ注意!!

仮面ライダーキバラー (咲夜Ver.)

身長：192cm

体重：76kg

パンチ力：40t

キック力：45t

ジャンプ力(一飛び)：113m

走力(100m)：3秒

咲夜とキバーラが変身したライダー。姿は光夏海が変身したキバーラとほぼ同じ。専用武器キバーラサーベルの柄で『光家秘伝 笑いのツボ』を駆使して戦う。又、キバーラとも意思疎通による会話も可能。

仮面ライダーディケイド（ゲーム病）

身長：192cm

体重：83kg

パンチ力：11.8t

キック力：26.4t

ジャンプ力（一飛び）：30.4m

走力（100m）：5.2秒

ゲーム病に侵された咲夜がゼロディケイドライバーで変身した姿。

姿は赤い複眼とディヴァインアーマーに紫の縁取りのダークディケイドと言ったもの。

半分の力が奪われた事もあって大幅に弱体化したが、スパイシーとヤムヤムが和解した事でゲーム病を克服。

カメンライドは問題無く使用出来、奪われた力が内包されているライダーガシャットをエグゼイドのフォームライドラッシュユで奪還し、アポロバグスターを意地で倒すと言った戦果を成し遂げた。

ハートジューシーミキサー（デイケイドVer.）
薄ピンクの部分がマゼンタ、水色の部分が緑になっているのが特徴
で、武器として使用可能。

中央部のダイヤルでそれぞれ三人の個人必殺技に切り替え、先端の
レバーを四回押し込む事でエネルギーをチャージし、銃の様に構えな
がらトリガーボタンを押す事で対象に光線を放つ事が出来る。

ライダー・デリシヤスデイケイドヒート

プレシヤスとの合体技。

ライダー・デリシヤスデイケイドベイキン

スパイシーとの合体技。

ライダー・デリシヤスデイケイドドレイン

ヤムヤムとの合体技。

マスクドジャーニーミキサー

咲夜のハートジューシーミキサーが変化した物で、左側のダイヤルには四角いマゼンタと蝶形のシアン、右側のダイヤルには炎の赤と唇の紫が追加されているのが特徴。

ハートジューシーミキサーと同様、中央部のダイヤルでそれぞれの個人必殺技に切り替え、先端のレバーを四回押し込む事でエネルギーをチャージし、銃の様に構えながらトリガーボタンを押す事で対象に光線を放つ事が出来る。

ライダー・トランスデイメンションスプライス

デイケイドの力を宿した個人技。

ライダー・トランスデイメンションバグラー

キバーラの力を宿した個人技。

ライダー・トランスデイメンションエンブレス

クウガの力を宿した個人技。

ライダー・トランスデイメンションパーシユート

デイエンドの力を宿した個人技

第二十一品以降ネタバレ注意!!

仮面ライダーイクサ（咲夜ver.）

身長：192cm

体重：83kg

パンチ力：4.2t

キック力：1.8t

ジャンプ力（一飛び）：18m

走力（100m）：9.6秒

咲夜がイクサドライバーで変身した姿。スペックはイクサ セーブモードと同様。

セイブモードにはなれないものの、召喚したパワードイクサーで自身をウオブリーの元まで投げ飛ばし、ブロウクン・フアングで動きを止めてBとデイエンドをウオブリーの撃破に繋げた。

第二十四品ネタバレ注意!!

デイクイドギーツ

咲夜がVer. 4にアップデートしたゼロデイクイドライバーで変身した姿。

スペックはギーツ マグナムブーストフォームと同様で、リボルブオンも変身者本人の口から発する事で使用可能。

ジーンとの連携で『ジェノサイダーを撃破し、咲夜曰く『令和ライダーの中では一番使いやすい』とのこと。

因みにアップデート条件は昭和で1号、V3、BLACK。平成と令和でクウガからリバイス。外伝でシノビにカメンライドする事である。

ファイナルフォームライドはレジェンドギーツ(変形元はレジェンドキウウビ)。

くフォームライドく

エントリー、マグナム、ブースト、ゾンビ、ニンジャ、モンスター、パワードビルダー、アームドウオーター、アームドシールド、アームドハンマー、アームドアロー、ファイバーブースト、ファイバーマグナム、ご当地ギーツ(東京、名古屋、大阪、福岡)

くフォームライド(デュアルオン)く

アームドウオーターブースト、アームドハンマーマグナム、ビートブースト、アームドリルマグナム、ゾンビブースト、パワードビルダーブースト、マグナムニンジャ

くフォームライド(中間フォーム)く

レイジングフォーム、コマンドフォーム キヤノンモード(ジェットモードはりボルブオンで変身可能)、ブーストマークII(ブーストモードはりボルブオンで変身可能)、レーザーブーストフォーム、ブーストマークIII

くアタックライドく

ブーストライカー、レーザーレイズライザー、ギガントハンマー・

ギガントソード・ギガントブラスター・マグナムシューター40X・
ゾンビブレイカー・ニンジャデュアラール・ビートアクセス(パワー
ビルダー専用)

第一品：ご飯は笑顔♡変身！キュアプレシヤス／悪魔
のエース□変身！仮面ライダーディケイド

No side

彼の生前はB型社会人。ある日突然死んでしまい、自身の記憶を代償に、世界の破壊者の力と不老不死の特典を得た。

まるで豚小屋から自由になりたいと願う様に。世界を巡る中、沢山たくさんの仲間と出会ってきた。しかし、その戦いの中には死んだ者も存在していた。

それでも彼はその者達の事を忘れぬ様、意思を引き継ぎながら、この胸に永遠に刻み込んだのだった。

あれから百年くらいが経過した次なる世界は――。

咲夜…
…起きろ…

『デイケイド…
…デイケイドツ!!
』

??? □

S
i
d
e

おい、咲夜。起きろって…

「おい咲夜！起きろッ!!」

??? 「…はっ！夢か…」

バドミントン部員A「何だよ咲夜。ほつつき歩いてた上に、練習中で爆睡ぼくすいか？」

咲夜「ああ、悪いな。最近寝てなくてさ…誰かが助けを求めている夢を見たんだよ。ってか、ホントに俺が男子バドミントン部のエースなのか？」

バドミントン部A「まだ寝ぼけてんのか？ってか、次の練習試合お前の番だぞ？」

咲夜「…ヤツベ、すっかり忘れてた！」

バドミントン部員B「全くしつかりしろよな」

バドミントン部員C「まだ春休み中とはいえ、せつかくのエースが

寝ぼけてちやどうしようもねーぜ？」

咲夜「悪い悪い。心配してくれて有難な。んじゃ…体操して、足を吊らない程度に加減を入れながらやっちゃいますか」

「ダメだ全然話聞いてない…」

こんなマイペースな俺だが、バドミントンのコートに立ちながらこれまでの事を振り返る。何故こうなったのかと話したいところだが、その前に回想と共に自己紹介をしようと思う。

俺は門津咲夜。自分の生前の記憶と引き換えに、世界の破壊者 仮面ライダーディケイドの力を、一生歳を取らない特典と同時に手にした所謂転生者だ。

次の世界の舞台は、おいしーなタウン。料理店が集う世界中の料理が味わえる町だ。

その大半は繁華街が軒を犄ぎ合ひ、玉席混合の激戦区だと思われるが、実を言うとジャンルごとにエリアが分割されているらしい。『和食』がメインの和食ストリート、『洋食』がメインの洋食ストリート、そして『中華』がメインの中華ストリートの三つ。観光客も含め、大きな賑わいを見せている。

この町にある私立新鮮中学校。如何やら俺は、この学校の生徒というのが今回の役割らしい。おまけにバドミントン部のエースって事になっているとは。

あ。因みにこの情報は俺を連行した部員の奴らから聞いた。時期は三月下旬で、まだ春休み中とのことだ。

く回想く

咲夜「此処が次の世界か…って、あれ？何だこの制服。えーっと、

私立新鮮中学校 1年3組 門津咲夜…また学生か」

バドミントン部員A「おい！咲夜！探したぞ！」

咲夜「えっ？誰だよ、お前ら!?」
バドミントン部員B「エース！練習中に何処どこほつつき歩いてたんだよ!?!」

バドミントン部員C「きつと先生も心配してるぜ？早く戻らないと午前の練習終わっちゃうぞー！」

咲夜「えっ？ちよ、待て！何で俺がお前らのエース何だよ——」

バドミントン部員A「言い訳不要！ほら行くぞー！」

咲夜「おい！一体何処どこへ連れてく気だよ〜ッ!?!」

〜回想終了〜

こうして耳を傾けようとしなかった男子バドミントン部の奴らに連行されて今に至り、男子バドミントン部の担当教師にその事を注意された。

好きでサボった訳じゃないんだけどな。やっぱ百年以上経ってもこういう展開は馴なれないモンだな。そう思っているとシャツルは打ち上げられ、気が付く頃にはバドミントンの練習試合は始まっていた。

□

昼休みに突入し、俺は校庭で昼飯を食おうとした。えっ？勝敗はどうなったかって？圧勝だったよ。

昼飯は連行される際に部活仲間が買ってきてくれた。それほど俺が尊敬されてるって訳か。

俺は昼休みに一人で食えるところを探して周囲を見渡すと、校庭では偶然に女子サッカーの練習試合が行われていた。

春休みなのに部活があるなんて、大変なモンだな。俺はその試合を観戦してから弁当を食う事にした。

ドリブルをしている青チームの少女を赤チームが阻む様にスライディングを仕掛けるが難なく避けられ、最後には華麗かっらいなシュートを決

めるのを許してしまう。

咲夜「いよつしや！今日はいい写真になりそうだ。早速この世界に
来た記念として一枚パシャつと… ってあれ？シャツターが切れな
い…!？」

審判のホイッスルが青チームへの勝利を鳴らす。同時に俺はガツ
ツポーズを取り、その光景を撮るべくマゼンタの二眼レフカメラ『B
lack Bird Fly』のシャッターを切るが、パチリといっ
た音が鳴る事はなかった。

咲夜「まあ、原因はどうあれど、此処も俺の世界じゃなさそうだ…
??? 「待って！」

期待が不満へと変わり、別の場所で食おうとした矢先、突然声を掛
けられる。さつきシユートを決めた少女のようだ。

???「貴方、確か男子バドミントン部エースの門津君だっけ？あだし、
和実ゆい！」

咲夜「和実か。それで、俺に何の様だ？」

ゆい「今練習が終わって休憩中何だけど、一緒に御結び如何？」

咲夜「握り飯か… 丁度良い。俺も弁当じゃ物足りないと思ってい
たところだ。裾分けさせてもらおう」

俺は遠慮する事なく握り飯も頂く事にした。コンビニで買った昼
飯では物足りなかったからな。

女子サッカー部員「和実さん、このままサッカー部に入ってくれれ
ばいいのに…。」

???「無理無理！」

女子サッカー部員達は和実の方を見るが、俺は黙々と握り飯の具材
を噛み締める。

ゆい「んんくっ！昆布たまんない！」

咲夜「やっぱ握り飯の具材と言えば…。」

「鮭だよね〜！」

咲夜「… うん。美味しい」

ゆい「デリシャスマイル〜!!今度は何かな〜?んん!おかか〜!!」
咲夜「こいつ結構握り飯好きだな」

??? 「ゆいは御結び目当てだから」

女子サッカー部員「あはは…」

和実の握り飯好きに苦笑する女子サッカー部員。和実は何かを思
い出したのか握り飯を見つめる。

ゆい「ねえ、『御結びの妖精』って見た事ある?」

咲夜「!?!」

その言葉に俺は目を丸くする。

??? 「えっ? 何?」

ゆい「ううん、何でもない」

咲夜『御結びの妖精』ねえ…。若しかしたら会えるかもな、そい
つに」

ゆい「えっ? そうかな…?」

咲夜「会えるったら会えるさ。例え現実でなかったとしても、夢の
中だけならいつでも会える。それだけの事だろ」

そう言っただけで俺は握り飯を丸ごと頬張る。女子サッカー部員達は疑
問の声を上げるが、和実は気持ちを切り替えて握り飯を頬張る。

??? 「美味しそうに食べるね、見てるこっちも笑顔になっちゃう」

ゆい「お婆ちゃんがよく言ってたんだ。『ご飯は笑顔』… だって
!」

祖母の言葉を引用する和実は、天の道を行き総てを司どる男の象徴
でもある太陽の様な笑顔を女子サッカー部員達に照らしてみせる。

咲夜『ご飯は笑顔』… か。そろそろ練習に戻る。じゃあな」

俺はそう呟きながら二眼レフのシャッターを切る。今度はちゃん
と撮れたみたいだ。不満だった気持ちが満足な気持ちへと切り替わ
る様に、口を緩ませながら今度こそ校庭を後にする。さて、次の練習
に備えるべく体育館に戻るとしますか。

??? 「何だったんだろうね。あのピンク」

咲夜「… ピンクじゃない。マゼンタだ」

同時に密かに呟いた女子サッカー部員に色を指摘した事は言うま
でもなかったけどな。

□
No side

場面は大きく変わり、此処はクッキングダム。様々な食料が建築物の素材となっており、この世界の異世界と言っても過言ではない。

??? 「これより、レシピボンの捜索に行つて参ります」

王室にて跪ひざまずいている美意識の高い青年の名はローズマリー。レシピボン捜索隊長を務めており、国王の勅命ちよくめいにてレシピボンの捜索そうさくを命じられていた。

??? 「うむ、宜しく頼むぞ。ローズマリー」

彼の忠誠を見届けながら玉座に座っているのはクッキングダム国王クッキング。同じくその隣の玉座に座っているのは女王のクックイーン。

クッキング「我が国の宝『レシピボン』を盗んだ奴らは、必ずやレシピピを集め出すじやろう。何としても止めなくてはならん！これを…」

クッキングがそう言うと、威風な服を着たオールバックの男 フェンネルがローズマリーにバックを差し出す。ローズマリーが中身を見てみると、其処そこにはハートの装飾そうしやくが付いているフードを着ている手の平サイズの小動物と思わしき三匹の生物が熟睡じゆくすいしていた。

赤いフードは米粒の様な耳垢あかが特徴の薄ピンク色の狐、青いフードは垂れている左耳に白い花の装飾そうしやくにピンクの布を付けた髪飾りを付

けている茶色い仔犬、オレンジのフードは小鹿の様な二本角を持つ黄色い小竜。

クツキング「エナジー妖精のコメコメ、パムパム、メンメンじゃ。きつと役に立つじやろう。それと、もう一つなんじゃが、この世界を破壊しようとする悪魔『デイケイド』もそれを狙っておる。何があるうと、必ずやレシピボンを取り戻してくれ」

ローズマリー「はっ！」

悪魔と呼ばれし存在を忠告したその刹那、密かに眠っていたコメコメの左耳が聞いていたかの様に小さく振った。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメーゴP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Y u i s i d e

ゆい「御結び美味しかったな。こっちから帰ってみよう！」
サッカー部の助っ人をした後、帰ってる途中なんだ。あの門津君っ

て人、一体何だったんだろう？そう思いながら今日も気分転換で商店街を訪れる。でも其処そこであたしは突然、ある物を目にする。

ゆい「あれ？皆閉まっちゃってる…。どうしたんだろう？」

辺りを見渡すと、いつも賑わっていた筈はずの商店街が何故か休店、閉店などがあちこち閉まっていた。一体何があったんだろう…。？

□

No side

ローズマリー「もう…。こつちの世界ってば広き大盛りく…。」

広場に彷徨さまよっているのはローズマリー。レシピポンを探すべく現実世界に行き着くも広大過ぎて旅費りよひも無い故ゆえに行方を追う事が出来ず、今でも倒れそうにもなっている。

ローズマリー「レシピポん…。何処なの…。？」

コメコメ「コメ？」

小腹を空かせながら遂には生き倒れ、その反動でコメコメが目覚める。

コメコメ「コメ？」

ローズマリー「……………」

ベンチで小腹を空かせながらうつ伏せに生き倒れていたローズマリーは、疲弊ひへいな表情で気を失っていた。

コメコメ「コメく！ココココツ！コメくツ!!」

状況を察したコメコメは助けを求めるべく、何処かへ行ってしまうた。

□

コメコメ「コメ…。」

コメコメはローズマリーを助けようと食料探しの途中に八百屋に展示されている桃を食べさせようと考えていたが、乳母車うぼぐるまに乗っている

る赤ん坊がそれを見つめる。

母親「あら、美味しそうな桃！」

店員「いらつしやい！」

赤ん坊の母親と思われる母親が桃と間違えてコメコメを掴んでしまふ。

母親「キヤーツ!!」

コメコメ「コメゝツ!!」

互いに目が合い、驚きの声を上げる両者。母親は直ぐにコメコメを手放すが、赤ん坊が乗っている乳母車うばぐるまに入ってしまった、その反動にてベビーカーが坂道を暴走する。

母親「あっ！」

店員「大変だ！」

「これ持ってて！」

「あんたもこれ持ってろ！」

店員と母親に鞆かぼんと袋を投げ渡す少年少女が赤ん坊が乗っている乳母車を止めるべく坂道を下る。乳母車うばぐるまを制止しようと奮闘するコメコメ。だが、小さい体では非力なまま。

「はにゃ〜!!」

コメコメ「コメゝツ!!」

其処へ自転車に乗った明るい栗毛の少女が暴走している乳母車うばぐるまを目撃すると、驚きの声を上げる。暴走する度に乳母車うばぐるまは速度を増していく。

このままでは衝突してしまい、栗毛の少女が怪我わらひに陥るか、赤ん坊が命が危険に晒されてしまう。

力尽きそうになったコメコメは乳母車うばぐるまから手を離してしまうが、瞬時に新たな手が掴まれた。

「追いついたー!!」

掴んだ手の正体はゆいだった。普通の人間をも凌駕りようがする身体能力で追いつくと、踵かかとをブレーキを掛ける要領で地面を滑走し、同じく追いついていた咲夜も栗毛の少女が乗っていた自転車の横に割り込むと、数cmにて間一発で受け止める。

咲夜「ふいふ、間一髪だ。危うく足吊るところだった…」

ゆい「大丈夫?」

赤ん坊「あうあう!」

ゆい「よかった…!あれ、門津君?こんなところで会うなんて奇遇だね」

咲夜「お前は…和実?そっちこそ奇遇だな。けどまあ、赤子が乗ってる乳母車を止めない訳には行かなかったからな」

赤ん坊の安全を確認すべく優しく声を掛けるゆいは咲夜の存在に気付く。コメコメは二人に目を輝かせる。

この二人ならきつとローズマリーを救える。そう思っていると、背後から何かが倒れる音がしたのか、早々に身を隠した。

ゆい「わっ!大丈夫!」

気が抜けて横転した自転車ごと倒れる栗毛の少女。ゆいは心配そうに声を掛ける。

???「あははは…心配も無用。このらんらん特製出前五号なら倒れても…」

咲夜「其方じゃなくて、お前の方だろ?兎に角、無事で何よりだ。立てるか?」

???「…えへへ。ありがとう」

母親「ああ!有難う御座います!」

咲夜「如何って事はありません。単なる、気紛れです」

母親「それでもです!本当に有難う御座いました!」

大丈夫らしいテクノロジーを自慢する栗毛の少女に手を差し伸べる咲夜。

栗毛の少女は安心感を覚えたのか、感謝を述べながらその手を握ると、店員と母親が赤ん坊の無事を確認するべく駆け寄って来た。

???「何かあったのかしら?」

???「その様ですね…」

その光景を眺めていたのは、高級車に乗っている大人びた印象を持つ紺色ボブヘアの少女。

笑い合う三人を眺めるのも特段興味無さげ。彼女にとっては通り

すがりの見知らぬ他人でしか無かったが、一瞬だけ咲夜と目が合う。

「青・・・」

「あっ、はい！」

信号の目が赤から青に変わった事を執事に促すと、高級車はそのまま通り過ぎて行つた。

咲夜「何だったんだ？あの高級車・・・」

ゆい「ねえ！せっかくだし、一緒に帰らない？」

咲夜「・・・ついでだからな」

□

S a k u y a s i d e

ゆい「ん？」

コメコメ「コメ・・・」

帰り際に広場に通りがかる俺と和実。其処そこには薄ピンク色の小狐が空腹で生き倒れていた。

ゆい「やっぱり！きつきの！」

咲夜「狐か・・・」

コメコメ「コメ・・・！コメコメコメ、ココココ・・・！」

ゆい「え〜っ！浮いてる!? 貴女何者なの!? どうして!? すごー！うわあ〜!!」

コメコメ「コメコメ・・・」

興味津々しんしんなゆいに照れる小狐。瞬時に小腹を空かせてしまう。

ゆい「よかつたらどうぞ！」

コメコメ「コメ・・・！」

それを察した和実は袋から握り飯を差し出す。せめてラップぐらい巻いとけよ。それは置いといて、目を輝かせた小狐は嬉しさのあまり握り飯を食う。

ゆい「御結び、好き？」

コメコメ「コメ・・・！」

ゆい「あたしも！」

咲夜「…可愛い」

ゆい「えっ？」

咲夜「…あ、いや。何も」

コメコメ「コメ〜…フアツ!？」

意気投合する和実と小狐。腹一杯になった小狐は誰かの存在に気付いたのか俺達を誘導する。誘導していた場所へと思われる広場に向かうと、ベンチにはオカマらしき人物が生き倒れていた。

ローズマリー「お腹…空いた…」

ゆい「ええっ!?大変!」

咲夜「どう見てもオカマじゃねーか。兎に角、このままにはしておけねーな」

ゆい「あたしに任せて!よいしょ!」

コメコメ「コメツ!？」

咲夜「!？」

ゆい「…大丈夫!直ぐにこの町で一番のお店に連れてくから!」
コメコメ「コメ〜!」

咲夜「…こいつ人間じゃねえ」

【速報】伝説の超^{スーパー}おしいしーな人誕生のお知らせ。

ゆい「門津君。行くよー!」

咲夜「…あつ、悪い。直ぐ行く」

俺は和実の後を追って、オカマが持っていたバックを背負いながら『この町で一番のお店』と呼ばれる場所へと向かって行った。

□

俺達は今、定食屋『なごみ亭』にいる。丁度オカマ分の定食が並べられていたところだ。まさか、和実がこの定食屋の一人娘だったとはな。

??? 「はい、お待ちどうさん」

なごみ亭の経営者である和実の母親である、あきは叔母さん。どっかで聞いた事のある声なんだよな… 気のせいかな？ 怒ると「シヤンナロー！」って言いそうだけど。

ローズマリー 「何て素晴らしい…！」

ゆい 「お母さんの料理は、この町で一番だと思うんだ！」

咲夜 「俺もそう思う。大好物である鮭の焼き具合もバツチリだしな」

あきは 「バツチリと言っても、普通の定食だけどね」

ローズマリー 「何をおっしゃるの！ この誇り高き香りが、如何に心を込めてらっしゃるかを語っていてよ！」

咲夜 「そんな大袈裟な」

ローズマリー 「大袈裟でもないわよ！ なのに私… お渡しするお

金も持ってないなんてえ…！」

あきは 「気にしないで食べな」

咲夜 「そうだけ。遠慮せず食べよ」

ローズマリー 「出来ないわ！」

あきは 「じゃあ、奥の手だな」

オカマが定食を食い終え、恩返しとして皿洗いに参加する。勿論、俺も参加させてもらった。

ローズマリー 「頂いた分、大盛りに働いちゃうわよ〜！」

咲夜 「おっ。随分と意気揚々じゃねーか」

ゆい 「これもお願いしまーす。えっと…！」

咲夜 「名前を聞きたいんだろ？ そういや、俺も聞いていなかったからな」

ローズマリー「ローズマリーよ。マリちゃんって呼んで」

和実はおカマに名前を聞いていなかった。実は俺も名前を聞いてなかったためか、おカマは簡潔に自己紹介をする。

ゆい「あたしは和実ゆい」

咲夜「門津 咲夜だ。宜しく頼むぜ、おカマ」

ローズマリー「ちよつと！其処はマリちゃんって呼んで頂戴！」

咲夜「生憎俺は人様に指示されるのが嫌いな立場だ。けど見るからにして、お前を悪人とは思ってはいない」

ゆい「そういえばマリちゃん。休んでなくて大丈夫？」

咲夜「多分大丈夫だろう。あいつはあいつなりに、恩を返したくて返したくて仕方がないんだよ」

ローズマリー「Excellentよ。あんなデリシヤスな定食を食べたら、元気特盛りよ！有難うね。ゆい、咲夜」

咲夜「礼を言われるまでもないが、誰かが言ってたさ。『ご飯は笑顔』… ってな」

ゆい「そうそう。ご飯は笑顔だから！」

ローズマリー「まあっ！素敵な言葉！」

微笑む和実とおカマ。俺は写真を撮りたいところだが、今は食器洗い専念する事にした。

店内を見てみると、定食の味を堪能するカップルや観光客の姿が。頬が落ちる程の笑顔が満ち溢れていた。

ローズマリー「ほかほかハートが溢れてる… 素敵なお店。あら？ 貴方もこのお店が好きなのね」

一瞬にして見えたが握り飯を象り、天使か雛を思わせる羽とハート型の尻尾を持つ一頭身の精霊。

おカマが静かに微笑むと同時にその姿を消した。今は… 見なかつた事にしよう。

場面は変わり、キッチンで皿を拭いてる途中に和実は疑問を吐露するかの様に問う。

此処は二人だけの話になりそうだから、敢えて黙っておくことにする。

ゆい「マリちゃん、聞いてもいい?」

ローズマリー「んふふ。美しさの秘訣? 気になるわよねえ! やつぱり!」

ゆい「...それはいいかな」

ローズマリー「そうなの!」

ゆい「マリちゃんも、『御結びの妖精』が見えるの?」

咲夜「!」

ローズマリー「えっ... 貴女見えるの? レシピッピが?」

咲夜「『レシピッピ』...?」

俺は目を丸くしながら疑問を吐露する。オカマは一瞬戸惑うも、素直に答える。

もう黙ってても何も変わらなから俺もありのままを話す。

ゆい「レシピッピって言うんだ。うん! 見えるっていうか、ぼんやりと...」

咲夜「ああ、実は俺も見えるんだ。何故だか分からないが、何となく... な」

ローズマリー「そう... レシピッピはね、お料理の妖精なの。小さい頃は見える事があるんだけど... 普通は大人になると見えなくなつて、忘れてしまうものなのよ」

小狐もリユックの中で密かに聞いている。

ゆい「そうなんだあ...!」

ローズマリー「レシピッピが見えるのは、貴女達二人がお料理を大切に思っているから。その気持ちがあつても強いよね!」

ゆい「そつかあ... レシピッピっていうんだ。あれ? マリちゃんは何でレシピッピの事、そんなに詳しいの?」

ローズマリー「それは...」

咲夜「それは...?」

ローズマリー「ヒ・ミ・ツ!」

プライバシーを避けるオカマに流石の俺達も呆れられる。

ゆい「ええっ...!」

咲夜「其処は素直に言うところだろ!」

ローズマリー「んふふ。代わりに、美しさの秘訣ひけつを教えてくださいな
ら」

「それはいいかな」

ローズマリー「何だよ!？」

俺達に突っ込むオカマはその後、なごみ亭ていを後にすることとなつた。

コメコメ「コメコメ」

バックの中にいた小狐も手を振り、俺達はそれを見送った。

咲夜「・・・やっぱ可愛いな。あの狐」

□

No side

場面は大きく変わり、クッキングダムとは違う異世界。数々の水晶が漂ただよっており、赤いバツ印の上に金色でBのシンボルが描かれた浮遊城。

丸い蓋ふたを開けると、出て来たのは邪悪なオーラによって気力を失った四体のレシピッピ。紫の鎖で繋がれたレシピボンへと吸い込まれると、絵となって収納された。

黒を基調とした怪盗風の衣装を身に纏まとう銀髪の少女。彼女の名はジエントルー。ブンドル団に所属する行動要員だ。

???「無事、レシピッピにレシピボンが収まりました。我らの団長ゴーダツツ様が、お喜びになるでしょう・・・」

右目が隠れている緑のショートヘアと、赤を基調とした刺々しい印象を持ち合わせる衣装を身に纏まとった女性の名はセクレトルー。彼女もまた、ジエントルーと同じくブンドル団に所属する上役だ。

セクレトルー「… ってゆーか、これぐらい出来て当然じゃね？
クッキングダムから追手が出たそうです。一掃を励んで下さい…
ってゆーか、まだまだ働き方が緩いつての」

ジエントルー「はっ！承知しました！」

二言目にて陰険な口調で嫌味を付け加えるセクレトルー。だが、
ジエントルーは彼女に与えられた指針を素直に受け入れる。

セクレトルー「それでは参りましょう… セーの！」

「ブンドル！ブンドル！！」

お約束の様な掛け声に合わせる二人。だが、緑の服を身に纏った三人目はそれに応じる事はなく、それを見守るばかりだった。

□

S a k u y a s i d e

オカマが帰ってから暫く経ち、そろそろ俺もお暇しようかと思つた
時にドアが開く。

茶髪と吊り目が特徴の男。服装は白いパーカーの上に青いアウ
ター。黒いズボンを履き、靴は赤いスニーカー。なんか、どつかで見
た事ある様な格好と色合いだな… 今でも最悪な目に合いそうな気
もしそう。

おまえ、サイアクなめにあわされたいか？

いや、呼んではいけないが遭いたくないです。

「… ちは」

「いらつしやい。あつ、たつくん！」

「母さん。俺、昼からオムライス食べに行つて来るわ」

「はあくい！了解です」

息子の意見を受け入れる母親らしき女性。どうやら外食自由な家風かふうなのだろう。

ゆい「オムライス？いいないな〜！」

???「相変わらず食い意地張つてんな。ゆいは」

ゆい「いーじゃん、別に！」

あきほ「ゆいと一緒に行つておいでよ」

???「えっ!？」

咲夜「遠慮なんてするな。どうやらその様子だと、昔からの知り合
いみたいな感じだったぞ？」

???「お前確か、男子バドミントンエースの…!」

咲夜「門津 咲夜だ」

???「あの時のか。俺は…」

ゆい「品田しなだ 拓海たくみ。中学二年生で、あたしの幼馴染おさななじみ！」

咲夜「幼馴染おさななじみか。通りで口調が砕けてると思った。それより、行かないのか？そのオムライス店とやらに。お前の大事な幼馴染おさななじみが『一緒に食いに行きたい』つて行つてるんだ。どんなに意地を張つても、何故か心の底では遠慮してそうだからな」

ゆい「そうだよ！一緒に行こうよ！」

???「いいわよ。たつくんもゆいちちゃんと一緒に行きたがつてたし」

拓海「えっ!？ちよ… 母さん！」

ゆい「わーい！やったやった〜！」

拓海「… しょーがねーな」

品田の母親と思わしき人物の許可を得て、喜ぶ和実の無邪気さに仕方なく頬ほおを染める品田。俺も同行することとなり、同時にトイカメラで写真を撮つてほしいと頼まれた。

□
場面は変わって、洋食ストリートのオムライス店。

「「いただきますー！」」

写真を撮り終え、食う前の挨拶あいさつを言つて俺達はスプーンで掬すくったオムライスの一欠片を口に運び、それぞれ感想を述べる。

ゆい「んんくっ！デリシャスマイル！！」

拓海「卵のふわふわ感すごー！」

咲夜「… やっぱ、この味でないとな。二人共撮るぞー、はいチーズ」

俺はトイカメラで写真を撮り終わると、食いながら店内を見つめる。なごみ亭と同じ様な観客の笑顔が満ち溢れる空気に漂い、オムライスのレシピツピが現れた。

咲夜「こいつは…！」

ゆい「レシピツピ！」

和実がレシピツピと戯たわむれる中、邪悪な気配を感じ取る。

其処には俺が探していた銀髪の少女が弁当箱の様な物の蓋ふたを開けると、物凄い吸引力でレシピツピを閉じ込め、そのまま店を去って行く姿が。

ゆい「待って！」

銀髪の少女を追った和実に続き、俺も後を追おうとするが、店内に異変が起き始める。

拓海「何だ、味が変わった…？」

咲夜「何？（ホントだ。味が変化している…！）」

俺はオムライスを口に運びながら噛み締めると、品田の発言通り、とてもオムライスとは思えない味へと変わっていたのだ。

それは俺達だけではなく、店中にいる全ての客のオムライスにも影響が及んでいた。

客A 「何だ!? この味…!」

客B 「何か、味変わってない?」

客C 「変な味…」

客D 「何!? このオムライス!」

客E 「急に味が変わった…!」

店員 「ええっ!? そんな…!」

俺はバツクから取り出したクレラップで味が変わったオムライスを包む。

ついでにペンで『後で食う!』と書き残しながら店内から飛び出し、和実と合流する。固くなった料理の飯を食うのは、俺の好みじゃないからな。

ゆい 「どういうこと…?」

咲夜 「恐らくレシピッピが捕とらわれたと同時に味が変化したんだろう。まあ、これは俺自身の推測だけだな」

ゆい 「ちよつと見て! マリちゃん? 如何どうして此処ここに…!?

和実が指差した方向を見る。其処そこにはオカマが黒い怪盗服を身に纏まとう銀髪の少女と対峙していた。

ローズマリー 「見つけたわよ。レシピボン泥棒!」

ゆい 「マリちゃん!」

咲夜 「オカマ!」

ローズマリー 「ゆい! 咲夜!」

ゆい 「その人、レシピッピを…!」

ローズマリー 「やっぱりレシピッピも集めていたのね… このコソ泥!」

??? 「コソ泥とは失礼な。我は怪盗ブンドル団のジェントルー。君の相手はこつちだ。出でよ、ウバウゾー!」

ジェントルーと名乗る少女に捕獲されたレシピッピが入っている

弁当箱の様な物を取り出すと赤く光り出し、放ったエネルギーが赤いバツ印の上に黄色でBと描かれたマークとなつて近くにあつたオムライス店のフライパンに宿す。

闇のオーラを纏いながら青い炎を吹き出したフライパンが巨大な怪物へと変貌した。

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ゆい「何あれー!？」

咲夜「ウバウゾー…あれがこの世界の怪物か」

ローズマリー「フライパンちゃんになんてことしてくれるの!？」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

驚きの声を上げる和実だが、俺は警戒の表情で呟く。こういう敵はこれまでの旅で何度も見てきたからな。

オカマは器具の扱いに憤慨していると、ウバウゾーの遠吠えによつて人々が逃げ惑う。

拓海「ゆい!ん?あいつ…!」

密かにオカマを見ていた品田がいる事を俺達はまだ知らなかった。

俺はデイクイドライバーを取り出そうとすると、オカマはいただきますの要領で手を合わせ、捻った手を天に向かって上げる。

ローズマリー「デリシヤスフィールド!!」

半径10m程度の虹色のオーロラがブンドル団達を包み込み、彼女達を捕らえる牢獄となる。

ゆい「マリちゃん?待って!」

咲夜「和実!乗れ!」

和実はおカマのいる空間へと手を伸ばす。俺は密かにオーロラカーテンから出現させた愛車『マシンデイクイダー』に和実を後ろに乗せると、虹色のオーロラが消滅する直前にスピード全開で走行していった――。

□
ローズマリー「この特別なフィールドからは、レシピツピを連れ出す事は出来ないわよ！さあ、大人しく返しなさい！」

ジェントルー「手荒に奪うのは私の主義に反するが…邪魔するのであれば仕方ない」

俺はマシンディケイダーでフィールドの結界を突き抜けながら走行すると、オカマの近くで停車させる。戦闘の最中だが、何とか侵入出来た。

咲夜「侵入完了つと…」

ローズマリー「ええーっ!? あんた達、どうやって此処に!?!」

咲夜「知るか、そんな事」

ローズマリー「はいい!?!」

ゆい「分かんないけど…でも！レシピツピを助けたいの!」

ローズマリー「えっ?」

コメコメ「コメ?」

レシピツピを助けるべく、無鉄砲に駆け出す和実。

ジェントルー「何だ?こいつら…」

ローズマリー「ゆい!」

無表情ながらも疑問を呟くジェントルー。ウバウゾーは和実を踏み潰そうとするが、地面を強く蹴った勢いで躲かわされる。

ローズマリー「うっそー!?!すごー!」

だが、伸縮した手が背後から衝撃を与える。オカマは両手をクロスさせると、光をロープを生み出し、ウバウゾーをうっ伏せに転倒させる。

俺も見てるだけじゃ尺が合わない故にドライバーを腰に巻く。銀

の縁取りに赤いレンズ。ライトグリーンに塗装された本体には新たな時代を刻む三つのライダーの歴史を物語らせる紋章ものがた。サイドハンドルにはシアンの縁取りが入っており、左右のハンドルにはマゼンタの宝玉が横に三つ並んでいる。

これが、俺が変身する仮面ライダーディケイドに変身する為のベルト『ゼロディケイドライバー』。

ローズマリー「ゆい！今の内に早く！逃げなさい！」

ゆい「マリちゃん、門津君……有難う！ありがと」

ローズマリー「だから逃げなさいって！」

ゆい「でも……レシピツピ泣いてた！」

オカマに逃げろと警告されても、和実^とは礼を言いながら突き進んで行く。背後にいたウバウゾーが襲い掛かろうとするが、オカマが無数のロープで捕縛する。

ディケイドライバーの左腰にカードケース型の武器『ライドブツカー』のグリップを四十五度曲げると銃の形となる。引き金を引くと銃身から光弾を吐き出し、ウバウゾーに銃撃を与える。

咲夜「和実。此処ここは俺達が何とかする」

ローズマリー「貴女はレシピツピを！」

ゆい「二人共、有難う！ありがと」

同時に小狐がバックから飛び出す。

ジェントルー「ウバウゾー」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

咲夜「オカマ！」

ローズマリー「マリちゃん!?うわあっ！」

コメコメ「コメ〜！」

ゆい「コメコメ！」

気合を入れたウバウゾーはロープを振り解き、その反動でオカマは倒れる。ウバウゾーに捕まった和実を助けるべく小狐は果敢に立ち向かうが、大きさの関係か、呼気によって吹き飛ばされる。

咲夜「大丈夫か？」

ローズマリー「ええ、大丈夫よ。けど、人質を取られたわね」

咲夜「気にする事はない。直ぐに助けるさ」

ジェントルー「君達に告ぐ。この子を傷付けたくなければ、フィールドを解きたまえ！」

咲夜「と言つても、唯一フィールドを解く事が出来るのはこいつだけだぞ。若し、こいつが『断る』と言ったら…?」

ジェントルー「この子の命はない」

ローズマリー「待って!分かったわ。言う通りに…」

俺に支えながらもオカマは立ち上がり、フィールドを解こうとしたが、人質となつた和実が叫ぶ。

ゆい「マリちゃん!レシピツピを…レシピツピを助けないと!」

ローズマリー「…でも貴女達を、やっぱり巻き添えには出来ない!」

コメコメ「コメ…」

コメコメはゆいに近寄る。

ゆい「大切な思い出なんだ。レシピツピは、お婆ちゃんとの大切な思い出。いつも笑つてほしい…だって、ご飯は笑顔だから!」

その時、小狐——コメコメが被っているフードに付いているハートの装飾そつしやくから発した光が、和実の左手首にハート型のウオッチを出現させる。

ローズマリー「なっ、何?」

ジェントルー「何だと!」

ローズマリー「あれはまさか、伝説の戦士『プリキュア』の!ゆい…!」

咲夜「如何どうやら此処も俺の世界じゃなさそうだが、この世界でやるべき事が大体分かってきた!」

俺はディケイドライバーのサイドハンドルを展開。ライドブツカーをガンモードの状態じょうたいで収納されているカードを取り出しながら装填すると、銃身から放たれた光弾でウバウゾーうばうぞーを牽制けんせい。

それに合わせ、オカマは突き出した拳から撃ち出した渾身のエネルギー弾を放つと、その反動で赤いペンダントに罅ひびが入る。

手放され落下しそうになつた和実がコメコメを握る様に触れると、

落下を防ぐピンクの楕円形だえんの結界に包み込まれる。

ローズマリー「ゆい！コメコメと一緒に『プリキュア』に変身よ！」

ゆい「変身？『プリキュア』？」

ローズマリー「うん」

ゆい「分かった！やってみる！」

如何やらこの世界はプリキュアの世界だったそうだ。意味不明な単語に違和感を覚える和実だが、頷くオカマを見る。その表情はまるで、迷いがないかの様のだった。オカマの気持ちに答えるべく、和実は変身を決意する。

□

コメコメ「コメー！」

ゆい「プリキュア！デリシャスタンバイ！パーティーゴー！にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

変身完了し、決め台詞を放つ。

コメコメ「コメコメ！」

???「熱々ご飯で漲るみなぎパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

□

プレシヤス「うわ…！」

ローズマリー「すご！ホントに変身した！」

プレシヤス「マリちゃんが言ったんだよ!？」

ローズマリー「イエイ！」

呆れかえるプレシヤス。

ジェントルー「『プリキュア』…?？」

ジェントルーが呟く。如何やら奴はプリキュアの事を知らない。それなら都合が良い。

咲夜「その様子だと、お前はプリキュアを存じていなかったようだな。だったら好都合だ。それじゃ、俺も暴れますか。最早、隠す必要もないしな!」

俺は前に出ながら、デイケイドライバーのサイドハンドルを開き、ライドブツカーからカードを取り出す。

咲夜「変身!」

【カメンライド デイケイド!】

ドライバーに差し込もうとする直前にサイドハンドルを開き、裏返したカードを差し込んでサイドハンドルを閉じる。無数の人影が渦巻く様に俺に重なり、灰色の鎧を形成。ドライバーの赤いレンズから飛び出た七枚のプレートが突き刺さると、走行の体色が灰色からマゼンタへと変色。発した黄色いシグナルと翠色すいしよくの二眼が変身完了を合図する。

プレシヤス「ええーっ!? 門津君も変身したー!」

デイケイド「まあ、色々あつてな」

ローズマリー「デイケイド…? 咲夜が、あのデイケイド!」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

プレシヤス「うわっ!? こっちに来たー!!」

デイケイド「両手を上に突き出せ。奴を受け止めるんだ」

プレシヤス「そんな事出来る訳…!」

デイケイド「いいから俺を信じろ。来るぞ!」

するとウバウゾーが飛び掛かり、俺達を圧死させようとする。けど、無意味だ。俺は再びライダーカードを取り出し、ドライバーに装着する――

プレシヤス「んんん… えっ?」

ジエントルー「何ッ!」

プレシヤス「はああっ!!」

ウバウゾー「ウバッ!」

――必要は無く、俺の警告通りに動いたプレシヤスは両手で受け止め、そのままウバウゾーを投げ飛ばした。

デイケイド「なっ? 言った通りだろ?」

プレシヤス「何？この力は…。」

ローズマリー「それが、プリキュアの力よ！」

プレシヤス「プリキュアの力？」

ローズマリー「イエイ！」

デイケイド「兎に角、今はウバウゾーを倒して、レシピツピを取り返すぞ！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

デイケイド「こちとら百年以上も旅してんだ。ベテランオールラウンダー舐めんなよ！」

【アタックライド ブラスト!】

デイケイド「デイケイドブラスト!」

ホント歳を取らない身体で良かったよ。ウバウゾーは伸縮した手を伸ばしながら攻撃してくる。プレシヤスは駆け出し、俺は分裂したライドブツカーの銃身から吐き出した光弾をウバウゾーに浴びせる。

プレシヤス「すごい！あたし飛んでる！」

デイケイド「プレシヤス、前だ！」

再び捕まり投げられるプレシヤス。まだ戦闘に馴れていないが、チュロスに似た形状の岩に直撃しそうになるも体制を立て直し、ウバウゾーに向かって蹴り上げる。

プレシヤス「行つくよー！」

【アタックライド スラッシュユ!】

プレシヤス「500キロカロリーパンチ!!」

デイケイド「デイケイドスラッシュユ!」

右腕に500の数字をエネルギーとして纏わせたパンチを繰り出すプレシヤス。俺は助走を付けながらライダーカードをライドブツカーから取り出し、ドライバーに装填。ライドブツカーのグリップを更に四十五度曲げ、刀身を露出させると、地面を強く蹴り上げ、数十もの刀身の残像を放ちながらの袈裟斬りけさざりをウバウゾーに放つ。ウバウゾーは大きく吹っ飛ぶ。

プレシヤス「ウオッチが…！」

ローズマリー「プレシヤス！決めて！」

コメコメ「コメ！」

プレシヤス「やってみるよ！」

デイケイド「俺も忘れちゃ困るぜ？一緒に決めるぞ！」

プレシヤス「うん！」

【ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ・デイケイド！】

俺はライドブツカーのグリップを四十五度下げて銃の形にし、黄色いカードを装填。銃身を向けると、十枚の黄色いカードのエネルギーが並び立つ。

プレシヤスはハート型のウオッチの液晶画面をタッチし、左手で大きく正三角形を描く。

プレシヤス「プリキュア！プレシヤストライアングル!!」

デイケイド「デイメンション…ブラスト!!」

ウバウゾー「お腹一杯！」

重なる二つの技がカードのエネルギーを突き抜け、邪悪なオーラをも破壊する浄化技を受けたウバウゾーはプレシヤスと共に手を合わせる。

「ご馳走様でした！」

デイケイド「Aliza Testa. もう冷めてるけどな。鮫だけに… same。」

するとウバウゾーは花火の様に爆散し、大きなハートの上にデイケイドの紋章が浮かび上がる。

レシピツピ「ピピく！ピピく！」

プレシヤス「レシピツピ！良かったあ〜！」

浄化された事によって弁当箱は砕け散り、捕とらわれていたレシピツピは自由を取り戻す。俺達の元へ寄って来ると、ハート型のウオッチが発した光に吸い込まれていった。

プレシヤス「ええっ！入っちゃった!？」

ローズマリー「あら…」

ジェントルー「プリキュア…デイケイド…」

ジェントルーは小さく俺達の名を呟きながら姿を消した。

デイケイド「…逃げたか」

プレシヤス「ああ、ハラペコだった〜！」

ローズマリー「有難う。コメコメ、キュアプレシヤス。これでオムライスの味も元に戻った筈よ」

プレシヤス「本当？良かったあ…。！でも、『プリキュア』って何？」
緊張感を解くプレシヤスに礼を言うオカマ。

ローズマリー「それはね…。」

デイケイド『伝説の戦士』。昔からそう呼ばれているらしい」

ローズマリー「ちよつと！何であんた、そんな事知ってんのよ!？」

デイケイド「俺も前に、別世界のプリキュアにも会った事があるからな。これくらい如何どうって事ない」

コメコメ「コメコメ〜！」

デイケイド「つてか、待てよ。オムライスの味が戻ったって事は…！」

事を悟った俺はマシンデイケイダーに跨る。

ローズマリー「ちよつと、何処どこ行く気よ!？」

デイケイド「やり残したい事を果たしに行く！」

そう言つて俺はオーロラカーテンを出現させ、マシンデイケイダーを走行させる。ある場所で今回の戦いの役目を果たすために。

□

俺はブンドル団の被害にあつたオムライス店に立ち寄ると、其処そこには俺がラップで包んでいたオムライスがまだ食卓に残っていた。も

う随分冷めてると思うが構わない。俺は包んであったラップを外し、オムライスの一欠片をスプーンで掬い、口に運ぶ。

咲夜「・・・良かった。ちゃんと元の味に戻ってる」

無事完食し終え、俺はオムライスの代金を払ってそのまま去って行った。だが、その側に一言だけ言わせてくれ。

咲夜「其処そこに隠れてるのが、店長でも、店員でもいいから俺の話を聞いてほしい。食事の時間には天使が降りてくる。そういう神聖しんせいな場所なんだと・・・食事は一期一会だ。諦めずに、毎回毎回を大事にしろ」

□

プレシヤス「今日はイチゴジュース。あたしと乾杯！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY

DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩き

咲夜「悪魔悪魔つてうるさいな！」

ローズマリー「貴方、何処かで会ったかしら？」

拓海「知らないけど・・・」

ローズマリー「ゆいのお母さん、素敵ね。お母さんと仲良くするのよ」

デイケイド「こいつはお前を信じている・・・」

プレシヤス「心配してくれて有難う。でもね、やっぱりあたし、見
てるだけなんて出来ないよ！」

デイケイド「新しい調理法だ。変身」

「カメンライド：：」

第二品：きようなら、ゆい：：！マリちゃんの決意／デイケイド数
十変化！擬^{なぞら}うカメンライド！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第二品：さようなら、ゆい：：！マリちゃんの決意／
デイケイド数十変化！擬（なぞら）うカメンライド！

□

Sakuya side

よう、読者の野郎共！俺は門津咲夜。百年以上も旅をしたベテラン
オールラウンダーだ。

前回の戦いにて俺はブンドル団の被害にあつたオムライス店に激
励の言葉を投げ掛けた後、なごみ亭に戻ってみると、和実がオムライ
スを食っていた。

本人によれば、最後まで味わう事が出来なかつたオムライスを持ち
帰つたとの事だ。

ゆい「あーん。もぐもぐ：：んん〜っ！デリシャスマイル〜！」

コメコメ「コメ〜！」

ゆい「：：でも、吃驚だな。レシピツピが盗まれると、味が変わつ
ちやうなんて：：」

そう。今回の戦いでブンドル団の被害にあつたオムライス店は料
理の評価を貶けなされたのと同じ。

だから俺は此処ここの店員達を励ます為に態々わざわざ戻ってきたのだ。

ローズマリー「レシピツピはお料理の妖精だもの。何かしらの悪影
響が出てても不思議じゃないわ。ブンドル団：：恐ろしい敵ね」

咲夜「その為に俺がいるんだ。何せ、この世界でやるべき事が見つ
かつたんだからな」

俺がそう言うのと、和実のハート型のウォッチを介して液晶画面が光
り出し、映像が写し出される。

その人物は白髪しろがになった赤い王冠とマントを着ただけのチビマリ
オと言ってもらつても構わない。

ゆい「何か出たー!？」

咲夜「恐らく、この世界とは違う異世界の国王陛下だろう。つてか、

如何^{どう}見ても年老いた配管工——ぶげっ!？」

ローズマリー「クツキング様!？」

クツキングと呼ばれるチビマリオ：…じゃなくて。国王陛下の周りを飛んでいるのは先程救出したオムライスのレシピツピ。

クツキング『クツククツク〜!』

クツキングは少し変わった高笑いをする。それはまるで、お手柄と言わんばかりに。

世界の破壊者 デイケイド。幾^{いく}つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメーゾP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

No side

場面は変わり、ブンドル団アジト。今回の騒動を起こした怪盗ジエントルーと、同じく怪盗で上司のセクレトルー。

彼女達が目になっているのは、ブンドル団の団長 ゴーダッツ。レシピボン^{くわだ}を奪った張本人で、今度はレシピツピを捕らえようと企^{くわだ}ててい

る。

ゴードッツ『ジエントルーの邪魔をしたのは、恐らく伝説の戦士』プリキユア』と、世界の破壊者『ディケイド』だ』

ジエントルー「伝説の戦士『プリキユア』と、世界の破壊者『ディケイド』…?」

全てを知っているかの様に語るゴードッツの言葉を復唱するジエントルー。

だが、後の『ディケイド』と言った存在を知っている事に対して、彼女に疑問を植え付ける。

セクレトルー「世界の破壊者』だか何だか知りませんが… 幾ら目障りな者が現れようとも、我々の仕事に変わりはありません」

伝説の戦士だろうと世界の破壊者だろうと、自身の目的を達成する事を最優先するセクレトルー。

彼女の表情に焦燥は無く、冷静な眼差しを主人に向ける。

ゴードッツ『無論だ。凡ゆる料理のレシピを捕え、レシピボンを満たし、全ての料理を我が物とするのだ。それと、ディケイドは世界を破壊し、状況に応じて様々な姿に変える能力を秘めている。我々に取っては天敵だ。呉々も警戒はしておけ』

「はっ！ 承知しました！」

セクレトルー「それでは、参りましょう… セーの！」

二人は気合を入れるべく、掛け声をする。

「ブンドル、ブンドル!!」

□ S a k u y a s i d e

オムライスを食い終わった和実に合わせて、クッキングと呼ばれる
チビマリ——国王陛下は状況を理解したのか強くうなず頷く。

クッキング『あの伝説の戦士『プリキュア』が、コメコメのおかげ
で生まれるとはなく。正まじに奇跡だ! なっ?』

クックイーン『はい』

問い掛けられた女王が、笑顔を絶やす事無くクッキングに返事を返
す。

ローズマリー「クッキング様はこうなる事をご存知だったのでは
?」

クッキング『んん? んん?』

はぐらかすクッキング。この野郎、じゃあ何の為にオカマがコメコ
メを手渡されたんだよ。

ローズマリー『「んん?」って何です? 『んん?』って!』

咲夜「俺が踏み潰してやろうか?」

ローズマリー「いや、それはやめて」

ゆい「うわあ...! 通信も出来て、中を通れば其方そっちの世界にも行け
て... この腕輪すごいね!」

コメコメ「コメ!」

ローズマリー「ホントよね〜!」

咲夜「お前ら... 感想を述べるのはいいが、少しは空気を読む事を
覚えろ」

クッキング『クッククック〜! 驚いたじやろう? その名も...』

『「ハートキュアウォッチ」じゃ!! なっ?』

クックイーン『はい。プリキュアを助けるアイテムと言われている
のですよ』

ゆい『「ハートキュアウォッチ」...?』

コメコメ「コメ...」

クッキング『レシピッピも、すっかり元気になったぞ〜!』
レシピッピ「ピピ〜!」

ゆい「よかったね。レシピッピ!」
レシピッピ「ピピ!」

コメコメ「コメコメ!」

ローズマリー「今回は救えましたが、既に幾つかのレシピッピが奪
われているようです」

ゆい「えっ!?!」

俺は頷くと、和実^{つなず}は驚きの声を上げる。こっからが本題だ。オカマ
は真剣な顔で和実を見つめる。

ローズマリー「南米料理の幾つかは味が変わってしまったから、
困ってお休みしてるお店も出て来てるみたい」

ゆい「あっ!あの時の…!」

先程の事を思い出す和実。

ゆい「酷い…元に戻すには如何したらいいの!?!」

ローズマリー「方法は一つ。ブンドル団から、レシピッピを取り戻
すのよ」

ゆい「レシピッピンを取り戻す…!」

目的を復唱する和実。すると、威風な服を来たオールバックの男
が映像に映っている俺達に歩み寄る。

咲夜「誰だ?」

ローズマリー「フェンネル隊長。私の師匠よ」

咲夜「師匠!?!」

フェンネル『いきなりだが、お尋ね申し上げます。君が世界の破壊者
『ディケイド』だな?』

咲夜「!」

俺は自分の存在を知っていた事に目を丸くする。

クッキング『ひええっ!デイ、『ディケイド』!?!あの様な子供が悪魔
『ディケイド』じゃと!?!』

咲夜「悪魔悪魔つてうるさいな!こちとら百歳過ぎてんだよ!!血圧
上げさせる気か!?!それとも今直ぐにでもテメエの世界ごと破壊して

やろうか!？」

クツキング『ひいっ…!』

フエンネル『気を確かに持て、デイケイド。私は君が世界を破壊する悪魔だとは思ってはいない』

咲夜「そ、そうか? 済まないな。勝手にキレちまって…。」

フエンネル『気にする事はない。此方側の勘違いだ』

憤慨する俺に冷静さを取り戻させるフエンネル。世界を救う『悪魔』ならまだしも、ただ『悪魔』と言っただけじゃ俺の怒りの引き金を引くのにも十分な言葉でもある。

フエンネル『ローズマリー。見たところデリシヤストーンが壊れているようだな』

「!」

あの赤いペンダントの事か。それじゃあ、あの時のエネルギー弾を放った反動で罅が入ったって事は…!

咲夜「ちよつと待て。それじゃあ、そのデリシヤストーンが破損に伴ったって事は、戦闘能力消失及びクツキングダムとやらの行き来が出来なくなつたという事か?」

フエンネル『うむ』

咲夜「けどまあ、俺のオーロラカーテンを使えば行く事は可能だけど、そもそも行った事がないから先ず無理だな」

ゆい『「オーロラカーテン」…?』

ローズマリー「オーロラカーテンって、さっき出した『銀色の幕』みたいなものの事よね?」

二人の疑問に俺は頷く。

咲夜「オーロラカーテンってのは、俺がデイケイドになった時から、自分の場所と別の場所や異世界と繋げて遠距離を瞬時に移動出来る能力だ。出現させた後に任意の方向で移動する事も出来るし、静止した物体や人物を強制的に巻き込む事も出来る。つまり、可能であればデリシヤストーンを介さずとも、クツキングダムへ行く事が出来るって事だ」

フエンネル『何と…!』

ローズマリー「ちよつと待つて！そんなカーテンに便利な能力があるなら、如何どうして早く言つてくれなかつたのよ!？」

咲夜「そうも言いたいところだが、俺自身が一度行つた事のある場所でない、その場所に移動することは不可能だ。勿論、写真でも室内でもダメだ。このカメラの様に、料理店などの外見をちゃんと覚えておかないとな」

ローズマリー「…」

オカマが言う様に此こ処はオーロラカーテンを使用したいところだ。だがウバウゾーとの戦闘後で一度は使用しているが、彼の故郷でもあるクツキングダムには行つた事がない。

正直言つて俺のオーロラカーテンは、次の世界に来る時に旅した世界と関連かんれんする世界がランダムに選ばれるギミックとなっている。和実達の世界に来たのも偶然と言つても過言じゃない。

俺が介した世界の役目が終わるまでは、その世界で行つたことのある場所に移動出来るといったものだ。

ゆい「… あたし達に任せて！プリキュアとして、マリちゃんの分も頑張る。皆のお料理、守りたいもん！」

咲夜「俺も和実の意見に賛成だ。たつた一人の戦士が戦つてて、黙つて見ている俺じゃない」

ローズマリー「二人共…」

オカマを庇う様に使命を全まうする事を宣誓せんせいする和実。勿論、俺も同じ気持ちだ。誰かを守る為ならば、心を鬼ににしても構わない。

フェンネル「有難ありがとう。我々も、出来る限りの事をする」

クツキング「ゆい殿。これから宜よろしく頼むの」

ゆい「はいはい」

クツクイーン「デイケイドもお気を付けて…」

咲夜「ああ」

ゆい「はい。ドーン！と任せて下さい。ドーン！」

クツキング「おうそうじゃった！」

咲夜「つて、まだあんのかよ!？」

クツキング「これもきつと、役に立つぞ〜！ではの！」

そう言つて映像は切断されると同時にハートキュアウオッチに魔法陣が出現し、ある物が飛び出す。

ゆい「えっ?」

ローズマリー「これって師匠が使つてた…。」

咲夜「ガマ口…?」

オカマがガマ口の中を見てみると、其処には何故か大量の五百円だけが支給されていた。いや、人間界に来る側に支給すべきだったろ。

ローズマリー「こつちのお金だわ!!」

フェンネルつていう奴は許そう。だが、ジジイ。今度クツキングダムに来るようになったらテメエを最悪な目に遭わせてやる。

ゆい「止まるとどこ必要だよね?それだったら… ああーっ!」

ローズマリー「如何したの!?!」

ゆい「忘れてた…!」

咲夜「『忘れてた』つてのは、お前の彼氏か?」

ゆい「彼氏じゃないよ!幼馴染み!」

???「それは俺の事か?」

其処に息を切らしてやって来たのは、和実の幼馴染みである品田 拓海。息を切らす程探し回つてたんだな。

ゆい「うわあっ!?!拓海!?!」

拓海「二人共いきなりいなくなるなよ!変な怪物出たり心配したんだぞ!?!」

咲夜「これには、深い訳があつてな…。」

拓海「何だよ『深い訳』つて…ん?あんた…!」

品田はオカマの方を凝視する。何処かで見た事があるって顔だな。

ゆい「拓海、此方マリちゃんと門津君。二人を拓海ん家のゲストハウス『福あん』に泊めてくれない?」

ローズマリー「おしいーなタウンに舞い降りた、一輪の薔薇!美の伝道師!ローズマリーよ」

オカマの自己紹介に和実とコメコメは小さく拍手をする。いや、さっきの台詞世代間違えてないか?

ローズマリー「あら？貴方、何処かで会ったかしら？」
拓海「えっ？知らないけど…」

「？」

面識がある様な発言をするオカマに品田を外方を向く。けどこれで伏線は貼られたのは、また別の話。

□

No side

拓海の実家であるゲストハウス『福あん』。その高さは旅館とは一味違う様だ。

因みに咲夜の部屋はローズマリーの部屋の右側となっている。

ローズマリー「素敵〜！」

自分の部屋に感動しながら鏡を見るローズマリー。彼の喜びが悲しみへと逆転する。

ローズマリー「まさか、こんな呆気なく壊れるなんて…」

あの時の代償で罅割れたデリシャストーン。衝撃な事実を押し付けられたローズマリーはただ鏡の前に立ち竦む事しか出来なかった。

□

翌朝、なごみ亭の経営者であるあきほがアイロン掛けをしていると、実の娘であるゆいが相談を持ちかけるべく襖を開ける。

ゆい「お母さん。お友達が二人福あんに泊まる事になるけど、その子のペット預かってもいい？」

あきほ「どんなペット？」

笑みを浮かべながらペットと呼ばれる存在を見せる。

ゆい「にひひ…じゃーん！コメコメっていうの！」

コメコメ「コメ！」

あきほ「猫？犬？」

コメコメ「コーメー！コメコメコメー！」

自身が狐だという事実をあきほに叫ぶコメコメの様子をローズマリ―と咲夜は静かに眺めていた。

あきほ「うん。いいよ」

ゆい「有難う！」

承諾を得て、喜ぶゆい。

あきほ「ゆいなら、きっと大丈夫だろうしね」

ゆい「ちゃんとお世話するから任せて。良かったねコメコメ」

コメコメ「コメ〜！」

あきほ「変わった鳴き声だね」

ゆいはコメコメを見ながら幼少期を振り返る。傘を指していた帰り道、雨に耐える白猫を見る。当然このままとは行かず、結果として家で飼育する事にした。

祖母「ゆいは強い子だね」

ゆい「強い？」

祖母「そう。子猫がこんなに元気になって、ゆいのお陰だよ」

ゆい「ゆい強いのか？如何して？」

そのコメコメがあの時猫の面影を感じさせる。

あきほ「コメコメ用に足りない物、今度一緒に買いに行こうか」

ゆい「うん！有難うお母さん！」

眺めていたローズマリ―の罅割れたデリシヤストーンに日の光が当たり、赤紫の淡い光が小さく照らす。

ゆい「マリちゃん、門津君、おはよう！」

ローズマリ―「！」

咲夜「よつ。お早うさん」

ゆい「コメコメ、家で預かっていいって！」

ローズマリ―「あ、有難う御座います！」

咲夜「良かったな、オカマ」

ローズマリ―「ええ」

緊張ながら棒読みで礼を言うローズマリ―。

あきほ「貴方達、昨日の…」

ローズマリ―「ええ、ローズマリ―です。昨日はお世話になりました」

たー」

咲夜「同じくお世話になった、門津 咲夜です。昨日はお世話になって頂き、有難う御座いました」

あきほ「どういたしまして。友達ってこの人達の事だったんだ」

ゆい「うん、そう!」

□

S a k u y a s i d e

暫くして、俺とオカマが家に来る事となり、丸盆には三人分のお茶と胡瓜のスティックが置かれていた。

ゆい「お母さんに、プリキュアの事は秘密なんだよね?」

ローズマリー「ええ。クツキングダムの方は、此方の世界では秘密なの。御免なさいね」

ゆい「ううん。ブンドル団は次いつ来るかな?」

咲夜「それは俺達にも分からない。けど、いつ来ても大丈夫な様に万全にしておかないとな」

ゆい「門津君、心配し過ぎ!大丈夫。あたしがマリちゃんの代わりにパパッと解決しちゃうから!」

咲夜「それを言うなら俺達だろ?」

ゆい「あ。そうだった」

ローズマリー「……ッ!」

ゆい「平気平気!昨日だってちゃんと出来たし、これからだって…任せてよ。ドーンだよ!ドーンだよ!ドーン!」

ローズマリー「戦いはそんな甘いものじゃないわ!!」

オカマは歯軋りをし、自信過剰をする和実に自分の真意を吐露しながら和実に一喝する。如何やら人質にされた事を思い出したのだろう。その声量は、これ以上誰かを巻き込ませるのを阻むかの様だった。

ゆい「マリちゃん…!?」

ローズマリー「はっ!御免なさい… コメコメ、ちよつと借りるわ」

ゆい「えっ? うん…」

我に返ったオカマはコメコメを抱えながら去って行く際に、俺達を見ながら言う。

ローズマリー「ゆいのお母さん素敵ね。お母さんと仲良くするのよ」

ゆい「えっ? どうしたの急に… 勿論だよ」

今生こんじょうの別れかのような言葉を残して。

□

No side

場面は変わり、和食ストリートにある『とりからや』という定食屋に訪れている拓海は、店員から唐揚げが入っている袋を受け取る。

そんな中、とりからやの店内にて栗毛の少女が定食の写真を撮り、ネットにアップする前に唐揚げの味を堪能たんのうする。

???「後で写真上げとこ〜つと。あーん… んん〜つ、カリジユワ〜。美味しい〜!」

そんな中、店内にて一人の少女が密かに現れる。オムライス店に被害を起こしたバンドル団のジェントルーだ。

ジェントルー「ブンブン、ドルドル。バンドルー!」
レシピツピ「ピピピ〜! ピピピ〜!」

ジェントルーは怪しげな呪文を唱え、開封された弁当箱が唐揚げのレシピツピが吸い込み、逃げられない様に蓋ふたを閉める。レシピツピが閉じ込められた事で、定食の唐揚げの味が急激に変化する。

???「あむっ… うえっ!?! いきなり味が変わった…!?!」

客A「味が変わった!?!」

客B「何だ?」

客C「あら?」

店長「えっ!?!」

とりからやの店員は状況を確認しに行った。

拓海「今度は唐揚げ…？」

□

No side

ゆいは洗濯物を干していると、左手首のハートキュアウオッチがアラーム音が鳴り響く。

ゆい「うわっ！今度は何!？」

ウオッチの画面に触れると、唐揚げのレシピピピの姿と場所を指し示すリーダー画面写し出された。

ゆい「これって…！マリちゃん！」

咲夜「和実！和実いるか!？」

ゆい「門津君!?!如何どうしたの急に…!？」

咲夜「大変だ、オカマがチエツクアウトした。経営者のあんさんがこれを和実に渡してほしいって」

ブンドル団出現を悟り、『福あん』へと向かおうとしたゆいの元へ駆け付ける咲夜。

だが、咲夜が拓海の母 あんから聞いた話によれば、既にチエツクアウトしたとの事。その際に置き手紙をゆいに渡してほしいと頼まれているのだ。

ゆい「えっ…？」

手渡された手紙は、二人への別れの内容だった。

□

No side

ローズマリー「レシピピピを返しなさい！」

使命を果たし、アジトに帰還しようとするジェントルーを阻むローズマリ。

ジェントルー「来たか。出でよ、ウバウゾー！」

ウバウゾー「ウバウゾー！ウババババババ…！」

拓海「また怪物…！」

悲鳴を上げ、逃げ惑う人々。今度のウバウゾーはペッパーミル型。

ローズマリ「ペッパーミルちゃんに何て事を！デリシヤスフィールド！」

ローズマリはデリシヤスフィールドを形成する。

ジェントルー「プリキュアとディケイドは如何した？」

ローズマリ「私、一人で十分よ！」

コメコメ「コメコメ…！」

ジェントルー「いいだろう、相手をしてやる」

ウバウゾー「ウバウゾー！ウツバー!!」

ウバウゾーは腹部から爆薬付きの胡椒ガトリグ砲こしょうの要領でローズマリに向けて放つ。

□

前略 ゆい、咲夜。

何も言わずに出て行って御免ごめんなさい。

でもやつぱり、貴女達を戦いに巻き込ませる訳には行かないの。

さようなら。お元気で！

ゆい「マリちゃん…！」

咲夜（クソつたれ、何でだよ…！）

ひたすら駆け出すゆいと咲夜。コスメショップから出てきたボブへアアの少女と打つかりそうになった。

ゆい「おっととと…御免なさい！」

???「あの二人…」

直ぐに謝罪し、そのまま駆け出して行った。

□

ローズマリー「はあっ！」

ウバウゾー「ウツバー!!」

拳が重なる両者。だが、デリシヤストーンが罅割れた代償には抗えず、ローズマリーは力負けして岩に直撃する。

咲夜「オカマ!しっかりしろ！」

コメコメ「コメ！」

ローズマリー「大丈夫よ。これまでの戦う力が無くても私は……！」

咲夜「オカマ！」

ゆい「マリちゃん！」

コメコメ「コメ!コ…!」

コメコメは駆け付けたゆいのところへと向かおうとするが、二人の戦いを拒むローズマリーに掴まれる。

ローズマリー「二人共!如何して此処が分かったの!？」

ゆい「ハートキュアオツチが教えてくれたの!」

ローズマリー「そんな事まで出来るの!？」

ゆい「コメコメ。変身しよう！」

コメコメ「コメ！」

ギャグ漫画の如く目を飛び出すローズマリー。コメコメはゆいと接触を果たすと、プリキュアへと変身する。

□

コメコメ「コメ！」

ゆい「プリキュア!デリシヤスタンバイ!パーティーゴー!にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

□
コメコメ「コメコメ！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

□
S a k u y a s i d e

プレシヤス「門津君はマリちゃんを安全なところへ！」

咲夜「分かった。オカマ、行くぞ！」

ローズマリー「待ちなさい、プレシヤス！」

ジェントルー「プリキュアにディケイドとは…飛んで火にいる夏の虫だな」

ウバウゾー「ウバウゾー！」

ウバウゾーは爆発性の胡椒弾を飛ばしてくる。プレシヤスは軽やかな動きで躲しながら突き進む。

同時に飛び上がると、ウバウゾーが体を後ろに反らし、真上にて弾幕を放つ。

ローズマリー「危ないっ！」

プレシヤス「はあああああああッ!!」

野球の投手の要領で右腕をブンブンと振り回し、飛ばした胡椒に拳を振るう。

プレシヤス「いたたたたたたー!!」

コメコメ「フーフー」

プレシヤスの赤く腫れ上がった手をコメコメはフーフーと呼起を吹き掛ける。

ローズマリー「何やってんの!?爆弾にパンチありえない！」

プレシヤス「レシピツピを返して！」

ウバウゾー「ウバウゾー！」

プレシヤス「うわあつ!?」

その後見事に着地し、レシピツピを取り返すべく再び走り出す。転んでも走り続ける事をやめない。まさに猪突ちよとつ猛進。

ローズマリー「ただ敵に突っ込んで良い訳じゃない！」

オカマの制止に構わず、プレシヤスは弾幕を避けながら突っ込む。

ローズマリー「もうやめなさい！貴女達には無理よ！」

咲夜「今更弱音を吐いてる暇があるならお前も戦え！レシピツピを助けるのが先決じゃないのか!？」

プレシヤス「そうだよ！レシピツピを助けなきゃ！」

ジエントルー「ワンパターンだな」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

弾幕が命中し、大きく吹っ飛ばされるプレシヤス。

プレシヤス「うわあああああああッ!？」

「プレシヤス!」

プレシヤス「いてて…」

コメコメ「コメコメ!」

咲夜「大丈夫か？プレシヤス」

プレシヤス「平気平気!」

心配そうに声を掛ける俺とコメコメにプレシヤスは気力を失う事はなかった。

ローズマリー「もうやめて!」

先へ行かせない様に仁王立ちするオカマ。その言葉が俺を怒らせるのにも十分な言葉だった。

プレシヤス「マリちゃん…?」

咲夜「オカマお前な…！自分の命を投げ出す気か!？」

ローズマリー「やめてよ…!」

咲夜「は?」

ローズマリー「私の力が足りないばかりに、貴女達が危ない目に遭うなんて!そんなの見てらんないのよ!」

咲夜「馬鹿野郎ツ!!」

ローズマリー「うぐつ!？」

コメコメ「コメツ!？」

我慢の限界を達した俺はオカマを一喝しながら思いつきりぶん殴り、胸ぐらを掴みながら叫ぶ。こうなつてしまった以上、思つてる事全部吐いてやる。例え俺の声が枯れようとも。

咲夜「お前は感じなかったのか!?和実が… ゆいがどれだけ料理を愛しているのかを!!」

ローズマリー「えっ…?」

咲夜「例え勝ち目が無くとも、それでも戦わなければならない時がある。お前もそうやって、一人で戦つてきたんだろ?大切な物を取り戻す為に…」

ローズマリー「それが貴方達にとっては危ないって言つてるのよ!!」

咲夜「じゃあ俺達はここで黙つて指を啜くわえて見てろつていうのか!?! だったら一つ聞いてやる!本当は求めていたんじゃないのか?一緒にレシシピツピを救つて、レシピボンを取り返してくれる存在を!」

ローズマリー「!」

咲夜「確かに一人では無理かもしれないが、だからこそ、一緒に助け合う相手が必要だ。料理だつてそうさ。一人じゃ相談する相手もいなくて失敗しやすいが、逆に二人以上なら相談に乗り易やすいし、料理が楽になる。人はそれを…『仲間』、と言うらしいぜ。そうだろ?ゆい」

俺の格言に頷うなずくプレシヤスも後に続いて言う。

プレシヤス「マリちゃん、心配してくれて有難ありがとう。でもね… やつぱりあたし、門津君の言う通り、見てるだけなんて出来ない。.. ご飯は笑顔。守りたいから!」

ローズマリー「プレシヤス…」

咲夜「それと、死ぬ事は恩返しじゃないぞ。俺達はそんなつもりで助けた訳じゃない… 助けてもらつて死ぬのは弱者のする事だし、食い物を粗末にするのと同じだ。それとお前は、自分がブンドル団と

同じだと言いたいのか？」

ローズマリー「私は… 私…！」

プレシヤス「… お婆ちゃん言つてた。『この世で一番強いのは、誰かの為に頑張る心』だつて」

プレシヤス「この世で一番強いのは、誰かの為に頑張る心…！」

プレシヤスの言葉を復唱ふくしょうするオカマ。正直、俺が言うのはこれで最後にしておきたい。

プレシヤス「その言葉を私は信じている！だから絶対出来るつて信じてる！マリちゃん。あたしも、諦めないよ！」

咲夜「こいつはお前を信じている。何せ、こいつが信じたそのパターン… 嘗て人々の笑顔の為だけに、世界を救った戦士と同じ考えでもあるからな。もう自分一人で背負う必要もないだろう」

ローズマリー「貴方は、一体…？」

問い掛けにふつと笑う。その答えはもう、とつくの昔から決まっている。

咲夜「通りすがりの仮面ライダーだ。過去も、未来も、そして今も、その事には変わりはない。それと、覚えなくていい。今はな」

ローズマリー「そうね、今は覚えておかないでokわ。プレシヤスと咲夜ならきつと…！御免ごめんなさいね。こんな私が我儘わがまま言つてしまつて」

咲夜「如何どうつて事は無い。単なる気紛れだ」

ローズマリー「そして私も！人々の美味しい笑顔の為に戦わなくつちやね！」

咲夜「覚悟は決まつたようだな。行くぞ、プレシヤス！ローズマリー！」

「うん（ええ）！」

この時、初めてオカマの名前を呼んだ。俺はデイケイドライダーを腰に巻く。

サイドハンドルを開き、ライドブツカーからライダーカードを印籠いんろうの様に構える。

ジェントルー「ファイナーレだ！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

咲夜「変身ツ!!」

カードを裏返し、ドライバーに装填しハンドルを閉じる直後に、ウバウゾーは弾丸を放ち、俺達を襲う……事はなかった。

【カメンライド デイケイド!】

三十八もの残像が出現し、赤いライドプレートが弾丸を掻き消し、崩れ落ちた瓦礫をも防ぐ。

???「ジェントルー。俺が世界を破壊する悪魔だと思っているが、それは飛んだ誤解だ。俺は……全てを束ね、全てを創る!」

ウバウゾー「ウバツ!」

砂塵を斬り払い、光弾をウバウゾーに放つ。

デイケイド「仮面ライダー! デイケイド! 旅の語らい、始めようか!」
決め台詞を言い放った俺は破壊者へと姿を変えた。この台詞、前から考えてたんだよな。練つといてよかった。

ローズマリー「敵は中距離攻撃タイプ……それを抑えて、相手の懐に入るのよ!」

デイケイド「だったら俺がウバウゾーの腹部を塞ぐ。その際にお前は左右に分かれる」

プレシヤス「そんな事出来るの!」

デイケイド「出来るさ。何せ俺は、悪魔は飽く迄、破壊者だからな。俺に考えがある」

暫く経ち作戦通りにプレシヤスとローズマリーは二手に分かれ、ウバウゾーの周りを囲む。その隙に俺が中心へと牛歩する。

ウバウゾー「ウツ! ウバツ!?! ウババ!?!」

デイケイド「どうしたウバウゾーさんよ。お前の相手は俺達だけ、ちゃんと狙えよ?」

【アタックライド インビジブル!】

ジェントルー「消えた……!?!」

左右を見渡し、更には姿を消した敵に混乱するウバウゾー。自棄になつたのか、回りながらの弾幕を放つ。

ジェントルー「上だ!」

ジェントルーの指示で上を見るウバウゾー。隕石の様な落下物を撃ち落とすと、今度は火炎弾が龍の遠吠えと共に降って来た。

降って来た数発が地面に着弾すると爆発し、ウバウゾーを牽制させる。

ローズマリー「掛かったわね！」

ウバウゾー「ウバツ!!」

ジェントルー「何?後ろツ...!?!」

「アタックライド メタル！」

『METAL』

デイケイド「トリバロイドインパクト！」

プレシヤス「500キロカロリパーンチ!!」

上空からの圧撃で仰向けになったウバウゾー。これで隙が出来た。

ローズマリー「今よ、デイケイド！」

デイケイド「ああ！」

「フォームライド ビルド クマテレビ！」

『蜂蜜ハイビジョン!クマテレビ!イエアア...!』

デイケイド「ハニベアトラップ！」

ウバウゾー「ウバツ!!ウバババババババ...!」

ジェントルー「姿が変わった...!?!」

黄と黒の実体が俺を挟み込むと蒸気を吹き出し、新たな姿となったと同時に右腕から投擲した蜂蜜で一時的だが腹部を封じた。

???'「変わったのは姿だけじゃないぞ！」

ジェントルー「何?...!」

俺の側に駆け寄ったのは、ドライバーは同じだが、姿が違う二体のライダー。

赤いアンダースーツと台形を逆にした鉄仮面の頭部に龍の紋章を刻む軽装甲のライダー。左手には龍の顔を模したガントレットが握られている。その周りを囲んでいるのは6m程の全長を持ち、尻尾は青竜刀となっている赤い西洋の龍。

もう一体は青紫のアンダースーツにヘラクレスオオカブトの後頭部を模した赤い複眼のライダー。銀の胸部装甲には赤いスペードが

縁取られていた。

そして俺が変身しているのは、テレビと左腕を振るおうとする熊の横顔を模した複眼を持つ黒と黄色のライダー。黄色いボディの右腕には熊の様に鋭い爪を持ち合わせ、左側の黒いボディの箇所には複数のテレビが並んでいる。

これが俺の能力。否、仮面ライダーディケイドの能力の一つ『カメンライド』。

状況に合わせてライダーが描かれたカードを装填する事で、様々なライダーや派生形態になれる超お得意な能力。更に『アタックライド』イリユージョン』のコンボで実体化した分身もカメンライドが可能。

今俺が分裂して変身したライダーは『仮面ライダー龍騎』、『仮面ライダー剣』、そして『仮面ライダービルド』クマテレビフォーム』。最後の方は兎と戦車が初期フォームだから。勘違いはしない様に。こんな事もあるうかと、作戦は既に練っておいた。

□

【アタックライド イリユージョン！】

俺を含め、分身の二体が実体化する。

プレシヤス「わあっ！増えた!？」

ディケイドC「驚くのはまだ早い」

ディケイドB「俺達には更なる能力がある」

プレシヤス「更なる...？」

ディケイドA「新しい調理法だ」

ローズマリー「新しい調理法ですって？それは何よ？」

ディケイドA「まあ、見とけ」

そう言うと分身の二体が二枚のカードを取り出し、ドライバーに装填する。

【カメンライド...】

【変身！】

【龍騎！】

【剣！】

『TURN UP』

ローズマリー「嘘でしょ!？」

プレシヤス「姿が…変わった!？」

残像が重なり、赤いレンズから投影したカードのエネルギーを潜り抜け、その姿を変えると、二人は驚きの声を上げた。

□

という訳で今に至る感じだが、まさかこんなに上手くいくとは思わなかった。俺はビルドのライダーカードをドライバに装填する。

「カメンライド ビルド!」

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

黒と黄から青い戦車と赤い兎の横顔を模した複眼のライダー姿へと変える。これぞビルドの基本形態『ラビットタンクフォーム』だ。基本形態が揃った事で俺達三人は仮面ライダーの紋章『ライダーズクレスト』が描かれた黄色いライダーカードを装填する。

【「ファイナルアタックライド…:」】

「リュ、リュ、リュ、龍騎!」

「ブ、ブ、ブ、ブレイズ剣!」

「ビ、ビ、ビ、ビルド!」

デイクライドC「ドラゴンライダーキック!」

デイクライドB「ライトニングソニック!」

デイクライドA「ボルテックファイニッシュ!」

『FINAL VENT』

デイクライドC「はっ!はああああ… てやっ!はあああああああ… うおりやあああああああッ!!」

ウバウゾー「ウバツ!」

デイクライド龍騎は契約モンスター 無双龍むそうりゅうドラグレッダーと共に真上に跳躍すると、空中で捻ひねってムーンサルト。そのまま飛び蹴りの姿勢に移行し、背後にいたドラグレッダーの火炎を背に纏まといながら、威力と速度を上昇させた飛び蹴りを見舞わせる。

『KICK THUNDER MACH LIGHTNING SO
NIC』

デイケイドB「はああ… ウエイ！たあつ！ウエイ！！」

ウバウゾー「ウバババツ!!」

続けてデイケイドブレイドに飛蝗バツタ、篋鹿ヘラジカ、射虎ジャガーが描かれたカードのエネルギーが吸い込まれると、強化された跳躍力ちようやくで助走を付けながら稲妻いなづまを纏まとった飛び蹴りをかます。

デイケイドC「最後は俺！」

『ボルテックファイニーツシュー！イエーイ！』

デイケイドC「たあああアツ!!」

最後に白いグラフが立ち上がったウバウゾーを拘束させ、本体の俺が右脚のキヤタピラで固定したグラフ上を滑り、ウバウゾーをキヤタピラの反動で大きく蹴り飛ばす。

ウバウゾー「ウバウゾー!!!」

プレシヤス「すごい…!!」

ローズマリー「これが、デイケイドの力…!!」

『カメンライド デイケイド!』

龍騎とブレイドに変身していた分身は役目を終え消滅する。俺はライダーカードを装填し、デイケイドに戻る。

コメコメ「コメ！」

『トドメを刺せ!』と言わんばかりにコメコメは鳴く。

デイケイド「決めるぞ、プレシヤス！」

『ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイケイド!』

プレシヤス「うん！」

デイケイド「デイメンションブラスト!!」

プレシヤス「プリキュア!プレシヤス・トライアングル!!」

重なる破壊のエネルギー波がカードのエネルギーを突き抜け、ウバウゾーに直撃する。

ウバウゾー「お腹一杯！」

デイケイド「此処ここで一言。胡椒こししょうだけに。中身が故障した交渉案」

『御馳走ごちそう様でした!』

デイケイド「お粗末様です！」

レシピツピ「ピツピピ〜！」

プレシヤス「おかえり」

ウバウゾーは消滅し、唐揚げのレシピツピは開放されると、ハートキュアウオツチに吸い込まれた。えっ、何だつて？ オーバーキル？ 破壊者にやオーバーキルもクソもねーよ。

ジェントルー「キュアプレシヤス… デイケイド…」

俺達の名を言いながら姿を消したジェントルー。これで唐揚げの味も元に戻っただろう。

□

ローズマリーがゆいにグラスを贈呈する。勿論、俺の分のグラスもあった。因みに後で俺達三人は名前で呼ぶ事にした。

ゆい「まあ素敵！」

咲夜「これは…」

ローズマリー「あら、おかえり咲夜。これは友情の証、クツキングダムのグラスよ」

ゆい「有難う。マリちゃん」

ゆいは二つの内、一つのグラスを貰う。だが、俺は何故か貰いたくはない気持ちで一杯だった。何故なら、ローズマリーを叱咤する為に思いつきりぶん殴ったからだ。俺はその事をローズマリーに謝罪するべく、頭を下げる。謝らないままじゃ後悔するのは嫌だからな。

咲夜「ローズマリー。さっきは殴つて… 済まなかった！」

ローズマリー「咲夜。頭を上げて。もういいのよ、そんな事気にしないで。私は貴方達に励まされてなかったら、今頃立ち直る事も出来なかったわ。有難う。私の目を覚まさせてくれて…」

咲夜「そうか。それじゃあ遠慮無く貰つていこう」

不安が一気に晴れ、改めて俺はクツキングダムのグラスを受け取った。

ゆい「マリちゃんと咲夜君を歓迎して…」

「乾杯！」

「いただきま〜すー！」

咲夜「いただきマスタードラえモンゴル」

ゆい「何その挨拶」

咲夜「冗談だよ冗談」

コメコメ「コ〜メ！」

その後はあきほさんを含めた四人で歓迎を祝う。

ローズマリー「あーん。んん〜！美味しさ激盛り〜！」

ゆい「良かった。マリちゃんが笑顔になって。やっぱり、ご飯は笑顔だもん」

ローズマリー「ゆい…」

ローズマリーは箸はしを置き、手を差し出す。

ローズマリー「これから宜しくね、ゆい」

ゆい「うん！」

ローズマリー「咲夜も」

咲夜「ああ」

コメコメ「コメ！」

互いに拍手を交わす二人。その手には俺とコメコメも含まれていて。

ゆい「コメコメも宜しくね」

コメコメ「コメ〜！」

あきほ「何の話？楽しそうね」

咲夜「こつちの話です」

ローズマリー「私の美容の秘訣ひけつですわ〜！」

あきほ「えっ!?!知りたい！」

咲夜「マジで!?!」

ローズマリー「本当ですか〜!?!先ずは、夜のお風呂上がりが大事でして…」

意見が一致したのか、あきほさんとローズマリーは力説りきせつしている間に俺達は唐揚げを口に含ませる。

咲夜「… 美味しい」

ゆい「んん〜！デリシャスマイル〜」

レシピツピ「ピピ〜！」

味を噛み締めていると、ハートキュアウオッチから唐揚げのレシピツピが飛び出してきた。

咲夜「おいちよつと待て。何だか、前よりはつきり見えてないか？ん？どうしたコメコメ」

ゆい「そつか。ウオツチのお陰なんだね。えっ？うわあっ!」

コメコメ『コメ!』

コメコメがハートキュアウオツチの影響だと液晶画面に触れていると、コメコメがウオツチに吸い込まれる。すると画面には可愛らしい部屋にいるコメコメが映っていた。

咲夜「これって部屋…なのか？」

ゆい「すっごーい!これから楽しくなりそう!」

コメコメ『コメ!』

こうして一つの山を超えた俺達。だが、この時の俺はまだ知らずにいた。コメコメと同じエナジー妖精は後二体いた事。そして、その一体が目覚めたという事に――。

□

??? 「パム…?」

□
デイケイド「今日はピーチジュース… って待て！俺はピンクじゃなくてマゼンタ… まあ、どっちでもいいか。俺と乾杯だ！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY DAYS♪』

□
次回、デリシヤスパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩きく
パムパム「これからは何でもパムパムに聞いてパム！」

咲夜「コメコメ、一緒にお使い行かないか？」

ゆい「カレーのレシピツピが捕まっちゃった！」

咲夜「化け出て呪ってやる!!」

第三品：コメコメのおつかい！迷子で大騒動!!／咲夜の手助け！コメコメおつかい大作戦!!

全てを破壊し、全てを繋げ！

第三品：コメコメのおつかい！迷子で大騒動！！／咲夜の
手助け！コメコメおつかい大作戦！！

□

Sakuya side

ゆい「…」

コメコメ「コメ」

ゆい「ありやく、人参食べ切ってた…」

コメコメ「コメコメ？」

咲夜「おい、何かあったのか？」

ゆいが人参を料理で食い切ったのか、買い物メモに『にんじん』と
メモし、後で買いに行こうとしていたのが事の始まりだった。

コメコメ「コメ？」

ゆい「後で人参買いに行くの。忘れない様にメモしてるんだよ」

コメコメ「コメ…？」

ゆい「今日はあたし達が晩ご飯作るんだ」

あきほさんの食堂は夜でも急用の為、代わりに俺達が晩飯を作る事
となった。

咲夜「人参を食い切った分、お手伝いしとかねーとな。今日はカ
レーだし」

コメコメ「コメ！」

ゆい「それ、あたしのセリフ〜！」

ローズマリー「ゆい、咲夜！」

咲夜「ローズマリー…随分と元気そうだが、何かあったのか？」
その時、ローズマリーが嬉しそうな雰囲気で駆け寄って来る。

ローズマリー「見て見て！この子見て！ほら！」

ゆい「うわあ〜！可愛い！」

すると、一輪の花が開く様に手に持っていた物を俺達に見せる。そ
の正体はゴールドレトリバー様な茶色い仔犬。

コメコメと同じく手のひらサイズで、垂れた左耳には三つ折りと
なったピンク色の布に白い花を付けた髪飾り。雄蕊おしべが黄色のためか、
色的にはハムエッグを思わせる。

コメコメと同じくハートが付いたフードを着ていて、コメコメの赤
色と違って、こっちは水色となっている。

??? 「知ってるパム」

可愛いと褒められて髪を靡なびかせる様な仕草をする仔犬。

咲夜「今、普通に喋ってないか？」

ローズマリー「普通に喋るのよ。しかも、名前がね——」

俺は先の事を察して苦笑する。まさかこれ、名前が長いってパター
ンじゃねえだろうな？

名前は名前でも、長つたらしい名前は百年以上も旅してきた俺に
取っては地獄そのものだ。

??? 「パートナル・フワフワン・コーバシイヌ・イースト・パムサン
ド。宜しくパム」

咲夜「あああああああッ!! やっぱり長えええええええええええ
えッ!!!」

ゆい「えっ…? パートナル・フワフワン…!?!」

コメコメ「コメ…?」

はい積んだ。この地獄はこれから先もあるだろうが、これは単なる
始まりに過ぎない。

長つたらしい名前に困惑する俺達から姿を現したコメコメに、茶色
い仔犬は目を輝かせた。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメーゴP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

??? 「先に目覚めてるなんて吃驚パムッ！」

コメコメ 「コメ…？」

??? 「コネクトル・モチモチット・フックララ・グリコーゲン・コメツクス二世！」

ゆい 「えっ…？それってまさか…！コメコメの…!?」

咲夜 「血圧上げさせる気か！このクソ犬ウツ!!」

再会を喜びながら抱き着くパムパムことクソ犬はコメコメの本名を言うと、怒りのボルテージが上がった俺は苦悩の叫びを上げる。

ローズマリー 「まあ、そう怒らずに。っていうか、名前盛り過ぎ」
咲夜 「そういう問題じゃねえよ、ローズマリー…」

コメコメの本名を意気揚々な態度で感想を述べるローズマリー。お前はいいよ。けど、俺達にとっては混乱に及ぶから。自分に取っては地獄だよ。

ゆい 「いいじゃん、コメコメで！」

コメコメ 「コメ！」

コメコメ可愛い。やっぱこいつ癒しだわ。暫くして気を落ち着かせ、改めて自己紹介をし終えた俺達。

ゆい「これから宜しくね。ええつと…」

咲夜「こいつ、『パム』とかいっばい言うから『パムパム』は如何だ？」

パムパム「それは元からの渾名あだなパム」

ゆい「ああ… 起き使い、有難う御座いますありがとござ」

パムパム「うんうん。パムパムは心が広くてとってもプリティーなエナジー妖精パム」

こいつ、図に乗ってやがらあ。メスガキ感増し増しじゃねえか。

ローズマリー「言うわね。この子…」

コメコメ「コメ。コメコメコメ？」

パムパム「それはパムパムが大人だからだパム。コメコメも大人になつたら話せるパム」

何かを問い掛けるコメコメに即答するクソ犬。

若しかしたらコメコメはクソ犬より年下で、フォームやブン達の世界にいたピンク玉と同じく喋れないって事か？

いや、流星にそれはないか。徐々に通じていけば喋れる様にはなる筈。

ゆい「あ、そうなんだ。楽しみ〜！」

ローズマリー「ちよつと待って。パムパムは、コメコメの言ってる事が分かるの？」

パムパム「勿論もちろんパム！」

ゆい「うわあ、すごい！」

パムパム「もつと褒めて良いパム」

咲夜「これってまさか…」

ゆい「お腹、空いた？何かあつたかな…？」

パムパム「パムパムにお任せパム！」

その時、コメコメの小腹が鳴り響く。食料に困惑しているゆいに、クソ犬はハートキュアウオツチの液晶画面に触れると、梅干しを乗せたおかゆを実体化させる。勿論専用のスプーン付きで。

コメコメ「コメ〜！」

ゆい「へえ、すごい。パムパム！」

パムパム「お任せパム〜！」

暫くしてコメコメが風船の様に腹が膨らむと、沢山たくさんの食器が食後を語っていた。

ってか、出し過ぎとは言え『グルメテーブル掛け』のウオッチ版と言ってもいいな。料理名を言わずに済むし。と言ってもパートナー妖精専用だけど。

ローズマリー「もう、出し過ぎよ！」

ゆい「ハートキュアウオッチって、こんな事も出来るんだね…。」

パムパム「これからは何でもパムパムに聞いてパム」

ゆい「凄いねパムパム」

パムパム「当然パム！」

ローズマリー「頼りになるじゃない」

クソ犬の頭を撫でるゆい。コメコメはその様子に不可思議に覚える。

コメコメ「コメ…。」

ゆい「じゃあ、この画面ってどういう事？」

パムパム「これは『レシピピスタンプ』パム」

コメコメ「コメ〜」

パムパム「いっぱい集めると良い事が起こるパム」

ゆい「おおう。何それ、楽しみ〜！」

ローズマリー「本当良く知ってるわね〜」

コメコメ「コ〜メ〜」

ゆい「本当凄いやパムパム！」

コメコメ「コメ… コメ？」

誰も構ってくれない寂しさを覚えるコメコメ。このままじゃダメだ。

俺は満腹になったコメコメをそっと台所のテーブルに移動する。

咲夜「コメコメ、一緒にお使い行かないか？」

コメコメ「コメコメ？」

咲夜「…と言つても、お前がちやんと一人で買い物出来たって事にしといてやる。ゆいに褒められたいんだろ？ だったら俺に考えがある。連いて来い」

自分だつて主人の役に立ちたい。そんな気持ちでコメコメと俺は作戦に入った。

人參と書かれたメモ帳と、ローズマリーのガマ口を入れた買い物袋を手に持ちながら――。

□

No side

場面は変わつてブンドル団アジト。

セクレトルー「次のターゲット… 目星は付いているのですか？ つて言うか… 失敗続けとかありえねーつての」

ジェントルー「はっ！ 次はカレーかプリンか…」

セクレトルー「カレーにしましょう！」

ジェントルー「…はっ！ 仰せおおの通りに」

プリキュアとデイケイドの活躍により、二回も失敗続けをしているジェントルーの陰口を言うセクレトルーはカレーを優先する。

セクレトルー「必ずや、レシピツピを捕まえて来るのです。て言うか、昨日から食べたかつたし…」

ジェントルー「承知しました！」

彼女に取ってカレーは昨日から食べたがっており、プリンはデザートだから最後に取って置きたいそうだ。

セクレトルー「それでは…参りましょうか。せーのっ！」

「ブンドル、ブンドル！ブンドル、ブンドル！」

□

「今日は迎えは要らないわ」

「はい、ここね様。お気をつけて…」

一台の高級車から降りたのは、ここねと呼ばれるボブヘアの少女。

執事に今日の送迎は必要ないと話し、八百屋の道先を歩いていると、『コメ』と不思議な鳴き声をする八百屋の店先で買い物袋を引き摺ずっている薄ピンクの犬らしき小動物を目撃する。

□

Sakuya side

俺はコメコメを見守る様に八百屋の上で待機している。

あの時、ゆい達にコメコメがいなくなったと見せかける様に電話で伝えて俺達がこっそり買い物をする。

そして俺がコメコメを目撃したフリをして、お使いをしていたと伝えると言った作戦だ。

だが、これだとコメコメがお使いをした事にはならず、この作戦は呆気なく崩れ落ち、考え直した結果がこの作戦だ。

コメコメが八百屋先で買い物袋を引き摺って助けを要請するフリをしていると、偶然に見掛けた人参のメモ帳を見た通り掛かりの人に買ってもらおうと言ったものだ。

偶にはパートナーを心配させてやらないと。本当妖精って大変だな。上手くいつてくれるといいが…。

コメコメ「コメ…。」

ここね「如何したの？一人？」

其処へ大人びた服を着た紺色のボブヘアの少女がコメコメに話し掛けて来た。

コメコメ「コメコメ」

困り顔で助けを要請するコメコメ。妖精だけに可愛い。逆に俺がパートナーになってやりたい。つてか、何考えてんだ俺。んなこた考えてる場合か。

ここね「コメコメ… ふふっ」

コメコメ「コメ」

ここね「不思議なわんちゃん… 飼い主さんは？」

コメコメ「コメコメ！」

可愛いさ故ににやけた口を手で抑えていると、少女は買い物袋に入っていた物に目を付ける。

ここね「ん？これは… 人参？ひよつとして一人でお買い物？」

コメコメ「コメコメ！」

ここね「… ちよつと待ってて」

暫く経ち、彼女の手には数本の人参が。どうやら代わりに買ってきたくれた様だ。

感謝のお辞儀をするコメコメ。そのまま引き摺る形で去って行った。

ここね「… 可愛い」

それな。同意はするぜ。

咲夜「それにしても、『わんちゃん』か…！」

作戦は成功したが、一つ言ってもいいか？ コメコメは犬じゃなくて赤狐だ！ ア・カ・ギ・ツ・ネ！ 何処で犬って間違えられるんだよ!? 尻尾見ろ。尻尾。

□

Y u i s i d e

ゆい「コメコメ？」

パムパム「コメコメ？」

ローズマリー「んもう。何処に行っちゃったのよ…？」

数分前に咲夜君から連絡があつて『コメコメがいなくなった！』と電話で通報が入り、あたし達は家中を探してみただけどコメコメの姿がなかった。

ゆい「いた？」

ローズマリー「いないわ。本当に何処にいるのかしら？」

パムパム「若しかしたら外に遊びに行つたかもしれないパム！」

ゆい「うん、そうだね。兎に角、皆で探そう！」

□ S a k u y a s i d e

俺は今デイケイドに変身している。変身と言ってもただの変身じゃない。カメンライドしている姿でだ。

宇宙服の様な白い戦闘服にロケットを模した頭部。右腕と両足には丸・バツ・三角が刻まれ、頭部の黒いシャツターにオレンジの複眼を覗かせる。

デイケイドフォーゼへと変身した俺はコメコメと合流すべく、プロペラの様な装備、ジャイロモジュールを装備して空中から後を付けていった。

其処では地上からの周囲を見渡せる。プリン的美味しさに頬が落ちる程の笑顔で満ち溢れている店にプリンのレシピッピが漂っていた。

此処に危害が付け加える事はないだろう。何故なら、今回はカレーのレシピッピが狙われる可能性が高い。だが今はコメコメを見守るのが、今の俺の優先順位だ。

コメコメはその光景を見た後、買い物袋を引き摺りながら進んで行く。

買物袋が破れるのが先か、コメコメの体力が尽きるのが先か。

ここね「あ。またあの子…」

そんな中、俺はさつきコメコメと出会ったボブヘアの少女を見掛ける。

次の瞬間、コメコメは浮遊しながら買い物袋を持つ。いや、後ろに

人いますけど!?

「ここね「ええっ!?浮いた...?」

ボブヘアアの少女は追跡を続けるが、コメコメは成る可く人が届かないところへと浮遊し、そのまま去って行った。

「ここね「行っちゃった...」

「パムパム「パム...?」

後を付けていた俺はコメコメが通って行ったところで変身を解除し、タイミングを見計らっていると、クソ犬がボブヘアアの少女に偶然に駆け寄って来る。

後少し早ければ見つけられたものを。互いに目が合うと、ボブヘアアの少女の髪が追い風によって靡く。

「パムパム「パム...」

「ここね「また不思議な鳴き声...」

突然の言葉に初対面とはいえ、緊張するクソ犬。

「ここね「貴女も浮いたりして。あのピンクの子みたいに...」

「パムパム「パム!?!」

宇宙の帝王を彷彿とさせる言葉を発する少女。ピンクの子って、コメコメの事か。

クソ犬はコメコメを見掛けたと悟ると、人語を喋り出そうとする今が不意の言葉を投げ掛けるチャンス。

賽は投げられた、引っ掛かってくれよ。

「咲夜「お前の次のセリフは...」

「コメコメを知ってるパム!?!」

「咲夜「...だッ!」

「!!」

案の定掛かったな。お前の喋りすぎな性格を敢えて利用させてもらった。

「パムパム「咲夜!コメコメを見掛けなかったパム!」

「咲夜「俺も今探してるところだ。ゆいとローズマリーは如何した?」

「パムパム「今、コメコメを探してる最中パム!」

ここね「喋った…!?!」

パムパム「パム!?!」

明確に人語を喋ってしまったクソ犬は、少女を誤魔化す様に吠えながら走り回る。

御免なクソ犬。別にお前が嫌いな訳じゃないんだ。コメコメの成長振りを見届けてやってくれ。

□

No side

コメコメ「コメ?コメ!」

咲夜と合流しようとするコメコメ。だが、偶然にも森に迷ってしまい、辺りを見渡す。

其^{そこ}処には誰もおらず、今でも泣き出しそうとした直前、カラスの声に驚き、買い物袋で身を隠す。

その時、偶然カラスの声がした方へと寄り掛かった赤い靴の人物が小枝を踏むと、その存在に目を付けた。

□

Sakuya side

パムパム「パムパムパム…パム」

ここね「貴女…」

走り回るクソ犬を少女は抱き上げ、じつと見つめる。その声を頼りにゆいとローズマリーも来た様だ。

ゆい「あ。咲夜君、パムパム！」

咲夜「ゆい！ローズマリーまで…！」

ここね「あ…」

ゆい「勝手に行っちゃって…こんにちは」

ここね「あ、こんにちは。あの…この子、貴女達の？」

ゆい「うん。有難う！」

ローズマリー「咲夜！コメコメは見つかった？」

ローズマリーに問われると俺は誤魔化し続ける。

咲夜「いや、それがまだ見当たらなくてな…」

パムパム「…」

ゆい「えっ？」

クソ犬は俺達以外の前で喋れない故か、ゆいの傾けた耳に小声で喋る。もう既に喋ってるけどな。

ゆい「ねえ、他にも見たの？この子ぐらいの大きさで、えーつと…」

狐みたいな仔犬！」

表現の仕方は上手いが、コメコメは犬じゃなくて赤狐だ。

ここね「『狐みたい』…？あ、さっきの子…！」

ゆい「知ってるの!？」

ここね「あ、さっき此処を飛んで…」

ゆい「此処を？うん、有難う！行こう、マリちゃん。咲夜君！」

ローズマリー「えっ？ああくっ！」
手を引つ張られるローズマリー。俺はその後を追って行った。
咲夜「おい！待ってくれよ!!」

□

No side

??? 「後で上げよつと。さてと… いただきま〜す！」

場面は変わり、スマホでカレーの写真を撮る栗毛の少女。カレー店にはカレーのレシシピが漂っていた。

だが、それを阻む存在、ブンドル団のジエントルーが密かに眺めていた。

ジエントルー「^{そそ}唆られる匂いだ… ブンブン・ドルドル・ブンドルー!!」

カレーを口にしようとした栗毛の少女は何かを感じ取ると、カレーのレシシピは知らずの間に囚われの身となってしまう。

??? 「あむっ… あれ？」

客A 「何かおかしいぞ？」

客B 「こんなのだったかしら？」

それと同時にカレー店のカレーに異変が起きる。それに構わず栗毛の少女は口にする、とてもカレーではない味覚に襲われる。

だが、その影響は少女のカレーだけではない。他の客のカレーにも

異変が起こり始めていた。

□

S a k u y a s i d e

コメコメを探してる途中で、ハートキュアウオッチがアラーム音が鳴り響き、その方向へと向かっていると、其処そこにはカレーのレシピツピが助けを求めている姿にゆいは立ち止まる。

ゆい「カレーのレシピツピが捕まっちゃった！」

パムパム「パム!？」

ローズマリー「もう！こんな時に……！コメコメ、何処どこに行っちゃったのよ……？」

咲夜（コメコメ、無事でいてくれ……！）

□

ゆい「コメコメ？」

ローズマリー「コメコメ？」

咲夜「コメコメー！いたら返事しろー!!」

パムパム「コメコメ〜！」

ゆい「コメコメ何処どこ…？」

咲夜「ん？お前は…！」

コメコメを探している途中に俺はある人物を見かける。

??「何騒いでんだ？」

ゆい「拓海…！」

ゆいの幼馴染みである品田の手には、コメコメが持っていた買物袋が握られ、パーカーのフードには人参を肌身離さず持ちながら寝ているコメコメの姿が。

拓海「若しかしてこいつ、お前んところか？前に見た気がしたから…！」

コメコメ「コメ…？」

ゆい「あ、コメコメ！急にいなくなってたから心配してたんだよ！」

コメコメ「コメ…！」

目を覚ましたコメコメに駆け寄るゆい。

ローズマリー「もうく。心配したのよ！何も言わずに出て行ったら…め、め、めよ！」

ゆい「有難ありがとう拓海。あれ…人参？」

拓海「これ、持ってたんだ」

ゆい「あっ…！」

ゆいは品田の方を見ながらコメコメを持ち上げると、持っていた人参を目にする。涙目になったコメコメが言いたい事を代わりに言う様に買物袋に入れてあった人参のメモを見せる。

ゆい「若しかして…！」

コメコメ「コメ…！」

ゆい「コメコメ、私の代わりに人参を買ってきてくれたんだ…！」

ジエントルー「ふっ。カレーの匂いに釣られてきたか…。」

咲夜「釣られたのはお互い様だろ？」
互いに対峙する俺達。それを目撃したボブヘアアの少女がいる事を知らずに。

ここね「あ。見つかったんだ… あれ？」

ジエントルー「出でよ！ウバウゾー!!」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

偶然道端に置かれてあった寸胴すんどうが青い炎を吹き出し、元となった器具を模した巨大な怪物と化した。

ローズマリー「デリシヤスフィールド！」

パムパム「パム？」

咲夜「如何どうした？クソ犬。！こいつ…！」

被害が出る前にデリシヤスフィールドを展開するローズマリー。

パムパムが声を発したした方角に俺達は振り向く。

其処にはボブヘアアの少女が意識朦朧もうろうとなっていた姿が。それを見掛けると同時に俺達はフィールド内に転送されていた。

□

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ゆい「行くよ、二人共！」

咲夜「おう！」

コメコメ「コメ！」

上頭部の蓋ふたを沸騰ふっとうさせるウバウゾー。俺達は変身準備に取り掛かる。

□

コメコメ「コメ！」

ゆい「プリキュア！デリシャスタンバイ！パーティーゴー！にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

□

咲夜「変身！」

【カメンライド デイケイド！】

□

コメコメ「コメコメ！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

【デイケイド！】

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語り：：始めようか！！」

□

パムパム「凄いパム！」

デイケイド「驚くのはまだ早い。新しい力を試してやる」

【アタックライド イリユージュオン！】

俺達の変身に評価の声を上げるパムパム。俺はイリユージュオンで二人に分身し、先程増えた新たなライダーカードを二枚取り出す。

そのカードには家族を守る為に、禁断の力を味方に付けて戦う一人
で二人のライダーが描かれていた。

「カメンライド リバイー!」

『オーニング! ショーニング! ローリング! ゴーイング! 仮面ライ
ダー! リバイー! バイス! リバーイス!』

二枚の内一枚をドライバ―に装填すると、巨大なハンコのエネル
ギーが俺とBに覆い被さり、内部のインクが重なって纏わり付くと、
同時に被さっていたハンコのエネルギーが砕け散る。

真紅の複眼にティラノサウルスの顔を模した耳まで裂けて笑って
いるかの様な白いクラツシャ―が存在する頭部。全身はピンクだが、
筋肉部位は水色となっている。

もう一人はティラノサウルスを象る縫い付けのヘルメットは噛ま
れている様にも見え、其処から覗いている鋭く盛り上がった青い目。
黒い全身には首にはピンクのマフラーを巻かれている。

そして注目すべきポイントは左胸にティラノサウルスの紋章が押
印されているということ、何故かBだけにはゼロディケイドライ
バ―が巻かれていないということ。

悪魔を持つて悪魔を制す。仮面ライダーリバイと仮面ライダーバ
イス。二人合わせて仮面ライダーリバイスへと姿を変えた。

パムパム「姿が変わったパム!」

ローズマリー「今度は… 恐竜!」

ディケイドB「あれ? 何で俺だけゼロディケイドライバ―が巻かれ
てないんだ?」

ディケイドA「これって若しかして… 俺がこのカードを使うと、
分身も強制的にするってこと?」

ディケイドB「マジで!? つか、このパターン初じゃねえか!? 何か
尻尾生えてるし」

ディケイドA「細かい事は後だ! 行くぞ!」

ディケイドB「おい、細かい事って… ああもう! こうなりや自棄
だ!!」

プレシヤス「はあああアツ!!」

デイケイド 「うおおおおッ!!」

プレシヤス 「カレーのレシピピは絶対助ける!」

デイケイドA 「そして!」

デイケイドB 「早く終わらせる!」

助走を付け、地面を蹴って飛ぶ俺達にウバウゾーは上頭部のスパイクを露わにしながら回転攻撃を仕掛けて来る。その側に俺はティラノサウルスを模した両脚へと変化させる。

デイケイドA 「レックススタンプ!!」

デイケイドB 「レックステール!!」

プレシヤス 「500キロカロリパーンチ!!」

踏み付け、打撃、尻尾による攻撃、そして回転しながらの特攻が四つの火花を散らしながら押し合うも、回転の速度が増したウバウゾーの攻撃に吹っ飛ばされてしまう。

難なく体制を立て直す……が、逆にBは大きく吹っ飛ばされてる。

デイケイドA 「ぐっ……!」

デイケイドB 「うわあああああつ?!」

ローズマリ 「真っ向勝負は無理よ。三人共!」

デイケイド 「如何^{どう}って事はない。内部から攻め込むまで!」

Bが合流すると同時に俺はライドブツカーからカードを取り出す。

「フォームライド リバイス プテラ!」

『上昇気流!一流!翼竜!プツテラ〜! Flying by come plete.』

今度は黒いインクがBごと重なって碎け散ると複眼が赤から黄色くなり、複眼の間のVの字に開いた部分からはティラノからプテラノドンの嘴を模したものとなり、複眼は釣り目になっていて、胸部は機構内部が露出した様なデザイン。展開した肩装甲には翼竜の印象が組み込まれている。Bはホバーバイクへと変化し、此方も同じくプテラノドンを模している。

俺とBは『デイケイドリバイス プテラゲノム』へと姿を変えた。

パムパム 「また変わったパム!」

デイケイドA 「よく言われるんだよ。どの世界でもな!」

デイクイドB「つてか、何で俺ホバーバイクになつてんだよ!？」
デイクイドA「まあ、大体そういう事だ。行くぞ!」

プテラゲノムとなつたBを飛行させ、再び回転攻撃を避けると、搭載されている火器から光弾をウバウゾーに向けて吐き出す。

その隙を突いて上空から500キロカロリーパーンチで急降下するプレシヤスに続き、俺はBに乗りながらウバウゾーの内部へと潜入する。

ローズマリー「何をするつもり…!?」

「フォームライド リバイス カンガル!」

『跳び上がる!舞い上がる!カンガル!勝利のパンチは決まつた!』

デイクイドB「今度は赤子になつちまつた!?バブ!」

黄色いインクに覆われ、有袋類の耳を模した水色とピンクの複眼。胴体は此間変身した仮面ライダービルドに似ており、両腕にはボクシンググローブの様な巨大な拳。腹部には育児嚢を模したポケットの様な隙間がある。

Bは赤子と化し、赤と青のウサギの様なフードを被り、黄色い縁取りの青い涎よたれ掛けには大自然の子育てボクサー カンガルの紋章が施されている。勿論、俺の左胸部の押印も同じカンガル。俺達は『デイクイドリバイス カンガルゲノム』となつた。

プレシヤス「500キロカロリーパーンチ!!」

デイクイドA「カンガルブロー!」

デイクイドB「喰らえ!赤ちゃんキーツク!」

俺達はウバウゾーの内部を徹底的に凹凸おうつさせる。

ローズマリー「や、やるじゃない…!」

パムパム「パム」

ジェントルー「何をしているウバウゾー!」

ウバウゾー「ウバウゾー!」

デイクイドA「ぐっ!足が焼けちまいそうだが、耐えてみせる…!」

!此処で耐えなかつたら…俺は俺自身を、化け出て呪ってやる!!呪ってやりたいくらいに、全ての料理の味が無くなるのは嫌なだけだ

！」

「フォームライド リバース ジャツカル！」

『リズムミカール！テクニカール！クリティカール！ジャツカル！ノストoppでクリアしてやるぜエ〜！』

デイケイドB「えつ、スケボー!?ちよ、痛い痛い痛い痛い痛い！其処顔！顔!!」

ジェントルーの叱咤を受け、ウバウゾーは高速回転をし始める。逆に内部でもピンチに陥るが、プレシヤスはその回転を利用して走り出す。

俺はライドブツカーからカードを回転の反動で手を離しそうになるが何とか取り出し、ドライバーに装填。

今度は黄緑のインクが重なって碎け散る。犬科の両耳を模した頭部にくの字が三つ並んでおり、目はバイザーが被さり、レンズは黄色。右胸にはゲームコントローラーのアクションボタンを想起とさせ、左胸には野干やかんとも呼ばれる捕食者 ジャツカルの紋章が押印されている。スケボーとなったBのテールにも同じ紋章が刻まれている。

デイケイドA「おっしやあ！アルアルアルアル！」

デイケイドB「目がア〜！目が回る〜!!」

『デイケイドリバイス ジャツカルゲノム』となった俺は、Bのボードデッキのノーズとテールを支えながらハンドスタンド。そのまま唯一回転の影響を受けない鍋底の中央を蹴りながら旋回する。

デイケイドA「プレシヤス！食うんだよな!?カレー!!」

プレシヤス「うん！コメコメの思いが籠こもった人参でカレーを作るんだー！」

コメコメ「コメ〜!!」

プレシヤス「絶対、美味しいよ！思いが籠こもったご飯はいつだって…！」

デイケイドA「ああ、そうだ！思いが籠こもった飯はいつだって…！」

コメコメ「コメ〜！」

「笑顔、いっぱい（一杯だああああッ）!!」

「ファイナルアタックライド リ、リ、リ、リバース！」

ウバウゾー「お腹一杯！」

デイケイドB「それじゃあ皆さん、御手手を合わせてカウントダウン。3！」

デイケイドA、プレシヤス「2！」

ローズマリ、パムパム「1！」

「2」お粗末様です（ごちそうさまでした）！「3」

ウバウゾーは消滅し、大きなハートの上にリバイスの紋章が浮かび上がる。成る程、必殺技を放ったライダーによっては紋章が変わるのか。今度試してみよう。

レシピツピ「ピピ〜！」

プレシヤス「おかえり！」

囚われていたレシピツピは自由を取り戻すと、ハートキュアウオツチの中に吸い込まれていった。

ジェントルー「くっ… カレーは買って帰るか」

デイケイドA「その必要は無いぞ」

ジェントルー「！」

俺は身体を向き直したジェントルーにある物を投げ渡す。それは非常食用のカレー四人分だった。こんな事もあるうと思っ買って買っただんだよな。

ジェントルー「如何どういうつもりだ？」

デイケイドA「単なる気紛れだ」

デイケイドB「偶には悪くないだろ？いつも頑張ってるから、和実さん家の悪魔二人組から敬意を評してのプレゼントだ」

ジェントルー「…後悔するぞ。私に慈悲をくれた事を」

そう言っジェントルーは姿を消した。

プレシヤス「あ。行っちゃった…」

デイケイドB「いいの？行かせておいて」

デイケイドA「いいんだ。あいつはあいつなりで、これからも失敗を重ねて強くなっていくだろう…」

プレシヤス「さてと、カレーのレシピツピもしっかり助けたし！」

デイケイドA「帰るとするか。俺達の家！」

デイケイドB「やつとカレーが食える〜！」

コメコメ「コメ！」

ローズマリー「四人共、伸び代特盛？」

デイケイドA「まあ、そんな感じだ」

デイケイドB「俺は酷い目に遭い過ぎだ。赤子やスケボーになったりで大変だったんだぞ!」

デイケイドA「悪かったって」

デイケイドB「『悪かった』どころじゃ済まされね〜ぞ!」

デイケイドA「分かった分かった。以後気を付けまーす」

デイケイドB「んだよ。ったく…ん？」

その刹那、誰かの腹が鳴った音が響く。その正体は当然…。

プレシヤス「うう。めちやハラペコった…」

ローズマリー「んふふ。早く帰ってカレーね」

デイケイドA「ああ」

ローズマリーは指を鳴らすと、眩い光に包まれる。デリシヤスフィールド解除の合図だろうな。

気が付けば夕暮れ時になり、ボブヘアの少女がまだ居座っていた。

プレシヤス「あ。さっきの子…」

ここね「私…早く帰らないと…」

デイケイドA「俺も少しは、お節介せんとあかんな」

ここね「えっ?」

デイケイドA「んじや、三人共。俺達がいっつを送ってくつから、先帰っててくれ！」

ローズマリー「えっ?ちよつと…!」

デイケイドA「心配すんなつて。プテラがあれば十秒も掛からな——
——おいB!いきなり何すんだよ!」

デイケイドB「十秒も掛からないんだつたらどれくらい早く送れるか見せてもらおうか。十秒じゃダメなら…行きと帰り五十秒だ」

俺はライダーカードを装填——しようとしたところをBにライドブツカーを分捕られ、バイスが描かれたライダーカードを装填す

る。

「カメンライド バイス！」

『リバイ！バイス！リバーイス！』

俺が瞬まばたきをした次の瞬間、目の前にはデイケイドリバイが立っており、自分の身体に異常がないか触れてみる。何と俺がバイスで、Bがリバイへと精神が入れ替わっていたのだ。

デイケイドA「ええーッ!?若しかして俺達、入れ替わってる!？」

デイケイドB「悪魔の騙だまし討ちつて奴だ。如何どうやらリバイの状態**で**バイスのカードを装填すると、精神が入れ替わるギミックになつて**い**るようだ。じゃあ今度は、俺がお前をこき使う番でいいよな?A」

Bはこき使われた事を根に持たせた俺にちよつとした仕返しをする様に仮面の下でニヤリとさせると、プテラゲノムのカードを装填する。

「フォームライド リバイス プテラ！」

『Flying By Complete.』

デイケイドB「んじゃ、ちよつくら行つてくるわ」

Bは後で追いつくサインを送り、ボブヘアアの少女を後ろに乗せると、Bはバイスプテラとなった俺を浮上させながら飛び去つていった。

パムパム「パム〜」

ローズマリー「全く、もう…。」

プレシヤス「それじゃあ、あたし達は先にカレーでも作って待つてようか！」

ローズマリー「そうね。皆と一緒に食べるご飯が、一番に決まってるわ」

□

Bはボブヘアアの少女を後ろに乗せながら俺を飛翔させる中、意識がハッキリとしたボブヘアアの少女は眼下を見て思わずBにしがみ

付いてきた。若しかして高所恐怖症か？

デイケイドB「下は気にするな、直ぐに着くさ」

デイケイドA（…落ちたら絶対死ぬぞこれ）

ここね「……………」

デイケイドB「聞きそびれたんだが、お前ん家何処？」

ここね「えっ!？」

□

ゆい「ふう…出来上がりっつと！」

咲夜「た、ただいま…」

ゆい「おかえり咲夜君。って、如何したの!?!顔すっごく青白いよ!?!」

咲夜「バイスプテラになって下の風景を眺めてたら、急に酔っちまっつて…」

ローズマリー「兎に角、今は落ち着かせるのが先よ！」

吐き気が催す。俺は二人に背中を摩られ、数分後にて吐き気が落ち着いた。

咲夜「やっと落ち着いた…お陰でカレーが冷めちまった」

ローズマリー「気にしないで。改めておかえりなさい咲夜。皆貴方の帰りを待つてたわよ」

咲夜「…有難な、待つてくれて」

ゆい「コメコメ。咲夜君落ち着いたから、ご飯にしよ」

カレーが出来たタイミングで帰宅出来たが、精神が入れ替わってバイスプテラになった影響の為か、変身解除直後に酔いが一気に襲って

きた。

正にグッドタイミングならぬベタータイミングなところでゆいはハートキュアウオッチにいるコメコメを呼び出す。

コメコメ「ふわあく〜！」

ゆい「えっ?」

ローズマリー「あら?」

パムパム「パム?」

咲夜「これは…!」

コメコメ「…コメ?」

なんとコメコメが赤子の姿へと変化したのだ。

ゆい「コ、コメコメ?」

ローズマリー「でも姿が…!」

咲夜「…可愛いツ!!」

もう我慢の限界が有頂天うちようてんに達し、俺は人間になったコメコメに抱き付く。

コメコメ「コーメ?」

パムパム「まさか人間に化けたパム!」

コメコメ「コメコメ〜!」

ゆい「うわあく〜!可愛い!」

咲夜「だろオ!?クソ犬!こいつすつげえ可愛いぞ!!」

パムパム「当然パム。コメコメは元々、特別なエナジー妖精パム。だから化ける事も不思議じゃないパム」

咲夜「別に俺は不思議とは思ってはいない。俺が旅してきた世界には、戦国時代で人の姿をした子狐妖怪がいたからな」

ゆい「人の姿をした子狐妖怪!」

ローズマリー「是非会ってみたいわ〜!」

咲夜「今は無理だけどな。けど、一度でもいいから対面させてやりたかったな…」

俺は犬夜叉達の世界にいた七宝ジッポの事を思い出しながら、人間になったコメコメをゆいに抱かせる。犬夜叉達、奈落を倒した後も今頃何をしているのだろうか?それも思ってしまう。

ゆい「凄いねコメコメ」

コメコメ「コ〜メ、コ〜メ」

咲夜「何て言ってるんだ？」

パムパム『早く大きくなって、ゆいと咲夜みたいになりたい！』つて言ってるパム」

咲夜「そうか。そう言ってるんだな」

コメコメ「コメ〜！」

ゆい「本当!?嬉しい!有難う。コメコメ」

コメコメ「コメ〜！」

咲夜「コメコメ」

コメコメ「コメ？」

咲夜「やったな」

コメコメ「コメ！」

ゆい「『やったな』って…何が？」

咲夜「俺達だけの秘密だ。なっ?コメコメ」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ええ〜っ!気になる!教えてよ〜！」

咲夜「教えないったら、教えなくい！」

暫くして数分後。

ゆい「それでは、皆一緒に…。」

「コ〜いただきます!」

俺達はカレーの味を堪能した。

ゆい「デリシャスマイル〜!!」

咲夜「…美味しい」

□
N o s i d e

場面は変わって、洋食ストリートの高級レストラン。静寂せいじやくな空気
に包まれた食卓にて、ここねはビーフステーキをナイフで切った肉を
フォークで刺して口に運ぶ。

その度に謎の仮面の人物や少女の事が頭から離れる事はなかった。

□

デイケイド「今日はピーチジュース。って、待て！俺はピンクじゃ
なくてマゼンタだ！まあ、いいや。俺と乾杯だ！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩き

パムパム「パムパムも『ここね』って子に会いたいパム！」

ゆい「おばあちゃん言ってた…『人の力も汁も、合わせるのが味

『増って』

「デイケイドA「犬科だけに吠えてみるよ、お前の本当の気持ちで!!」

第四品：膨らむ この思い、キュアスパイシー誕生！／吠えろ この気持ち、パムパムの本音！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第四品：膨らむ この思い：： キュアスパイシー誕生！
／吠えろ この気持ち、パムパムの本音！

□

No side

おいしいなタウンの洋食ストリートにある高級店にて、制服を着ながら朝食を堪能する一人の少女。芙羽ここね。

この高級店『レストラン・デュ・ラク』は彼女の実家で、自宅には庭にプールがある程の豪邸だそうだ。

レシピツピ「ピピく！ピピピく！」

其処へパンのレシピツピが現れ、彼女を見守っているかの様に姿を消した。

たった一人の食事に戴くのいただに何の不具合も感じておらず、寧ろそれを楽しんでいる様にも見える。

??? 「お嬢様。登校のお時間です」

ここね「……………」

ここねに登校を呼び掛けるのは、芙羽家の専属執事 轟。

高級車で送迎中に外の景色を見ながらここねは昨日の出来事を振り返る。先程自分を家まで送り届けた翼竜を模した仮面の人物。

デイケイドB 「つしゃ！此処ここでいいな？」

ここね「あ、うん…」

デイケイドB 「そうか。んじゃ、急いでつから名乗る必要もないか。縁が出来れば、又会おう」

翼竜を模したホバーバイクを浮上させると、仮面の人物は空を駆けながら去って行った。

ここね「『縁が出来たら又会おう』… か」

また逢える日を心待ちながら、ここねは静かに微笑んだ。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメージOP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Sakuya side

春休みが終わって、俺達は二年生へ進級したと同時に新学期が始まった。クラスは三組で、俺の席は右から二番目で一番下。ゆいも同じく一番下だが、左から一番目の席のようだ。クラスが三組なのはひかる達の学校以来か？

この学校の服装に関する校則が緩く、着こなしがバラバラである為か俺もその校則に甘えてノーネクタイノーブレザーの上にマゼンタのパーカーを着ている。

??? 「おはよう。ゆい」

ゆい 「おはよう。同じクラスだね」

??? 「えっと、こっちは確か… 門津君だっけ？ 男子バドミントンエースの」

咲夜 「そういや、お前も確かサッカー部にいたな」

??? 「覚えてたんだ… 私 は 玉 木 ゆ かな。宜しくね」

咲夜「ああ、宜しく頼むぜ。玉木」

玉木と握手をしようとしたその時、賑やかな空気が一瞬だけ静寂へと変わる。一際目を引く美少女が入って来た。

ゆい「あの子…！」

すると、クラス内が急にざわつき始める。

クラスメイトA「あの人、『芙羽様』だよな？」

クラスメイトB「『芙羽様』と同じクラスじゃん…！」

咲夜「お前！昨日の…！」

クラスメイトC「何だエース。『芙羽様』と知り合いか？」

咲夜「ああ。昨日飼育し始めたばかりのゴールデンレトリバーを散歩させようと、首輪を探してる最中に外に飛び出しちまってさ。その際に出会した」

クラスメイトB「つてか、待て。よく見れば『芙羽様』の席とお前の席、隣じゃねーか？すっげー幸運だな！今度その席譲ってくれよ？」

咲夜「断る。一度なつた席は固定する主義だからな」

クラスメイトA「くうう、言うねえ！流石はエース！幸運とは言えど、俺達と言えない事を平然と言ってるッ、其処に痺れる憧れるウ！」

何かどつかで聞いたことある様な台詞だな。

わかな「『芙羽様』も同じクラスだったんだ…」

ゆい「『芙羽様』？」

咲夜「誰だそれは？さつき入って来た奴の事か？」

わかな「芙羽ここねさん。頭脳明晰超美人。おまけにスタイルも抜群で、何とお父さんは高級レストラン『デュ・ラク』のオーナー！まあ、私達と住む世界が違うお嬢様よ」

ゆい「へえ…！」

クラスメイトA「なあ、声を掛けてみようぜ？」

クラスメイトC「お前が先行けよ…」

男子生徒達が話し掛けようとした途端、芙羽は教室から去って行く。

クラスメイトC「行っちゃった…」

クラスメイトA「芙羽様が俺達と喋ってくれる訳がないか…」

咲夜「お嬢様が何だっただよ」

『!?!』

咲夜「お嬢様はお嬢様でも、所詮はただの人間と変わりはない。どんなに成績が良くても、スタイルが抜群だろうと、心の底では未熟で弱い自分を隠し切っている。自分一人で孤独になっているのが怖い臆病者だ。それは俺達人間も同じだ」

クラスメイトD「ちよつと！あんた、そんな言い方ないでしょ！大体ね、芙羽様は——」

女子生徒は何かを言い切ろうとするが、そんなルールは俺には通用しない。

咲夜「じゃあお前らは自分の立場が無いから、ここねとかいう奴に憧れを持つてんのか？甘いんだよ。お前ら人生舐めすぎだよ。憧れで自分を打ち消そうと思ったら大間違いだ。人生はな！お前らが思ってる理想を越える程、より残酷な世界なんだよ!!」

そう格言をかましながら俺は机を大きく叩き付ける。その音を頼りに他のクラスも様子を見に来ていた。

咲夜「…余り甘く見てつと、今度は自分の心を酷く痛める事になるぜ？加熱されたフライパンに炒められている野菜の様に、あいつもずっと…孤独という名の焼かれた鉄板に耐えてきたんだろう。それを分かってやってくれ」

俺のその言葉に反論する者は当然おらず、芙羽に聞かれた事も当然知る由もなかった。

クラスメイトD「そ、そうね。御免なさい、勝手に怒鳴ってしまつて…」

咲夜「解ればいい、単なる気紛れだ。こつちこそ怒鳴って済まない。それに…あの芙羽とかいう奴の気持ちも、大体分かってきた」

ゆい「それって、如何どういう意味？」

咲夜「大体は大体、そのまんまだ。後は自分達で考えな。人間、心の底から吠えてないと人間じゃねえからな。それが人の『感情』って

モンだ。お前らも聞いてんなら、自分の心を大事に決めろよ？」

生徒A「咲夜！何があつた!？」

その言葉に反論する生徒は当然いなかったが、男子バドミントン部所属の生徒と思わしき生徒には当然、様子を伺いながら問い掛けてくる。

咲夜「問題ない…ただこいつらを叱咤してやっただけだ。余り怒鳴りたくもない。少し静かにさせてくれ」

生徒A「分かった。何かあつたら俺達にも頼るんだぞ？」

咲夜「ああ。悪いな」

ここね「……………」

俺は授業が始まるまでフードを被り、自分の席で顔を隠しながらうつ伏せになる

芙羽がその事を耳にした事のも、当然知る由もなかった。

□

「いただきます！」

咲夜「…いただきます」

学校が終わって食堂にて夕飯を食ってるが、先程怒鳴った件もあって俺だけは意気消沈としていた。

ゆい「はむっ。んんくっ！鱈の目、デリシヤスマイル〜！」

ローズマリー「春を感じさせる味よね」

咲夜「…ああ。そうだな」

あきほ「二人共、新しいクラスは如何？」

咲夜「はい。とても賑やかな感じでした」

ゆい「知ってる子も結構いたよ。あ、マリちゃん。この前、町で会った子覚えてる？芙羽ここねさんっていうんだけど、あたし達、この子と同じクラスになったの」

ローズマリー「へえ、あの子と？」

ゆい「うん。でもね、皆あの子の事『芙羽様』って呼んでたんだ…」

咲夜「その事で俺が新しいクラスメイト達の前で怒鳴って、今もこ

んな感じですよ」

あきほ「…… そうだったの。仲良くなれるといいね」

ゆい「うん！」

あきほ「…… 咲夜君に何があったかは聞かないけど、人の為に怒ってくれたのはとても良い事よ。若し友達になつたら、あの子と仲良くね」

咲夜「はい…… 激励して頂いて、ありがと有難うございます」

□

コメコメ「コメ〜！」

ゆい「はい、あーん」

夕飯を食い終わって自宅に戻り、ゆいは赤子に化けたコメコメにハートキュアウオッチから出現したお子様様のサンドイッチを食わせる。

コメコメ「コメ〜！」

咲夜「…… 可愛い」

ローズマリー「あら咲夜。コメコメにメロメロ大盛り？」

咲夜「はあ!?!んなわけないし、勘違いすんな!!」

ゆい「お婆ちゃん言ってた…… 『嘘を付く事は顔に出る証拠だ』って。この前だって、人間に化けたコメコメに抱き付いてたじゃん」

咲夜「うっ!?!」

俺達のやり取りにローズマリーは微笑む。

ローズマリー「それにしても、コメコメは化けられる様になって嬉しき大盛りね」

咲夜「…… ああ。その様だな」

パムパム「ゆい、咲夜」

咲夜「如何どうかしたか?クソ犬」

俺達はその様子を見てみると、クソ犬が俺達に話しかけて来る。内容は大体把握している。

パムパム「パムパムも『ここね』って子に会いたいパム」

咲夜「あいつにか？」

俺の問い掛けに応じて頷くクソ犬。

パムパム「あんな綺麗な子、初めて見たパム。髪も艶々で、良い香りもして・・・パムパム、あの子とお友達になつて一杯お喋りしたいパム！」

ローズマリー「・・・喋っちゃ駄目でしょ？」

パムパム「ワオウ・・・でも、パムパムもコメコメもお世話になつたし、ちゃんとお礼したいパム」

その意見もローズマリーに頬を抓られる始末。それでも俺達はクソ犬の気持ちを分からない訳でもない。

ゆい「そうだね。明日聞いてみるよ」

咲夜「それまで、家で大人しくしてるんだぞ？」

パムパム「・・・パム！」

会つて恩返しが出来る心待ちに、クソ犬は喜びの遠吠えを上げる。やっぱこいつメスガキ感増し増しだけど、コメコメと同じく良い子と言つてもいいな。

□

No side

場面は変わってブンドル団アジト。

三度も計画を邪魔されたゴードッツにとつては破壊者であるデイケイドに慈悲を与えられるのは意に沿わず、ひびきます跪くジェントルーに目を向ける。

ゴードッツ『我が望みを知りながら、失敗を重ねた挙句、あのデイケイドに慈悲を与えられるとは…』

ジェントルー「申し訳御座いません」

セクレトルー「プリキュアとデイケイドが現れて以来、計画も滞とどこおつています。ですが、次の手は講じています」

ゴードッツ『朗報を待っているぞ…』

セクレトルーの期待に応え、ゴードッツは姿を消した。

セクレトルー「…ゴードッツ様はパンが好きです」

ジェントルー「はあ…」

セクレトルー「ご機嫌伺いには好物を捧げるのがセオリー。そしてその数は多い程喜ばれる…つまり、分かれますね？」

ジェントルー『レシピピピを一度に多く捕まえる』…と?」

セクレトルーの言った言葉の意味を理解したジェントルー。

セクレトルー「はい。では参りましょう…」

「ブンドル、ブンドルー!!」

??? 「…」

シアンカラーの銃を手に持つ影はその光景を見届けると、静か気にと去って行った。

□

Sakuya side

翌朝、俺とゆいは芙羽と話すべく普通通りに登校する。

ゆい「おはよう」

『おはよう』

クラスメイトB「おはようエース」

咲夜「おはようお前ら。昨日は騒がせて悪かったな」

クラスメイトD「謝らないで門津君。悪いのは私の方よ」

クラスメイトA「そう自分を責めんなんて。芙羽様と隣になったエースならきつと許してくれるさ」

咲夜「有難^{ありがと}な、心配してくれて…」

クラスメイトC「おつ、今日は意外と素直だ」

咲夜「さて！気持ちを切り替えて、今日こそ張り切って行くぞオツ！！」

『おーっ!!』

昨日の不安を吹っ飛ばし、改めて授業が始まった。けど…。

ゆい「んん〜！芙羽さ…」

わかな「ゆい！昨日の放課後何だけど…」

ゆい「うっ、うん！」

咲夜「おい、芙羽。ゆいがお前に話があるって…」

男子生徒A「おい！お前確か、男子バドミントンエースの門津だったけ!?!」

男子生徒B「お前の新しいクラスの席、芙羽様の隣なんだって!?!」

男子生徒C「羨ましいぜ畜生！」

男子生徒D「流石はピンク男にしては幸運じゃねえか！」

咲夜「ピンクじゃねえマゼンタだ！つてか、誰だ噂流したお馬鹿共は！正直に出て来い！見つけたらタダじゃおかねーぞ!!」

休み時間でも。

クラスメイトA「かーちゃんがさ、砂糖と塩間違えてさ〜」

クラスメイトC「ええっ!?!どうしちゃったの…?」

咲夜「ゆい、起きろ。いつまで寝てんだ。ゆい！」

ゆい「…はっ！しまった。寝過ぎちゃった」

咲夜「何やってんだよ全く…」

爆睡したゆいを起こしたりと、中々会えないまま時間は過ぎて行つた。

□

No side

ウサギ小屋で檻の中にいるウサギを眺めながら表情を少しだけ和らげるここね。小屋の外に抜け穴を発見すると、ウサギが脱走した事を悟るのだった。

□

Sakuya side

時間は十二時となり、昼食のチャイムが学校内に木霊する。

「芙羽（さん）！一緒にご飯^飯食べよ…」

???「あの子ならもう行っちゃったよ」

ゆい「うう…」

制服の上に薄オレンジのカーディガンを着ている栗毛の少女の名は華満らん。詳細は第一品を参考にしてくれ。それと、メタ発言は気にするな。

らん「あ。若しかしたら食堂にいるんじゃない？」

芙羽が食堂にいることを憶測^{おんそく}する華満。こっちにやいなと思うが、手当たり次第探ってみるか。

ゆい「そっか！有難^{ありがと}う、行ってみる！」

らん「えへへ。らんらんも行く」

食堂に向かう俺達に華満もその跡をついて行つた。

□

巨大な招き猫が配置されている建物は俺達新鮮中学生徒の食堂。室

内では行列や会話などで賑やかな雰囲気だった。

ゆい「はらペコった〜」

咲夜「こつちを探してみたが、やっぱいなかった」

ゆい「そつか。でも、諦めずに芙羽さんを探さないと!」

咲夜「そうだな。兎に角、外探してみるぞ」

昼食を後にし、俺達は芙羽を探しに外へ向かった。その側にソフトクリームのレシピッピを見掛ける。こいつもブンドル団に狙われる事はないと信じながら。

らん「おおお、ひやシユワが滑らかなパラレルターンを描く... あーん。んんくつ!学校始まったって感じく!!」

□

ゆい「芙羽さん何処だろ〜?」

校舎で探索中、小腹を鳴らすゆい。我慢しろ。今は芙羽を探すのが最優先だ。

咲夜「... おい、あれ見ろ」

俺が指差した方向には裏手で大型マットを引いている芙羽を目撃する。

圧力を掛けながら引つ張るも、マットの重量には抗えず膝を付いてしまう。勿論、このまま傍観する訳にもいかない。

咲夜「随分と探したぜ。芙羽様よ」

ここね「!」

いいリアクションだ。ゆいは芙羽が持っていたマットの持ち手の半分を握る。

ここね「貴女達...」

ゆい「これ、動かしたいんだよね?」

咲夜「俺達も手伝ってやるよ」

ここね「別に... 一人でやるから」

咲夜「そう頑なに言うなって。この世でお前が一人じゃ出来ない事、知らない事が、数え切れない程ある筈だろ?」

「ここね「えっ?」

素っ気なく断ろうとするが、俺達には関係ない。

ゆい「おばあちゃん言ってた...『人の力も汁も、合わせるのが味噌』って。一緒にやれば、きつと出来るって!セーので引っ張ろ?」

「ここね「うん...」

咲夜「じゃあ俺が角側持っとくわ。行くぞ?」

「セーの!」

咲夜「いっせーのせ!」

「ぐぬぬぬ...!」

大型マットが動く。

「ここね「動いた...!」

更に引っ張り、マットが数cmの間で止めると、其処にあるものを目撃する。

咲夜「!これは...!」

ゆい「如何したの?...あ」

一羽の白い子ウサギ。芙羽は子ウサギを助けようとマットを引っ張っていたのだ。

その後は飼育小屋に戻し、親と思われる一匹のウサギと戯れる様子を見る。勿論、掘った穴も岩で埋めといた。

咲夜「お前、優しいんだな。俺達と同じく」

「ここね「えっ?」

ゆい「この間もコメコメの事で助けってもらって、本当に有難う!」

咲夜「探す手間が省けそうになったしな」

まあ、これは俺が巻いた種なんだけどね。何とか墓場まで持って行く事が出来た。

「ここね「あれは偶然会っただけで...」

頬を染める芙羽。クソ犬の願いを叶える為に一つ言っておきたい。

ゆい「ねえ!今日の放課後、家に遊びに来ない?」

「ここね「えっ?いきなりそんな事言われても...」

ゆい「じゃあじゃあ、芙羽さんの好きな場所は如何?又皆と会ってほしくて...」

咲夜「如何してもお前に会いたがってる仔犬がいてさ。ほら、此処に尻尾振ってるのが…は？」

俺達の中には目を輝かせているクソ犬が尻尾を振っている。

ゆい「ええっ！何で学校に!？」

パムパム「パム！」

咲夜「お前な。家で待てつつたろ？まあ、来てしまったからにや、隠す必要もないか」

ゆい「で、こんな感じなの。でも学校じゃ何だし、放課後如何？」

パムパム「パム〜」

ここね「……！」

クソ犬のつぶらな瞳に目を奪われ、可愛さの余り、何かを爆発させまいと堪える芙羽。こつちもニヤけそうになるが我慢だ。

□

ここね「か…か…！」

咲夜「可愛いすぎだろてめえらあああああああああああああああああああ
あああああッ!!!」

つぶらな瞳で見つめてくるコメコメも加えられ、逆に俺が爆発した。ちよつと待って。ウサギも猫も好きなんだけど、犬科ってこんなに可愛かったか!?

来客の皆さん、いきなり叫んですいませんでした。破壊者は破壊者なりにて思った事自由に叫ばせてください。

というわけで気を取り直してやって参りました。芙羽のお気に入りのお店でもある洋食ストリート店にあるパン屋『Heart Bakery』。今は待ち合わせている最中だ。

ゆい「お待たせ〜」

注文をし終えたゆいが戻ってきた。ハートパン、カレーパン、そして新作のロールパンサンドの三つがそれぞれ三人分のお盆に置かれていた。

ゆい「どれも美味しそうで迷っちゃった！マリちゃんも来れば良

かったのに…」

□
〜回想〜

ローズマリー「パ〜ム〜パ〜ム〜！まさか学校なんて行くなんてねえ…！」

パムパム「御免なさいパム〜！」

咲夜「まあ、許してやれ。大体予想は付いていたし、問題事も起こさなかったしな」

ローズマリー「そうだったの？まあ、何事もなくてよかったわ」

時は遡り数時間前、芙羽に会いたい一心で来てしまったクソ犬はローズマリーに頬を抓られながら叱責しつせきされていたが、何事も無かった事を知ると安堵し、手離された。

ローズマリー「んで、Heart Bakeryで会うんでしょ？私も一度、行ってみたいわ〜！」

咲夜「ローズマリーも来るか？」

ローズマリー「ええっ!?悪いわよ〜！でも、二人がいいなら…」
ゆい「分かった！じゃあ、行って来る！」

咲夜「戸締り頼みますわ」

ローズマリー「って、置いてくんかい!?」
話を最後まで聞かずに置いてってしまった。ホント申し訳ない。

〜回想終了〜

□

咲夜「まあ、後で土産買っとけば咎め無とがしだな。兎に角食おうぜ」
ゆい「ふう… ハラペコった〜！ん？ハートパンと新作のロールパンサンドで迷って、両方にしちゃった！」

咲夜「何方どちらかを選べないなら両方選ぶってか？お前らしい考えだな」

ゆい「えへへ… まあね」

ここね「… 私もロールパンサンドと迷った…」

ゆい「やっぱり〜?」

俺達は両手でロールパンサンドを二等分に千切る。

ゆい「よかったら、半分どうぞ!」

咲夜「俺もどうぞ」

ここね「あ、ありが…」

咲夜「そーいや犬専用のもあつたんだっけな」

犬専用のパンもあり、コメコメはロールパン、クソ犬は骨型となっている。

ゆい「あ〜ん、んん〜っ!デリシヤスマイル〜!!」

咲夜「うん、美味しい…」

ここね「…美味しい」

ゆい「ねっ!」

パンを口に含ませ、感想を述べる俺達。その時の芙羽の表情は無表情だが、少し笑ってる様にも見えた。その様子にクソ犬は尻尾を振る。

ゆい「素敵なお店だね。よく来るの?」

ここね「…うん。静かで、穏やかな空気がいつも満ちてる。此処で過ごす一人の時間が好きなの」

ゆい「ああ、じゃあうるさくしちゃったね。御免ね」

咲夜「けど、一緒に食うともっと美味しいだろ?」

ここね「別に…」

「レシピッピ〜」

咲夜「レシピッピ!今度は三体か。いや待てよ、目に見えてるって事は…」

ゆい「若しかして…見えるの!」

ここね「貴女達も?」

ゆい「うん!すっごく嬉しい!おとつと…」

恥ずかしがりながら芙羽は外方を向くとサンドイッチ、カレーパン、そしてハートの形をしたレシピッピが一気に三体も出現する。最後のは恐らくハートパンだろうな。

レシピッピが見える事に一致する俺達。

ゆい「やっぱりカレーパンも美味しそう」

咲夜「じゃあ俺が買ってこようか？」

ここね「あつ… 和実さん！門津君！これ…」

ジェントルー「ブンブンドルドル、ブンドルー!!」

追加で買おうとした俺達を名前で呼び止める芙羽。

食器にあつたカレーパンを三等分にしようとしたその時、ジェントルーが現れ、パン系レシピツピの三匹が捕まってしまった。

ローズマリー「ジェントルー！何て事を！」

ゆい「マリちゃん？如何して此処に!？」

ローズマリー『羨ましくてこっそり来ちゃった』なんて、恥ずかしくて言えないわ!」

ゆい「言ってるよ」

本音を漏らしたローズマリーに小声で突っ込みを入れるゆい。けど、これはこれでカッコいい。見直したぜ。

芙羽はパムパムを抱えて立ち上がった瞬間、当然レシピツピが奪われた影響は店内に出ており、半分になったロールパンサンドを試しに口にする。

客A「何この味！」

客B「味が変わったぞ…」

ここね「あむつ… 如何いう事…!？」

ジェントルー「レシピツピが三匹… まあいいだろう。出でよ、ウバウゾー!!」

ブンドル団のマークが押印された計量器は青い炎を噴き出し、巨大な怪物へと変貌する。

今回は前とは違ってレシピツピが三体分。少しは腕が鳴る程度の強さだろう。

ここね「何あれ…?」

咲夜「此処は俺達がどうにかする！」

ゆい「芙羽さんは安全な場所に！」

ここね「えっ?」

咲夜「ローズマリー、頼んだ！」

当然逃げ惑う人々。俺達は芙羽に安全な場所へ避難するように促す。

「ここね「待って！」」

ローズマリー「デリシヤスフィールド!!」

お構いなしにフィールドを展開するローズマリー。芙羽は俺達に手を伸ばし、片手で持っていたクソ犬が青白い光を発すると、そのままフィールドへの光へと飲み込まれて行った。

□

No side

パムパム「何で中に入ってるパム!?!」

「ここね「えっ!?!」」

気が付くと砂漠の様な異空間にいただけではなく、人語を喋るパムパムに驚くここね。

辺りを見渡すと、計量器型の怪物と対峙している二人の姿が。

咲夜「今回は計量器か… だったら重力で押し潰しながら攻める。

計量オーバー10万トンだ!」

「??? 「計量10万トンは流石にキツすぎるんじゃないかな?」

『!』

ゆい「誰!?!」

「??? 「あまり姿は見せないけど… 僕はダイケイドの事を昔から知っ

ている、通りすがりの仮面ライダーだよ。覚えておいて」

【カメンライド バルカン！】

【カメンライド サソード！】

不意に掛けられた謎の声と同時に電子音が鳴り響き、警報の様な音がフィールド内に鳴り響かせる。

その電子音は咲夜にとつては聞き深かった。

??? 「行つてらっしゃい」

『シューティングウルフ！』

『Change Scorpion.』

岩陰で二枚のカードをシアンカラーの銃に装填する謎の影。ポンプアクションを行い、引き金を引くと三原色の影が重なり、咲夜と同じライダーの姿を形作る。

サーベル状の剣を両手に持ち、緑の複眼と蠍さそりを模した頭部と胸部、両肩のアーマーは鋏はさみを連想とさせる紫のライダー。

狼を彷彿とさせる頭部に青い右半身には赤いラインが走っているアンドロイドの様なライダー。

謎の影は召喚された二体を見届けると、そのまま立ち去って行った。

ゆい 「ええっ!?何か出て来た!？」

ローズマリー 「アレって若しかして、咲夜と同じ仮面ライダー!？」

咲夜 「仮面ライダーサソードと、仮面ライダーバルカン。こりや厄介だな……」

ジェントルー 「何だ、今のは……？だが、これで我々の勢力は増えたも同然」

ウバウゾー 「ウバウゾー!!」

ゆい 「行くよ二人共!」

咲夜 「おう!」

コメコメ 「コメ!」

□

コメコメ「コメ！」

ゆい「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

□

咲夜「変身！」

【カメンライド デイケイド！】

□

コメコメ「コメコメ！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

【デイケイド！】

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語らい…始めようか!!」

□

Sakuya side

ここね「貴女達は…！」

プレシヤス「芙羽さん!？」

ローズマリー「如何どうやって中に…!？」

デイケイド「恐らくクソ犬の力で此処ここに迷い込んだらう。後、ローズマリー。お前が昨日デリシヤスフィールドを展開した光景も

バツチリと目撃されたからな」

ローズマリー「えっ!? そうだったかしら!？」

デイケイド「いや、気付けよ!？」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

デイケイド「：バルカンとサソードは俺が、プレシヤスはウバウゾーを頼む。間に合うかどうかは分からないが、必ず追い付く!」

プレシヤス「分かった!」

俺達の話を守る様にウバウゾーは叫び、バルカンとサソードは武器を構えながら歩み寄って来る。

ローズマリー「あの子は私が!」

プレシヤス「お願い!」

デイケイド「頼んだぞ!」

俺達は駆け出し、其々の相手に向かって行く。

プレシヤス「はああーっ! うわっ! えっ! うわあっ!」

ウバウゾーの頭部にパンチを繰り返すプレシヤス。だが、その頭部が計量皿であるためか押し戻されてしまい、直ぐに体制を立て直す。

『CLOCK UP』

デイケイド「クロックアップか…」

サソードが左側のスイッチを押し高速移動能力『クロックアップ』を発動しながらの斬撃に加え、バルカンが青い銃から弾丸を吐き出す。

反撃の隙を与えないつもりだが、奴が召喚したライダーには自我を持たない。

俺は高速移動しているサソードの斬撃を受け流すと、そのまま盾にして蹴り飛ばし、銃撃を行っていたバルカンに直撃する。これで隙が出来た。

デイケイド「ホントは此処こゝでイリユージョン使いたかったけど、手間が省けた!」

【アタックライド イリユージョン!】

イリユージョンで二人に分身した俺達はカードを取り出す。

デイケイドA「昆虫大合戦だ」

デイケイドB「血が上った狼には満月を見せとかないとな」

「カメンライド カブト!」

「カメンライド キバ!」

『Change Beetle』

本体である俺は赤い装甲を身に纏うと、青い単眼が角と思わしき下顎の突起が上昇し左右に分割され、頭部から胴体までは甲虫の全身を連想させる軽装のライダーとなる。

同じくBの体を巡る様に波紋が流れ、体色が濁ると同時に体形を変化。臆てはステントグラスの様に飛び散るとその姿を変える。

額に緑の宝玉が埋め込まれており、蝙蝠を模した釣り上がった黄色い複眼。銀の鎧に黒く縁取られた筋質の赤い胴体。両肩と右足の装甲には鎖で封印を施されたかの様に縛られている。

天の道を行き総てを司どる仮面ライダーカブト、運命の鎖を解き放つ仮面ライダーキバへと姿を変えた。

ここね「姿が変わった…!?」

「アタックライド クロックアップ!」

『CLOCK UP』

Bはバルカンとの肉弾戦に至る。

同時に再びクロックアップを発動させるサソードに合わせ、俺はライドブツカーを剣モードにしながらクロックアップを発動。そのまま高速の世界へと移動する。プレシヤス達の目には火花が散る様にも見える。

ローズマリー「此処は危ないわ、離れましょう」

ここね「……………」

離れる様に促すも、芙羽は意味不明な光景に呆然としていた。

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ローズマリー「プレシヤス、後ろ!」

プレシヤス「強い…!」

『CLOCK OVER』

頭部の計量皿をフリスビーの容量で投擲するウバウゾー。プレシヤスは空中で避けるが、ブーメランの様に起動を変えた計量皿の不

意の帰還により、距離を大きく開けられてしまう。

ウバウゾーの強さを述べるプレシヤス。同時にクロックアップが解除され、サソードは再びクロックアップを発動しようとする。

デイクイドA「させるか！」

サソード「！」

だが、俺はそうもいかず、直前にガンモードにしたライドブッカーで左側のボタンを撃ち抜くと、ボタン側が小さくシヨートを起こす。これでクロックアップは完全に封じた。

デイクイドA「これでご自慢の高速移動は出来なくなつたな。さあて、こつからが正念場だあッ!!」

剣モードにしたライドブッカーを構えながらサソードとの剣撃をクロックアップ無しで戦う事となる。

デイクイドB「はあッ!!」

バルカン「…」

一方Bは銃撃を仕掛けるバルカンの攻撃を両腕を交差させながら向かって行き、地面を蹴りながらの飛び蹴りを放つが、バルカンは何処どこからか取り出したアタツシケースを盾にしてBの攻撃を防ぐ。

デイクイドB「おりやつ！」

バルカン「！」

瞬時にバク宙でバルカンの前に立ち、蹴り上げたBの右脚が高く振り上げた事で上空に打ち上げられる。

アタツシケースが宙に舞う中、Bはライダーカードを取り出す。

「フォームライド キバ バツシャー！」

ゼロデイクイドライバーのレンズから男性の人魚を指す事が多い半魚人『マーマン』の彫像が現れ、グリップを手に持つと鰭ひれの様な三枚の装飾そうしよくが施された緑の銃、魔海銃まかいじゆう、バツシャーマグナムへと変形し、右腕と胴体が鎖に覆われ、魚人の鰭ひれと腕を模した右腕と魚の骨の様な意匠を持ち合わせる緑の胴体へと変化。複眼は黄色から緑に変色する。

Bはキバ バツシャーフォームへとフォームチェンジすると、バツシャーマグナムの銃口をバルカンに向ける。引き金を弾き、安定翼で

ある三枚の鰭ひれを旋回させる度に水の銃弾が吐き出される。

バルカンも青色の銃『エイムズショットライザー』を向けながら銃弾を放ち、互いの銃撃が撃たれる度に足が後方に下がって行き、装甲が火花を散らす。

デイクイドB「!」

デイクイドA「危ない!」

「フォームライド カブト マスクド!」

『PUT ON』

デイクイドA「ぐっ!?!」

バルカンは地面に落ちていたアタツシユケースを手に取り、再び盾として水弾を防ぐと、水色のショットガン型の武器『アタツシユショットガン』に変形させ、Bに砲身を向ける。

状況を察した俺はサソードのサーベルを押し返し、Bの前に立ち塞がりながら取り出したカードを装填。下顎ごんごの突起が下がり、甲虫の蛹こむぎを思わせる銀の鎧よろいを身に纏う。カブト マスクドフォームにフォームチェンジした俺はバルカンのアタツシユショットガンの弾を防ぐが、吐き出された弾丸は700に及ぶ数であるためか、装甲の数箇所には弾痕だんこんが凹凸おうとつになっている。

「フォームライド キバ ガルル!」

デイクイドB「ハウリングショック!」

俺は余りにも散弾のダメージに深手を負ってしまう中、Bのゼロデイクイドライバーのレンズから青い獣人の彫像が現れ、グリップを手につくと狼の顔が現れ、湾曲わんきょくした刀身を露出させた刀剣『魔獣剣まじゅうけんガルルセイバー』へと変形。

両腕と胸部が鎖に覆われ、右肩はキバの初期形態でもあるキバフォームと同じだが、左肩は狼男の毛皮の様に四つに波打ち、青い胴体は胸骨を思わせる。複眼は緑から青へと変色し、キバ ガルルフォームへとフォームチェンジしたBは鏢つばにある狼の頭『ワイルドジョー』から咆哮を転用した音波砲を放ち、サソードとバルカンを地面に引き摺ずらせる程に吹き飛ばす。

デイクイドB「ガウ、ガウガウガウ!?!」

デイケイドA「大丈夫だ、問題な——うあつ!？」

デイケイドB「ガウ!? グルアツ…! グツ! グルルルルル…!

オリジナルのガルルフォームの影響で唸る様な声しか発せなくなっているB。だが例え喋れなくても言葉だけは通じ合えている。だが休む暇もなくバルカンは砲身を向けながら俺に散弾を飛ばしてくる。その隙にサソードはBに斬り掛かるが、硬質変化した獣毛を模した小型の盾『ウルフェンヘアードシールド』で剣先を受け止める。ここね「何が起きてるの…? 如何してあの子達は戦っているの!？」

ローズマリー「それは…」

一方、芙羽の問い掛けにローズマリーは即答する事が出来ず이었다。

ここね「貴女話せるんでしょ!? 教えて!お願い!」

パムパム「レシピッピが盗まれたせいで、パンの味が変わってしまったパム」

状況を訴える芙羽。最早隠す必要は無いと悟ったクソ犬は正直に真実を告げる。

ローズマリー「パムパム!」

ここね『レシピッピ』…?」

パムパム「プレシヤスとデイケイドは、それを戻す為に戦ってるパム」

ローズマリーに喋るなど言わんばかりにその声色には後悔の感情が含まれていた。

プレシヤス「はああーっ!」

500キロカロリーパンチを放とうとしたプレシヤスの打撃を躲し、落下しながらの計量皿にて押し潰される。

ローズマリー「プレシヤス!」

ジェントルー「捕まえたレシピッピが多ければ多い程、ウバウゾーは強くなれる。一石二鳥だな」

プレシヤス「大丈夫! 芙羽さんの、大切なパン屋さんは… あたし

達を守るから！」

その時、計量皿が揺れ動く。パワーが自慢のプレシヤスが押し潰されまいと抵抗している。

デイケイドA「そうだ！敵側が一石二鳥ならば、こっちも一石二鳥になりやあい！」

ローズマリー「それ、如何どういう意味よ?！」

デイケイドA「そんなの自分で考えろ！」

サソード「…」

デイケイドA「ぐつ！野郎…！こいつら、前に召喚された時よりも、強くなってやがる…！」

俺はバルカンの顔面に向けて左拳を振るう。だがバルカンは手に持っているアタツシユショットガンをケースの形状に戻して盾の様に防ぎ、鳩尾目みぞおち掛けての上段蹴りを放つ。

バルカンはアッパーを仕掛けるが、俺は直様両腕で受け止める。だが左腕に持っていたアタツシユケースを再びショットガンの形状に変えながら砲身を腹部に当てる。

デイケイドA「ぐあああああッ!!」

ローズマリー「デイケイド！」

デイケイドB「ガウーツ!!」

ゼロ距離から放たれる散弾の雨。装甲は大きく窪くぼみ、その衝撃で俺は大きく吹き飛ばされた。装甲が激しく火花を散らす。息を切らしながら何とか膝を付ける程度にまで立ち上がると、バルカンは徐々に俺の方へと牛歩する。

デイケイドB「ガウツ！グツ！グルアアウ…ガアアアアッ!!」

Bは援護に向かいたいところだが、余所見をしてる暇はないとサソードはサーベルに力を入れ、一気に押されて行く。それでも負けじと応戦する。

プレシヤス「マリちゃん。早く、芙羽さんを…！」

ローズマリーは手を翳すと、螺旋状の空間を展開する。これがデリシヤスフィールドから脱出する為の空間だろう。

ローズマリー「さあ、此処ここから外へ！」

デイケイドB「!」

ローズマリーがそう促すも、芙羽は動こうとしなかった。

パムパム「早く逃げてパム!御免なさいパム。パムパムが会いたいなんて我儘わがまま言わなければ、こんな事には…。」

デイケイドB「グルルルルルルルルルルル… ガウツ!ガウガウガウ!ガウツ!!」

涙を浮かべるクソ犬。聴力が良い為か、歯を軋きしる様に唸るB。バルカンがアタツシユショットガンの砲身を向けながら近付く中、クラツシヤーを露わにしながら野獣の遠吠えの様に叫ぶ。俺はサソードとの罅迫り合いになりながら、Bの言ってる事が分かる様に翻訳する。

パムパム「パム…?」

ローズマリー「今、何て…!?」

デイケイドA『何今更後悔してんだよ!』つてき。おいクソ犬テメエ!お前何自分を責めてんだよ!?!芙羽と出会って友達になりたかったんじゃないのか!?沢山たくさんお喋りしたいんじゃないのか?それともお前が望んでいた事は全部嘘だったのか!?!」

パムパム「ツ!」

デイケイドA「俺はこれでもな…!遊び半分で破壊者やってる訳じゃねえんだよ。だからよ…お前が望んでいた気持ちを、勝手に投げ出そうとするなツ!!」

ローズマリー「デイケイド…!」

デイケイドA「これが…Bがお前に伝えたかった言葉だ!まあ、同じ犬仲間でもあるからな。犬科だけに吠えてみるよ、お前の本当の気持ちを!!エナジー妖精 パムパムツ!!!」

言いたい事は全部吠えた。後はこいつの気持ちで運命が決まる。

パムパム「パムパムは…パムパムは!ここねとお友達になって、

沢山たくさんお喋りしたいパム!だから…だから…!」

芙羽は泣きじやくるクソ犬を慰める様に横顔をそつと撫でる。

ここね「貴女に会えてよかった。私、此処ここに残る。あの子達と一緒にまた美味しいパンを食べたいの!私、一人が楽だった。静かな一人の時間が好き。人と関わるのは面倒だし凄く疲れるから…でも、あの

子達と一緒にだと心の中で温かい物が…今まで知らなかった思いがど
んどん膨らんで行く…！私、守りたい。例えこの世界が残酷だった
としても。大切な場所をあの子達と！だって、どんな事も一緒にやれ
ばきつと出来るって、もう知ってるから！」

バルカンがアタツシユショットガンの砲身を向けながら引き金を
引こうとしたその時、クソ犬が芙羽の思いに一致したのか青いオーラ
が纏われる。

パムパム「ここね！パムパムも、ここねと一緒に守りたいパム！」
ここね「パムパム…！」

水色のフードに付いているハートが光を放ち、芙羽の左手首にハー
トキュアウオッチが出現する。

ローズマリー「ハートキュアウオッチ!？」

【カメンライド カブト!】

『CAST OFF CHANGE BEETLE』

隙を突いてカブトのライダーカードを装填し、凹凸おぼとつとなった全身の
装甲を脱皮させる。吹き飛ばした装甲がバルカンに直撃し、手に持っ
ていたアタツシユショットガンが手離される。俺は助走を付けなが
ら黄色いカードをドライバに装填する。

【ファイナルアタツクライド カ、カ、カ、カ、カブト!】

『RIDER KICK』

デイクイドA「ライダーキック!だあああああああッ!!」
角に充填されたエネルギーを放出した飛び蹴りをバルカンに放つ。

【ファイナルアタツクライド キ、キ、キ、キ、キバ!】

デイクイドB「ガルル!ハウリングスラツシユ!!グルアアアアアア
アアッ!!!」

Bも同じく隙を突いて押し返し、唐竹割りの要領で縦に振るう。ダ
メージを受け、よろけたところで黄色いカードをドライバに装填す
ると、青空から満月を照らす夜空となり、Bはガルルセイバーをク
ラツシャーに啜えて空高く飛び上がりながら回転。山一つをぶった
切る程の切れ味でサソードを切り裂く。

直後、青い狼の顔が浮かび上がり満月の夜は青空へと戻り、サソ

ドとバルカンは消滅する。

パムパム「ここね。プリキュアに変身パム！プレシヤス達と一緒に助けるパム！」

デイケイドB「ガウ！」

ここね「…うん！」

変身を決意する芙羽。その一言に迷いはなかった。

□

パムパム「パム！」

ここね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！オーブン！」

パムパム「パムパム!!」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

ゆい「シエアリングエナジー！」

パムパム「テイスティー！」

□

パムパム「パムパム！」

???「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合
う美味しき焼き付けるわ！」

□

スパイシー「はあぁーっ！」

ウバウゾー「ウバーツ!？」

プレシヤスを押し潰そうとしているウバウゾーを蹴り飛ばすスパイシー。今此処ここに、新たな戦士が誕生した。

俺達はプレシヤス達に合流する。

デイケイドA「こっちは片付いた。如何どうやらその様子だと、覚悟が
決まったみたいだな」

プレシヤス「芙羽さんなの？」

デイクイドA「違いよプレシヤス。今のこいつは…」
スパイシー「キュアスパイシーよ」

デイクイドA「…だそうだ」

ローズマリ「『キュアスパイシー』…!？」

ジェントルー「二人目のプリキュア…!？」

デイクイドA「さて、さつきはよくも俺の仲間を押し潰そうとしてくれたな。計量10万トンはまだの機会だ。B」

デイクイドB「ガウ！」

頷くBはゼロデイクイドライバーのハンドルを開くと、装填されていたカードが排出しながらライドブツカーに転送される形で消滅。

ライドブツカーから新たなカードを取り出す。描かれていたのは紫のキバ。俺もカードを取り出し、描かれていたのは銀とターコイズブルーのビルド。互いにカードをエクステンジし、そのままドライブに装填する。

「フォームライド ビルド スマホウルフ！」

『繋がる一匹狼！スマホウルフ！イエー！』

銀とターコイズブルーのボディが重なり、電話アプリと狼の横顔を模した複眼。右側は狼の爪を模した右腕と鋭利な右肩装甲。左側の四角い肩装甲にはコメントロゴが描かれており、左腕にはiPadの様な大型シールドが装備されている。Bはビルド スマホウルフフォームへと姿を変えた。

デイクイドB「やつと普通に喋れるぜ」

ジェントルー「やれ、ウバウゾー！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

フリスビーの容量で投擲しようとするウバウゾー。

プレシヤス「またさつきの攻撃が…！」

デイクイドA「大丈夫だ。今から一人じゃ出来ねえ芸当を披露してやるんだ…仲間がいればな！」

デイクイドB「まさに勝利の法則は決まったって感じだな」

スパイシー「私に考えがある」

計量皿を投擲するウバウゾーに合わせ、俺達は作戦通りに動く。

ウバウゾー「ウバツ！」

デイケイドA「よつと」

「フォームライド キバ ドツガー」

プレシヤスとスパイシーは空中に飛び上がり、Bは後方に待機。俺もちよいと無理はしとくか。そう思いながら真横に避け、カードを装填する。

ゼロデイケイドライバーのレンズからフランケンシュタインを模した彫像が右腕を模した紫の戦鎚せんつゐ『魔鉄槌まてつゐドツガハンマー』を手に持つと両腕、両肩、胴体が鎖に覆われる事で頑強な鎧へと変化させ、複眼は紫となっている。俺はキバ ドツガフォームへと姿を変えた。

ローズマリー「気を付けて、それは…！」

Uターンしてきた計量皿にスパイシーは手を翳すと、メロンパン型のシールドを展開させ弾き返す。

デイケイドB「オーライオーライ… ウルフエイタルクロー！」

待ち伏せしていたBが右腕にある伸縮自在の鉤爪でスパイシーが弾き返した計量器を切り裂く。

ジェントルー「何ツ!？」

ウバウゾー「ウバ、ウバツ!？」

デイケイドB「これさえなければお前はウバウゾーならぬスカウゾーだ！」

ジェントルー「…はっ！」

プレシヤス「はああーっ！」

ウバウゾー「ウバツ！」

スパイシー「ピリツとサンドプレス！」

ウバウゾーは両脚のバネを利用して避けるが、スパイシーが生成した食パン型のエネルギーで挟み撃ちにされた。

ウバウゾー「ウバツ!？」

「ファイナルアタックライド ビ、ビ、ビ、ビルド！」

『ボルテータックファイニーッッシュュ！イエーイ！』

デイケイドB「スパイシー、一旦距離を取れ！」

と貴女達に伝えたかった」

プレシヤス「えっ？」

スパイシー「…有難うありがと」

デイケイドB「どう致しまして」

プレシヤス「えへへ。此方こそ有難うありがと」

パムパム「これからはずっと一緒。パムく！」

感謝の言葉を述べられ、俺達は笑みを浮かべる。

ローズマリー「心強い仲間が出来たわね」

プレシヤス「うん！あつ…アハハ。ハラペコった」

ローズマリー「もう。プレシヤスったら」

デイケイドB「どんだけ食い意地張ってんだよ」

スパイシー「それなら…」

□

その後はHeart Bakeryに戻った側にてローズマリーも来店する事となり、色々な種類のパンがあつて迷っていたそう。

一方、俺達三人は外で改めてパンを食う事となった。

ここね「どうぞ」

ゆい「有難うありがと」

咲夜「んじゃ、俺も。はい」

芙羽は三等分にしたカレーパンの一片をゆいと俺にシェアする。

俺も器用な手で三等分にしたカレーパンの二欠片を、ゆいと芙羽に

シェアする。

ゆい「あむっ、んんくっ。デリシヤスマイル〜！」

咲夜「サクツと…うん。美味い」

ここね「…美味しい」

カレーパンの味を噛み締める俺達は、互いに笑顔を浮かべるのだつた。

□
スパイシー「今日はシュワシュワサイダー。私とCheers!」
オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩き
ゆい「ここねちゃんに避けられてる...?」
デイエンド「加盟した記念に、一つ芸当を見せてあげよう」
デイケイド「共に戦う仲間を励まし、助け合う。そして一緒に進化
していく...」

第五品：仲良くなりたいのに...ここね、初めてのお友達! / ジェ

ントルーの助っ人!?トレジャーズナイパー デイエンド!
全てを破壊し、全てを繋げ!

第五品：仲良くなりたいのに…！ここね、初めてのお友達！／ジェントルーの助っ人!?トレジャーズナイパー デイエンド！

□

Sakuya side

ゆい「ここねちゃんに避けられてる…？」

咲夜「如何どういう事だ？あいつは確かにプリキュアになった。何も避けなくても可笑しくはない筈…」

ローズマリー「何となくだけど、私が話し掛けると、目を逸らされちゃうのよね…」

あの夜、芙羽がプリキュアになってからの事を話していると、避けられてると感じる様に言うローズマリー。

ゆい「あ、そしたら今度皆とお出掛けしない？一緒に楽しい事をすれば、きっと仲良くなれるよ！」

ローズマリー「それナイスアイデア！丁度行きたいお店があるのよ！」

咲夜「確かにその手もあるが、それはあいつの気分にもよるぞ」

ゆい「大丈夫。きつと上手く行くって！」

ゆいの笑顔を見て、それでもやるしかないと思った。芙羽自身の気分にもよるが、此処は一か八かだ。

因みにパムパムはウバウゾーとの戦闘後、芙羽の家に雇われる事となった。

□
No side

ここね「……………」

パムパム「気持ちいいパム」

ある晩、一緒に暮らす事となったパムパムをブラッシングしながらマニキュアル本を読みふけるここね。どの様にしてゆいやローズマリ、咲夜の三人と仲良くすればいいのか悩む彼女に取っては不安でしかなかった。

パムパム「またそれ読んでるパム？」

片手に持つ本を読んでいる事を気にするパムパム。

パムパム「仲良くしたいなら、普通に楽しく遊べばいいパム」

ここね「普通に楽しく…か」

これまで友達がいなかった自分にとっては難関だったここねに、パムパムは軽くアドバイスをする。

ここね「普通…楽しく…遊ぶ…普通って…」

パムパム「ちよっ、ここね！パムツ!? あああ…」

ここね「あ」

普通という事に考える度にブラッシングが段々と早くなり、気が付いた頃にはパムパムの毛皮を爆発状態とさせていた。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何

を噛み締める？

イメーゴP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Sakuya side

翌朝、体育館での全校朝礼が行われていた。

???「新学期も始まり、新しい生活にも、慣れて来た頃かと思えます。ですが、遊びに気を取られて、勉学の疎かにならぬよう、気を引き締めた生活を心掛けてください」

らん「今日は何食べよ…」

拓海「ふわあああ…」

体育館のステージには生徒会長と思わしき黒味掛かった紫髪の女子生徒が新学期への心構えをスピーチをしている中、欠伸をする品田と華満の姿を偶々見掛ける。おみやーら、ホントにやる気あんのか。それと、あの生徒会長がジェントルーに似たような声がしたと疑問を抱いたの言うまでもなかった。

□

No side

全校朝礼が終わり、教室に戻ろうとした側にクラスメイトと話しているゆいと咲夜を見掛ける。

パムパム『普通に楽しく遊べばいいパム』

ここね「普通に楽しく…でもどうやって?」

拓海「ゆい」

ゆい「あ、拓海おはよう」

拓海「おう」

クラスメイトA「咲夜。おはよう」

咲夜「ああ。おはようさん」

そう呟いていると、最年長である拓海にゆいが名前を呼び掛け、同じクラスメイトでもあるクラスメイトの男子が咲夜の名前を呼び掛ける。

拓海「お前、ゲストハウスのローズマリーと仲良いよな。あいつら何しに此処に来たんだ?」

ゆい「えっ?それはえつと…観光?」

拓海「ふくん。観光ねえ…」

拓海の問いに何とか誤魔化すゆい。プリキュアの正体は自分だと家族や同級生には隠し切るのも精一杯のようだ。そんな会話を聞いていると、二人がここねの存在に気付き振り向く。

咲夜「お、誰かと思えばここね様じゃ、ありやせんか」

ゆい「あ、おはよう。ここねちゃん!」

ここね「…!」

ここねの脳内にて下の名前がエコーされ、その嬉しさのあまりに一瞬硬直してしまう。

今まで同級生に下の名前で呼ばれた事はなく、彼女にとっては生まれて初めてな出来事なのだろう。

ゆい「…ここねちゃん?」

咲夜「如何したここね様よ。いつもの表情は何処行った?」

ここね「…はっ!お…おう」

我に返り、ぎこちない返事をするここね。拓海の返事を参考にしながら精一杯のようだ。

ゆい「え?」

咲夜「はい?」

呆然とする様に硬直する三人。

ここね『お友達と仲良くなれる方法』。『友達の下の名前で呼んでみる』。ゆいさん、ゆいちゃん。ゆい。? 門津君の方は咲夜君か、咲夜。? うくん。!」

ゆい「ここねちゃん! 探したよ!」

咲夜「よお、ここね様。こんなところでおいでなさったか!」

ここね「ゆ。ゆ。ゆ。さ。さく。」

暫く経ち、休み時間にマニュアル本を朗読しながらゆいと咲夜の名前を何て呼ぼうかと本に目力を入れながら悶々^{もんもん}としていると、ゆいと咲夜が到来する。

ここねは咄嗟にマニュアル本を隠し、ゆいと咲夜の名前を呼ぼうとするが、緊張で中々口から出て来ない。

ゆい「ここねちゃん。明日、マリちゃん達とお買い物に行かない? 絶対楽しいよ!」

ここね「... えっ?」

咲夜「皆で色々考えてよ。やっぱこれしか思いつかなくてさ...」

ゆい「あ、若しかして... 予定あった?」

ここね「いや...?」

ゆい「よかつたら皆で遊びに行こうよ! マリちゃんも行きたいお店があつてね。えっと確か、Pretty...」

「Holic」

ここね「行く」

咲夜「ん? 何だこれ。マニュアル本か?」

ここね「あ」

即答と共に自身が持っていたマニュアル本を咲夜に目を付けられたここねは、直ぐに何でも無い様にと隠した。

□
場面は変わり、ブンドル団アジト。

ゴードッツ『二人目のプリキュアが…?』

ジェントルー「はい。思わぬ事態に失態を晒してしまい、申し訳御座いません」

???「僕は別に問題ないよ。何せ、敵が増えたのと同じなんだから」
ジェントルー「!」

ゴードッツ『その通りだ。何人現れようと関係ない… お前もそう思うだろう? デイエンド』

不意に聞こえた低い声。ジェントルーは声が出た方向へ向けると、其処には咲夜と瓜二つの青年がシアンカラーの銃口を指で引っ掻き回していた。

唯一の違いとしては瞳の色は水色。長袖のTシャツの上にベージュカラーの半袖の上着。灰色のズボンを履いており、丸刈り頭が茶色に染色されている。

ジェントルー「お前は… デイケイド!？」

???「やだなあ、僕をデイケイド扱いするなんて。二人には僕が変身解除した姿をお披露目してなかったかな? その子と会うのも初めてだし」

ジェントルー「ゴードッツ様! 何故、デイケイドが我々のアジトに…!？」

ジェントルーはデイエンドが咲夜と瓜二つだということに混同の声を上げるが、ゴードッツは冷静に説く。

ゴードッツ『そういえばジェントルーは会ったことがなかったな。紹介しよう: 我々の計画に協力してくれている存在、デイエンドだ。』

デイケイドについての情報は彼から聞かせてもらった。彼の能力はデイケイドとは違い、ライダーを召喚する能力にある』

ジェントルー「ライダーを召喚する…？まさか！」

デイエンド「察した様で何よりだよ」

この時ジェントルーは察した。デイエンドと呼ばれる青年こそ、ソードとバルカンを召喚して戦わせ、デイケイドを窮地に追い詰めた張本人だという事を。

ゴードッツ『デイエンド、お前は今後ジェントルーと同行しろ。お前が果たすべき使命はデイケイドを窮地に追い遣る事のみ。今はその事だけに専念しろ。全ての料理を我が手中に…！』

ジェントルー「はっ！」

セクレトルー「承知致しました」

デイエンド「お気になさって光景だよゴードッツ。けど、僕はただ単に加盟した訳じゃない。その隙があればレシピポンを奪うのにも容易い…」

いつかは裏切る事を理解しながら口答えをするデイエンド。ゴードッツにとってはデイケイドを追い詰める事に期待の声を高めている。

ゴードッツ『…戯言を。その言葉を言った事、後悔するなよ？朗報を待っているぞ…』

ゴードッツの野望を果たすべく、やり遂げようとする三人を見届けながらゴードッツは姿を消した。

セクレトルー「ゴードッツ様はスープがお好きです」

デイエンド「スープ？この前はパンだったよね？」

ジェントルー「でしたら、メニューが豊富なスープ専門店があります」

セクレトルー「いいでしょう…。て言うか、いい加減成果を上げろっつーの」

デイエンド「まあまあ、そう言わずに。あんまり陰口言っていると、血圧悪くなるよ？」

セクレトルー「…お気遣い感謝致します。それでは参りましょう。」

「せーの！」

「ブンドル、ブンドルー！」

「デイエンド」

「セクレトルー」

「いや、僕もやんのかい!? ええつと」

「ブンドル」

「ジェントルー」

掛け声をやらなかった自分が自ら突っ込み、やる気の無い掛け声を
するデイエンドに顔を覆うジェントルー。セクレトルーにとっては
忠誠心が足りないと予測する。

「セクレトルー」声が小さ過ぎます。ってゆーか、本当にやる気あ
んのかつて。気を取り直して参りましょう。せーの！」

「ブンドル、ブンドルー！」

「デイエンド」つてか、毎回これやるのくっ!?

「デイエンドの本音がアジト内に響き渡る。彼がブンドル団側に就
いた理由が判明するのは、また別のお話。」

□

Sakuya side

翌日、俺達三人はPrettly Holicで丁度芙羽と合流を果
たす。

パムパム「お待たせパム〜！」

ローズマリー「あら、パムパムつたら。すっかりお世話になって悪いわね…。ここね」

ここね「…！」

ローズマリー「ん？あら。そのバッグ素敵ね！」

ここね「えっ？あ。マ…マ…マ…」

芙羽はローズマリーの渾名を口にしようとするが、まだ緊張感が解れていない状態だろう。まあ、無理せず徐々にやればいいんだから。ぼちぼち慣れてこうぜ。

ローズマリー「さ、立ってるのも何だし、入りましょう」

咲夜「そうだな」

改めて俺達はP r e t t y H o l i cの店内へ入る。

「わあ〜！」

驚きの声を上げるゆいとローズマリー。此処メイク用のショップだったのか。取り敢えず、商品を手当たり次第に見て行こう。

ローズマリー「可愛いのでんこ盛り！」

ゆい「何処から見る？」

ここね「ゆ…ゆ…ゆ…ゆいは、何か欲しい物あるの？」

ゆい「えっ!?」

ここね「あ…」

ゆい「ここねちゃん…。今。『ゆい』って呼んでくれたよね!?嬉しい！」

名前を呼ばれて喜ぶゆいに目に宙を泳がせる芙羽。そうか。あのマニュアル本はダチと仲良くなる方法が記載されていたのか。

ローズマリー「ねえ見て、これ素敵！」

ゆい「えっ？どれ〜？」

ローズマリー「ほら、これ」

ゆい「本当だ！何かマリちゃんに似合いそう〜！」

ローズマリー「いや〜ん」

芙羽はゆいとローズマリーの会話を見ながら静かに微笑む。

ゆい「いっぱいあるねー」

ローズマリー「何れがいいか迷う〜」

ここね「あつ！それなら、これは如何どう？薄いピンクならどんな服装も合うし、他の色と重ね塗りしても立体感が出て可愛いと思う。しっかり色付けたいなら、発色が良いこつちがお薦めすす。後は…。」

ゆい「へえ〜。でもそれ、いつ使うの？」

「「えっ（はい）？」」

ローズマリー「そう云えば、ゆいの部屋にはメイク道具が一切無かったような…。」

饒舌じょうぜつとなつて説明するも呆気を取られ、距離感の難しさを感じてしまふ笑羽。そうだった。あの食いバカの部屋には一つもメイク品が無かつたんだつた。

ゆい「うん。メイクには興味なかつたから」

ここね「ご、御免なさい。押し付ける様な事しちゃつて…。」

ゆい「ううん、お陰で興味出た。あたしこれ買う！」

ローズマリー「分かり易くて勉強になつたわ」

ここね「えっ、でも…。」

ゆい「二人は買わないの？」

ローズマリー「楽しみに取つて置くわ。何れも此れも可愛くて、一日じゃ選べないし」

咲夜「……。」

数分後、三人はベンチに居座り、俺はトイカメラで背景を写生しようとして相応しい風景を探るべく周囲を見渡す。

ゆい「天気も良いし、気持ち良いし」

腹の音が鳴り響く。正体は言うまでもない。

ゆい「ハラペコつた〜」

ローズマリー「如何どういう事!?あ、グミならあるわよ」

ゆい「あ、食べたい！んん〜、ジューシー！」

ローズマリー『フルーツパーラーKASAI』のハートフルグミよ。ここねにも」

ここね「有難う。いただきます…可愛い」
パムパム「食べてみたいパム！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「はい！」

グミは噛み答えがあるから好きなんだよな。グミの袋を差し出される芙羽はオレンジの形をしたグミを見つめていると、パムパムは膝に乗り、グミを試食してみたいと言う。勿論コメコメも食いたいそう
だ。二匹はグミを噛み締める。

パムパム「美味しいパム」

コメコメ「コメコメ」

気を取り直して俺はグミを取ろうとすると、誰かの腹の音が鳴る。

ゆい「うう…」

ローズマリー「今食べたでしょっ！」

ゆい「食べたらもつとハラペコった…」

ローズマリー「何処かでランチする？」

咲夜「いや待て、それじゃ料理が完成するのに時間が掛かる。ゆい
の家で何か作って食おうぜ」

ゆい「それなら、あたし野菜スープが食べたい気分！」

ローズマリー「良いわね。お肌に良さそう！」

パムパム「皆でお料理パム！」

コメコメ「コメ！」

ここね「料理…？」

ゆい「ん？若しかして野菜スープ苦手？」

ここね「あ、ううん。大好き」

咲夜「じゃあ決まりだな」

ゆい「じゃあ行こう！」

俺達は野菜スープの具材と素を買い、ゆいの家でスープの調理へと
移行する。

あきほ「また偉く買い込んできたね」

咲夜「ダチと料理しようと思って買ってきたんです」

ここね「お邪魔いたします。芙羽ここねです」

あきほ「いらっしやい」

芙羽を俺らのダチとして歓迎するあきほさん。

ローズマリー「じゃあ、私はコメコメのお世話係をするわ。ゆい、お部屋借りるわね」

ゆい「うん」

咲夜「んじゃ、俺達は調理に入りますか」

あきほさんの指示に従い、調理の前に手を洗うのは先決。その後は食材洗いへと移行し、皮剥きする食材の担当を決める。

ゆい「あたしジャガイモ担当！」

咲夜「目に毒があつたら取り除く様にな」

ゆい「分かってるって〜」

あきほ「そしたら、ここねちゃん是人参。咲夜君は玉葱たまねぎをお願い出来る？」

咲夜「分かりました」

ここね「はい…」

人参とピーラーを手に持つ芙羽。だが、如何扱どうえばいいのか困惑してしまふ。そういうや芙羽はお嬢様だったな。

あきほ「教えようか？」

ここね「… 濟みません。いつも専任のシェフがお料理をしているので、慣れていなくて…」

ゆい「専任のシェフ!?すごい！」

あきほ「そっか、謝る事ないよ。これはピーラーといって、こうやって使うの」

あきほさんは丁重に説明しながらピーラーで人参の皮を剥く。その様子に芙羽は目を輝かせる。

ここね「……………」

あきほ「やってみる？」

ここね「… はい！」

試しに人参の皮を剥いてみる芙羽は爽快感を覚える。

ここね「… 気持ちいい」

あきほ「上手！」

ゆい「楽しいよね！あたしだって、段ボール一杯に剥いちやった事があるよ！」

咲夜「は!？」

あきほ「人参祭りだったね。それから、ゆいは人参を生で齧る様になつたのよ」

突然の言葉が詰まる俺。

ゆい「えへへ。照れるなく」

あきほ「照れるどころじゃないよ」

笑い合う両者。いや、この時点で人間じゃねえだろ。これが『伝説の超おもしろい人』。：否。『伝説の超おもしろい人』一家か：。!?

□

??? side

らん「あーん。はふふ、うまところ野菜達が口の中で愉快にヒップホップ：いやブレイクダンス？いやジャズ？あつ、フォークダンスしてるよろ！」

「ニ「ピピ、ピピ、ピピ〜！ニ」

賑にぎわいを見せているスープ料理店にてドーナツの様な髪状の少女が野菜スープを口に含ませ独特な感想を述べながら堪能していると、上頭部に野菜スープ、コーンスープ、ビーフシチュー。そして頭上のホイップに苺とブルーベリーを乗せているロールケーキらしき姿のレシピッピの計四体が姿を現し、スープを堪能している客達を見守る様

に眺めている。

その様子を密かに眺める僕とジェントルー。味を楽しんでいるところだけど御免ね。嫌な気分になるけど、此処にいる君達には被害に遭ってもらおう。

ジェントルー「やはり人出の多い休日は、レシピッピの出現率が高いようだな」

デイエンド「ジェントルー。悪いけど今回は僕にやらせてもらえなかな？」

ジェントルー「何故だ？」

デイエンド「ほら。僕がまだ一回もレシピッピを捕まえた経験がないでしょ？だから少しは君達のやり方を一度でもいいから経験してみたいと思つて」

ジェントルー「…いいだろう。但し、今回だけだぞ？」

デイエンド「分かつてる」

対話を済ませ、僕はジェントルーから差し出された弁当箱が自動的に蓋が開く。

デイエンド「ブンブン、ドルドル、ブンドルー！」

「レシピッピ〜！」

僕は囚われの身にする呪文を呪詛の様に唱えると、ブラックホールの如くレシピッピを吸い寄せた最後に蓋を閉める。

御免よ、これも一つの計画の内だ。ドーナツの少女は呑気に再び掬ったスープを堪能しようと口に含ませると、さあ被害現場の完成だ。

らん「ほえ!?また味が変わった!?!」

スープ店を後に僕達はブンドル団アジトに帰還すべく、そのまま立ち去って行った。まだオーロラカーテンを使う訳には行かないからね。

それに、まだ僕は君と戦うつもりはない。それまでこの世界で十分に力を蓄えていてくれ――

アキノリ。

□
N o s i d e

ゆい「あ。ここねちゃん、人参が…！」

ここね「あ…剥きすぎ？」

ここねは爽快感の余り、人参の皮を剥きすぎてスティックの様な長さになってしまった。

あきほ「大丈夫大丈夫」

ここね「御免なさい…！」

ゆい「大丈夫！気にしないで。これはあたしが食べる！」
失敗してしまつたここねに穏やかな表情で接するあきほ。ス
ティック状となつた人参はゆいが食べる事となり、彼女が食べる様子
は兎にも見えた。

あきほ「あれ？ゆい、生姜しようがは？」

ゆい「えつ、無い？マリちゃんかごが籠かごに入れてた筈なんだけど…
夜君もその事で行つてゐるみたい」

ここね「あ、あ、聞いてきます！」

ゆい「あ、御免ね！」

そう言つてここねは二階へと上がり、ゆいとあきほは買い物袋にあ
る生姜しようがを探す事を優先したのだった。

□

Sakuya side

俺はゆいの部屋でローズマリー達三人に二人の様子を伺つていた。
パムパム「パムパムもここねとお料理したかつたパム」

ローズマリー「貴女、縫いぐるみのフリしなきやでしょ。それに私
と一緒にだ、ここねが嫌がるだろうし… 今日目も目を逸らされちゃつ
たし… 私の事苦手なのよ」

咲夜「んなこた言うなよローズマリー。きっとあいつは——」
その時、部屋のドアが開く。

咲夜「あ、ゆい。生姜しようがの件なんだが——！」

俺達は後ろを振り向くと、其処には立ち竦む芙羽の姿が。やっぱ立
ち聞きしてたのか。

ローズマリー「ここね…！」

咲夜「聞いてたのか…!?」

ここね「あ、あの…！」

ローズマリーの本音を弁明に言葉が詰まり掛けた芙羽のハート
キュアウオツチにアラーム音がレシピツピの危機を告げる。

ローズマリー「レシピツピが捕まつたんだわ！」

咲夜「スープ作りは後回しだ。野郎共、今直ぐ現場に急行だ！」
芙羽のハートキュアウオッチの液晶画面に映っていたのは、囚われた四体のレシピッピ。先程の三体よりも一体多い。スープ作りを後にし、俺はゆいに知らせるべく、一階へと向かった。

ゆい「こつちだよ。上！いた、ジェントルー！」

パムパム「待ってパム！誰か一人いるパム！」

ハートキュアウオッチのサーチ機能を頼りに、俺達はレシピッピが捕まっている現場へと急行すると、其処には屋根を駆け巡るジェントルーの姿が。だが、ジェントルーだけではない。先程バルカンとソードを召喚した正体であるライダーが並び立っていたのだ。

デイケイドと同じアンダースーツだが、ベースとなっているカラーはシアン。頭部に突き刺さっているプレートの数はず十枚。

シグナルは赤く二つ存在し、複眼の正面を見てみると蝶の様にも見える。更には黒いボディーマーはバーコードを強調したものとなり、左右に黄色いラインを挟み込む様な銀の縁取り。同じく両脚の大腿だいたいから下腿かたいまでは黄色の縁取りが加されている。

仮面ライダーデイエンド。昭和から令和までのライダーに変身出来るデイケイドに対し、デイエンドは主役ライダー以降のライダーを召喚し、戦況を大きく揺るがすライダー。

咲夜「…まさかお前がブンドル団に加盟していたとはな。何が目的だ？」

デイエンド「何って、お宝の為だよ」

ローズマリー「咲夜、あいつを知っているの？」

咲夜「ああ、仮面ライダーディエンド。俺と同じく仮面ライダーで、お宝の為ならば、どんな手段も選ばない謂わば怪盗そのものだ。こいつのカメンライドは俺と違ってカードに描かれたライダーを召喚出来る」

ローズマリー「ええっ!?それってつまり、この前の蠍さそりと狼のライダーは…!」

咲夜「奴が召喚したに過ぎない戦略の駒こまだ」

ディエンド「短簡たんかんな説明有難う。さて、やっとの事で御対面出来たんだ。加盟した記念に一つ、芸当を見せてあげよう。まあ、一回限りだけだね」

ローズマリー「それは…!」

ゆい「ジエントルーと同じ物!」

ディエンドが取り出したのはジエントルーが持っていた弁当箱。

ディエンド「出でよ、ウバウゾー!」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ローズマリー「デリシヤスフィールド!!」

放たれたブンドル団マークのエネルギーが泡立て器に宿るとウバウゾーへと変貌させ、ローズマリーは即座にデリシヤスフィールドを展開させる。

ゆい「行くよ、コメコメ!」

コメコメ「コメ!」

□

コメコメ「コメ!」

ゆい「プリキュア!デリシヤスタンバイ!パーティーゴー!にぎにぎ!」

コメコメ「コメコメ!」

ゆい「ハートを!」

コメコメ「コメコメ!」

ゆい「シエアリンエナジー!」

コメコメ「コメ〜!」

□ コメコメ「コメコメ！」
プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい
笑顔で満たしてあげる！」

□ パムパム「パム！」

ここね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！オー
ブン！」

パムパム「パムパム！！」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

パムパム「テイスティー！」

□ パムパム「パムパム！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー
！分け合う美味しき焼き付けるわ！」

□ 咲夜「変身！」

【カメンライド デイケイド！】

□ 【デイケイド！】

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語らい……始めようか!!」

□

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ウバウゾーは体を回転しながら地面を削り、此方へ向かって来る。ローズマリー「気を付けて！レシピツピを四匹も吸収して強くなってるわ」

プレシヤス「うん。スパイシー、一気に……えっ!？」

スパイシー「はあぁーッ!」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

スパイシー「っ!」

プレシヤスの忠告を無視してスパイシーは地面を蹴り、ウバウゾーに拳を振り下ろそうとする。だがウバウゾーの額から紫のエネルギー波が放たれ、直ぐに防御体制へ移行するも吹き飛ばされてしまう。いつもの感じならパン型のエネルギーを応用する攻防一体のバトルスタイルの筈だ。あの時、立ち聞きしてしまった事がまだ不安を抱いているのだろうか。

プレシヤス「スパイシー!」

吹き飛ばされたスパイシーを受け止めるプレシヤス。余りにも強い衝撃だったのか後方へと大きく退かせられる。

プレシヤス「大丈夫?」

スパイシー「……御免なさい」

プレシヤス「如何どうして謝るの?」

何も自分に謝罪する必要はないと問い掛けるプレシヤス。

デイケイド「兎に角、此処は俺が——っ!」

俺が戸惑っているスパイシーに代わってウバウゾーの相手をしようとして足を運ぶ直前に、銃弾が妨害する様に砂塵さじんを撒き散らす。その正体は当然——。

デイエンド「君の相手は僕だ」

デイケイド「お前だったらすう言うと思ってた。こっちも色々あったんでな」

デイエンドは俺にシアン色の銃『ネオデイエンドライバー』を向ける。こりや合流は出来なさそうだな。だったら――。

デイケイド「一つ聞くが、イリユージュョンの許可は？」

デイエンド「勿論OKだよ。飽く迄分身への妨害はしないつもりさ」

デイケイド「そうか。なら遠慮なく」

【アタックライド イリユージュョン！】

デイエンドの許可を得て、俺はイリユージュョンのカードを装填し、Bを実体化させる。

デイケイドA「スパイシーが困惑状態になっている。其方は頼んだ！」

デイケイドB「分かった！昨日みたいな無茶はするなよ!？」

デイケイドA「少しはな。けど、やれるところまでやってやる」

互いに頷き、Bは即座にプレシヤス達のところへ向かって行った。これでこの場にいるのは俺とデイエンドのみ。思う存分に暴れられる。

デイエンド「分身とも絆を深められて何よりだよ」

デイケイド「そりやどうも。さて、さっさとやろうぜ?」

互いに構え、俺はライドブツカーを剣モードにし剣先を撫でながらデイエンドに向かって行った――。

□

B side

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

プレシヤス「スパイシー!？」

俺が合流した時にはプレシヤス達はウバウゾーが雄叫びを上げた方へ向ける。

スパイシー「はあぁーっ！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

スパイシー「きゃあっ！」

【カメンライド ドライブ!】

スパイシーは無鉄砲に駆け出し飛び蹴りを放つが、ウバウゾーが回転させた頭部による攻撃により岩盤に直撃する直前に俺はライダーカードを走りながら装填する。

タイヤのエネルギーが囲む様に潜り抜けると同時に赤い軽装甲が纏われる。

スーパーカーを模した頭部。襷たすきの様に装着されている赤く縁取られているタイヤの横側にはメーカー名の如く『TYPE SPEED』と表記されている。脳細胞がトツプギアな警察官で仮面ライダー、ドライブへ俺は姿を変えた。

『スピ、スピ、スピード!』

デイクイドB「間に合え！」

俺は左手首に装着されているブレスレット『シフトブレス』に装填されている赤いスーパーカーを模したミニカー『シフトスピード』を三回倒してスピードを増加させ、間一髪でスパイシーを救出する。

プレシヤス「スパイシー！」

ローズマリー「もう、あの子ったら…！」

デイクイドB「プレシヤス、ローズマリー。一旦場所変えるぞ！」

【アタックライド マックスフレア!】

カードを装填し、タイプスピードのタイヤが炎を連想させるオレンジのタイヤ『マックスフレア』に変化させると、同じく変化したシフトブレスにあるオレンジのミニカー『シフトマックスフレア』を三回倒す。

『フレ、フレ、フレア!』

デイクイドB「これでも溶いてろ!フレアストリーム!!」

ウバウゾー「ウバツ!?ウババババツ!」

タイヤとなつたマックスフレアを蹴り出し、炎の竜巻でウバウゾーを牽制^{けんせい}。その間にオーロラカーテンを出現させ、駆け付けようとしたプレシヤスとローズマリーをも巻き込みながら潜り抜けた。

□

A SIDE

【アタックライド ブラスト!】

分裂させた銃身からはマゼンタとシアンのエネルギー弾が吐き出され、着弾と共に掻き消す。

デイエンド「少しはやるね。腕を上げた?」

デイケイドA「まあな。そんな事よりもアレは出さないのか?」

デイエンド「アレか。いいよ。ゴードッツに君を追い詰める様に言われてたんだ。再会のご挨拶と言つても過言じゃないからね」

デイケイドA「ゴードッツ?」

デイエンド「ブンドル団の首領みたいなものさ。さて、余り手加減は出来ない。僕を失望させる様な戦い方はしないでくれよ?」

デイエンドはカード装填機能『フォアエンド』をポンプアクションで下げ、ベルトの左腰にある黒いカードケースから鍬形^{くわがた}を模した赤い複眼のライダーが描かれたカードを装填し、再びフォアエンドを親指で突き出す。ディスプレイに表示されたのは嘗^{かつ}て超古代に存在した先住人類達を封印してきた戦士の証。

【カメンライド クウガー!】

デイエンドライダーの銃身『ブツカーマズル』から幻影が三原色として放たれ、それが重なり合うとライダーの姿として実体化する。鍬形^{くわがた}を模した頭部。複眼と鎧の色は同じく赤で、両手首と足首に付けられた金色の腕輪と足輪には赤い鉱石が埋め込まれており、腰に巻かれた古代のベルト『アークル』にも同じく赤い鉱石が炎の様な輝きを煌めかせる。

全ての笑顔を守る為に戦う平成ライダーの始まりの象徴 仮面ラ

イダークウガが召喚されると、今度は黄色いカードを取り出す。描かれていたのは左上にクウガ、右下には両翅ばねの付け根には緑の鉱石が埋め込まれている黒と金のメカニクルな外見のクワガタムシ。

「ファイナルフォームライド ク、ク、ク、クウガ！」

デイエンド「骨折させるね」

クウガ「ぐあっ!？」

通り抜けた黄色いエネルギー弾がクウガに装甲が追加され、頭部が収納されたと同時に変形を始める。足は鋏、両腕は後足。アークルの脇部分には前足らしき装甲が追加される。クウガは『馬の鎧』とも呼ばれたサポートメカ『ゴウラム』を模した姿『クウガゴウラム』へと変形を果たし、一度捕まれば簡単には逃げ出せない程の大顎を向けながら突進してくる。俺は身を転がしながら避け、クウガゴウラムに銃弾を放つ。

デイケイドA「クウガゴウラム…!?さては俺を捕まえた上でゴウラムごとぶっ放す気だな!？」

デイエンド「感付き方がいいね。それと、ゴウラムばかりを気にしているのかな？」

デイケイドA「!」

そう言いながら姿を消したデイエンドは奇襲を掛けてくる。しまった、確かデイエンドは高速移動が可能だった。不味いぞ、よりもよってクウガゴウラムとデイエンドは相性が良い。

俺が周囲を見渡していると、背後から羽音の様な雑音がした方へ振り返った直後に背後から迫って来たクウガゴウラムに合わせデイエンドは避け、俺も同じく強靱な顎をギリギリで避けつつ、カブトのライダーカードを装填する。

「カメンライド カブト！」

『CHANGE BEETLE』

カブトにカメンライドした俺は、クウガゴウラムの強襲を避けながらアタックライドのカードを取り出す。

「アタックライド クロックアップ！」

クロックアップを発動させながらクウガゴウラムの装甲を蹴りな

がら懐に入り込み、ファイナルアタックライドのカードを取り出す。
「ファイナルアタックライド カ、カ、カ、カ、カブト！」

デイケイドA「ライダーキック！」

『Rider Kick.』

周囲の時間が止まったに等しい世界で上段回し蹴りを放つ。蹴りを受けたクウガゴウラムは地面に転がりながら爆散し、消滅した。

デイエンド「中々やるね。だったら次はこれなんて如何かな？」

デイケイドA「こりや合流出来そうにもないな」

デイエンドが取り出したライダーカードを見て、デイケイドに戻った俺は愚痴を零した。

□

B SIDE

オーロラカーテンでデリシャスフィールド内の適当な場所へ移動する事が出来た俺達。だがスパイシーの表情は躊躇してる様にも見え
えた。

ローズマリー「何してるの？三人いるんだから力を合わせて…」

スパイシー「私がやらないと…！」

ローズマリー「待ちなさい。何をそんなに焦っているの!？」

デイケイドB「流石の俺も今のお前を見ると、心底不安を抱いてる様にも見える。訳を話してくれないか？」

俺は優しく問い掛ける。たった一人でウバウゾーに挑もうとしたスパイシーをローズマリーも同じく、肩を置きながら焦燥している理由を尋ねる。一瞬にして静寂の空気が流れていたが、その答えは直ぐに出た。

スパイシー「…嫌われたくない」

デイケイドB「…は？」

パムパム「パム？」

スパイシーの胸に当てた震える手に違和感を感じたクソ犬は脇から分離する。

スパイシー「折角お友達が出来たのに…楽しく話し掛ける方法も知らないし、勝手にリップ勧めちゃうし、お料理も出来ない上に、プリキュアまで…こんな私じゃ嫌われる…」

ローズマリー「それが心配で焦ってたのね」

パムパム「パム…」

クソ犬は本音を吐露したスパイシーに擦り寄る。

デイケイドB「…それでいいんだ」

スパイシー「えっ？」

パムパム「パム？」

デイケイドB「確かに俺達と出会う前のお前は孤独を謳歌おうかするだけのお嬢様だった。だが今はそうじゃないだろ？失敗しても成功しても共に戦う仲間を励まし、助け合う。そして一緒に進化していく…今のお前には俺達という仲間が居るだろ。偶には一人で抱え込まないで相談くらい乗ってみろ」

プレシヤス「そうだよ。だってあたし達、友達でしょ？」

ローズマリー「そうよ。失敗したくらいで嫌いになるわけないでしょ」

プレシヤス「うん！お料理苦手なものも可愛いと思うし、失敗してもそうやって頑張るのも尊敬しちゃう！」

パムパム「ミラクル優しくて、ハイパーおしゃれ女神さんのところもスパイシーの魅力パム！」

コメコメ「コメコメ」

スパイシー「…うん」

クソ犬言ってくれるな。皆の励ましもあって、スパイシーの蟠わたかまりは完全に解けた。

デイケイドB「良かった良かった。これで気を取り直して戦闘に励めるな」

プレシヤス「うん。それに、『失敗はすいとん』の元ってよく言うよね！」

スパイシー「すいとん？」

ローズマリー「すいとん？」

デイケイドB「Take This Salami…? って、違えわ!それを言うなら——」

ジェントルー「失敗は成功の元だ」

「二!」

訂正した声がした方へ向き直す俺達。其処にはジェントルーとウバウゾーの姿が。

ジェントルー「見つけたぞ」

プレシヤス「ああ。それぞれ!」

デイケイドB「呑気に言うとする場合か!」

ジェントルー「行け!」

ウバウゾー「ウバウゾー!ゾー!!」

頭部を回転しながら飛び掛かるウバウゾーを避ける俺達。

ローズマリー「自信を持ちなさい。貴女には貴女の持ち味があるじゃない?」

スパイシー「私には、私の…」

ローズマリーからの檄げきを受けたスパイシーはウバウゾーに向かって行く。

プレシヤス「スパイシー!」

ローズマリー「もう大丈夫」

ローズマリーはプレシヤスにスパイシーの持ち味を見届ける様に言う。今のスパイシーには迷いはないと信じて。

ウバウゾー「ウバウゾー!」

スパイシー「ピリツッ○サンドプレス!」

ウバウゾー「ウツ!?ウバウゾー!」

食パン型のエネルギーに挟まれたウバウゾーは抵抗しようとするが、迷いを振り切ったスパイシーの敵ではなかった。

スパイシー「絶対負けない…!レシピッピを助けて、皆で美味しい野菜スープを食べるんだから!」

スパイシーが食パン型のエネルギーからウバウゾーを解放させる。

スパイシー「ロック!」

今度は側面で挟みながら右手で地面に突き出すと、動作に合わせて

□

A s i d e

デイケイドA「動くなよ!?動くと痛いぞ!」

「ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイ、デイケイド!」

デイケイドA「デイメンションキック!だあああああああッ!!」

右脛すねと肘に召喚機を装着しているレイヨウを模した茶色の仮面ライダー、インペラーにカードのエネルギー擦り抜けながらの飛び蹴りを放つ。蹴り飛ばされたインペラーは力尽きたか様に消滅した。俺は疲弊ひへいに近い息を吐く。

デイケイドA「はあ…はあ…はあ…はあ…まさかお前が集団殺法を得意とするインペラーを召喚するとはな」

デイエンド「流石に百年も旅した君でもインペラーの様な戦法を取るライダーには少し骨が折れるか。まあ、いいや。これ以上やると体に負担が掛かるみたいだし、今回はこれぐらいにしておくよ」

デイケイドA「待て。ひよつとしてだが、お前は俺より先にこの世界に來たのか?だったら偶には情報を促してもおかしくはない筈はず…」

デイエンド「それは無理がある。さっき僕が使ったレシピツピ捕獲用の箱…如何やらゴードアツツが干渉してるみたいなんだ。まあ、これは飽く迄まで僕の推測だけだね。それじゃ、今日は時間がないから僕は此処でお暇なさせてもらおうよ。次も楽しませてもらう事を期待してるからね」

デイケイドA「おい!他にも聞きたい事が…行っちゃったか」

そう言つてデイエンドは出現させた銀色の幕 オーロラカーテンを潜り抜けながら去って行った。

□

Sakuya side

時刻は夕方になり、ゆいの家で芙羽がこっそり買っていたコスメのリップをローズマリーに贈呈する。ゆいによればずっと話し掛けたかったとの事だそう。

ここね「そのアクセ、凄く素敵だなんて思ってたけど中々言えなくて…」

ローズマリー「そういう事？やだ、私ったら勘違いしてたのね」

ここね「誤解させて御免なさい」

ローズマリー「謝らないで」

ここね「…可愛い」

ローズマリーからは芙羽にクッキングダムのグラスを贈呈する。

ゆい「あたし達とお揃いだ」

ローズマリー「お近付きの印よ。ここねの事、もっと知りたいわ」

ここね「有難う、私ももっと知りたい。そのリップもマ、マリちゃんに似合う色だなんて…」

咲夜「おい、褒められてるぜ？」

ローズマリー「やだ、何て可愛い事を！有難う。大切に使う」

ゆい「あ、そうだ！あたしもこれ付けてみよう」

ゆい「取り出したのは芙羽がローズマリーに贈呈した薄ピンクとは違い、マゼンタ色のリップだった。」

ここね「あ、ちゃんと鏡を見ないと…」

ゆい「鏡？」

ここね「貸して、私が塗ってあげる。先ずは輪郭に沿って口角から内側に…はい、出来た」

ローズマリー「あら素敵よ！」

ゆい「うわあ。魔法みたい……！」

パムパム「とつても可愛いパム〜！」

ゆい「えへへ〜」

ローズマリーから渡された手鏡を見て眩くゆい。コメコメは構ってほしいと自分の頭を撫で、人間の姿に化ける。

コメコメ「コメコメ〜！」

咲夜「ぶふおおっ!？」

俺は可愛さの余り吹き出し、赤子の姿になったコメコメはゆいに擦り寄る。

ここね「えっ?」

パムパム「コメコメは人間に化けられるパム」

ここね「可愛い……」

コメコメ「コメ〜！」

暫く経って、俺達は夕食に至る。

「「「いただきますー!」」」

ゆい「これからも宜しくね」

ここね「此方こそ」

咲夜「賑やかになりそうだな」

ローズマリー「あら可愛い!この野菜スープ、人参のスライスが入ってるのね!」

ここね「これって……!」

ゆい「ここねちゃんのスライスして出来た人参スライスだよ。型抜きしてトッピングしたの!」

咲夜「ピーラーで剥いた皮を使わないままだともつたいないからな」

芙羽は自分がスライスした人参を含めた具材を掬いながら口に運ぶ。

ここね「……美味しい」

あきほ「ここねちゃんが手伝ってくれたお陰だね」

ローズマリー「グツジョブよ。ここね!」

ゆい「お陰でご飯も進むよ！お母さん、おかわり！」

咲夜「俺もおかわり！」

あきほ「もう？」

ローズマリーがサムズアップをし、ゆいと俺は飯のおかわりを要求すると、辺りに笑い声が響き渡る。同じくスープを堪能していたクソ犬は芙羽がスライスした人参を堪能しており、頭を優しく撫でられると、嬉しさの余り尻尾を振る。

ここね「『失敗は成功の元』…」

ダチも料理も。時には悩み失敗を経験してこそ仲良く、美味くなるという事を学んだ芙羽の笑顔を俺は静かに見届けたのだった。

□

DIEND SIDE

???「まさか、デイケイドもこの世界に来てたなんてね…」

デイエンド「それは僕も同じ気持ちだよ」

僕はブンドル団のアジト内で飛び回る小さな影と話している。

???「それにしても、デイケイドはおいしーなタウンって言うところにいるんでしょう？少し様子を見て来た方がいいかしら？」

デイエンド「それでも構わないよ。僕はブンドル団を裏切るタイミングを図っている。その間に彼らを頼んだよ」

???「んふふふ。お任せ〜！デイケイド。貴方がどれだけ成長したか、あたしに見せなさい…」

丸い耳が特徴の一等身の蝙蝠こうもりは、デイケイドに会える喜びをアジト内にて笑い声を響き渡らせた。

□

デイケイドB「今日はクリームソーダ！俺とCheers!...一度言ってみたかったんだよな。これ」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩きキバーラ「あたしはキバツト族のキバーラ」

ここね「助ける！同じ釜のご飯を食べた友達だから！」

咲夜「やるなら今回だけでぞ！」

第六品：学校！怪物！大パニック!?狙われたエビフライ！／敵か味方か!?破壊者の天敵、キバーラ！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第六品：学校！怪物！大パニック!? 狙われたエビフラ
イ！／敵か味方か!? 破壊者の天敵、キバーラ！

□

No side

ゆい「ここねちゃん、ちゃんと見えてる？」

ここね「うん」

ゆいのハートキュアウォッチのテレビ電話機能を通じてのリモートで昼食であるロールパンサンドを作っており、ゆいはハートキュアウォッチの液晶画面に載っている料理法を教えながらの手本として手回し式の水切り器に入っているレタスの水を切るべく、グリップを回す。

ゆい「えーつと… 最初に野菜を洗って、これで水を切る」

ここね「成る程… こう？」

パムパム「ちよっ!? ひよいひよい言ってるパム！パムウ!?」

だが、余りにも張り切る勢いでパムパムを巻き添えに回しすぎたレタスを飛び散らす。

ゆい「えっ!? ここねちゃん、大丈夫!?」

ここね「大丈夫」

パムパム「こっちは大丈夫じゃないパム」

心配するゆいに即答するここねだが、巻き添えを食らったパムパムは苦情の表情で述べる。

ゆい「そして、ロールパンに切れ目を入れて… 後は好きな物を挟

めばオツケー！あたしはやっぱりハムかな」

ここね「私も… ハム好き」

パムパム「パムッ!?」

ゆいの意見が一致したここねが取り出した巨大な骨付きのハムにパムパムは驚愕する。

ゆい「何それ!？」

ここね「… ハム」

ゆい「すつごーい！」

華麗にスライスさせたハムを皿に乗せる。

ゆい「よおくし、完成だ。マリちゃん、コメコメ何してる？」

弁当作りに勤しむ中、ゆいと連絡を取っているローズマリーは困惑の表情をしている。

ローズマリー「……………」

ゆい「ん？マリちゃん…？」

ローズマリー「説明がとても難しいわ。私に恨みでもあるの…!?」

コメコメ「コメコメコメコメコメコメコメ……………」

床に左右に転がるコメコメをローズマリーが縄跳びの様に避ける謎めいた遊びをしていたのだ。

パムパム「沢山作ったパム」

ここね「…あつ、遅刻！パムパム、お留守番お願いね！」

パムパム「それ全部持つて行くパム!？」

一方、レタスが散らかっているキッチンで弁当を完成させた達成感を感じるここね。ハートキュアウオッチで登校時刻が過ぎてる事に感付くと、パムパムに留守番を頼みながらロールパンサンドが入っているバスケットを持ちながら登校の準備に取り掛かった。

轟「お早う御座います。お嬢様」

ここね「お早う」

いつなく明るい笑顔を見せる様になったここねを見て微笑む執事の轟は、静かに笑みを見せながら送迎車である高級車を走らせた。

パムパム「パム……………」

ここねが乗っている高級車を見届けたパムパムは心配そうに呟いた。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何

を噛み締める？

イメーじOP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Sakuya side

学校内にチャイムが木霊こだまし、昼食の時間帯となった俺達はベンチでここねがバスケットからゆいとゆいの昼食作りで自作のロールパンサンドを三段重ねで計六十個も作って来た事にゆいは驚く。

俺も驚いたが、これは俺の腹には入らないぞ。あ、因みに此間俺達で作った野菜スープを食ってる最中にここねの事も名前で呼ぶ事にした。

ゆい「えっ？ええっ？えええっ!? 沢山作ったね…。」

咲夜「いや、これ全部俺の腹に入らないだろ」

ここね「大丈夫。二人の分も作ったの」

咲夜「いいのか？食っても…。」

ここね「うん」

ゆい「いいの？嬉しい！有難う。いっただつきまゝす！あくん。んん！デリシヤスマイル!!」

咲夜「いただきます…うん。美味しい」

ここね「…あ。後、これも」

ここねはサプライズとして水色の布に包まれた物を見せる。

ゆい「うわあ…メロン？ハムが乗ってる」

ここね「生ハムメロン」

咲夜「生ハムメロン…？」

ゆい「テレビで見た事あったけど、食べるのは初めて！」

咲夜「取り敢えず食ってみないと分からないな…ん!?美味しい！こ

こね、これ美味しいぞ！」

ゆい「ホント!?あくん。美味しい！デリシヤスマイル〜!!」

首を傾げながら試食してみた結果、味は何となく美味かった。俺に続き食ったゆいも生ハムメロンを食う。そんな俺達を見てここねは笑顔を見せる。やっぱ『飯は笑顔』ってのはこういう事か。

ゆい「生ハムとメロンが合うのって凄いよね」

ここね「うん」

ゆい「こんなに美味しいなんて知らなかったら、食べようと思わないもんね！」

その時、音がした方へと向くと、俺達と同じクラスメイトの男子三名の一人がエビフライを食べ歩きしていた。

男子生徒A「へへーん。俺二本ゲット！」

男子生徒B「俺四本〜」

男子生徒C「待ち切れずにエビフライを食べるぞ〜。あむっ」

男子生徒B「歩きながら食べるなよ」

男子生徒C「んん〜！」

ゆい「うわあ。今週の食堂のお惣菜そうざい、エビフライかあ〜」

「「ん〜。」」

ゆい「美味しそう〜！」

その様子を見てゆいは目移りする。

男子生徒B「あれ？エースじゃん。何で芙羽様と一緒にいんだよ？」

咲夜「えっ？あ、いや、それは、その…色々あってな。それより、エビフライの尻尾食わないんだったら俺にくれよ」

男子生徒C「ダメダメ。一度手を付けた物は自分の物だって決めるから」

男子生徒A「そんなにエビフライの尻尾食いたきや食堂行けよ。早く行かないと売り切れるぞ」

ゆい「ええくっ!」

咲夜「ああ。それなら今行く途中だ」

男子生徒B「和実とエースは兎も角、芙羽様はエビフライ食べねよ」

男子生徒A「そっかー」

男子生徒C「そうだよ。エビのソテーとかだろ」

男子生徒A「お前ソテーの意味知ってんのかよ?」

そう言いながら去って行く男子生徒達の発言で表情が曇るここね。俺だつたら別に食えるか食えないかは関係ないんだけどな。

咲夜「まだお嬢様扱いされてる様だが気にするな」

ゆい「エビフライ食べるよね?」

ここね「…うん」

□

P a m P a m s i d e

チャイムが鳴ってから放課後、ここねが掃除当番でゴミ捨てに行くうとした時、他の女子生徒がじゃんけんで負けた方がゴミ出しに行くと言い出した故に、どっちつかずのまま行っちゃったパム。ここね寂しそうパム。

女子生徒A「ええっ!何それ!」

パムパム「パム!」

パムパムは後を付けてみると女子生徒二人に見つかりそうになり、ドアの隙間を潜り抜けると、丸い耳を持つコウモリがこつちを見ていたパム。

???「貴女がデイケイドの知り合いの仔犬ちゃん?まあ、あの青い狼よりはマシと言ってもいいわね」

パムパム「咲夜の事を知ってるなんて変なコウモリパム…一体何者パム!」

??? 「変なあ？失礼な！あたしはキバット族のキバーラ…クソ犬ちゃん。貴女、デイケイドが如何いう存在か知りたくない？」

パムパム「そんなの知る必要ないパム！」

何でパムパムが咲夜に言われてる渾名を知ってるパム…!?パムパムはキバーラと呼ばれるコウモリの言葉を否定しようとも次に告げた言葉が衝撃を受ける事になったパム。

キバーラ「んふふふふ。随分と威勢がいいのね…せつかくだからこの世界に来た土産として教えてあげる。デイケイドは、この世界を破壊する存在よ。んふふふふふ…アツハハハハハハハハハハ！」

パムパム「待つパム！それは一体如何いう事パム!?」

女子生徒B「今笑い声聞こえてなかった!?」

パムパム「パムツ!」

女子生徒A「まさか。気のせいでしょ？」

窓際から飛び去って行くキバーラを追おうとした直前、家庭科室に覗きに来た女子生徒二人に目撃されかけ、パムパムが入ったのが偶然に家庭科室だったから薬缶の中に入ったパム。

パムパム「パム…」

咲夜が世界を破壊する存在だなんて…そんなの何かの間違いパム。パムパムは涙を堪えながら薬缶やかんの中で女子生徒達が立ち去るのを只管待ひたすらつ事にしたパム。

□

Sakuya side

俺とゆいが待ち合わせている途中で掃除が終わったところねは頷くが、学校内の何処かで悲鳴が上がる。

咲夜「如何したお前ら!」

女子生徒A「家庭科室に…！薬缶の怪物がく!!」

そう言っって女子生徒二人は廊下を走り去って行った。

ゆい「ブンドル団…？」

ここね「でも、ウオッチは鳴ってない…。」

咲夜「大袈裟だなあ。都市伝説とか信じてるからそうなるのやら…。俺には全く理解出来ないよ」

ゆい「家庭科室…？」

咲夜「兎に角、中に入ってみようぜ」

俺達は家庭科室に入って探してみることにした。結果としては薬缶の怪物どころか薬缶すら見当たらなかったが、俺は薬缶を見つけたも二人には黙っておこう。

パムパム「怪物じゃないパム…。」

咲夜「クソ犬？如何して薬缶の中に入ってるんだ？まさか、薬缶の怪物って…！」

パムパム「…。咲夜。話したい事があるパム」

□

DIEND SIDE

セクレトル「パンにスープに…。悉くプリキュアとデイケイドが現れ、邪魔を…。困ったものですね」

ジエントルー「…。」

デイエンド「デイケイドも徐々に強くなってきている。正に茨の道だね」

セクレトルー「ええ。まるでエビフライの尻尾の破片が下に刺さった様な感じでしょうか？」

「え…？」

おぼさんの例え発言で動揺する僕達。

セクレトルー「ゴータツツ様はエビフライをソースで尻尾まで召し上がりになるそうです…っというか、私はタルタルソース派」

僕は普通に醤油ソース派かな？

ジェントルー「はっ、承知しました！ではエビフライのレシピッピを…」

セクレトルー「何か策はあるのですか？っというか、当然あるよな…？」

いやあるって！あまり急かさないで!?!僕は内心ではこうだけど、ジェントルーは冷静な態度で策を案じていた模様。

ジェントルー「はっ！プリキュアとディケイドの邪魔が入らぬ様、今までとは違う場所でレシピッピを奪って見せます」

ディエンド「随分と余裕だね。それじゃ、今日もやっちゃいますか」
セクレトルー「せーの…！」

「「ブンドルー！ブンドルー！」」

マジでこの組織裏切りたい…。

□

薬缶の怪物が出てから一日が経ち、新鮮中全体に怪物の噂が流れ始めており、俺達二年三組でもその噂が流れ出ていた。

りさ「いるわけないじゃん怪物なんて」

えな「うんうん。そうだよ」

薬缶の怪物はいる筈がないと言っているのはクラスメイトの高田りさと長瀬えな。この二人は同じクラスメイトでもある遠藤いろはと仲が良く、掃除の時はゴミ出しじゃんけんをしていると聞く。

らん「怪物もやっぱり美味しいご飯が好きなのかな…？」

いやそういう意味じゃないぞ華満。テメエはどれだけ食いバカと並びそうな雰囲気漂わせてんだよ。

担当教師「静かに！授業中です！」

担当教師の一喝で俺達クラスメイトは一斉に黙り込む。窓際を見ていると其処にはクソ犬が心配で二の三の様子を眺めていた。そういや、放課後にクソ犬が家庭科室で言ってたな。変なコウモリがいたって。まさかアイツもこの世界に来ているのか…!?

パムパム「大変な事になったパム…」

何もお前のせいでもないぞ。俺は心の中でクソ犬を慰めていると、スピーカーから生徒会からの速報が告げられる。

???『全校生徒の皆さん。昨日から我が校に「怪物が出た！」などという噂が出ました。其処で先生方の了承の元、本日昼休み、我々生徒会で校内をパトロールする事にしました』

やな予感しかしないぞ…あの生徒会長の正体がジェントルーの可能性は大だ。声で分かるもん。チャイムが鳴り、俺達は昼休みに二十分間待機する事となった。

クラスメイトA「生徒会が見回ってくれるなら安心だよな？」

クラスメイトB「でも昼休みに二十分教室にいなきやダメなんだろう？エビフライなくなる…」

クラスメイトC「あんな。パトロールの間、全校生徒教室にいるんだぞ？誰がエビフライ取るんだよ？」

俺達三人は頷き、例え嘘でも行かなきゃならない。

ゆい「ちよつとトイレ！」

「えっ?」

ここね「私も」

咲夜「俺も便所」

「「えええっ!?!」」

俺の言ってることは本当で直ぐに便所に行つてゆい達と合流する。

咲夜「ああ、さぱつとした。やっぱ緊張すると直ぐに行つちやうんだよな。行つといてよかった」

ゆい「例え怪物がブンドル団と同じだったとしても、そうじゃなかつたとしても、同じ浜のご飯を食べた皆を不安にさせるなんて…許せない!」

咲夜「は?」

ここね「『同じ浜』?」

ゆい「お婆ちゃんが言つてた。『同じ浜のご飯を食べた人とはずつと友達』だつて!」

ここね「『釜』ね」

ゆいの語録を誤字訂正するここね。

ゆい「えっ? 同じ『釜』? 『浜』じゃなくて!?!」

ここね「それじゃシーフード限定になるから」

ゆい「そっか! 『同じ釜のご飯』か!」

咲夜「いや其処で納得すんのか?! つてかお前絶対 諺 苦手だろ?! 前のスープの一件といい何たる破廉恥なものやら…」

ゆい「でも、同じ学校で一緒にご飯食べてるから、あたし達もクラスの皆様も友達だよ!」

咲夜「兎に角、後で諺 補習させてやるから頭に入れとけよ? 先ずは怪物の正体を突き止めるのが先決だ」

あれから数分学校内を探索していると、ハートキュアウオッチのアラーム音が鳴り響く。今回捕まったレシピツピはエビフライのようだ。

デイエンド「案外上手く行つたね」

ジエントルー「ああ。思った通り邪魔も入らず、楽な仕事だったな」
新鮮中のグラウンドでジエントルーとディエンドと遭遇する俺達。

ジエントルー「お前達、まさかこの学校の…… 何という偶然」

ゆい「レシピツピを返して！」

ディエンド「悪いけど僕を命令していいのは僕自身だ。誰も命令にも従うつもりはない」

レシピツピを返す様にゆいは強く言うが、相手側は簡単に渡すわけがないだろう。

ジエントルー「出でよ、ウバウゾー！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ブンドル団のマークを押印された水切り機はウバウゾーと化した。

ディエンド「今回はこれで行こうか？」

【カメンライド イクサ！】

【カメンライド グリス！】

ディエンド「エビフライを尻尾まで完食出来るかな？」

『フィ・スト・オン』

『ロボット・イイイイン・グリスウ！ブルア!!』

ゼロディエンドライダーから放たれた三原色がライダーの姿を形作る。聖職者の法衣をイメージした白い装甲。頭部には十字架を連想とさせる金色の複眼。運命を待つ白い戦士 仮面ライダーイクサ。だが本来のイクサは赤い複眼が存在し、この姿はパワーを抑制しているに過ぎない。イクサ セーブモード…… この姿をセーブイクサと称したところか。もう一人は金色の装甲にゼリー飲料の飲み口を象る焦げ茶色の頭部を持つライダー。両肩の四角い装甲にはロボットのアームが描かれ、パイルバンカーの様な突起と二つのスロットを持ち合わせる武器『ツインブレイカー』を左手に持つ。心火を燃やしてぶっ潰すライダー 仮面ライダーグリス。

不味いぞ。セーブイクサのスペックは量産型並みだが、グリスの方は中間フォーム並みのスペックを誇る。奴もレベルを上げて来たな。此処は中間フォームで粘りたいところだが、生憎今はその時じゃない。デリシヤスフィールド以外で戦いたくはなかったが、止むを得な

い。俺はゼロデイケイドライバーを取り出そうとするが……。

咲夜「あれ？あれ？おつかしいな。直ぐに取り出せる筈なんだけど。ん？待てよ。まさか……！」

ゆい「如何したの咲夜君!？」

咲夜「……ゼロデイケイドライバー、俺の部屋に置いて来た！」

ゆい「ええっ!？」

ここね「それじゃあ、変身出来ないって事？」

二人の問い掛けに俺は頷く。

咲夜「： そうなるな。何方にしろ生身の状態で数十トンのパンチや蹴りを喰らったら致命傷どころじゃ済まされない。最悪だと死に至る可能性だつてある」

ここね「それじゃあ、今は戦わない方が……！」

「「ええーっ!？」」

突然な状況に驚きの声を上げていたのは高田、長瀬、遠藤のゴミ出し三人組。

りさ「か、怪物!？」

いろは「本当にいた！」

えな「せ、先生呼びに行こう！」

「うん!」

デイエンド「君達には悪いけど僕達の……」

ジェントルー「邪魔をするな」

「……」

ゴミ出し三人組は教師を呼ぼうとグラウンドを後にしようとするが、ジェントルーが放った黒いエネルギー波とデイエンドの銃から吐き出された銃弾に阻まれ何とか物置に逃げ込むが引き戸が凹んでしまい、閉じ込められる。

ジェントルー「行くぞ。ウバウゾー」

ウバウゾー「ウバウゾー」

デイエンド「それじゃ、僕は先に失礼させてもらうよ。後は宜しく」
デイエンドはオーロラカーテンを潜りながら去って行くと、セーブイクサとグリスは俺に襲い掛かってくる。

咲夜「クソツッ！如何やらやるしかないみたいだ… ゆいはブンドル団の足止めを。ここねはゴミ出し三人組の救出を頼んだ」

ここね「うん」

ゆい「分かった！マリちゃん。ブンドル団が出たよ！後、咲夜君がゼロデイケイドライバー置き忘れたから持って来て！」

ローズマリー『何ですって〜!?!』

ローズマリーとの連絡を取り終え、俺はセーブイクサとグリスの二体と応戦し、ゆいは果敢にサッカーボールを蹴り、ウバウゾーを向き直させる。

ウバウゾー「ウバ〜?」

ゆい「レシピツピを返して。じゃないと…」

ジェントルー「そんな球^{もの}で我々が怯むとでも?」

ゆい「くっ…!」

敵であるジェントルーに言葉が詰まられるゆい。一方、俺達が気を引いている間にここねは鉄パイプを使ってゴミ出し三人組の救出を行っていた。

ここね「大丈夫。今助ける！」

えな「えっ、芙羽様?」

ここね「大丈夫だから落ち着いて！」

りさ「助けて！」

ここね「助ける。同じ釜のご飯を食べた… 『友達』だからっ!! 絶対に助ける！」

咲夜「ぐっ！」

グリスは救出するここねを阻もうとツインブレイカーの銃口を向ける。

咲夜「させるかッ!!」

そうも行かず、俺はグリスに突進をかまして吐き出したビームの軌道をずらす、瞬時にセーブイクサの突き出した右拳が腹部に直撃し、そのまま殴り飛ばされる。ゆいは生身ながらもサッカーボールを駆使しながらブンドル団の足止めに尽力^{しんりよく}するが、ウバウゾーの風圧を受けて弾き飛ばされたサッカーボールはボールに直撃すると強い

衝撃を受けた風船の如く破裂してしまおう。

ウバウゾー「ウバウゾー」

ゆい「マリちゃん早く……！」

咲夜「飛び道具無くして蹴る手無しか……クソツタレ！ローズマリー早く来やがれ！」

ここねの方は物置がいい感じに凹む。

ここね「もう少し……！お願い。皆も中から戸を押しして！一緒に開けよう！」

ゴミ出し三人組の圧力とここねのパイプが引き戸を更に押し込む。

ここね「ぐぬぬ……！」

「「うおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！！」」

ここね「はあああああああッ！！」

三人が脱出したと同時に凹凸おうちつとなった引き戸はガシャンと音を立てながら倒れ伏す。

りさ「うわあああああんっ！！」

ここね「もう大丈夫」

いろは「怪物は？」

ここね「あっちに行つたみたい。今の内に逃げて」

えな「芙羽様は？」

ここね「怪物がまた襲つて来ないか見てくる。早く逃げて！」

「「う、うん……！」」

了承を得てゴミ出し三人組はグラウンドを後にした。ゆいはウバウゾーとの距離を取り、俺はセイブイクサの右腕に持つナックルダスターの様な形状をしている武器『イクサナックル』による打撃を間一髪で避け、左手で右肩装甲を抑えながらカウンターの右拳を下顎に打ち込む。

咲夜「つてえく！ちよつと鈍なまりすぎたかな？」

距離を取るも逆に距離を詰めて来たグリスがツインブレイカーの突起を突き出す。これは仰向けになりながら避けて足を滑らせ、セイブイクサから分捕ったイクサナックルをグリスの鳩尾みそおちに打ち込んで高圧電流を流入させ、一時的だが怯ませる。

ウバウゾー「ウバウゾ〜」

ゆい「ううっ…！」

ここね「ゆい！」

咲夜「こつちも合流出来た！まあ、倒せてはいないがな」

ローズマリー「お待たせ！」

咲夜「やつと来たかローズマリー。こつちは待ちくたびれたぞ！」

ローズマリー「待たせて御免なさいね。保護者カード見せて何とか学校に入れてもらったわ。『ゆいがお弁当忘れた』って言ってる」

何とか合流する事が出来た俺達。丁度良いタイミングでローズマリーも学校に到着し、その弁当の包みには弁当に偽装していたクソ犬とコメコメが入っていた。

ウバウゾー「ウバウゾ〜！」

ウバウゾーとグリス達は戦闘の構えに入る。少しは待つ事を覚えるよ。

ローズマリー「ああ…：ちよつと待つて。デリシヤスフィールド！」

当然被害を出す訳には行かず、ローズマリーはデリシヤスフィールドを展開する。

咲夜「つしやあ。これで思う存分に戦える！」

ゆい「行くよ、コメコメ！」

コメコメ「コメ！」

□

コメコメ「コメ！」

ゆい「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

□ コメコメ「コメコメ！」
プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい
笑顔で満たしてあげる！」

□ パムパム「パム！」

ここね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！オー
ブン！」

パムパム「パムパム！！」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

パムパム「テイスティー！」

□ パムパム「パムパム！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー
！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

□ 咲夜「ローズマリー！ゼロデイケイドライバーだ！」
ローズマリー「ああ。それなんだけど…下手に弄ると大変だから
持って行かなかったわ」

咲夜「何だよそのめんどくさそうな理由!?!別に危険じゃないから
持って来りゃよかったろ！クソ…俺は指を啜えて見るしかないの
か…!?!」

??? 「だったら、あたしが貴方に力を貸してあげてもいいわよ?」

小悪魔が囁く様に丸い耳を持つ蝙蝠は俺に自分を要求してくる。

ローズマリー「貴女ね。パムパムが会ったコウモリというのは!」

??? 「あら。クソ犬ちゃんから聞いてたの? だったら話は早いわ」

咲夜「: キバーラ! いつの間にデリシヤスフィールドの中に入ったのか: : !?」

キバーラ「久し振りね、ディケイド。あまり見ない内に遅くなったものね。もう一度言うけど、あたしが貴方に力を貸してあげる。それは貴方が変身出来ない状況に陥った時の事を言つてのことよ。但し、その代償として貴方のライフエナジーを少し削る事になるけど、殺されたくなければ今しかないわ」

セーブイクサとグリスはゆっくり此方へ向かって来る。今更迷つてる暇はない。

咲夜「暫く見ない内に随分と流暢りゆうちやうに喋る様になったな。分かった乗ってやるよ: : お前の囁きに。それと一つ勘違いしてないか?」

キバーラ「何が?」

咲夜「力は借りたり与えたりするものじゃない。誰かが言っていた: : 『人の力も汁も合わせるのが味噌』ってな。他人の実力や力を奪う様な言い方は俺に取っては氣に入らない。だから合わせる、それだけの事だ」

キバーラ「ふうん: : 貴方も結構成長したのね。いいわ。その言葉、信じてあげる。行くわよ」

俺の言葉を納得した様にキバーラは俺に変身する様に促す。

咲夜「ああ。やるなら今回だけでぞ!」

□

「変身」

俺は摘んだキバーラを向けながら言う。キバーラからハートの超音波から紙吹雪の様に舞い散る無数のハートに包まれる。波紋が波打ち形成した鎧へと変化させ、グラスの様に飛び散る。その鎧はキバ

に似ているが女性寄りとなっており、手には劍戟けんげき様の片刃の劍を持っている。

□

パムパム「パムツ!」

プレシヤス「ええっ!? 咲夜君が別のライダーになっちゃった…

!」

スパイシー「でもあのライダー、何となくだけどキバに似ている…

!」

俺とキバーラが変身した姿にプレシヤス達は驚きの声を上げる。

???「やっぱこの姿は変わらないか。性別反転でキバっぽくなると思

ったんだけどな」

ジエントルー「何だ? その姿は…!」

キバーラ『これがキバーラの真の姿よ』

???「名乗りたくはなかったが、ここは俺の誇りに懸けてやる!」

「全てを見通し、全てを貫く! 仮面ライダーキバーラ!! 貴女お前の野望、

止めてあげるわ!」

俺は両刃の劍 キバーラサーベルを逆手で持ちながらグリスとセーブイクサに向かって行った。

□

No side

ウバウゾー「ウバウゾー! ウー!」

プレシヤス「うわあああああつ!」

スパイシー「きゃあああああつ!」

ウバウゾーの回転水流攻撃を避けるプレシヤス達だが、両腕を頭上に上げる事で閉じ込め、そのまま岩盤に吹き飛ばされる。

ローズマリー「プレシヤス! スパイシー! 大丈夫!」

プレシヤス「大丈夫…」

ウバウゾー「ウバウゾー」

ローズマリー「気を付けて。さつきよりパワーを溜めてるわ！」
応答するプレシヤスにアドバイスするローズマリー。

ウバウゾー「バー!!」

プレシヤス「はあああああつ!!」

ウバウゾー「バー!!」

プレシヤス「うわあああああつ!!」

ローズマリー「プレシヤス!」

再び水流攻撃を放つウバウゾーの猛攻をパン型のエネルギーで防いでいる隙にプレシヤスは飛び蹴りを放とうとする。両腕を向けられ再び渦に巻き込まれたプレシヤス。さつきより渦の威力が増している。

ローズマリー「不味いわね。今度吹っ飛ばされたら流石のプレシヤスでも…!!」

プレシヤス「うわあつ!!」

スパイシー「ッ!」

ローズマリー「何やってるの!?それじゃ貴女も…!!」

渦に翻弄されるプレシヤスにスパイシーは渦の中に飛び込み、渦の回転に合わせて旋回する。

スパイシー「回転の中心にいれば吹き飛ばされない。プレシヤス!」

プレシヤス「スパイシー!」

スパイシー「この回転を利用するの!」

プレシヤス「オツケー。あたしを投げて!」

スパイシー「はあああああつ!!」

手を取り合い救出したプレシヤスをスパイシーは渦の回転を逆利用させる事でプレシヤスの技の威力を増大させる。

プレシヤス「500キロカロリーパンチ!!」

ウバウゾーを地面に強く叩きつけたプレシヤスは、スパイシーにトドメの一撃を放つ隙を与える。

プレシヤス「スパイシー、今だよ!」

スパイシー「プリキュア！スパイシーサークル!!」

スパイシーは両手で正円を描き、螺旋状のビームでウバウゾーを浄化する。

ウバウゾー「お腹いっぱい！」

「ご馳走様でした！」

レシピツピ「ピピくツ！」

キバーラ「喰らえ、ソニックスタップ!!」

同時にエビフライのレシピツピは解放され、同時にキバーラはキバーラサーベルの柄でグリスの右側の首を押し、よろめいている隙に斬撃を喰らわせ、更にはセーブイクサにも同じく右側の首を柄で押し、よろめかせ、前蹴りで大きく蹴り飛ばす。その隙に紫の粒子を翼の様に展開させ、逆手で持ったキバーラサーベルでセーブイクサとグリスを切り裂く。

キバーラ（咲夜）「チェックメイト！」

パチンと指を鳴らすとセーブイクサとグリスは消滅する。

スパイシー「おかえり」

キバーラ（咲夜）「ああ、疲れた。けど、まさかキバーラサーベルの柄で笑いのツボを使えるとは思ひもなかったしな」

キバーラ『まあね。貴方と同じデイケイドも、よくこの技を喰らったそうよ？今度あたしも一人で仮面ライダーになれたらやってみようかしら...』

キバーラ（咲夜）「いや、笑い転けて窒息死したら嫌だから遠慮してく」

キバーラ『あらそう？結構いいのにな』

ジェントルー「くっ、又しても...！」

六度目の失敗にジェントルーは姿を消した。

□

Sakuya side

パムパム「御免なさいパム」

ここね「怪物の正体はパムパムだったの？」

パムパム「ここねの様子に心配で学校に来ちゃったパム。それで家

庭科室の薬缶やかんの中に隠れてたら、凄い音がしてびっくりしたパム……」
咲夜「それで今に至ったって感じた」

パムパム「パム……」

クソ犬の言葉を理解する俺は前にクソ犬がここねに会いたくて来た時の事を振り返る。

ゆい「生ハムメロンと同じだね。食べなきゃあんなに美味しいって知らなかったし」

ここね「うん。正体を知れば怖くない」

ゆい「だね！」

ここね「心配してくれた有難う。パムパム」

パムパム「パム……ここね〜！」

こうして家庭科室の怪物騒動の噂は短い間で終わりを告げた。

□

物置からの救出劇を得て、ゴミ捨て三人組は高嶺たかねの花扱いを辞めて、ここねをゴミ捨てじゃんけんに加えてもらい、ゆいと俺意外の同級生達と『芙羽様』扱いから大分距離が縮まったようだ。よかったよかった。

ゆい「怪物の噂も消えてよかったね」

ここね「……」

咲夜「如何かしたかここね？何気に静かだぞ」

ここね「ちよつと気になる事があつて……」

咲夜「気になる事……？」

ここね「これ」

怪物の噂がしなくなった事に安堵あんどするゆいだが、ここねは何故か深刻な表情をしている。ハートキュアウオッチの液晶画面を見てみると、インスタならぬキュアスタにて鳴戸なるどアイコンが特徴の『ちゆるりん』というアカウントが投稿している画像に写っていたのは、今俺達が来ている『Heart Bakery』の店内だけではなく、オムライスや唐揚げ、カレーやスープなどと言った、これまで被害に遭っ

た料理の画像が投稿されていたのだ。

受信音が鳴り、ゆいは目を丸くしながら顔を近付ける。

ゆい「えっ？ちよっ、これって…！あたし達の学校のエビフライじゃない？」

ここね「えっ、如何して分かるの？」

ゆい「この衣がサクサクした感じ… あたし達の食堂のやつだよ」
咲夜「流石ゆい。食った物の特徴まで掴んでやがる。それと、この画像がアップされてる日にちを見れば分かると思うが… これはブンドル団が学校に現れた日と同じだ」

ゆい「ええっ!？」

驚きの声を上げるゆい。更に受信音が鳴り、今度はラーメンの画像が投稿された。

ここね「つまり、これを投稿している『ちゆるりん』っていう人がブンドル団と何か関係があるって事…？」

ここねの質問に俺は頷きながら『ちゆるりん』というアカウントを目に焼き付け、三体目でもあり最後のエナジー妖精が目覚めた事はまだ知らない…。

No side

??? 「はうく！この澄んだスープ、このスープの海に素潜りして、日本記録樹立したくい！」

全身が大火傷になる程に危険な事を宣っている少女、ちゆるりんこと華満らん。だが彼女がこの後、自分の身に濡れを着せられ、プリ

キュアになる運命が迫っている事に知る由もなかった…。
らん「最っ高う〜！」

??? □
「…メン？」

□
デイケイドB「今日はクリームソーダ！俺とCheers!…」
度言ってみたかったんだよな。これ」
オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□
次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩き
メンメン「僕は鹿じゃないメン！」
らん「お願い、うちの味を返して！」

デイケイドC「本当の火の吹き方、教えてやるよ」

第七品：強火の情熱！煌めいてキュアヤムヤム！！／目覚める最後の
エナジー妖精！正しい加熱の仕方！！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第七品：強火の情熱！煌めいてキュアヤムヤム！！／目覚める最後のエナジー妖精！正しい加熱の仕方！！

□

Sakuya side

怪物騒動が収まった放課後、俺達はHeart Bakeryでこねが気になっていた事を告げる。それは投稿サイト『キュアスタ』で鳴戸がアイコンのアカウント『ちゆるりん』が食レポをしている画像がこれまで被害に遭ったレシピッピに関連する料理ばかりが投稿されていたのだ。こねがその画像の中で一番気になっていたのはこれ。

こね『ぱんだ軒のラーメン最高！これを食べたら、ラーメンの妖精が現れて』!?!』

液晶画面をスワイプするこね。すると後の画像にはラーメンのレシピッピがイラストとして投稿されていたのだ。因みに後ろ姿もきつちりと描かれている。

こね「あ、これって…！」

咲夜「レシピッピ…!?!」

ゆい「ええっ？若しかしてレシピッピ!?!」

こね「うん…」

ゆい「ちゆるりんさんは見えるんだ…！」

パムパム「やっぱりブンドル団と関係あるパム？」

コメコメ「コメ？」

クソ犬は早とちりをするが、そうとは言っていない。

咲夜「いや、仮に店のラーメンやスープ等の画像の投稿に別状はないが、学校のエビフライが投稿されているという事を考えれば…投稿者は恐らく、うちの学校の生徒である可能性は大だ。兎に角そのぱんだ軒ってところに行つて、ブンドル団と関連があるかどうか調べに行こうぜ」

俺達の一日はまだ終わってはいなかった。

□
No side

ゆい『それで待ち合わせしたいんだけど…ぱんだ軒ってラーメン屋さんでいいかな?』

ゆいとの連絡をデリシャストーンで通じながら、ローズマリーは立ち止まる。

ローズマリー「勿論よ。もう来てるし」

ゆい『ええっ!?何で!?!』

咲夜『まさか、エナジー妖精が目覚めたのか!?!』

ローズマリー「ええ。『ラーメン食いたい』んですって…メンメンが」

咲夜『メンメン…?』

メンメン「メン…」

三体目であり最後のエナジー妖精　メンメンはきよとんとした声色でそう呟くのだった。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメージOP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Sakuya side

パムパム「やつと目覚めたパム〜！」

コメコメの時と同じ様に、クソ犬はメンメンと呼ばれるエナジー妖精に抱き付く。このパターンはご察しの通り。

パムパム「メンバーヌ・チュルチュルツト・クルクルリン・グルタミンサン・メンドラゴン！」

咲夜「……！」

長え。けどこれで表情が顔に出ようが歯を食い縛りながら我慢しないと漢の務めにはならない。

ゆい「メンチュル・クルクルウ〜……！」

同じく名前が長過ぎて混乱しながら倒れ掛けたゆいを抱えるここね。いや待て、名前の最初と最後に『メン』ってついたな。メンドラゴンって……完全にアレだろ。

咲夜『『メンバーヌ・チュルチュルツト・クルクルリン・グルタミン

サン・メンドラゴン』！これがこの鹿の本名だ！』

メンメン「メンツ!？」

パムパム「咲夜、一発で全部覚えちゃったパム… それとメンメンは鹿じゃなくてドラゴンパム！」

咲夜「いやどう見ても鹿だろ」

メンメン「僕は鹿じゃないメン！」

咲夜「いや鹿だ。何処をどう見たって丸っこい耳があった時点でテメエは鹿だ」

メンメン「僕はドラゴンメン！」

咲夜「鹿だ！」

メンメン「ドラゴンメン！」

咲夜「鹿！」

ローズマリー「まあまあ。会ったばかりなんだし、喧嘩もそれぐらいにしときましょ？」

忠誠するローズマリーに俺達は諍いせいかいをやめた。

咲夜「… 分かったよ」

メンメン「僕の事はメンメンって呼ばればそれでいいメン」

気持ちを落ち着かせ、のんびりとした口調で話すメンメンは主張すると、ゆいは安堵する。

ゆい「有難う、メンメン！」

メンメン「メン」

鹿野郎は憎めないが、エナジー妖精は皆可愛い事というのが分かった。暫く経って店の鉄扉を少し開けながら店内を覗いてみる。

??? 「いらっしやーい！」

咲夜「うわあっ!?!びっくりしたあ!!って、お前… 華満!?!」

らん「はわ? 和実さんと芙羽さん! エースの咲夜さんまで!」

すると、ひらがなで『ぽ』と描かれた赤いエプロンを着た少女が出てきてきた。驚く一同。その正体は俺達三人と一番下の席にいた少女、華満らんだった。

ゆい「此処、華満さんの家だったんだ」

らん「うん。さ、中にどうぞ」

中に入ってみると、一番左に座っているパンダの置物や、絵柄が並んでいた。

「へいらっしやい」

「ここね「可愛いお店…」」

ローズマリー「そうなの？」

咲夜「それは個人の感想によるぜ」

暫く経って、俺達にラーメンが配られた。具材は豪華で、卵、メンマ、チャーシュー、餃子、海苔、そしてパンダの顔が描かれた鳴戸が入っていた。

らん「お待たせしました〜！さ、家の特性スープをお楽しみください〜！」

「「頂きます〜！」」

咲夜「頂きマスタードラえモンゴル！」

俺は舌を舐めずり、早速一回で食う事に。因みに俺はラーメンだけじゃ物足りなかった為か、飯も頼んどいた。これは飯が進む。

ゆい「デリシヤスマイル〜！」

ローズマリー「やだ、箸が止まらない…！」

「ここね「…美味しい」

咲夜「うんめえー！飯が進むぜエー！！おら、野郎共も食えー！」

コメコメとクソ犬にラーメンの麺を食わせる。残った鹿には箸で摘んでいる麺でおちよくる。

咲夜（…しゃあねえな）

流星に嫌気を刺したのか仕方なく麺を食わせると、さっきの態度が水に流れた鹿は幸せそうな表情で食っている。

「ここね「このスープ、優しい海の味がする…」」

ゆい「これは昆布かな？出汁が絶妙！」

咲夜「箸で溶かした卵の黄身とチャーシューの味が出汁の中で歌うハーモニ〜。まさにオーケストラそのものだ。それしか言えねえ程美味しい…！」

らん「一口食べただけで家の隠し味が分かるなんて…嬉しい！このスープは家の家族の涙と汗の結晶なんだ…！」

華満が俺の手を握りながら素材集めの旅の経歴を熱弁する。

らん「この味を完成させるまでにはね、もの凄く長い時間が掛

かつて… ある時は荒れた海を乗り切り、またある時は異国の地を彷徨って… 漸く最高の食材と出会って生まれた家自慢の特製のスープなんだ！」

咲夜「ちよつと大袈裟っぽいけど、色々と苦労したんだな」

らん「あ。はにや、食べてたところ御免ね… あはは、ひひ」

メンメン「…！」

気を確かに持った華満は照れる。

ゆい「ぷはーっ！」

「「ご馳走様でした（ごつつあんです）！」」

俺達はスープを飲み干すと、その笑顔に答えながらラーメンのレシピツピが現れる。

レシピツピ「ピ〜！」

らん「あつ！ラーメンの妖精！」

「「ええ（はあ）っ!？」」

ゆい「レシピツピが見えるの!？」

らん「およ? 『レシピツピ』…?」

ゆい「うん。妖精さんの名前！」

らん「若しかして、皆にも見えるの!？」

ゆい「うん、見えるよ！」

ゆいに合わせる様に俺達は頷くと、ラーメンのレシピツピは華満の手の平に止まる。

らん「うわあ… レシピツピっていうんだ」

ここね「若しかしたら…」

ゆい「えっ?」

ここね「ちゆるりんさんって…!」

らん「よーし！今日はらんさんのレシピツピ記念日に決定！」

小声でここねはゆいに耳元でちゆるりんの正体を察しようとするが、華満の声で遮られてしまう。

メンメン「す、素晴らしい記念日メン！」

咲夜「!？」

らん「だよね〜… 『メン』? って、誰?」

咲夜「た、ただの縫いぐるみだ。気にするな」

ローズマリー「… ホント、素敵な記念日メン！」

誤魔化さんがばかりに隠した鹿をローズマリーはそのままコート
のポケットに入れた。

らん「有難う御座いました〜！」

ローズマリー「ああ… 焦った〜」

ゆい「ぼんだ軒のラーメン美味しかったね」

ここね「うん」

ローズマリー「ホント！」

咲夜「…」

結局ちゆるりん探索も忘れてなごみ亭に戻る事になったが、俺はま
だちゆるりんの正体を掴む目的を諦めてはいなかった。

□

No side

らん「はにや？これ和我さんのかなあ…？」

ゆい達が帰って暫く経ち、らんはパンダの縫いぐるみから小鹿の様
な黄色い物体を見かける。

???「和実？お友達、およねさんのお孫さんだったの！」

らん「知ってるの？」

???「らん。なごみ亭だ、届けてやんな」

らん「うん、分かった。いってきま〜す！」

らんの母親 つるねはなごみ亭を知っているかと問うと、父親のこのすけが黄色い小鹿らしき物を届ける様に促す。同時に黄色い小鹿…メンメンは目を覚めますが、なごみ亭に届けられるまでは縫いぐるみのフリをせざるを得なかった。

□

Sakuya side

ローズマリー「メンメン。もういいわよ」

俺達はなごみ亭に戻り、ローズマリーはメンメンをコートのポケットから出てほしいと声掛けるが、出て来る音沙汰もない。まさか…！

咲夜「ちよつといいか？」

俺はコートのポケットを突っついてみると、目を丸くする。この感触、やはりこれはメンメンじゃない！

咲夜「… やっぱりな。ちよいとメンメン探してくるわ！直ぐ戻る！」

ゆい「あつ、え、ちよつと…！」

俺はオーロラカーテンから出現させたマシンデイケイダーに跨りまたがながら走行した。

「「ええっ!?!」」

同時にローズマリーがポケットに間違えてパンダの縫いぐるみを入れてしまった事に関しては言うまでもなかった。

□

No side

らん「レシピツピかあ…はんにやあ〜！又会いた〜い！今度会えたらお話して、ラーメンについて語り合つて…ふわわわ〜！楽しみ無限大〜!!」

メンメン「止めてメン〜！」

らん「ふに？誰？」

縫いぐるみのフリをしていたメンメンを握りながら両手をぶん回すらん。何処かで声がしたと感じると振り回す手を止める。

メンメン「メンメン〜…」

らん「うわあっ!!」

メンメン「ん？メン…！」

宙に上がった反動で我に返つたメンメンはらんを見て、喋らない様に手で抑える。

らん「ほわわ〜！ほわん、ほわん、ほわ〜ん！君、何の妖精!？」

そんなメンメンを見たらんは興味津々で目を輝かせる。

メンメン「…驚かないメン？」

らん「マシマシに驚いてるよ〜！でもレシピツピがいるんだもん。

他の妖精だつて全然アリ〜！寧ろウエルカ〜ム!」

メンメン「…！僕、メンメン。ラーメン美味しかったメン！」

らん「ありがと〜！華満らんだよ〜！じゃあメンメン。お友達記念にツーショット！」

メンメン「メン！」

???「見つけたぞ鹿野郎」

何ら動じる事なく記念撮影をした直後、マシンデイケイダーに跨つていた咲夜が声掛けた。

□

Sakuya side

ゆい「はい」

らん「はい！」

ゆい「本当に有難う」

らん「ううん。またねメンメン」

メンメン「メンメン」

らん「それじゃまた」

パンダの縫いぐるみと鹿が取り換えると、華満は鹿に小声でまた会える事を期待しながら去って行った。

ゆい「えっ?今の…」

咲夜「ローズマリィ。お前、とんでもないミスを犯したな…お陰で鹿が妖精だって事バレたぞ!!!」

ゆい「ええっ!?!」

俺の一喝で一同は咂然あぜんとした。暫く経って俺はゆいとローズマリィと共に鹿とベンチで今までの出来事を話していた。

メンメン「大丈夫メン。僕の事は黙っててくれるって約束してくれたメン」

ローズマリィ「でも、気を付けなきや駄目ですよ?」

咲夜「いや、元はと言えばお前の確認不足のせいだろ?お互い様だ」

ローズマリィ「ぎくっ!?!…そ、それもそうね」

メンメン「メン…」

ゆい「でも華満さん、良い人でよかったね」

メンメン「らんちゃんと話すの楽しかったメン」

パムパム「どんな事話したパム?」

その様子を見にクソ犬は問い掛ける。

メンメン「ラーメンの事とか…レシピツピは『ほかほかハート』が好きって話をしたメン」

ゆい「ほかほかハート?」

ここね「?」

ローズマリィ『ほかほかハート』っていうのはね…お料理を食べる人の『美味しい』や『嬉しい』、『有難う』の気持ちから生まれるものなの」

咲夜「つまり、レシピツピはそこからエネルギーが一杯あるところに出現しやすいということか」

ゆい「へえ、そうなんだ...」
警戒した方がいいぞお前ら。恐らく次に狙われるのはぱんだ軒だ。

□

DIEND SIDE

デイエンド「ジェントルー。何見てるの？」

ジェントルー「この『ちゆるりん』というアカウント、今後のレシ
ピツピの回収にも^{はかど}捗ると思ってるな」

デイエンド「へえ... そうなんだ」

僕はジェントルーのスマホを見てみる。彼女によれば、此方の世界の
インスタ『キュアスタ』の投稿者『ちゆるりん』というアカウント
が今後のレシピツピ回収に役立つという事だ。

ジェントルー「それはそうと、スパイとして送り込んだ奴はどうし
ている？ デイケイドが変身した別の姿のライダーと何か関係がある
のか？」

デイエンド「キバーラの事？ 彼女なら大丈夫だよ。彼が変身する仮
面ライダーはデイケイドの天敵だからね」

ジェントルー「『デイケイドの天敵』...？」

暫く経ち、僕達はおばさんと作戦会議をしている。

デイエンド「... というわけなんだ」

セクレトルー「一度に沢山のレシピツピを...？」

ジェントルー「はい。より強いウバウゾーを作るため、最適な場所

を見つけてました」

デイエンド「この前の四体だと物足りないからね。せめて五、六体を捕獲すれば問題ないと思って。その分、僕がデイケイドを追い詰めるのにも捗るしね」

セクレトルー「分かりました。良い作戦ですね…。っていうか、そんなイケイケの店行きたいわ!」

デイエンド「今度連れてってあげるから」

セクレトルー「…そうですか、それは楽しみです。それでは…！」

デイエンド「やっちゃうか」

セクレトルー「セーの!」

「二ブンドルー!ブンドルー!!」

この儀式マジで勘弁して。僕にとっては地獄だ。本音を吐かずに僕達は作戦を開始するのだった。

□

S a k u y a s i d e

数日後、今日は担任教師から転校生が来るとの情報が入る。クラスメイト達が教室内でざわつき始め、どんな生徒が来るのか待ち遠しい気持ちを吐露する。

ゆい「ええーっ!」

「ここね！」

らん「はにやつ!？」

咲夜「!!」

引き戸が開けた転校生を見ると、俺と瓜二つの茶髪の生徒が教室に入って来たのだ。

????「はじめまして、今日からお世話になります。海詠わたなが 透冀とうぎです」

クラスメイトA「あいつ、咲夜に似てないか？」

クラスメイトB「門津君そっくりだ…!」

クラスメイトC「異母兄弟かな？」

「違い、絶対違いよ。俺はこいつの事を昔から知っている何故なら――」

透冀「久しぶりだね、,,アキノリ,,。相変わらず食べられる様になった？果物の柿じゃない方の牡蠣」

咲夜「!!」

唐突に放たれた言葉に俺は目を丸くする。

クラスメイトA「えつ…： 焼き海苔？」

透冀「ア・キ・ノ・リ。僕が昔、彼が…： 咲夜君が昔、海苔を食べていたから、その渾名で呼んでいたんだ」

クラスメイトB「それじゃあつまり、門津君とは幼馴染みって事？」

透冀「まあ、そんな感じになるね。それと、君達は咲夜君の事を普通に『門津君』って呼んでもいいから気にしないで。彼の事をアキノリって呼んでもいいのは僕だけだから」

クラスメイトB「は、はあ…：？」

担任教師「それじゃ、海詠君は門津君の席から右ね」

透冀「はい」

こいつは俺の事を『アキノリ』と呼んだ。けど、それは間違いではない。何故ならその名前は――

俺の転生前の名前なのだから。

□

T O U K I S I D E

らん「レシピツピ、レシピツピ、レシピツピ… ひにやあく。やつぱりレシピツピについての本はないか…」

??? 「驚いたな…」

らん「お？」

??? 「君もレシピツピを知っているのか？」

図書室でレシピツピの本がないと猫背になりながら落ち込む華満少女の前に僕とジェントルー… 否、菓彩あまねが前に出る。

らん「あ、生徒会長。海詠君までどうして此処に？」

透糞「そんな事はどうでもいい。そんな事より、先ずは場所を変えよう」

□

あまね「より多くのレシピピッピをか？」
らん「はい。どうしたら会えるでしょうか…？」
あまね「…良い方法がある」
らん「教えてください生徒会長！」
食いついた華満少女は目を輝かせながら聞く耳を持った。

□

Sakuya side

数日後、ぱんだ軒には長蛇の列が並んでいる。理由としては『ラーメンとセットで一品半額サービス！』と実施されていた事で大繁盛、俺達は急遽その店の手伝いをする事となった。

ゆい「お待ちどう様！ラーメン二丁上がり！」

ここね「はあ…はあ…」

ローズマリー「えつき、ほいさ…」

咲夜「アルアルアル…！」

「御っ手伝い〜」

らん「…ありがと！」

客がそれぞれ感想を述べるとラーメンを含め、中華料理レシピピッピが現れた。

ゆい「うわあ…！凄いよ、こんなに沢山のレシピピッピ見た事ない！若しかしてこの為に…！」

ジエントルーはテボ……敢えて言うなら麵湯切り器を青い炎に包み込ませ、ウバウゾー化させる。

ローズマリー「デリシャスフィールド！」

オカマさんは虹色のオーロラを出現させて空間に飛び込むが、竜の胴体を持つ黄色い鹿はオーロラから脱出する。

咲夜「よし、俺も……ぐっ!?!」

アキノリも後を追おうとするが、僕はゼロディエンドライダーから放った銃弾で妨害させる。

ディエンド「君を彼らのところへは行かせない」

咲夜「それはどうかな? 変身！」

【カメンライド デイケイドー!】

ゼロディケイドライダーを腰に当て、デイケイドのライダーカードを装填したアキノリはデイケイドへとその身を変化させる。

らん「はにやにやにやにやつ!?!はにやくつ!?!門津さんが……変身した!?!」

【アタックライド イリユージョン!】

デイケイドA「この力を俺も使えるって事、忘れたとは言わせないぞ?」

ディエンド「そうか。だったら止むを得ないね」

アキノリはイリユージョンで三人に分身し、Aと思われる個体が右手を翳すと、銀色の幕『オーロラカーテン』を出現させる。よりによってそう来たか。だけど僕もただ見てるだけじゃつまらない。黒いカードホルダーから二枚のライダーカードを取り出し、ゼロディエンドライダーに装填させてポンプアクション。デイスプレイに浮かんだ紋章はZEXTと描かれた二体の精霊飛蝗。ショウリョウバッタ

ディエンド「地獄から来たお客さん。いらっしやい」

【カメンライド キックホッパー!】

【カメンライド パンチホッパー!】

『Change KickHopper.』

トリガーを引くと三原色が現れ、ライダーの姿を形作る。飛蝗の全身を連想とさせる赤い複眼を持ち、ジャツキの様なハンマー機構を利

き足である左側に付けている深緑のバツタライダー。その横に並び立つのはもう一人のキックホッパーだけど体色は焦げ茶色で複眼が白。ハンマーの様な機構は右足に付いている。

地獄の底から這い上がり、『地獄兄弟』とも呼ばれた二人組のライダー。仮面ライダーキックホッパーとパンチホッパーが個体AとBと対峙する。

パンチホッパー「兄貴。如何やら俺達、又地獄から這い上がれたみたいだね」

キックホッパー「ああ。例え何度倒され様と俺達はずっと一緒だ」

デイケイドA「影山…!？」

デイケイドB「矢車まで…!？」

パンチホッパー「久しぶりだなアキノリ。いや、今は、咲夜、って呼んだ方がいいのかな？」

キックホッパー「何方でもいいだろ呼び方なんて。どうせ俺なんか…呼ばれてもいい渾名なんて存在しない」

その性格も相変わらずだね矢車君。

デイケイドA「C。ゆい達の援護に行つてやれ」

デイケイドC「分かった。そっちは頼んだぞ！」

デイケイドB「間違つても消滅するなよ？」

デイケイドC「…ふっ、任せておけ」

キックホッパー「今…誰か俺達を笑ったか？」

デイケイドC「あ。ヤベ」

キックホッパー「お前から同じ姿をしているな。笑つたのはお前か？」

それとも、お前かあッ!？」

デイケイドB「行け、C！矢車達は俺達が如何にかする！」

デイケイドC「ああ。死ぬなよ二人共！」

「お互い様だ!!」

個体Cはサムズアップを個体Aと個体Bに向けると過敏的に反応し憤慨するキックホッパーは個体Cに襲い掛かろうとするが個体Aに阻止され、個体Bはキックホッパーの相手をする。活を入れたCは領きながら和実少女達のいるデリシャスフィールドに繋がっている

オーロラカーテンへと飛び込んで行った。

「デイエンド「これは僕からの無料サービスだ」

【カメンライド 剣斬！】

瞬時にカードを装填し、デイスプレイに映る風を切る仮面。外見は忍者そのもので、黄緑と緑の二刀を両手に持つ。緑のマフラーを靡なびかせる風の剣士。仮面ライダー剣斬は個体Cの追跡し、オーロラカーテンに飛び込んで行った。

□

C SIDE

俺はAが出現させたオーロラカーテンに飛び込み、デリシヤスフィールド内にいるゆい達と合流を果たすと、オーロラカーテンに飛び込んだ側に召喚されたと思われる緑の忍者ライダー 剣斬はジェントルー側に並び立ち、聖剣『風双剣翠風』はやてを両手に腰を落としながら構える。同じくウバウゾーも鎖鎌の要領で繋がっている麺湯切り器を構える。

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

「デイケイドC「皆。任せて悪かった!」

ジェントルー「来たかデイケイド。このウバウゾーは今までとは一味違う… 此処はプリキュア共々退いた方が身のためだぞ?」

ゆい「それは無理!」

「ここね「当然」

「デイケイドC「生憎だが、逃げるという選択は俺達の辞書には載ってないんでな。本気で行かせてもらう!」

□

「プリキュア! デリシヤスタンバイ! パーティーゴー!!」

□

コメコメ「コメ！」

ゆい「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

□

コメコメ「コメコメ！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

□

パムパム「パム！」

ここね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！オーブン！」

パムパム「パムパム！！」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

パムパム「テイスティー！」

□

パムパム「パムパム！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー

「分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

□

デイケイドC「もう変身してるけど一応言つとこう。全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド!!旅の語らい…始めようか！」

ジェントルー「愚かな。ウバウゾー！」

ウバウゾー「ウバツ！」

「早い！」

ウバウゾー「ウバウゾー！ウババババババババ!!」

ウバウゾーは飛び掛かり、目にも止まらぬスピードでギリギリの距離で近づき、ヌンチャクの要領で地面に叩きつける。

プレシヤス「はああああっ!!」

ローズマリー「上手いわプレシヤス！」

プレシヤス「！」

プレシヤスの蹴りでウバウゾーは宙に上がるが、隙を狙っていたのか挟み撃ちにした網で捕獲し、中にいるプレシヤスごとぶん回す。

スパイシー「プレシヤス！」

デイケイドC「こつちも合流したいところだけどよ、全然攻撃の隙を与えてくれない…！」

剣斬の疾風の如く剣撃が俺を徐々に追い詰める。これじゃ合流出来そうにもない。けど、AとBもこつちで応戦してるんだ。俺がやらないや誰がこいつを止めるんだよ。俺は剣斬の双剣を押し返しながらライドブツカーからカードを取り出す。

デイケイドC「剣士には剣士だ！」

「カメンライド セイバー！」

『ブレイブドラゴン！』

炎に包まれ、右手に握られている聖剣『火炎剣烈火』で斬り払うと、俺を剣士の姿へと変化させる。赤いドラゴンの上顎を遇あらう装甲と赤いローブの右半身。剣の刀身を模したアンテナと燃え盛る炎を宿

すクロスの複眼を持つ複眼。物語の結末を自分で決める炎の劍士『仮面ライダーセイバー』へと姿を変えた俺は劍斬の劍撃に左手に劍モーターにしたライドブツカーを持った荒々しい二刀流で対抗し、鏢^{つばせ}迫りに合いに迫った。

□

No side

客A 「おい！何だアレは!？」

客B 「誰か戦ってるぞ！」

「えっ（メン）？」

ぱんだ軒の料理が突如味が変化し、敬意を払った客達の声を頼りにらんとメンメンはその場に駆け寄ってみると、二人のデイケイドと地獄兄弟が交戦していたのだ。その戦闘を目撃していた客達はその戦いに不安を感じていた。料理の味が変化した原因は彼らにあると。

デイケイドA 「だったら、これで！」

デイエンド 「させないよ」

ライドブツカーからカードを取り出すAとBだが、デイエンドの高速移動によつて奇襲を掛けられる。

奇襲を掛けたデイエンドの手元にはカブトと全身に銀色のラインが走る赤い複眼を持つファイズのライダーカードだけではない。全て高速戦闘が可能なライダーカードが存在していたのだ。

キックホッパー 「ありがとなレグ。これで吉木を倒し易くなっ

た… お前はいいよなあ、吉木。どうせ俺達なんか… 他のライダーにも成れやしない」

「ライダージャンプ」

『RIDER JUMP.』

ベルトにあるホッパーゼクターの脚を畳み空中に飛び上がる地獄兄弟。

キックホッパー「ライダーキック…！」

パンチホッパー「ライダーパンチ…！」

『RIDER PUNCH.』

更にホッパーゼクターの脚を戻し、利き足と利き腕を防御体制に入ったデイケイドに命中させるとハンマー機構が作動し、威力を上昇させた反動によって大きく後退させる。

デイケイドA「ぐっ…!?!」

デイケイドB「やっぱりこいつらも前より強くなってる…！スペックはこつちが上の筈…！」

パンチホッパー「スペックが上とかじゃないんだよな。それ」

キックホッパー「どうせ俺達にはお前を倒せる気力なんてない。だが何度も倒され、這いずり回ってきたからこそ、お前らと同等に渡り合う強さを身に付けた。最早スペックの差なんてどうだっていい…。」

デイケイドA「そういう事か… 大体分かってきた」

デイケイドB「お前らは俺達に倒される度に力を蓄え、今の様にオリジナルとしての自我が芽生えた…！」

キックホッパーとパンチホッパーの言い方は正論に値する。嘗て彼らは過去に仲間から見捨てられたのは皮肉でしかない。だが、こうして彼らが共にいるからこそ言える事なのだと改めてAとBは実感させられてしまう。

パンチホッパー「そういうこと。レグが召喚するライダーは負ける度に強さを増していく。勿論、俺と兄貴も同様にな… 兄貴。話すのも面倒だし、そろそろ終わりにしようよ」

キックホッパー「そうだな相棒。吉木… いや、門津。お前も俺達

と地獄に堕ちろ」

らん「そんな門津さんが…！らんらんがレシピッピに会いたいだなんて言ったから…！」

メンメン「らんちゃんのせいじゃないメン…！」

デイケイドの正体を咲夜だと判断したらん。歩み寄る地獄兄弟に窮地に追いやられるAとBを見て後悔の涙を流す。

デイケイドA「…るな」

らん「えっ…？」

デイケイドA「自分を責めるなッ!!!」

その様子を見ていたAは仮面の下で歯軋りをしながら一喝する。

デイケイドA「鹿の言う通り、自分を責める必要はない。お前はこ
うも言ったな。『お料理の妖精に又会いたい』って。その言葉に嘘偽
りのない想いに応えられたからこそ会う事が出来たんだろ？俺は嘗
て、自分の家族に自由を奪われたままだと勘違いして何度も自分を責
め続けた。そんな心が暴走して俺自身の悪魔を具現化させてしまっ
た。その頃の俺は指を啜えて見ているだけの木偶でくの坊で、ビビりで、
言い返せる勇気がない臆病者で、親友の期待を裏切って、本音を吐く
のが怖くて、ただ自分に甘えてるだけで、そんな自分が嫌で…過去
の自分を見返す事だけに…仮面ライダーの…ヒーローの役割に
人生の全てを捧げた！」

らん「仮面…ライダー？」

デイケイドA「そうだ、仮面ライダー…それが俺が変身するヒー
ローの名だ。俺はこの力を手に入れてから記憶を失って、多くの者と
出会い、その中には死んだ者もいた。けどな、俺はそいつらの事を一
度も忘れた事がない。何故なら、この胸に永遠に刻み込んでいるから
だ。客だつてそうさ。誰か美味しいと思えば美味しいと思うし、不味いと
思えば逆に不味いと不満に思うする。そんな人間の感情をお前は幾
度か見てきた筈だ。だが俺が一番見たくないのは…誰かが泣く顔
だ!!」

らん「っ！」

デイケイドA「俺達は…俺はこれ以上、誰かが泣く姿を見たくな

い。いつまでも笑ってままでほしいんだ！老若男女も関係ない！よく聞けブンドル団!!お前らが料理の味を奪って欲を満たす為にその力を振るうのなら俺は…人間の自由と！料理の味を守る為にこの力を振るう！知ってるか？『人間諦めなければ必ず努力は満たされる』そうだ。お前らも道さえ違っていれば…違う未来を歩めていたかもな。完パーフエクト璧とかそういうのは関係なしにそう思ってるよ」

キックホップパー「何なんだ…！お前はッ…!?!」

苛立ちを覚えるキックホップパーにふっと笑うA。その答えはとつくに決まっていた。

デイケイドA「胸に刻め、地獄兄弟。俺は門津咲夜、又の名を…仮面ライダーデイケイド。人間の自由と料理の味を守る為に戦う…通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！B、仕上げだ！」

デイケイドB「ああ！」

状況を察したBはオーロラカーテンを出現させると、地獄兄弟は足を止める。証拠映像として映ったのはデリシャスフィールド内でプレシヤスがウバウゾーに捕まり、手も足も出なくなっているスパイシーとローズマリーの姿が。らんはこのオーロラに飛び込めば間違はなく其処へ行き着くと察した。

客A「何だこれは…!?!」

客B「おい見ろ！あの怪物、前に見た事あるぞ！それにあの子達は一体…!?!」

デイケイドB「あの黒い怪盗服を着た少女の名はジェントルー。こいつこそ、ぱんだ軒の料理の味を狂わせた張本人だ。こいつが所属している怪盗ブンドル団はその名の通り、怪盗服を見に纏っているのが特徴で、全ての料理を独占しようと企んでいる悪の組織だ。彼方あちこち此方で料理の味を奪い、多くの店を閉店ガラガラに追い詰めたのもこいつらの所業。あんた達も何度か被害に遭っている筈だ。思い出してみろ、味が変わって怪物が現れたのが何よりの証拠。だからあの両親には何の罪も咎とがめもない」

客A「何だって!?!通りでラーメンの味が不味くなると思った！」

客B「捕まえてレイP…じゃなくて痛い目に合わせてやる！」

デイクイドB「あんた達の力じゃ手に負えない。これは…俺達の戦いだ。約束する。俺達が…俺が必ず。おいしーなタウンの異変に終止符を打つ！」

らん「門津さん…！はんにゃ！」

客達はオーロラカーテンを抜けてジェントルーを懲らしめようとしたが、当然Bにらん自身の戦いだとハッキリと制止された。その間にらんはメンメンと共にプレシヤス達のところにいるデリシヤスフィールドと繋がっているオーロラカーテンに飛び込んで行った。

デイクイドA「頑張れ、華満らん」

デイクイドB「さて、俺達はいつらの後始末をするか」

デイクイドA「昭和ライダーの力はあまり使っていないけど、止むを得ないな！」

デイクイドB「ああ、見せてやるよ地獄兄弟。これがライダーの原点にして頂点！始まりの記憶だ！」

オーロラカーテンが消滅すると、AとBはライドブツカーからライダーカードを取り出す。描かっていたのは原点にして頂点、飛蝗の頭部を模した二人のライダー。

「ライダーアアア…変身!!」

【カメンライド 1号！】

【2号！】

□
C s i d e
らん「はにゃ!?!」

俺は剣斬と応戦している中、突如出現したオーロラカーテンが出現し、其処には華満がデリシヤスフィールドに転送されてきたのだ。

ジェントルー「!?!」
らん「はんにゃ!」

ジェントルーと対峙したらんは勇気を振り絞りながら足踏みをする。

らん「お願い!うちの味を返して!」

ジェントルー「何だ...?」

スパイシー「えっ?」

ウバウゾー「ウバ...?」

華満がジェントルーと対峙している光景を目にしたウバウゾーは両腕の振動を止める。

ローズマリー「ちよ、ちよつと。貴女達!如何して!?!危ないわよ!」

ローズマリーが何を言おうと華満が立ち止まったままだった。

らん「ラーメンも餃子も、どのメニューも大事に作り上げたうちの味なの!その味を楽しみにしていたお客さんをガツカリさせたくない!!」

ジェントルー「客が楽しみにしていたのは...半額という値段じゃ

られただけ……。味など気にするものか！」

らん「はんにやあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああッ!!!」

マントをひるがえしながら店の味を侮辱するジェントルー。怒れるハー
トに火が付いた華満は天に向けての叫びで雲を大きく過ぎらせ、涙を
拭って必死に抗議する。

らん「勝手な事言わないで！あなたには理解できない！あの味を生
み出すために流れた汗と涙の物語を！味わった人しかわからない、口
の中一杯に広がる特製スープが巻き起こすきらめく感動！さわ爽やかな
潮の旋風！あந்தの想像の100万倍でもお釣りが来るくらい、あの
スープは美味しさに溢れてるの！」

メンメン「メン！」

ジェントルー「生意気だ……。！」

らん「うちの味……。返して!!」

スパイシー「いけない！」

ジェントルーに立ち向かう華満をウバウゾーは蹴り飛ばそうとし
たところをスパイシーがパン型エネルギーを飛ばして足止めをする
が掻き消されてしまう。

らん「はにやあ!?!」

デイケイドC「くっ！」

【カメンライド 龍騎！】

【アタックライド アドベント！】

デイケイドC「来い、レッダー！」

俺はデイケイド龍騎に姿を変えて呼び出したレッダーが咆哮を上
げ、空中からの火炎弾でウバウゾーを牽制させる。

ウバウゾー「ウバッ!?ウバババッ!?!」

メンメン「メンメン！」

其処からメンメンが口から放った直径数mの火球を放つ。放たれ
た火球は怒り狂うが如く上昇していく。

ウバウゾー「ウバッ!?!」

ジェントルー「何っ!?!」

メンメン「らんちゃんとか夜の想いが、僕のハートに火を付けたメン！」

デイケイドC「中々いい炎を吐くじゃないか。パムパム、アレは？」
パムパム「年に一度に出るか出ないかの熱血モードパム！」

ローズマリー「激盛りレアって事!？」

プレシヤス「超特大激盛りく!!」

プレシヤスとローズマリーはそう言ってるが、『出るか出ないか』つて・・・Aに鹿つて言われてるのが断然に理解出来るな。さて、今度は俺の番だ。俺はメンメンの前に立ちながらライダーカードを取り出す。

m

デイケイドC「メンメンだったな。本当の火の吹き方・・・教えてやるよ」

「アタックライド ストライクベント！」

デイケイドC「ドラグクロー・・・ファイヤアアアアアアアアアアツ!!」

ウバウゾー「ウバツ!?ウバババババ・・・ウバウゾー!？」

ドラグレッツダーの頭部を模した鉄甲『ドラグクロー』が装備された右腕を突き出すとドラグレッツダーが火炎を噴き出し、ウバウゾーを更に牽制させる。

メンメン「これが、本物の炎・・・!カッコいいメン！」

デイケイドC「だろ?ってなわけで #^{ハッシュタグ}龍騎20周年 ツイッタートレンドインよろしくな」

その時、不思議な事が起こった。メンメンのフードの装飾が放った黄色い光がらんこのハートキュアウオッチを生み出したのだ。

ローズマリー「ハートキュアウオッチ・・・!？」

メンメン「らんちゃんのラーメン、僕大好きメン。だから一緒にレシピッピを助けて、あの味を取り戻すメン！」

らん「メンメン・・・有難う！」

メンメン「プリキュアに変身メン！」

デイケイドC「華満！」

らん「ほいきた！何でも来いだよ！」

□
メンメン「メン！」

らん「プリキュア！デリシャスタンバイ！パーティーゴー！！くるくる！」

メンメン「メンメン！」

らん「ミラクル！」

メンメン「メンメン！」

らん「シエアリンエナジー！」

メンメン「ワンターン！」

デイケイドC「ブフォツ!？」

悪い、初変身中に吹いたわ。

□
メンメン「メンメン！」

???「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

□
ジェントルー「くっ！キュアヤムヤム…!?蹴散らせ！ウバウゾー!!」

ウバウゾー「ウバウゾー！」

ウバウゾーはテボを中にいるプレシヤスをも巻き込んでヨーヨーの様な攻撃を仕掛ける。

ヤムヤム「はんにゃ！」

プレシヤス「くるくる回る〜!!」

ローズマリー「ヤムヤムしっかり！スパイシーとCはサポートを

！」

このまま避け続けてもヤムヤムの体力が減ってしまう事を悟ったローズマリーは指揮を取る。

スパイシー「オーケー」

デイケイドC「分かった！けど、どうやりやいいんだ…？」

剣斬「…俺も手伝うよ」

デイケイドC「えっ？」

剣斬「マジでないわ。相棒と一緒に食ったラーメンの味を台無しにするなんて…俺も戦うよ。剣士として、アイツに今の俺の強さを見せてやりたい！」

デイケイドC「緋道…分かった！」

自我が芽生えた剣斬の意見に承諾した俺は攻撃するタイミングを見計らう。

ヤムヤム「はにや…」

スパイシー「任せて！」

ヤムヤム「はにや…有難う！バリカッターブレイズ!!」

スパイシーはパン型エネルギーでヨーヨー攻撃を防いでいる隙にヤムヤムは黄色いエネルギーの刃を麵湯切り器に当て、目を回しながらプレシヤスは解放された。

その隙を狙って俺は左手に召喚したドラグレッダーの尻尾を模した青龍刀『ドラグセイバー』をドラグクローに逆手持ちで持ち替えながらファイナルアタックライドのカードを装填。

「ファイナルアタックライド リユ、リユ、リユ、龍騎！」

デイケイドC「ドラゴンライダーズラッシュ！」

『猿飛忍者伝！ニンニン！はやて翠風速読撃！』

剣斬「はあああああッ！たああッ!!」

ドラグセイバーをドラグクローの炎で纏った刀身でドラグレッダーの尻尾の刀身をばねにして強く蹴り上げ、ウバウゾーの左側に斬り付ける。それに合わせ、剣斬は右側に回って風双剣の刀身に風のエネルギーを纏いながらウバウゾーに飛び掛かりつつ斬り裂く。ウバウゾー「ウバウゾー!?!」

メンメン「ヤムヤム、今メン！」

ヤムヤム「ふに！プリキュア！ヤムヤムライズ!!」

ヤムヤムは液晶画面に触れ、両手に発生させた多数の麵状のエネルギーを一斉に飛ばし、ウバウゾーを浄化する。

ウバウゾー「お腹いっぱい！」

「ご馳走様でした！」

「ピピピッ！」

ウバウゾーの消滅に伴い、六体のレシピツピが一気に解放されるとヤムヤムのハートキュアウォッチに格納される。

ヤムヤム「はわわ〜！」

ジエントルー「三人目のプリキュアが現れるとは…！」

ジエントルーは姿を消し、俺達はヤムヤムに駆け寄る。

プレシヤス「有難うヤムヤム！」

ヤムヤム「やったよ〜！」

デイケイドC「ぼんだ軒の信頼を取り戻すのには余程の時間が掛かるが、あいつなら大丈夫だろう。なっ？緋道…？ってあれ？緋道？」

俺は周囲を見渡しながら剣斬を探すが、その姿は見当たらなかった。だが、確信のある物は見つける事は出来た。それは剣斬のライダーカードだった。

ローズマリー「如何したのC？」

デイケイドC「いや、何でもない」

□

Sakuya side

咲夜「ホンツトに済まなかった!」

ゆい「どうして急に謝るの?」

咲夜「まさか店が並んでいるところで戦うなんて思いもしなかったんだ!仮面ライダーとして本当に申し訳ない!!」

こしのすけ「気にするな丸坊主。あんたがおいしーなタウンの異変を解決するってはつきり宣言したんだ。その心意気は間違いなくヒーローの塊だ!」

つるね「そうよ、ヒーローは何事にも立ち向かう勇氣があるからこそ何度でも立ち上がれるんだから。あんたもこれ食べて行きなさい、うちの店の繁盛を取り戻してくれたお礼だよ」

そう行つてつるねさんは俺をヒーローと讃たたえながらラーメンを差し出す。AとBが地獄兄弟を倒した後に変身解除した事で俺がディケイドだということがバレた。

咲夜「えっ?けど俺、客の皆にも正体バレちゃいましたし...」

観客A「遠慮すんなって。ヒーローがそんな事気にして如何すんだよ?人の事言えないけど、いつも美味しいラーメンを作ってくれてる女将おかみさんに申し訳ない」

観客B「そうよ。私達の料理の味を守ってくれてるって約束したじゃない」

観客C「よっ!料理の守り人『仮面ライダー』!」

観客D「『仮面ライダー』は人間の自由と料理の味を守るためにブンドル団と戦うのだ!』...なーんてな」

観客E「これからも応援してるぜ。仮面ライダー」

咲夜「...!」

俺は多くの客にエールを贈られると何故か嬉し泣きをしてしまう。つるね「ほら。麺が伸びる内に食べな」

咲夜「...いただきます」

視界が涙で一杯の中、俺は箸を手に取り、麺を口に運んでいき、スー

プを一口飲む。

咲夜「… ぐん。美味しい」

感涙に引き寄せられる味を喉に染み込ませながら俺は感想を述べたのだった。

ローズマリー「随分と泣き虫ね。咲夜は」

咲夜「… うるせえローズマリー。その顔歌舞伎にするぞ」

ローズマリー「なっ、歌舞伎って… !? 一体何で描くつもりよ!？」

咲夜「これで」

俺が取り出したのは前にゆいと一緒にあおぞら市に遊びに行った側にまなつから貰った情熱のリップ。

ローズマリー「ちよつとそれリップじゃないの!? メイク落としにくくなったら如何すんのお!? ちよつとやめなさいよ、ねえ。ねえったら!」

『ハハハハハハハハッ!』

店内に客達の笑い声が響き渡る。暫くして俺は腕で涙を拭いてイッシュで鼻を噛んで漸く気持ちが落ち着いた。

咲夜「気持ちが大分楽になった…」

ゆい「これから宜しくね。らんちゃん!」

ここね「宜しく。ら… らん」

らん「えへへ… こちらこそ宜しく。ゆいぴよん!ここぴー!」

ここね「ここぴー!」

ここねは渾名で言われた事に照れる。何だか嬉しそうだな。

ローズマリー「ローズマリーよ」

らん「マリツペ!」

ローズマリー「『ペ』!? ふふっ。悪くないかも」

あの… ドラクエの何かっすか? 因みに俺は『アキぽん』と呼ばれる事となった。何故かって? 俺の転生前の名前が含まれてるからだ。許すまじ海詠透冀。

ここね「それにしても、ちゆるりんがキュアスタに載せるお店はやっぱ美味しい」

らん「はにや… ちゆるりんを知ってるの?」

ゆい「ちゆるりんさんってさ… 一体誰なんだろ。らんちゃん？」
らん「は… はにや…」

ゆい達は華満に目を向ける。

咲夜「何言ってるんだお前ら、既に目の前にいるじゃないか。絶対お前だろ？華満」

らん「… はくい。ちゆるりんです」

咲夜「だと思ったわ！」

照れながら素直に告白する華満。昨日の学校のエビフライの画像で分かってたわ。

らん「よく分かったね」

ここね「レシピツピが見えるって言うし…」

ローズマリー「お料理の情熱からも！」

らん「それじゃ、今日の記念に皆で写真撮ろうよ！」

記念写真でカメラに近付くゆい達。俺は剣斬のライダーカードを見ながら小さく呟きながら微笑む。

咲夜「今度、ラーメンに紅生姜… 入れてみるか」

ゆい「咲夜君、撮るよ？」

咲夜「ああ、悪いな」

らん「はい、チーズ！」

「「「イエイ！」」」

□

ヤムヤム「今日はパイナップルジュース!ヤムヤムと乾杯!」
オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパ―テイ♡プリキュア 破壊者の食べ歩きく
らん「らんらん、キュアスタ辞めたんだ…」

デイケイドA「ノーコンテニューしてでもクリアしてやる!」
ゲンム「君は知り過ぎた…」

第八品:ちゆるりん卒業!?!おでかけ!おいしーなタウン／笑顔を活
かすS p i r i t! 探検おいしーなタウン!!
全てを破壊し、全てを繋げ!

第八品：ちゆるりん卒業!?!おでかけ！おいしいーなタウン／笑顔を活かすS p i r i t！探検おいしいーなタウン!!

□

S a k u y a s i d e

ゆいのハートキュアウオッチを通して俺達はクッキングのジジイとクックイーンの婆さんとビデオ通話をしている。

クッキング『クッククックク！クッククックク！エナジー妖精も皆目覚め、プリキュアが三人になったとな!?!これはめでたいーなっ?』

クックイーン『はい。キュアスパイシー、キュアヤムヤム。宜しく…』

ここね「はい」

らん「はーい!」

ローズマリー「ブンドル団はレシピピを奪う為にらんのキュアス々に投稿したお店の情報を利用して可能性ががあります。美味しい物へのセンスを良い事に目をつけたみたいで…」

ブンドル団の今後の動向を危惧するローズマリーに華道は顔を下に向ける。聞いた話によると、プリキュアになる前は激マズ飯テロにあったそうなの。そりや大変だったな。

クックイーン『お料理を愛し、楽しむ心を利用するとは…酷い事です』

婆さんの表情に同情するジジイは気持ちを切り替え、真剣な表情で話を戻す。

クッキング『うーん… 我らも、ブンドル団に関する調査にもっと力を入れなければならんな』

フェンネル『はい。ローズマリーと連携し、盗まれたレシピボンの搜索。そして、アジトの特定を今以上に急ぎます』

クッキング『うん。ゆい殿、ここね殿、らん殿。デイケイド。それ

にローズマリー達…改めて宜しく頼むぞ!』

「はい!」

咲夜「……………」

世界の破壊者 デイケイド。つもの世界を巡り、この世界にて何を
噛み締める?

イメーゴP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□
No side

らん「それにしてもブンドル団。レシピツピに酷い事して…お料理の味を変えちゃうなんて許せないよ。突然味が変わるなんて物凄く吃驚するし悲しいのに…」

真夜中のぱんだ軒。らんは自室にてブンドル団に対する静かな怒りを燃やしながらハートキュアウオッチの液晶画面に映る自身のキュアスタを眺める。

自分もプリキュアになる前はブンドル団の被害に何度か遭っていた様で、その怒りを隠せずにはいられなかった。

メンメン「…らんちゃん?」

らん「よし決めた！」
メンメン「メン？」

らんは起き上がり、机に置いてあるパソコンの画面。料理の写真と内容が記載されたノートを見ながら決意を固めた。その静か気な様子にメンメンは首を傾げた。

□

Sakuya side

咲夜「おはよう野郎共。今日も元気か？」

クラスメイトA「おう。今日もバツチりだ！」

咲夜「そりや良かった。おはよう華満…華満？おーい、ぱんだ軒の華満さーん。起きてますかー？」

らん「はっ！お、おはよう！何も無い。今日のスペシャルランチってナポリタンでしょ？あの濃厚なケチャップソースの秘密が気になって…」

気の抜けた声を出す華満は気確かにし、本音を誤魔化す様に話している。ゆいの腹の虫が鳴る。

ゆい「聞いてたらハラペコった〜」

咲夜「いやそれで鳴るのかよお前の腹!？」

ゆい「…： そうだ！今度三人で美味しい物食べに行こうよ。咲夜君も入れて四人で！」

咲夜「俺も!？」

ここね「四人つて… ゆいとらん、それに咲夜と… 私で？」

ゆい「勿論だよ！」

ゆいは白チョークで今度の休みの日の内容を書き込む。

ゆい「題して『おいしーなタウン街歩きツアー』！」

咲夜「おいしーなタウン…」

ここね「… 街歩きツアー？」

らん「最高！賛成〜！」

□

DIEND SIDE

ゴードッツ『三人目のプリキュア？又邪魔者が増えたか…』

セクレトルー「これ以上我々の邪魔をする様であれば、始末してしまった方が宜しいかと。ジェントルー、デイエンド」

ジェントルー「はっ！レシピッピ捕獲の為、次はプリキュアとデイ

ケイドを… うっ！」

セクレトルー「…」

ジェントルー「… ジェントルー？」

ジェントルー「ウバウゾーの特性を活かした作戦で方を付けます」

セクレトルー「…」

デイエンド「？」

突然に頭を抑えたジェントルーの様子に叔母さんは警戒の表情で見ている。

ゴードッツ『朗報を待つ』

姿を消すゴードッツ。さて、いつもの儀式の時間だ。

セクレトルー「全ての料理をゴードッツ様の物に…。せーの！」

「ゴンドルー！ゴンドルー！！」

裏切りたい、この組織。解散してから暫く経ち、僕はジェントルーのスマホに映っているちゆるりん…。華満少女のキュアスタを見てみると予想外の事態が起こる。

キュアスタの投稿が更新が滞とどまっていた。被害に何度も遭った事に對しての警戒か否いなか。

その理由は僕とジェントルーが知る由よしもなかった。

□

S a k u y a s i d e

そして当日、P r e t t y H o l i c でここねと華満が待ち合わせしていた。まずは和食ストリートで桜餅を食う事に。

レシピツピ「ピピピ」

らん「はわわわ…！若しかしなくてもレシピツピ!?!」

パムパム「桜餅もちのレシピツピパム」

ここね「可愛い…」

らん「ほえ？ああ〜！何か前よりくつきりはつきり見える！」

メンメン「それはハートキュアウオツチのお陰メン」

咲夜「そうなのか？ドラジカ」

らん「はへく…すごいすごい！」

華満が初めてプリキュアになった後、鹿の渾名をドラジカと改名する事にした。理由は鹿の顔をしているドラゴンが由来となっている。

ドラジカが言うには、ゆい達はハートキュアウオッチの影響によって前よりも鮮明に見えるのに対し、何故俺はレシピツピが見えていのだろうか？ゼロデイクイドライバーの影響か、それとも破壊者としての力なのか。何方にしろその影響なのかは定かではない。

ゆい「らんちゃん、『もつとレシピツピの事知りたい』って言ったもんね」

らん「うん。目がまん丸でお豆みたいで可愛い。はっ！びよわく…」

突然何かを思い出したのか、再び気を抜きながら口を尖らせる華満。

咲夜「華満、昨日から如何した？」

らん「はっ！何でもないない！さあて、次は何処行く？」

咲夜「…」

嫌らしい態度で誤魔化し通す華満。次にやって来たのは洋食ストリートのベীগルサンドを食い、最後に中華ストリートで華満が一推しの『元祖肉まん』という店。

らん「じゃーん！此処は絶対絶対紹介しようと思ってたんだ。皮がモチモチ…餡はジュシーな中華まん。そのハーモニーでジャンプしたら…宇宙まで飛んで行けちゃいそうだよ！！」

熱狂しながら華満は桃まんを選び、ここねの提案にて公園で食う事にした。

らん「あーん。んん！桃まんは初めて食べたけど、これで絶品。ふにふにの皮と胡麻餡が最高過ぎ。お布団にして寝たいくらい」
ここね「…美味しい」

ゆい「デリシヤスマイル〜！」

華満の絶賛と共にゆいとここねは肉饅を口に運んで美味しさを実感する。

らん「この感動をメモしてキュアスタにアップしなきゃ…」

咲夜「… 待て！」

俺の一喝で華満の手を止めさせる。

ここね「咲夜？」

ゆい「如何したの？急に怒鳴ったりして…」

咲夜「昨日から察していたんだが華満… お前、キュアスタ辞めたろ？」

俺の一言で華満はテーブルから離れると、訝いぶかしがるゆい達に打ち明ける。

らん「… 流石アキぼん。ずっと隠す必要もないみたい。実は… らんらん、キュアスタ辞めたんだ」

それも無理やり作った笑顔で。俺が一番見たくなかった嘘偽りの表情を見せながら。

らん「だって、らんらんのせいでお店が狙われたり、レシピピが捕まっちゃうのは嫌だから… もう書かない事にした」

咲夜「やはりな、通りで様子がおかしかった訳だ」

らん「… えへへ、大丈夫大丈夫。美味しい物を探す情熱が無くなる訳じゃないし」

メンメン「やっぱり無理してるメン…」

ゆい「でも… 好きな事を辞めなきゃいけないなんておかしいよ！」

ここね「私もそう思う」

らん「えっ？」

ここね「ちゆるりんだったら… この美味しい中華饅の事、『何て表現するんだろう？』って見てみたいもの」

ゆい「ちゆるりんのキュアスタを見ると、この美味しさを知ってほしいって気持ち伝わってきて、ハラペコってきちゃうもん！」

無理に平静を装う華満に少しは圧を掛けないとな。

咲夜「それでキュアスタを凍結してるのなら、俺は止めないがな」
『!?!』

咲夜「お前ら、少しは心を鬼にしろ。若しそれで華満が辞めたとし

ても俺達に『辞めろ』とか『辞めるな』と云った発言の権利はないぞ。辞めたければ辞めればいい。出来るなら続ける。それだけの事だろ？それが出来なければ…何か別の方法でも考えるのが最高最善の方法なんじゃないのか？」

らん「別の方法を考えろって言われても、利用されてるって分かってたら続けられないよ…。」

ゆい「らんちゃん…!」

咲夜「…仕方がない。コメコメ」

コメコメ「コメ!」

咲夜「変身」

【カモンライド デイケイド!】

俺は溜め息を吐きながらゼロデイケイドライダーを腰に当て、デイケイドに変身する。

デイケイド「本来ならレベル1すっ飛ばして2になりたいところだが、止むを得ない」

【フォームライド エグゼイド!レベル1!】

『レッツゲーム!メツチャゲーム!ムツチャネーム!ワツチャネーム!?アイム ア 仮面ライダー!』

俺の周囲を囲むピンクの縁取りがされているキャラクターアイコンに触れると『Touch!』のエフェクトが表示し、通り抜けると俺はずんぐりとした体型の白い体躯のライダーとなった。顔はくの字に曲がった三つのヘッドパーツ。バイザーにはオレンジの目を覗かせ、胸部装甲にはゲームコントローラーの様な装飾が左側に付いている。

患者の運命を変えるドクターゲーマー『仮面ライダーエグゼイド』へと俺は姿を変えた。

だがこれは単なる始まりに過ぎず、この形態はゲームでいう初期レベル。謂わば『レベル1』だ。

ゆい「ええっ!?今度はゆるキャラ!?!」

ここね「…可愛い」

コメコメ「コメ。コツ…。コメツ!?!」

デイケイド「おつととととと、危ない危ない。大丈夫かコメコメ？」
コメコメ「コメ！」

???「話は聞かせてもらったわ！」

コメコメも頭をポンポンと三回叩いて赤子の姿に変え、抱っこを要求するが一瞬で体制を崩しそうになったところを俺が抱っこすると、謎の声が出た方へと向く。その正体は言わずもがなローズマリーだった。

「ローズマリー（マリちゃん）!?!」

ここね「如何して此処に？」

ローズマリー「羨ましくて来ちゃった… 何て言えないわ！」

ゆい「言っちゃってるよ!?!」

コメコメ「コメ！」

デイケイド「…可愛い」

恥ずかしめながらローズマリーは俺の後ろに隠れる。完全デレながら自爆しやがったこのオカマ。ここねが初めてプリキュアに変身した時の事はカツコよかったのに。

コメコメ人間体はマジ天使。可愛い。

ここね「咲夜、顔に出てる」

ゆい「ここねちゃんとおんなじだ」

デイケイド「うぐつ!?!べ、別にケモナーが好きな訳じゃないからな！勘違いすんなよ!?!」

メンメン「咲夜も無理してるメン」

パムパム「目でバレバレパム」

デイケイド「ぐはあつ!?!」

ゆいとここねに続き、クソ犬とドラジカの言葉が俺に容赦なく突き刺さる。暫くしてローズマリーも桃まんを実食する事にした。

ローズマリー「はむっ。んん〜！何、このきめ細やかな皮！それに冷めてもすっごく美味しい〜！」

らん「はんにゃ〜！これはね、『テークアウトしても美味しく食べられる様に』ってお店の人が工夫してるの」

ローズマリー「だから美味しすぎてんこ盛りなのね」

らん「うんうんうんうん！」

ローズマリーの感想に華満は強く頷く。

ローズマリー「ちゆるりんだったらその情報、絶対にキュアスタに書いてたわよね。いえ、書くべきよ！」

らん「マリッペ……」

俺は華満と向かいながら草原に座り込む。

デイケイド「……俺は嘗て、過去に人魚姫伝説の本を愛読している奴と面識が合ってたな。そいつはその影響で人魚に憧れる様になって、文学部に所属したんだ。まあ、自分の自信作が部活の雑誌に載った事もあったしな」

らん「それってどんなお話!？」

デイケイド「世界中のフルーツを食い尽くすドラゴンの話」

又腹の虫が鳴る。このパターン……又ゆいだな。

ゆい「咲夜君の話聞いてたらハラペコった〜」

デイケイド「いいところでハラペコらないで!？」

ここね「それで、その作品は如何なったの？」

デイケイド「ああ、それか。自信作を部の先輩に見せたところ、あの意味に指摘されて、改めて読んでみたところ、その言葉通りだった。『如何して自分で気付かなかったんだ』と思う様になった挙句、人魚を夢見ながら『空想の存在』として遠ざかり、自分の作品までも『つまらない御伽話』と自信を失って文学部も辞めてしまった。そんな自分の過去に縋りながら自分の気持ちを受け入れられなくなっていたが……俺達と出会って、今は何かしら執筆に励んでいるそうだ」

ローズマリー「その子は『誰が見ているか分からないから勿論気を付けてやらなきゃ!』って思ったのね。兎に角、ブンドル団のやり方が腹立つわ!」

ローズマリーも同じくキュアスタの悪用を憤りを感じていたのか、華満にその事を主張しなかったのだろう。

ゆい「ご飯かパンだけで悩むな。迷った時は饅飩もある!」

ローズマリー「ご飯?」

ここね「パン?」

らん「饅餡？」

デイケイド「俺は？」

ゆい「御免。考えてなかった」

デイケイド「せめて『お菓子』って言えよ!？」

俺は『無い』って… エグゼイドの基本形態『マイティアクションX』はお菓子の国を冒険する横スクロールアクションゲーム。だから基本的にお菓子と言っても過言じゃない… 筈。

ゆいがコメコメ達エナジー妖精を俺の頭の上に乗っけながら後押しする様子に華満は優しく微笑む。

ゆい「お婆ちゃん言ってた… 『迷った時こそ他に何か良い方法がある筈だ』って！」

□

DIEND SIDE

僕達はこの世界のマクドナルド『THE DINER』に来ている。ダイナーとも読めるけど、何方でもいいや。

レシピツピ「ピツピ」

レシピツピ「ピピピ」

マクドナルドと言えばハンバーガーとフライドポテトは確定となる。因みに僕はフライドポテトが一番好きかな。ハンバーガーはダブルチーズ派。

ジェントルー「ブンブン、ドルドル、ブンドルー！」

「ピピピく！ピピピく…」

そんな事を考えていると、ジェントルーは捕獲箱でハンバーガーとフライドポテトのレシピツピを捕獲した。

□

DECADE SIDE

らん「はにや？何の音？」

デイケイド「レシピツピが捕まったか！」

ハートキュアアウトチがレシピツピの危機を知らせ、捕まったのはハンバーガーとフライドポテトのレシピツピだ。液晶画面に触れるとリーダー機能が居場所を特定してくれている。

ここね「場所は『ハンバーガー ダイナー』…近いわ！」

らん「らんらんが前、キュアスタに載せたお店…！」

ローズマリー「いつけない！それを知らせに来たんだった！」

デイケイド「肝心な時に忘れちゃめーよ！兎に角、現場に向かうぞ！全員乗れ！」

ローズマリー「いや、直ぐ近くから乗らなくても…」

デイケイド「いいから黙って乗れ！」

俺は変身解除してオーロラカーテンで呼び出したマシンデイケイダーに跨り、ゆい達全員をぎゅうぎゅう詰めに乗せて被害現場に急行

する。

咲夜「それで、何で俺達にそれを知らせに来たんだ？」

ローズマリー「ブンドル団の足取りを私なりに追っていたの。そうしたら、キュアスタには載ってはいるけどまだ狙われていない場所があつて……」

ここね「それが此処？」

ゆい「ジェントルー！」

ジェントルー「やはり邪魔をしに来たか……」

ディエンド「既にレシピツピは頂いてたよ」

らん「まさか、又味が……!？」

俺はジェントルーとディエンドの姿を目撃するとマシンディケイダーを止めながら対峙すると、ハンバーガー屋の店内に駆け付け、様子を見る事にする。

客A「何だこの味!？」

客B「ポテトもハンバーガーも突然変になったぞ!？」

咲夜「皆さん、何かあつたんですか!？」

状況を確認するべく客達に声を掛けてみる。

客A「君が仮面ライダーの門津君だね？如何やら今度はハンバーガーショップがブンドル団の被害にあつたそうなんだ」

咲夜「心配しないで下さい。俺が必ず料理の味を取り戻してみせます」

客B「頼りにしてるぞ仮面ライダー！」

客C「悪い奴らをやっつけて！仮面ライダー！」

咲夜「安心しろ坊主。叔父さんが必ず、料理の味を取り戻すから」
まあ、実年齢は100歳越えのジジイだけど。

ジェントルー「出でよ、ウバウゾー！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

俺が少年の頭を撫でていると、ウバウゾーが召喚される。今回はフライ返し。

俺は直ぐに店内にいた人達全員を安全な場所へ避難させる。

ウバウゾー「ウバウゾー……」

ローズマリーは既にデリシヤスフィールドを展開させていた。
ローズマリー「デリシヤスフィールド!!」

咲夜「!」

次の瞬間、俺はウバウゾーから目を逸らすと木陰こかげでその光景を目撃する品田と目が合う。

しかし、目が合ったのはごく僅か。俺達はデリシヤスフィールドへと転送されていった。

ゆい「皆、行くよ!」

「「うん（おう）!」」

□

「プリキュア! デリシヤスタンバイ! パーティーゴー!」

□

ゆい「にぎにぎ!」

コメコメ「コメコメ!」

ゆい「ハートを!」

コメコメ「コメコメ!」

□

「ここね「オーブン！」

「パムパム「パムパム!!」

「ここね「サンド！」

「パムパム「パムパム！」

□

「「シエアリンエナジー!!」

□

「コメコメ「コメ〜！」

□

「パムパム「テイステイ！」

□

「コメコメ「コメコメ！」

□

「パムパム「パムパム！」

□

「プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

□

「スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

□
メンメン「メン！」

らん「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー!!くるくる！」

メンメン「メンメン！」

らん「ミラクル！」

メンメン「メンメン！」

らん「シエアリンエナジー！」

メンメン「ワンターン！」

咲夜「ブフォツ!？」

□
メンメン「メンメン！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

□
ディエンド「営業停止にしたいけど、これは止むを得ないね」

【カメンライド 王蛇！】

【カメンライド ゲンム！】

『マイティアクション… エーツクス！』

ディエンドもディエンドライバーの銃口『ブツカーマズル』から放つ三原色から二体のライダーを实体化させる。

牙に猛毒を持つと言われている毒蛇 コブラを模した鉄仮面を持つライダー。頭部と胴体には金の刺青いれずみが入っており、同じく腰に巻かれている銀のベルト『Vバックル』に差し込まれている紫のカードデッキにはコブラの紋章が描かれている。

もう一体はエグゼイドと同じ姿で、くの字が三つに並ぶ黒いヘッドパーツの頭部。ゴーグルに目を覗かせ、オレンジだったエグゼイド

だったのに対し、此方側は赤い複眼。背部には同じ顔の装甲が付けられ、黒い胸部はHPが表示されているゲームコントローラーのような装甲。黒いアンダースーツの左足には三本、紫のラインが雷の様に走り、右手にはAとBのアルファベットが書かれたチェーンソーの様な武器『ガシヤコンバグヴァイザー』を手に持っている。

凶悪殺人犯が変身する冷血漢『仮面ライダー王蛇』と、元社長で嘗て人類の命を脅かした自称‘神’、『仮面ライダーゲンム』。

ゲンムが召喚された事で、チョコブロックに類似した置物が幾つか設置される。

王蛇「此処か？次の祭りの場所は…！」

ゲンム「此処は何処だ？私は確か、愛する父と共に消滅した筈…」
デイエンド「ああ、地獄で罰受けてる最中御免ね。急に呼び出した
りして」

ゲンム「…成る程。君が私の才能が欲しくて此処へ呼んだのか？」

デイエンド「いや、そんな理由で呼んでないです」

王蛇「それより早く戦わせろ…俺は吉木と戦いたくてイライラして
たんだ…！」

咲夜「浅倉…黎斗社長…！」

俺は二人のライダーに対して歯を食い縛る。黎斗社長は兎も角、浅倉は悪知恵が良いからな。苦戦はしそうだが、油断は禁物だ。

ジェントルー「私の主義に反するが、今回は容赦しない。やれ、ウ
バウゾー！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ジェントルー「君はゲンムだったな。デイケイドの相手は任せた」
ゲンム「君の命令に応じるつもりはないが、今回だけは了承しよう。

私には幻夢コーポレーションを復活させる夢がある。その為には
デイケイドの力が必要不可欠だ」

咲夜「生憎だけど貰わせるつもりはさらさらない。俺の力は俺の力
だ、あんたに並行世界を渡られたら此方が面倒だからな。変身！」

【カメンライド デイケイド！】

俺はデイケイドに変身する。

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダー…！」
王蛇「そんなのはいい！」

『ADVENT』

台詞を仕切る様に浅倉は手に持つコブラの全身を模した小杖『牙召杖^{がしやうじょう}ベノバイザー』を展開させ、カードデッキから『アドベントカード』を引き抜く。

【アタックライド イリユージョン！】

スロットに装填しながら押し込むと、錐^{きり}状の尻尾を持つコブラのミラーモンスター『ベノスネーカー』を召喚させ、俺は銃モードにしたライドブツカーで王蛇を後退させながらイリユージョンで三人に分裂し、俺はプレシヤス達の援護に向かう。

デイケイドA「二人共！そつちは任せた！」

ゲナム「させるかアツ！」

ゲナムはガシャコンバグヴァイザーの銃身を向けながら俺にビームガンで妨害しようとするが、Cが剣モードのライドブツカーで豪快な剣捌きで斬り裂く。

デイケイドC「お前らの相手は俺達だ！」

王蛇「吉木…やはりお前は俺をイライラさせてくれる…！」

ゲナム「君のデータを…私の会社を復活させる糧となつてもらう。例えば、私がコンティニューをしてもオツ!!」

デイケイドB「だったら俺達は…ノーコンテニューしてもクリアしてやる！」

俺とBはライドブツカーから取り出したのはすらんとした体格のエグゼイドと、Cが取り出したのは赤い猛禽^{もうきん}類の頭部を持つ明日を掴む為に手を伸ばす旅人。

【フォームライド エグゼイド レベル1！】

【カメンライド オーズ！】

『アイム ア 仮面ライダー！』

『タットバ！タットバ！タットバ！』

Bはエグゼイド レベル1へ。Cの周囲には三つのメダルのオー

ラが赤・黄・緑に並び立ち、その姿を変える。

猛禽類を模した緑の複眼を持つ赤い頭部、黄色い縁取りに折り畳まれている鉤爪を持つ胴体、そして緑のラインが走る昆虫の脚を模した緑の脚部。金に縁取られている胸部の円形プレートには鷹たか、虎、飛蝗ばったの姿が描かれていた。

明日へ向かう旅人『仮面ライダーオーズ』へと姿を変えたBは両腕の鉤爪『トラクロウ』で切り裂きながら王蛇と交戦し、俺はゲンムと対峙した。

ゲンム「… エムと同じ姿か。だがその姿はレベル1。私に勝てるとでも？」

デイケイドB「勝てるさ。俺も嘗て、あんたとは違うゲンムと戦ったんでな」

俺は足を動かし、攻略法を考えながらゲンムに向かって行く。

□

DECADE A SIDE

デイケイドA「悪い。遅れた！」

ローズマリ「貴方はAね！プレシヤス達の援護をお願いするわ！」

デイケイドA「勿論、承知の上だ！」

ヤムヤム「バリカッターブレイズ！」

ウバウゾー「ウバウゾー」

ヤムヤムは駆け出し、両手から生成した刃のエネルギーを投擲とうてきさせるが、ウバウゾーの両脚によって弾かれてしまい、体を捻りながら避ける。

ヤムヤム「はにゃ！」

メンメン「跳ね返したメン…」

当然傍観するわけにもいかず、スパイシーはピリつとのサンドプレスで動きを拘束させようとするが、ウバウゾーは難なく排撃はいげきする。正に攻防一体。プレシヤス達の体力を消耗させる気だな。

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

スパイシー「あっ…!」

プレシヤス「はあああーっ!500キロカロリーパーンチ!!」

強力な打撃をウバウゾーの頭部に当てるが、跳ね返されると同時に投げ飛ばされ地面に直撃…と思いきや、片手逆立ちでダメージを抑えていた。流石化物並みの身体能力の持ち主だ。

プレシヤス「ぺろんって跳ね返されちゃったよ…」

コメコメ「コメ…」

デイケイドA「俺も見てるだけじゃダメだな」

【カメンライド ウィザード!】

『ヒーヒー!ヒーヒー!』

【アタックライド バインド!】

赤い魔法陣を潜り抜けると、銀に縁取られる黒いローブ。頭部と胸部は赤い宝石 ルビーの様に煌めかせている。

絶望を希望に変える指輪の魔法使い『仮面ライダーウィザード』へと姿を変えた俺は更にライダーカードを装填し、試しにウバウゾーの足下から出現させた炎の鎖で動きを封じると同時に火傷によるダメージを少しずつ負わせる。

だがウバウゾーは火傷に耐えながら抵抗し、プレシヤスとスパイシーの攻撃を難なく跳ね返す事に専念する。

スパイシー「攻撃が全部… 跳ね返されてしまう!」

デイケイドA「今回はちゃんと特性を活かしているな、ジェントルーの野郎!」

ジェントルー「何をしても無駄。暖簾のれんに腕押しだ」

ローズマリー「兎に角、あの動きを封じなきゃ!」

デイケイドA「いや、今封じてるって!クソッ、両脚さえ拘束出来れば何とか出来るのにな…!」

ヤムヤム「はわわ、何か方法は…!」

頭を抱えている暇も無く、ウバウゾーの足から距離を取るが地面に亀裂が走り、危うく転びそうになる。

ヤムヤム「はにや!とつとつと。危なかった…!」

地面の亀裂を見て何かを思いついた様だ。

ヤムヤム「さっきの亀裂…！若しかして、ご飯でもパンでもお菓子でもないって…そっか！」

ローズマリー「ヤムヤム!」

デイケイドC「如何やら見つけた様だ。ウバウゾーの動きを止められる餛飩を」

「『餛飩!』」

ローズマリー「って、何それ!?!」

ヤムヤム「バリカッターブレイズ!!」

ジェントルー「学習能力のない…」

デイケイドC「それは如何かな?」

ジェントルー「何?…!」

クソ花に似た様な言葉を放つジェントルーに構わず、ウバウゾーの真上に飛び上がったヤムヤムは距離を置きながらバリカッターブレイズを真上から連続で放つ。

ヤムヤム「サービス増し増し!」

遠距離での連続攻撃で地面に亀裂を発生させる事でフライ返し of 弾力性を封じる。

ウバウゾー「ウ、ウ、ウバウゾー!」

スパイシー「動きを止めた!?!」

ローズマリー「これでもう跳ね返せないわ!」

プレシヤス「これが…ヤムヤムが見つけた餛飩なんだ!」

プレシヤスが言うに地面はどんぶり、亀裂は餛飩の麵、そしてウバウゾーは葱という事か。

デイケイドC「仕上げは任せろ!」

「フォームライド ウィザード ランド!」

『ドンドンドンドドドドドンドンドンドドドドドドンドドドドド!』

【アタックライド グラビティ!】

黄色い魔法陣を通り抜け、赤い宝石から黄色い宝石に変わり、四角い頭部のウィザード『ランドスタイル』へとフォームチェンジし、右手を翳すと重力でウバウゾーを押し潰し、更に左足のフライ返し地面

に食い込ませる。これで完全に動きは封じた。

□

B SIDE

俺はゲムムと交戦している。ゾンビの様な動きで翻弄しつつ、ギューンと鋭い音を立てながらチェーンソーの刃を振るってくる。ずんぐりな体では避け難く、ライダーカードを装填する隙がない。だってら…！

【アタックライド リフレクト！】

『液化化！』

赤色のメダルのエネルギー『エネルギーアイテム』が吸い込まれ、両手を翳すと結界が発生。反射された銃撃が着弾する直前にブロックをガシャコンバグヴァイザーで壊し、ゲムムは緑色のエネルギーアイテムを獲得。体を液化化させる事で攻撃を無効化させる。

『透明化』

ゲムムは水色のエネルギーアイテムを獲得した効果で一時的に全身を透明化させると、『Hit!』、『Hit!』、『Hit!』と斬撃を浴びせる。

『ガシャコンブレイカー！ジャッキーン！』

【アタックライド ルミナス！】

俺は冷静に対処し、ハンマー型の武器『ガシャコンブレイカー』のAボタンを押して剣先を露出させ、逸らし合う刃先と剣先が胸部装甲に『Hit!』『Hit!』

』と火花を散らす。

更にライダーカードを装填し、ラベンダー色のエネルギーアイテムの効果で全身から強烈な光を放つ。

ゲムムの目を晦ましている隙に飛び蹴りで蹴り飛ばし、ライダーカードを装填する。

デイケイドB 「大変人！」

【カメンライド エグゼイド！】

『マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション

X!」

変声と共に等身大のピンクのパネルが通り過ぎると、ずんぐりな白い体格からゲンムと同じ体格のエグゼイド レベル2へとレベルアップした。

デイクライドB「行くぜ!」

俺はガシャコンブレイカーを手に、バグヴァイザーの銃撃を弾きながら距離を詰め、ゲンムの鳩尾みぞおちに蹴りを入れてエグゼイドお得意のアクロバティックで宙返り。

剣先を再び露出させて二度の斬り付けと共に『Hit!』のエフェクトが表示され、ゲンムを転げ倒す。

「ファイナルアタックライド エ、エ、エ、エグゼイド!」

『MIGHTY CRITICAL FINISH!』

アニメ仕様のエフェクトが付加ふかされたガシャコンブレイカーの刀身を振り下ろし、ゲンムを一刀両断にする。

ゲンム「私と父との愛は… 不滅だあああッ!!!」

断末魔と共にゲンムは爆散した。

□

C SIDE

デイクライドC「ガタキリバ解禁したいけど、今回は無しだ!」

「フォームライド オーズ ブラカワニ!」

『ブラカワニ!』

荒々しく錐状の剣『ベノサーベル』を手に持ちながら荒々しい剣撃を振る舞う王蛇と蛇行しながら襲い掛かるベノスネーカーの攻撃を避け続ける俺はライダーカードを装填。蛇の尻尾が巻きつかれた様なベージュの頭部はターバンを思わせる紫の複眼。オレンジの胴体は亀の甲羅を分割した様な盾となり、脚部は鋸状で、鰐あじの上顎と下顎あごを連想とさせている。

デイクライドC「ゴーラシルデュオ… からのカペロブラッシュユ!」

オーズ ブラカワニコンボとなった俺は縦笛『ブラーンギー』を片手で吹きながら両腕の盾『ゴウラガードナー』を防御体制で重ね、全長10mのエネルギーシールドを展開させ、ベノスネーカーの襲撃を防ぐ。

この時、両手首だけ交差させながら吹いている。コブラヘッドの後頭部下にある蛇の尻尾状の装飾てうしよくがコブラに変化し、背後に迫る王蛇を締め付ける。

王蛇「ピーヒャラピーヒャラ騒がしいな!!ますますイライラしてきやがる...!」

笛の音に耐え切れず憤慨する王蛇は自身を締め付けるコブラに抵抗する。

ブラーンギーを再び吹くと今度は片足に巻き付き、地面に引き摺らせながらベノスネーカーの中央に直撃させる。

デイケイドC「俺のぼっちゃんが言っていた。『夜に口笛を吹くと蛇が来る』とな。これで終わりだ、浅倉!」

「ファイナルアタックライド オ、オ、オ、オーズ!」
デイケイドC「ワーニングライド!」

体制を崩した隙に俺はファイナルアタックライドのカードを装填し、両足蹴りの体勢で三つの橙色のリングを潜り抜けながら地面を高速でスライディング。

デイケイドC「ハイヤー!!」

王蛇の目前で飛び上がると、鰐の頭部のエフェクトが入った両足で挟む様に飛び蹴りを放つ。勿論、ベノスネーカーも巻き添えにして。

王蛇「俺はまだ戦えるぞ... なあ吉木。また昔の様に殺り合おうぜ... 昔みたいに...!」

まだ戦える事を主張する王蛇だが、ダメージの限界をは逆えず、消滅してしまった。

デイケイドC「浅倉... 済まない」

奴を救えなかった北岡さんの気持ちを考えると、自然と謝意の言葉が出てしまう。

□

B SIDE

メンメン「ヤムヤム。今メン！」

ヤムヤム「分かった！プリキュア・ヤムヤムライズ!!」

ウバウゾー「お腹一杯！」

「ご馳走様でした！」

ウバウゾー撃破に伴い、レシピツピが解放される。

「ピピピく!!」

ヤムヤム「おかえり」

ジェントルー「くっ…！」

ウバウゾーの特性を意識していたのか不覚を取ったジェントルーは姿を消した。

キュルルル…

プレシヤス「ハラペコった〜」

デイケイドB「これで二回目だぞ？」

デイケイドC「そういえばAの姿がないな…」

デイケイドB「確かに…！」

Cの言葉に俺は辺りを見渡してみるが、Aの姿は何処にもなかった。

ヤムヤム「皆でハンバーガー、テイクアウトして帰ろ〜」

デイケイドB「テイクアウト…？それだ！」

ヤムヤム「えっ？ああーっ!!」

自身の提案でハンバーガーを買おうとしたヤムヤムだが、俺の一喝で声を上げた。

□

A SIDE

〜回想〜

『アタックライド スモール!』

『アタックライド テレポート!』

ウバウゾー浄化後、俺はウィザードリングの効果で体を縮小化させ

てジェントルーの足元に瞬間移動し、マントに掴まっていた。

く回想終了く

デイケイドA（そろそろ頃合いだな）

俺はマントから手を離しながら転がり、路地裏を苦しそうにふらつきながら歩くジェントルーの姿を見る。

シルフハットが足元に落ちると、右側の壁に身を支えながらアイマスクを取ると、濁った紫の光に包まれると、ジェントルーの正体らしき少女の姿が。

紫色のリボンを付けた長袖の白いブラウス。紐部分には大きめの薄紫のフリルを付け、紫の裾すそに薄橙色のラインが入った長い吊りスカートを着用している。その黒がかった紫の長髪をみれば分かる。確か、新鮮中の生徒会長——

菓彩あまね。

デイエンド「如何やら知ってしまったみたいだね。彼女の正体を」

デイケイドA「！」

ゲナム「君は知り過ぎた・・・」

その光景を目にすると、背後に声がした方へと振り向く。其処にはデイエンドと横たわりながらパッドモードにしたガシヤコンバグヴァイザーの銃口を胸部装甲に突き出すゲナムの姿が。

ゲナム「デイケイドの持つ破壊とやら力を・・・利用させてもらおうかあああッ!!」

デイケイドC「うっ!?ぐあああああああああッ!!!」

ゲームのバグヴァイザーによって、デイケイドのデータを収集されてしまった俺は夕暮れ時の空に悲痛の声を上げる事しか出来なかった。

□

デイケイドC「今日はオレンジジュース！俺と乾杯！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY

DAY S♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩き

ゆい「そしたら、皆でパーティーしよう！」

「咲夜（アキぽん）！選んで!!」

咲夜「『備えあれば憂いなし』ってな！」

第九品：噛み合わない二人？ここねとらんの合わせ味噌！／デイケイド弱体化!?分割された破壊者の力！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第九品：噛み合わない二人？ここねとらんの合わせ味噌！／デイケイド弱体化!?分割された破壊者の力！

□

DECADE A SIDE

デイケイドA「うっ!ぐっ!」

ガシヤコンバグヴァイザーの収集に抵抗し、俺は地面に手を付いてしまう。

よく見てみると、ゲームの情報データがない空の白いライダーガシヤットがスロットに装填されていた。

デイケイドA「あんた、俺に何をした!」

ゲムム「君が持つデイケイドの力の半分を…データとしてガシヤットに収めた」

デイケイドA「なっ、何だって!」

デイエンド「彼女の正体を知ろうと後を追わなければ、力を奪われずに済んだのにね。君の性格を上手く利用出来て幸いだったよ」

デイケイドA「俺の力を返せ!!」

俺はバグヴァイザーに装填しているガシヤットを奪おうとゲムムに飛び掛かるが、デイエンドの銃撃で阻まれてしまう。

デイエンド「帰るよ社長さん。ゴードッツに朗報を伝えに行かないと」

ゲムム「了承した。まずはゴードッツとやらに会うのが妥当だとうの様な。デイケイド、次に会った時は私か君か…何方が破壊の力を制するに相応しいか決めるとしよう」

「アタックライド インビジブル!」

アクロバティックで跳躍ちようやくしたゲムムに合わせて背後を振り返ると、デイエンドがジェントルーの正体でもあった生徒会長の肩を置きながら姿を消した。

デイケイドA「まさか…な」

ありえもしない衝撃の真実を突きつけられた俺は、オーロラカーテンでゆいの家に移動した。

□

Sakuya side

後日、華満にキュアスタは辞めるのかと質問してみた結果『テイクアウト』する事となった。

要するに、美味しい店を紹介しつつ持ち帰りの奨励しょうれいでほかほかハートの過剰反応を予防をすればレシピが誘き出されて誘拐されることはないとの事だ。

メンメン「流石らんちゃんメン！」

「コメ（パム）！」

ローズマリー「それはそうと、アイコンもリニューアルしてみたなら？」

咲夜「おつ、それいいな！」

らん「はう〜！マシマシに美味しそうな写真にする〜！何れがいいかな？」

ハートキュアウオッチの液晶画面をタッチし、これまで撮った写真を表示する。

ゆい「うわあ！全部美味しそう〜！ここねちゃんは何れがいいと思う？」

ここね「私はこれが…。」

ここねが指差したのはぱんだ軒に配置されているパンダの写真。
らん「やつぱお勧めは麺類かな〜?」

ここね「あつ…!」

らん「麺といえばラーメン!ラーメンといえば… あつ!御免。こ
こぴーは何れがいいと思う?」

ここね「パンダ」

らん「ほえ?パンダ?」

ここね「可愛いし、目立つから目に止まる」

らん「はう〜?らんらんは美味しそうな方に目が行つちやうんだ
よなあ…」

ここね「パンダでフォロワーが増えるかも」

らん「うーん。でもぱんだ軒の一押しとしてはラーメンだし…」

ここね「パンダも一押し…」

咲夜「意見が…」

メンメン「全く合わないメン…」

美味そうだからラーメン、可愛いからパンダ。意見が噛み合わない
二人の様子に俺とドラジカは呟く。

それに俺は一昨日の華満と同様、皆に真実を黙秘もくひした状態だった。
ジェントルーの正体を掴んだのは良いが、俺の身勝手な行動一つ
で…

ディケイドの力の半分が、ブンドル団側に奪われた事を。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメージOP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Men men side

らん「ふにやく… どうしよう…」

メンメン「ラーメンにしないメン？」

らん「でも、ここぴーの言う事は「そうだな」って思うし。今日もらんらんのお喋りのせいで邪魔しちゃったしなあ…」

僕は自室のベットで横たわっているらんちゃんに何でちゆるりんのアイコンをラーメンにしなかったのかを聞いてみたメン。

実は昨日、ここねちゃんが『少年パン偵団と怪盗二十面相』という小説を読んでいたところを、らんちゃんが本に描かれていたパンを見て「何のパンが好き？」って話をしていると放課後が終わっちゃったといったところメン。

らん「はうう〜！らんらんってお喋りだよね〜!!」

メンメン「其処がらんちゃんの良いところでもあるメン」

らん「けど、お友達とは話を合わせた方が良いつて言うし…よし決めた！今度からここぴーの話をちゃんと聞く！聞く、聞く、聞くぞー！おー!!」

メンメン「メン…」

僕がそう励ましてあげるも、まるで話を聞いてない様な事を決心したららんちゃんに冷や汗を掻いたメン。

□

P a m p a m s i d e

ここねが『おともだちD A モン』という番組を見ていたパム。

パムパム「やっぱり仲良しが一番パム」

ここね「…私、らんに見し過ぎたかな？」

パムパム「パム？」

ここね「思った事を押し付けて、困らせたかも。ラーメンの方がらんっぽいのに…お友達なら意見を合わせなきゃ…！」

パムパム「パム…」

そんなここねの様子をパムパムは不安に思ったパム。

□

Sakuya side

ゆい「ここねちゃんたらんちゃんが？」

パムパム「昨日の事を気にしてたパム」

ゆい「そうだったんだ…」

咲夜「大体分からなくもないが、それで態々わざわざ俺達の方へ相談しに来たど？」

俺とゆいはクソ犬とドラジカが昨日の出来事を聞いていた。自分の尻尾で戯じゃれているコメコメは置いておきたいけど可愛い。

メンメン「だから、二人が上手くいく切っ掛けを何か作ってあげたいメン」

ゆい「そしたら、皆でパーティーしよう！」

咲夜「丁度ローズマリーが華満にグラスを渡したと言ってたからな」

メンメン「楽しそうメン！」

パムパム「たこ焼きパーティーがいいパム！」

コメコメ「コメ！」

俺達の意見に賛同してくれたエナジー妖精組。

ゆい「いいね！ハラペコった〜！」

「「「「おー（コメ〜）！」「」」」」

□
D I E N D S I D E

セクレトルー「レシピツピの捕獲は如何なっているのですか？」
ジェントルー「申し訳ありません。情報源が様変わりしてしま
い・・・」

おばさんにレシピツピを失敗続けに献上出来なかった事を問い詰
められるジェントルー。

けど、デイケイドの力の半分を奪えた事は上出来だとゴータツツに
称賛された事は言うまでもなかった。

ある意味、ゲムムの社長は本来ならデイエンドライバーにあるカー
ドをスロットから抜く事で実体化は解除されるが、何故か未だに実体
化している状態だ。カードに強い自我が保った事による影響なのか
も僕にも未知数に等しい。あの時、デイケイドが倒したゲムムの社長
はエナジーアイテム『分身』で作った偽物だった。

??? 「何？苦戦中？つてか、いつも苦戦してるか」

キュアスタを利用出来なくなった以上、打つ手はないのかと苦悩し
ていたところを、緑色の長髪を結んだ紳士風の服を纏う八重歯の男性
が挑発する様な態度でジェントルーに話し掛ける。

こいつもジェントルーや叔母さんと同じくブンドル団の一人だ。
セクレトルー「ご無沙汰ですねナルシストルー。礼の物は完成した
のですか？」

ゲムム「礼の物だと・・・？」

ナルシストルー「まだ試作品だけだな。ま、俺様は天才だから略完ほぼ成しちやつてるけど」

ゲムムの社長は声を上げると、ナルシストルーは開発した捕獲箱を取り出す。

唯一の違いは四角い形状の黒いカラーリング。ブンドル団のマークの上下に緑のラインがあり、左上にはレーダーの様な機能が搭載されている。

セクレトルー「そうですか… っていうか、天才ならとつくに完成してるし」

デイエンド「確かに」

ゲムム「奇遇だな。私も君と同じ様に、ある物を作った…」

ナルシストルー「ほう… 一体如何いう物なんだ？」

『ガツシューーン！』

意見が一致し、興味を示したナルシストルーにゲムムの社長は左手にあるバグヴァイザーからガシャットをスロットから外す。

先程白かったライダーガシャットがマゼンタと黒の色合いに変色。

表面には自身の開発会社『幻夢コーポレーション』のロゴがGCと白く描かれている黒い縁取りのシールの内側には『BARCODE WARRIOR DECADÉ』のタイトルと、白いデイケイドライダーだった頃のデイケイドがクウガのライダーカードを突き出しながら構えている姿が描かれている。其処は『NEO』とか『ZERO』じゃないんだ。

ゲムム「このライダーガシャットにはゴータッツに報告した通り、奪ったデイケイドの半分の力が内包ないほうされている。ゲームマスターの私なら、この力を使えるに等しい…」

セクレトルー「それはお手柄ですね。っていうか、ゲームマスターならさっさと使えっつーの」

ナルシストルー「へえ、結構やるじゃん。若しかしたらお互い良いライバル関係になれそうかもな」

ゲムム「ライバル関係か… 興味ないな。私の夢は『幻夢コーポレーションの復活』。君達には『全ての料理をゴータッツとやらに捧

げる』という夢があるのだろうか?」

ナルシストルー「ふっ… 言ってくれるじゃないか。俺様の物とお前の物… これが正式に使えらなかつたら、使い物にならないジエントルーは用無しだな。ま、今回の手柄は褒めてといてやるよ」

ジエントルー「くっ! 今度こそ必ず…!」

侮辱され^{から}揶揄^{から}われたジエントルーは早々と去って行く。

ナルシストルー「勇ましいね。プリキュアとディケイドに宜しく」
セクレトルー「それでは、せーの!」

「「ブンドル、ブンドルー!!」」

ゲンム「…?」

セクレトルー「貴方もやりなさい」

ゲンム「… 私が必要な下らない儀式に付き合っているつもりはない。後に続け、レグレット」

ディエンド「貴方を召喚した僕が振り回されるの何か地味だなあ…」

冷静に対応するゲンムの社長は儀式を否定すると、僕は彼の後を追う様に去って行った。

□

Sakuya side

クソ犬とドラジカの双方による意見でここねと華満を^{しんぼく}親睦させるべく、ゆいの家でたこ焼きパーティーを開く事になった当日。

ここねがデツカイ蛸たこを差し入れする。本人に聞いてみたところ、採れたて新鮮な物を空輸くうゆで届けて貰ったという。色々とヤベーなお嬢様って。

ローズマリー「さ、乾杯の前に…」

らん「ん？」

ローズマリー「友情の証よ」

らん「…うわあく！お揃い!?有難う〜!」

笑顔でクツキングダム製のグラスを贈呈ぞうていするローズマリー。ポーつとしていた華満だが、ゆいとここね、俺の分のグラスを見て謝意を浮かべながらグラスを貰った。

ゆい「それじゃあ改めて…これから皆で力を合わせて頑張ろう!

乾杯〜!」

乾杯後、たこ焼き作りは華満が担当する事にした。

らん「やるのは任せて。らんらん得意なんだ〜!」

ローズマリー「手際がいいわね…!」

ローズマリーが驚く程の手際でたこ焼きを作る。

らん「少々お待ち下さい〜!」

ゆい「楽しみ〜!」

らん「そうだ!アレも入れよう!」

ローズマリー「如何してたこ焼きパーティーにしたの?」

華満が隠し味か何かを取りに行っている間にたこ焼きパーティーをしたのかをローズマリーは問う。

パムパム「ここねが『お友達とやりたい事リスト』にあったパム」

ここね「…見たの?」

パムパム「パムツ?!机に隠してあったのを勝手に見てなんていないパム!」

冷徹な視線を向けたここねに冷や汗を流すクソ犬。だから昨日、たこ焼き作ろうって言ったのか。

これは俺の本音だが、ポンコツキャラは女性好みの一つ。

ローズマリー「見たのね?」

いや、この笑顔で言ってるお前も多少に怖く見えるわ。

らん「出来たよ〜！はいはいはい… どんどん焼くからじゃんじゃん食べて〜！」

ゆい「うわあ〜！美味しそう！」

たこ焼きにはソースとマヨネーズの上で鰹節かつおぶしが踊り舞っている。

「二「いただきます（タードラえモンゴル）！」二」

ゆい「あ〜ん。おお〜っ！デリシヤスマイル〜！」

ローズマリー「ふわふわトロトロ〜！」

メンメン「美味しいメン〜！」

ここね「……」

パムパム「ここね如何したパム？」

たこ焼きの味に感涙していたクソ犬はここねの様子を伺う。

ここね「… 甘い」

咲夜「？」

らん「変わり種も食べたいと思って、甘い系も持って来たんだ〜！

如何？」

ここね「美味しい。けど…」

甘い物は食後に食べる物じゃない？」

咲夜「!？」

らん「えっ？らんらんは先に食べても美味しいと思うけどな…」

疑問を投げ掛け、又もや意見がバラバラになる。

咲夜「不味いぞ。何方に突っ込んでいいのか分かんないけど…」

パムパム「又意見が分かれたパム！」

微妙な空気が流れ始め、ゆいとローズマリー以外の俺達三人は焦燥する。

ここね「うちはいつもデザートはコースの最後にデザートが出るから…。」

らん「あ。ここぴーって好きな物最後に食べるタイプ？若しや甘い物好き…はいやあつ!!ここぴーの言う通り、甘い系は最後が言いかも…うんうん!」

ここね「…ああつ!!でも、偶には先に食べた方が良くも。あむつ。デリシヤスマイル〜!」

ゆいの口癖を真似するここね。今更取り繕ってもギクシヤクしてるのが目に見えてるぞ。

ローズマリー「ここね…?何?急に如何しちゃったの?」

心配しそうに声掛けるローズマリー。その様子にゆいはマイペーにたこ焼きを口に運ぶ。こうなりや最終手段だ。

咲夜「ゆい、ちよつと表出ろ」

ゆい「えっ?」

咲夜「喧嘩売るわけでもないが兎に角表出ろ!」

ローズマリー「一体何なのよ…?」

クソ犬とドラジカを通じて俺はゆいを廊下に連れ出した。

メンメン「二人共様子がおかしいメン」

パムパム「普通に仲良しさんになってほしいパム…」

咲夜「頼む!お前だけが頼りなんだ。せめて何か、為になる様な格言とかないか?お前の祖母ならいっぱい格言を遺していた筈だ!」

ゆい「仲良し…。こんな時、お婆ちゃんが言ってた事があるんだけど…。」

パムパム「何パム!」

咲夜「早くしてくれ！」

ゆい「…それが全然思いつけなくて！」

「ズゴッ（パム）（メン）!?!」

盛大にずっこける俺達。

咲夜「思いつけ、キュアライダーカブト！」

パムパム「如何すれば二人は上手く行くパムッ!?!」

コメコメ「コメコメ！」

「あ（パム）？」

如何やらコメコメも腹減っていた為、人間に化けたそうだ。

華満はハートキュアウオツチの液晶画面に触れると、皿に置かれていたご焼き四つを出す。コメコメの姿に合わせて蛸たこは入っていない。

コメコメ「コメッ！」

ここね「…可愛い」

コメコメ「コメコメ！」

頬が落ちたコメコメに撃ち抜かれる二人の様子を見たクソ犬は方法を思いついたそうだ。

パムパム「パム… 思いついたパム！仲良し作戦その二パム!!」

パムパム「二人にお願いがあるパム」

ゆい「コメコメのお世話をしてほしいんだ！」

らん「はう？二人で？」

ここね「でも、食事のお片付けしないと…」

パムパム「それはゆいとやっておくパム」

ゆい「二人はコメコメを見てて」

コメコメ「コメコメ」

ここね「分かった」

らん「そういう事なら任せて」

パムパム「それじゃお願いパム」

因みに俺はゆいの自室に残る事となった。理由としては二人が仲良くしてるか監視してほしいとの事。

咲夜（監視してほしいって頼まれたとはいえ、俺昨日からストレス溜めすぎてる様な気がするな…）

戸が閉まり、木琴もっせんを叩いているコメコメ。

ここね「らん。甘いたこ焼き、本当に美味しかったよ」

らん「ふふっ」

コメコメ「コメ？コ… ああっ!？」

ここね「コメコメ!」

らん「らんらんにお任せあれ!!」

そんな様子を見ていたコメコメはひっくり返りそうになったところをここねが助け出そうとしたが、華満が近くにあった座布団をカバー代わりにする事で事なきを得た。

コメコメ「コメ〜!」

咲夜「ほう… やるな」

ここね「凄いね、らん」

らん「えへへ。いつも妹と弟の世話してるからこういうの慣れてるんだ」

ここね「偉いね。お店手伝ってるし…」

らん「はにや？全然偉くないよ。いつもお菓子の取り合いとかしてるし」

俺は窓際を通じてクソ犬とドラジカの二匹と共に状況を伺いながら話している。

パムパム「大分良い感じパム」

メンメン「でも、コメコメの様子が…！」

ドラジカの言葉で俺はコメコメの様子を見てみると、今でもぐずりそうになっていた。

パムパム「不味いパム。長い間あの姿でいたから疲れちゃったパム…！」

咲夜「それじゃあ、長くは変身出来ないって事か？」

遂には泣き始めてしまったコメコメにここねはハートキュアウオツチで食事を出そうとする。

ここね「コメコメ、如何したの？何で泣いてるの？お腹空いたのかな…？」

らん「そうじゃないよ。単に眠たいだけかも」

華満はそう言うと、コメコメをあやしなから抱き抱える。その様子をここねは自分で如何すればいいのか困惑する。

ここね「で、でも… 凄い泣いてるし…！何処か痛いのかも」

らん「大丈夫だって。ちよつと疲れちゃったんだよね」

ここね「かもしれないけど… 若しかしたら…！」

らん「もう！ここぴーは心配性だなー」

ここね「慣れてるからって、ちよつと雑になってるんじゃない!?」

咲夜「えっ!？」

らん「雑!? そんな事ないよ！ちゃんと分かって見てるもん！」

ここね「らんは適当な時があるから…！」

らん「ここぴーこそ頭カチコチだよ！」

我慢の限界が来てしまったここねと華満は等々言い合いになってしまった。

『頭カチコチ』とかいうパワーワードは流石に突き刺さるわ。この光景が一番ストレスに来る。

メンメン「メン…！」

パムパム「ゆいを呼んで来るパム…！」

咲夜「その間に俺が何とかする。成る可く強めに言いたくはないが、やれる事はやってやる」

俺はそう言いながら喧嘩になってしまった二人を仲裁すべく、行

動に移った。

□

DIEND SIDE

アイスのレシピツピ「ピピ〜！」

たこ焼きのレシピツピ「ピピ〜！」

僕達二人はレシピツピ捕獲の為、とある現場に来ている。たこ焼きとアイスか。たこ焼きと言えばネクロムかダブル。アイスはオーズくらいだけど、考えてる暇はない。

ジェントルー「二匹か。まあいい…：ブンブンドルドル、ブンドルー!!」

ジェントルーは任務を果たすべく、捕獲箱でレシピツピを二体捕獲した。

□
Sakuya side

らん「ラーメンがいいと思う」

ここね「パンダ」

咲夜「なあお前ら。言いたくもないが、何方も合わせた方が良いと思…。」

「ダメ!!」

咲夜「何でだよ!?普通はこういう時、合わせるのが…!」

らん「じゃあアキぼんはここぴーの味方だって言うの!」

咲夜「いやそういう訳じゃなくて…!」

ここね「このままだと裸地ちが開かない」

ここねが取り出したのはライドブツカー。ってか如何やって分捕ってきた!?

ライドブツカーを開き、二人は一枚ずつカードを取り出す。ここねの手にはパンダとロケットの複眼を持つ白と水色といった鮮やかな色合いのビルド『ロケットパンダフォーム』。

華満には箸はしで麺を伸ばしたカップ麺と、蓋ふたを開けた衝撃で中身が溢れたエナジードリンク…というより、オロナミンCに似ている瓶びんを模した複眼と同じ黄色と赤と云った体色を持ち合わせるビルド。

此方はカップとエナジーだから…『カップエナジーフォーム』!?!ってか、お蔵入りフォームまでカード化されてんのかよ!?!俺、聞いてないぞ…!

ここね「咲夜!」

らん「アキぼん!」

咲夜「…!」

動揺と共に怒りが込み上がってくる。

「咲夜（アキぼん）!選んで!!」

咲夜「…しろよ…!」

「えっ?」

咲夜「お前らしい加減に… うっ!？」

啖呵を切ろうとした俺は急に倒れ込んでしまう。全身を上手く動かす事が出来ず、体の箇所にはノイズが走っている。

らん「アキぽん!？」

ここね「一体何が起こっているの…!？」

ゆい「如何したの!？」

咲夜「今はそれどころじゃないだろ…!？」

ローズマリー「皆、話は後よ!？」

咲夜「兎に角、被害現場に向かうぞ… ローズマリー。悪いがおぶつてくれないか?」

俺は素直に対応し、ローズマリーにおぶられながらジェントルーの後を追う。

ゆい「ジェントルー!」

ゆいの声でジェントルーは立ち止まり、俺達の方へ向き直る。

ジェントルー「来たな。今日こそは…! 出でよ、ウバウゾー!!」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ローズマリー「デリシャスフィールド!」

今回はたこ焼き器のウバウゾー。いつもの様にローズマリーはデリシャスフィールドを展開させる。

ゆい「皆、行くよ!」

「「「ええ(うん)(おう)!!」「」」

□

「「プリキュア・デリシャスタンバイ!パーティーゴー!!」」

□ コメコメ「コメ！」
ゆい「にぎにぎ！」
コメコメ「コメコメ！」
ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□ パムパム「パム！」
ここね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！オー
プン！」
パムパム「パムパム！！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□ 「シエアリンエナジー！！」

□ コメコメ「コメ〜！」

□ パムパム「テイステイ！」

□ コメコメ「コメコメ！」

□
パムパム「パムパム！」

□
プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

□
スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

□
メンメン「メン！」
らん「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」
らん「シエアリンエナジー！」
メンメン「ワンターン！」

□
メンメン「メンメン！」
ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

□
D I E N D S I D E

ナルシストルー「あれがプリキュア…ふん。ディケイドは兎も角、子供じゃないか」

ディエンド「あまり見た目で判断しない方がいいよナルシストルー。ディケイドのゲーム病感染と力の半分を奪って弱体化させたとはいえ、更に秘めた力を持っている可能性が高い。気を抜かないで」

ナルシストルー「分かっているさ。先ずは此処でご満喫って事だろ？勿論、じっくりと見させてもらうつもりさ。奴等の実力の差を…」

□
咲夜「変身！」

【カメンライド ディケイド！】

俺はディケイドに変身する。

だが全身の色は黒味があった灰色。装甲である『ディヴァインアーマー』が紫に縁取られ、複眼は緑ではなく赤に変色していた。

その姿はディケイドの変身者が記憶を失う前の姿にも類似していた。

ディケイド「何でダークディケイド…？いや、確かに似ているけど複眼の色と縁取りが違う！」

ゲムム「ぐははははははははははは！ブウン！」

何処からか現れたゲムムの気怠げな蹴りが炸裂。

俺はローズマリーの足元まで蹴り飛ばされる。

プレシヤス「貴方は確か…」

ディケイド「ゲムム…！」

ローズマリー「貴方ね！咲夜に異常を引き起こしていたのは!？」

ゲムム「それはゲーム病の副作用さ。その色は私のイメージカラーだからね…」

『ゲーム病?』

ディケイド「ゲーム病は…ゲムム達の世代のライダー世界に存在するウイルスに感染した事を示している病気だ…！」

ゲンム「このバグスターウイルスと呼ばれるウイルスには、デイケイドのみに感染する様に仕組んでおいた。直に彼のバグスターが目覚める頃だろう・・・」

デイケイド「何だと？うっ・・・!?!」

ローズマリー「デイケイド!?!」

再び苦しみ出した俺の体を擦り抜けた別の何かが実体化を果たし、ゲンムの元へと並び立つ。

赤い羽を模した鉄仮面、首元には白いマント。右手には赤いレイピア、左手には鋸状の盾を持っている。

??? 「久しぶりだな。吉木 アキノリ」

デイケイド「あんたは・・・アポロのおっちゃん・・・!?!」

??? 「その呼び名は聞き飽きた！私はお前の知っているデイケイド・・・ 門矢士に倒されたが、長い年月を得て復活を果たしたのだ。しかし、それだけではない。今度は違う存在として、再び迷惑な存在として生まれ変わったのだ。今の私は・・・アポロバグスター！」

デイケイド「アポロ・・・バグスター・・・!?!」

ゲンム「昨日、君から奪った力の半分をゲームデータとしてガシャットに保管したと同時に・・・バグスターウイルスを投与とうよさせておいたのさ」

デイケイド「俺がジェントルーの後を追おうとしていた事を知ってでか・・・!?!」

デイエンド「そういう事」

そう言つてゲンムは腰に巻いているピンクのレバーと液晶画面が付いている黄緑のベルト『ゲームドライブ』の右側にあるホルダー『キメワザスロットホルダー』に刺さっているマゼンタと黒のライダーガシャットを、俺の力を盗んだ証拠として『サブガシャホルダー』の下部から抜き取りながら提示する。

スパイシー「力を・・・!」

ヤムヤム「奪われた・・・!?!」

デイケイド「悪いお前ら、俺がジェントルーの後を追おうとしたばかりに・・・」

プレシヤス「咲夜君が責める必要なんてないよ！」

ローズマリー「それにしても、奪われた力は貴方が持っているのよね？」

ゲナム「流石はレシピボン搜索隊隊長。このガシヤットにはデイケイドの半分の方が内包されている。『バーコードウオリアー デイケイド』は、ヒロインの世界崩壊を防ぐ為に九つの世界を渡り歩く冒険アクションゲーム。このアポロバグスターは、このゲームのラスボスを元に誕生したバグスターウイルスだ」

俺の力を奪われた事に困惑するスパイシーとヤムヤムに、ゲナムは俺から奪った力が保管してあるガシヤットのゲーム内容を説明する。

アポロバグスター「若し、耐え難いがたストレスを抱えればデイケイドは消滅し、代わりに私が完全体となって蘇よみがえるのだ！」

ヤムヤム「そんな事……！」

スパイシー「させるわけじゃない！」

デイケイド「……プレシヤス達はウバウゾーを頼んだ」

俺はプレシヤス達に自分の責任を吐露しながら意地でも体を動かし、立ってみせた。

まだジェントルーの正体を言うタイミングじゃないからな。

「アタックライド イリユージョン！」

俺はイリユージョンを使用して三人に分身を果たすが、何故かBとCがノイズが走っているのにも関わらず、何故か問題なしに動いている。

デイケイドA「BとCはプレシヤス達と合流してくれ。黎斗社長とアポロのおっちゃんは俺が引き受ける」

デイケイドB「それはそうだが、本当に大丈夫なのか!？」

デイケイドC「俺達二人は問題ないとはいえ、お前は重症患者も同然の状態なんだぞ!？」

デイケイドA「元はと言えば……！これはお前らの責任でもあり……俺の責任でもある。大丈夫だ……やれるとこまで……足掻いてやるまでだ！」

俺は意地でも立ち上がり、ライドブツカーを構える。

アポロバグスター「そんな状態で私達二人に挑もうなどとは、無駄な抵抗にも程があるのだ」

デイケイドA「如何かな？俺は士さんと同じく、往生際が悪いんでね」

「カメンライド アギト！」

眩い閃光と共に変化させる。金色の装甲に赤い複眼のライダー。人々の居場所を守る『仮面ライダーアギト』へと姿を変える。

デイケイドA「神には神の力だ」

アポロバグスター「同じ神で対抗するなど小賢しい。お前は私が完全復活する為の糧となるのだ！」

デイケイドA「そいつは俺を倒してから言いなよ！」

「フォームライド アギト フレーム！」

カード装填と同時に右腕を赤く変化させる。青い宝玉が埋め込まれ、頭部と同じ触覚のパーツを施した細身の刀身を持つ片刃の剣『フレームセイバー』を手にする。

『アギト フレームフォーム』にフォームチェンジした俺は、アポロバグスターへと向かって行った。

□

B SIDE

ウバウゾー「ウバウゾー！」

ウバウゾーがたこ焼き器を模した両腕から放った弾幕をスパイシーは出現させたパン型のエネルギーで防ぐ。

スパイシー「皆、私の後ろに！」

プレシヤス「これじゃ身動きが取れない…！」

スパイシー「それなら先ず、私のサンドプレスで…！」

デイケイドB「だったら弾幕の処理は俺がする。その隙にCはウバ

ウゾーを！」

「デイエンド「僕を忘れてもらっちゃ困るよ」

「デイケイドB「ー」」

「カメンライド ネクロム！」

「カメンライド バスター！」

不意に聞こえたデイエンドの声と共に召喚音が鳴り響く。

頭部は刀身で真つ二つにされた様なオレンジの複眼を持つライダー。亀の甲羅を模した屈強なグレーの装甲に頭部と同じ刀身をしている大剣『土豪剣激土』どごうけんげきどを担いでいる。

もう一体は 胸部に魂と充血した目を併せ持った刻印が刻まれた機械的な白い素体の上に緑と黒のパーカーを着ている単眼のライダー。左腕には目薬の様な形状のブレスレットを付けている。

『子育て王』と呼ばれた土の剣士『仮面ライダーバスター』と、嘗て眼魔を統べる王だった『仮面ライダーネクロム』はCの行く手を阻む様に押し寄せて行く。

ウバウゾー「ウ、ウバ：：」

弾幕が止まると、ウバウゾーは次の弾幕準備の為に頭頂部の突起を回している。

ヤムヤム「チャンス！」

「デイケイドC「あのバカ！ぐああっ!？」」

ネクロムは体を緑の液状と化すとCに纏わり付き、バスターが助走を付けながら大剣の重い一撃を喰らってしまう。

スパイシー「ヤムヤム、待って！」

ヤムヤム「バリカッターブレイズ！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

その隙を好機と見做したヤムヤムは刃のエネルギーを放つが、重ねた両腕の盾で防がれてしまう。

ヤムヤム「うわっ！弾かれた!？」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ヤムヤム「うわあっ!？」

「二「ヤムヤム!」二」

「カメンライド フォーゼー！」

右腕でヤムヤムを押し潰させまいと、俺は走りながらカードを装填。蒸気を振り払い、デイケイドフォーゼへと姿を変えた俺は、直様ファイナルアタックライドのカードを取り出す。

プレシヤスは飛び蹴りを放つが金属音が強く鳴り響き、余りにも硬度が強すぎたのか全身に響いてしまう。

プレシヤス「かったくい！」

デイケイドB「今度は俺が！」

「ファイナルアタックライド フォ、フォ、フォ、フォーゼー！」

デイケイドB「ライダーロケットドリルキック!!」

俺は右腕のオレンジのロケット武装『ロケットモジュール』のブースターを上昇させて急上昇。

同じく左腕に武装した黄色いドリル武装『ドリルモジュール』の錐^{きり}状の刃を向けると旋回し、ロケットモジュールのブースターで急降下しながらの飛び蹴りを放つ。

ウバウゾーを大きく後退させるも鉄と鉄が打つかり合い、火花が大きく散らす。

ウバウゾー「ウ…！ウバウゾー!!」

デイケイドB「不味いっ…！」

体制を立て直し、再び弾幕を放つウバウゾー。俺にとってはゼロ距離の攻撃に等しいが、冷静に対処しながらライダーカードを装填する。

「アタックライド シールド！」

ロケットとドリルが消滅し、左腕に白い盾を武装しながら攻撃を防ぐも、弾幕の一つ一つが大きい為か今度は俺が大きく後退させられる。

背後を見ると、弾幕の一つがヤムヤムに着弾しようとするが瞬時にスパイシーはパン型エネルギーで防ぐ。

ウバウゾー「ウバツ…！」

ジェントルー「やるな…！」

攻撃が当たらなかつた事に歯を食い縛るウバウゾー。ジェント

ルーも俺達の実力を見て冷静に評価した。

□

C SIDE

デイクイドC「豪快な動きと液状化持ち… だったら！」

【カメンライド クウガ！】

仮面ライダークウガへと姿を変え、再び液状化してきたネクロムを惹きつけながらバスターの重い一撃を避け、ライダーカードを取り出す。

デイクイドC「重量には重量だ！」

【フォームライド クウガ タイタン！】

軽装な赤い鎧から紫に縁取られている銀の鎧へと変化。赤い複眼も紫へと変色する。

『クウガ タイタンフォーム』へと姿を変えた俺はバスターが振り下ろした土豪剣激土の柄を左手で、刀身は右手で抑え付ける。

そのまま右方向へ上から180度に捻り上げながら奪取し、唐竹割りの要領で縦に振るう。

瞬時に土豪剣に異変が起こり、紫の宝玉が埋め込まれている金色の剣『タイタンソード』へと変化させたのだ。

デイクイド「愛剣を失った今、重い一撃を叩き込めない！」

皮肉を言い放ちながらバスターを左右袈裟切りを放ち後退させ、纏わり付こうとするネクロムとの距離を置かせるべく素振りをする。

デイクイドC「お前の相手は後だ！」

【ファイナルアタックライド ク、ク、ク、ク、クウガ！】

デイクイドC「カラミティタイタン！」

俺はタイタンソードの刀身をバスターに突き出しながら胸部装甲に封印エネルギーを流し込む。

エネルギーを流し込んでから右に袈裟切り、左から横切りに素早く斬り付け、封印の古代文字が浮かび上がったバスターはぼやける様に消滅した。

デイケイドC「待たせたな。成仏開始だ！」

【カメンライド 響鬼！】

デイケイドC「はあッ!!」

【アタックライド 鬼火！】

全身を包み込む紫炎しえんを振り払い、頭部の額には鬼の顔と赤い隈取り。

2m近くのをもち、筋肉質にまで鍛え上げた紫の鬼『仮面ライダー響鬼』へと姿を変えた俺はアタックライドカードを装填し、出現した口部から変身時に纏まとわれた時と同じ紫炎しえん『鬼闘術・鬼火』を噴き出し、ネクロムの液状化を解除させる。

【ファイナルアタックライド ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、響鬼！】

デイケイドC「音撃打・火炎連打の型！」

デイケイドライダーから三つ巴を横した鼓面のエネルギーがネクロムに張り付き、両手に鬼の顔に彫ほられた撥はち『音撃棒 烈火』で素早く鼓面を叩く。

面を叩き終わるとネクロムは膝を付きながら消滅する。

デイケイドB「C！終わったのか!？」

デイケイドC「ああ。何とかな」

三秒程の走力でBと合流し、スパイシーとヤムヤムの援護に入るが……。又もや二人の意見が食い違っていた。

プレシヤス「危ない！」

デイケイドC「チッ！」

俺は舌打ちしながらライダーカードを装填しようとしたその時、ジェントルーが頭を抱えている。そして…！

ジェントルー「駄目！」

デイケイド「!?!?!」

ウバウゾー「ウバ？バーツ!？」

制止の声を叫び、標準ひょうじゆんがずれた状態でウバウゾーは焦燥しやうそう。弾幕が放たれ、二人は命拾いをした。

ヤムヤム「助かった…！」

ローズマリー「一体何があったの!?!」

□

A SIDE

アポロバグスター「余所見をしている暇はないのだ！」

デイケイドA「くっ…！」

【カメンライド オーズ！】

『タトバー！タ・ト・バ！』

アポロバグスターとゲンムの二人と交戦する中、俺はデイケイドオーズに姿を変えながらタカヘッドの8km程の視力でジェントルーを識別すると、目の色が赤と青のオッドアイに変化していた。

左目が右より輝きを増してゐるって事は…！

デイケイドA「まさか…な」

ジェントルーの正体に勘付いた俺は、眩きながら戦闘に切り替えると、ゲーム病の改善で前より体が身軽になった感じがしたのは言うまでもなかった。

□

B SIDE

パムパム「だから言ってるパム！」

メンメン「二人共仲良くするメン！」

プレシヤス『『仲良く』… ああっ！』

デイケイドB「何か思い出したのか、プレシヤス？」

クソ犬とドラジカの呼び掛けで気を確かに持つ二人の言葉にプレシヤスは何かを思い出した様だ。

プレシヤス『『違う味が仲良くなれば、味噌も人も旨味が増す』…！』

ローズマリー「何の話？」

プレシヤス「美味しい合わせ味噌のコツ！『味が違えば違う程良い』って、お婆ちゃん言ってた！」

「合わせ味噌？」

ジェントルー「…ウバウゾー！」

ジェントルーの指示で再び弾幕が放たれる。

デイケイドB「弾幕ならお手の物だ！」

「フォームライド ドーライブ テクニック！」

作業者を模した黄緑の装甲を纏い、胸部直上の首回りには緑のラインが付いたタイヤが横向きに備えられているドライブ『タイプテクニック』へと俺は姿を変える。

左手に持つ車の左側のドアを思わせる形の赤い拳銃『ドア銃』と右手に持つ銃モードにしたライドブツカーの二丁銃。シューティングゲームの容量で対抗する。

『チャージー！』

精密射撃が得意な形態とはいえ、ドア銃に弾切れは実在する。

ライドブツカーで撃ちながらドア部分を開閉する事で空気中のエネルギーを生成及び補充させるの繰り返し。

ローズマリー「不味いわね…繰り返しじゃスパイシーとBが疲れちゃう…！」

ヤムヤム「はう〜！如何したら…そうだ。もっと良い方法、良い方法…彼処あそこなら！バリカッターブレイズ!!」

ウバウゾー「ウウツ!？」

弁慶の泣き所を攻撃されたウバウゾーはうつ伏せに倒れる。

デイケイドB「よし！」

ローズマリー「ナイスよ！正面さえ塞いじやえば攻撃が飛んで来ない…！」

ヤムヤム「へへ〜ん。スパイシーの言ってた事を合わせ味噌みそでやってみた！」

ウバウゾー「ウバウゾー…！」

スパイシー「ピリっつ。サンドプレス!!」

ウバウゾー「ウバウゾー！ウウツ!？」

やっと立ち上がったウバウゾーをスパイシーはサンドプレスで真上から押し潰す。

デイケイドC「ちよいと付け足すか！」

【フォームライド ウィザード ランド！】

『ドンドンドン！ドッドドンドン！ドンドッドドンドン！』

【アタックライド グラビティー！】

デイケイドC「スパイシー。ちよつと手重くなるぞ！はあッ!!」

タイプテクニクからランドスタイルに姿を変え、更に重力を付け足しながらウバウゾーを押し込むが、スパイシーの事を考えながら数秒で解除する。

デイケイドC「よし。こんぐらいでいいか」

ヤムヤム「うっひょく！やるうく！」

スパイシー「思い付きも大事」

ヤムヤム「あははっ。へへくん！」

パムパム「何か良い感じパム」

ローズマリー「ゆいの合わせ味噌効果ね」

メンメン「合わせ味噌凄いメン！」

□

A s i d e

デイケイドA「何か良い感じになって来たな二人共。ん？ゲーム病が…！」

そんな二人の様子を見ていた俺のストレスは完全に解消し、普段と同じ調子で動ける様になっている。

ゲム「バグスターウィルスを克服したか…」

アポロバグスター「バカめ。ゲーム病を克服したとはいえ、倒されるのがオチだ！」

デイケイドA「…ハンバーガーの件前で、やってなかった事をやってやる！」

【カメンライド エグゼイド！】

『マイティマイティアクションエーツクス！』

エグゼイド レベル2となって剣モードにしたガシャコンブレイ

カーを武器に、お得意のアクロバティックで翻弄しながらゲラムのキメワザスロットホルダーに刺さっているデイケイドのライダーガシヤットに手を伸ばす。

しかし、ゲラムのバグヴァイザーの刃先が擦れ合って飛び散った火花で視界が奪われ、上手く奪い取れない。

アポロバグスター「ガイストカッター！」

「フォームライド エグゼイド スポーツ！」

『シャカリキ！シャカリキ！バッドバッド！シャカつと！リキつと！シャカリキスポーツ！』

デイケイドA「トリックフライホイール！」

アポロバグスター「何!?!」

スポーツサイクリングの様なイメージキャラクターを模した『スポーツゲーマ』がガイストカッターを弾きながら上半身に装着し、頭部にはスポーツ用ヘルメットに似たパーツが追加される。

『エグゼイド スポーツアクションゲーマー レベル3』となった俺は右側の車輪を取り外しながら投擲^{とうてき}。

ゲラムとアポロバグスターにダメージを与えると、ブーメランの様に手元に戻る。

「フォームライド エグゼイド ロボット！」

『ぶっ飛ばせ！突撃！激突パンチ！ゲキトツロボツツ！』

胸部に装着していたスポーツゲーマが消滅し、今度は赤いロボットのイメージキャラクターを模した『ロボットゲーマ』が頭から丸呑みにする形で装甲となる。

両腕は左腕のアーム、頭部にはV字のアンテナが付いているガンダムの様なパーツが追加された。

『エグゼイド ロボットアクションゲーマー レベル3』となった俺は右腕を後方に振り上げる。

デイケイドA「ゲキトツスマツシャー!!」

ゲラム「うぐっ!?!」

突き出しと共にアームは搭載された小型のロケットブースターでゲラムを捕捉^{ほそく}させながら進行して行く。

何たってこのアームの握力は57tもあるんだ。捕まったらそう簡単には逃げられない。

それと運が良い事に、今回はエナジーアイテムが入っているチョコブロックがデリシヤスフィールド内に散らばっていないという事。

「アタックライド アクセレイト！」

『ガツシューーン！』

カードを装填し、『高速化』のエナジーアイテムのエネルギーを獲得。

黄色いオーラを纏いながらアームに掴まれているゲンムに追い付くと、バグヴァイザーからデイケイドの半分の力が内包されているライダーガシャットを抜き取りながらローズマリーに投げ渡す。

デイケイドA「ローズマリー、受け取れ！」

ローズマリー「えっ？よつと。これね… 咲夜が奪われた力つてのは！」

アポロバグスター「それを寄越せ！」

アポロバグスターのレイピア『アポロフルーレ』を避け、帰還したロケットアームの打撃でガイストカッターによる防御を問わずに後退させると同時にライダーカードを装填する。

「フォームライド エグゼイド バーガー！」

『バーガー！（juujuu）バーガー！（juujuu）ジュージューバーガー！』

ハンバーガーのイメージキャラクター『バーガーゲーム』がアポロバグスターを両足のインラインスケートでバランスを崩すと分裂し、それぞれ違うパーツとして俺に装着。

頭部には白いヘルメットかコック帽を想起させるパーツ。右腕はトマトケチャップ、左腕はマスタードの調味料ボトルを模した発射装置が付けられ、胸部はハンバーガーを連想とさせる装甲が追加された。

ゲンム「その姿は… 元々私が考案した『ジュージューバーガ』！私に許可無く使用するなど… 断じて許さんッ！！」

『シャカリキスポーツ！』

ゲムム「グレード3！」

『ガチョーン！ガシヤット！ガツチャーン！レベルアアップ！』

『シヤカリキスポーツ！』

俺がレベルアアップした姿、『エグゼイド バーガーアクションゲーマー レベル4』に見覚えがあるのか、ゲムムは憤慨しながら黄緑のライダーガシヤットを起動。

ゲーマードライバーのレバーを倒し、右側スロットにガシヤットを装填。

レバーを引くと、ゲムムはスポーツアクションゲーマーへとレベルアアップする。

レベルが下だろろうと、隙を突いては倒すって感じか。流石は元社長。その心意気、乗ったぜ！

俺は両足のインラインスケートで滑りながらアニメエフェクトが付加された車輪をゲムムは投擲。

それを避けながら機動力を活かしながらソードモードにしたガシヤコンブレイカーで弾き返しながらゲムムに向かって行く。

だが、ゲムムは敢えて機動力を利用したのか、帰還した車輪で受け流され、岩壁に直撃してしまう。

デイケイドA「…ってえ〜！」

ゲムム「レベルアアップ出来たとはいえ、まだ機動力には慣れていない様だな。そのデータは削除させてもらう…」

アポロバグスター「これでゲームオーバーなのだ」

デイケイドA「そいつは…如何かな！」

『フォームライド エグゼイド ハンター！』

『ド・ド・ドラゴ！ナ・ナ・ナ・ナイト！ドラ！ドラ！ドラゴナイトハンター！ゼーツト！』

黒いドラゴン『ハンターゲーマ』が噴き出した火炎でゲムム達を後退させると、バーガゲーマと同様に頭部から格パーツに分断。

両顎を開けたハンターゲーマの頭部パーツ。それに繋がっているかの様に、胸部装甲の右側にはエグゼイドと同じ色のピンクのラインが三本、左側には星の塗装。背部には二枚の翼と尻尾が付いている。

右肩装甲と右腕のブレードには水色のラインが走り、左肩装甲と左腕の銃には連なった牙を連想とさせる黄色い塗装。両脚の装甲にも水色と黄色の塗装がある。

『エグゼイド ハンターアクションゲーマー レベル5・フルドラゴン』となった俺はアポロバグスターが再び^{とうてき}投擲したガイストカッターを背部の両翼を大きく羽ばたかせながら避け、左腕に装備された電磁キャノン砲『ドラゴナイトガン』で空中から圧縮金属を超高速で打ち出す形で^{げいげき}迎撃。

再びブーメランの如く戻って来たガイストカッターを右腕の電磁ブレード『ドラゴナイトブレード』で真つ二つに切り裂くと同時に急降下。

そのままアポロバグスターとゲンムを^{かっくう}滑空しながら距離が縮まると、ドラゴナイトブレードで切り付けた。

ゲンム「ぐっ…！」

アポロバグスター「ぬおおッ…!!」

デイクイドA「これでゲームクリアだ！」

『ファイナルアタックライド エ、エ、エ、エグゼイド！』

—DRAGO KNIGHT CRITICAL STRIKE!

デイクイドA「迷惑な存在は消毒だ。ドラゴバディ・アンガー!!」
ゲンム「！不味いっ…！」

アポロバグスター「何をするッ…!?ぬおおッ!!」

ゲンムがアポロバグスターを盾にして『ホーンドラゴヘルム』から放った火炎を防ぎながら姿を消した。

それに構わず俺はドラゴナイトガンで撃ちながら接近し、ドラゴナイトブレードで上下に勢い良く切り裂く。

アポロバグスター「っ…次こそは…大シヨツカーでもバグスターでもない存在として…ぬおあああああッ!!!」

断末魔を叫び、アポロバグスターは爆散。

俺の背後に『GAME CLEAR!』のロゴが表示される。

デイクイドA「太陽の神を名を語る者『アポロガイスト』を模造し

たバグスターの切除を完了した……」

□

B Side

ウバウゾー「ウバウゾー……！」

ローズマリー「プレシヤス、チャンスは一瞬よ！」

プレシヤス「うん！」

デイケイドB「つしゃあ。俺も！」

【カメンライド ドライブ！】

【アタックライド トライドロン！】

俺はタイプスピードに戻り、オーロラカーテンで出現させたマシン
デイケイダーを白いラインが走っている赤い自動車『トライドロン』
へと変化させながら走り出す。

デイケイドB「スパイシー、解除だ！」

スパイシー「えええ！」

ウバウゾー「ウバウゾー!!」

【ファイナルアタックライド ド、ド、ド、ドライブ！】

デイケイドB「スピードロップ！」

ウバウゾーの周りを旋回するトライドロンの壁面へきめんを蹴り、中央から
何十発もの蹴りを浴びせる。

【カメンライド ウィザード！】

『ヒーヒーヒー！』

【ファイナルアタックライド ウィ、ウィ、ウィ、ウィザード！】

デイケイドC「ストライクウィザード！」

それに合わせ、Cはフレイムスタイルに戻り、ファイナルアタック
ライドカードを装填する。

赤い魔法陣を出現させ、右足に炎のエネルギーを纏わせる。

ロンダートしながら地面を蹴り上げ、そのまま飛び蹴りを放つ。

プレシヤス「行くくよー！500キロカロリーパーンチ!!」

ウバウゾー「ウバーツ!!」

サンドプレスを解除したスパイシーに合わせ、Cとプレシヤスは必殺の一撃でウバウゾーの体制を大きく崩す。そのタイミングは同時に等しかった。

デイケイドC「ヤムヤム、後は任せるぜ！」

ヤムヤム「プリキュア！ヤムヤムライズ！」

ウバウゾー「お腹一杯！」

「ご馳走様でした！」

ヤムヤムの浄化技でウバウゾーは消滅。それに伴いレシピツピニ体は解放された。

「ピピピ！」

ヤムヤム「おかえり！」

DIEND Side

ジエントルー「私は一体…？」

頭を抑え、戦慄しながら眩くジエントルーは更なる不安を抱えながら姿を消す。

デイエンド「彼女の様子がおかしいけど、何かあったの？」

ナルシストルー「…操り人形の糸が切れ掛かっているようだ。若しかしてだが、聞いていなかったのか？」

デイエンド「いや、今初めて聞いたよ。社長さんも既に撤退してるみたいだから後で僕が話す」

ナルシストルー「そうか。んじゃあ、精々監視宜しくな」

傲慢な態度でナルシストルーが告げた衝撃的な事実には、僕は仮面の下で驚きの感情を噛み殺しながらオーロラカーテンを展開し、デリシヤスフィールドを後にした。

□

Sakuya side

アポロバグスターを盾にして逃げたゲンムを倒す事は出来なかったが、デイケイドの半分の力を奪還する事が出来た俺達はゆいの家に戻った。

ここねは華満に黄色いリップを塗ってもらっている最中だ。

ここね「・・・出来た！」

ゆい「うわあ・・・似合ってる！」

ローズマリー「素敵よ！」

らん「ホント!?はわわく・・・！」

咲夜「良かった良かった。ここねも何れを選んでいいか迷うって言
うからヤムヤムのイメージカラーに合わせてみたんだよ」

らん「有難う。らんらんもこれ！」

華満がここねに差し出したのはレシピツピ風にデコレーションし
たハートパン。是非味わって食ってみたいものだ。

ここね「・・・可愛い」

ゆい「凄い、レシピツピだ！」

らん「これを参考にしてハートパンデコったんだ！」

パムパム「スタンプがいっぱいパム」

ここね「らん。言い過ぎて御免ね」

らん「らんらんこそ御免ね」

咲夜「いや、お前ら二人に怒鳴ろうとした俺も謝りたい。済まな
かった。そして・・・有難な」

ローズマリー「あら。思った事を言い合えるなんて素敵じゃない。
何でも相手に合わせてたら、それこそいい考えとは言えないもの」

ここね「違うからこそ、自分がない世界を拡げてくれる…」

らん「うん。おかげでレシピッピも助けられた」

メンメン「いい感じになってよかったメン」

パムパム「美味しい合わせ味噌になれそうパム」

和解した様子に安堵するドラジカとクソ犬。

ゆい「うん。お婆ちゃんのおかげかな！」

コメコメ「コメ〜！」

その様子に喜んでいるコメコメは頭を撫でながら人間に化けると、両手を動かしてみる。

だが、化けた姿は前とは一味違かった。

ゆい「コメコメ…？」

コメコメ「コメツ。コメ。コ…。。うれちいコメ！」

赤いリボンを付けたフード付きの赤いスカート。自力でゆっくりと立って歩き、コメコメは三歳児くらいの大きさに成長を果たすと、両手を上げながら

言葉を発する。

「「「「ええっ!?!」「「「「」

メンメン「凄いメン！」

パムパム「これでお喋り出来るパム！」

コメコメ「ゆい！」

ゆい「立派になったね〜」

ローズマリー「いや、急に成長し過ぎよ！」

らん「マシマシに吃驚びっくりだよ〜！」

ここね「可愛い」

コメコメ「コメ…。」

咲夜「それな同意はするぜ〜！なあコメコメ。俺の名前を言って見てくれ！一回だけでもいい！頼む！」

コメコメ「さ…。」

咲夜「さ…？」

コメコメ「さきゅあ！」

咲夜「ぐぼあはあッ!?!」

可愛さに翻弄され、卒倒寸前に倒れ伏す俺。華満のハートキュア
ウオッチの画面にはラーメンのどんぶりを抱えたパンダのアイコン
に変わっていた。

□

ゲンム「今日はレッドワイン。私と乾杯だ」

限定ED『貴水博之 / GAME CHANGER』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア く破壊者の食べ歩きく

ローズマリー「ゆいのお祖母様って素敵な言葉を沢山持つてらっ
しやるのね」

ナルシストルー「壊れ掛けの操り人形には精々いい顔で踊ってもら
おうか…」

らん「毎日がマシマシに充実しちゃうよ〜！」

ここね「こうして触れ合えると…もっと嬉しい」

プレシヤス「だって…」ご飯は笑顔「だから！」

デイケイド「お前は…！」

電王「俺、参上！」

第十品：泣かないでレシピッピ…誕生！ハートジューシーミキサー
／プリンの味を返せ！時を越える新必殺技!!
全てを破壊し、全てを繋げ！

第十品：泣かないでレシピツピ：誕生！ハートジュリー
シーミキサ―／プリンのを返せ！時を越える新必
殺技！！

□

半分の力を取り戻しコメコメが成長し喋れる様になった後日。

コメコメ「コツメ、コツメ、コメ〜！」

ゆいの家の庭でよちよち歩きをしているコメコメは自力でゆいと
俺の方へと抱き寄る。

因みに俺はデイケイドエグゼイド レベル1に変身している。

ゆい「凄い！頑張ったね！」

デイケイド「よくやったな！」

コメコメ「たのちいコメ！」

デイケイド「ぐはあツ!？」

天使極まりない笑顔の矢で射抜かれ、卒倒寸前となった俺は倒れ伏
す。

同時に胸部装甲に表示されているHP『ライダーゲージ』が三分の
一になる。

デイケイドエグゼイドのライダーゲージはオリジナルとは違って
ゼロになると死亡する訳ではなく、カメンライドが解除されるといつ
たものとなっている。

「可愛い〜!!」

デイケイド「それな、同意はするぜええええーツ!!」

俺はここねと華満の意見に同意し、両腕を突き出しながら本音を青
空に向かって叫ぶ。

その様子を見ていたローズマリーは感涙していた。

ローズマリー「こんなに大きくなって…！いっぱい食べて、いつ
ぱい遊んだお陰ね…」

クソ犬とドラジカはティッシュ箱をスタンばっている状態。抜け
目が無いな。

パムパム「泣くほどの事パム？」

デイケイド「大人になると、小さな幸せでも泣けてくるモンなんだよ。まさに、泣けるで！」

俺は立ち上がりながら腰を落とすと、ある人物の口癖を真似て握った左手を顎あごに当て、首ひねを捻ひねって鳴らす。

そーいや、あいつら今頃何してんだろな。最低最悪の魔王様から聞いた話によると、ライダーの力を時盤に渡して変身不能になっていたけど、歴史が作り直された事によって再び変身出来る様になった可能性は決して低い訳でもない。

「いつか何処かで会えるだろう。未来で…。」

ゆい「小さな幸せかあ…。あつ、お婆ちゃん言ってた。『小さじ一杯大事な一杯』！」

らん「うむ。小さじ一杯の塩でググツと美味しくなるしね」

ここね「小さじって大事なんだ…。」

ローズマリー「ゆいのお祖母様って、素敵な言葉を沢山持ってらっしゃるわね。お目に掛かりたかったわ…。」

らん『ご飯かパンだけで悩むな。迷った時には饅頭うどんもある』って言葉好きだなく」

ここね『力も出汗も合わせるのが味噌みそ』もインパクトある」

ゆいが思い出した格言を振り返る華満とここね。勿論、俺もある。

メンメン「ゆいちゃんと咲夜はお婆ちゃんの言葉でどれが一番好きメン？」

ドラジカの問い掛けに俺は背を向けながら言う。

デイケイド『嘘をつく事は顔に出る証拠』…。」

パムパム「かなり突き刺さってるパム」

デイケイド「うぐっ!？」

クソ犬の指摘でライダーゲージが半分になる。

ゆい「どれも好きだからなく…。でもやっぱ、ご飯は笑顔、かな？」

コメコメ「笑顔コメ！」

ゆい「ふふっ」

世界の破壊者 デイケイド。次の旅の行先は右か？左か？

限定OP『Climax Jump DEN—LINER for
m
』

□

DIEND SIDE

デイエンド「キュアスタが更新されていない…？」

ジェントルー「どれも使えない情報だ…」

ブンドル団アジトにてジェントルーは凍結状態のキュアスタは使
い物にはならないと判断して、スマホの電源を切るとある人物が背後
に映る。

ナルシストルー「やあ、ジェントルー。いいね。その不機嫌な顔」
ジェントルー「…何か？」

背丈の男性——ナルシストルーは相変わらず傲慢ぶった態度
で気障きざに言い回す。

その態度にジェントルーは警戒心を強めた視線で彼を冷たく睨ん

だ。

ナルシストルー「そう警戒するなよ。良い事教えてやろうと思つてさ」

デイエンド「良い事だつて…？」

ナルシストルーは紫の炎を発しながら捕獲箱を取り出す。

ナルシストルー「捕獲箱こいっのもう一つ秘の使い方…こいつに自分の力を注ぐんだ。そうすれば、あくら不思議！今までとは桁けた違いのウバウゾーに完成だ。これで邪魔なプリキュアも一掃出来る」

ジェントルー「…」

悪魔の囁ささきとも言える言葉にジェントルーは小さく唾を飲み込む。

ナルシストルー「真面目なジェントルー君は、ゴードッツ様の為にレシピツピをちやあくと捕まえて来る…違つたかな？」

ジェントルー「無論。全てはゴードッツ様の為に！」

デイケイドとプリキュアを倒して、全ての料理をゴードッツに捧げると云つたジェントルーの目的は変わる事はなかった。

ナルシストルー「さて、壊れ掛けの操り人形には…精々良い顔で踊つてもらおつか」

デイエンド「…」

小さく呟いたナルシストルーの言葉に僕は一時足を止める。

ジェントルー「何を立ち止まっている？デイエンド」

デイエンド「御免。ちよつと考え事」

たわいもない会話を済まし、僕はレシピツピ捕獲と同時にデイケイドを肉薄にくはくする事に専念するべく足を運んだ。

□

Sakuya side

俺達は洋食ストリートに出歩いている。

ローズマリー「ご飯は笑顔、って素敵な言葉よね」

ここね「美味しい物を食べると笑顔になる…」

らん「笑顔で食べると余計に美味しいよね」

ローズマリー「美味しく食べると、レシピツピが喜ぶしね」

ゆい「やっぱり？ああ…ご飯の話したら、ますますハラペコった

…」

咲夜「相変わらずだな」

らん「はくい、此方は卵が奏でるコンサート。ロック！ポップス」

！演歌まで…スーパーステージが楽しめるオムライス屋さんだよ

…!!」

華満が独特の表現で紹介したのはオムライス店。

ゆいが初めてプリキュアになった切っ掛けでもあり、始まりの場所でもあった。

ゆい「此処のオムライス美味しいよね」

ここね「良い香り…」

ゆい達に続き、俺達はオムライス店へと入って行った。

□

DIEND Side

ジェントルー「やはり簡単には見つからないか」

デイエンド「その様だね。斯なる上は…」

雑踏の中、中々レシピツピを見つけた事が出来なかった僕達は路地裏で場所を変える。

ジエントルーは紫の半仮面を外して菓彩あまねの姿に、僕はゼロ
ディエンドライバーのフォアエンドを下げてディエンドのカードを
抜き取ると纏っていた装甲が幻影となり、外側に広がる形で変身を解
いた。

「腹が減っては戦は出来ぬ」

店員の呼び掛けと共に来店した僕達。

ジエントルーは何れにするか迷っているようだ。

??? 「デリシヤスマイル!!」

「!?」

声が出た方角へ向けると、偶然に入店していたアキノリ、オカマさ
ん、和実少女、芙羽少女、華満少女の五人の姿を見掛ける。

客A 「すいません」

店員 「は〜い」

そんな中、客の呼び掛けに店員は対応する。

透翼 「食事の時は使命を忘れた方が良く。返って怪しまれるから」
あまね 「… そのようだな。オムライス二人分、注文をお願いしま
す」

□

S a k u y a s i d e

らん 「んん〜！」

「ピ。ピ。ピ〜！」

ゆい 「あっ！」

「ピ。ピ。ピツピツ!!」

店内がほかほかハートで満ち溢れる中、何処からかオムライスとプ
リンのレシピツピが現れた。

らん 「ほわわ〜！」

ここね 「… 可愛い」

オムライスのレシピツピ 「ピ。ピ。ピ〜！」

オムライスのレシピツピはゆいに近寄って来る。

パムパム『この前は助けてくれて有難う』って言ってるパム」

咲夜「此方こそ、どう致しまして。無事で何よりだ」

オムライスのレシピツピは、俺が初めてこの世界に来た時に助けた
個体。

戦いに思い出を振り返ってみるのも悪くはないな。

「コメ(ピ)?」

一方、コメコメはプリンのお味のレシピツピと氷水が入っているグラスで睨めっこをしていた。

プリンのお味のレシピツピは、コメコメがお味の途中で見掛けた個体だっけな。勿論、俺もだけど。

コメコメ「コメ〜!おもちろいコメ〜!」

プリンのお味のレシピツピ「ピピピピピピピ〜!ピピ〜!」

ここね「…^{ダブル}W可愛い」

咲夜「確かに」

ゆい「ひよわ〜!スタンプカードにもまだ載ってない子だ!」

互いに笑い合ってる様子を、華満は写真を撮りまくる。

メンメン「らんちゃん連日連夜レシピツピスタンプを書き写して

は、まだ見ぬレシピツピ達に想いを馳せているメン」

ゆい「らんちゃん凄いな!」

ローズマリー「ええ。情熱特盛り!」

らん「はにや〜。だってこんな不思議で素敵な存在、知れば知る程ワクワクして… 毎日がマシマシに充実しちゃうよ〜!」

ここね「… 私も」

ゆい「ここねちゃんも!」

ローズマリー「書き写してんの!」

「^{そんな}訳ないパム」

呆れた表情で俺とクソ犬は突っ込む。

ここね「これまでは見るだけでも嬉しかった。でもこうして触れ合えると、もっと嬉しい… 有難う」

オムライスのレシピツピ「ピピピ〜!」

パムパム「喜んでるパム」

らん「はわく！」

優しく突きながらお礼を言うここねにオムライス個体は周りながら喜ぶ。

ゆい「レシピツピって、ご飯は笑顔、みたい」

咲夜「だな」

ローズマリー「えっ？それって如何いう事よ？」

咲夜「それは——」

???「ご馳走様。美味しかったよ」

店員「有難う御座いました」

俺がレシピツピが、ご飯は笑顔、みたいの理由を話そうとすると、店内を去って行こうとする男女二人組を見掛ける。

一人はジェントルーの正体でもある黒味がかつた長髪の少女、菓彩あまね。もう一人は俺と瓜二つの少年、海詠透冀。

□

Touki side

らん「はにや。生徒会長？それに海詠君まで……」

ゆい「えっ？」

ここね「ん？」

食事を終えて僕は華満少女の席のテーブルにいるオムライスとプレンのレシピツピが話している姿を目撃する。

「ピ。ピツピ」

あまね「それは……！」

らん「あ。会長と透希さんもレシピツピが見えるんだよ」

ゆい「すごーい。見える人達に又会えた！」

あまね「!？」

透冀「！」

ゆい「会長と透冀さんは今までどんなレシピツピに会ってきたんで

すか!？」

同じく目を付けたジェントルーは左手を隠しながら捕獲箱を構える。

だが和実少女が問い掛けながら手を握られ、捕獲箱を即座に仕舞った。

らん「確か会長のお家は『フルーツパーラーKASAI』ですよね!？」

咲夜『フルーツパーラーKASAI』…? ああ、あのグミの製造店か。通りで見覚えがあつた訳だ」

透冀「…彼女にそんな事を聞いて如何するの?」

畳み掛ける和実少女と華満少女に僕が冷たく遇あしらうとグラスに入っている氷が振動し、カランと小刻む様な音を立てる。

ゆい「えっ?」

咲夜「……」

あまね「…レシピツピの種類を、気にした事がない」

静寂な空気が漂う中、アキノリが腕を組みながら警戒の目で此方を睨み付けている。

一時硬直した和実少女の手を退かしたジェントルーは誤魔化ごまかすべく嘘偽りを話した。

ゆい「えっ?」

らん「ええっ!? でもでも、とっても気になりませんか?」

あまね「気にすべきはもつと沢山ある」

オカマさんは慈悲深き表情でジェントルーを見つめている。

『絶対嘘だ』と内心で思っているのだろう。それはアキノリも同じ気持ちだった。

透冀「それじゃあ、僕達はこれで失礼するよ…」

ゆい「でも…あたしは気になります」

透冀「気になる…?」

ゆい『美味しい』『嬉しい』『有難う』って笑顔になると、この子達は現れる。レシピツピって、ご飯は笑顔、そのものだなって!」

あまね「ご飯は笑顔…?」

ゆい「あたしの大好きな言葉です」

あまね「・・・失礼する」

その言葉をジェントルーは首を横に振りながら反芻するが、特に言及する事もなく店を出た。

使命を全うする彼女にとっては届かない言葉だっただろう。

待てよ。そう言えばナルシストルーが前に言ってたな。

『壊れ掛けの操り人形には・・・精々良い顔で踊ってもらおうか』

要するにジェントルーと同じく、ナルシストルーやセレクトルーの叔母さんも洗脳されている可能性が高いとすれば、彼女の洗脳が解けかかっているのも中々否めない。

透冀「……………」

ゆい「透冀さん？如何かしたんですか…………？」

透冀「いや、単なる考え事さ。…ご飯は笑顔…その言葉を、い

つかは未来の子供達に語り継げられるといいね。和実少女」

僕はジェントルーの後を追うべく、オムライス店を後にした。

□

Sakuya side

ここね「ああ言う人もいるのね」

咲夜「せつかく見えるんだ。何かの切っ掛けでレシピッピの事を知る気になってくれるといいが……………」

黙秘していた俺は不満そうに口を開く。

ローズマリー「レシピッピは、ご飯は笑顔…：：：案外、真理かもしれないわね」

咲夜「そうかもしれないな」

らん「ね！」
ここね「うん」
ゆい「えへへっ…」

□

DIEND SIDE

路地裏で菓彩少女はジェントルーに、僕はデイエンドへと変身していた。

あまね（青）『駄目！』

デイエンド「！」

ジェントルーは捕獲箱を取り出した刹那、変身前の青い瞳を持つ菓彩少女の人格と思われる物が制止する。

ジェントルー「全ては… ゴーダッツ様の為に！ ブンブンドルドル・ブンドルー!!」

「ピピピ〜！ピピ…！」

又もや頭痛に襲われるジェントルーだが、それを振り切り、改めてレシピツピを二体捕獲する。

□

Sakuya side

レシピツピが二体捕獲されたのを目撃した瞬間、ハートキュアウオッチから助けを要請しているレシピツピの姿が。プリンは初として、オムライスは捕まるのが二回目だ。

数秒後、俺達は路地裏でジェントルーとデイエンドを追っている。ジェントルー「くっ…！」

路地裏を抜け出し、ジェントルーは捕獲箱に自身の力を注ぎ込み、黄色い縦線ラインが入った悪魔の角を模した紫の捕獲箱へと変化させる。

ジエントルー「出でよ、ウバウゾー!!」

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

フライパンを宿したウバウゾー。

唯一の違いの点は、半仮面が丸っこい紫だったのに対して此方は赤。ブンドル団のマークが描かれている額の下には黄色い下三角形。

鬼の様に尖った角が牛の様な形状になっている事。

ローズマリー「こらー!又フライパンちゃんに酷い事を...えっ?前と違う...!」

ローズマリーもその点に一理気付いている様だ。

ローズマリー「デリシヤスフィールド!」

俺とディエンドが掛け合いをしている間に俺達は既にデリシヤスフィールドに転送されていた。

ゆい「行くよ、皆!」

「「「「うん(おう)(コメ)(パム)(メン)!」」」」

□

No side

場面は変わり、時の砂漠を駆け抜けているのは赤い新幹線を連想とさせる時の列車『デンライナー』。

次の行先は過去か未来に行くかは我々にも分からない。

だが、そんなデンライナーではあるトラブルが起こっていた。

???「あーん...んだこの味は!?!とても食べたモンじゃねーぞ!!」

紫のオーラを纏っているプリンの味に苛立っている赤鬼の名はモモタロス。

契約者である仮面ライダー電王の変身者、野上良太郎が思い描く『桃太郎』の鬼をイメージに具現化されたイメージと呼ばれる存在の一人だが、今は仮面ライダーの一人として、時の運行を守る為に戦っている。

??? 「先輩、何かしたの？若しかしてこのプリン賞味期限切れ？」
モモタロスを煽る様に対応している青色のイメージはウラタロス。
彼も同じく良太郎の『浦島太郎』に登場する海亀をイメージが具現化したイメージだ。

モモタロス「寝ぼけた事言っただよ〜よカメ！このプリン、急に味が変わっちゃったよ!!」

??? 「味が変わったのなら、捨てた方がええやないか」
モモタロス「クマ！お前もか!!」

親指に顎を当てながら捻っている金色のイメージはキンタロス。
此方は別の契約者が思い描く『金太郎』の熊のイメージから来ている。

??? 「三人共食べないなら僕が食べるね。あーん…!!」

キンタロス「どうやリユウタ？何も味が変わった訳ないやろ？」

??? 「味が変わってる…！」

「えっ(ん)…!!」

??? 「モモタロスの言ってた通りだよ。ほら、カメちゃんもクマちゃんも食べてみて！」

ウラタロス「どれどれ？… 本当だ。味が変わってる…！」

キンタロス「とても食えるどころやないな…！」

モモタロス「だろだろ!!これじゃあ、一生プリン食べねえのと同じじゃねーか!!」

ヘッドホンを付けている紫の龍のイメージ リユウタロスの言葉に応じてウラタロスとキンタロスは試しにプリンをスプーンで口に運んでみると、モモタロスの言葉通りだった。

??? 「如何やら、何らかの原因で味が変わってしまった様ですね…！」

黒い服を着たデンライナーのオーナーは、チャーハンの中心に置いた旗を立て直しながら状況を推測する。

モモタロス「じゃあ、如何すりや味が元に戻んだよ!」

オーナー「…一つだけ方法があります。デイケイドにデンライナーごと呼び出してもらおうのです」

「「「デイケイドに!」」」

オーナー「それについてはご安心を。既に仕組んでおきましたから…。」

□

コメコメ「コメ!」

ゆい「にぎにぎ!」

コメコメ「コメコメ!」

ゆい「ハートを!」

コメコメ「コメコメ!」

□

パムパム「パム!」

ここね「プリキュア! デリシヤスタンバイ! パーティーゴー! オーブン!」

パムパム「パムパム!!」

「ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
メンメン「メン！」

らん「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！くるくる！」

メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
「「シエアリンエナジー！！」「

□
コメコメ「コメ〜！」

□
パムパム「テイステイ！」

□
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフォツ!？」

□
コメコメ「コメコメ！」
パムパム「パムパム！」
メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しき焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「コデリシヤスパーティ♡プリキュア！」

□

咲夜「変身！」

「カメンライド デイケイド！」

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語り：：始めようか!!」

□

デイエンド「今回は見学させてもらうよ。ウバウゾー、お願いね」

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ヤムヤム「バリカッターブレイズ!!」

強化ウバウゾー「ウバ！」

強化ウバウゾーにエネルギー状の刃を放ったヤムヤムは岩壁に着地して距離を取る。

メンメン「命中メン！」

プレシヤス「あれは：：！」

ドラジカは喜びの声を上げる。だが砂煙が晴れると、強化ウバウゾーは平然としながら立っていた。

一瞬だが、闇のオーラが見える。

ヤムヤム「ひよええ〜！全然聞いてない!?!」

ローズマリー「やっぱり強くなってる…！」
プレシヤス「っ…！」

デイケイド「チツ…！」

とてつもないオーラに俺は舌打ちをする。

プレシヤス「はああーっ！やあーっ!!」

【アタックライド スラッシュユ！】

デイケイド「デイケイドスラッシュユ！らあっ！」

強化ウバウゾー「ウ…ウバーツ!!」

プレシヤスは岩壁で助走を付けながらのラッシュユで畳み掛けている隙に俺は刀身に十枚の残像を付け足しながらライドブツカーを振るう。

だが強化ウバウゾーの両腕によるカウンターを貰い、殴り飛ばされるが直ぐに体制を立て直す。

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

スパイシー「二人共！」

両目から黒味がかつた紫のエネルギー波を放たれ、スパイシーはメロンパン型のエネルギーを展開。

顔からして見れば、強大なパワーを持っているのは確かだ。

スパイシー「凄いパワー…！」

ヤムヤム「はああーっ！やあっ！」

その隙にヤムヤムが背後から右拳うけんを突き出した事でエネルギー波は止まるが、強化ウバウゾーは灼熱の如く全身から熱気を放つ。

ヤムヤム「うっ… あちやっ！あちちちちち…！」

湯気が吹き出し、熱気に耐えらなかつたヤムヤムは強化ウバウゾーから距離を置く。

超大型巨人にも程があるってんだ。

ローズマリー「全身高熱になるの…!?!」

ジェントルー「諦めろ。プリキュア、デイケイド」

デイエンド「尻尾を巻くなら今しかないけど？」

プレシヤス「嫌だ！」

デイケイド「断じてお断りだ！」

ローズマリー「皆、四方に別れて同時に行くのよ！」

「二二うん（おう）！」」

「フォームライド キバ ドツガ！」

ヤムヤムは右側、プレシヤスは左側に移動。

スパイシーは内側で待機し、俺も同じく前方で待機しながらライダーカードを装填し、キバ ドツガフォームへとフォームチェンジする。

スパイシー「ピリツッ○サンドプレス！」

ヤムヤム「バリカッターブレイズ！」

スパイシーがサンドプレスで表面と裏面を挟み撃ちで固定し、ヤムのカッターブレイズで両足の体制を崩す。

プレシヤス「500キロカロリーパンチ!!」

デイケイド「……（固定完了!）」

カロリーパンチで仰向けに殴り倒すプレシヤスに続き、俺はドツガハンマーのトゥルーアイを露出させて強化ウバウゾーの動きを封じる。

ローズマリー「ヤムヤム!お願い!」

ヤムヤム「任せて!プリキュア・ヤムヤムラインズ!!」

ヤムヤムの浄化技が強化ウバウゾーを包み、後は浄化するのを待つだけ。

パムパム「やったパム！」

誰だ今さつき負けフラグ立てようとした奴は。

強化ウバウゾー「ウバババババババババババ！」

ローズマリー「えっ……!?!」

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ヤムヤム「そんなあつ!?!」

ローズマリー「ヤムヤムラインズが効かないっていうの!?!」

話を戻して、ジェントルーが自身の力を捕獲箱に宿す。

それにより強化ウバウゾーはヤムヤムの浄化技を打ち破ったのだ。

デイケイド「……（不味いッ!!）」

【カメンライド……】

取り出したライダーカードを装填してハンドルを閉じようとする
が間に合わず、俺は強化ウバウゾーのエネルギー波に巻き込まれてし
まう。

「うあああああッ!!」

デイケイド「ぐあああああッ!!」

敗北寸前にまで叩きのめされた俺達。プレシヤス達はさっきの攻
撃で倒れている。

俺はドツガフォームの鎧の屈強さでカメンライド解除で何とか持
ち堪えたが、その代償としてダメージは大きかった。

パムパム「スパイシー!」

メンメン「ヤムヤム!」

コメコメ「プレシヤス...!」

デイケイド「ぐっ...!」

ローズマリー「皆!」

ローズマリーは俺達の無事を確認するべく、駆け寄って来た。

ジェントルー「ふん。たかがレシピッピの為に愚かな意地を張るか
らだ...」

???『止めて!』

デイケイド「!」

俺の目には青い瞳を持つ菓彩あまねの幻影が映る。

ジェントルー「黙れ!私は...!」

「レシピッ!!」

ジェントルーは左手で頭を抑えていると、捕獲箱にいるレシピッピ
が悲痛の声を上げる。

ローズマリー「今度は何...!?これは...!」

同時にハートキュアウオツチのアラームが鳴り響き、ローズマリー
は状況を確認するべく液晶画面には苦痛を上げるプリンとオムライ
スのレシピッピの姿が映っていた。

パムパム「凄い苦しんでるパム...」

メンメン「メン...」

デイケイド「ウバウゾーの力が増幅しているのか...!?」

ジエントルー「レシピツピが…」

デイケイド「泣いている…」

あまね(青)『アハハ飯は笑顔…』

レシピツピは泣き出し、捕獲箱を開けたジエントルーは再び頭を抱える。

ローズマリー「あの箱のせいなの…？」

ローズマリーが呟きと同時に、今度は額にブンドル団のマークが額に付いている猫の様な顔の人物が映る。

デイケイド「今のは…!？」

ブンドル団の首領 ゴーダツツと思わしき猫らしき人物がジエントルーに干渉すると、捕獲箱の蓋ふたが自動的に閉まる。

コメコメ「コメ…」

良心に責め苦しめられる俺達。

だが、こんなところで屈する訳にはいかない。

デイケイド「やれやれ。如何やら俺達は、こんなところでくたばる訳にもいかないみたいだ」

プレシヤス「ウオツチから… 伝わってくる…!」

プレシヤスは液晶画面に映っているレシピツピ達を覆い隠しながら立ち上がる。

ヤムヤム「苦しんでる…!」

スパイシー『助けて』って… 言ってる!」

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

スパイシーとヤムヤムも立ち上がる様子に強化ウバウゾーは闇のオーラを纏いながら再び襲い掛かる。

俺達はローズマリーを通り過ぎながらこれまでの事を振り返りながら前が出る。

スパイシー「優しい時間をくれたレシピツピを…!」

ヤムヤム「マシマシなワクワクをくれたレシピツピを…!」

プレシヤス「大切な思い出をくれたレシピツピを…!」

【フォームライド 電王 プラット!】

デイケイド「新たな旅の一步を踏み出してくれたレシピツピを…」

！」

「絶対助ける!!」

俺はライダーカードを装填すると黒い軽装甲を纏い、電車の線路を模した頭部を持った時の守護者 電王 素体の姿 フラットフォームへと姿を変える。と、ライドブツカーから一枚のカードを取り出す。

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

デイケイド「モモタロス… デンライナーの皆。もう一度… 俺と一緒に戦ってくれ!!」

「アタックライド デンライナーゴウカ!」

アタックライドのカードを装填すると、デリシヤスフィールドの上空から空間が出現する。

ローズマリー「何あれ… 電車?」

ヤムヤム「はわわ〜!空飛ぶ電車だ〜!!」

スパイシー「咲夜達仮面ライダーの中にも、こんな物があつたのね…!」

デイケイド「ああ。時の列車 デンライナー… オーナに頼んどいて正解だった!」

プレシヤス「オーナー…?」

其処からレールを生成しながら出現した四両車の赤い新幹線 デンライナーゴウカが2号車『ドギランチャー』を犬の顔の様に展開し、超音波を含んだ咆哮で強化ウバウゾーを捕捉させながら残りの3号、4号車を展開させる。

デイケイド「お前ら、一旦此処から離れる。巻き添え食らうぞ!」俺の掛け声で全員を非難させると、弾幕というべき豪雨を強化ウバウゾーへと迎撃するデンライナーゴウカ。

丁度良いところで迎撃が収まると停車し、1号車の出入り口が開く。

其処には見覚えのある異形が四体出て来た。

デイケイド「お前は…!」

モモタロス「へっ、やっぱ予想通りだったな。オーナーのチャーハンだけじゃなく俺達のプリンの味まで狂わせるとはとんだはた迷惑

な野郎だ」

デイケイド「モモタロス！来てくれたのか!!」

モモタロス「あん?… って、良太郎!?何でこんなところなんだよ!」

デイケイド「お前が知ってるデイケイドは士さんだろ?俺の声聞けば分かる筈だ」

モモタロス「確かに。どつかで聞いた事あるような…」

ウラタロス「先輩。このデイケイドは僕達の知ってるデイケイドじゃないよ?」

海亀を模した青いイマジン ウラタロスは、自分達の知っている契約者ではないと指摘する。

キンタロス「言われてみれば、ベルトが違うだけやしな」

リュウタロス「この喋り方覚えてるよ!アキノリだよね!」

モモタロス「アキノリだってえ!?言われてみれば… お前、声変わったか!」

デイケイド「やっと気付いたかバカ桃」

モモタロス「誰がバカ桃だ、この野郎!ハナクソ女じやあるまいし… でもまあ、俺のプリンの味を台無しにさせた落とし前をキツチり付けとかねーと気が済まねえしな!」

ジェントルー「何だ… こいつらは?」

急なタイミングで乱入して来たモモタロス達に、ジェントルーは困惑する。

モモタロス「よお。てめーが俺のプリンの味を狂わせた奴か?」

ジェントルー「そうだ、私はジェントルー。ゴータツ様の為にレシピツピを奪う為に行動している。君達の様な輩やかが何人増えようと結果は同じだ」

デイケイド「如何かな?こいつらはただモンじゃないぞ。モモタロス!あのオカマに取り憑け!」

モモタロス「えっ?オカマ?」

【カメンライド デイケイド!】

デイケイド「行って来い!」

モモタロス「うおわあああッ!」

ローズマリー「ええっ!?ちよつと咲夜ア〜!?」

俺はデイクイドに戻りながらモモタロスを強く蹴飛ばして、ローズマリーに強制憑依させる。

ローズマリー「……………」

憑依してから暫く経ち、ローズマリーは俯うつむいたままだった。

プレシヤス「マリちゃん…?」

ローズマリー「!」

「!?!」

プレシヤスが声を掛けるとローズマリーは頭を上げる。

赤い瞳に赤メツシュ。イメージの憑依が完了した。

Mローズマリー「つう〜!何しやがんだアキノリ!何もオカマに取り憑かせるこたあねえだろ!?ああ、気色わりい!!」

ローズマリー『ちよつと!私の美しさの秘訣に文句は無しよ!』

Mローズマリー「オカマもクソもあるか!変身!」

『SWORD FORM』

モモタロスは赤・青・黄・紫のボタンが付いてる変身ベルト『デンオウベルト』を腰に巻き、一番上の赤いボタンを押して黒いパス『ライダーパス』を翳かきす事で電王 プラットフォームに変身。

其処から胸部には赤い装甲を、背部には屈強な黄色い装甲が装着され、頭部の線路を通る様に桃を模した仮面が二つに割れる。

これが電王の基本形態『ソードフォーム』だ。

挿入歌『Climax Jump DEN-LINER form』

電王S「俺、参上!」

プレシヤス「ええーっ!」

スパイシー「マリちゃんが…!」

ヤムヤム「変身した!」

電王S「ジェントルーだか何だか知らねーがよ… 言っとくが俺は、最初から最後までクライマックスだぜ!」

ジェントルー「やれ、ウバウゾー!」

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

電王S「行くぜ行くぜ行くぜーッ!!」

強化ウバウゾーに立ち向かう電王は走りながらデングツシャーをソードモードに組み立て、ウバウゾーが突き出した右拳の上を突き進む。

電王S「でえりやあつ!!」

強化ウバウゾー「ウバツ!!」

ジェントルー「何っ!?!」

右袈裟切りを喰らい、少し後方へと下がる強化ウバウゾーにジェントルーは動揺する。

ウラタロス「先輩。次は僕ね」

電王S「カメ!もうちよつと暴れさせろ…うおあつ!?!」

『ROD FORM』

モモタロスからウラタロスへと乗り移り、赤と黄色の装甲が反転。黄色い装甲が展開し、海亀を模した仮面が六角形のオレンジの複眼を現す。

オールラウンダーな戦闘スタイルで戦う電王 ロッドフォームへとフォームチェンジを果たす。

電王R「お前、僕に釣られてみる?」

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

ローズマリー『不味い!アレが来るわ!』

電王R「大丈夫。自ら掛かろうとする獲物は釣られ易いものだから…ねッ!!」

ロッドモードにしたデングツシャーの釣り針を強化ウバウゾーの片足に引っ掛けたところを勢い良く引っ張り出し、仰向けに倒れさせる。

瞬時に方向が大きくズレ、エネルギー波が上空へと放たれた。

キンタロス「カメの字、交代や!」

電王R「キンちゃん早過ぎるって!うわあつ!?!」

『AXE FORM』

青い装甲が折り畳まれると分厚い黄色い装甲となり、頭部を斧から漢字の『金』を象徴とする四角形の仮面となる。

電王A「俺の強さにお前が泣いた！どっせえい!!」

強化ウバウゾー「ウバツ!?ウバババババ…!!」

パワーと防御がメインの『アックスフォーム』となった電王は親指を顎に当てながら首を捻ると、強化ウバウゾーが振り上げた左拳を突っ張りで押し返して行く。

リュウタロス「クマちゃん。次、僕ね!」

電王A「ちよっ、リュウタ。少し急かさんといても…」

『GUN FORM』

黄色い装甲から珠を持った腕を模した紫の装甲へと変わり、頭部もドラゴンを想起とさせる紫の仮面へと変わる。

電王G「お前倒すけど良いよね?答えは聞いてない!」

強化ウバウゾー「ウバババババ…ウバウゾー!!」

ガンフォームとなった電王は強化ウバウゾーを軽やかなステップで翻弄しながらガンモードに組み立てたデンガツシャーで銃撃する。

モモタロス「小僧!最後は俺に決めさせろ!」

『SWORD FORM』

電王S「行くぜ、俺の超必殺技!」

『FULL CHARGE』

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!!」

リュウタロスが追い出される形でソードフォームに戻った電王は再度ベルトに繋がったライダーパスを投げ捨てると、赤い稲妻が走るフリーエネルギーを右脚に集中させた飛び蹴りを放つ。

スパイシー「凄い…!」

ディケイド「これが時の運行を守る為に戦った仮面ライダー…電王の力だ。俺達もローズマリーに…いや、モモタロス達に加勢するぞ!!」

プレシヤス「うん!だって…、ご飯は笑顔, だから!!」

プレシヤスの言葉に応じたのか、ハートキュアウオッチから眩いピンク色の輝きを発する。

プレシヤス「えっ…?」

ヤムヤム「あっ…!」

スパイシー「何…!?」

強化ウバゾー「ウバツ!」

液晶画面から三つの光が流星の様に俺達に降り注がれると、ほかほかハートが溢れている虹色の別空間へと移動されていた。

宙に浮かんでいるのは、これまでの戦いで救出したレシピッピの姿が多数あった。

電王S「何処だ此処は？」

ウラタロス「妖精とか、そういうのなんじゃない？」

キンタロス「そうと決まりや、俺達に伝えたい事でもあるんやな」

リュウタロス「うわあ〜!可愛い!」

ヤムヤム「ほわわ〜!」

スパイシー「レシピッピが…!」

ローズマリー『何が起こってるの…!?!』

「レシピ〜!」

野菜スープとカレーパン个体は何かを伝えようとしている。

プレシヤス「皆…!」

「レシピ〜!」

ハンバーガー、餃子^{ぎょうざ}、ハートパン个体も何かを伝えている。

リュウタロス「若しかしてこの子達、仲間を助けてほしいって言うてるのかな!」

プレシヤス「えっ?」

ウラタロス「そうか。さっきの、ご飯は笑顔^{笑顔}に反応して、僕達を此処へ呼び寄せたんだ…!」

俺の代わりにウラタロスは状況を察すると、レシピッピ達は発した光を束ねて何かを四つ生成する。

生成したのは、ダイヤルが存在する少し濃いピンク色のミキサーの形をした武器。

電王S「何だありや?」

デイケイド「ハートのミキサー…?」

アイスクリームのレシピッピ「レシピ…!」

パムパム「ハートジューシーミキサー、パム!」

アイスクリームのレシピツピ」「ピピ！ピツピピ〜！」

デイケイド「これで仲間を助けてほしいって言いたいのか…？」

ローズマリー『レシピツピ達の奇跡が、プリキュアとデイケイドに爆盛り新たな力を…!?!』

電王S「そういう事なら、話は早え。プレシヤスとか言ったな。やるなら今しかねーぞ！」

プレシヤス「分かった。やってみる！」

デイケイド「こうなりや自棄糞だ！」

□

俺とプレシヤスはハートジューシーミキサーの中央にあるダイヤルを三角が描かれた方へと90度回転させる。

プレシヤス「キュアプレシヤス！」

デイケイド「ハートジューシーミキサー！」

プレシヤス「シエアリン！」

デイケイド「エナジー！」

「ミックス!!」

其処から三回先端のレバーを押し込み、エネルギーをチャージする。

コメコメ「コメ〜!!」

コメコメの掛け声で最後にもう一度レバーを押し込み、ハートジューシーミキサーを銃の様に構える。

「プリキュア・デリシヤスプレシヤスヒート!!」

ハート型のトリガーボタンを押し、強化ウバウゾーにピンクとマゼンタの螺旋状のエネルギー波を放つ。

強化ウバウゾー「お腹一杯！」

「ゴゴ馳走（お粗末）様でした！」

「ピピ〜!!」

□

直撃した強化ウバウゾーは浄化され、消滅に伴って二体のレシピツ

ピが解放された。

スパイシー「凄い…！」

ヤムヤム「ハートジューシーミキサーマシマシ〜!!」

プレシヤス「おかえり…！」

レシピツピ達はハートキュアウオッチに格納される。

プレシヤス「皆有難う！」

ジェントルー「キュアプレシヤス… デイケイド…」

電王S「てめえ… まだやる気か!？」

ジェントルー「… 済まない」

モモタロスを含め、俺とプレシヤスも最初は警戒していたが、次に
出たのはレシピツピへの扱いに対する謝罪の言葉だった。

デイケイド「！」

プレシヤス「えっ…？」

ジェントルー「レシピツピを傷付けて…」

プレシヤス「何言って…!？」

デイケイド「…！」

プレシヤスは問い掛けるが、ジェントルーはふらつきながら早々と
姿を消した。

やっぱり、洗脳が解け掛けているのか…？

□

D I E N D S I D E

僕はオーロラカーテンを展開しながら立ち去ろうとしたが、偶然に
陰に隠れていたナルシストルーを見掛ける。

如何やら先程の戦闘を見物していたそうだ。

ナルシストルー「ああ、楽しかった… 苦しむ顔って最高だね。で
も、もう少し遊ぶには… 操り糸を結び直した方が良さそうだ」

デイエンド「…！」

彼が冷笑を浮かべた言葉を聞いた僕は、オーロラカーテンへと潜り
抜けて行った。

ナルシストルー「… お前もそう思わないか？ デイエンド」
後に呟いた言葉も聞かずに。

□

Sakuya side

ローズマリー「本当にお疲れ様！」

ローズマリーの労いの言葉を受けながら、俺達は新しい力を手に入れた記念としてバケツを使った巨大プリンを作っている。

勿論一緒に戦ってくれたタロスズの皆にもお裾分けしてもらいたいが為に、オーナーの許可を得てなごみ亭に待機してもらっている。

ゆい「出来たく！ 巨大プリン！」

モモタロス「ウヒョ〜！ 美味そう!!」

キンタロス「こりや相当のデカさやな」

ウラタロス「この大きさ、オーナーにとってはかなりの高難易度かも…」

リュウタロス「それより皆。早く食べようよ！」

咲夜「そう急かすなリュウタロス。それじゃあ野郎共、今回の勝利を祝って…！」

『乾杯（コメ）（パム）（メン）！』

ゆい「あーん。んんっ！ デリシヤスマイル〜!!」

モモタロス「くう〜！ 美味え!! やっぱ戦った後のプリンは最高だぜ！」

「ピピピ〜！」

乾杯と同時に巨大プリンを口にしたゆいとモモタロスは感想を述べると、ほかほかハートが溢れる食卓でオムライスとプリンのレシ

ピツピが姿を現す。

ゆい「よかった。元気になったんだ…！」

「ピピピく!!」

キンタロス「こういう時は、乾杯するのが一番や！」

メンメン「皆が無事で良かった記念メン！」

パムパム「それにしてもあの怪物、鬼みたいで怖いパムく…。」

モモタロス「あん？誰が怪物だこの野r…ギャアアアアーツ!!!?」

『!?!』

モモタロスがクソ犬の姿を見ると怖気づき、そのまま素っ頓狂な声を上げながら中庭に逃走する。

モモタロス「何で犬が二匹もいんだよ!?!こつち来るんじゃねえ!しっし!」

コメコメ「コメ？」

パムパム「パム？」

ウラタロス「ああ、御免ね。この人見た目は怖い顔してるけど、犬は苦手みたいなんだ」

「そっぴや忘れてた。モモタロスの姿って確か、良太郎の思い描く『桃太郎』の鬼をイメージされたんだっけ。」

その為、犬が嫌いなのも納得出来る。

コメコメは狐… 謂わば犬科なのでそう判断出来るモモタロスは案外凄いと思う。

咲夜「けど、モモタロス達に呼び出し喰らわせていなかったら完全に敗北していたから、きつと何かの縁だ。新しい力も手に入ったみたいだしな」

ゆい「だったらハートトジューシーミキサーでジュース作る？」

「ここね「作れる…?」」

らん「やってみよ〜!変身して出すね〜」

ローズマリー「止めて止めて!壊れる〜!!」

コメコメ「赤鬼さんコメ〜!」

モモタロス「おい!誰でもいいから、こいつを引っぺがしてくれ〜!!」

食卓内で笑いが弾む中、ゆいは何故か浮かない顔をしていた。恐らく、ジエントルーの事を気に掛けているのだろう。

□

DIEND SIDE

ジエントルー「如何なってしまったんだ、私は…！」

僕はブンドル団アジトに戻ってから、未だに頭を抱えていたジエントルーがその場から立ち去る光景を見ていた。

如何やら、まだ裏切るタイミングじゃなさそうだ…。

□

電王S「今日はナオミのスペシャルコーヒー！何で俺が宣伝してるかって？頼まれたんだよ！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY

DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア く破壊者の食べ歩きく
らん「勉強って何の為にするんだろう…？」

ジェントルー「君達が来る事は分かっていた」

咲夜「もう苦しむのも時間の問題だジェントルー。いや…‥‥ 菓
彩あまね」

第十一品：ジェントルーの罠！ゆいとらん、テストで大ピンチ!?!
隠し味のイメージ!?!明かされる衝撃の真実！

第十一品：ジエントルーの罫！ゆいとらん、テストで大ピンチ!?／隠し味のイメージ!?明かされる衝撃の真実！

□

DIEND SIDE

ジエントルー「何故言わなかった!?」

ナルシストルー「何の話？」

ジエントルー「捕獲箱に自分の力を注ぐと、レシピツピに大きなダメージにある事だ」

ブンドル団のアジトにて、ジエントルーがナルシストルーに注意点を言われていなかった事を詰め寄る。

ナルシストルー「ああ、それ。言う必要ある？君の使命はレシピツピを集める事…手段は如何だっという。違うか？」

ジエントルー「違う！私は優雅ゆうがに紳士ジエントル的に仕事を熟こなしたい…！」

ナルシストルー「結果出してから言いなよ。レシピツピは盗んでない、プリキュアは始末出来てない、おまけに電王と云ったまるでバカの集合体と呼ぶべき邪魔者が一人増えた…何してたの？」

ジエントルー「…策はある」

主張に反発するも逆に真実を突き付けられたジエントルーは反論出来ずにいたが、まだ作戦を残している様だ。

ナルシストルー「ふん。そいつは楽しみだ…あ、そうだ！捕獲箱に注ぐ力を加減すればレシピツピは大して苦しまないよ」

ジエントルー「何故それを先に言わなかった!？」

強めに問い掛けるジエントルーだが、ナルシストルーの態度が変わる事はなかった。

ナルシストルー「良い顔。ただ…加減すると前程ウバウゾーは強くない。如何するかは君次第だ」

顔を顰しかめながらその場を立ち去ろうとした時、又しても頭痛が彼女

を襲った。

「デイエンド「……………」」

「ジェントルーが去ってから暫く経ち、僕は仮面の下でジェントルーの様子を心配していたが、話を密かに聞いていたかの様におばさんが現れる。」

「セクレトルー「ジェントルーの件、ゴードッツ様に報告します」

「ナルシストルー「そうだね」

「デイエンド「… おばさん。その前に僕から聞きたい事があるんだけど」

気が付いた頃には朝となり、僕とあまねは登校している男子生徒一人と女子生徒三人の姿を静かに見かけた。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何

を噛み締める？

イメーゴP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Sakuya side

昨日俺はデンライナーでオーナーと相談し、ブンドル団との戦いが
終わり次第、予備用のデンオウベルトとライダーパスを一時的に預か
る事となった。

この人も前に自分のチャーハンの味を狂わせていた事に相当腹が
立っていたそうなの。

一応、ベルトとパスはローズマリーが所持する事となっているが、
一応タロスズも憑依無しで変身は可能らしい。

らん「はわわ。頭の中から靴の先までポテトサラダだよ。…」
ハートキュアウオッチでポテトサラダの名門店を検索してほっこ
りとしていた華満だったが、突然に校内アナウンスが学校内に木霊す
る。
こだま

??? 『皆さん、お早う御座います』

咲夜「この声は…！」

ゆい「生徒会長？」

声の正体はジェントルーの正体でもあり、この学校の生徒会長でも
ある菓彩あまねだった。

洗脳されているとはいえ、今度は一体何を企てているんだ…？

あまね『我が校が目指すのは文武両道。部活動を更に実りある物とする為に勉強の方もしっかり強化するべきだと考えました。其処で本日、お昼休みの後、実力テストを行う事にしました』

咲夜「な、何だつてエ〜!？」

クラス内がざわつく中、会長は続けて言う。

あまね『そして、テストで40点以下を取ってしまった生徒は放課後、補習を受けてもらいます』

らん「ほえ、ほえ、ほえ〜っ!？」

クラスメイトA「無理、俺居残り決定〜」

クラスメイトB「いや、頑張れよ」

諦めモードに入った生徒にやる気付ける者もいたが、華満は机で蹲うずくまっていた。

如何やら勉強が苦手の様だ。俺は国語の読み方なら得意だけど。

らん「今日はポテサラ食べに行こうと思ったのに…」

ゆい「大丈夫だよ！あたしも今日マリちゃんとかパフエ食べに行く予定だったし！テストまでの休み時間まで一緒に勉強しよう？」

ゆいが激励しているとは言え、この食いバカ二名は確実に補習を受ける事は目に見えてる。

俺は如何なるかは分からないが、やれるところまではやるつもりだ。

ここね「じゃあ先ず英語から… 咲夜が英語で言うから、これを日本語に訳して」

咲夜「Is this my pen？」

ゆい「簡単!」

らん「これは私のペンですか？」

「正解」

正解したのは良いが、何故か不安そうな表情をする華満。

咲夜「如何かしたか華満？せっかく正解したのによ」

らん「… それいつ使うの？」

咲夜「はあ？」

らん「これが自分のペンか如何か分かるじゃん。如何言う状況？」
ゆん「うくん…アレじゃない？友達と同じペンを持ってて混ぜっこ
ちやったとか」

らん「それで友達に聞いているの？『これは私のペンですか』って…
それ聞かれても混ぜっこちゃうから友達にも分かんないと思うんだけ
どね」

ここね「何処で引っ掛かっているの？」

咲夜「態々わざわざ変なところで食い付く必要もないだろ？」

ゆい「如何やって自分のペンを見つけられるんだらう…？」
変なところで疑問に思う食いバカ二人組。

咲夜「このままじゃ拉致が開かない、次は俺から国語の問題だ。こ
の諺ことわざなら流石のお前らでも分かるだろ。石の上にも〇〇。最後の方
は何が入る？」

ゆい「… サンドイッチ!？」

咲夜「はあッ!？」

ここね「如何いう意味…!？」

ゆい「天氣の良い日、石の上にサンドイッチを置いたら焼けてホッ
トサンドになる!？」

咲夜「お前らの発想は最早大食い選手か何かか？正解は『石の上にも三年』。石の上で座り続けているかの様に、ずっと我慢して待つて
いれば結果は出る事を意味する諺だ… こんなの小学生でも分かる
ぞ？」

「おおっ!？」

咲夜「… もう良い。お前ら食いバカの勉強に付き合ってもらえる
か。男子バト部に協力を求めてくる」

流石に呆れ返った俺は机から立ち上がり、男子バド部の仲間と実力
テストに関して相談しに行こうと、そのまま教室を出て行った。

部活仲間の協力を得てから数時間後、昼休みが終わって遂に始まっ
た実力テスト。

クラスメイトC「生徒会長が一人一人配ってくれんの？やさしい
〜!？」

「…？」

そして俺達が座っている一番下の机に答案用紙が置かれる。その様子に俺とここねは怪しむ。普通なら答案用紙を配るのは一列一人の筈だ。

恐らく、会長が…ジェントルーが狙っているのはウバウゾーと戦える戦力を僅かに減らすべく、俺達を補習で足止めして心おぎなくレシピツピを奪うって作戦か。

一瞬だったが、答案用紙を配り終えた会長が口を緩める様子が見えた。

あまね「それでは頑張ってください」

担当教師「じゃあ、始め！」

咲夜「これは…！」

担当教師の掛け声で俺達は答案用紙をめくると、俺は目を丸くする。

放課後のチャイムが木霊する中、俺は呆気を取られていた。

予想以上にやってくれたな。自分が生徒会長である事を把握した上で、俺達四人の答案を難易な問題が書かれている物と摺り替えると…！

ゆい「全然分からなかった…」

らん「らんらんも…でも全部ABCで選ぶ問題だったから最後は鉛筆転がして答え選んだ…」

咲夜「どんだけ自棄になってんだよ…！？」

ゆい「二人は出来た？」

ここね「うん。一応…」

咲夜「俺もだ」

ゆい「すごい！」

ここね「でも難し過ぎたと思う…」

らん「うんうん」

ゆい「だよねく!？」

というのは真っ赤な嘘。問題集の半分は当たりそうなところを適当に丸付けただけだが、結果が如何なる事やら…！

「ああ〜っ!?!」

担当教師「テストが40点なかった生徒は、放課後空き教室で補習です」

クラス内で声を上げる食いバカ二人組は予想通り補習行きとなった。

らん「鉛筆^{えんぴつ}転がしてたらまぐれでめっちゃ当たってた。でも後2点足りてなかった…!」

ゆい「あたしは22点…ここねちゃんと咲夜君は!?!」

ここねは90点、俺はまぐれにも51点で補習は免れたのは良いが、戦力を二人失った以上俺達だけでやるしかない。

□

T o u k i S I D E

華満少女が初めてプリキュアに変身した件で迂闊に店に入店出来ないジェントルーの代わりに僕はとある店に来ている。今日は日替わりでタラコパスタで、当店名物としてポテトサラダが食べられる様だ。

偶然にレシピツピ二体が店内で目撃した僕は食事を終えた後、店の路地裏でデイエンドに変身して捕獲箱を取り出す。

デイエンド「これやるの二回目かな？ブンブンドルドル・ブンドルー！」

「ピピピ〜！ピピ…！」

待機していたジェントルーと合流し、後はアキノリ達を待ち伏せするだけだった。

□

Sakuya side

俺がここねのハートキュアオウオッチからポテトサラダとタラコスパゲの個体がSOSを送っているのを見ると、走行させたマシンディケイダーを目的地に着くと同時に停車。

ローズマリーと合流する。

ここね「マリちゃん！」

ローズマリー「二人共、ゆいとらんは…？」

咲夜「あの食いバカ二人はまだ補習中だ」

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

召喚されたウバウゾーの声を頼りに、ここねとローズマリーをぎゅうぎゅう詰めマシンディケイダーを走行させながらデイエンドとジェントルーに出会す。

今回のウバウゾーは両脚から見るからにしてポテトマツシャーだな。

ジェントルー「芙羽ここね、門津 咲夜。君達が来る事は分かっていた… 行け、ウバウゾー!!」

ここね「マリちゃん行って。此処は私と咲夜が」

ローズマリー「… 分かった。貴女達とウバウゾーだけをデリシヤスフィールドに入れるわ。デリシヤスフィールド！」

デイエンド「おっと、僕の事も忘れちゃ困るよ！」

デイエンドが乱入したタイミングで俺達はデリシヤスフィールドに転送された。

ここね「行くよパムパム、咲夜！」
咲夜「おう！いっちょ暴れるか！」

□

パムパム「パム！」
ここね「プリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！オー
ブン！」

パムパム「パムパム！」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

ここね「シエアリンエナジー！」

パムパム「テイステイ！」

□

咲夜「変身！」

【カメンライド デイケイド！】

□

パムパム「パムパム！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー
！分け合う美味しさ焼き付けるわ!!」

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！
旅の語り…始めようか!!」

□

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

デイケイド「さあて、如何攻略するかだな」

デイエンド「一人でやらせる訳ないでしょ」

「カメンライド チェイサー!」

「カメンライド カリス!」

久々に召喚されると盛り上がってくる感じは置いておこう。

蠟螂カマキリを模した黒いボディ。赤い複眼と銀色の胸部装甲はハートの形をしており、双剣にも弓にも見える専用武器『カリスアロー』に装填されているのは腰に巻いてある『カリスラウザー』から取り外したユニット。

もう一人はオレンジの複眼を持ち、両肩に骸骨ガイコツの絵柄が描かれている水色がかつた銀色のライダー。

胸部装甲には紫でドライブのライダーズクレストと一本ラインが引かれ、各装甲が縁取られている。

愛する女性の為に戦うライダー『仮面ライダーカリス』と『仮面ライダーチェイサー』が無言で俺に襲い掛かって来る。

デイケイド「まあ、そうなるわな!」

「アタックライド イリユージョン!」

チェイサーとカリスを目の前に三人に分身し、俺とCは振り下ろされた双剣を露わにしたカリスアローと、信号をモチーフにした斧『シンゴウアックス』を同じく剣先を露出させたライドブツカーで受け止める。

デイケイドA「B! 此処は俺とCが!」

デイケイドC「しっかりサポート頼むぞ!」

デイケイドB「言われなくとも!」

掛け合った後、俺達はそれぞれの相手へ向かって行った。

□

No side

一方その頃、路地裏にて逃げ回っているジエントルーを追跡するMローズマリー。

彼にとっては好物であるプリンの味を変化させた事にまだ根に持っていたのだろう。

Mローズマリー「待ちやがれこの野郎!!」

ジエントルー「邪魔をするな!」

黒味がかった紫のエネルギー波を放つジエントルーの攻撃を一度は避けるMローズマリー。

Mローズマリー「ぐおあッ!」

後一步のところで攻撃を受け、吹き飛ばされると同時に距離を開けられてしまう。

□

B S I D E

強化ウバウゾーの方が先に動き、踏み込んだ足を避けながら上空に避けるスパイシー。

突き出された右拳をパン型のエネルギーで防ぐも殴り飛ばされてしまい、そのまま地面に落下してしまう。

デイケイドB「スパイシー！大丈夫か!？」

スパイシー「強い…!」

駆け付けた俺はスパイシーの眩きを聞き覚える。

顔色から見れば、俺達がこれまで戦ってきたウバウゾーとは桁が違う事は間違いない。

□

N o s i d e

Mローズマリー「待てこの野郎!」

ジェントルー「待つか!!」

Mローズマリーの呼び掛けにジェントルーは逃げる事を止めなかった。

□
とある新鮮中の空き教室にて、ゆいとらんは偶然通りがかった拓海に課題授業を手伝っていた。

らん「ふおえく！出来たく！拓海さまさま。有難う御座いますく！！」

ゆい「らんちゃん！」

らん「大丈夫、任せて」

後を任せる様にらんは一足先に課題答案を運びながら空き教室を後にした。

拓海「…何かあったのか？」

ゆい「えっ？うん。ちよつとね…」

ゆいの即答に拓海はローズマリーとの関係についての疑問を問いつける。

因みにゆいはローズマリーに平謝る様子を拓海に目撃されていた事を知らない。

拓海「ローズマリーって人も一緒か？」

ゆい「えっ？何でそんな事聞くの？」

拓海「いや、俺見たんだよ。あのローズマリーって人は怪物と何か、どっかに消えるのを…」

ゆい「えっ？か、怪物…!?!」

料理の味が変わる度に拓海は何度かウバウゾーを目撃し、ローズマリーがデリシヤスフィールドを展開している様子を見ていた自分にとっては証言せざるを得なかったのだ。

拓海「あいつ、怪物の仲間なんじゃないか…?」

ゆい「違うよ！そんなんじゃないよマリちゃんは！」

拓海「…そうか」

ローズマリーが怪物の仲間ではないかと疑う拓海。その言葉にゆいの反発に引き下がってしまう。

まだ納得出来てない部分はあるものの、幼馴染である彼女に更なる疑問を吐く。

拓海「怪物って変だよな」

ゆい「変って…?」

拓海「だって、別に町なんて壊したりしないしさ。俺が見た時はただ『ウオー』って吠えてただけだし、何がしたいんだろうな…?」

ゆい「……!」

ウバウゾーが一般市民に攻撃した訳でも街を攻撃した訳でもない事に疑問を口にした拓海にゆいは口を開けながらある事に気付いたのだった。

□

らん「見つけた!」

補習を終えたらんに運悪く挟み撃ちにされてしまったジェントルー。

Mローズマリー「やつと追い詰めたぜ怪盗ヤロー!」

ジェントルー「くっ…!」

ローズマリー『モモちゃん。そろそろ交代よ』

Mローズマリー「んだよ。此処からが見せ所だったのによく!」

自分の見せ場を披露出来なかった事に残念がながらモモタロスは精神体となってローズマリーから離れ、憑依が解除される。

ローズマリー「やつと戻ったわ。デリシヤスフィールド!!」

ジエントルー「しまった…！」

ジエントルーはデリシヤスフィールドに転送させるローズマリーに愚痴を零す。

らんは即座に変身準備に至っていた。

□

メンメン「メン！」

らん「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー!!くるくる！」

メンメン「メンメン！」

らん「ミラクル！」

メンメン「メンメン！」

らん「シエアリンエナジー!!」

メンメン「ワインターン！」

□

メンメン「メンメン！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

□

ローズマリー「リユウちゃん！」

リユウタロス『やった！僕の出番！』

ローズマリー「変身！」

『GUN FORM』

出番が来て喜ぶリユウタロスにローズマリーはデンオウベルトを腰に巻き、紫のボタンを押しながらライダーパスをセタツチさせ電王ガンフォームへと変身する。

電王G「お前、倒すけど良いよね？答えは聞いてない！」

ジェントルー「時の守護者 電王か。君も私の邪魔をするつもりかッ!？」

電王G「僕達を邪魔だと思うなら消しても構わないよ？言っておくけど、これから倒される奴に答えは聞かないつもりでいるから」

ヤムヤム「じゃが芋は農家の人達が大切に育ててくれたから美味しいポテサラが食べられるの！その味を滅茶苦茶にするなんて…農家の人達の気持ち、想像しなさい！」

左手から黒いエネルギー弾を軽やかなステップで避けながら、組み立てたデンガツシャーで相殺する電王G。

抗議しているヤムヤムの話を黙然と聞いていたジェントルーだったが、又しても頭痛に襲われる。

その様子に電王Gは目を細めた。

□

ゆい「終わった〜！拓海、有難う！」

拓海「お、おい!？」

何とか補習を終わらせたゆいは学校を後にしながら先程拓海が
言っていた事に気付き、糸口を作っていた。

ゆい「拓海の言う通り、ウバウゾーはあたし達に攻撃しない…！」

コメコメ「コメ〜！」

ゆい「コメコメ…急がなくちゃ！」

コメコメと合流を果たしたゆいはプリキュアに変身する。

□

コメコメ「コメ〜！」

ゆい「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー!!にぎに
ぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

□

コメコメ「コメコメ！」

プレシヤス「熱熱〜飯に漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい
笑顔で満たしてあげる！」

□

プレシヤス「はあっ！」

勢いを付けながら飛び上がり、ローズマリー達のところにいるデリ
シヤスフィールドに向かった。

□

B SIDE

スパイシー「はあぁーッ!!」

互いに右拳が打つかり合い、後方に下がる両者。

強化ウバウゾー「ウバウ…！」

スパイシー「くっ…！」

強化ウバウゾー「ウバッ!ウバー…！」

強化ウバウゾーは体勢を立て直すと空中に飛び上がり、両脚に力を溜め込む。

デイケイドB「次は俺だ！」

「フォームライド ウィザード ウォーター！」

『スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜!』

ライダーカードを装填し、足場から出現した魔法陣を潜り抜け、青い四角形の頭部を持つウィザード ウォータースタイルへと姿を変えた俺は新たなライダーカードを装填する。

「アタックライド ビッグ！」

青い魔法陣を潜り抜けた右腕を巨大化させ、強化ウバウゾーの蹴りを受け止めるが、流石の俺でも徐々に後退させられる程に追い詰められる。

強化ウバウゾー「ウバ〜!!」

デイケイドB「悪いな。言っとくけど俺、何でも出来るんだよな」

徐々に後退させられながらも、俺は左手でライドブツカーから再びライダーカードを取り出す。

「アタックライド ブリザード！」

デイケイドB「はあッ!!」

強化ウバウゾー「ウバッ!?ウバババババ…!!」

受け止めた右手から冷気を放ち、強化ウバウゾーを一時的だが凍結

させる事に成功した。

デイケイドB「スパイシー、決めるぞ！」

スパイシー「うん！」

□

スパイシー「キュアスパイシー！」

デイケイドB「ハートジューシーミキサー！」

スパイシー「シエアリン！」

デイケイドB「エナジー！」

「ミックス!!」

パムパム「パムく!!」

「プリキュア・デリシャススパイシーベイクン!!」

強化ウバウゾー「お腹一杯！」

「ご馳走（お粗末）様でした!」

□

プレシヤス「二人共、お待たせ! ってあれ? ウバウゾーは...?」

デイケイドB「悪い。もう倒した」

プレシヤス「ええくっ!？」

□

NO SIDE

ジェントルー「邪魔をするなツ!!」

『FULL CHARGE』

憤慨を上げながらエネルギー弾を放つジェントルー。

電王Gはデンオウベルトにライダーパスを翳しながら両手でデンガツシャーの砲身を向けると、両腕の龍玉りゅうぎよくから放出された紫電しでんのエネルギーがデンガツシャーに充填。

トリガーを引いて紫色の光球を放ち、ジエントルーのエネルギー弾と接触を果たすと相殺され、激しい突風がジエントルーの視界を覆う。

ジエントルー「ぐっ…！」

電王G「今だよ、らんちゃん！」

ヤムヤム「うん！」

敵側が怯んでいる隙にトドメを刺すべく、ヤムヤムは頷く。

□

ヤムヤム「キュアヤムヤム！ハートジューシーミキサー！シエアリン！エナジー！ミックス！」

メンメン「メン〜！」

ヤムヤム「プリキュア・デリシヤスヤムヤムドレイン！」

□

ジエントルー「しっ、しま…！」

ギリギリ寸前のところまでヤムヤムドレインを片手で受け止めるジエントルー。

「ピピ〜！ピ〜！」

それと同時に捕獲箱が破壊に伴いレシピツピが解放。

アイマスクが破壊され、ジエントルーの変身が解除される。

プレシヤス「ヤムヤム」

ヤムヤム「プレシヤス、スパイシー…！」

デイケイドA「此方も終わった」

デイケイドC「デイエンドの野郎… 大分レベルを上げてきやがったな」

プレシヤス「ジエントルー… あたし思ったの。貴女は本当に悪い人じゃないんじゃないかって…」

顔を覆いながらへたれ込んでいるジエントルーにプレシヤスは呼び掛けると、デイケイド以外の一同は驚く。

ローズマリー『えっ…？』

スパイシー「如何いう事…？」

デイケイドA「…」

プレシヤスは尚も続けて言う。

プレシヤス「貴女はレシピツピを奪おうとしてきたけど、でも！出来るだけ被害が出ない様にした。学校でも皆を守ろうとしてたんだよね？それにこの前は…レシピツピを傷付けて貴女も悲しんでた！本当はこんな事したくはないんじゃないの？」

デイケイド「もう隠すのも時間の問題だジエントルー。いや——

菓彩あまね」

ジエントルー「止めろッ！私は…！！」

『！』

くED曲『前島真由／No Mans Dawn』く

内心を看破するプレシヤスとAの言葉に対して反論しつつ立ち上がるジエントルー。

覆っていた手を外してしまい、素顔が露呈してしまった。

プレシヤス「生徒会長…!?!」
ヤムヤム「ほえっ? 何で何で何で?!」
スパイシー「貴女がジェントルーだった…!」
あまねは再び顔を手で押さえながらへたれ込むと、紫の炎の様なオーラが吹き上がる。
赤い目から青い目へと戻り、Aは彼女こそが本来のあまねである事を確信したのだった。

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア　く破壊者の食べ歩きく
ナルシストルー「まだ君で楽しませてもらうよ。操り人形さん…」
ローズマリー「あの生徒会長さんは…心を操作されていたんだと思っわ」

ゆい「何かあたし達に出来ないかな?」
ジェントルー「私を…止めて…!」
スパイシー「許さない!」
ヤムヤム「ブンドル団!」
デイケイド「此処まで怒らせられたのは数十年振りだ…!!」
プレシヤス「皆、一緒に行こう!」
第十二品:小さじ一杯の希望! ジェントルーの本当の心/激情なる
進撃! 囚われた希望の救済!!
全てを破壊し、全てを繋げ!

第十二品：小さじ一杯の希望！ジェントルーの本当の心／激情なる進撃！囚われた希望の救済！！

□

DECADE SIDE

あまね「此处は…？」

『！』

あまね「君達は…っ!?」

意識を取り戻し、辺りを見渡した会長は俺達は何者なのかを問い掛けようとした次の瞬間、ブンドル団と思われる髪を結んだ男性が背後から現れると即座に羽交締めを仕掛けながら囁く。

ナルシストルー「まだ君で楽しませてもらうよ。操り人形さん…」

あまね「!!」

デイケイドA「待ってツ!!」

電王R「逃げた魚は深追い禁止。返って逆に釣られるから」

冷静に軽く説得しながらデングァッシャーを俺の足元に寄せたのは、ロッドフォームにフォームチェンジした電王。

モモタロス達には俺が力の半分を奪われていた事は既に証言済みだ。また力を奪われたら今度は取り返そうにもないと判断したのだろう。

デイケイドA「…済まないウラタロス。俺、熱くなり過ぎてた」

俺は冷静さを取り戻し、力を奪われた事を振り返ると会長を救おうとして踏み込もうとした足を止める。

同時にブンドル団の男は抑え込んだ会長共々、その姿を消した。

ヤムヤム「そんな…!!」

スパイシー「…」

プレシヤス「生徒会長…」

ローズマリー『…』

デイケイドA「…お前ら、会長に関して話があるんだ」

プレシヤス達が茫然と立ち尽くす中、俺は口を開いた。

世界の破壊者　デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメージOP 『寺島拓篤／Nameless Story』

□

Sakuya side

なごみ亭に戻り、俺はジェントルーの正体に関してありのまま全てを話した。

ゆい「生徒会長、如何しちゃったんだろう…？」

咲夜「華満の事をラーメン娘と呼んだり、今日の実力テストの答案用紙を配った際に不適に浮かべた笑み、そして赤い瞳と声に違和感を感じたが…まさかこんなにも適中するとはな…俺が半分の力を奪われる直前にジェントルーが頭を抱えながら変身解除した様子も目撃した。つまり…！」

ローズマリー「あの生徒会長さんは…心を操作されていたんだと思うわ」

自身の推測を告げるローズマリーに全員が驚きの表情を浮かべた。
ゆい「！」

らん「心进行操作、…？」

ここね「酷い…！」

咲夜「お前ら、今はジェントルーを… 会長を救う解決法を考えるのが先決だ。時間は山程ある… ローズマリー」

ローズマリー「ええ。彼女の様子は私とモモタロス達で見えて来るわ。それまで咲夜達は待機しててくれるかしら？」

咲夜「ああ。無闇に近付くと返って怪しまれるからな。此処は任せよう」

□

DIEND SIDE

ブンドル団アジトにて、紫のオーラに纏われた黒いハートがジェントルーに注ぎ込まれる。

黒いハートの中心には、小さな光を発しているのが確認出来る。

セクレトルー「この調整が済めば今度こそ迷いなく使命を果たすでしょう…」

ナルシストルー「ああ、これで苦しむ顔ともお別れか。残念」

ゴードッツの額のマークが光ると、ジェントルーの洗脳前である青い瞳が再び赤に染まる。

ゴードッツ『ふっふっふ…！』
不気味な笑みを浮かべるゴードッツに僕は自分の無力さを形作る様に握り拳を作った。

□

S a k u y a s i d e

ローズマリーとタロスズが様子を見に行つて来たところ、今日は休息を取っているとの事。

彼女の無事を安堵あんどしたゆいにローズマリーは何故か憂慮ゆうりよに声色を低くしていた。

俺はマシンディケイダーでゆい達をぎゅうぎゅう詰めで送つていた。

ここね「二人共、送つてくれて有難う」

ゆい「うん…」

咲夜「…」

不安そうな表情でゆいは返事をする。

その不安を催していたのは俺も同じだった。

らん「ゆいぴよん？」

ここね「咲夜も如何かしたの？」

咲夜「… ああ。ちよつとブンドル団と同じ様な敵組織を思い出してさ」

らん「ほえっ!? ブンドル団の他にも悪い人達がいたの!？」

咲夜「ああ、美食會… 奴等もブンドル団と同様、全ての料理を独占する為ならば手段は選ばない悪質集団だ。その集団の中にも、洗脳されている奴が多くいた」

ここね「洗脳って… その美食會って悪い集団の中にも心を操作されていた人達がいたって事!？」

らん「ええっ!? 待って待って! 話が全然追いつかないよ! アキぼんって何でそんな悪い人達の事を色々と知ってるの!？」

まあ、そう言うわな。最早、隠す必要もなくなった。

俺は真実を話すべく、大きく息を吐きながら言う。

咲夜「実を言うと、俺はこの世界の人間じゃない。俺は…、」世界の破壊者、の異名を持っている。その言葉の意味、分かるな?」

ここね「世界を破壊する… ? それってつまり、咲夜は別の世界から来たって事!？」

咲夜「ここねの察しが早くて助かった。新鮮中2年3組は単なる役割に過ぎない… ここねの言う通り、俺は別の世界から来た。全ての世界を救う為にな。これまでの旅で一度も洗脳された事はなかったが… 怒りの余り我に返って、怪物になった人間の命を殺めてしまった事がある」

らん「アキぼんが…」

ここね「人を殺した… !？」

そう、アレは俺のデイケイドライバーがネオだった時の話だ。

西暦2018年。当時ゆい達と同じプリキュアだった野々はなんとその仲間達が未来の消滅を経営理念に掲げている悪の大企業クライアス社と呼ばれる者達と戦っていた。

その戦いで俺はデイケイドの本来の姿、激情態、になってしまった事があり、元々人間だった怪人を完膚なきまで叩きのめした拳句の果て、遂にはその命を根絶やしにしまった。勿論、野々はなの目の前で。

当然、あの一件は俺にとってはトラウマとなっている。

二度とこんな事が起きない様にと、俺はダークファンタジーな異世

界に何度か訪れると直ぐにトレーニングを始めた事もあった。

一定時間だけだが、激情態の力を制御出来るか如何かは俺でも分からない。

らん「嘘だよね…!?アキぽんが人を殺したなんて…!!」

咲夜「声がデカイぞ。近くにいた人に勘違いされたら如何する?」

らん「ご、御免…ちよつと興奮し過ぎてた」

ゆい「あたしね、想像してみたんだ。若し、咲夜君が言つてた美食會の人達がジェントルーと同じ様に心进行操作されたら野菜を食べても美味しいって感じなかつたり、皆と話していても楽しいって思えなかつたり、自分の大好きな物が好きじゃなくなっちゃうのかなつて…!?」

コメコメ「コメ〜!やだコメ〜!コメ〜!」

コメコメは頭を撫で、ゆいに泣きながらしがみ付く。

その気持ちはクソ犬やドラジカも同じ気持ちだった。

パムパム「パムパムはいつもここねと一緒にいたいパム!」

ここね「パムパム…!」

メンメン「らんちゃんともつとラーメンのついて話したいメン!」

らん「らんらんも一緒だよ…!」

???「あたしもそんなの嫌よ!」

『!』

近くで黙って聞いていたキバーラは神出鬼没に現れ、ブンドル団のやり方に怒りを抑えきれずにいた。

自分を親しくしてくれた嘗ての仲間達の記憶が無くなるのが嫌だったのだろう。

キバーラ「あたしは…色々と貴女達と敵対してたけど、心进行操作なんてされたら夏海や栄ちゃん達との思い出が消えるんでしょ!?流石のあたしでも…こんな耐えきれないわ…!!」

キバーラは泣き囁く。こんな同情しない訳がない。

俺達は二人に向き合う。

ゆい「コメコメ」

コメコメ「コメ…?」

ゆい「あたしも、そんなのすつごく嫌だよ！」

咲夜「キバーラ。俺も夏海ねーちゃんや栄次郎じーちゃんの記憶が無くなるのは嫌だ。ジェントルーは…俺達が必ず救う」

コメコメ「ゆいっ…！」

キバーラ「咲夜っ…！」

咲夜「よしよし。此処で今の内に泣いとけ」

睨り泣くコメコメとキバーラを慰めながら、ゆいはジェントルーの気持を推察する。

ゆい「だから生徒会長は本当に辛かったと思うんだ。何かあたし達に出来ないかな…？」

その言葉の答えを、俺達が言うまでもない。

咲夜「…そんなの、もうとつくに決まってるだろ」

ここね「なら明日、会いに行ってみない？」

らん「そうだよ！会ってみて、それから一緒に考えよ！」

俺達の手を取り合う華満。

それと同時にコメコメの人間体が解除される。

キバーラ「貴女達…」

らん「『三人寄ればもんじゃが美味しい』ってよく言うじゃん」

ここね「『三人寄れば文殊の知恵』ね」

らん「はにや？そうだっけ…？」

咲夜「華満エ…！お前も後で補習だああーッ!!」

らん「ほえく!?それだけは勘弁してよ〜！」

咲夜「勘弁ならんツ!!」

ゆい「あつははははははは…！」

ゆいの笑いに釣れて行く俺達。

迷いが吹っ切れたのか、ここねとらんの手を握りながらゆいは礼の言葉を告げる。

ゆい「有難う、三人共」

「ああ（うん）！」

会長を助けようと新たな決意を込める。

俺が見上げた夜空には一等星が輝いていた。

□
S a k u y a s i d e

翌朝となつて俺はゆい達より先に起床し、ローズマリーと共にフルーツパーラーK A S A Iで見張りをしている。

よく見てみると、ローズマリーの右手には店の名刺が握られていた。

一応、キバーラも同行している。

キバーラ「あれ？ マリちゃん。そのカードは…？」

ローズマリー「ああ、このカードはお店の物だったから貰つて来たのよ。それにしても、可愛いカードね」

咲夜「どれどれ… ツ!？」

足音がした方角へ顔を向けながら屋根を飛び越えるジェントルールの姿を目撃すると、ローズマリーを背後に乗せながらマシンディケイダーで追跡する。

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

その時、予想外の事態が発生する。

何とジェントルールは店を襲撃してでもレシピツピを奪つたのだ。

ローズマリーはデリシヤスフィールドを展開し、俺は即座にディケイドに変身。

人命の救助をBとCに任せ、A個体である俺だけがデリシヤス

フィールドへと転送された。

ローズマリー「まさか、ウバウゾーでお店を攻撃するなんて…！」
デイケイドA「人命の救助はBとCに任せてる。あの様子だと、今度は強く洗脳されている可能性が高い…！」

プレシヤス「マリちゃん！咲夜君！」

ローズマリー「皆！」

ジェントルー「現れたなプリキュア。そしてデイケイド…」

丁度プレシヤス達も合流すると、ジェントルーは姿を現す。

だが、これまでの声色とは少し強めな感じだった。

プレシヤス「生徒会長…！」

ジェントルー「ふっ…やれ！ウバウゾー！」

強化ウバウゾー「ウバウゾー！ウバー!!」

一飛びしながら三日月状の青いエネルギーを飛ばす強化ウバウゾー。

プレシヤス「如何して又ジェントルーに…!!」

ジェントルー「何を言っている…？この怪盗ジェントルーこそ私の真の姿！」

スパイシー「如何して…!!」

問い掛けるプレシヤスにジェントルーはこの姿が自分自身だと証明する。

ローズマリー「如何やら、前より強く心を操作されてる見たいなの…！」

デイケイドA「その影響でウバウゾーが店を襲撃したってのか…!!」

プレシヤス「そんなっ…！」

ジェントルーは自身のエネルギーを捕獲箱に注ぎ込む。

味噌汁のレシピッピ「ピピく…！」

スパイシー「生徒会長、止めてください！」

ヤムヤム「レシピッピが苦しんでるよ…!!」

ジェントルー「それが如何した？」

「!!」

スパイシーとヤムヤムに対する返答に俺とプレシヤスは動揺の声を上げる。

味噌汁のレシピツピが入っている捕獲箱にエネルギーを注ぎ込みながらジェントルーは続ける。

ジェントルー「レシピツピをゴータツツ様に捧げるのが我が望み…。」

ローズマリー「ゴータツツ…!?!」

デイケイドA「ブンドル団にレシピツピの捕獲を命じている猫っぽい顔の親玉だ!」

ジェントルー「何故貴様がそんな事を…!?!まさか…!」

ジェントルーはローズマリーの肩に止まっているキバーラの方を向けると、眉間みけんに皺しわを寄せる。

歯を食い縛っている様子からして、キバーラに自身の親玉の名前をバラされたと思いついでいるのだろう。

まあ、言ったのはデイエンドだけだな。

ジェントルー「キバーラ…裏切ったなツ!!!?」

怒声と共に更に捕獲箱にエネルギーを注ぐジェントルー。

強化ウバウゾー「ウバ…バツ!!」

紫のオーラに纏われ、スパイシーが展開したメロンパン型のエネルギーに打撃する強化ウバウゾー。

ローズマリー「先ずはレシピツピを助けないと…!変身!」

『SWORD FORM』

プレシヤス「そうだね」

ヤムヤム「うん!」

電王に変身したローズマリーに続き、俺達も強化ウバウゾーに向かって行った。

□ 「プリキュアデリシヤスプレシヤスヒート!!」
強化ウバウゾー「お腹一杯!」

デイケイドA「ちよつと早いけど…」

□ 「(ゴ)馳走(お粗末)様でした!」
味噌汁のレシピツピ「ピピく!」

□ 数分経ってレシピツピを救出した俺達。

ジェントルー「チツ、裏切り者め… だが、我が使命は果たさねばならない…!」

舌打ちながらジェントルーはデリシヤスフィールドから姿を消した。

□ デイケイドA「……………」

その冷酷さに俺は目に焼き付けながら思った。

お前はそんな奴じゃないと。

□

S a k u y a s i d e

戦闘後、俺達は公園で会長に関して話をしていた。

BとCによって人命救助は何とかあったが、店は半壊状態に至った事には変わりはない。

若し、あの状態で再びジェントルーがレシピツピを強奪したらウバウゾーを呼び出し、再び店を襲撃してくるだろう。

らん「何か前と感じが違ってたよね?」

ローズマリー「心を操る術は強く掛け過ぎると段々本当の心を消してしまうというの…」

□ ここね「心が消す…!?」

キバーラ「あたしも栄ちゃんっていうお爺ちゃんが二度も洗脳された事があったから分からないわけでもないわ」

キバーラと親交を深めていた土さんのおやつさんの存在でもある
光栄次郎じーちゃんは二度も洗脳された経験を持つている。

ジェントルーの件を踏まえると、今回は冷静な態度で語っている。

ゆい「生徒会長の心はもう元には戻らないの？」

ローズマリー「それは・・・分からないわ」

ゆいの問い掛けに不安そうに即答せざるを得なかったローズマリー。

咲夜「・・・そう決めつけるのはまだ早いんじゃないか？」

「「えっ?」」

ローズマリー「あのね。お店でこれを見つけたの」

黙り込むここねと華満。俺はローズマリーのポケットからこっそり盗んだフルーツパーラーの名刺を差し出す。

ゆい「お店のカード・・・？」

咲夜「フルーツパーラー菓彩の名刺だ。これなら会長の心を取り戻せるんじゃないかって一枚持って来ておいたんだ」

ゆいは手渡した名刺を捲る。

ゆい「このイラスト・・・！」

ローズマリー「生徒会長さんが描いたそうよ」

ここね「可愛い・・・」

らん「興味ないって言ってたのに・・・」

ゆい「これが生徒会長の・・・あまねさんの本当の心なんだ！」

「ゆい(びよん)・・・」

ゆい「絶対に取り戻さなきゃ。あまねさんの心も体も！」

「うん！」

意気込むゆいにローズマリーは微笑む。

ローズマリー「問題は取り戻す方法ね・・・」

ゆい「あたし、あまねさんと話したい。話してみる！」

ローズマリー「えっ? 本当の心はきつと殆ど・・・！」

咲夜「さっきも言ったろ? 決めつけるのはまだ早い。、小さじ一杯、大きじ一杯、・・・ってな」

ここね「少しでも可能性があるなら・・・」

らん「それは大事な切っ掛けになる」
ゆい「うん！」

振り返ったゆいを見てローズマリーは意気込みを新たにする。

ローズマリー「…そうね。小さじ一杯だからこそ、希望と呼ぶの
かもしれない。そうとなれば、直ぐにジェントルーを探しましょう
！」

華満が突然に手を上げる。

らん「はい！それ、らんらんに考えがあるんだ」

お前の考えもあるが、俺の意見も聞かせてもらおうか。

咲夜「そんな事よりも、先ずはやっておきたい事があるんじゃない
のか？ローズマリー、デリシヤスフィールドを展開してくれ。決戦前
に少しでもやっておくべきだと思ってな…。トレーニング開始だ！」

□

夕暮れ時となり、屋根の上を飛び越えるジェントルーは自身のスマ
ホを見ると口を緩める。

『いつでもハンバーグ』というハンバーグ店に来店するが、これは偽の
デビューに過ぎない。

ローズマリー「待ってたわよ！」

咲夜「まさか、こうも簡単に引っ掛かってくれるとはな」

ジェントルー「お前達、如何して!？」

らん「この投稿を見れば、きっと来ると思ったんだく！」

ジエントルー「小癩こじやくな真似を…！」

咲夜「そんな事よりも会長。ゆいがお前と話がしたいんだとよ」
ジエントルー「何を言っている？私はジエントルーだ」

訴えるゆいの代わりに俺は言うが、ジエントルーは洗脳の影響か菓彩あまねである事を否定する。

咲夜「まるで聞く耳持たずだな…！」

俺より早く、ゆいが逃走を測ろうとしたジエントルーの手を掴む。

ジエントルー「離せ！」

ゆい「じゃあ、あたしから話すね！」

咲夜「いや、絶対離すなよゆい!?絶対だぞ！」

ジエントルー「だから離せと…！」

ゆい「話すよ…！」

「離せすな！」

ゆい「あたし、和実ゆい。食べるの大好き中学2年生！」

対話を迫られるジエントルーだが、ゆいの聞き違いの為か自己紹介をしてしまう結果となる。

咲夜「はあ!？」

ローズマリー「その”離す”じゃないでしょ!？」

ゆい「えっ!？」

呆れ顔でローズマリーが突っ込むと、何故か料理の匂いが漂う。

咲夜「ん?何か匂うぞ…！」

ゆい「んん〜!良い香り!ハラペコった〜！」

ここね「美味しそう…！」

らん「ほわわ〜。この春の日差しを胸一杯抱き締める様な香りはまさしく…！」

いや待て華満言うな。俺達のせつかくの作戦が…！

らん「あさからハンバーグ！」

咲夜「馬鹿ヤロオオッー!!!」

俺の叫びと同時にいつでもハンバーグとは色違いのハンバーグ店

『あさからハンバーグ』から出て来たのは品田。

タイミング悪過ぎじゃねーか！

拓海「ご馳走様でした。ん？」

ゆい「拓海…!?!」

らん「ほんぎやあく!?あの店だけ開くの早かったんだく!!」

ジエントルー「ブンブンドルドル・ブンドル!!」

ハンバーグのレシピッピ「ピピピく!ピピく…!」

店が開く時間帯を把握し損ねた華満は置いて、ゆいの手を払い除けたジエントルーは、キバーラを掴む形で拐いながらあさからハンバーグに出現しているハンバーグのレシピッピを捕獲する。

咲夜「クソツ！」

ローズマリー「しまった…!」

ジエントルー「汝なんじに我が力を授けよう。はああーっ!出でよ、ウバ

ウゾー!!」

強化ウバウゾー「ウバーツ!ウバウゾー!!」

捕獲箱が変化し、フードプロセッサの強化ウバウゾーが出現する。

洗脳が強い影響で再び街を襲撃しようとするが、ギリギリの所でローズマリーがデリシャスフィールドを転送してくれた。

一秒でも遅かったら人命救助が厳しくなるところだった。

ジエントルー「丁度いい、裏切り者のお前には少しは役立ててもらうぞ。キバーラ」

キバーラ「役立たせるって、まさか…!」

ジエントルー「…変身」

左手で掴む様に人質にされたキバーラを向けながらあの言葉を発したジエントルー。

紫がかったハートが身体に集結すると波紋が広がり、やが聴てはライダーの姿へと変える。

咲夜「マジかよ…!?!」

ゆい「あまねさんが… 仮面ライダーに!?!」

キバーラ(ジエントルー)「デイケイド。確かこの姿は貴様にとって
は天敵らしいな」

仮面ライダーキバーラ。デイケイドにとっては最大の天敵だ。

咲夜「妙な真似してくれるじゃねーか。野郎共、会長を救い出すぞ
！」
「「うん！」」

□
「「プリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！」」

□
コメコメ「コメ！」
ゆい「にぎにぎ！」
コメコメ「コメコメ！」
ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□
パムパム「パム！」
ここね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！オー
ブン！」
パムパム「パムパム！！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
メンメン「メン！」
らん「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！くるく

る！」

メンメン「メンメン！」

らん「ミラクル！」

メンメン「メンメン！」

□

「「シエアリンエナジー!!」」

□

コメコメ「コメ〜！」

□

パムパム「テイステイ！」

□

メンメン「ワンターン！」

咲夜「今回は・・・吹かないツ!!」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンドで心deスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しき焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「「アリシヤスパ〜テイ♡プリキュア！」」

□
咲夜「変身！」

【カメンライド デイケイド！】

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語り……始めようか!!」

□

ローズマリー「先ずはレシppiピを！」

プレシヤス「分かった！」

デイケイド「了解！」

キバーラ（ジェントルー）「させると思うか？はああッ！」
プレシヤス「うああっ！」

強化ウバウゾーに向かいながらレシppiピの救出を優先する俺達。だが俺とプレシヤスはジェントルーの蹴りで阻まれてしまう。

□
「プレシヤス!!」

デイケイド「クソッ！此処は分身せざるを得ないか！」

【アタックライド イリユージョン！】

デイケイドA「BとCはウバウゾーを頼んだ。俺とプレシヤスはジェントルーを如何にかする！」

デイケイドB「百も承知だ！」

デイケイドC「死ぬなよ？」

デイケイドA「お互い様だ！」

互いの健闘を祈りながらウバウゾーをBとCに任せ、俺はプレシヤスと共にジェントルーとの肉弾戦に至る。

プレシヤス「待つて！あたし、あまねさんと戦いたくない……話がしたいの！」

キバーラ（ジェントルー）「ふっ！」

デイクイドA「おっと。お前の相手はプレシヤスだけじゃないぞ！」
ジエントルーの右拳を避けるプレシヤスの言葉を不適に笑いながら、俺は再び振るわれた右拳を腕を交差させながら防御する。

□

C SIDE

ヤムヤム「プレシヤス！」

デイクイドC「今はウバウゾーとの戦いに集中しろ！」

強化ウバウゾー「ウバ：：バーツ!!」

プロペラ状のエネルギーを放つ強化ウバウゾー。

Bはライダーカードを装填すると、何処からか風に吹かれて周囲に集まった塵ちりに包まれる。

赤い複眼を持ち、アルファベットで『W』を模したアンテナを持つ二色のライダー。

右半身は銀のマフラーを靡なびかせる金色の縁取りを持つ黄緑。左半身は紫に縁取られている黒。

半分こ怪人とも呼ばれた涙を拭う二色のハンカチ『仮面ライダーW』へと姿を変えると、風のバリアを発生させて起動をずらす。

デイクイドB「はあッ！」

その隙にスパイシーがお姫様抱っこでヤムヤムを救出する。

スパイシー「大丈夫？」

ヤムヤム「有難うスパイシー：：！」

スパイシー「ウバウゾーは私達が。プレシヤスとAは生徒会長を！」

プレシヤス「任せて！」

デイクイドA「これで心おぎなくやりあえる：：！頼んだぞ！」

ローズマリー「四人共、気を付けて！」

ローズマリーの警告と共に再びプロペラ状のエネルギーを飛ばす強化ウバウゾー。

同時に俺はライダーカードを装填する。

「カメンライド ゼロウワアン…！」
『ライジングホッパ』、空^{A jump to the sky}への跳躍はライダーキック^{turns to a rider kick}へ変わる。』

黄色いバッタの様なエネルギー体『ライダーモデル』が分割。

それぞれのパーツに分かれて素体となった黒いボディにインストールされる形で装着。

赤い複眼を持つ蛍光^{けいこう}イエローのボディパーツが装着されたバッタライダー。

父の意思を継ぎながら夢に向かって飛ぶ社長『仮面ライダーゼロワン』へと変身した俺はライジングホッパの脚力を活かしながらエネルギー状のプロペラを蹴る。

「はああッ!!」

スパイシーと俺の飛び蹴りで強化ウバウゾの頭頂部に振動を与え、怯ませる。

デイケイドB「熱いのお見舞いしてやるー」

「フォームライド ダブル ヒートジョーカー!」

メラメラと燃える様なサウンドが流れ、ソウルサイドがオレンジに縁取られている真紅のボディに変わる。

ヤムヤム「はああッ!!」

デイケイドB「うおらあッ!!」

強化ウバウゾ「バーツ!!」

『W ヒートジョーカー』となったBは、ヤムヤムに合わせて炎を纏わせた右拳を打ち込むと辺りに熱風が発生する。

□

A s i d e

キバラ（ジェントルー）「ウバウゾめ。だらしない…」

ハンバーグのレシピピピ「ピピピ〜!」

強化ウバウゾの様子を見ていたジェントルーはレシピピピの状態^{いと}に厭わず捕獲箱に自身の力を注ぎ込む。

プレシヤス「止めて、あまねさん！」

デイケイドA「これが生徒会長のやり方か!?らしくないぞ！」

キバーラ（ジェントルー）「口説い！私はジェントルー…はあーッ！」

注ぎ込まれた力が紫のオーラとなり、更にパワーアップした強化ウバウゾーは回転鋸のこぎり型の黄色いエネルギーを放つ。

スパイシー「きゃああッ!!」

ヤムヤム「うわああッ!!」

「フォームライド ダブル ルナメタル！」

「ゼロウワアン… バイティングシャーク！」

『キリキリバイ！キリキリバイ！バイティングシャーク』
Fangs that can chop through concrete.
その牙はコンクリートをも噛み砕く。』

Bは黄色と銀のルナメタル。Cは鮫の顔を模した頭部と浅葱色あざねぎのアーマーを持つバイティングシャークへとフォークチェンジすると、回転エネルギーを火花を散らしながらも受け流す。

その装甲には削られた痕が遺っていた。

ローズマリー「四人共！大丈夫？」

プレシヤス「皆！」

キバーラ（ジェントルー）「ふっ！」

プレシヤス「うわあっ!?!」

隙を突かれ、ジェントルーの中段回し蹴りでプレシヤスは蹴り飛ばされるが直ぐに体制を整える。

プレシヤス「あまねさん…！」

キバーラ（ジェントルー）「くっ… はあッ!!」

ジェントルーの名前を呼び掛けられるジェントルーは嫌気を刺しながら振るつた左拳を俺は右手で受け止める。

デイケイドA「おいおい…少しは話する気にもならないのか!?!」

キバーラ（ジェントルー）「巫山戯るなッ!!」

だがそれでも聞く耳持たずに後ろ回し蹴りを受け、俺は蹴り飛ばされる。

キバーラ（ジェントルー）「これで終わりだ！」

ジェントルーが右手から放ったエネルギー弾にライドブツカーの銃身を向けるが、俺達に一体の影が立つ。

その正体はアックスフォームに変身した電王……ローズマリーとキンタロスだった。

プレシヤス「マリちゃん……！」

電王A「アキノリとは少しちやうどイケイドとは鬼ヶ島の件で世話になつとる。これ以上手エ出そうとすんなら、俺らが許さへん」

ローズマリー『私もこれ以上、プレシヤスと咲夜を傷付けるのは……許さないわよ！』

イケイドA「……ローズマリー、キンタロス。此処は俺達に任せなれ」

プレシヤス「まだ……話せてない……！」

電王A「……」

ローズマリー『二人共、あまねさんを信じたい気持ちは分かる。でも……！』

電王A「カマの字。俺は、あの嬢ちゃんの目を見りや分かる。あの目と勢いは……俺がカイっちゆう奴が率いとした敵イマジンの攻撃から前の契約者庇って死に掛けた側に居場所をくれた奴に似とる。お前もとつくに二人の事を信じとる筈や」

プレシヤス「マリちゃん。あたし達を信じて！」

ローズマリー『分かったわ。必ずあまねさんを救い出して頂戴！』

イケイドA「了解した！」

ジェントルーに再び立ち向かう俺達。

キバーラ（ジェントルー）「くっ……！喰らえ！」

右手から放つエネルギー弾を避けられたジェントルーの回転蹴りを右腕で受け止めるプレシヤス。

プレシヤス「あたし、あまねさんと……！」

右脚を下ろし今度は右拳を突き出すが、これもプレシヤスに受け止められる。

プレシヤス「あまねさん。あたし、貴女と友達になりたい！」

キバーラ（ジェントルー）「黙れッ!!」

デイケイドA「プレシヤス！ぐああッ!!」

「咲夜（アキぽん）!!」

プレシヤス「咲夜君…！」

デイケイドA「大丈夫だ。単なる切り傷だ…！」

愛剣であるキバーラサーベルを手に持ちながら微笑み掛けようとしたプレシヤスを切り裂こうとする。

直前に俺が割って出た事で深手を追う事はなかったが、逆に俺がダメージを負った形で膝ひざを突く。

胸部装甲を切り傷を付けられるとはな…。流石は世界の破壊者を負けずに阻止出来る強さを持つ存在ライダー。

夏海ねーちゃんが嘗ては破壊者としての運命を受け入れた士さんを止めただけにもある。

ローズマリ「私達も加勢を…！」

電王A「ならへん。これは三人の戦いや」

加勢に出てはならない事を告げるキンタロス。

腕を組みながらその様子を見届ける。

キバーラ（ジエントルー）「戯言ざれごとはうんざりだ！私はジエントルー。

貴様達と馴れ合うつもりはない!!」

俺は拒絶するジエントルーに構わず立ち上がる。

プレシヤス「戯言なんかじゃやない…。本気だよ…！あたし、レシ

ピツピが大好きなあまねさんと友達になりたいって思ったの」

キバーラ（ジエントルー）「私がレシピツピを好きだと？はっ、あり

得ない！」

デイケイドA「違うな。こいつは本気でダチになろうとしてい
る…。それは戯言でも綺麗事でもない…。分かり合おうとする心だ。

プレシヤス！」

俺の掛け声でプレシヤスはフルーツパーラーの名刺をジエント
ルーに突き付ける。

描かれていたイラストは笑顔を見せているパフェの個体と思われ
るレシピツピ。

プレシヤス「貴女はレシピツピを大事に思っていたじゃない？」

ヤムヤム「それを見れば、生徒会長がどれだけ愛を込めて描いたか分かるよ」

スパイシー「優しい絵、レシピツピやお料理への愛が伝わってくる…！」

頭を抑えながら後ずさるジェントルー。その様子は明らかに動揺している。

キバーラ（ジェントルー）「それを… 私が!? いや違う！ 私はそんな物を描いたりしない！」

デイケイドA「お前はこいつらの様に、レシピツピを愛する程の優しさがこうも簡単に消える訳がない。良い加減目を覚ませ！ 生徒会長 菓彩あまね!!」

キバーラ（ジェントルー）「貴様… 一体何者だツ!?」

デイケイドA「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけツ!!」

キバーラ（デイケイド）「やはり貴様はこの世界に居てはいけない存在だ。消えるデイケイド！ 例えこの身が朽ち果てようとも、貴様を消し去ってやる!! 私使命を果たす！ ゴーダツツ様の為にも!!」

俺は決め台詞を言い放つと、ジェントルーは背中に紫の粒子を集束させる事で両翼を生成させ、そのまま飛び蹴りを放つ。

デイケイドA「その心意気、俺は好きだぜ!!」

「ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイケイド！」

俺は並び立つファイナルアタックライドのカードのエネルギーを破壊のエネルギーと共に右拳に宿す。

これで、もうあの姿になる事はないだろう… 多分な。

本来なら緊急事態で使う予定だったが、人を殺すよりはマシか。

キバーラ「ソニックラージ!!」

デイケイドA「デイメンションパンチ!!」

使命を果たそうとする飛び蹴りと世界を破壊する拳が打つかり合う。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

互いの果たす一撃が火花を散らし、デリシヤスフィールド内の辺り一面が強く振動する。そして… !

プレシヤス「あたしも…何か出来る事を！500キロカロリー
パーンチ!!」

ジェントルー「何ツ!?ぐっ!」

俺が押し上げている間にプレシヤスがジェントルーの腹部に打ち込みながら殴り飛ばす。

ローズマリー『今よ!』

電王A「アキノリ!」

プレシヤス「咲夜君!」

スパイシー「咲夜!」

ヤムヤム「アキぼん!」

デイケイドA「はああッ!でえりやああああッ!!」

立ち上がろうとしたジェントルーの鳩尾みぞうちに右拳を打ち込みながら殴り飛ばす。

殴り飛ばされたと同時に変身が解除され、ジェントルーは仰向けに倒れていた。

キバーラ「いつててて…二人共、少しは加減くらいはしてよね!」

デイケイドA「悪いな。けど、こうもしないとジェントルーを…会長を救えない。こんな物でレシピッピを痛み付けるなんて片腹痛えよ」

ハンバーグのレシピッピ「ピッピ〜!」

俺はジェントルーの手から離された捕獲箱の中心をずらしながらライドブツカーで右斜めに斬り付け、ハンバーグ個体のレシピッピを解放させる。

プレシヤス「おかえり、レシピッピ!」

ジェントルー(青)「ううっ…」

デイケイドA「!!」

プレシヤス「あまねさん!」

「!!」

ローズマリー『本当の心が残っていた…!』

電王A「いや、まだや。あの様子やと、ある物を壊さなきゃならへん」

洗脳が解けたと思われたいたが、目を開けたジェントルーの左目の瞳は本来の人格である青色に戻っており、涙を流しながら救いを求める。

ジェントルー(青)「私を… 止めて… これを… 壊して… !」
プレシヤス「えっ… !?」

デイケイドA「如何やらあの黒いハートを破壊すれば、会長は助かる筈だ。プレシヤス、直ぐに浄化技を… !」

俺はプレシヤスに浄化技を指示するが、胸部には植え付けられたと思われる紫のオーラが纏まとわれた黒いハートが脈みやくどう動する。

ゴータツツ『ジェントルー… 使命を果たすのだ。ジェントルー』
デイケイドA「!」

干渉したゴータツツの声を聞き取ると、ジェントルーに紫のオーラが纏まとわれる。

完全に洗脳されたジェントルーの瞳には、ほんの僅かな光が無かった。

ジェントルー(赤)「ゴータツツ様… !」

地面に膝を付いたジェントルーに触れようとしたプレシヤスの手が弾かれる。

強化ウバウゾー「ウバウゾー… ! バーツ!!」

ヤムヤム「うわあっ!?!」

黒いハートに乗り移られた強化ウバウゾーは大幅にパワーアップし、赤いカッター状のエネルギーを飛ばす。

ヤムヤム「はう〜! マシマシの切れ味… !!」

ヤムヤムは跳び箱の要領で避けるが、岩山が真っ二つにされる光景を見るとその強さを実感する。

プレシヤス「あの黒いハート… !」

デイケイドA「あの中心に一点わずながら輝く光。あれが会長の… !」

プレシヤス「あれを壊さなきゃ!」

スパイシー「許さない!」

ヤムヤム「ブンドル団!」

プレシヤス「あまねさんの…！」

スパイシー「心も…」

ヤムヤム「体も…」

「絶対取り戻す!!」

黒いハートを目にしながら決意を固める三人。

その気持ちは俺も一緒だ。

デイケイドA「此処まで怒らせられたのは数十年振りだ…！B、

C！」

「!!」

デイケイドA「中間第一形態解禁だ。最強コンボも解禁したいが…良いよな!」

デイケイドB「ああ。何せこのデリシヤスフィールドは無限の間。遠慮は要らない…やるぞ!!」

デイケイドC「おう！」

「フォームライド オーズ ガタキリバ！」

「ダブル ファンングジョーカー！」

「ゼロウワアン… シャイニングホッパー！」

『ガータガタガタキリツバガタキリバ!』

緑のメダルにオーラが連なつて俺に重なると、昆虫の姿をした緑のオーズへと姿を変える。

脚部であるバツタレッグはそのままだが、頭部は鋏形くわがたの顎あごを模したオレンジの複眼を持つ頭部と蝟螂かまきりを想起とさせる両腕。

800年前の王が、この姿の人海戦術をフル活用して1万もの敵の軍勢を壊滅に追いやつた『最強コンボ』の称号を持つオーズ ガタキリバコンボ。

デイケイドB「うがあああーッ!!!」

サイクロンのソウルボディが白く変化させたBは咆哮を上げると、ジョーカーのボディサイドを含め鋭利的な見た目となる。

牙の記憶と切り札の記憶を持ち合わせ、闘争心を剥き出しに野獣の如く戦うダブルのもう一つの切り札 ファンングジョーカー。

The rider kick increases the power by adding to brightness!
『ライダーキックは強くなる! 輝きの力を纏つて!』

シャイニングホッパー!」俺が輝けば、闇は消える。」』

Cのデイクイドライバーのレンズから円形のゲートが展開。中央にあるロックが解除されると一回り巨大で金色のバツタモデルが出現し、そのまま網状のデータで捕らえて身に付ける。

バツタの後脚を模した頭部アンテナや装甲が付けられているゼロワン シャイニングホッパーへとCは姿を変えた。

デイクイドA「さあて、こっからが真骨頂だ」

挿入歌『渡部秀・串田アキラ／Got to keep it real (破食Short ver.)』

デイクイドA「ブレンチシェイドMAX50!」

ファイティ

こりやイリユージョンの出番がちよつと少なくなるな。

さつきも言った様にガタキリバは自身を最大50人まで倍増させる事が出来る『一人ライダー大戦』。

数の暴力で圧倒する人海戦術を得意とするけど、その代償として分身体が受けたダメージや疲労が全て変身者に跳ね返る。

だがこのコンボは巨大な敵や大量の敵と戦う時に真価を発揮する。それを理解した上で、俺は影分身の術の印を結ぶ真似をしながら自身を50人に倍増させる。

ローズマリー『増えたのはいいけど、これは分身大盛りすぎない…?』

当然の反応だな。まあこれも戦術の一つだから問題ない。

ヤムヤム「多人数マシマシ〜!これならお店もあつという間に閉店しちやいそう〜!」

スパイシー「これが、咲夜の本気…!」

プレシヤス「あの数なら、あまねさんを救える…皆!」

「うん!」

これで下準備は揃った。

ガタキリバA「カメンライドは好きに使い。行くぞ!」

『うおおおーッ!!』

挿入歌『北川理恵・五條真由美・Machico／NO PRIDE

ENO LIFE!』

強化ウバウゾー「ウバウゾー!!」

迫り来るガタキリバの人海に赤い輪投げのエネルギーを投擲する強化ウバウゾー。

デイケイドB「ヤムヤム。修行の成果を見せる時だ!」

ヤムヤム「うん!バリバリカッターブレイズ!!」

「アタックライド ショルダーファング!」

ジェントルーとの決闘前に予め無理しない程度にトレーニングをしておいてよかった。

Bは右肩に出現した刃『ショルダーファング』を取り外すし、そのまま投擲する。

ヤムヤムは両腕に電気を付加させたバリカッターブレイズで赤い輪つかを相殺。同時にショルダーファングがブーメランの如く帰還し、強化ウバウゾーにダメージを与える。

その隙を狙ったガタキリバ達に向けて赤いエネルギーを投擲する強化ウバウゾーだが、一斉に放った電撃で相殺されてしまう。

強化ウバウゾー「ウバツ!」

『うおおおーッ!!』

一斉に飛び掛かるガタキリバ達。

強化ウバウゾーが幾ら振り払っても、殴り飛ばしても数の暴力には抗えない。

マンモスが数十人の古代人と戦えば分かるだろう。

デイケイドC「俺も加勢するぜ。ふっ!はっ!やあっ!!」

Cは強化ウバウゾーをラーニングする事で攻撃を予測し、約25000通りの対処パターンを算出。

凄まじい機動力で残像を残して瞬間移動したと思えない程の機動力で翻弄する。

「フォームライド ウィザード ハリケーンドラゴン!」

『ビューー!ビューー!ビューービューービューー!』

ガタキリバの分身の一体が風に乗って頭上に出現した緑の魔法陣をドラゴンの残像と共に潜り抜けると、頭部と胸部にドラゴンの意匠を持ち、両肩には緑の宝石が埋め込まれている三角形の両肩装甲。

黒から緑に変化したローブを身に纏うウィザード　ハリケーンドラゴンへと姿を変えると、ライドブツカーからライダーカードを取り出す。

プレシヤス「スパイシー、お願い！」

スパイシー「オーケー。ピリツとへヴィサンドプレス！」

状況を察したガタキリバ達は強化ウバウゾーから距離を置くと、スパイシーは左右二枚に重ねたサンドプレスで強化ウバウゾーを強く押し込む。

「アタックライド　スペシャル！」

ハリケーンドラゴンの背部に出現した緑の魔法陣にドラゴンの残像が再び現れ、両翼でハリケーンドラゴンを包み込むと、竜の翼『ドラゴウイング』が具現化させる。

「アタックライド　サンダー！」

続けてカードを装填し、強化ウバウゾーの周囲を何度も旋回しながら飛行し、電撃を付加させた竜巻で拘束する。

「フォームライド　キバ　ドツガ！」

また一人、ガタキリバの分身の一体がドツガフォームへとフォームチェンジするとドツガハンマーを天に掲げる。

上空に発生した渦巻く黒雲からの落雷が強化ウバウゾーを襲い、止めの一撃と言わんばかりに紫電が混ざりし雷撃が振り下ろされる。

「カメンライド　ジツオーウ！」

『仮面ライダージツオーウ…！』

はたまたガタキリバの一体がライダーカードを装填。

背後に時計の文字盤の針が10時10分に止まると、マゼンタ色でライダーの文字が浮かび上がる。

更には腕時計バンドの様な輪のエフェクトが回転する事で、黒いスーツを身に纏われる形でその姿を変える。

金属製の腕時計を模した白い頭部。時計の針はさつき背後に出現した文字盤と同様10時10分を刺しており、胸部装甲から下までは腕時計バンドの様な装飾が付き、ライダーの文字が顔に嵌まる事で変身が完了する。

最高最善の王を目指す平成ライダー20番目の仮面ライダージオウとなったガタキリバはもう一枚カードを取り出し、ドライバーに装填する。

【フォームライド ジットオーウーII！】

頭部の針や時計モチーフのバンドが二つ分となり、両肩や首回りには未来の姿である最低最悪の王を思わせる金色が追加され、左側の頭部の針を見てみると時刻が2時を刺している。

全ライダーの力を凌駕するジオウIIへと強化変身し、通常形態のジオウの顔を模した武器『サイキョーギレード』の側面のスイッチを上へ上げる事でライダーの文字から『ジオウサイキョウー』に変わり、インディアン風な待機音が鳴る。

『ジオウサイキョー！霸王斬り！』

時計の文字盤を模したエフェクトと共に七色の斬撃を強化ウバウゾーに向けて飛ばす。

【カメンライド ゴースト！】

『レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！（G o . G o . G o . G o !）』

ガタキリバの分身に粒子が纏われ、魂と一つ目を合わせた紋章が胸部に描かれている素体と呼ぶべき姿へと変える。

同時にディケイドドライバーの赤いレンズから現れたオレンジのラインが入ったパーカーの姿をした幽霊『パーカーゴースト』は素体に覆い被さると一本角が生え、顔全体がオレンジとなり、黒い部分は複眼の様にも見える。

英雄の力で命を燃やす『仮面ライダーゴースト オレ魂』となったガタキリバは被っていたフードを取ると、ファイナルアタックライドのカードをドライバーに装填する。

【ファイナルアタックライド ゴ、ゴ、ゴ、ゴ、ゴースト！】

『大開眼！オレ！オオメダマ！』

生成した巨大なゴーストアイコンのエネルギー体が炸裂。ガタキリバのフォームライドは止まらない。

【フォームライド エグゼイド ダブルアクション！】

『マイティブラザーズ！二人で一人！マイティブラザーズ！二人でビクトリー！エーツクス!!』

出現したパネルを走りながらタッチしてエグゼイド レベル1へと姿を変えるが、相違点としては髪とバイザーの瞳の色がオレンジと緑の二色。

胸部装甲の右側には緑・黄・橙色の三色に別わけられた3×3の四角いボタンに変化しており、描かれているライダーゲージが三本となっている。

エグゼイド ダブルアクションゲーマー レベルXとなったガタキリバも続いてファイナルアタックライドのカードを取り出す。

『ファイナルアタックライド エ、エ、エ、エグゼイド!』

間近に近付くとアッパーカットで打ち上げるダブルアクションゲーマー。

そのまま強化ウバウゾーの懐ふところに入りながらゲームエフェクトのエネルギーを収束させた飛び蹴りを放ち、そのまま蹴り飛ばす。

『カメンライド デイケイド!』

デイケイドA「決めるぞ。プレシヤス!」

プレシヤス「うん!」

『ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイケイド!』

本体である俺はデイケイドの姿に戻りプレシヤスと共に必殺技を放つ。

デイケイドA「デイメンション…」

プレシヤス「1000キロカロリー…」

『ダブルパンチ!!』

強化されたサンドプレスが一撃を叩き込まれると同時に解除され、強化ウバウゾーは大きく吹っ飛ばされた。

ガタキリバの分身とイリユージョンが解除され、全員分の疲労が俺を襲う。

デイケイドA「もう少しの辛抱だ。ギリギリまで持ってくれよ…俺の身体!」

無理を通してでも助けたい強い想いが俺のハートジューシーミキ

サーに変化が起きる。

プレシヤス、スパイシー、ヤムヤムを指すダイヤルは健在ではあるが、空白のダイヤルには四角いマゼンタ、蝶型のシアン、炎の赤、唇の紫が追加されていた。

デイケイドA「これが、俺の新しい力…！」

プレシヤス「皆、一緒に行こう！」

「「うん（おう）！」」

□

「トリプルミックス！デリシヤスチャージ！」

プレシヤス「プレシヤスフレイバー！」

スパイシー「スパイシーフレイバー！」

ヤムヤム「ヤムヤムフレイバー！」

ダイヤルを緑のハートに合わせ、プレシヤス、スパイシー、ヤムヤムの順でレバー一回押し、最後に五回押し込む。

□

デイケイドA「仮面ライダーデイケイド！マスクドジャーニーミキ

サー！ライダー！トランス！ミックス！」

プレシヤス達の単独技と同様ダイヤルを四角いマゼンタの方へ回し、レバーを四回押し込む。

□

「プリキュア！MIXハートアタック！！」

□

デイケイドA「ライダー…トランスデイメンションスプライス
！！」

トリガーを押し、四つの浄化技が合わさり虹色の螺旋らせんのエネルギーとなつて強化ウバウゾーを飲み込む。

ジェントルーに植え付けられていた洗脳の根源でもある黒いハートは木っ端微塵に消え去つた。

強化ウバウゾー「お腹一杯！」

デイケイドA「さらばだ、ジェントルー。それでは大変……」

「「「」馳走（お疲れ）様でした！」「」」

□

No side

ゴードアツツ『おのれ、デイケイド……！』

ジェントルーの敗北でゴードアツツはデイケイドに対しての愚痴を零した。

□

どす黒いオーラが消え、瞳が赤から青に戻り、気を失つたジェント

ルーは菓彩あまねの姿に戻る。

地面に倒れ込む直前で受け止めたのは言うまでもない。プレシヤスだった。

プレシヤス「あまねさん！」

デイケイドA「会長！無事か!？」

ローズマリー「大丈夫。今度こそちゃんと戻ったわ」

ローズマリーは会長の無事を告げると、俺達は安堵する。

スパイシー「そう…」

ヤムヤム「ほえく。よかったあく！」

プレシヤス「うん。本当に良かった…！」

こうして、二つの心を持つ怪盗との悪しき心は新鮮中学校の生徒会長 菓彩あまねの中からその姿を消したと同時に、短い様で長く続いた戦いは終わりを迎えた。

小さじ一杯の希望を信じ続けていたからこそ、会長を手を掴めたのかもかもしれない。

デイケイドA「…うっ!？」

そう思っていた俺の緊張感は自然に解かれ、地面に倒れ伏すと変身が解除される。

ローズマリー「咲夜!?如何したのよ急に!？」

同じく変身を解除したローズマリーは心配そうに声掛ける。

咲夜「ああ、悪いな。ガタキリバの分身体が受けた疲労は全て…本体である俺に跳ね返ってくるんだ。こういう無茶でもしないと、助けられなかったからな」

ローズマリー「本当にお疲れ様。ん!？」

疲労が全て跳ね返り、俺は意識を失いそうになる中、何かの気配を感じ取ったローズマリーは近くの岩陰に身体を向ける。

スパイシー「マリちゃん?」

咲夜「如何かしたのか…?」

ローズマリー「ううん、何でもない。気のせいだったみたい」

否定していかないのかいなかったのか、ローズマリーは鋭くした目で岩陰に視線を向けた。

今でも様子を見に行ってもガタキリバの疲労が俺を襲っている。仕方がない。

咲夜「キバーラ。悪いが、あの岩陰を見て来てくれないか？人がいたら、成る可く気付かれない様にな…今の俺じゃ動けそうにもない」

キバーラ「お任せ〜！直ぐに見てくるわ！」

小声で警告を耳にしたのかは分からないが、キバーラはローズマリィが睨んでいた岩陰の裏を確認すべく飛んで行った。

□

K i v a a r a s i d e

あたしはアキノリに頼まれてマリちゃんが見つめていた岩陰の裏を確認すべく、気付かれない様に天辺に止まる。

其処には予想外な子がデリシャスフィールドで今回の戦いの一部始終を見ていた。

拓海「ゆいが…！それにあの門津がデイケイドだったなんて…！」

キバーラ「あの子は確か…！」

何処かで見えた事あるわ。あの子は確か、ゆいちゃんの事気に掛けた…！

手にはピンクの小箱が握られている。衝撃の事実にあたしは驚きを隠せなかった。

□

プレシヤス「今日は莓ジュース。あたしと乾杯！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY DAYS♪』

□

No side

??? 「ジェントルーさんがやられましたか。まあ、良いとしましよ

う。しかし、仮面ライダーは意外と便利な力を持っていますね。過去や未来に行ける列車を使って時の運行を守る電王、世界を破壊する能力を持ちながらも状況に合わせて変幻自在に姿を変えるデイケイド、やはり何れも厄介な能力ばかり。ジェントルーさんが退場した今、ワタクシの時代が近付いて来ているのと同然。…」

ブンドル団アジトにて、黒いシェフユニフォームの上にブンドル団共通のマントを羽織っている中年体躯の男がジェントルーの脱落を

重んじてはいない様に自らの企みを語ると、ゲンムが姿を現す。

??? 「おやあ？ゲンムですか。何しに此処へ…？」

ゲンム 「君に渡したい物があつて来た」

問い掛ける男にゲンムが投げ渡したのは、モノトーンカラーのガシヤコンバグヴァイザー。

よく見てみると、このバグヴァイザーのAボタンとBボタンの色がゲンムのイメージカラーの一つである赤と紫ではなく黄色と水色であり、

ディスプレイ画面が1930年代を意識しているのか、薄く茶色がかっている。

??? 「これは…？」

ゲンム 「それは嘗て私が、キュアプレシヤス達と同じプリキュアだった花寺のどかという少女の時代で使用したバグヴァイザーを微調整して作った新たなバグヴァイザーだ。名をガシヤコンバグヴァイザーⅢ^{ドライ}… 通常のバグヴァイザーとは違って、バグスターウイルスを投与^{とうよ}していない人間でも使用出来る様に仕組んでおいた。これでバグスターウイルスに侵される事なくバグスターを生み出せる筈だ。本来なら私に許可なくバグスターを生み出すのは癪^{しゃく}に障^{さわ}るが、ジェントルーが倒された以上作らざるを得なかった…」

ナルシストルー 「いやあ、実に素晴らしいよゲンム。流星は元ゲムマスター…、神の才能を持つ男、と呼ばれてる訳だ」

その様子を見ていたナルシストルーは拍手をしながらゲンムの才能を評価する。

ゲンム 「当然だ… 愛の力こそ、我々に相応しきエンディングをゴードッツに与える事が今の私の使命だ。その為には幻夢コーポレーションを復活させる。このガシヤコンバグヴァイザーⅢ^{ドライ}こそ、始まりの第一歩だ！」

ナルシストルー 「愛ねえ… 虫睡^{むしず}が走る」

ゲンム 「何…？」

ナルシストルー 「愛なんてものは単なる戯言だ。そんな下らない感情でゴードッツ様に相応しきエンディングとやらを与えられると本

気で思ってるの?」

ゲムム「貴様……私を愚弄する気か!？」

ゲムムが父との愛を汚され、怒号を浴びせながらナルシストルールの胸ぐらを掴むが、デイエンドの介入により事なきを得た。

デイエンド「社長さん、それぐらいにして。確かにジエントルーが倒されたのは事実だけど……こっちも少し本気を出さないと、また誰か一人脱落するよ……?」

ナルシストルー「そうだな、デイエンドの言う通りだ。ゲムム、お前のバグヴァイザーと俺様の捕獲箱……何方の性能が一番良いか、賭けてみたくないか?」

ゲムム「良いだろう。君には私の才能を侮辱した行為を見誤らせたところだが……先ずはお互いに開発した物で何れが一番採用出来るかを証明する事が優先順位だ」

余裕を見せたナルシストルーの挑発と言う名の賭けに冷静さを取り戻したゲムムは承ると、その光景を見ていたシェフの男はこの場から立ち去ろうとする。

???「さて、面白くなって来たところですがワタクシもそろそろお暇しましょう。早くしないとせっかくな作ったパンが台無しになりますからね、健闘を祈りますよお二人方」

デイエンド「……待って」

デイエンドはシェフの男の肩を置く。

デイエンド「そろそろ君も出陣した方がいいよ。ソルトルー」

ソルトルー「何故? 何故ワタクシがレシピッピを集めなければならぬのです?」

デイエンド「レシピッピを使った最高の料理、作ってみたくはない?」

デイエンドの囁きにシェフの男　ソルトルーは高笑いをする。

ソルトルー「いいでしょう……ワタクシも御一行させて頂きましょうナルシストルー。全てはゴータツツ様の為に!」

デイエンド（案外チョロいな。でもこうやって煽てちゃえば、何れは退場するでしょ）

ゲムム「ソルトルー。君にはこれを与えよう…。」

ゲムムがソルトルーに神の恵みと称して手渡した物は、幻夢コーポレーションのタイトルロゴもゲームタイトルイラストが描かれていない黒いライダーガシャット七本だった。

ソルトルー「これは…？」

ゲムム「それはゲームデータのない空のライダーガシャット…君だけのオリジナルゲームを作りたい余地があれば私が制作しよう。確か君は、1920〜1940年代のアニメが好きだったらしいな。手始めにどんなゲームを作りたいか要望に答えよう」

ソルトルー「そうですね…。フライシャー・スタジオやウォルト・ディズニーなどを採用するのは如何致しましょう？」

デイエンド「ディズニーは著作権だから却下！」

??? □

「アキノリ。お前もこの世界にいるのか…？」

S
e
e

y
o
u

n
e
x
t

C
h
a
p
t
e
r
2

第二章：菓子併せ喰い

第十三品：奪われた思い出を守れ！明かされる拓海の秘密／食物喪失は突然に!?ナルシストルーとソルトルー！

□

Sakuya side

ジェントルーとの戦いを終え、俺達は会長の自宅に訪問へ行っていた。

「誠に^{まこと}辱^{かたじけな}い！せつかく足を運んでくれたのだが…」

「御免ね。あまねは今眠ったところなんだよ」

ゆい「そうですか…」

「あまねには命に変えてでも伝えておく」

古風な口調で話す黒味がかった青年。右下の目には黒子^{ほくろ}が付いている。

左にいるのは薄紫色の髪的青年で、目の黒子は左下に付いている。

「お詫びと言つては何だけど、良ければこれ。皆で如何ぞ」

薄紙色の青年は、俺達に四人分のボトルを手渡す。

咲夜「これは…？」

「クリスタルシユガーボトル」。砂糖菓子だよ」

「ここね」ご丁寧^ごに有難^うう御座^{います}。お二人は…あまねさんのお兄^{あに}さんなんですか？」

咲夜「目に付いてる黒子が左右逆という事は、お前らは双子という事か？」

「威勢^{いせい}が良くて何よりだが申し遅れ、重ね重ね申し訳ない。自分は兄^{あに}のゆあんと申す」

「僕はみつき…其処^{そこ}の子猫^{こねこ}ちゃんの言^いった通り、僕達は双子なんだ。宜^{よろ}しくね」

らん「ほえ。双子…」

二人が双子である事に啞然^{ごうぜん}としている華満。

恐らく会長は、ゆあんの男性口調に影響を受けているものだと思う。
れる。

咲夜「こつ、子猫ちゃん!？」

キバーラ「んふふ。アキノリつたら弄ばれすぎよ」

投げ揃いながら俺の胸ポケットから出て来たのは、ブンドル団を裏切ったばかりのキバーラ。

ゆあん「これは喋る蝙蝠こうもり…!?咲夜とやら、これは新種か何かか!？」

咲夜「えっ!?!あいや…これは単なるAIが組み込まれた小型ロボットか何かなんだ…ってかキバーラ、何勝手に出て来てるんだよ!？」

キバーラ「別に姿見せたって良いじゃない。あたし、これからは貴方達を守ってあげるから…ねっ?良いでしょ?」

咲夜「…最早誤魔化ごまかしにもなつてない」

みつき「喋る蝙蝠だなんて珍しいね。おまけにこれも如何ぞ」

みつきに差し出されたのは、何とローズマリーが野菜スープの件で買った事があるハートフルグミだった。

咲夜「これってハートフルグミ!何でこんな物を!？」

みつき「蝙蝠の中にはフルーツが大好きな種類もいるから、その子には丁度いいかなと思って」

咲夜「恩に着るよ。今度、食わせてみる」

会長の自宅を後にする中、俺とゆいは背後を振り返る。

あれ以来、会長は休養の為欠席している。早く完治出来る事を俺は祈るばかりだった。

□

Takumi side

拓海「……………」

俺は一人で港に佇たたずむ中、左手に持つピンクの小箱を開ける。

中に入っていたのは、中央に緑の宝玉が埋め込まれているピンクのハートのブローチ。

宝玉が日陰に当たって反射し、小さな輝きを発した。

特別OP 『品田拓海／俺に出来る事』

□

翌朝、校門でゆいを待ちながら俺は昨日の事を振り返る。

何でゆいと門津が怪物と……！やっぱりローズマリーあのせいなのか？

ゆい「あ、拓海。おはよう！」

咲夜「浮かない顔をしてるが、如何かしたか？」

聞き覚えのある声をして顔を上げると、ゆいと門津が俺の様子を伺いながら近寄って来る。

話すなら今しかない。

拓海「ゆい。話がある… 門津、お前もだ」

「？」

□

Sakuya side

ここね「拓海先輩がマリちゃんの事を…？」

ゆい「うん。色々聞かれたけど、如何にか誤魔化しちゃった。何かあつたのかな？」

らん「仲良くなりたいたか？」

華満がゆいの疑問に憶測する。黙々と聞いてはいたが、俺はそう思っているとは限らない。

昨日、キバーラから岩陰にいた存在に関して聞いてみたところ、何と品田がデリシヤスフィールドの中に入っていた事が判明した。

その時は驚愕せざるを得なかったよ。通りでハンバーガーの件やら何やらでローズマリーがデリシヤスフィールドを発動していた光景を何度も目撃した訳だ。

よっほどゆいの事に好意を寄せてるんだな… 今度、からか揶揄ってみるか。

ゆい「そっか！そしたら今度、皆とお出かけする時、拓海も呼ぼうかな？」

らん「ほう！それなら今日は？激ウマカレー屋さんの新メニューが出るんだ〜！」

ゆい「あ、今日は御免。久し振りにお父さんとお話し出来る日だから」

ここね「久し振り…？」

咲夜「父ちゃんいたのか？」

ゆい「うん！」

ゆいの父親に関して質問してみたところ、世界中を回る漁師をしており、それで中々会えないとの事。

ウラタロス、女性を釣るのが好きだから憑依した上でナンパするだろうから怖いんだよな…。

らん「うへ〜。旅する漁師さん！」

ここね「カツコいい…！」

咲夜「これまで色々な世界を旅してきた俺より成し遂げてるって感じだな」

ゆい「あたしもいつか、世界を巡ってみたいな〜」

□

Takumi side

拓海「ただいま」

あん「たつくんおかえり。さつきお父さんと連絡が取れたんだけど…。」

拓海「ああ。今日のリモート会話だろ？何時頃繋がるって？」

俺は帰宅し、受付カウンターにいる母さんにリモート会議に付いて問い掛ける。

あん「夕方。和実さんや咲夜君と一緒にやる事になったから」

拓海「えっ!?個別に出来ないの…?」

あん「ゆいちゃんの顔も見たいからって。それと、咲夜君はお父さんにまだ会ってないから挨拶あいさつしたいって言ってたそうよ」

マジかよ。若し、個別で会話出来ていたら…。

拓海「父さんに聞きたい事が沢山たくさんあったんだけど…」

あん「何何？如何したの!?恋の相談ならお母さんも…!」

拓海「んな訳ないだろ」

俺は赤く頬を染めながら自室に向かうと、先程取り出した小箱を取り出す。

これは父さんに預かってもらっている物であり、事は今から一年前に遡さかのぼる。

く回想く

拓海「まだ準備してんの？荷物多すぎ」

俺の父親である品田門平は、次の漁の為に荷物を整理していた。

門平「これでも減らしたつもりだが、今度の航海はちよつと長くなりそうだからな」

父さんが俺と母さんが映っている写真を取ると、その反動で小箱が落ちてしまう。

中に入っていたのは緑の宝玉が埋め込まれているハートのブローチだった。

拓海「何か落ちたけど…?」
ただのブローチだと思つて拾つてみると、緑色の強い輝きを発する。

拓海「ん?これ、光ってる…?」

それに気付いた父さんは手で触れようとするが、強い衝撃で壁に弾き飛ばされてしまう。

拓海「父さん!」

弾き飛ばされた父さんは駆け寄つた俺の手からブローチを奪い取ると、その光は点滅した。

拓海「今のは…何!?!」

門平「お前にこれを話す時が来たか」

ハートのブローチを見ながら、父さんは俺にありのまま全てを話した。

自分がクッキングダムという異世界から来た、そして母さんはそれを知つた上で結婚したという事。

門平「そのデリシヤストーンには不思議な力が宿つていて、持つ者によつて力を発揮出来るんだ」

拓海「じゃあ、さっきのは…!?!」

門平「石がお前を選んだようだ。これを使う力がある者だと…それが何を意味するのかは分からないが、これはお前に預ける。いいか拓海…さっきので分かつたら?この石はおいそれと使つてはならない物だ。無くさない様に、大切に保管しておいてくれ。それと、デイケイドには気を付ける。奴は何れいず、この世界を破壊しにやつて来る悪魔だ。呉々も警戒を怠おこたるなよ」

拓海「…分かつた!」

〜回想終了〜

拓海「この石…あのローズマリーつて奴のと同じ物なのか?ゆいと門津はあいつに唆されて怪物退治を…!?!若し、何かあつたら俺が…!」

『この石はおいそれと使つてはならない物だ』

俺は小箱を開けようとしたが、父さんに言われた言葉が脳裏に過ぎ

る。分かつてるよ…！

そう眩きながら小箱を閉め、嘗て父さんが来ていた服が保管されているクローゼットを開ける。

拓海「確かにこれを着るのもなあ…」

□

Sakuya side

時間は夕方となり、俺を含めた和実家と品田家のリモート通話が始まった。

一応、看板は準備中にしてある。

ゆい「お父さん、おじさん。久し振り！」

???『おう。ゆい、元気か？それと、君がゆいが世話になっているって聞く咲夜君だな』

咲夜「はい。門津咲夜です」

門平『拓海、ゆいちゃんと仲良くやってるか？お前は昔っからゆいちゃんが好きだからな。恋のライバルが一人増えたってやつか？』
「違うってー！」

あきほ「今年の海の調子は如何？」

あきほさんが海の調子に関して問い掛ける。

因みにゆいの父ちゃんの名前は『ひかる』。あの「キラやばく」な星奈と同じ名前とは偶然だな。

ひかる『いい感じだ。あきほさん程ではないけど、魚料理も中々美味しいよ?』

ゆい「いいなく。食べてみたい!」

□

K i v a a r a s i d e

一方、あたし達は近くの公園のベンチで待機していた。

らん「ゆいぴよん。お父さんとゆつくり話せてるかな?」

キバーラ「いいな、アキノリだけ参加して。あたしも話してみたかったわ!」

ローズマリー「あら? コメコメ、如何したの?」

マリちゃんがコメちゃんの様子を伺ってみると、何だか元気がなさそうな顔をしていた。

キバーラ「若しかしてだけど、お腹とか空いてないかしら?」

コメコメ「... ハラペコったコメ」

ここね「あ。それなら私が...」

見事に的中。ここねちゃんがハートキュアオツチって呼ばれる時計の画面に触れると、コメちゃんの膝下にロールパンが置かれる。

ここね「はい。どうぞ」

コメコメ「ん〜! おいしいコメ!」

メンメン「一人で上手に食べられる様になったメン」

キバーラ「意外と便利ね、その時計。これなら非常食も問題ないわ

ね」

ローズマリー「あれはコメコメ専用のだから、非常食とかそういう物じゃないの」

らん「でも、キバっばって案外面白い事言うからコメコメ達とも仲良くなれると思うんだけどなあ…」

え…？ええっ!?き、き、き、キバっば!?

それって、あたしの渾名!?ちよつとらんちゃん!貴女の付ける渾名って一体如何言う発想なの!?

□

S a k u y a s i d e

門平『そろそろ時間かな?』

あん「寂しいわ…」

門平『済まない、あまり時間が取れなくて。でも… あんちゃんが好きそうな美味しいお土産たくさん買って帰るからねえ!』

あん「はくい!楽しみに待ってる」

拓海「頼むから人前でそういうの止めろよ…」

咲夜「まあまあ、そうも言わずに。俺も会えた事に悔いは無かったからな」

品田は互いに投げキッスをするバカ夫婦の光景に困惑する。

あきほ「それじゃ、ひかるさんも体には気を付けて」

ひかる『うん、あきほさんもね。ゆいも又連絡するよ』

ゆい「うん！またね！」

和実家夫婦も互いの無事を祈ると、リモート通話が途切れた。

暫く経って、ゆいはひかる。パパともつと会話したかった事で溜息を吐く。

ゆい「もつとお話したかったなあ…。」

咲夜「その内会えっから。元気出せよ」

あん「ゆいちゃんも寂しいよね…。私も寂しい。でもそんな時は問平さんとの思い出の味を食べて元気を出すの」

咲夜「思い出の味…ですか？」

あん「そう。あの日は今から丁度20年前、ゲストハウスの前で腹ぺこの門平さんが倒れてて…。」

「腹ぺこの…？」

あんさんが門平さんと初めて出会った日の事を振り返ると同時に、俺とゆいは初めてローズマリーと出会った日を思い出す。

あん「それでね。捕れ立ての美味しい白子しらすがあったから、しらす井を用意していたら門平さんが手伝ってくれて…。」

思い出話は続く。その時の門平さんは数日飲まず食わずの状態だったそうで、人手が欲しかった事で宿での住み込みで働く事となった。

ある日突然に仕事を辞める事となるが、本人も此処を離れる事は出来なかった様で最終的には結ばれ結婚したとの事。

拓海「いや、その話もういいから」

あん「良いじゃない。何度も言いたいのに」

あきは「大恋愛だったからね」

あん「今は海に出て離れ離れだけど、心は一緒。だからどんなに寂しくても、思い出のしらす井さえあれば元気になれるの」

ゆい「そっか。’’ご飯は笑顔うだね！」

咲夜「思い出を覚えている限り、その人は心の中にいるって事か。そういう話、悪くないかもな」

俺がそう感想を述べると、ゆいの腹の虫が盛大に鳴ってしまふ。

ゆい「ハラペコった〜。しらす井食べた〜い！」

咲夜「あきほさん、俺も良いっすか？」
あきほ「勿論、全員分は用意してあるわよ」
ゆい「やったあ〜！しらす丼！」
拓海「・・・相変わらず食い意地張ってんな」
そんな様子を見ていた品田の表情は、穏やかな様子にも見えた。

□

DIEND SIDE

デイエンド「まさか、キバラーが裏切るなんてね」

セクレトル「やはりこの世界此方の人間や、キバツト族と言った種族は当てになりませんでしたね・・・」

僕はおばさんが口に出した事に黙然としている。

口に出すタイミングを間違えれば組織内が不安定な状況に至り、僕がスパイである事がバレる虞おそれがあるからだ。

此方の人間って事は、おばさんやナルシストルーは別世界の人間である可能性が高いって事・・・!?

ナルシストルー「ま、ジェントルーは土地勘があるから利用してただけだし。レシピツピを探知出来るこれさえがあれば・・・」

セクレトル「其方よつやの方は漸く完成したのですね」

ゲナム「待て、ナルシストルー。私も同行させてもらおう」

話を密かに聞いていたのか、ゲナムの社長さんはナルシストルーと対峙する。

デイエンド「随分と張り切ってるね社長さん。ソルトルーは如何したの？」

ゲナム「ソルトルーなら私の新ゲーム開発の人材として、今はゲームの元ネタを寄せ集めている最中だ」

デイエンド「そっか。ウォルト・デイズニーの著作権切れの作品だけは元ネタに使っていいって言っておいたから多分大丈夫な筈なんだけど・・・」

ナルシストルー「奴も料理人としてのプライドが高いからな。レシッピを奪うついでに色々と楽しませてもらうよ・・・ゲナム」

ゲナム「望むところだ。君の才能より私の才能が上だということを証明してやる」

ソルトルー「お待ち下さい！」

突然にソルトルー息を切らしながら間を割って出て来る。

ソルトルー「ワタクシも御一行させていただきましようナルシストルー。プリキュアとデイケイドが如何いう者なのかを今直ぐにでも確かめておきたいのです！」

ナルシストルー「そういえばお前は、ゲナムと協力関係になったばかりだったっけ？分かったよ、今回は仲良くお手並拝見といこうか。但し、俺様達の目的は同じだ」

ソルトルー「勿論、そのつもりです」

セクレトルー「期待しています・・・って言うか、あんたらは面倒起こすなよ？では、セーの！」

「二」ブンドル・ブンドルー！「二」

セクレトルー「ていうか、いい加減あんたもやれよ・・・」

ゲナム「私がそんな下らん儀式に付き合うとも思ったか？」

社長の言う通り。こんな組織早く裏切りたいよ・・・（泣）。

□

Sakuya side

ゆい「んんん！デリシヤスマイル〜！」

あきほ「うん。出汁だし醤油しょうゆも良い味してる」

あん「ああ、この味〜！何年経つてもあの頃の思い出が鮮明よみがえに蘇よみがえるわ〜！」

拓海「しょっちゅう食べてるのによく思い出に浸ひたれるな…」

ゆい「美味しかった。もう一杯！」

咲夜「俺も！」

あまりにも美味いからもう一杯おかわりしようとしたその時、突然にハートキュアウォッチの警報音が店内に鳴り響く。

捕まったレシピツピは二体。鮭シヤケとイクラが乗ってるどんぶりの个体と、先程食ったしらす丼の个体。

拓海「なんだよそれ？」

咲夜「これはただの時計だ。アラーム設定付きなんだよ…」

ゆい「ううん、何でもない。ただの時計！それよりあたしと咲夜君、ちよつと用事思い出して…！」

警報音が鳴り響かせるハートキュアウォッチに目を付ける品田。

ゆいはただの時計だと誤魔化す。

咲夜「せめて半分暗い食いたかったんだけどな…！」
急ぎながらもあんさんに一瞬だけ黒味がかかった緑のオーラが纏まとわれる。

あきほ「あんさん？如何したの？」

あん「変ね。私、如何してしらす丼が食べたくなつたのかしら…？」

「!?!」

様子を伺うあきほさん。あんさんは何故しらす丼を食いたくなつ

たのかを問われる。

拓海「何だよ急に。思い出の味で元気出すって散々語ってただろ？」

あん「思い出の味？しらす丼が…？」

ゆい「あんさん…？」

拓海「母さん…？」

あん「そんな事より、ゆいちゃんと咲夜君。何か用事があるんじゃない…？」

ゆい「そうだった。御免なさい行かないと…！ご馳走様でした！」

咲夜「俺もごつつあんです！」

あきほ「今から？何処行くの？」

俺達は一礼すると、あきほさんに何処に行くのかを聞かれる。

此処は誤魔化すしかない。

咲夜「あ、ちよつとローズマリーの手伝いしなきゃならなくなったので…」

あきほ「気を付けてね」

俺達は店を後にすると、オーロラカーテンでマシンデイケイダーを召喚。

跨りながらゆいを後ろに乗せ、ハートキュアウオッチが指す方向を頼りに現場へと急行した。

□ 海鮮丼の店前でブンドル団と思われる人物を二人と、ゲナムを目撃する。

走行中のマシンデイクライダーを停車させ、ゼロデイクライドライバーを腰に巻いてライドブツカーの銃口を向ける。

ゲナム「キュアプレシヤスにデイクイド… 君達が此処に来る事は分かっていたよ」

咲夜「社長…！」

ゆい「貴方達なの？レシピツピを盗んだのは?!」

ブンドル団の二人組の一人の左手に持っているのは、言わずもがなレシピツピ用の捕獲箱。

形状はジェントルールの捕獲箱とは異なり四角い形状となっており、ブンドル団マークの下には薄い青緑色のラインが二本。左上にはリーダー機能が搭載されている。

もう一人の右手には、黄色と水色のABボタンを挟み込むディスプレイ画面が茶色がかっているモノクロカラーのガシヤコンバグヴァイザー。

よく見てみると、嘗てのどか達の世界で使用していたバグヴァイザーに類似している。

ナルシストルー「来たな」

向き直ったのは前に会長を拐^{さら}っていった奴で、緑の長髪を黒い髪留めで結んでいる青年。

ブンドル団共通の仮面を付け、背面には刺^{とげ}の様な装飾が付いた紳士服を着ている。

もう一人は鼻が少し尖^{とが}ったコック帽を被る中年体躯の男性。

顔付きは外人ハーフに近く、ブンドル団共通の仮面を付けている以外は黒いシェフユニフォームを着ている。

ローズマリー「ゆい、咲夜！」

ローズマリー達も何とか合流出来たそうだ。

ローズマリー「貴方はゲナム！それに、あの二人は…？」

咲夜「ローズマリー。こいつ、前に会長拐ってった奴だ！」

ナルシストルー「覚えててくれて光景だ。待たせたな！俺様は：」
キバーラ「こいつはナルシストルー！人が苦しむ顔が大好きな最低な奴よ！」

元ブンドル団だったキバーラが感情を込めて左側の青年を比喻する。

ナルシストルー「ちよっ!?せっかく名乗り出ようとしたのが台無しじゃないか！まあ良い：。少しは口調が乱れてしまったが、改めて俺様はナルシストルー。超絶イケてる怪盗さ」

ソルトルー「同じくワタクシはソルトルー：。ブンドル団一の偉大なる料理人です」

キバーラ「皆、今のこいつらを見て如何思った？」

キバーラの発言に俺達は呆然ながら一言。

ここね「そもそも誰も待つてない：。」

パムパム「残念なイケメンパム」

メンメン「全然凝つてなさそうメン」

らん「あの人達も操られてるのかな？」

コメコメ「コメコメ」

だとすりや皮肉だな。

ナルシストルー「俺様達はジェントルーなんかとは格が違う。一緒にするな：。それと裏切り者のキバーラも含めてな」

キバーラ「あんた達なんかと一緒にされたくないわ！」

呆然と冷たくあしらわれ、辛辣しんらつに言われてしまうナルシストルーだけが全くの無反応。

ジェントルーと同じく洗脳疑惑を掛けられてしまうが、同じ扱いをされた事を否定する。

メンメン「何が如何違うメン？」

咲夜「そうか：。ドラジカ達は目撃していなかったから言える事だ。だが俺は、レシピピツピ専用の捕獲箱は使用する人によっては効果が違うんだと解釈出来る」

ナルシストルー「察しが早いな。俺様が奪ったのはレシピピだけ

ます？ナルシストルー」

ナルシストルー「ふん。面白い…。カモン！モットウバウゾー!!」
俺達の威勢を認めたナルシストルーの捕獲箱から放つブンドル団
マークに押印された電磁レンジが緑の炎に包まれる事でウバウゾー
へと姿に変えるが、これまでのウバウゾーとは少し違和感があった。
額にはブンドル団のマークが描かれた牛の様な角が二本生えてい
る緑のパーツに角張った四角い仮面を付けている。

ローズマリー「デリシヤスフィールド！」

ローズマリーがデリシヤスフィールドでブンドル団を含めた俺達
を転送させる。

□

「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー!!」

□

ゆい「にぎにぎー！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

□
ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
「「シエアリンエナジー！」」
コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフォツ!!？」

□
コメコメ「コメコメ！」
パムパム「パムパム！」
メンメン「メンメン！」
プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい

笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンドで心d e スパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「ゴアリシヤスパァーティ♡プリキュア！」

□

咲夜「変身！」

【カメンライド デイケイド！】

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語らい…始めようか!!」

□

ローズマリー「変身！」

『SWORD FORM』

ローズマリーも腰に巻いたデンオウベルトにライダーパスをセタツチし、電王 ソードフォームに変身完了する。

電王S「俺、久々に参上！ってか、前のウバウゾーより少し違ってみてえだが？」

ローズマリー『気を付けて。いつものウバウゾーより何か違うわ！』

発電しているモットウバウゾーの強さをローズマリーは実感する。

電王S「へっ、こういうのは物は試しって言うだろ？」

ヤムヤム「だったらちよっと腕試し。バリバリカッターブレイズ！」

電気を纏ったカッターブレイズを避けるモットウバウゾー。

ヤムヤム「避けられた!?ぐぬぬ…それじゃあれなら如何だ!!」

新技を外され、地団駄を踏みそうな表情でヤムヤムは弾幕の如き数発の刃を飛ばす。

モットウバウゾー「モットウバウゾー！バツ!!」

電王S「ナイスだラーメン女。必殺、俺の必殺技…：パート3」
『full charge』

デンガツシャアの刃先を飛ばして撃ち落とされる直前のモットウバウゾーを空中に打ち上げる。

モットウバウゾー「ウバツ!?ウババババ…！」

電王S「…と見せかけてストレートど真ん中!!」
モットウバウゾー「ウバウゾー!!」

刃先を戻したデンガツシャアで斬り付け、モットウバウゾーは改めて打ち落とされた…いや、切り落とされたと言ったところか。

電王S「カメ!交代だ!」

『ROD FORM』

ソードフォームからロッドフォームにフォームチェンジしながらデンガツシャアをロッドモードに切り替える電王。

電王R「先輩が自ら交代を余地するなんて珍しいね。改めて、僕に釣られてみる?」

デイケイド「釣りなら俺も手伝うぜ!」

【アタックライド イリユージョン!】

【フォームライド ウィザード ランドドラゴン!】

『ダン・デン・ドン・ズ・ド・ゴーン!ダン・デン・ド・ゴーン!』

俺はライダーカードを装填し、黄色い魔法陣を潜り抜けるとウィザードドラゴンの姿をした砂塵さじんを纏う。

ボディはハリケーンドラゴンと同様だが体色は黄色で、四角い頭部にはドラゴンの意匠が宿る黄色いウィザードのドラゴンスタイルの一つ『ランドドラゴン』へと姿を変えた。

【アタックライド グラビティ!】

スパイシー「ピリツとへヴィサンドプレス!」

電王R「でやあッ!」

強化されたサンドプレスでモットウバウゾーを挟み撃ちにし、更にはデンガツシャアのオーラの糸で絡め取る。

仕上げに俺が手を翳かきし、上空から出現した黄色い魔法陣から放出した重力でモットウバウゾーを鎮圧する。

デイケイドA「拘束完了！ヤムヤム、撃ちまくれ！」
ヤムヤム「分かった！うおりやああーッ!!」

再びカッターブレイズの弾幕を浴びせるヤムヤム。

ローズマリー『三人共ナイスよ!』

デイケイドB「いや、俺まだ何もやってないんだけど」

ソルトルー「余裕ぶっていますが、甘いですよ」

デイケイド「何?。」

不適に笑みを浮かべるナルシストルー。

顔を怒りの余りに真っ赤に染めたモットウバウゾーが熱を放ちながら絡め取ったサンドプレスを打ち破る。

直ぐにグラビティの重力を上げて押さえつけようとするが、ゲンムの不意打ちを受けた事で解除されてしまった。

ゲンム「君の相手は私だ」

デイケイドA「クソッ!そう簡単にやらせないってか!?B!ウバウゾーを頼んだ!」

デイケイドB「任せろ!」

俺はゲンムと交戦すべく、Bにこの場を任せた。

B Side

ナルシストルー「面白いだろ?そいつは怒らせる度にパワーアップするぞ」

ローズマリー『だったらプレシヤス、一気に決めちゃって!』

プレシヤス「うん!1000キロカロリー...ッ!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

プレシヤスのカロリーパンチが打ち込まれる直前に俊敏な動きでかわ躲かされてしまう。

ナルシストルー「あー。大分怒ってるから、スピードも格段に上がってるな」

ソルトルー「このスピードでは流石に一発は当てられないでしょう…。」

電王R「一度怒らせた魚は釣り難にくくなるのと同じか…。」

デイケイドB「だったら俺が撃ち落とす！」

「フォームライド ダブル ルナトリガー！」

俺はライダーカードを装填し、黄色と青の二色のダブル。ルナトリガーへと姿を変えると、ボディサイドの胸部から出現した青い銃撃装備『トリガーマグナム』の銃口を向けながら黄色い光弾を数発放つ。

それに気付いたモットウバウゾーは素早い動きで避けようとした。だが、放たれた光弾が軌道を変えた追尾弾となった事で全て命中する。

モットウバウゾー「ウバツ!？」

ナルシストルー「何っ!？」

その際にプレシヤスはカロリーパンチを打ち込もうと奮闘する。

だが、スピードを翻弄された事でプライドを傷付けられたモットウバウゾーはスピード更に上昇させる。

「ファイナルアタックライド ダ、ダ、ダ、ダブル！」

デイケイドB「蜂の巣になれ！トリガーフルバースト!!」

マキシマムモードにしたトリガーマグナムをプレシヤスに特攻を仕掛けようとしていたモットウバウゾーに向けながらトリガーを引く。

変幻自在に軌道を変える青い破壊光線と黄色い誘導弾が多数同時に放たれる。

破壊光線は避けられたものの、誘導弾は全弾命中。

同時に何処からか飛んできたエネルギー弾がキャンディー型の岩に直撃した事でモットウバウゾーを下敷きにする。

デイケイドB「よし、一気に決める！」

□

「二ノプリキュア！MIXハートアタック！」

デイケイドB「デイメンションスプライス!!」

モットウバウゾー「お腹一杯!」

デイケイドA「特に言うこともないな。それでは皆さん…ご一緒に!」

「!?!?!ご馳走(お粗末)様でした!」

「ピピ〜!」

モットウバウゾーの浄化に伴ってサーモンといくらが乗っかって
いるどんぶりの個体としらす丼の個体が解放され、ハートキュア
ウオツチに格納された。

プレシヤス「おかえり」

□

A s i d e

ナルシストルー「ふふっ。まあ、これから楽しくやろうじゃないか」
ソルトルー「状況に合わせて姿を変えらるとは… 楽しませてもらい
ましたよ。デイケイド」

捨て台詞を吐きながらデリシヤスフィールドを後にしたブンドル
団。ゲナムも撤退したようだ。

今のは一体なんだったんだ…?

ヤムヤム「何かよく分かんないけどラツキーだったね」

スパイシー「でも、如何してキャンディーが…?」

ローズマリー『何か飛んできたみたいだったけど、何だったのかし
ら…?』

電王R「恐らくだけど、何者かがデリシヤスフィールドに侵入して
きたと考えられるね。きつき飛んできた光弾の方向を見れば分かる
けど、僕達が気付かない場所で放っていた可能性が高い…」

『!?!?』

ウラタロスの予測に俺達は驚愕する。

プレシヤス「あたし達が気付かない場所で一体誰が…?」

電王R「それは僕にも分からないよ。でも、あの様子だと相当の恥

ずかしがり屋さんかもしれないね」

デイケイドA「だとしたら、別のライダーである可能性が高いって事か？」

電王R「まあ、寧ろむしそう思ってもらっても有難いよ」

プレシヤス「・・・そつか。若し会えたらお礼を言いたいな」

ウラタロスは嘘付くのが得意なのは昔から知っている。今の発言は敢えて事を公おおやけにしないが為についた嘘だ。

俺はモットウバウゾーを下敷きにした存在が誰だが分かる。そいつは・・・！

□

T a k u m i s i d e

俺は自室のベットで寝っ転がりながらあの戦いでゆいと門津の言葉を振り返る。

咲夜『「ご飯は笑顔、だからな」』

ゆい『「自分勝手に誰かの笑顔を奪うのは許せない！」』

あいつら、自分の意思で怪物と戦ってるのか・・・？

俺はゆつくりと起き上がり、幼い俺とゆいの映った写真を見ながら決意した。

拓海「…ゆい。俺がお前の笑顔を守ってみせる」

□

デイケイド「今日はピーチジュース！って待て！俺はピンクじゃないよ！
マゼンタだ…まあいい。俺と乾杯だ！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩き
ともえ「拓海先輩の事が…好きなんです!!」
ローズマリー「私達こそ、『いつかは話さないと』って思ってた

の：．」

??? 「久し振りだな。アキノリ」

第十四品：初恋つてどんな味？恋する気持ちと拓海の答え！／初恋
ノーウェイクアツプ!? 古代の戦士と味覚の王子！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十四品：初恋ってどんな味？恋する気持ちと拓海の答え！／初恋ノーウェイクアツプ!?古代の戦士と味覚の王子！

□

Sakuya side

らん「あ。皆で食べようと思って買ってきたんだ〜！新発売『スイートクリスタル』！」

お出かけ中に華が取り出したのは、ピンク、水色、黄色といったラインが描かれている透明の箱には宝石の様な見た目の菓子が入っていた。

形はハートや宝石といったものが多い。恐らく、これもフルーツパラー菓彩である可能性が高い。

ここね「綺麗… 宝石みたい」

らん「初恋の味がするって話題なんだよ」

ゆい「ええっ!?初恋の味って何味かな?」

咲夜「せっかくだから、近くの公園で食ってみるか」

らん「うん。これは確かめるしかない!」

早速公園でスイートクリスタルを食おうとしたが、急激な状況に目撃してしまう。

ゆい「拓海…?」

何と品田がオレンジのヘアピンを右側に止めているショートヘアの少女に告白されていたのだ。

拓海「えーっと、それで話して?」

???「……」

少女は口に出そうとするが、わだかま蟠りがあるかの様に口を閉ざしてしまふ。

ここね「何かお話中みたいね」

らん「だね」

咲夜「ちよっと待った！駄目じゃねーか。お前らが妨害したら、

せつかくの展開が台無しだろ」

??? 「そうよ。此処は邪魔しちや駄目」

制止の声を上げながら華満の肩を置いたのはローズマリーだった。
ゆい「せつかくの展開、って如何いう事？」

咲夜「まあ、見とけ」

ローズマリー「だって、あれはきつと…！」

ローズマリーからここね、ゆい、華満の順で草陰で見守る事にした
が、俺は草陰に隠れながら水筒に入っている水を飲む。

頭を撫でて人間体に化けたコメコメも同じく、ゆいと華満の間を割
りながら様子を見る。

勿論、キバラーも俺の胸ポケットに隠れながら現場を窺^{うかが}う事にし
た。

??? 「あの…私、拓海先輩の事が…好きなんです！」

拓海「えっ…!？」

告白されて驚きの声を上げる品田。

その様子に頬を染めるローズマリー、ここね、華満とは対照的にゆ
いとコメコメは鈍感な反応だった。

ローズマリー「うんうん…」

ここね「…！」

ゆい「？」

らん「ああ…！」

コメコメ「…しゅき？」

咲夜「ブフオッ!？」

コメコメの『しゅき』で、俺が口に含んでいた水筒の水を一気に吹
き出したの言うまでもなかった。

まあ、可愛いから良いでしょう。

特別OP 『品田拓海／俺に出来る事』

□ 拓海「えっ…ええっ!？」

突然の告白で焦燥する品田の様子に俺達はゆい達は草陰に隠れると、俺は品田と少女の様子を窺う。

らん「はわわわわわ…今のつて若しかして！」

ここね「告白…!？」

ゆい「凄ーい、初めて見ちゃった！」

ローズマリー「甘酸っぱさ特盛りの恋よ…！」

拓海「あ、あの…えっと、俺は…」

???'「そ、それじゃあ！」

品田の返事を待たずに少女は走り去って行く…が、偶然に現場を目撃していた俺達と鉢合わせしてしまった。

「「「「覗き見してしまい、申し訳御座いませんでしたツ!!」「「「「俺は御下座、ゆい達五人はお辞儀で謝罪した。」

??? 「えっ? ああ... ううん、いいの。私もだれかに... 誰かに話聞いてほしかったしツ!!」

如何やらあの出来事を誰かに相談してほしかった様だ。

咲夜 「何も泣くこたないだろ?」

ゆい 「大丈夫?」

ここね 「はい」

らん 「これ食べて元気出して。スイートクリスタルで」

ゆい 「笑顔になるよ!」

少女は赤いハートのスイートクリスタルを口に入れながらここねのハンカチで涙を拭^{ぬぐ}った。如何やら落ち着いたみたいだな。

??? 「有難う... ん?」

ローズマリー 「良いわよ、頑張ったわね。ナイスファイトよ」

咲夜 「告白したい気持ちだつて最初は誰でも戸惑うモンだ」

気持ちが和らぎ礼を言う少女の肩を置きながら激励するローズマリーに続いて俺も一声掛けた。

??? 「えっ? でも...」

ローズマリー 「私はローズマリー。気軽にマリちゃんって呼んで」

??? 「私、本間ともえ...」

咲夜 「本間... ? 今思い出した。前にうちの学校でお前を見掛けてな... まあ、細かい事は気にするな」

ローズマリー 「ともえちゃん、宜しくね。良かったら、恋の相談も聞いちゃうわよ」

ともえ 「... 有難う御座います」

軽くお辞儀をしながら心を開く本間は、品田の事が好きになった経歴を語った。

それは最近の事で学食で食ってた時に『目玉焼きに何を掛けるのか』が話題になり、偶然隣の席にいた品田と友人達もその話をしていった。

本間同様、ケチャップとマヨネーズを掛ける事を知って品田に初恋の想いを抱く様になったとの事。

ともえ 「自分の気持ちに正直で、はっきり言える事が好きだなって」

「ここね「素敵な出会い：：！」

ゆい「胡椒こしろうにお醤油しょうゆ、ソースにケチャップマヨネーズ！何れをかけたも美味しいよね。うう、ハラペコったく!!」

食い付くタイミングが間違ってるぞ。

咲夜「俺は焼き鳥のタレだな。アレをかけると味が焼き鳥になったみたいで俺にとっては相性抜群だ」

らん「はわわく！目玉焼きが持つ可能性は無限大！」

咲夜「そういう話じゃねーだろ？」

ともえ「初めてだから如何したら良いか分からなくて勢いで告白しちゃったの。でも、話を聞くのが怖くて逃げてきちゃった。もう一度話す勇氣なんて出ないかも：：」

ここね「自分が如何思われているのかを聞くなんて：：勇氣があるよね」

ローズマリー「そうねえ：：でも、こういうのは放っておくと喉に刺さった小骨に気になる物なのよ」

このまま黙って聞いているのも俺らしくない。
俺は立ち上がりながら、口を開いた。

咲夜「気になるからこそ放っておけないんじゃないのか？」

ともえ「えっ：：？」

咲夜「逃げたり諦める事は誰だつてある。けどな、告白したい一瞬があれば歩き続ける事だつて不可能じゃない。何故なら、これはお前にしか出来ない事だからだ」

ともえ「私にしか出来ない事：：？」

ゆい「お婆ちゃん言つてた！『喉に刺さった魚の小骨と悩みは放っておくな』って！」

俺に続き、ゆいは人差し指を頭上に上げながら語録を言う。

ローズマリー「告白する勇氣が出せたんだもの、返事を聞く事だつて出来る筈。何か困った事があつたら相談してね」

ともえ「：：もう少し考えてみます。皆、有難う！」

「二「うん！」」

咲夜「如何致しまして」

本間を見送った後、俺達はスイートクリスタルを実食する事にした。

キバーラは流石に口が小さかった為か、入っていた一袋を偶然に落ちてあつた石の尖った部分で砕いて食い易い大きさにした。

らん「よおし、食べよー！」

『おおーッ！』

ゆい「すっぱデリシヤス！」

コメコメ「甘いコメ〜！」

ここね「しゅわしゅわ…！」

パムパム「目が覚める様な爽やかさパム〜！」

らん「蕩けるハーモニー！」

メンメン「後味スツキリメン！」

咲夜「滑らかだ…！」

キバーラ「甘酸っぱい〜！」

如何やら初恋の味は種類によつては違う様だ。

ゆい「皆、違う味がするんだ…！」

ローズマリー「恋する気持ちは十人十色。皆違つて良いって事よ」

十人…か。デイケイドは平成10番目の仮面ライダーだから、そ

の言葉を聞くとだんだんと懐かしさを感じる。

ローズマリー「ん!?これはあの日、あの時の思い出の味…！」

コメコメ「どうしたコメ？」

コメコメ、その不意打ちは反則だから。

□
DIEND SIDE

ブンドル団アジトにて、ナルシストルーはおばさんが宝石の様な菓子が入っている小箱を見つめていた。

ナルシストルー「何それ？」

ソルトルー「スイートクリスタル。初恋の味がするって話題のお菓子ですよね？」

セクレトルー「察しが早いですねソルトルー。ゴードッツ様に献上する前に独身をする必要があります」

ナルシストルー「そんな事言つて、自分が食べたいだけなんじゃないの？」

デイエンド「それはない」

セクレトルー「ええ。そんな訳ないでしょう… っていうか、自分の分は取つてあるつっーの」

気を取り直しておばさんは黄色いスイートクリスタルを口に入れて味を噛みしめると、静かな笑みを浮かべる。

セクレトルー「… 甘酸っぱい」

ナルシストルー「へえ。セクレトルーの初恋つて甘酸っぱいんだ」

デイエンド「ちよっかい掛ける暇があるならさっさと儀式やるよ」
真面目もクソもないんだけどね。

因みにゲンムの社長はソルトルー発案のライダーガシヤットの製作に励んでいるから、今回は出勤出来ない模様。

セクレトルー「今回は真面目ですねデイエンド。では… せーの！」

「ニ」ブンドル、ブンドルー!!「ニ」
こうなったら自棄だ。

□

Takumi side

俺は夕食を食べようとなごみ亭に訪れる。

あきほ「いらつしやい」

拓海「本日の定食一つお願いします」

あきほ「はくい」

ローズマリー「あら。こんばんは！」

あきほさんが俺の分の定食を用意している間に近くの席で手を振っていたローズマリーと遭遇する。

隣の席では門津が黙々と定食を食べながら視線を俺の方へ向けている。

話すなら今しかない。あの怪物の事も、ゆいに何があったのかを全て……！

ローズマリー「拓海君も晩御飯？」

咲夜「……」

定食に目を付けるが、あんたに聞きたい事は山程ある。

俺は視線を近付けながら堂々と言い張る。

ローズマリー「な、何かしら？ 今日のお勧めなら、この金目鯛の煮付け定食よ」

拓海「……あんた達に聞きたい事があるんだけど」

咲夜「ゆいの事だろ……？」

拓海「！」

真剣な目で俺を睨む門津。ローズマリーも同じく真剣な表情で俺の視線を合わせる。

ローズマリー「私達こそ、いつか話さないと思ってってたの……」

咲夜「ああ、俺もローズマリーに同感する。お前に聞きたい事が山程あるんだ」

「つまり…！」

拓海「!!」

俺は緊張させながら唾を飲み込み、次の言葉を待った。

咲夜「お前は見ていたんだろ？ ゆいが——」

ローズマリー「いつから好きなの？ ゆいの事」

「だあああーッ!?!」

思わぬ質問に俺は椅子ごとずっこける。あいつ一体何を聞いてたんだよ!?

あまりの恥ずかしさで俺は顔を真っ赤にしながらあたふたする。

拓海「ななな… 何の話だよ!?!」

ローズマリー「御免なさい。実は今日拓海君が告白されてるところを偶然見ちゃって…」

拓海「はあ!?!勝手に見んな!」

ローズマリー「恋の行方が気になって仕方ないのよ。それで返事は如何するの?」

そんなのとづくに決まっている。

拓海「『如何するの』って、それはまあ…」

ローズマリー「実はゆいと咲夜も一緒に見てたんだけどね」

拓海「はあッ!?!」

ゆいも見てたなんてマジかよ!?!こりや如何説明すりやいいのかわからなくなってくる。

拓海「それで、ゆいは…?」

ローズマリー「『すごい!』って言ってたわ」

えっ?それだけなの…?」

咲夜「ローズマリー、何聞いてんだよ!?!俺が品田に話したいのは…」

！」

門津がまともな表情で俺の言いたい事を代弁しようとしたが、ローズマリーは俺に新発売のスイートクリスタルを差し出す。

ローズマリー「何かあったら相談に乗るって言いたいんでしょ。困った時はいつでも来なさい」

拓海「あんたっておせっかいていうか…」

ローズマリー「頑張る人の特盛り応援団ってどこかしら？」

自分で言うなよ。こうなったら門津に聞くしか…！

ゆい「あれ？三人でご飯食べてたの？」

拓海「ゆ、ゆい!？」

ゆい「いつの間に仲良くなったの？嬉しいな〜！」

俺とこの二人が仲良くなっていると勘違いをするゆい。

拓海「な、なってね〜よ…！」

ローズマリー「恋は人を悩ませるのよ。そして成長させるの！」

ゆい「恋？」

拓海「だあーッ！もういいから!!」

俺はローズマリーを制止し、そのまま夕食を食べた。

俺は昨日の戦いを振り返りながら自室で寝っ転がっている。

結局何も聞けなかったし。門津も俺と同じ事を考えてとはな。

父さんは、門津がこの世界を破壊する悪魔だって言っていた。そんなに悪い奴じゃないっばいけど…何か出来る事をしなきゃ。

俺はローズマリーから貰ったスイートクリスタルを口に頬張る。
初恋の味がするって聞くけど……。

拓海「苦っ！」

□

S a k u y a s i d e

昨日は品田に話したかった事を聞けなかったのを後悔している。
今日も会長の見舞いに来たのはいいが、結局今日も会えず仕舞い。

ゆい「今日も会えなかつたね」

らん「ひんにや……大丈夫かな？」

ここね「色んな事があつたからショックを受けているのかも……」

咲夜「ああ。レシピツピ強奪の為に利用されたから、恐らくトラウマは避けられないだろうな」

ローズマリー「こういう時は焦っちゃ駄目。私達は待つしかないわ」

ゆい「うん、でも早くお話したいな……今度こそ、あまねさんとお友達になりたいんだ」

咲夜「そうだな。その為には、俺達に出来る事をしないと…… だろ？ローズマリー」

ローズマリー「ええ。その通りね」

そんな訳でプリティホリックで会長に土産を買う事にした。

ゆい「あまねさんが元気なったら渡すプレゼントなんて・・・二人共、ナイスアイデアだよ！」

ローズマリー「仲良くなる切っ掛けになると良いわね」

咲夜「：キバーラ。ちよつと後ろを監視してくれないか？誰かがついて来てる様な感じがするんだ。成る可く見つからない程度で頼む」

キバーラ「分かったわ」

俺はゆい達に気付かれない程の音量でキバーラに背後の監視を任せた。

□

DIEND SIDE

捕獲箱のリーダー機能を頼りに、僕達はレシピツピがいる現場へと向かっている。

ナルシストルー「おや・・・？」

ソルトルー「如何やらこの店にレシピツピがいる様ですね・・・」

早速目を付けたのは、スパゲツテイ店『PA☆STAR』。

ナルシストルー「トルルン、トルルン、ブンドルー！」

スパゲツテイのレシピツピ「ピピピ〜！ピピ・・・！」

いつもの通り、捕獲箱でレシピツピを二体捕獲する。

□
S a k u y a s i d e

スパゲッティ店『P A ☆ S T A R』で本間と再会し、スパゲを食べ
てる最中で異変が起き始めた。

ともえ「あれ？私、何を聞きたいんだっけ？大事な事、忘れてる気
がする…。」

『!?!』

ゆい「ブンドル団…！」

ハートキュアウオッチには救済を求めるスパゲ個体のレシピツピ
の姿が。

らん「はっ、ひよっとしてらんらん達も何か忘れちゃってるのか
な…？」

ローズマリー「貴女達は守られてるから大丈夫よ」

その証拠としてハートキュアウオッチの液晶画面が桃色の光を発
する。

唯一ハートキュアウオッチを持っていない俺も影響を受けていな
いの謎だが、今は考えている暇はない。

ローズマリー「こら！其処の無粋なあんた達、止まりなさい！」

ナルシストルー「あ？誰が無粋だって…!?!」

店を出て立ち去ろうとしたナルシストルーとソルトルー、デイエン
ドの三人はローズマリーの声に向き直る。

デイエンド「やあ、キュアライダー御一行さん。久し振りだね」
ローズマリー「デイエンド…！」

ゆい「大事な思い出なの。返して！」

ローズマリー「どんな思い出にも気持ちにも大切な意味があるのよ
！」

咲夜「前にも言ったよな？お前らが大事な思い出を奪うと言うのなら、俺がお前らを破壊するって」

ナルシストルー「はっ！君達って御目でたいな！！特にデイケイド、お前は例外だ！カモン、モットウバウゾー！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー！！」

ホットサンドメーカーにブンドル団の印を押し付け、モットウバウゾーが生み出される。

□

「コプリキュア・デリシャスタンバイ！パーティーゴー！！」

□

ゆい「にぎにぎー！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□
ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
「「シエアリンエナジー！」」
コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフォツ!？」

□
コメコメ「コメコメ！」
パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「コデリシヤスパーツィ♡プリキュア！」

□

咲夜「変身！」

「カメンライド デイケイド！」

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語り… 始めようか!!」

□

ローズマリー「ウラタロス、お願い！変身！」

『ROD FORM』

電王R「お前、僕に釣られて見る？」

ソルトルー「いえ、釣られるのは貴方の方ですよ。電王…」

電王 ロッドフォームに変身完了したローズマリー。

ソルトルーは茶色いライダーガシヤットを取り出し、プレイングスターターを起動する。

『牛・テル・チエスター！』

背後にはゲームタイトルが表示され、デリシヤスフィールドをゲームエリアに変化させる。

ソルトルー「牛・テル・チエスターは、主人公が西部の国に蔓延^{はびこ}る偽保安官達を討伐する早撃ちシューティングゲーム。さて、お見せしましょう。これがガシヤコンバグヴァイザーⅢの力を… 出でよ、ワ

タクシのバグスター!!」

『ガシヤット!』

ガシヤコンバグヴァイザーⅢのスロットにライダーガシヤットを装填し、Aボタンを押しながら銃身から放出したバグスターウイルスが怪人を形作る。

裏側には枯れた花卉が付いている水色のカウボーイハットを被つた雌牛めうしを彷彿ほうふつとさせる茶色い頭部。

首には檻ぼろぎれ裂の赤いバンダナを付けており、装甲車と同化させた様な胴体を持ち、胸部の左側に貼られている西部劇の指名手配ポスターには同じ顔をしている牛の顔がカートゥーン風に描かれている。

更に注目すべき点は黒い右腕。背中と同化している搾乳機さくにゅうのホースと掃除機を足して二で割った様にも見える。

??? 「ヒーハー!アタイの名前はカーファア。レベルは20だよ!」

デイエンド 「さて、僕も久々にライダーを召喚しておくか」

「カメンライド ゼロノス!」

「カメンライド バース!」

デイエンド 「行つてらっしやい」

『ARTAIL FORM』

デイエンドはゼロデイエンドライダーから二体のライダーを実体化させる。

二頭の牛を顔を模しているが連結しているせいで三本角の様にも見える複眼を持つ緑色のライダー。胴体には電王と同じくY字状のレール状モールドの装甲を身に纏まとっている。

もう一人は黒を基調とした強化スーツを来ているライダー。U字の複眼の頭上、両肩、両腕、両腿、そして両脚には白と緑で構成されているカプセルを想起とさせる玉が埋め込まれている。

変身と同時に自身の存在と代償に戦う『仮面ライダーゼロノス』と甲殻類をモチーフにした『仮面ライダーバース』。

ゼロノスはボウガンの様な武器『ゼロガツシヤー』を、バースは全身と同じカプセルが中央に埋め込まれているグレネードランチャーの様な外見を持つ武器『バースバスター』を構え、俺の方へと牛歩し

ながら向かって来る。

電王R「侑斗の偽物を手駒として操れるなんて、僕の知ってるディエンドとは違うみたいだね。もう一度言うけど、僕に釣られてみない？」

カーファア「はっ！生憎だけど、良い女つてのはね…。そう簡単には落とせないものなのさ！」

右腕の吸引力で距離を詰めようとするカーファア。

電王はロッドモードにさせたデンガツシャアのパーツ一番から四番までを連結させる機動スイツチ『デンロック』にわざと引つ掛ける、地面に先端の刃『ロッドヘッド』を突き刺すと抵抗せずに引き摺られる。

だがカーファアは中距離となつたところを先端からオーラの糸『オーラライン』で左足を持ち上げられ、仰向けに倒れたところを左手に黒いリボルバーから弾丸を吐き出す。

カーファア「ほらほら如何したあ？アタイを釣るんじやなかったのかい!？」

電王R「ぐっ！これは相当釣れそうにもない相手だ…！」

距離を取ろうとしても右腕の吸引に抵抗している様で、幾ら4フォームの中でもオールラウンダー形態であるロッドフォームでも弾丸を防ぐのにも精一杯だった。

ディケイド「こりゃ、分身した方が良さそうだ！」

【アタックライド イリユージュョン！】

ディケイドB「電王側は任せろ。西部劇なら相手になるぜ！」

【フォームライド ゴースト ビリー・ザ・キッド！】

【百発！百中！ズキューン！バキューン！】

イリユージュョンで三人に分身すると、ライダーカードを装填し粒子を纏いながらBはゴーストの素体形態となり、テンガロンハット型の頭部を持つ茶色いパークアーカーゴーストを羽織ると、銀色の顔には複眼が拳銃と発射するエフェクトが現れる。

アメリカ開拓時代のアウトロー。早撃ちと、ロデオの名人として知られている百発百中のガンマン ビリー・ザ・キッドの魂を

憑依させたゴースト ビリー・ザ・キッド魂へと姿を変えると、ゴーストの紋章が描かれている専用武器『ガンガンセイバー』をガンモードを右手に、置き時計を模した小型の銃『バットクロック』を左手に持ちながら電王に加勢する。

本体である俺はプレシヤス達を、Cは召喚されたゼロノスとバースに向かって行った。

□

A side

俺はプレシヤス達と合流すると、モットウバウゾーはカロリーパンチを放とうとしたプレシヤスに加熱プレートを露出させながら熱波を浴びせる。

プレシヤス「うわあっ!？」

デイケイドA「プレシヤス!大丈夫か？」

プレシヤス「うう… あっついよく！」

モットウバウゾー「ウ！」

再び熱波を放つモットウバウゾーの攻撃をメロンパンのエネルギーシールドで防ぐスパイシー。

ヤムヤム「はああーッ！」

モットウバウゾー「… ゾ!？」

デイケイドA「よし、俺も！」

【アタックライド ブラスト!】

デイケイドA「もういっちょよ」

【アタックライド スラッシュユー!】

デイケイドA「ヤムヤム直伝・デイケイドカッター！」

その隙にヤムヤムがカッターブレイズで動作をずらす。

俺はブラストとスラッシュを連続でドライバーに装填し、ライドブツカーの銃口から吐き出したカッター状の弾丸を真下に命中させる。

デイケイドA「よし、新技は成功だ。それにしてもあのウバウゾー、本気で俺達を殺す気だ……！」

ナルシストルー「はっは！良かったねえ……ホットサンドにならないくて」

「フォームライド リバイ バリッドレックス！」

『My name is! 仮面ライダー！リバババイ！リバイ！リバイ！リバババイ！リバイ！』

足元が氷漬けになり、真上から降ってきた巨大な卵が俺を包み込む。

殻が飛び散り、パープルをベースにした四肢にフリーザ軍の戦闘服の様な重厚な水色のアーマーを着込んでいるリバイの新たな姿『バリッドレックス』へと姿を変える。

ナルシストルー「あのコウモリ、裏切り者にしては観察力は大したものだが、変身するパートナーがいなければ戦えないのはなく……」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

バリッドレックスは10種のバスタンプの能力を引き継いでいるため、極地の温度にも耐えうる耐久力を持っている。

敵側の熱波に対して俺は翳した右手から冷気を放って凍結させるが、距離が間近になったモットウバウゾーは間一髪で避ける。

一瞬だったが真下には凍傷が遺るも、内部の熱によつて一瞬で溶かしてしまった。

スパイシー「物を挟むのは私も得意なの。ピリッtのヘヴィサンドプレス!!」

モットウバウゾー「ウバウ……モットウバウゾー!!」

ヤムヤム「そんなにジュワジュワしたいなら……！バリバリカタターブレイズ!!」

スパイシーがサンドプレスで上下を挟まれたモットウバウゾーは熱気を噴き出しながら抵抗するが、上からバリカタターブレイズを連

続で打ち込まれた事で完全に挟まれ、遂には地面に撃ち落とされた。
ナルシストルー「まだまだ。楽しませてもらうよ……！」

俺はティラノサウルスの脚を連想とさせる強力な蹴りをかまそうとするが、モットウバウゾーはカーフアーと交戦中のBと電王を狙って突進を喰らわせ、今度はキバーラに攻撃を仕掛けようとする。

「『ー』」

「キバーラ（つぱ）！」

デイケイドA「野郎！」

プレシヤス「止めて！」

俺はプテラバイスタンプの遊泳能力で追い付いて冷気を放つ。

「ぐあああッ!!」

今度の熱波は相当なもので接触を果たすと爆風が起こり、交戦中のCと電王共々吹き飛ばされてしまう。

デイケイドC「お前ら！クソツ！合流したいけど、相手が厄介すぎてそれどころじゃない……！」

『ブレストキャノン！』

デイケイドC「不味いッ！」

『フォームライド フォーゼ マグネット！』

ゼロノスがゼロガツシャアの『オーラサーベル』とライドブツカーとの鏝迫り合いをしている間にベースはドライバーの反応炉『セルリアクター』を閉じてセルメダルを投入口『ベースロット』を装填して金色のハンドルレバー『グラップアクセラレーター』を回すと、再びセルリアクターが開く。

大ダメージを受けて消滅するのを防ぐべく、Cはライダーカードを装填しフォーゼ ベースステイツに変身。

両腕に赤と青の磁石のモジュールが出現すると、U字磁石のエフェクトが異なる極を引き合う事で銀のアーマーを装着させる。

右側が赤、左側が青のラインが体を走り、両肩には電磁砲。

金属相手なら無敵とも言えるフォーゼの中間形態 マグネットステイツになった俺は即座にアタックライドのカードを装填する。

『アタックライド シールド！』

胸部に赤く縁取られている砲台『ブレストキャノン』を装着させる
と、砲身である『サラマンダーランチャー』による砲撃を左腕に出現
した『シールドモジュール』で防ぐが、背後に後退せざるを得なかつ
た。

デイクライドC「ぐううっ!？」

バース「……………」

『セルバースト!』

ゼロノス「……………」

『full charge.』

バースは砲撃の反動によって大きく後方に下がるがゆっくりと立
ち上がると、再びセルメダルを投入してグラップアクセラレーターを
回す事でサラマンダーランチャーからエネルギーを充填する。

ゼロノスも続いてゼロガツシヤーを『サーベルパーツ』と『ガンパー
ツ』に分け、サーベルパーツをアルファベットの『A』の様に広げて
連結。

ボウガンモードにしたゼロガツシヤーにゼロノスベルトから緑で
Aと刻まれている黒いカード『ゼロノスカード』を抜き取ると、『ガツ
シヤースロット』にフリーエネルギーを行き渡らせたゼロガツシヤー
の『オーラボウガン』を向けると、A型の緑の光弾を生成させながら
Bに向ける。

『ファイナルアタックライド フォ、フォ、フォ、フォーゼ!』

デイクライドC「ライダー! 超電磁ボンバー!!」

両肩に備えていた二門の両砲がU字磁石状に合体させて発射した
紫の光弾の力場で相殺させるが、ゼロノスの緑の光弾が直撃。

更に重量な動作が仇となり、二度目のセルバーストでCは大きく吹
き飛ばされてしまう。

デイクライドC「ぐああッ!!」

デイクライド「C!!」

カーファア「ウイナーはアタイ達……ギユウの音も出ないだろ! さ
てと。あんたらとはモーこれつきりにしておこうか!」

カーファアは自分達の勝利を確信すると、左手に持った銃を向けな

ブラックペツパーと名乗る男が被っているハットには緑の宝玉が埋め込まれているハート型のブローチが付いていた。

??? 「俺もいるぞ!」

デイクイド 「!!!!」

ブラックペツパーの真上を浮遊しているのは超古代の平和民族『リント』の科学技術を結集させて作られたクワガタを連想とさせる仮面ライダークウガのサポートメカ『ゴウラム』。

その上に乗っているのは赤い服と黒いズボンを着ている金髪と赤い瞳の青年。

こいつは俺の嘗ての旅仲間であの兄的存在。数百年の再会に俺は涙を堪えるが懐かしさに押し負かされ、一気に溢れ出した。

??? 「久し振りだな。アキノリ」

デイクイドA 「雄大… 雄大なのか!」

雄大 「やだなあ俺だよ。まあ、こうしてお前と再会するのも悪くは思ってもないしな」

デイクイドA 「… 雄大っ!!」

俺はバリツドレックスからデイクイドの姿に戻り、数百年も流してなかった溢れんばかりの涙を流しながら子供の様に泣きついた。

デイクイドA 「俺がネオに覚醒してから一人で世界を旅する様になつたあの日!もう会えないかと思つた!!会いたかつたよお… 雄大… !」

雄大 「おいおい。久々の再会だからって泣く事ないだろう?」

デイクイドA 「馬鹿野郎!数百数千年も生きられる俺の身にもなれつてんだよ!」

??? 『本当ニアキノリ、昔ナガラノ泣キ虫。僕ハ機械ダカラ抑抑泣ク必要ナンテ無イ。デモ、僕達ガ来テナカツタラ、今頃アキノリ死ンデタ』

デイクイドA 「少しは空気読めよジュニラム。ってか、相変わらず俺を勝手に殺そうとするよな。お前はよ!」

毒舌で勝手に殺す様な発言をしているのは、ゴウラムJr. 渾名は『ジュニラム』。

雄大の相棒的な存在だ。

ジュニラム『メンゴメンゴ』

デイケイドA『『メンゴ』じゃねえよ…けど、お前らに会えてよかった』

キバーラ「雄大！本当に雄大よね!？」

雄大「キバーラも久し振りだな。丁度お前の顔も拝みたかったところなんだ。本当相変わらず可愛いまんまだな」

キバーラ「あらそう？ありがと！それにしても、如何して貴方がこの世界に来ているの？」

気持ちを落ち着かせている俺を代弁するかの様に、キバーラは何故ゆい達の世界にいるのかを問う。

雄大「それは時が来れば話す。それよりレグ…デイエンドは？」

デイケイドA「デイエンドなら彼処だ^{あそこ}」

俺はデイエンドがいる方向へ指差す。

雄大「久しぶりだなデイエンド。アキノリとお前で言うとお前も三百年も会っていない事になるのか？」

デイエンド「雄大…そっちも元気そうで何よりだよ」

雄大「そうか。色々と分からない事だらけだが…状況は大体分かった！」

納得してるのかしてないのか状況は如何あれ、改めて俺は雄大との再会を喜んだ。

カーファア「おい！さつきから何なんだよ!?アタイらの決闘を邪魔しやがって！」

ジュニラム『ネエ、牛サン。決闘ッテイウノハ一対一デ戦ウツテ意味ダヨ?『アタイら』ツテ言ツタ時点デ決闘デモナンデモナイタダノブツ殺シアム。分カツテ言ツテナインダツタラソーセージニスルヨ?』

カーファア「アタイは、牛、じゃなくて、雌牛、だ！甲虫ごときにソーセージにされてたまるか！」

ジュニラム『甲虫ジャナイ！クワガタ!!』

吹き飛ばされたモットウバウゾーは浮遊し、決闘を邪魔された事に

憤慨するカーファーに対してジュニラムは毒舌で言い返すと、俺は雄大と並び立つ。

雄大「ジュニラム、口論はそれぐらいにしておけ。行くぞ、アキノリ！」

デイケイドA「ああ、久々に見せてくれよ雄大。お前の変身を！」雄大は腰に両手を翳すと赤い宝石『アマダム』が埋め込まれている古代のベルト『アークル』が出現する。

そこから右脚を前に出しながら右腕を左から右へ、左腕をアークルの左ボタンへ持つて行きながら、あの言葉を叫ぶ。

雄大「変身!!」

右脚を下げながら左手を右手で押し込んで両手を広げる事で古代の戦士 仮面ライダークウガの姿へと変化させる。

ヤムヤム「ほえ!? 新しい仮面ライダー!?!」

スパイシー「これが平成の仮面ライダー!?! クウガ!」

クウガ「さて、久々の共闘だ。行くぞ！」

デイケイドA「しつかりサポート頼むぜ？」

電王R「何だかよく分からないけど、僕も参加してもらっても構わないかな？」

クウガ「いいぜ、人数が増えりゃ対処法も増える。ブラペは牛野郎を頼んだ！」

デイケイドA「ブ、ブラペ!?!」

ブラックペツパー「人の名前を略すのは流石に止めてくれないか?」

クウガ「そう言わずに、お互い初対面なんだから。来るぞ!」

俺とクウガはモットウバウゾーを、Bと電王はゼロノスとバースを、そしてCとブラックペツパーはカーファーへと向かって行った。

ジュニラムはキバーラの護衛に入っている。

□
A s i d e

クウガ「アキノリ、久々のアレ。頼む！」

【カメンライド デイクライド！】

デイクライドA「ああ。空中戦には空中戦だ！」

【ファイナルフォームライド ク、ク、ク、クウガ！】

デイクライドA「ちよつと寝違えるぞ」

俺がクウガの背中に手を入れる事でジュニラムの…否。

ゴウラムの胴体が装甲として現れると頭部が収納され、腕と足が脚部と顎に変形。

最後に身体の向きを変える事で変形が完了する。

プレシヤス「ええっ!？」

スパイシー「ライダーが…!」

ヤムヤム「変形した!？」

ローズマリ「こんなのアリなの!？」

クウガ『敢えて言うならクウガゴウラム。俺が変形した名前だ』

あ、そうか。三人はファイナルフォームライドを見た事がないんだっけ。

デイクライドA「ウラタロス。モモタロスに戻してくれ！」

電王R「そういう事ね。了解！」

『SWORD FORM』

俺が取り出した電王 ソードフォームと『俺、参上!』のポーズを取っているモモタロスが描かれている黄色いカードを見て状況を察したウラタロスはモモタロスに乗り変える。

デイクライドA「モモタロス。ちよつと我慢してくれ」

【ファイナルフォームライド デ、デ、デ、電王!】

電王S「俺、再び参j——ぐぎやあっ!？」

ローズマリ「あーれー!」

ドライバーに装填すると電王の頭部が収納され、ソードフォームの装甲がモモタロスの胴体を露出させると、中から憑依されていたローズマリが飛び出す。

全身を赤く染め上がる様に変形を果たし、最後に赤鬼…というよりモモタロスの頭部をCが戻す事で変形プロセスが完了する。

電王のファイナルフォームライド、デンオウモモタロス。

見た目はモモタロスそのものだが、唯一の違いとしては両手にはデングツシャーと専用武器である青龍刀『モモタロスオード』を持っていると言う点だ。

メンメン「マリちゃんが追い出されちゃったメン」

パムパム「変形が悍ましいパム…」

スパイシー「でも、姿はモモタロスと粗同じ…」

モモタロス「つう〜！お前ら呑気な事ばつか言いやがって！これ凄く痛えんだぞ?!」

デイケイドB「説教は後だ。兎に角行くぞモモタロス！」

モモタロス「こうなりやヤケクソだ！侑斗の偽物なんざ屁でもねえ！行くぜ行くぜ行くぜー!!」

自棄になつてゼロノスとバースに向かって行くBとモモタロス。

俺はクウガゴウラムに乗ると、モットウバウゾーの熱波を避けながらソードモードにしたライドブツカーで何度も斬り付ける。

正面に向かって行く様子にモットウバウゾーは熱波を放ったタイミングで上下に分かれ、クウガのファイナルアタックライドのカードを装填する。

【ファイナルアタックライド ク、ク、ク、ク、クウガ！】

【『デイケイドアサルト！』】

クウガゴウラムがモットウバウゾーの裏面を大顎で挟み込みながら俺に向かって突っ込ませながら蹴り込んだ。

モットウバウゾー「モットウバウゾー!？」

モットウバウゾーは地面に蹴り落とされ、俺達は必殺技を放つ準備をする。

デイケイドA「決めるぞ。雄大！」

クウガ「ああ！」

【ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイケイド！】

デイケイドA「デイメンションキック！」

クウガ「マイティキック！」

クウガは変身ポーズの構えを取ると両腕を開いて腰を落とす。

駆け出した俺に合わせてモットウバウゾーに向かって行き、足を踏み出す度に足裏に炎が吹き上がる。

「うおりやああああッ!!!」

モットウバウゾー「ウバ…ウバババババ…ウバーッ!?」

放たれた熱波を押し戻して行き、全てを破壊する飛び蹴りと封印の紋章が刻まれた炎の飛び蹴りでモットウバウゾーを蹴り飛ばした。

□

B side

ファイナルフォームライドしたモモタロスはゼロノスを、俺はバースへと向かって行く。

モモタロス「でえりやあッ!!」

ゼロノスが放つゼロガツシャーからの光弾をモモタロスは猪突猛進に専用武器の赤い青龍刀『モモタロスオード』で斬り落とす。

近距離になるとデンガツシャーを振るうがサーベルモードに切り替えたゼロガツシャーの刃先『オーラサーベル』で受け止められてしまいが、振り下ろしたモモタロスオードを右袈裟^{けさ}切りで振り上げ、ゼロノスにダメージを与えるに続けてデンガツシャーで更に斬り付ける。

ディケイドB「やるなモモタロス。よし、俺も負けてられねえ!」

「フォームライド ゴースト ニュートン!」

『リングが落下!引き寄せまっかアー!』

ビリー・ザ・キッドのパーカーゴーストが消滅し、青を基調としたダウンジャケット風のパーカーゴーストが被さる。

マスクには落下しているリングが描かれており、両手に嵌^はめられている丸いグローブは地球と月をイメージしている。

微分と積分を発見した偉人 ニュートンの力を宿したゴースト

ニュートン魂となった俺は左手から放つ斥力せきりよくでバースが放ったブレ
ストキャノンを反発させる。

「デイケイドB「モモタロス！」」

モモタロス「なるほど。そういう事なら…！でえりやあッ!!」

状況を悟ったモモタロスは二刀流でゼロノスのゼロガツシヤアを
押し返し、荒っぽい蹴りを腹部に入れて数cm吹っ飛ばす。

「デイケイドB「うおらああああッ!!!」」

ゼロノス「ツ…！」

怯んでいる隙に放った引力で引き寄せながら斥力を込めた右スト
レートを打ち込んでバースを大きく殴り飛ばし、起き上がったゼロノ
スをも巻き込んだ。

「カメンライド デイケイド！」

「デイケイドB「決めるぞ！」」

モモタロス「ああ。必殺！俺達の必殺技…！」

「ファイナルアタックライド デ、デ、デ、電王！」

モモタロスがデンガツシヤアでフリーエネルギーを溜めている間
にデイケイドに戻った俺は、モモタロスオードを拝借してバースとゼ
ロノスを横切る様に斬り付ける。

同時にデンガツシヤアのフリーエネルギーが放出され、飛ばされた
赤い剣先『オーラソード』で左右にぶった切ると中央に止まる。

「デイケイドB「デイケイドバージョン2！」」

俺はオーラソードの平面を踏み台にして飛び上がり、マゼンタと赤
のフリーエネルギーが伝達したライドブツカーとモモタロスオード
でバースとゼロノスを撃破した。

モモタロス「へっ！決まったぜ！」

「デイケイドB「らしいな。ってか、二刀流って結構筋力使うんだ
な…。」」

□

C side

俺とブラックペツパーはカーファアと交戦中だ。

右腕で吸引した大量の砂を撒き散らして視界を遮る。

カーファア「如何だ！これでアタイの姿も見えないだろ!？」

デイケイドC「生憎だが、吸い込むのはこつちにもあるぜ!」

「アタックライド エアロー!」

仰向けになりながらライダーカードを装填し、左脚に掃除機のような空色のモジュール『エアロモジュール』を出現させて砂塵さじんごと空気を吸引。

カーファア「ぐっ!こんなのでアタイが怯むとでも!」

ブラックペツパー「背後が隙だらけだな。はあッ!」

カーファア「ぐああッ!」

エアロモジュールの吸引力に逆らおうと後方へ下がろうとするカーファア。

だが背後が隙だらけとなってしまう、ブラックペツパーの放った黒いエネルギー弾でバキュームの破壊に成功する。

カーファア「アタイの…アタイのバキュームが!」

デイケイドC「隙あり!はあッ!!」

カーファア「がああッ!」

ブラックペツパーのお陰でエアロモジュールで吸引した大気を最大まで貯蔵する事が出来た。

吸引を終え、4基の回転翼『アトモスファン』から小型の竜巻として放出した大気を噴射させてカーファアを岩盤まで吹き飛ばす。

デイケイドC「さあて、牛の丸焼きだ」

「フォームライド フォーゼ ファイヤヤー!」

エアロモジュールが消滅し、出現した赤い大型銃『ヒーハックガン』を手に持つ赤い右腕から噴出した炎に纏われる。

三角形の意匠がある炎の王子『フォーゼ ファイヤーステイツ』となつた俺はライダーカードを三枚連続に装填する。

【アタックライド レーダー!】

【アタックライド ランチャー!】

【アタックライド ガトリング!】

左腕にはアンテナが付いている黒いモジュール『レーダーモジュール』、右脚にはキャタピラの意匠を持つ五連ミサイルが搭載されている青いモジュール『ランチャーモジュール』、左脚には6連装ガトリング砲が装備されているピーコックブルーのモジュール『ガトリングモジュール』が出現。

トドメの一撃を放つ仕上げでフォーゼのファイナルアタックライドカードを装填する。

【ファイナルアタックライド フォ、フォ、フォ、フォーゼ!】

デイケイドC「ライダー爆熱バースト!!」

バキュームが使えなければただの雌牛。

カーファアは黒い銃で抵抗するが、複数の銃口から吐き出された炎の弾幕の前では無力だった。

カーファア「撃ち落とされたのは…アタイの方だったかあああーッ!!!」

断末魔を上げながらカーファアは爆散するが、データはソルトルールのバグヴァイザーⅢに回収されてしまった。

□

デイケイドA「仮面ライダークウガ! マスクドジャーニーミキサー!」

俺はマスクドジャーニーミキサアのダイヤルを赤い炎に合わせる。後は知っての通りだ。

デイケイドA「ライダー! トランス! ミックス! ライダー… トランスデイメンションエンブレス!!」

赤い炎の煌めきを宿したエネルギー波が、モットウバウゾーを飲み込み浄化する。

モットウバウゾー「お腹一杯！」

「ご馳走（お粗末）様でした！」

スパゲッティのレシピツピ「ピピ〜！」

モットウバウゾーの撃破に伴い、スパゲッティ個体は解放された。

□

プレシヤス「おかえり」

ナルシストルー「あれが平成ライダーの原点と呼ばれている仮面ライダークウガ… ますます面白くなりそうだね」

ソルトルー「又会いましょうプリキュア。それと、仮面ライダー…」

カーファア『アタイを此処から出せ！聞いているのか!?おい!!』
デイエンド「……」

様子を見ていたナルシストルー達は姿を消した。

プレシヤス「あの人達、あたし達を助けてくれた…」

キバーラ「今のは流石に死に掛けたわ。ナルシストルーの奴、いきなりあたしを襲って来るなんて卑怯よ！」

ヤムヤム「でもまあ、これでもえちちゃんの思い出も戻るね！」

モモタロス「よく分かんねーが、これで一件落着だな」

スパイシー「うん」

ローズマリー「ええ」

俺は仮面の下で静かに微笑んだ。

ローズマリーの顔を見てみると、何だか疑問を抱いている様にも見えたとはいえ、雄大は何処へ行ったんだろう…？

そういえば、雄大は何処へ行ったんだろう…？

□ Yuudai side

雄大「さて、俺達も帰ろつか」

ジュニラム『帰ルト言ツテモ、如何ヤツテ帰ルノ？流石二元ノ世界ニ帰レソウニモナイシ…』

クウガ「そうだったな。兎に角、何処かで泊まるところを見つけないと始まらない」

ジュニラム『ソレナラ、「福アン」ツテゲストハウスヲ見掛ケタヨ。キツト僕達ヲ受ケ入レテクレル人ガ居ルハズ！』

???「それなら、私が案内しよう」

変身を解除し、俺はジュニラムと空間から出られる方法を考えた。

流石に此処を徘徊するわけないだろうと思っていた矢先に銀色の幕 オーロラカーテンが出現する。

現れたのはチューリップハットにコート、眼鏡を掛けている中年風の男性。

確か、父さんも会った事があるんだっけ。確か名前は…！

???「久しぶりだな。小野寺 雄大君」

雄大「鳴滝さん…で合ってますよね？」

鳴滝「如何にも、何故君を此処へ呼んだのかを話そう。実は…ブンドル団の一人、ソルトルーについてだ」

雄大「ソルトルー？あのナルシストルーっていう奴と一緒にいた奴ですよね？」

鳴滝「ああ。奴は——」

□ クウガ「今日はザクロジュース。俺達と乾杯だ！」

ジュニラム『乾杯！』

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア 破壊者の食べ歩きく
雄大「初めまして。小野寺雄大です」

轟「大切なのは自分自身が食べる事を楽しめているか如何かです」
スパイシー「轟さんの思い出を必ず取り戻す！」

第十五品：ドキドキ！ここね、初めてのピクニック！／ソロもぐ
ちゃんを見抜け！キバレ、旋律のピクニック！

全てを破壊し、全てを繋げ！

雄大 設定資料

小野寺 おのでら 雄大 ゆうだい

生年月日：2010年2月4日

年齢：15歳

学年：私立新鮮中学校3年1組（十四話序盤から）

身長：171.9cm

口癖：無し

一人称：俺

二人称：君、お前

好きな食べ物：カレーライス

嫌いな食べ物：無し

家族構成：父（ユウスケ）、母（??）

役割：私立新鮮中学校の生徒（陸上部所属）

ICV：逢坂良太

嘗て咲夜と共に世界を旅した仲間。リ・イマジネーション世界のクウガ 小野寺ユウスケの息子。

咲夜がネオに覚醒したと同時に元の世界に帰還したが、とある理由で鳴滝に呼び出される。一人称は「俺」。

争い事は一切好まない心優しい性格で、誰かを泣かそうとする者は許さない正義感を持つ。

自分一人が闇に堕ちようとも誰かの笑顔を守る事に専念している。愛用バイクは『ビートチエイサー2000』。

ジュニラム

ICV：井上麻里奈

リ・イマジネーション世界のゴウラムで、『仔馬の鎧』の異名を持つ雄大の相棒的存在。本名は『ゴウラムJr.』。

オリジナルのゴウラムとは違って感情を持ち、古代リント語ではなく日本語で喋る。一人称は『僕』。

ビートチェイサー2000と合体する事でビートジュニラムとなる。

他人を勝手に死なせる様な発言が主に目立つ毒舌の持ち主で、自身を『カブトムシ』に間違われると『クワガタ』と訂正しながら激怒する。

仮面ライダークウガ

父親であるユウスケの血筋を引いている雄大が変身する仮面ライダーで、平成ライダーの原点にして頂点。

通称：『未確認生命体4号』。4つのフォームを駆使して戦う。

マイティフォーム

『邪悪なる者ならば希望の霊石を身に付け、炎の如く邪悪を倒す戦士あり』

身長：200cm

体重：99kg

パンチ力：約3t

キック力：約10t

ジャンプ力（ひと飛び）：15m

走力（100m）：5.2秒

徒手空拳で戦うクウガの基本形態。通称・赤のクウガ。

脚力を始め能力のバランスが良いが、何かに特化した敵との戦いに苦戦する事が多い。

ドラゴンフォーム

『邪悪なる者ならばその技を無に帰し、流水の如く邪悪を^な風ぎ払う

戦士あり”

身長：200cm

体重：99kg

パンチ力：1t

キック力：3t

ジャンプ力（ひと飛び）：30m

走力（100m）：2秒

跳躍力、敏捷性に優れた強化形態。通称・青のクウガ。

素早い動きと時にカタログスペック以上の実力を見せる跳躍力を代償にその分パワーが落ちており、戦闘目的というよりは移動のために使われることが多い。

専用武器はドラゴンロッドで、鉄パイプ等の長き物（棒状の物体）を変化させて作り出す。

ペガサスフォーム

“ 邪悪なる者あらばその姿彼方より知りて、疾風の如く邪悪を射抜く戦士あり”

身長：200cm

体重：99kg

パンチ力：1t

キック力：3t

ジャンプ力（ひと飛び）：15m

走力（100m）：5.2秒

視覚、聴覚に優れた強化形態。通称・緑のクウガ。

人間の1000倍の視力と聴力を持つが神経を過度に集中するため体力の消耗が激しく、変身時間はわずか50秒。その上変身が解けてから2時間は変身が不可能になる諸刃の剣である（制限時間前に別フォームになれば回避可能）。

専用武器はペガサスボウガンで、拳銃等の射抜くもの（飛び道具）を

変化させて作り出す。

タイタンフォーム

“ 邪悪なる者ならば鋼の鎧を身に着け、地割の如く邪悪を切り裂く戦士あり ”

身長：200cm

体重：99kg

パンチ力：7t

キック力：10t

ジャンプ力（ひと飛び）：10m

走力（100m）：7.2秒

パワーと防御力に優れた強化形態。通称・紫のクウガ。

ダイナマイトの直撃にも耐えうるという強固な生体鎧に身を包み、生半可な攻撃を受けてもビクともしない。

走力そのものはマイティフォームと大差ないのだが、装甲の重量のためか細やかな移動や跳躍力に劣っている。

専用武器はタイタンソードで、切り裂くもの（飛び道具）を変化させて作り出す。

第二十一品以降ネタバレ注意!!

仮面ライダーディケイド（雄大Ver.）

身長：192cm

体重：83kg

パンチ力：11.8t

キック力：26.4t

ジャンプ力（一飛び）：30.4m

走力（100m）：5.2秒

雄大が咲夜の代わりにゼロディケイドライダーで変身した姿。

本人曰く『カメンライドはクウガが扱いやすい』と公言しているが、最終的にはライジング形態にフォームライドするには至らなかった。

ライジングフォーム

身長：200cm

体重：104kg（ライジングマイティ）92kg（ライジングド

ラゴン）、99.9kg（ライジングペガサス）、122kg（ライジ

ングタイタン）

「戦士の^{まぶた}瞼の下 大いなる瞳になりし時 何人もその眠り妨げる

なかれ”

マイティ・ドラゴン・ペガサス・タイタンのフォームが「金の力（＝電気）」を帯びて進化した姿。通称・金の○○（ライジング化したフォーム）のクウガ。

主な外見の変化として鎧に金色の縁取りが施され、それぞれの武器も強化される。

強力なパワーを誇るがそれ故に変身を持続できる時間に制限があり、強敵を撃破する際には凄まじい爆発を起こす。

そのため人のいる場所では下手に決め技を放てないが、咲夜達が今度変身する時は被害が出ない様な対策を取る事となった。変身の掛け声は『雷変身！』。

ライジングジュニラム

ジュニラムがディエンドの『フォームライド ライジングマイティ』のカードによる衝撃波を受けてパワーアップした姿。

頭部にライジングビートゴウラムを連想させる金色の装飾が追加された事で、外見はコーカサスオオカブトやアトラスオオカブトを彷彿とさせる。

第十五品：ドキドキ！ここね、初めてのピクニック！
／ソロもぐちやんを見抜け！キバレ、旋律のピクニック！
ク！

□

Sakuya side

この前のモットウバウゾーとの戦闘後、本間は品田にフラれたもののダチにはなれた模様。

それから数日後…。

担任「明日は点検の為、食堂の使用が出来ません。其処で明日のお昼はランチを持ち寄って皆でピクニックしませんか？」

担任から明日の昼食はピクニックをしようとの連絡が話題に出ると、クラス内が一瞬にしてざわめいた。

ゆい「ランチピクニック？楽しそう！」

らん「ふわ〜！」

担任「一緒にランチ食べて、クラス全体が仲良くなれるといいですね！」

ここね「仲良く…。」

暫くしてチャイムの音が木霊こだまし、教科書を整理しているここねの前に現れたのはブンドル団の被害に遭ったゴミ出し三人組。

りさ「芙羽さん、よかつたら明日一緒に食べない？」

「うんうん！」

こいつら三人は物置の救済劇以来、ここねの『高嶺の花』たかね扱いを止めている。詳しくは第6品を参考にしてくれ。

他のクラスメイト達も集まる。

りさ「私達三人つて、前に芙羽さんに助けられた事あったでしょ？だからピクニックでも『芙羽さんと仲良くしたいな〜』と思って…。」

クラスメイトA「私達も！」

クラスメイトB「俺達も一緒に食べたい！」

高田の奴、よっぽどここねに恩を返したいんだな。

咲夜「ここね、これも何かの縁だ。遠慮せず誘ってやんな」

俺はここねに「恩を返すなら今だぞ」と主張する。

ここね「私で良ければ…」

「やった〜！」

りさ「それじゃ、明日ね！」

案の定ピクニツクの誘いに成功し、ハイタッチをする遠藤と長瀬。

他のクラスメイト達も同意だった。

ゆい「ここねちゃん大人気だね」

咲夜「そりやそうだ。『高嶺の花』って呼ばれてる程だからな」

らん「うんうん」

ここね「三人共。私、決めた。明日は絶対に楽しいランチにしたい
！」

ピクニツクに誘われる事を尊重するゆいと花満に、ここねが気合十分
に拳を握りながら決意する。

咲夜「それなら話が早いな」

ゆい「だったら一緒に美味しいお弁当のレシピ考えよう！」

らん「いいね〜！」

ここね「うん！」

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を
噛み締める？

イメージOP2 『MYTH&ROID／VORACITY』

□
「ここね「有難う。轟さん」

轟「とんでも御座いませぬ。では、私はこれで…」

「有難う御座いました」

「ここねの執事である轟さんがゆい達をなごみ亭まで送ってもらった。」

だが生憎この高級車は三人乗りだった為、俺はマシンデイクイダーで走行した。

ゆい「本当カッコいいよね。突然あたし達の前に現れて、買い出した荷物をゼーんぶ乗せて家まで送ってくれるなんて…。ここねちゃん家の運転手さん良い人！」

???「いつて!？」

高級車が走り去り早速弁当作りの準備に取り掛かる俺達だが、ゆいが突然轟さんの話に持ち込む。

すると突然に誰かが声が出た方へ向き直つてみると、其処にはド派手にすつ転んでいた品田の姿が。

立ち聞きはいけませんよ。立ち聞きは。

咲夜「品田?こんなところで何すつ転んだだよ…」

拓海「何って…。回覧板だ!ほら」

回覧板だけを手渡すと、早々と立ち去って行った。

可愛い奴め。ゆいの事が好きだつて事は見通しなんだからな?

ゆい「よおーし、じゃあ早速お弁当で人気のポテトサラダ作っちゃおー!」

気を取り直して俺達は弁当作りに取り掛かり、取り外したハートキュアウオツチで弁当で一番人気のポテトサラダを作る事に。

ここねも作る気満々だ。最初に調理するのはジャガイモ。たわしで皮に付いている汚れを落とし、包丁やピーラーで芽の毒を取り除く。

最後に鍋で茹でて柔らかくし、熱い内にスプーンで潰す。説明下手

で御免。

ゆい「茹でたジャガイモを熱い内に…潰す潰す潰す！」

咲夜「心火を燃やしてぶっ潰せ！ゆい！」

らん「わお！ポテト芋がボウルの中でダンシング〜！」

一方ここねは玉葱たまねぎを野菜スライサーで切っている。

パムパム「ここね一生懸命パム」

エナジー妖精三匹（キバツト族一匹含む）は野菜を持ちながらその様子を見ている。

コメコメは人參、クソ犬はトマト、ドラジカは胡瓜きゅうりを持っていた。

ここね「うう。目に染みる…」

メンメン「な、泣いてるメン!？」

キバーラ「それよりもそのトマト美味しそうね。一口カプってしていいかしら？」

パムパム「これはポテトサラダの盛り付けに使うパム！」

キバーラ「お腹空いちやったの。ちよつとだけ良いでしょ？」

パムパム「駄目パム！」

キバーラ「もう…ケチ」

コメコメ「コメ」

キバーラとクソ犬のやり取りは置いといてコメコメは頭を優しく叩いて人間体になる。

コメコメ「頑張れコメ！」

咲夜「おっ、そう来たか」

「頑張れ頑張れここね！」

コメコメ「ファイトコメ！」

「パム（メン）！」

咲夜「可愛い…」

エナジー妖精組が野菜を二個持ちながらここねを応援する。可愛い癒いやし共だ。

キバーラ「アキノリ。顔にやけてるわよ」

咲夜「無意識で写真を撮ってしまった…ここね。これを使え」
一瞬にしてにやけて二眼カメラで写真を一枚撮った俺。

両頬を軽く叩いて正気に戻ると、ここねにある物を投げ渡す。

「ここね「これって…ゴールド？」」

咲夜「スキーゴールドだ。これなら目を刺激させずに調理出来るだろう？」

「ここね「有難う。これで安心して玉葱を切れる…！」」

咲夜「如何いたしました。やる気が出たのはいいが、偶にはリラックスしとけよ？」

調理を始めてから暫く経ち、華満のハートキュアウオッチから着信音が鳴る。

らん「はにゃ〜！『ソロもぐちゃん』投稿してる〜!!」

咲夜「『ソロもぐちゃん』…？」

ゆい「えっ？何何？」

らん「色んなところで一人で食べ歩きしてるSNSなんだけど、食器とかシチュエーションにすっごく拘ってて…これどんな素敵な子が書いてるんだろ〜？」

咲夜「一人で食べ歩きだと？料理に夢想するのは良いが、ピクニックは明日だ」

「ここね「そうよ。今はポテトサラダに集中して！」」

「はいいい！」」

真剣な表情で俺とここねは食いバカ二人を叱って本当の意味で調理に移った。

咲夜「それでは皆さん…！」

「「「「「「いただきます（マスタードラえモンゴル）！」「」「」「」」」」」」

ゆい「デリシヤスマイル〜！」

コメコメ「おいちいコメ〜！」

「「「「「うんうん」「」「」「」」」」」

調理が終わり、俺達はポテトサラダを試食してそれぞれの感想を述べると、ポテトサラダの個性が現れる。

ポテトサラダのレシピッピ「ピ。ピ！ピ。ピ〜！」

ローズマリー「お弁当かあ…私も昔、クッキングダムでよくピクニックしたっけ？」

咲夜「そーいや、ローズマリーの故郷って料理の国だったよな？」
ローズマリー「ええ。お花の咲く丘でお弁当を食べたり、たわいもないお喋りしたり…夢の様な時間だったわ」

咲夜「そうか、今度全員で行ってみたいな。そのクツキングダムに…其処で童心に返りそうな青空を見ながらのピクニックだったらどんなに楽しい事やら」

ローズマリー「それにしても、この間のブラックペッパーとクウガって何者なのかしら…？」

らん「ああ。ブラペね」

ローズマリー「ブラペ!？」

咲夜「奴が言ったのを真似たのか。まあ、別に良いがな」

???「それって俺の事か？」

黒胡椒こししょうの瓶びんを見ながら前の戦いを振り返るローズマリー。

声が出た方へ全員が向くと、其処には雄大とジュニラムが密かに俺達の様子を見ていた。

ローズマリー「貴方、この間の…！」

らん「ああつ！この前のクワガタライダー…とカブトムシ？」

ゴウラム『僕ハカブトムシジャナイ!!』

らん「ひよええっ!?喋った…!？」

雄大「俺達の事を覚えててくれて何よりだよ。ローズマリーさんで合ってますよね？いきなりこういう形で挨拶あいさつするのも難ですが…初めまして、小野寺雄大です。アキノリがいつも世話になってます」
ジュニラム『僕ハジュニラム。後カブトムシジャナイカラネ、クワガタダヨ!』

雄大「はいはい。クワガタクワガタ…」

キバーラ「雄大!ジュニラムもこの前会ったばかりね!」

ジュニラム『マア、イキナリ呼び出サレテッテイウカ…!』

キバーラとの再会でジュニラムは全身の温度を上昇させて湯気を発生させ、浮遊しながら小刻みに揺れ動く。

そーいやジュニラム、キバーラの事が好きなんだっけな。
メンメン「急に熱くなつたメン」

パムパム「きつとキバーラの事が好きパム」
ゴウラム『チョツ?!ソレハ言ツチャ駄目!』

咲夜「それより雄大。お前、如何してこの世界に…!」
雄大「おいおい。そんなに早とちりしたら元も子もないだろ?」

相変わらずの口調だが、雄大もまだ言う時ではないと念を入れる。
此方の世界に来ているって事は何か理由があるのかもしれないが、
まだleg... デイエンドがブンドル団を裏切っていない。

此処は乗り切るしかないと悟った俺は、雄大を『一緒にポテトサラ
ダを食わないか?』と試しに勧誘してみる。

咲夜「…それもそうだな。そんな事よりも、せつかく再会したん
だ。ポテトサラダでも食わないか?良かったら俺の半分やるよ」

雄大「良いのか?丁度腹減ってたところなんだ。それじゃ、いただき
ます!あむっ。んんく!美味しい!!」

咲夜「だろ?」

ローズマリー「そういえば貴方、咲夜と一緒に旅をした仲間って
言ってたけど如何して急に別れたりなんかしたの?」

雄大「別れたというよりは…突き放したんです」

俺の言いたい事を代弁する雄大。

ローズマリー「、突き放した、…?」

雄大「はい。貴方が言う 門津 咲夜は…いえ、吉木 アキノリ
は怪人になってしまった人間を殺した事があつたんです」

らん「ひよえ!?!その話って前にアキぽんから聞いた事あるよ!」

咲夜「華満、声がデカイぞ」

らん「あ。御免…」

雄大「アキノリ、あの姿…覚えてるよな?変身はしたくはなくて
も、カードは残ってるんだろ?」

興奮している華満を黙らせた俺はデイケイドのもう一つの顔が描
かれたライダーカードを全員に見せる。

相違点としては額に付いている黄色いパーツ『シグナルポイン
ター』が紫に変化、複眼の『デイメンションヴィジョン』も緑からエ
メラルドグリーンに変化し、まるで鬼や悪魔の様な形相を思い浮かべ

ていた。

ゆい「これって、デイケイド…?」

雄大「この姿は『激情態』と言って、デイケイドの本当の姿なんだ」
パムパム「本当の姿… 若しかして、前にキバーラが言っていた事
と何か関係あるパム!？」

衝撃の事実全員が驚きの声を上げると、クソ犬は雄大に疑問を問
い掛ける。

雄大「まさか、キバーラから聞いたのか？」

パムパム「咲夜が『世界を破壊する存在』だって聞いた時、最初は
信じたくなかったパム。でもジェントルーとの決戦を通してみると、
とてつもないパワーで全てを破壊する様な感じだったパム…」

雄大「君の言っている事は半分正しいよ。キバーラが君に告げた通
り、アキノリが変身する仮面ライダーデイケイドは『世界の破壊者』の
異名を持っているけど、それはあくまで『世界の破壊者』という使命を
受け入れた』場合だ」

パムパム「『受け入れた場合』… パム？」

雄大「アキノリが激情態になると、精神の安定と感情の制御が出来
なくなる。若し仮に破壊者の使命を受け入れなかったとしても、激し
い怒りで暴走する虞おそれもあった」

デイケイドの力を経験した雄大は語る。

ゆい「じゃあ若し、咲夜君がこの姿で暴走したら…!？」

雄大「それは俺でも言えない。皆が今後の戦いで不安を感じる様に
なるのは嫌だからな」

雄大はゆいの質問に即答出来ずにいた。

激情態の強さを経験した雄大だからこそ、ゆい達の気持ちを敢えて
考慮したのだろう。

ローズマリー「それほど他人が悲しむ顔を見たくはなかったの
ね… 皆、これ以上の質問はあまり触れないでおきましょう」

雄大「有難う御座います、マリさん。話に付き合わせて悪いなアキ
ノリ」

咲夜「良いんだ。この場で激情態にならずに済んだのが幸いだっ

た」

俺は緊張感を解きながら激情態のカードをライドブツカーに収納する。

運良く雄大とジュニラムは福あんに受け入れられた様で、今日は雄大の部屋に泊まって早めに就寝した。

□

K i v a a l a s i d e

あたしはクソ犬ちゃんと一緒にここねちゃんのピクニックを見るため、送迎車にこっそり乗っているわ。

轟「お父様とお母様は今朝もお早いお出かけだったのですが…お弁当作りの事、とても感心されましたよ」

ここね「えっ…そう?」

ここねちゃんの両親って、どんな人なのかしら? 今度会ってみたいわ〜!

あたしはその楽しみを取っておきながら寝ているクソ犬ちゃんの様子を拝むのだった。

□

DIEND SIDE

セクレトルー「せーの！」

「ブンドル、ブンドルー！」

ナルシストルー「ちよつと待った！」

ブンドル団アジトにて僕達はお約束の儀式をナルシストルーは制止する。

デイエンド「如何したの？急に止めたりなんかして」

ナルシストルー「前々から思ってたけど、このポーズちよつとダサくないか？」

セクレトルー「ダサイ!？」

ナルシストルー「もつと耽美たんびなポーズじゃないと、この俺様には似合わないよ…。」

セクレトルー「このポーズは今更変えられません!？っていうか、これってやっぱダサイの?」

貴女にとっては良いかもしれないけど、僕にとっては阿鼻叫喚あびきょうかんだよ。

ソルトルーは『猫の主人公が犬の軍人達と戦う縦スクロールシューティングゲームの開発で忙しい』との事で、代わりに社長さんが同行する事となった。

デイエンド「それじゃあ、せめて軽くやっちゃおう?ブンドル、ブンドルー」

セクレトルー「ブンドルー?ブンドル…。」

デイエンド「いや、そういう感じじゃない」

□ K i v a a l a s i d e

キバーラ「クソ犬ちゃん！クソ犬ちゃん起きて！」

パムパム「んん…キバーラうるさいパム」

キバーラ「いつまで寝過ごしてるのよ！ここねちゃん行っちゃったわよ!？」

パムパム「行っちゃった？つて…此処何処パム!？」

あたしは寝過ごしたクソ犬ちゃんをやつとのところできすと、ここねちゃん家の執事ちゃんが車を点検で工場に預けようとしていた。

轟「では、点検をお願いします」

その様子に違和感を感じたあたし達は、車のドアが開くと同時に脱出。

轟「さあて、ランチランチ〜！」

パムパム「パム？」

キバーラ「…行くわよ」

パムパム「あっ！待つパムキバーラ！」

突然楽し気な気分になった執事ちゃんの後を追った。

□

Sakuya side

昼休みになり、今日は皆さんお待ちかねのランチピクニック。

因みに俺は食いバカ二人に加えて、俺と瓜二つの転校生 海詠 透
冀と一緒に食う事となった。

『いただきまーす！』

透冀「まさか君達と一緒に弁当を食べられるなんて、まさに夢の
光景だと思わない？アキノリ」

咲夜「その名前を人前で呼ぶのやめろ。余計恥ずかしくなるだろ
？」

透冀「まあまあ、そう言わずに…」

ゆい「そんな事よりハラペコった〜。あ、そのチャーハン美味しそ
う！」

ゆいが目を付けたのは、華満のホットジャーに溢れんばかりの
チャーハン。

流星にこれは入れ過ぎだろ…。

らん「ふっふ〜！華満家の秘伝のチャーハンは…米に卵を纏わせ
パラッパラに仕上げてるから、口の中でご飯と卵が永遠にホップ・ス
テップ・ジャンピング…！」

??「此処良い？」

熱弁^{ねっぺん}中の華満に声を掛けたのは同じクラスメイトでサッカー部の玉
木だった。

咲夜「良いぜ。ゆいとは部活の事で仲が良かったしな」

透冀「そういえば華満少女。さっきの華満家秘伝のチャーハンの話
はしなくていいの？」

らん「いい、良いの良いの！えへへ…」

促す海詠に対して急に大人しくなった華満。

普通はこんな感じじゃなかったが、何かあったのか？

わかな「わあ！ゆいのおむすび可愛い！犬かな？」

咲夜「狐。ア・カ・ギ・ツ・ネ」

ゆい「えへへ。良いでしょ？」

玉木が目を付けたのはコメコメの顔の握り飯。

俺だったら可愛くて流石に食えないだろうな。

わかな「それにしても、ここねちゃん大人気だね。順番待ちの列も

出来てるし」

ゆい「へえ、凄いね」

一方、話が出来る良い機会だと言わんばかりにここねの前は順番待

ちの行列が出来る程の大盛況で殺到している。

ここね「そ、それで…ポテトサラダの作り方は、茹でたジャガイ

モを熱い内に潰すのがポイントで…！」

「「うんうん」」

身振り手振りでポテトサラダの作り方を聞きながら距離を詰める

ゴミ出し三人組。

ここね「ええと…後は他の野菜をスライスして…！」

「「うん」」

ここね「それからお塩を塗ってそれで…！」

咲夜「……」

テンパってる様子に俺は手で覆い隠す。

ゆい「ここねちゃん、何か緊張してる？」

らん「ん？」

透冀「如何やら他のクラスメイト達と話すのが緊張してる余り聴牌^{てんぱい}

してるみたいだね」

ゆい「テンパイ…？」

咲夜「テンパるって意味だ」

好きなテレビ番組の話を質問していたのは、エビフライを食ってい

た三人組。

赤井とうま、佐藤やすし…真ん中にいる奴は忘れた。

ここね「テレビ？テレビは…ええつと…うう…！」
とうま「ひ、ひええつ!?変な質問しちゃって御免なさい!」
赤井がおの慄きながら声を上げるのも無理はない。
何故なら、ここねが考え込み過ぎて怖い顔になっているのだから。
らん「ここぴー。何か怖いよー…。」

□

K i v a a r a s i d e

あたしとクソ犬ちゃんは洋食ストリートにある『PIZZA』と呼ばれる店に訪れた執事ちゃんの様子を植木鉢の草の中で見ていたところよ。

カップに入れている四つの赤い薔薇に青いリボンを付けている可愛い熊の置き物を置いてるわね。

パムパム「ええつ!?凄いパム…！」

轟「おお…あむつ。b u o n o です!」

キバーラ「若しかしてあの執事ちゃん…」

パムパム「間違いないパム…。」

「ソロもぐちゃんパム!!」

轟「おや?今、誰かの声でした様な…気のせいですね」

危うくバレるところだったわ。

急いでここねちゃんのところに戻りたいけど、せつかくだからこの

まま様子を見ちやいましょう。

□

Sakuya side

ここね「あの！そろそろ皆で踊りませんか？」

咲夜「what!？」

『えっ?』

りさ「踊るってええつと...?」

ここね「いいえ... その... 何でもない」

唐突な提案に疑わしげられ、慌ただしいだけで食うどころでなくラ
ンチタイムは終わりを告げた。

廊下を歩く中、ここねは意気消沈となりながら溜息を吐く。

ゆい「ねえ、お弁当美味しかった？」

ここね「楽しもうとばかり考えていたから、あまり食べた気がしな
くて...」

咲夜「あまりにも緊張し過ぎたんだな」

らん「ひよへく。それはしょんぼり」

ゆい『『食べる門には福来たる』って言うし、先ずは美味しく食べな
いとー!』

毎回諺間違えてますけど。

咲夜「それを言うなら『笑う門には福来たる』だ」

ゆい「そうなの!？」

咲夜「お前食う事ばつかな、せつかくだから丁度良い問題を出してやる。花より…」

ゆい「団子！」

咲夜「たな棚から…」

ゆい「ぼたもち牡丹餅！」

流石の俺でも呆れ果てるぞ。

咲夜「食い物のことわざだけなら分かるのかよ…」

ゆい「でもおんなじだよ。’’ご飯は笑顔、だもん！」
上手く纏めたゆいに、ここねは何かを考え込んだ。

□

K i v a a l a s i d e

あたしは点検が終わった高級車に乗ってるわ。

ここねちゃんの様子を見てみると、なんだか気の毒ね。

轟「如何でしたか？皆様とのランチ」

ここね「何だか凄く疲れてしまつて… お腹空いた」

轟「… 少々寄り道しても宜しいですか？」

ここね「…?」

執事ちゃんが海沿いの公園で販売していたホットドッグをここねちゃんに差し出す。

野菜ステイックを見てると、ユウスケや夏海がアギトの世界に訪れた事を思い出すわ。

轟「如何ぞ、お嬢様」

ここね「うわあ……可愛い……！」

轟「彼方のお店はお料理の見た目にも拘りがあるんですよ」

ここね「確かこういうの見た事ある。そうだ！これとか……」

ここねちゃんは昨日、らんちゃんが見ていたハートキュアウオッチに映っていたキュアスタの画像を見せる。

轟「おお……！それ、書いてるの私です」

ここね「えっ……ええっ！そうなの!？」

執事ちゃんはここねちゃんが座っているベンチの空席に座りながら自分の過去を語った。

轟「このホットドッグを食べて以来、食事を彩る事に私も見せられてしまいました。もう何年も前ですが、忙しくて食べる事を疎かにしたい事がありました……その時一人で食べたホットドッグが美味しい事と言ったら、その時私は食べる事の楽しさに気付いたんです」
ここね「私はランチを楽しむ事が出来なかった……せつかく皆で食べたのに……！」

轟「大切なのは、自分自身が食べる事を楽しめているか如何かです。若し、楽しみ方が分からなくなった時はじっくり一人で食べるとお料理が教えてくれますよ」

ここね「お料理が……?」

轟「はい。私は散歩して参りますので、如何ぞ御ゆっくり」

執事ちゃんはここねちゃんの気を利かせながら一時その場を離れた。

青い海を景色を見ながらここねちゃんはホットドッグを堪能する。

ここね「……うん。美味しい！」

ホットドッグのレシピピピ」ピピピ〜！」

ここね「皆、楽しそう……」

ホットドッグを食べている皆のほかほかハートに反応してホットドッグのレシピピピが現れた。

パムパム「ここね〜！」

キバーラ「ここねちゃ〜ん！」

ここね「パムパム、キバーラ、如何して此処に？」

キバーラ「ここねちゃん心配で車に乗ってたけど、クソ犬ちゃんが寝過ごしちゃって…薬缶やかんに続いて車の化物になるのは御免よ？」

パムパム「あれは誰のせいであんなになったパム…それより、轟さんすんごいパム！」

キバーラ「何が凄いかと言うと…！」

クソ犬ちゃんは執事ちゃんがあソロもぐちゃんだと言おうとした時、変化が起こる。

轟「あれ？そのホットドッグ…ううん、何か大事な思い出を忘れてる様な…」

ハートキュアウオッチにはホットドッグのレシピピピが助けを求めている。

ナルシストルー、あんた執事ちゃんの大事な思い出を…絶対に許さないわ!!

ハートキュアウオッチの機能を頼りにあたし達はナルシストルー、デイエンド、ゲンムの三人と鉢合わせた。

ゲンム「キュアスパイシー…通りで君が来ると思っていたよ」
ナルシストルー「おやおや。誰かと思えば…裏切り者のキバーラ

ちゃんじゃないか」

キバーラ「ナルシストルー！」

ここね「レシピピピを返しなさい！」

デイエンド「そんなにレシピピピを助けたいなら…」

ナルシストルー「奪い返してごらんよ。カモン！モットウバウゾー
!!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

デイエンド「君達にはこれが良いだろう」

【カメンライド アビスー】

【カメンライド 天鬼！】

コーヒーメーカーのモットウバウゾーが誕生。

デイエンドのデイエンドライバーから鮫さめを彷彿とさせる水色のミラーライダー アビスと威吹鬼を女性寄りにした音撃戦士 天鬼が召喚された。

マシンデイケイダーとビートゴウラムでゆいちゃん達を後ろに乗せたアキノリと雄大も合流する。

ゆい「ここねちゃん！」

ここね「皆！」

アビス「久し振りだな。デイケイド」

咲夜「鎌田さん、あんたの知ってるデイケイドは人違いだ。他を渡ってくれないか？」

アビス「変身者が誰であろうと、私がデイケイドを倒す事に変わりはない」

雄大「気の利かないシャークアンデッドだな。ローズマリー！」

ローズマリー「ええ。デリシヤスフィールド！」

デリシヤスフィールドに転送されたここねちゃん達は、変身準備に取り掛かった。

アビス「ミラーワールドとは違う世界… 此処なら現実世界に危害を加える事なく戦えると言う事か。改めて、今度こそお前に『死刑』を申し渡す！」

咲夜「俺と士さんを殺す事が出来たらな！」

雄大「こうなってしまう以上、戦うしかない様だな」

ここね「皆、行こう！」

「うん（ああ）（おう）（ええ）！」

□ 「プリキュア・デリシャスタンバイ！パーティーゴー！！」

□ ゆい「にぎにぎー！」
コメコメ「コメコメ！」
ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□ ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□ らん「くるくるー！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□

「シエアリンエナジー！」

コメコメ「コメ〜！」

パムパム「テイステイ！」

メンメン「ワンターン！」

咲夜「ブフォツ!!？」

雄大「其処で吹くのかよ!？」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しき焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「デリシヤスパーティ♡プリキュア！」

□

「変身！」

「カメンライド デイケイド！」

『ROD FORM』

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語り… 始めようか!!」

電王「お前、僕に釣られてみる？」

クウガ「ゼロから始まる古代のエナジー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は… 俺が守る!!」

デイケイド「全てを破壊し、全てを繋ぐ！」

デイケイド・クウガ「我ら、仮面ライダー！」ドカーン！

□

DECADE SIDE

【アタックライド イリユージョン！】

デイクイドA 「俺と雄大はアビスをやる。Bはプレシヤス側のサポート、Cは社長さんを頼んだ」

デイクイドC 「任せろ！」

デイクイドB 「相手はミラーライダーだ。慎重に行けよ？」

デイクイドA 「分かってるぜ」

モットウバウゾー 「モットウバウゾー！ウウ…！」

スパイシー 「えっ…？」

デイクイドB 「お前ら、避ける！」

俺達に向けて押し潰そうとするモットウバウゾー。

頭脳派であるBの声があつてギリギリで避ける事が出来た。

【フォームライド ダブル ルナジョーカー！】

【カメンライド エグゼイド！】

瞬時にBは『幻想の切り札』ルナジョーカーに、Cはエグゼイドにカメンライドする。

ゲンム 「君達の相手は私だアツ!!」

デイクイドC 「アビスは任せた。さあて社長さん… お手合わせ願おうか！」

デイクイドA 「よし… 俺達も！」

俺とCはアビスとゲンムの姿を目の当たりにすると、それぞれの相手に向かって行った。

□

B SIDE

ヤムヤム 「ひよへく、ヘビー級…！」

デイケイドB「少しでも避けるのが遅れてたら、重症どころじゃなかったな…」

プレシヤス「だったらスピードで…！」

押し潰しに失敗したモットウバウゾーは再び浮遊すると、今度は白いボタンを押して発射した緑のエネルギー波でプレシヤスを地面に押し戻す。

ローズマリー『あのライダー… 遠くから攻撃してるから中々近付けないわ…！』

電王R「それなら僕に任せて！」

天鬼はトランペット型の銃『音撃管・烈風』から吹き込んだ鬼石の弾丸を撃ち込もうとする。

電王はロッドモードにしたデンガツシャーで鬼石を弾き返しながらオーラインを伸ばして烈風のグリップに引っ掛け、見事に釣り上げてみせた。

デイケイド「流石、釣りの名人！」

電王R「釣りは昔から慣れてるからね。そっちは僕達が何とかしておくよ」

デイケイドB「ああ。済まないなウラタロス」

クウガ「大丈夫？」

プレシヤス「有難う、クウガ」

クウガ「雄大でいいよ。お互い、笑顔を守る戦士でもあるんだし」
天鬼の相手を電王に任せる中、プレシヤスに手を差し伸べたクウガは左手でサムズアップをする。

ヤムヤム「あのボタンを狙っちゃえ！はああーっ!!」

ヤムヤムのカッターブレイズをエネルギー弾で相殺するモットウバウゾー。

ヤムヤム「ふええつ。そんなあ…！」

ナルシストルー「ふふふ。まだまだ行くよ！」

不適な笑みを浮かべるナルシストルー。

モットウバウゾーは黒いボタンを押すと頭頂部の蓋ふたが開くと、激しい突風が竜巻を発生させる。

スパイシー「ピリツto... ううっ!？」

サンドプレスで蓋を押さえ込もうとしたスパイシーだが、風の勢いに晒されて上手く発動出来ない。

ヤムヤム「あひゅ。コーヒー出来てる...!」

吸い込まれたコーヒーはコーヒーとしてガラスポットに注ぎ込まれる。

これも殺意が高いな。吸い込まれたら例えプリキュアであろうと死は免れないぞ。

デイケイドB「不味いッ!」

『フォームライド ダブル ルナメタル』

ルナメタルにハーフチェンジした俺は伸縮させたメタルシャフトで宙に舞ったプレシヤスを捕縛する。

プレシヤス「咲夜君!」

デイケイドB「危なかった。こりや無闇に近付けない...!」

□

A SIDE

『STRIKE VENT』

アビス「はあッ!!」

クウガ「超変身!」

アビスの右腕に装備された鯨の頭部を模した手甲『アビスクロー』から放たれた水流『アビススマッシュ』を水飛沫として無効化したのは、タイタンフォームにフォームチェンジしたクウガだった。

デイケイドA「サンキュー、雄大」

クウガ「問題ないさ。来るぞ!」

『ADVENT』

Cは襲い掛かろうとしたゲムムの相手をするべくこの場を移動すると、アビスはカードデッキから取り出したアドベントカードを左腕にある小判鯨を模した召喚機『アビスバイザー』の口の中に啜えさせる形で読み込む。

召喚されたのはアビスクローと同じ顔をしている鮫のミラーモンスター『アビスラツシャー』。

もう一体も同じく鮫で、胸部の二門砲を持つ緑のミラーモンスター『アビスハンマー』。

アビスハンマーは胸の二砲による銃撃で牛歩しているクウガに浴びせるもタイタンフォームの強固な鎧に無力化され、距離が縮まると同時に歩行の速度を早めた斬撃が勢い良く振り下ろされた。

ジュニラム『ドリヤアツ!!』

アビスラツシャー「グギヤアツ!?!」

斬り付けられたアビスハンマーは地割の如き一太刀に後退せざるを得なかった。

ビートチェイサー2000から分離したジュニラムがアビスラツシャーを両顎で挟んで上空へと急上昇すると、そのまま急降下しながら顎の力を抜いて地面に大きく叩き付ける。

ジュニラム『如何ダ、僕ノフリーフォルハ!』

アビスラツシャー「ギギギ… シヤアツ! シヤアツ!」

不意打ちを受けて激怒したアビスラツシャーは口から高圧の水流をジュニラムは全身を一回転させる事で回避する。

クウガ「アキノリ! こいつらは俺達が引き受ける!」

ジュニラム『鮫ライダーハ任せタヨ!』

デイケイドA「頼んだ! よし… 目には目を、ミラーライダーにはミラーライダーだ!」

アビス『させるか!』

デイケイド「なっ…! ぐああッ!?!」

契約モンスター二体をクウガとジュニラムに任せた俺は龍騎のカードを取り出そうとした刹那、何処からか出現したアビスが振り下ろしたアビスバイザーによる一撃で鳩尾みぞおちに打ち込まれ、そのまま殴り飛ばされる。

アビス「私が鏡の世界のライダーである事を忘れたか?」

デイケイドC「クソツ、油断した…!」

胸部装甲の中央に凹凸おうとつが出来上がっており、俺はアビスに感情を昂たかぶ

らせながらも冷静に対処法を考える。

だが、アビスの様な仮面ライダーやミラーモンスターは鏡の世界を自由に行き来出来る能力を持っている。

恐らく、ライドブツカーの剣先を利用して鏡の世界に入って俺がライダーカードを取り出すタイミングを凶って待ち伏せしていたのだろう。

下手に動けば不意を衝かれてしまうのも癪しやくだな。

『SWORD VENT』

サメ歯状の太刀『アビスセイバー』を右手に持ったアビスに、カウンター覚悟で俺はソードモードにしたライドブツカーで剣戟けんげき。

アビスセイバーの歯状の太刀がライドブツカーを剣先に引っ掛けながら宙に舞わせ、胸部装甲を十字に斬り付けられる。

アビス「それで俺に勝ったつもりか？」

転げ落ちた俺にアビスはアビスセイバーを向けるが、仮面の下でふっと軽く笑って見せた。

デイクイドC「いや、そうでもないみたいだぜ？」

アビス「そのカードは…!？」

「フォームライド ビルド サメバイク！」

『独走ハンター！サメバイク！イェーイ！』

ビルドアップしたのは、赤いブレーキと青い鮫の複眼を持つビルド。

鮫の顔を模した右肩装甲。右腕の装飾には鮫の鰭ひれを思わせ、左肩装甲には歯車状となっている。

ビルド サメバイクフォームとなった俺はアビスバイザーから放たれた鎌状の衝撃波を左腕に装備されている大きなタイヤ『デストロスピナー』で防ぎながら接近し、高威力の打撃でアビスの鎧を切り削ると同時に大きく吹っ飛ばす。

アビス「…ふっ。これで判決は下されたな」

体勢を立て直したアビスはカードデッキからアドベントカードを引く。描かれていたのはカードデッキにも刻まれていたアビスの紋章。

『ファイナルベント』。龍騎達ミラーライダーが契約モンスターと共に強力な技を放つ所謂必殺技いわゆるのようなものだ。

『FINAL VENT』

クウガ「ミラーモンスターが…！」

ジュニラム『合体シチャッタ!?』

アビス「やれ、アビソドン！」

アビスバイザーを突き出して起こした水流に飛び込んだアビスラッシュヤーとアビスハンマーはホオジロザメの様なミラーモンスター『アビソドン』へと融合を果たすと、目を横に伸ばしてエネルギー弾を発射する。

デイケイドA「そういう芸当、俺にも出来るぜ！」

右肩装甲『BLDシャークヘッダーシヨルダー』で鯨のエネルギー体を実体化させてアビソドンをけしかを嚇ける。

デイケイドA「もう一丁」

更に左肩装甲『BLDマシニングアシヨルダー』に付いている歯車の装飾を光らせ、ビルドの愛車である『マシビルダー』の一群をアビスに向かつて一斉に突撃させる。

アビスは再び鎌状の衝撃波を放ってくるが、マシビルダー達は攻撃を避けながら遠隔攻撃を繰り返す。

俺は駆け出しながらアビスセイバーの横切りを避けながら全身を一回転。右手の『BLDメガログローブ』で鯨の歯の様に鋭くなったぬき貫手を放ち、アビスの装甲を切り裂く。

アビス「ぐううッ！」

ジュニラム『油断禁物ダヨ！ソリヤアアアー!!』

ジュニラムはアビソドンが鯨のエネルギー体に向けてエネルギー弾を放出している隙に上から奇襲を掛けてそのまま地面に叩き付けた。

勿論、俺はアビソドンの状況をアビスの目に付かない様に敢えて気を逸らしている。

ジュニラム『今ダヨ！雄大！』

クウガ「ああ。マイティキック！」

ジュニラムが抑えている間にマイティキックを放つクウガ。
クウガ「うおりやああーッッ!!!」

アビス「し、しまった…！」

封印エネルギーを注ぎ込まれたアビソドンは爆散し、アビスの体色がモノトーンカラーになっていた。

カードデツキを見てみると、アビスの紋章が無くなっている。

これが龍騎達ミラーライダーがミラーモンスターと契約する前の姿『ブランク体』。

この姿になった今、勝利の女神は俺達に微笑んだ。

アビス「お、おのれえ…！よくも俺のモンスターを!!」

デイケイドA「勝利の法則は…決まった！」

「ファイナルアタックライド ビ、ビ、ビ、ビルド！」

『ボルテータックファイニーツシュ！イエーイ！』

デイケイドA「でりやあああッ!!」

アビス「ぐあああーッ!!!」

赤熱化させたマシンビルダーのエネルギー体に跨ってライダーブレイクを放ち、最後に鮫のエネルギー体が後を追う様に突進してアビスを噛み砕いて撃破した。

□

B side

ナルシストルー「もう終わりかい？プリキュア、デイケイド」

デイケイドB「生憎だが、こんなところでくたばる俺達じゃないぞ」
スパイシー「終わりになんてしない。轟さんの思い出を必ず取り戻す！食事を楽しむ気持ちはいつだって大切な物…！」

デイケイドB「沢山の笑顔、沢山の喜び、沢山の温もり、その思い出の風を…」

「消させたりしない!!」
せてたまるか

ナルシストルー「食事を楽しむ？はっ、虫唾が走る… 殺れ！モツトウバウゾー!!」

竜巻の威力を上げるモットウバウゾー。早いとこケリを付けないと…！」

デイケイドB「覚えてるよなスパイシー。エビフライの件」
スパイシー「うん。この風に乗って…！」

デイケイドB「よし。そうと来れば、風の闘士の出番だ！プレシヤス、ちよつと雑だが我慢しろよ！」

プレシヤス「うん！」

挿入歌『L a v o r D a y / C y c l o n e E f f e c t』

【フォームライド ダブル サイクロンメタル！】

捕縛状態のプレシヤスをメタルシャフトで投げ飛ばす事で大きく距離を開け、ソウルサイドを幻想から風の記憶に変換。

ダブルの中でも最も防御に優れている『風の闘士』サイクロンメタルへとハーフチェンジした。

【アタックライド スタッグフォン！】

クワガタのメモリーガジェット『スタッグフォン』をメタルシャフトのスロットに、ダブルのファイナルアタックライドのカードをドレイバーに装填する。

【ファイナルアタックライド ダ、ダ、ダ、ダブル！】

デイケイドB「メタルスタッグブレイカー！」

風で生成した巨大クロードモットウバウゾーを拘束。

エビフライの件を覚えていたスパイシーが風に乗りながら黒い電源ボタンを押して竜巻攻撃を停止させる。

ナルシストルー「あら？」

デイエンド「少しはやるね。あの二人」

プレシヤス「スパイシー、B…！」

ナルシストルー「ウバウゾー！」

モットウバウゾー「ウババ…ウバババババ…！」

ナルシストルーの指示で曖昧になるモットウバウゾー。

ナルシストルー「何をしている!?早くボタンを…！」

デイエンド「如何やら、その攻撃も封じられたみたいだね」

ナルシストルー「何? なっ!?!」

状況に気付いたディエンドの指摘でナルシストルーは驚きの声を上げる。

そう。俺がスタッグブレイカーでウバウゾーの拘束を行なったんじゃない。コーヒーメーカーのガラスポットを挟み潰してやったのさ。

ディケイドB「これでお前はモットウバウゾーならぬモットスカウゾーだ！プレシヤス、ヤムヤム。一発ぶちかませー！」

プレシヤス「1000キロカロリーパンチ!!」

ヤムヤム「バリバリカッターブレイズ!!」

二人の攻撃で怯ませている隙に俺とスパイシーはトドメの一撃を放つ準備をする。

□

スパイシー「キュアスパイシー！ハートジューシーミキサー!!」

ディケイドB「仮面ライダーキバラー！マスクドジャーニーミキ

サー!!」

「シエアリン！エナジー！ミックス!!」

パムパム「パム！」

スパイシー「プリキュア・デリシヤススパイシーベイキン！」

ディケイドB「ライダー・トランスデイメンションバウゾー！」

モットウバウゾー「お腹一杯！」

ディケイドB「読者の皆さん、コーヒーが苦かった場合は砂糖を多めに入れるのをお勧めですよ。それでは皆さんご一緒に…！」

「ご馳走（お粗末）様でしたー!!」

ホットドッグのレシピッピ「ピピピ〜！」

ホットドッグの個体が解放され、ハートキュアウオツチに格納された。

□

スパイシー「おかえり」

ナルシストルー「やれやれ。美味しいコーヒーを飲み損ねたよ」

デイエンド「又、楽しませてもらうよ。デイケイド・・・」

ナルシストルーとデイエンドがデリシヤスフィールドから姿を消すと、天鬼を倒した電王と合流する。

他の三人とも合流し、ゲナムはモットウバウゾーの撃破と同時にデリシヤスフィールドを後にしようだ。

けどこれで轟さんの思い出が戻るだろう。良かった良かった。

デイケイドA「はあ。一時は如何なるかと思つた・・・！」

ローズマリー『皆、今回はよく頑張つたわね！』

クウガ「そりやそうだ。俺、クウガだし！」

ジュニラム『ソウイヤ、今日ハブラペガ来ナカツタネ』

ローズマリー『ホントね・・・って、ブラペで決まりなの!?!』

キバーラ「まあ、良いじゃないの。今日はブラペちゃん無しでも執事ちゃんの思い出を取り戻せたんだし！」

ローズマリー『貴女はちゃん付け!?!』

□

Sakuya side

「二二」いっただつきまゝす！」「二二」

海沿いの公園にあるベンチでホットドッグを堪能する俺達。

ここね「大好きなサンドイッチを楽しめないなんて・・・私皆とのランチにちよつと張り切りすぎてたのかも。一人でも皆とでも、先ずは自分が楽しまないかね」

ゆい「うんうん！」

咲夜「成長して何よりだ。華満、何見てんだ？」

らん「ソロもぐちゃんからの投稿だよ。ほら見て！」

咲夜「ん？どれどれ・・・って、ええつ!?!」

ハートキュアウオッチの液晶画面に映っていた写真を拡大して見ると、植木鉢の草の中にクソ犬とキバーラが涎よだれを垂らしていたの

だ。

咲夜「なあ、二人共。ソロもぐちゃんの正体を掴んだんなら、教えてくれよ。一体誰が…！」

轟「お嬢様！」

ソロもぐちゃんの正体を尋ねようとしたが、声を掛ける轟さんを見て二人は言う。

「執事ちゃんよ」

らん「そうじゃなくて、これ書いてる子は？」

「執事ちゃんよ！」

キバーラ「ちよつと！あたしが先に見掛けたのよ」

パムパム「パムパムが一番最初に見掛けたパム」

らん「もう！だからそうじゃなくて…！」

喧嘩を仲裁する様子はまさにコントの様。

その様子を見ていた轟さんにここねは笑顔を見せながら手を振ったのだった。

□

キバーラ「今日はブラッドオレンジジュース。ふふつ、あたしと乾杯よ」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY DAYS』

□

予告BGM 『貴水博之／Wish in the Dark』

次回、デリシヤスパークティ♡プリキュア く破壊者の食べ歩きく
らん「らんらんってやつぱり変だよね…？」

雄大「嘘を吐いてるばかりじゃ、本当の笑顔を作るのが難しくなる」
??「あれエ、乗せられちゃった…？」

第十六品：らんらんって変!?肉じゃがと嘘／ウソツキは誰だ!?独り
善がりの真実を見抜け!

全てを破壊し、全てを繋げ!

第十六品：らんらんって変!?!肉じやがと嘘／ウソツキは誰だ!?!独り善がりの真実を見抜け!

□

Sakuya side

キバーラ「雄大く!ユウスケや夏海ちゃんは元気にしてる?後、栄ちゃんも!」

雄大「夏海さんと父さんは元気だよ。栄次郎さんは80超えてもまだ行けるってさ」

咲夜「そうか...栄次郎じーちゃんが健在で良かった。けど、更に驚かされたぜ...まさか、お前が新鮮此中処に来るとはな。そういやお前、部活何になった?」

雄大「部活はまだ決まってるけど、陸上部に入るつもりでいるさ。それに、クラスや後輩の笑顔を守るのも俺の一つの役目だしな」

咲夜「言うねえく、流石はユウスケ兄ちゃんの一人息子。又宜よろしく頼むぜ!」

雄大「ああ!」

握った拳を軽く重ねながら俺と雄大は帰り道を辿っている矢先、卵サンドを堪能している華満を目撃する。

らん「ほえく。遂にゲットく!『たてもとパン』の卵サンド!君君、卵が金塊きんかいの様に輝いてるよ!あむつ。んんくつ!デリシヤスマイルく!!」

雄大「これってゆいちゃんの口癖だよな?」

咲夜「そういや、前にここねもたこ焼きパーティーで言ってたっけな...」

ゆいの口癖を真似る様子に俺達は苦笑する。

らん「はうく。黄身の甘さが幸せを運んでくる...野原で寝転んだ偶然四つ葉のクローバーに全身を囲まれてる怒涛どとう感だよ」

卵サンドを一個堪能した後、キュアスタに投稿する。

らん「うん。キュアスタ投稿完了!」

??? 「お前、何サンドイツと話してんだ？」
偶然に通リ掛かったのは、髪を後ろに結んでいる雀斑そばかすが特徴の男子。

俺のクラスメイトである 高木晋平たかぎしんぺいが華満を見ながら問い掛ける。
まさに怒涛の展開だ。華満は恐る恐ると背後を振り向く。

晋平 「ははっ。華満って変な奴！」

高木に笑われ、顔が蒼白になった華満の様子を証拠写真として俺は二眼カメラのシャッターを切ったのは言うまでもなかった。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメーゴP2 『MYTH&ROID／VORACITY』

??? 「本当かよ!？」

晋平 「マジだって!」

??? 「信じられねえ!」

同じクラスメイトである紫のマッシュルームカットで中年の男子生徒 小林りゆうじと、角刈りの男子生徒 青山のりおの二人は驚きの声を上げる様子を見ているタイミングでゆいが登校する。

ゆい 「おっはよー!」

咲夜 「よっ。先に来てたぞ」

ここね 「おはよう」

らん 「… ゆいさん。ご機嫌よう」

ゆい 「あれ?らんちゃん…?」

突然に丁寧な挨拶あいさつする華満の様子にゆいは戸惑いを見せる。

ここね「私が挨拶してもこんな感じなの」

ゆい「らんちゃん。何かあったの?」

らん「いえ、何も御座いません…」

ゆい「えっ? あつ、そうだ! キュアスタの卵サンド見——」

咲夜「おっと、それ以上言うな。一旦場所を変えるぞ」

俺はハートキュアウオッチでキュアスタの情報を見たゆいの口を塞いで、階段で事情を聞く。

ゆい「ええっ?! キュアスタの投稿、皆には話してないの!?!」

らん「ひんにゃ…」

ゆい「御免ね」

ここね「でも、如何して…?」

らん「…らんらんって変だよね?」

「えっ?」

咲夜「昨日、華満がサンドイツチを食っていたところを見た高木に『変な奴』って言われたんだ」

俺は華満の気持ちを代弁しながら言う。

ゆい「ええっ?! そんな…!」

ここね「でも、それなら高木君が言ってる事も…」

ゆい「全部嘘なの!?!」

ここね「信じてたの?」

実は高木が掃除の時間に『宇宙人に攫われた』、『自分の兄はアメリカの宇宙センターで仕事をしている』と実に下らない嘘を付いていたのを聞いたが、ゆいはマジで信じてた模様。

ゆい「うん」

ここね「『千匹の子犬に追いられた』とか…」

ゆい「うん」

咲夜「『河童の皿を集めてる』と言ったそんな幼稚な嘘を!?!」

ゆい「うん。高木君、スリルある人生送ってるんだなあ… って」

咲夜「お前は完全に食い馬鹿確定だ。食い物の話だけじゃなく、他人のホラ話にまで食い付くとは…」

すると、溜息を吐いて顔を上げた華満は自身の過去を打ち明ける。小学時代、大好きな食い物の話を熱心かつ一方的に話し過ぎたために「らんちゃんって何か変だよ」と友達に呆れられた辛い過去があった。

それ以降は人前で食い物の話をしないようにしていたが、如何しても食い物に対する熱い思いを自分の胸だけに留めておくことが出来ず、世間にはこんなにも美味しい物があるという事をキュアスタで発信。

これがちゆるりんの原点にもなったという訳か… 大体分かったが、このまま男子生徒の的にさせる訳にはいかない。

らん「… という訳で、ではでは御機嫌よう」

自身の過去を打ち明けても表情は晴れず、階段を下る華満の様子を俺達三人は見届ける事しか出来なかった。

だからと言ってこのまま放っておく俺達じゃない。

晋平「誓っていいって。華満はサンドイッチの言葉が分かるんだよ！」

りゆうじ「んだよそれ？」

のりお「はははは…」

晋平「サンドイッチにこう言ったんだ。『僕はサンドウィッチだ。その言い方を間違えないでくれ』って！」

実に下らねえ嘘だ… 地獄王様だったら即座に地獄へ送ってただろうよ。

俺は一発ぶん殴ってやろうと高木の方へ近付こうとしたが逆に背後から肩を置かれる。

雄大「、エース、と慕われてるお前が暴力振るったら、逆にお前の

好感度が下がるぞ?」

咲夜「雄大…けど!」

雄大「分かっている。お前がぶん殴ろうとしてる気持ちも含めて俺が話してくる」

それだけを言うと、雄大は何も言わずに高木達の方へ向かって行った。

□

Y u d a i s i d e

雄大「ねえ、君。高木晋平君だよ? ちょっと話があるんだけど…」

晋平「ああ。あんた確か、此間転校してきた小野寺先輩ですよ? 様があるなら早く言っ下さいよ」

ちよつと態度は悪いけど、それでも優しく接するのが俺のポリシーだ。

雄大「後輩の友達のらんちゃんの手で話があるんだ。彼女は君に変な奴呼ばわりされた事、とても気にしてるみたいなんだ。今、誤った方が話は別だけ?」

晋平「いや、あいつマジでサンドイッチに話し掛けてたから…先輩も変だと思いませんか?」

雄大「確かに変だと思うのは人それぞれだ。でも、だからと言ってそれを噂に流していい事じゃない。誰かが言ったさ『嘘というのは一つ吐くと、ずっと吐き続けなきゃならなくなる。けれど、嘘は必ずバレる。そして嘘付きは地獄に落ちる』と…これが如何いう意味か分かるかい? 嘘を吐いてるばかりじゃ、本当の笑顔を作るのが難しくなる。このままだと君は、本当の地獄を味わう事になる」

高木君がそう聞き直させるが、俺は警告と呼ぶべき言葉に圧を掛けた。

晋平「何、閻魔様みたいな事言ってるんすか？さあ帰ろうぜ！」
話を聞かずに高木君は友人達と共にその場から立ち去って行った。
自分勝手なデリカシーに欠けてるみたいだ。

□

DIEND SIDE

ナルシストルー「ブンドルー…」

ソルトルー「何してるのですかナルシストルー。若しや、ホツト
ドッグの件…まだ根に持つてるのでは？」

ナルシストルー「そんなちな理由で俺様が悩むとでも？」

デイエンド「いや、逆に結構悩んでるよ？」

セクレトルー「暇ですか。っていうか、本当にポーズ変える気が
よ…！」

儀式のポーズを考えているナルシストルーにソルトルーは問い掛
ける。

同じくアジトに来ていたおばさんも苛々しい態度で呆れる程だっ
た。

「『ゴータッツ様…』」

その時、ゴータッツの顔が映ると、僕とゲンム以外の三人が姿勢を
正す。

ゴータッツ『ブラックペッパーやクウガと名乗る者が現れたそうだ
が…』

セクレトルー「はい。彼も又、デリシャストーンを持っておる様で
す」

ソルトルー「あのデリシャストーンを!?馬鹿な！それを唯一作れる
のはクッキングダムと我々ブンドル団のみ…！」

ソルトルーは衝撃の事実を耳にすると、決定的な発言を口にした。

成る程、あの『デリシャストーン』と呼ばれる不思議な石は元々クツキングダムが作っていた物だったのか……。それじゃあ、如何やってブンドル団はデリシャストーンを作ったのか？

おばさんかナルシストルー、そしてソルトルーの三人の誰かがクツキングダム出身である事を仮定してみると、とても辻褄つじつまが合う。

ソルトルーはクツキングダム出身である事は確定として、問題はナルシストルーだ。

和実少女達と初めて会った時に『楽しそうに料理を食べている姿を見ているとムカつく』という言葉にも当て嵌まる為、クツキングダム出身である可能性は極めて高い。

最後におばさんだが……。彼女の過去は聞かないでおこう。

ゲナム「仮面ライダークウガか……。」

ゴードッツ『知っているのか？ゲナム』

すると、社長さんはクウガの名前を呟き、ゴードッツの問いに答える。

ゲナム「私は嘗て、ガンバライジングガシャットを開発する為にレジェンドゲームガシャットを収集していたからな。クウガは嘗て人々の笑顔を守る為に古代の力で未確認生命体 グロンギと戦った平成仮面ライダーの原点にして頂点……。これが敵側の勢力に入れば、流石の私達でも手に負えない」

ゴードッツ『どんな手段を使おうと構わん……。全てのレシピツピを我が手中に集めるのだ。その邪魔をする者は誰であろうと許さん』

セクレトルー「それでは参りましょう！」

いつものパターンでおばさんは右腕を上げるのに対し、ナルシストルーは今回出動出来なかったを不満に思いながら儀式を行う。

「ニ」ブンドル、ブンドルー！「ニ」

社長さんはやらなかったけど、僕がこの儀式の地獄を抜け出すまで後わず僅か。

もう少しの辛抱だ。頑張れ、僕！

□
Sakuya side

ゆい「皆でラーメンパーティーしよう！」

コメコメ「ちゆるちゆるしゆるコメ」

華満を励ます為に俺達はラーメンパーティーを開く事にした。

ゆい「ええと、此処にレシピがあるんだけど…でも！」

咲夜「本人が居なくちやな」

ラーメンのレシピ「ピピ」

らん「ふに…？う、うわあ…！？」

『（指導宜しくお願い（致）します（コメ）（パム）（メン）！』

ラーメン個体に続いて振り向いた華満を引き摺ずって台所へ運ぶと、

俺達は指導へと促してみる事に。

らん「はに…はにや…？」

コメコメ「お願いコメ」

ローズマリー「何からしやしよう？」

咲夜「親ビン。今回は味噌気分で行っちゃいやしよう！」

ここね「そうだ。まずは出汁だしを取る…でいい？」

ここねは出汁を取る為の皮を剥ぎ取った鶏肉や人参、葱、玉葱と
いったラーメンのスープを作る為の下準備以前たる代物を水が入っ
ている寸胴鍋ずんどうを沸騰ふっとうさせる。

らん「ステイ！」

すると華満は少し顔を上げ、煮込まれている具材を見て左腕を突き

出す。

らん「先ずは… 鰹節^{かつおぶし}」

ここね「えっ…?」

雄大「気力が戻ったみたいだな」

らん「それと、煮干しと昆布。別の鍋で出汁を取って鶏の出汁と合わせるの」

雄大「それじゃ、鍋をもう一つ追加しておくよ」

らん「あ。それ、らんらんがやる」

ジュニラム『ハイ、喜コンデ!』

雄大「おっ。ジュニラムもノリに乗って来たな?」

ジュニラム『マア、ソナ感ジ!』

気力が戻った華満と絶品スープを完成させる事が出来た。

らん「ふへ〜」

「^二「^二デリシヤスマイル〜!」^二」

らん「鶏と和風のハーモニー… これはもう食のオーケストラ。完璧なる味のハーモニー!」

出汁の味が出来ると、数分後に全員分のラーメンが完成した。

『いただきます(コメ)(パム)(メン)〜!』

咲夜「うん。美味しい!」

雄大「味もバツチリだな」

らん「ぶはあ!皆、有難う!」

ここね「良かった。元気になって…」

ゆい「[、]ご飯は笑顔!」

それぞれの感想を述べながら完食し、ローズマリーは口を開く。

ローズマリー「ねえ、思ったんだけど… 『変』って素敵な事じゃない?」

らん「ふえっ? 『変』が素敵…!?!」

ローズマリー「ええ。変っていうか… 皆、好きな物が違うだけなのよね」

ゆい「うん。あたしもいつもご飯の考えちやう。変だね!」

野郎ゆい… 其処まで言うなら、俺は自分の命を変えてでもお前と

品田を赤い糸で結ばせるキューピットに喜んでなつてやるぞ。

ローズマリー「好きな物を好きつて言うのはとても素敵なお事だし、
どんだん言つて行けばいいのよ。らんのご飯への鬼盛りの情熱は才能よ！」

雄大「誰に何を言われ様が関係ない。マリさんは君だけの自信を持っていてほしいんだ」

ゆい「そうだよ。あたしはらんちゃんのらんちゃんらしいところが大好き！」

ここね「私も、らんの話聞くの楽しい！」

コモコメ「コモコメもだいちゆきコメ！」

パムパム「パム！」

メンメン「メン！」

らん「有難う。らんらん、何だか自信が湧いてきた。高木君に言われた事なんて全然気にしない！」

俺達が談笑していると、あきほさんが帰宅してきた。

エナジー妖精組は直ぐにコタツの下に隠れる。

あきほ「あら。皆で楽しそうね」

咲夜「あきほさん…今日は買い物ですか？」

あきほ「ねえ、今高木君の話してた？」

咲夜「はい。それが如何かしましたか？」

あきほ「明日、うちのお弁当を高木君に持って行ってあげて」

雄大「一人暮らしなんですよね？彼」

ゆい「えっ？如何いう事…？」

あきほさんは高木君に関して全てを話した。

家庭の都合で両親から世話をあまり受けておらず、代わりに面倒を見ていた大学生の兄にずっと料理を作ってもらっていた。

つまり、兄に対しての思いが強かったそうさ。

ゆい「宇宙とお兄さんっていうのは本当だったんだ…」

咲夜「だが、それでも奴が嘘を吐いた事には変わりはないぞ」

ここね「確かにそうかもしれないけど、高木君寂しいのかも。お兄

さんが大学に行つて、急に一人になつて…」

ゆい「そつか…」

暫くしてコタツの下に隠れていたコメコメが欠伸をし、クソ犬とドラジカが両手を引き摺り出す。

コメコメ「ちゆかれたコメ…」

ゆい「皆、隠れてたんだ」

咲夜「プリキュアの事を家族に知られる訳にはいかないからな」

眠くなつたコメコメをハートキュアウオッチに格納させて俺達は解散した。

□

Y u u d a i s i d e

俺はらんちゃんを『トライジユニラム』に乗せて家まで送っている最中、『山海食堂』に入る高木君を目撃する。

彼は肉じゃが定食を食べていたが、何故か意気消沈な表情をしていた。

??? 「此処ですか。今回のターゲットは」

「!」

俺達は頭上を上げると、ナルシストルーとソルトルーを目撃する。左右に居るのはデイエンドとゲム。

ブンドル団と思わしき男は罰点の上にBと描かれた弁当箱の様な物を取り出すと、蓋ふたが自動的に開く。

ソルトルー「ヌスムン、ヌスムン、ブンドルー!!」

肉じやがのレシピツピ「ピピピ〜!」

肉じやがのレシピツピが捕獲したのを確認した男は蓋を閉めると、皆が食べていた肉じやがに変化が起こる。

客A「何だ?急に味が変わったぞ!!」

客B「やだこれ。凄く塩っぱくなってるんだけど...」

客C「前にこんな事会った様な...?」

晋平「如何なってるんだ...?」

ソルトルー「ハッハッハッハッハッハッ!レシピツピは確かに貰いましたよ!」

らん「ナルシストルー!」

雄大「お前は確か、ブンドル団の...!」

ソルトルー「おや?貴方は赤い仮面ライダーのお人。それと此方はバイクと同化しているカブトムシ」

ジュニラム『僕ハカブトムシジャナイ!!』

ビートチェイサーと分離したジュニラムはカブトムシと言われた事に激怒しながらソルトルーを捕まえようとするが、チェンソーの刃を縦に振り下ろしたゲンムが火花を散らしながらも攻撃を受け流す。

ゲンム「流星は『馬の鎧』と呼ばれたサポートメカ。とてつもない硬度を誇っている...」

デイエンド「そりゃあ、『仔馬の鎧』とも呼ばれているからね。無理はないよ」

らん「ソルトルー!レシピツピを返して!」

ソルトルー「今更何を言うのです?一つくらいダイナーの材料に持つて行っても良いじゃありませんか」

雄大「お前達に取っては唯ただの一つでも、それがかけがえのない物になる」

ナルシストルー「かけがえのない物?ふん。ますます虫唾が走るな...」

咲夜「雄大、華満!」

マシンディケイダーで走行したアキノリやゆいちゃん達も合流を

果たす。

ソルトルー「丁度良いところに来ましたね、デイケイド。お見せしましょう！ワタクシのバグスターの、大行進を!!」

盛大に宣言したソルトルーは二本のライダーガシヤットを取り出す。

咲夜「そのガシヤットは…！」

その一本にアキノリは見覚えがあるかの様に目を見開く。

『根菜ばか大将!』

『ミラーラビリンス龍騎!』

ゲナム『根菜ばか大将』は、農家である主人公が全ての養分を奪おうとする組織から育てた野菜を守る為に奮闘するタワーディフェンスゲーム…これは嘗て、君が制作したガシヤットでもあるらしいな。デイエンド」

デイエンド「ああ。これはデイケイドと旅をしていた時に制作したライダーガシヤット第一号と呼ぶべき品物さ。そして、『ミラーラビリンス龍騎』はミラーライダーとなった主人公が自身の願いを叶える為に鏡の世界で戦うサバイバルゲーム…」

『ガシヤット!』

ソルトルー「出でよ、ワタクシ達のバグスター!」

根菜ばか大将のライダーガシヤットを白黒と紫のゲーム機のようなアイテムを取り出す。

そして左側スロットに差し込んで銃身を地面に向け、発射された四つの光弾が怪人を形作る。

ソルトルーが召喚したバグスターは至ってシンプルな姿で、農業を思わせる服装を着ている人参・ジャガイモ・玉葱。

だが、ゲナムが召喚したバグスターは仮面ライダー王蛇そのものだった。

「俺はポツシュ!」

「俺はバルオン!」

「俺はサロット!」

「『僕(俺)達はルパニカルバグスター!三人揃って、レベル30!』」

王蛇「一回死んだ俺が怪物の身になるとはな…まあ、又ライダーバトルを楽しめるからいいか」

デイケイドA「浅倉まで…！」

ゲンム「やはり王蛇のデータを収集しておいて正解だった様だ。敢えて言うなら、王蛇バグスター、」と言ったところか」

デイケイドA「王蛇…バグスター!？」

ライダーの姿をしているバグスターにAは驚きを隠せなかった。

ナルシストルー「俺様の事を忘れてもらっちゃ困るね。カモン、モットウバウゾー!!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー！」

続いてナルシストルーはソルトルーから分捕った捕獲箱で電気圧力鍋を模したモットウバウゾーを召喚する。

マリさんがデリシャスフィールドを展開しようとした直前に三人のバグスターは山海食堂に押し掛けるとジャガイモや玉葱、人参と云った野菜が入っている料理を貪り喰らった。

料理を喰っている隙に俺達は逃げ遅れた人達を外へ出す。

ソルトルー「おや？随分と根性のあるバグスター達ですね…まあ、いいでしょう。何せ、これはただの序章に過ぎないのですから…」

ソルトルーによってレシピピを奪われた影響で料理の味が塩っぱくなっているが、彼らは根性でそれらを全部平らげてみせた。

すると、彼らの手には野菜に類似している武器が装備される。

人参を模したスコップ、玉葱を剥いた様な形状をしている万能クワ、そしてジャガイモの様に凹凸おうちつが激しいショットガン。

気力が湧き上がった彼らが持つ殆どの農業道具が人の命を刈り取る凶器となると、俺達に向けて不敵な笑みを浮かべる。

サロット「うおおーッ！ベータカロチンたっぷりだぜエー!!」

バルオン「仮面ライダーとプリキュアの皆、泣き喚くなら今しかないよ?！」

パッシュ「特製のバターをぶっ掛けて、潰してマッシュにしてやる。これでお前らもお終いだ！」

咲夜「誰も泣き喚かないし、勝手に結末を決めるな。変身！」

【カメンライド デイクライド！】

デイエンド「それじゃあこっちは、嘘付きのオンパレードだ」

【カメンライド ライアー！】

【レーザーターボ！】

『爆走バイク〜！』

デイクライドに変身したアキノリは続けてイリユージョンで三人に分裂し、デイエンドもドライバースーツにカードを二枚装填すると砲身から放った三原色の人影が二体のライダーを形成する。

「……………」

「……………」

後頭部に伸びた弁髪べんぱつが特徴で、何処となく中国風な印象を受けさせる紅色のライダー。☒えいを模した子楯を左手に、右手には尾を模した鞭むちを携えている。

もう一人はモヒカンの様にピンクの刺が連なる装飾を持つ黄色いライダー。両腕にはグリップ部分がバイクのハンドルを模している鎌を握っている。

デイクライドA「俺はゆい達の加勢に入る。BとCはあの三馬鹿を頼む」

雄大「よし、じゃあ俺はゲンムとあの黄色いライダーを何とかしよう」

デイクライドB「呉々くれぐれも慎重にな」

デイクライドC「成る可く被害が出ない様にしろよ？」

デイクライドA「承知の上だ。死ぬなよ、お前ら？」

「お互い様だ！」

ローズマリー「デリシヤスフィールド！」

本体であるAはマリさんが展開したデリシヤスフィールドに飛び込んだのを見届けた俺はBとCと共に三人のバグスターと対峙すると、両手を翳してアークルを出現させ、変身の構えに入った。

□ 「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！」

□ ゆい 「にぎにぎー！」
コメコメ 「コメコメ！」
ゆい 「ハートを！」
コメコメ 「コメコメ！」

□ ここね 「オープン！」
パムパム 「パムパム！」
ここね 「サンド！」
パムパム 「パムパム！」

□ らん 「くるくる！」
メンメン 「メンメン！」

らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□

「シエアリンエナジー！」
「コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
デイケイドA「ブフォツ!？」

□

コメコメ「コメコメ！」
パムパム「パムパム！」
メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンドde心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「デリシヤスパーティ♡プリキュア！」

□

「変身！」

『AXE FORM』

デイケイドB「全てを束ね！」

デイケイドC「全てを創る！」

デイケイドA「仮面ライダーデイケイド！」

「旅の語らい…始めようか!!」

電王A「俺の強さにお前が泣いた！（ゴキッ！）涙はこれで拭いき！」

クウガ「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は……俺が守る!!」

デイクイド「[[[全てを破壊し、全てを繋ぐ！]]」

デイクイド・クウガ「[[[我ら、仮面ライダー！]]」ドカーン！

□

B SIDE

ソルトルー「さあ、存分に暴れなさい。ルパニカルバグスター、王蛇バグスター！」

王蛇「気安く俺に指図するな。イライラするからよ……！」

デイエンド「……やれ」

デイクイドB「行くぞ！」

「[[[おう！]]」

ソルトルーとデイエンドの指示で召喚されたライダーとバグスターは俺達に襲い掛かる。

俺はルパニカルバグスターを、Cはライアと王蛇を、そして雄大はゲナムとレーザーターボを。三手に分かれながら、それぞれの相手に向かって行った。一方、ジュニラムとキバーラは住人の避難を優先している。

□

A SIDE

モットウバウゾー「モットウバウゾー。ウバ……！」

頭頂部のパーツを回転させながらレーザーを放つモットウバウゾー。

防御体制を取りながら何とか背後に退く俺と電王だが、後に見たの

はビームによる圧力によって捕縛されたプリキュア一同だった。

スパイシー「押し潰される……！」

プレシヤス「何とかしないと……ううっ！」

幾らパワー系のプレシヤスでもビームの圧力に抗えない様だ。

ナルシストルー「袋の鼠だな。モットウバウゾー、次いでにディケイドと電王も捕まえちゃいな」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

『フォームライド オーズ ガタキリバー!』

『ガッタキリバー!』

電王A「リユウタ、交代や!」

『GUN FORM』

電王G「お前、倒すけど良いよね? 答えは聞いてない!」

ディケイドA「決め台詞は後だ。兎に角、あのビームを食らったら身動き出来ない……俺が囷になるから、お前は得意のダンスでビームを避けながら攻撃しろ」

電王G「分かった。行くよ!」

フォームチェンジが完了し、俺はわざとビームに捕縛されるとブレンチシェイドで分身した二人がモットウバウゾーに飛び掛かるも至近距離でのビームが直撃されてそのまま捕縛……される訳がなく、直前に分身が二体ずつ倍増しながら次々と飛び掛かりながらカマキリソードの斬撃を喰らわせる。

ウバウゾー側ではかなり厳しい状況だろうな。何せブレンチシェイドの分身達が、俺を含めて最大人数が50に達するまで捕縛される度に分身するのだから。

其処で俺が分身する度にリユウタロスがガンモードにしたデンガツシャアの『パーツ二番』からフリーエネルギーを変換させた銃弾をモットウバウゾーに浴びせて徐々に体力を減らすって戦法だ。

満身創痍となったモットウバウゾーはビームの圧力を少しずつ上げて行くと、プレシヤス達は苦しみ出す。こりや遊んでる暇はないな……。

□
B SIDE

デイケイドB 「先ずは野菜を調理しておかないとな」

【フォームライド ウィザード フレイムドラゴン！】

『ボー！ボー！ボーボー！』

ライダーカードを装填し、ルパニカルバグスターの攻撃を避けながら左側から出現した赤い魔法陣が炎のドラゴンと共に潜り抜ける。

竜の意匠を持ち合わせる赤いウィザード フレイムドラゴンへと姿を変えた。

【アタックライド コネクト！】

赤い魔法陣から黒い手の装飾が付いている銀色の剣『ウィザースー
ドガン』を左手に持つと、更にライダーカードを装填する。

【アタックライド ドラゴタイマー！】

『ドラゴタイム！セットアップ！』

デイケイドB 『調理タイムアタック、よいい…』

ルパニカルバグスター 「「うおおおーッ!!」」

早めに終わらせるべく左腕に装着されたドラゴン型のアナログ式
タイマー『ドラゴタイマー』の針を360度回し、親指形のレバーを
押す。

デイケイドB 「どん！」

『スタート！』

ルパニカルバグスターのバルオンが振り下ろした万能クワをライドブツカーで左に捻りながらレバーを一つ押す。

『ウォータードラゴン!』

バルオン「ぎゃあつ?!」

瞬時にバルオンの足元に青い魔法陣が出現し、水飛沫と共に切り上げた。

現れたのは菱形の青い仮面を持つウィザードのドラゴンスタイルウォータードラゴン。

このドラゴタイマーには赤・青・緑・黄色と文字盤を指した方にレバーを押す事でそれぞれが独自の意思を持って行動するウィザードのドラゴンスタイルを召喚する事が出来る。ウォータードラゴンを呼び出したから後二回だな。

サロット「バルオン!てめえ、よくもオツ!!」

『アタックライド リキッド!』

サロット「ぐっ!クソツ!離せ!」

人参型のスコップを振り下ろすサロットだが瞬時に液状化したウォータードラゴンに纏わり付かれ、バッシュとバルオンが一斉攻撃でダメージを与えようとするが纏わり付くのを解除したウォータードラゴンに躲され、二方の攻撃がサロットに直撃する。

バッシュ「おい、何やってんだ!?!敵はあつちだぞ!」

バルオン「あわわわ... 如何しよう!大丈夫サロット!?!」

『ハリケーンドラゴン!』

三人が戸惑っている隙にレバーを押すと緑の魔法陣から出現したハリケーンドラゴンは、風を纏いながら順風満帆に斬り付ける。

バッシュ「これでも喰らえ!!」

『ランドドラゴン!』

バッシュのショットガンから散弾した銃を黄色い魔法陣から出現した土の壁を生成して防御したのは黄色い四角い仮面を持つウィザード ランドドラゴン。

同時に丁度針が一周したドラゴタイマーのレバーを押す。

『ファイナルタイム!ドラゴンフォーメーション!』

ランドドラゴンがサロツト達を石の鎖で動きを止め、ドラゴウイン
グで飛翔しながらサロツト達を竜巻で拘束させてダメージを与える
ハリケンドラゴン、魔法陣から出現した冷気を放って竜巻ごと凍結
させるウォータードラゴン、最後に俺が胸部から出現したウイザード
ラゴンの頭部『ドラゴスカル』から放った火炎で焼き払う。

「「ギャアアアーツ!!!」」

四大元素の一斉攻撃を喰らった三体は断末魔を上げて爆散した。
まるで最初のボスと戦う様に呆気ないものだった。

デイケイドB「: : もうちよつと、手応えあつた方が良かったかな。
俺は雄大のサポートに入る。ランドラはCのサポートに入れ、ハイド
ラとハリドラは住人の避難を終えたら其方に向かつてくれ」

俺達は各自に行動すべく、四手に分かれた。

□

K U U G A S I D E

ゲンム「うえあ!」

クウガ「超変身!」

レーザーターボ「: : : : :」

俺はタイタンフォームに超変身してゲンムが振り下ろした右腕を
受け止めるが、鋸状の刃が回転する度に火花を散らす。

その隙にレーザーターボが鳩尾部分に蹴りを入れる。

クウガ「ぐうっ!」

『ジェットコンバット!ガツチョーン!ガツチャーン!レベルアーツ
プ!ジェットコンバット!』

蹴り飛ばされた俺が立ち上がるうとした瞬時に銃声音が小刻みに
鳴り響く。

頭上を見上げると、其処には飛行ユニットと二門のガトリング砲が

付いている胸部装甲を装着しているレーザーターボの姿が。

グリップを握った事で再び降り注いだ銃弾の雨を避けながら、近くに落ちていた長い棒を手取る。

するとアークルの色が紫から青に変化し、青いクウガ ドラゴンフォームに超変身した俺は優れた跳躍力でレーザーターボとの距離を取ると。今度は更に青から緑へと変化させ、左のみ肩装甲がある緑のクウガ ペガサスフォームへと超変身。

同時に水流の棒『ドラゴンロッド』が変化した天馬の弓『ペガサスボウガン』のハンドルを引いて、この姿の特性である『超感覚』を最大限に活用。

レーザーターボ「ツ!!」

ハンドルを離して放った諸刃の必殺弓『ブラストペガサス』がレーザーターボの左翼に直撃すると封印エネルギーが流し込まれ、流石に不味いと思ったレーザーターボはゲーマードライバーに挿さっている右側のライダーガシャットを取り外しながらギリギリで着地に成功する。

レーザーターボ「……………」

ゲナム「九条貴利矢の偽物にしてはやるじゃないか。さて、私はクウガのデータを収集するのに手間を欠かせたくはない……やるぞ」

レーザーターボ「……………」

ゲナム「無言か。所詮は操り人形同然という事か」

『シャカリキスポーツ！ガッチョーン！』

ゲナム「グレード3」

『ガッチャーン！レベルアップ！シャカリキスポーツ！』

ゲナムは召喚した黄緑の自転車を装甲として装着する。

『ズ・ドーン！』

ゲナムが投げた右側の車輪の表面を蹴り上げて再びドラゴンフォームに超変身した俺だが、高く飛び上がったところをレーザーターボは鎌を合体させて弓の様な形状にさせて光の矢を放つ。

ドラゴンロッドを回して無数の矢を跳ね返しながら再び投げた車輪を強く蹴り、更には近くの家の屋根を蹴り上げて封印エネルギーを

注ぎ込んだドラゴンロッドをレーザーターボに突き出す。

『ス・パーシー!』

だが、直前に再び鎌に分離させると左側を捻ってドラゴンロッドを手から離され、振り下ろした右側の鎌で切り裂かれる。

クウガ「ぐううっ! うああっ!?!」

よろめいたところを不良の様な蹴りで俺は蹴り飛ばされ、同時にドラゴンフォームからマイティフォームに戻った俺をレーザーターボは容赦無く胸部を強く踏み付けた。

ゲナム「よくやった。さて…君のライダーの力を貰うぞ」

バグヴァイザーを向けてBボタンを押そうとした刹那、突如出現した赤い魔法陣から銃弾で阻まれている隙にレーザーターボの尻部に強く蹴りを入れて魔法陣から出現した手を掴む。

そのまま擦り抜けて行き、気が付くと俺は山海食堂から少し離れた路地裏に立っていた。

デイケイドB「間一髪だったな。雄大」

クウガ「アキノリ!」

デイケイドB「Bだ。若し俺じゃなくてAとかだったら今頃変身不能になってたぞ」

クウガ「そんな事より、バグスターの方は?」

デイケイドB「既に片付けた。他の三人はCの援護やら住人の避難やらで大忙しだ。そんな事よりもこの食堂で逃げ遅れた問題児も此処に居るぜ」

クウガ「問題児? まさか…!」

震えた声を頼りに足元を見てみると、其処には体育座りで怯えていた高木君だった。

晋平「何なんだよ…一体俺が何したっていうんだよ!?!」

これまでの態度が気弱になり、真面に動けない心境だった。

其処には機械の体となっていた人參のバグスターが。

よく見てみるとジャガイモと玉葱のバグスターの頭が両肩装甲の一部となっている。

デイケイドB「お前ら、死んだんじやなかったのか?」

「サロット「野菜を腐らせる様な言い方をすんじゃねえ！」
バツシュ「俺達が一度倒されると、全員が一つになつて蘇る様になつてるのさ！」

バルオン「これで君達に勝ち目はないよ。若し助かりたいなら、その人間をこつちに渡せ！」

デイケイドB「……分かった」

クウガ「!？」

少し沈黙したアキノリは何故か高木君を突き放してしまふ。

クウガ「アキノリ、お前何してんだよ!？」

デイケイドB「これでいいんだ。こいつにも、少しは痛い目みないと分からない様だし」

クウガ「そういう問題じゃねえよ!？」

俺が説得しようとしていると、飛び降りた王蛇が螺旋状の剣で俺達を斬り付け、ライアが召喚した☒のミラーモンスター エビルダイバーが突進によるカッター状の鱭ひれで更に装甲に傷が付く程のダメージを与える。

ゲナム「見つけたぞ。さあ、今度こそデータを貰おうか」

背後にはゲナムとレーザーが一步步近づいて来る。

高木君の頭を強く掴みながら引き摺ずると、剣先を喉に当てて人質を取る。

王蛇「皆最もらしい理由を付けたがる。理由を付けて安心したがるんだ。馬鹿な奴だ……こんな嘘付きを庇わなければな」

ルパニカル「「嘘付き！嘘付き！嘘付き！ヒヤハハハハハハハハハハ……!!」」

晋平「俺はただ、皆に面白いつて言つてほしかつただけなのに……俺が嘔吐き続けてなければ、こんな事には!!」

王蛇に指摘されルパニカルには嘲笑われ、今までの行いを後悔したのか高木君は涙を流す。

クウガ「そんなに後悔してるなら少しは自分の兄を見習つたら如何なんだ!？」

晋平「!」

嘲笑うルパニカル達を黙らせる様に俺は叱咤する。

クウガ「あきほさんから聞いたよ。君はお兄さんが居なくなつた孤独を埋める為に嘔吐く様になつたんだろ？まあ、俺は兄弟居ないからそんな事は如何でもいいけど。若し君が今でも空想と想像を働かせたのなら、他人の気持ちをおおく分かつて居た筈だ。何で俺がさつき『地獄を見る事になる』って言ったか分かるか？」

晋平「そ、それは・・・」

クウガ「要するにどんな理由があれど『一時の感情で利益を失う様な馬鹿になる』なつて事だよ。この先の未来、君が大人になつて一歩外から出れば誰も君の事を信じてくれない。でも君のお兄さんはそんな世の中に抗いながら宇宙飛行士の勉強に励んでいる！どんなに嘲笑われても、這つてでもだ！それでも君はそんなお兄さんの気持ちを踏み躪ろうつて云うのか!？」

晋平「俺は・・・俺は！」

クウガ「もう嘘を吐く必要はない。だから、君の本心を言ってくれ!!」

晋平「俺は・・・ 一生生き地獄を味わう様な人間になりたくない!だから・・・ 助けてくれ!!」

本音を言い切つた高木君の言葉に俺は仮面の下で口元を緩める。その言葉が聞きたかつた。

王蛇「ちやほや言つてんじゃねえよ!!」

堪忍袋の尾が切れた王蛇が逆手持ちで持った剣が振り上げる・・・ ことはなかつた。

何故なら直前にライアが伸縮自在の鞭で剣を弾いたのだから。俺の力を奪おうと背後に近付いたゲナムも、レーザーターボの鋭い蹴りで左の壁に叩きつけられる。

エビルダイバーもルパニカルを体当たりで吹き飛ばす。

レーザーターボ「あれエ、乗せられちゃつた？自分達の嘘に」

ゲナム「やはり貴様か・・・ 九条貴利矢ア!!」

王蛇「お前は・・・ 手塚か!？」

ライア「久し振りだな・・・ 浅倉！」

ソルトルー「これは一体、如何なっているのです…!?」

デイケイドB「貴利矢さんと手塚さんは最初からお前に反抗するつもりでいたんだよ。レシピツピを奪っておいて、こうも簡単に引っ掛かるはな…らしくないなソルトルー！」

ソルトルー「…こんのオ、ガキ共めええッ!!!ルパニカルバグスター！王蛇！もうこの場が如何なろうと構わん。ライダー共を始末しろッ!!」

王蛇「言われなくても分かっている…あまり俺をイライラさせるな」

『ADVENT』

遂に本性を露わにしたソルトルーが激昂しながらルパニカルに始末を指示を下す。

王蛇はコブラを横した杖にアドベントカードを装填して蛇のミラーモンスター ベノスネーカーを召喚する。

レーザーターボ「あのライダーは自分達に任せろ。お前らはデカブツを頼んだ！」

デイケイドB「はい。お願いします！」

ジュニラム『オーイ！二人共！救助終ワツタヨー！』

クウガ「ジュニラム！」

ジュニラムに乗っていたCや他のドラゴンスタイルの三人が丁度良いタイミングで合流した。

デイケイドB「あれ？C、お前浅倉と戦ってたんじゃないのか？」

デイケイドC「ああ、それはだな…」

???「ブモオオオ！」

二足歩行の犀型のミラーモンスター メタルガラスが咆哮を上げながらCに突進を仕掛けるが、Cはそれを受け止める。

クウガ「俺とCは貴利矢さん達のサポートに入る。Bはバグスターの駆除、ジュニラムは高木君を安全な場所へ！」

ジュニラム『分かつた！』

デイケイドB「任せたぜ」

デイクライドC「おう！」

ジュニラムが高木君を非難させるとCと共にレーザーターボ達の援護に向かうべく、俺はドラゴンフォームに超変身しながら向かって行った。

□

B SIDE

ルパニカルバグスターと対峙した俺はライダーカードを取り出す。デイクライドB「ドラゴンスタイルの真骨頂、見せてやる！」

「フォームライド ウィザード オールドドラゴン！」

背後に魔法陣が出現し、フレイムドラゴンである俺を中心に分身していた三人のウィザードがウィザードドラゴンのエネルギー体となって赤い魔法陣を潜り抜ける。

尻部には『ドラゴテイル』、背部にはドラゴウイング、両腕には『ドラゴヘルクロー』、そして最後に胸部にはドラゴスカルが装備され、ウィザード オールドドラゴンとなった。

サロット「何だその姿は…!？」

デイクライドB「お前も合体したからこつちも合体したのさ。一人の人間を嘲笑ったんだ… もう御免と言っても容赦しないからな！」

俺はドラゴウイングで飛翔しながらルパニカルバグスターに向かって行った。

□

A SIDE

ナルシストルー「随分と手こずらせた様だが、そろそろ終わりにし

よう。モットウバウゾー！」

遂に最大人数50人となった俺全員が捕縛されてしまった。

デイケイドA「…んなどこでくたばってたまっかよー！」

ヤムヤム「あの時の高木君、肉じゃがに大切な思い出があるんだよ…そんな思い出を絶対に奪わせない…絶対に！バリバリカットアブレイズ!!」

気力を振り絞ったヤムヤムは両腕にを生成させたカッターブレイズを纏わせると、地面に大きく叩き付ける。

デイケイドA「そう来るか。だったら俺も！」

「フォームライド オーズ サゴーズ！」

『サゴーズ！サツゴーズ！』

赤い複眼を持つ犀を模した白い頭部、ゴリラの様な灰色の両腕、かたい下腿部には象の顔を模した銀色の両脚。

800年前の王が巨大な地割れを起こして大軍団を殲滅せんめつさせたと言いつた伝えている『重力コンボ』オーズ サゴーズコンボになった俺は両腕のガントレット型の武器『ゴリバゴーン』によるドラミングで自分の周りの重力を操作する。

ナルシストルー「ハハハッ。ヤケクソか？」

デイケイドA「ヤケクソか如何か自分で確かめてみるよ!!」

地面を崩す事で固定ビームからの脱出に成功した。

ヤムヤム「はにゃ」

デイケイドA「っしやあ、脱出成功！」

ナルシストルー「何っ!？」

ローズマリー『ナイス!』

デイケイドA「いよいよしよつと。バゴーンプレッシャー!!」

カッターブレイズとゴリバゴーンを遠隔攻撃で飛ばしてダメージを与えてプレッシャーストスパイシーを解放させるだけじゃなく、ガタキリバ49人分の電撃を黒焦げにさせる威力で浴びせる。

デイケイドA「プレッシャース、決めるぞ！」

「ファイナルアタックライド オ、オ、オ、オーズ！」

デイケイドA「サゴーズインパクト！うおおおお…！ハイヤー

!!

プレシヤス「1000キロカロリーパンチ!!」

地震を起こして怯ませたモットウバウゾーを超重力で捕らえて間合いへ引き摺り寄せ、プレシヤスのカロリーパンチと同時にサイヘッドによる頭突きと両腕のゴリラアームを叩き込んでやった。

電王G「らんちゃん、アキノリ、一緒に決めるよ!」

『FULL CHARGE』

デイケイドA「よし、やってなかった合体技を見せてやる!」

□

ヤムヤム「キュアヤムヤム!」

デイケイドA「仮面ライダークウガ!」

「マスクドジャー
「ハートジューシーニキサー!」

「シエアリン! エナジー! ミックス!!」

メンメン「メン!!」

「プリキュア・デリシヤスヤムヤムドレイン!!」

強化ウバウゾー「お腹一杯!」

「(お粗末) 様でした!」

肉じやがのレシピツピ「ピピく!」

□

ヤムヤム「おかえり!」

肉じやが個体のレシピツピが解放され、ハートキュアウオツチに格納される。

ナルシストルー「去る者は追わず」が俺様の主義だ...」

そう言つてナルシストルーはデリシヤスフィールドを後にした。

□

B SIDE

「ファイナル アタックライド ウイ、ウイ、ウイ、ウイザード！」

デイケイドB「ファイナルレだ！ストライクドラゴン!!」

ルパニカルバグスター「「ぎやああーッ!!」」

赤・青・緑・黄と四体の竜のエネルギーが魔法陣となつてルパニカルの動きを捕らえ、そのままライダーキックで撃破する。

その直後、データはソルトルーのバグヴァイザーⅢに回収された。

サロット『おい！早く此処から出せ！』

バルオン『狭いよ〜！』

バツシュ『出さないとお前をマツシユポテトにしてやる！』

ソルトルー「黙れ…！」

『『ひいっ…!?!』』

ソルトルー「これからワタクシの材料になる奴らが大口を叩くな。今回は割と気分が悪い… 帰りますよゲンム、王蛇」

喚き散らすルパニカルバグスターに、ソルトルーは威圧を掛けながらその場を後にした。

王蛇「手塚。次会った時は、又本気で殺り合おうぜ…。」

レーザーターボ「おい社長さん。あんた… いつまで此処に居るつもりだ？」

挿入歌『Rider girls／風の向こうへ』

ゲンム「… 私の夢は幻夢コーポレーションの復活。これも愛する父の為だ」

自身の夢を告げたゲンムは王蛇と共に何処からか出現したオーロラカーテンを潜り抜け、その場を後にした。

ライア「浅倉。俺はお前とは二度と殺り合わない…。」

レーザーターボ「愛する父の為… か。経歴は聞かないが、父親と和解出来た様で何よりだ。自分達がしてやれるのも如何やら此処までらしいな… おい、其処の赤いライダー」

クウガ「えっ、赤いライダーって… 俺?!」

レーザーターボ「さっきの言葉、痺しびれたぜ。だから忘れんな！お前が笑顔である限り、お前はお前だ。お前の運命は… お前が変えろ」
クウガの方を置いたレーザーターボはライアと共に役目を終える

と、姿がぼやける形で消滅した。

ジュニラム『…雄大？』

クウガ「俺は…俺…」

その言葉を受け取ったクウガは何かを決意したのか、強く拳を握った。

デイエンド「時は満ちた。今こそ、ブンドル^こ団を裏切る時…！」

裏切りを決意したデイエンドがいた事も知らずに…。

□

Sakuya side

翌日、高木の言動は相変わらずだったが華満や雄大に大して認識を改める様になった。

あきほさんに作ってもらった特製肉じゃが弁当を届けに雄大が3組に訪れる。

雄大「失礼します。高木君いますか？」

晋平「雄大先輩!?何すか急に!?!」

雄大「君のお兄さん特製の肉じゃが弁当を届けに来たんだ。まあ、作ってくれたのはゆいちゃんのお母さんだけだね」

咲夜「レシピは雄大と華満が考えたそうだ。蓋^{ふた}を開けたらビックリ玉手箱だぞ?」

晋平「おおっ!これは…!」

蓋を開けた高木は目を輝かせながら肉じゃがを口に運んでいく。

晋平「あーん…んんっ!?!」

咲夜「如何だ？美味いか!？」

晋平「うっひゃく！甘くて美味えく!!」

りゆうじ「何かマジ美味そうだな・・・」

晋平「俺の身体は美味しい肉じゃがで動くサイボーグ!」

のりお「マジか!？」

ゆい「高木君のお兄さん、高木君の話でいつも笑ってたんだって」

ここね「それで・・・」

嬉し涙を流しながら肉じゃが弁当を食っている様子にゆいは高木の過去を語る。そういう事だったのか・・・。

高木の様子を見て、過去を振り払った華満は笑顔を見せたのだった。

□

NO SIDE

ソルトルー「何故、レーザーターボとライアがワタクシ達に攻撃を・・・!?まさか、ディエンドは——

セカンドロイミュードなのか・・・!？」

□

ヤムヤム「今日はパイナップルジュース。ヤムヤムと乾杯！」
オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパ―テイ♡プリキュア くら破壊者の食べ歩きくら
もえ「何かあるなら力になる」

ソルトルー「ディエンド。貴方は…」

あまね「私には、その資格がない」

第十七品：四人目のプリキュア!?!あまねの選択／ソルトルーの付け
足し!?!凶敵、融合バグスター!!
全てを破壊し、全てを繋げ!

第十七品：四人目のプリキュア!?あまねの選択／ソルトルーの付け足し!?凶敵、融合バグスター!!

□

Sakuya side

咲夜「成る程、大体分からない訳でもないな」

オーナー「アキノリ君。そろそろ出発しますよ」

咲夜「あ、御免。直ぐ行くよオーナー」

とある店を後にした俺はデンライナーで現代のおいしーなタウンに戻るべく、その足を運んだ。

□

Touki side

あまね「はぁーッ!ふっ!」

ゆあん「如何した!?拳に迷いがあるぞ。休み明けで心と身体が鈍^{にぶ}つている様だな」

あまね「はい…」

ゆあん「よし、そろそろ休憩しよう」

あまね「いえ、まだまだ。はぁーッ!」

霧が深い中、菓彩少女はゆあん少年と空手の組み手で特訓をしたい

だが、息が乱れている彼女にゆあん少年は指摘する。

休憩を取ろうとしたが、気合を入れた菓彩少女は休まずに特訓を続けた。

だが、その振るい方はブンドル団に居た事をまだ気にしている様にも見えた。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメージOP2 『MYTH&ROID/VORACITY』

□

Sakuya side

クッキングのジジイとクックイーンのばーさんに呼び出された俺と雄大は、ローズマリーの部屋でクッキングダムで起こった出来事を聞く事にした。

ローズマリー「光の玉に変化が…？」

クックイーン『ええ。今朝になって突然、ハートの結晶体に変化したのです』

ローズマリー「光の玉って確か、エナジー妖精と同じ様に…!？」

咲夜「如何いう事だ？ローズマリー」

ローズマリー「コメコメ達エナジー妖精は、沢山のほかほかハートの結晶体から生まれた存在よ」

パムパム「パムパム達と同じパム!？」

「コメコメ」「コメ？」

『、』ほかほかハート、…？』

ほかほかハートの言葉に首を傾げる雄大。そういえば雄大はこの世界に来てから二・三週間ぐらい経過したんだっけ。

咲夜「そういや、雄大とジュニラムはこの世界に来たばかりだったもんな。ほかほかハートっていうのは人々の『美味しい』や『嬉しい』などの幸せな気持ちから発するエネルギーの様な物だ」

雄大「成る程。だから、レシピツピっていう妖精達がこの町によく現れるのか…」

メンメン「でも、何でそれがハートの形に変わったメン？」

俺は雄大にほかほかハートの事を簡潔的に説明する。

クツクイーン『分かりません。何かの影響を受けたとは思いますが…』

クツキング『何にせよ、プリキュアとライダーに重要な物にも間違いない』

パムパム「重要ってどんな事パム？」

クツキング『う〜ん…』

ローズマリー「又、『う〜ん』って何なんですか!？」

クツキング『クツククツク〜！兎に角、これはそっちに送ろう。な？』

クツクイーン『…はい』

相変わらず話を逸らしやがった。マジでこっちに來たら顔面一発ぶん殴るからな。

まあ、それは置いて…俺はマシンデイクイダー、雄大はビートチェイサー2000を学校の近くの駐車場で止め、いつも通り学校に登校する。

咲夜「三人共、おはようさん」

ゆい「おはよう！」

ここね「おはよう」

らん「おはよう。アキぽん、ゆーゆー」

雄大「ゆーゆーって何だよ。ゆーゆーって」

??? 「…おはよう」

仲良く朝礼をしていると、背後から声を掛けられたので此方を振り返る。

らん「はうっ!」

ゆい「あまねさん…!」

咲夜「会長!」

ここね「お身体は良くなったんですか?」

あまね「ああ。もう問題ない…。改めて私を救ってくれた事、有難う」

会長は俺達に謝意を伝える。如何やら、自分がジェントルーになっていた事や、ゆい達がブンドル団から解放してくれた事は全て覚えていた様だ。

ここね「そんな…。顔を上げてください!」

雄大「アキノリ達に何があつたのかは知らないけど、もう過ぎた事だし良いんじゃない?」

らん「そうそう。そんな事気にしないで大丈夫ですよ!」

ゆい「うん。元気になって良かった!」

あまね「…。有難う、君達のお陰だ。そう言えば君はこの学校で見かけない顔だな。転校生か?」

問いかけられる雄大は軽く自己紹介をする。

雄大「ああ、自己紹介がまだだった。俺は小野寺雄大。君と同じ三年で、咲夜の…。アキノリの昔からの友人だ」

あまね「そうか。透翼と門津とは幼馴染みの様な関係だったんだな」

雄大「まあ、そんな感じだ」

咲夜「ちよつと待ってくれ。お前はレグ…。海詠とは如何いう関係なんだ?」

あまね「ああ、それは…」

海詠との関係を聞こうとしたが、会長の復帰を知った大勢の生徒達を取り囲みながら復帰を祝福する。

その中には涙を流す者もいた。

生徒A 「生徒会長！」

生徒B 「お元気になられたんですね!？」

生徒C 「一体如何してたんですか!？」

生徒D 「お身体に悪くしていたって聞いていたけど...」

生徒E 「良かったです！」

あまね 「ああ。心配掛けて済まない」

らん 「流石カリスマ生徒会長...」

咲夜 「やめときなさい」

雄大 「それにしても、凄い人気だな」

ゆい 「やっぱり皆も心配してたんだね」

咲夜 「.....」

会長の声色からして何か迷っている様にも聞こえる。若しかして、まだブンドル団に居た事を引き摺ずっているのか...？

そう云えば、今日は海詠が登校している姿がないな。まあ、あいつの事だ。元々は...

俺の感情で生まれた機械生命体なのだから。

□

DIEND SIDE

セクレトルー「失態続きですね…」

王蛇「それよりも早く戦わせろ。ライダー同士のバトルってのは、本気を出さないと面白みが出ないしな」

おばさんは失態続きのナルシストルーを指摘する。

ナルシストルー「そう焦るな王蛇。俺様が本気を出したら、直ぐ終わってつまらないだろ？」

セクレトルー「まだ本気ではないと？ってというか、そういう奴程冴えないポンコツ…」

ナルシストルー「まあ。確かに遊び過ぎた気もするし、そろそろとっておきのアレ… 試しちゃおっかな？」

ゲムム「とっておきのアレか… 同感だな。私も切り札を残している」

そのまま立ち去ろうとしたナルシストルーを足止めするおばさん。やっぱりこれだけはやらなくちゃいけないのね。まあ、これが最後だけだ。

セクレトルー「お待ちなさい」

ナルシストルー「あ。やっぱやる？」

セクレトルー「無論。それでは… セーの！」

「「ブンドル・ブンドルー!!」」

ソルトルー「…」

グッバイ、僕のブンドル生活。早速、僕は荷物を纏めてオーロラカーテンを出現しようとした矢先にソルトルーが現れる。

ソルトルー「待ちなさい」

デイエンド「ソルトルー。僕に何か様？」

ソルトルー「前から気になっていた事があります。デイエンド、貴方は…」

セカンドロイミュードですか？」

□

S a k u y a s i d e

ゆいの家にて取り外したハートキュアウオツチの魔法陣からハートの形の結晶体が出現する。

ローズマリー「あら。本当にハート型…」

キバーラ「あら、可愛い形ね」

ここね「可愛い…」

らん「これがプリキュアとライダーの役に立つ物？何が出来るの？」

雄大「でも、まだそうと決まった訳でもないしね」

ゆい「見せて見せて！」

コメコメ「みちてコメ！」

ジュニラム『僕モ！』

雄大「はいはい。今見せるからな」

魔法陣から姿を見せたのは、パフェのレシピピピがだった。

パフェのレシピピピ「ピピく！」

ゆい「うわあ、吃驚びっくりした！」

らん「はいやく！新しいレシピピピ！」

まだ見ぬレシピピピに目を輝かせながら写真を撮る華満に、パフェ个体は拗すねた様な態度を見せる。

キバーラ「あら。急に如何したのかしら？」

パフェのレシピピピ「ピピく！」

パムパム「『パムパム達にお願いがあつて来た』って言ってるパム」

パフェのレシピピピ「ピピピ、ピピピピ！」

クソ犬が言葉を翻訳をすると、パフェ个体が急に怒鳴り散らす。

雄大「何て言ってるの？」

パムパム「『最近あまねに元気がないからワタクシが励ましてあげますの。妖精の貴女達が通訳なさい！』って言ってるパム……」

ジュニラム『余リニモ早口スギナイ？』

ローズマリー「お願いに來た割には上から目線ね……」

こいつ、せっかちな割には結構ウザいから『ウザいレシピピピ』だから略して『ウザッピ』な。よし確定。

ゆい「あまねさん、元気がないの……？」

らん「学校じゃ元気そうだったけど？」

咲夜「いや、若しかしたらまだジェントルーだった事を引き摺っているのかもしれないな」

雄大「ああ。俺もそう思ってた」

雄大も会長の様子に感付いていた。流星は士さんと一緒に世界を旅した笑顔を守るライダーの息子だ。

パフェのレシピピピ「ピピピピ、ピピピピピ!!」

メンメン『あらやだ。ライダーのお二人以外はそんな事も気付かなかったの？ワタクシはあまねをずっと影から見守っていたから分かるわ!』って言ってるメン…。」

咲夜「いや、オカマ含めて三人だけど!?!」

ゆい「あまねさんと仲良いんだ」

パフェのレシピツピ「ピ!?!ピピピピピピく!!」

パムパム『ちよつと貴女、タメ口で何様のつもり!?!ワタクシがデザートに立つ最高点のパフェのレシピツピとご存知ない訳!?!』…って言ってるパム」

クソ犬とドラジカが大分振り回されてるな。

ローズマリー「頂点…?」

頂点に立つ気はないが、少しはゆつくりする事を学べ。

らん「確かに。フルーツ、アイス、ケーキ、プリン、何を乗せても美味しいパフェはある意味最強かもく!」

パフェのレシピツピ「ピピピピピピく!!」

メンメン『それよりさつさとあまねのところへ連れてお行き、さあ早く!』って言ってるメン…。」

雄大「意外とせっかちなな…。」

らん「はうく。兎に角行つてあげようよ!」

ここね「うん。生徒会長が元気ないのも気になるし…。」

ゆい「そうだね。皆で行こう!」

コメコメ「行くコメく!」

ゆい達の賛同でウザツピは大はしやぎだが、クソ犬とドラジカは散々振り回された様だ。

パムパム「疲れたパム…。」

メンメン「メン…。」

咲夜「お疲れさん」

そんな二体に俺は劳いの言葉を掛けてやった。

数分後、状況を確認すべくフルーツパーラーKASAIに行き着いた俺達。

みつぎ「いらつしやいませく」

「ゆあん「おっ、君達は…！」

らん「はわわ。生徒会長のお兄さん！」

ゆい「えつと… ゆあんさんとみつきさん」

咲夜「逆だろ。左がゆあんで、右がみつきだ」

みつき「よく覚えててくれたね。嬉しいよ」

ゆあん「細かい事は気にするな。何か注文したい物があつたらいつでも呼んでくれ」

ゆあん「何だか煉獄さんみたいだな。みつきは穏やかそうな感じだったし。」

「ここね「先程はクリスタルシユガーとフルーツパーラーグミを有難う御座いました」

咲夜「キバーラの奴、毎日二個ぐらいは食ってるみたいだぜ」

みつき「此方こそ。あまねなら奥の席に居るよ」

「簡潔な一言で済ませた二人が立ち去ると、奥の席には会長と茶色いシヨートヘアの少女だった。」

ゆい「あれ？一緒に居るのって、生徒会副会長の山倉もえさん…？」

咲夜「キバーラ、ちよつと様子を見て来てくれないか？」

キバーラ「あたしの出番ね。おつかませ〜！」

「俺の胸ポケットで待機していたキバーラが一番奥の席にある電灯に止まって二人の話を立ち聞きする事にした。」

キバーラ「えつ…!？」

もえ「生徒会長を辞める!？」

『!？』

あまね「大声を出すな。お客様が居るだろ」

副会長は会長に小声で休養にした理由を聞き出す。

もえ「如何いう事？学校良くしようとか皆の為にあんなに頑張ってたのに…！」

あまね「私は生徒会長に相応しくないんだ…」

もえ「急に如何したの？若しかして今までお休みしてた事とか関係が…？」

あまね「いや、それより新しい生徒会長をもえにお願いしたくて…。」

もえ「あまねが目を逸らす何て変。何かあったの…!?」

問い詰められる会長。

幾ら同じ生徒会長であつても、プリキュアやブンドル団に関する事は副会長だろうと言えない立場だろう。

もえ「何かあるなら力になるよ。あまねにもいつも助けてもらつてばかりだし、フルーツポンチの恩返しもしたい」

あまね「“恩返し”…?’」

もえ「うん。前に私がき、ピアノのコンクールで優勝出来なくて嘆いてた時あつたでしょ?私、周りの評価を気にして好きな事辞めようとしてたんだ。けど、あまねが作ったフルーツポンチを食べたらすごく美味しくて気持ちが晴れて…。そしたら何かさ、又頑張ろうつて思った。だから今もピアノを続けられてるのはこの大好きなフルーツポンチのお陰!」

副会長はフルーツポンチを堪能しながら過去の出来事を振り返る。

それほど、会長を尊敬してたのにも納得がいくな。

あまね「そうだったのか。私は唯、フルーツで元気になってほしくて…。」

もえ「うん。あまねはいつもそうだよね…。だから今度は私があまねを救う番。若し何か悩みがあるなら言つて、生徒会に問題があるなら皆で解決しよう!」

あまね「…済まない。もう決めた事なんだ」

丁度話が途絶えると、キバーラは俺の元に戻つて来る。

キバーラ「終わったわ。若しかしたら、まだジェントルーだった時の事を引き摺っているみたいね」

ここね「そんな…!」

パフェのレシピツピ「ピく!ピく!!」

咲夜「あっ、おい!」

ウザツピは会長に接近しようとした。だが……

あまね「君は…。」

もえ「誰と喋ってるの？」

あまね「あ、いや、何でもない」

姿は視認出来たものの、人前である為か気を逸らされた事にウザッピは俺達の元に戻りながらクソ犬に通訳を指示する。

パフエのレシピッピ「ピピピピピ〜！」

パムパム「今通訳は無理パム。パムパム達が喋ったらお客さんが吃驚パム」

パフエのレシピッピ「ピピ、ピピピ！」

コメコメ「コ、コメ…」

頬を膨らまして今度はコメコメに通訳しろと無茶振りを掛けるが、あまりにも早口で一方的に言うが聞き取れず逆に混乱させてしまう。

メンメン「コメコメも無理メン。まだ人間に化けても沢山お話出来ないメン」

ローズマリー「こら。こんなところでわちゃわちゃしないの！」

パフエのレシピッピ「ピピピピピ〜!!」

パムパム「だから…今は無理パムー!!」

ハートの結晶体がローズマリーの手元から離れ、そのまま会長の足元に転がってしまう。

それを会長が拾い上げると、結晶体が反応した。

「一・二」

ローズマリー「今の見た!？」

咲夜「ああ。きつちりとな」

雄大「ハートの結晶体が強く反応したって事は若しかして…！」

あまね「君達…来ていたのか？」

雄大が言い掛けたところを会長に俺達が居た事に気付かれてしまった。

□

Takumi side

拓海「後は牛乳と卵と…ん？あいつは…！」

俺は買い物の途中でブンドル団を目撃する。

塩っぱいおっさんは兎も角、何で同じ学年の海詠がブンドル団なんかと一緒に居るんだ…!?

ソルトルー「珍しいですね。まさか貴方が生身で同行するとは」

透冀「僕なりの気分だ。それよりさっさと済ませようよ」

ソルトルー「せっかちですね。今回は任せましたよナルシストルー」

ナルシストルー「捕まえなくて良いの？それじゃ遠慮なく…トル

ルン・トルルン・ブンドルー！」

フルーツポンチのレシピッピ「ピピピ〜！ピピ…！」

透冀「よし、行くよ」

□

Sakuya side

ローズマリー「変ねえ。さつき光ったのに…」

あまね「これが何か…？」

ローズマリー「ああ、御免なさいね」

あまね「いえ、綺麗な結晶きれいですね」

会長がハートの結晶体を返そうとした矢先に、店内の空気が突然に一変した。

もえ「あれ？」

あまね「如何した？」

もえ「私、いつもフルーツポンチ^れ食べてない？何で此処のフルーツポンチ好きなんだっけ…？」

あまね「ついさつき、その話をしていたじゃないか」

もえ「うう… 大事な事を忘れていた様な…！ちよつと顔洗つてくる」

あまね「もえ、大丈夫か!？」

少し頭を抱える副会長に様子を窺^{うかが}う会長だが、ハートキュアウオツチの警告音が店内に鳴り響く。

ゆい「ナルシストルーかソルトルーが奪ったんだ…」

あまね「ナルシストルー…!？」

らん「食べ物の大それた思出を奪つちやうんだよ！」

あまね「くつ、ブンドル団は又そんな事を…!」

会長がブンドル団に対しての憤りで思わず両手で強く握ると、ハートの結晶体も強く反応する。

ゆい「三人共！」

咲夜「悪いが、その結晶体をお前に預ける」

あまね「えっ…!？」

雄大「それ、成る可く落とさない様にね」

ゆい「ナルシストルー！」

ソルトルー「おや？飛んで火にいる何とやら…」

ナルシストルー「来たか。君達、”1+1”は何になると思う？」

咲夜「小学生でも分かる様な問題出しやがって。答えは、2, だろ!？」

ナルシストルー「そう。二つの道具を足せばもつと凄い奴が生まれる…」

ソルトルー「言い忘れていましたが、ワタクシとゲンムが持つバグ

ヴァイザーⅢは後にセットしたガシヤットの能力を付け足す事も可能。つまりこれが如何いう事か…。お分かりで？」

メンメン「如何いう事メン？」

咲夜「呑気過ぎるぞドラジカ。奴らは…。より強いモットウバウゾーとバグスターを生み出す気だ！」

「大正解」

ゲンムがゲキトツロボットのプロトガシヤットを投げ渡されたソルトルーは白と茶色のライダーガシヤットを取り出す。

ソルトルー「見せてあげましょう。ガシヤコンバグヴァイザーⅢの真骨頂を！」

『グルップ・オン・ノーム！』

ソルトルー『グルップ・オン・ノーム』は、嘗て勇者が懲らしめた巨人が遣っていた小人達から村を守るリアルタイムストラテジーゲーム…。そして『ゲキトツロボッツ』を組み合わせれば、史上初の融合バグスターが生まれる！」

『ガシヤット！ガッシュューン！ガシヤット！』

ソルトルー「出でよ、ワタクシのバグスター!!」

バグヴァイザーⅢに装填したグルップ・オン・ノームのライダーガシヤットをプロトゲキトツロボッツに差し替えたソルトルーはBボタンを押すと二門の砲身から放たれた茶色と赤の光弾が混ざり合い、着弾と同時に散らばったバグスターウイルスが集結させる。

その姿は2mに近い岩の身体を持つ原始人の様な茶色い毛皮の服を来ている大男。

更には赤い強化装甲と大型の右腕アームが装備される。

???'「オラはベリーマン。本来のレベルは20だが、今は装備が追加されて30だべ！」

巨人が足踏みをするアスファルトに罅ひびが入り、俺達の方を見て軽く自己紹介をする。

ナルシストルー「カモン！モットウバウゾー！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー！ウツ、ウババババ…！」

合体モットウバウゾーが誕生したのはいいが、おたまの柄に縛られ

ている杓文字しゃもじが右側に偏って上手く動きを安定出来ていない様だ。

ゆい「確かにいつもと違うけど…」

パムパム「何か変パム」

らん「失敗してない…!?」

雄大「杓文字の籠かごが右側に偏ってるから上手くバランスを保てないんだ」

モットウバウゾー「ウバ…?」

ナルシストルー「あれ？」

王蛇「面白そうな祭りだな。俺達も混ぜてくれよ」

咲夜「浅倉…!」

ローズマリー「兎に角行くわよ。デリシヤスフィールド!」

デリシヤスフィールドに転送された俺達は変身準備に取り掛かった。

□

「コプリキュア・デリシヤスタンバイ!パーティーゴー!!」

□

ゆい「にぎにぎー!」

コメコメ「コメコメ!」

ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□
ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
「「シエアリンエナジー！」」
コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフォツ!？」

□
コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」
メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「「アリシヤスパーティ♡プリキュア！」」

□

「「変身！」」

【カメンライド デイケイド！】

『GUN FORM』

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語り：：始めようか!!」

電王G「お前達倒すけど良いよね？答えは聞いてない！」

クウガ「ゼロから始まる古代のエナジー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は：：俺が守る!!」

デイケイド「全てを破壊し、全てを繋ぐ！」

デイケイド・クウガ「「我ら、仮面ライダー！」」ドカーン！」

【アタックライド イリユージョン！】

□

【カメンライド 龍玄！】

【カメンライド ライブ！】

『ブドウアームズ！龍・砲！ハツハツハ！』

『Precious!Trust us!Justis!（バット！）』

仮面ライダー・イ・ブゥ！」

デイエンドライバーの電子音が鳴り響き、三原色の影が二体のライ

ダーを実体化させる。

龍の顔を連想させる金に縁取られた頭部。スーツの色が鮮やかなエメラルドグリーンを基調とし、ぶどう葡萄を模した中国の甲冑かっちゅうを纏っている。

二体目は蝙蝠こうもりが翼を拡げている様なオレンジ色の複眼を持つライダー。全身は白をベースにしており、ターコイズカラーの銃を手に持っている。

光と闇の人格を持ちながらも正義を貫く『仮面ライダーライブ』と、嘗て実兄に見えざる影を背負わされた『仮面ライダー龍玄』。

主役ライダーと敵対し、闇落ちした者達が意識の無い正義の銃口を俺達に向ける。

デイクイドA「俺はプレシヤス達の援護を、Bとリユウタロスは召喚したライダー二人を、Cと雄大は浅倉とバグスターを頼んだ！」

デイクイドB「任せたぞ」

デイクイドC「お互い様だ。行くぞ！」

「「おうー」」

□

A S I D E

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

ヤムヤム「バリバリカッターブレイズ！」

モットウバウゾー「ウバーッ!!」

ヤムヤム「はにやつ!?弾かれた…!」

プレシヤス「もえさんの思い出を…返せーッ!!」

モットウバウゾー「ウーバーッ!!」

构文字を両翼りょうよく代わりに飛翔するモットウバウゾーはヤムヤムが放ったバリカッターブレイズを弾き、更にはプレシヤスとスパイシーの攻撃を受け止めながら岩壁がんべきまで弾き飛ばす。

デイクイドA「攻撃と防御特化のモットウバウゾーか。確かに厄介だな…」

ローズマリー『皆！』

電王G「もう、マリちゃん！今はこいつらを倒すのが先だよ！」

デイケイドB「ライブと龍玄を召喚されたんだ。フォームチェンジされたら、やたらと倒し難くなるぞ…！」

ナルシストルー「いいぞ。遠慮なくもつとやれ！」

□

B SIDE

俺は今、龍玄と交戦している。ブドウアームズの専用武器である6連式ハンドガン『ブドウ龍砲』のレバー部分『緑玉撃鉄』を引く事で葡萄の実を模した弾倉『龍玉弾倉』に弾丸を生成。更にトリガー部分『龍尾鉄』を引くと銃口部『火炮六連』から一秒あたりに最大百発の弾丸を吐き出す。

上手く転がりながら避け、俺はライダーカードを取り出す。描かれたのはオレンジの兜を被った鎧武者。

デイケイドB「その実、全部輪切りにしてやるよ！」

【カメンライド 鎧武！】

『オレンジアームズ！花道オンステージ！』

頭上から出現したクラックを通じて降って来たオレンジが覆い被さると同時に飛び散った橙色の果汁が纏われるとマゼンタの鎧から紺色の軽装へと変える、被さったオレンジが分割して鎧の形となる。

友人との約束を胸に最後は自ら神になったフルーツ鎧武者『仮面ライダー鎧武』となった俺は、専用武器である『大橙丸』の刀身『カヒノジン』に埋め込まれている『オレンジパワーセル』のエネルギーによる切れ味でブドウ龍砲から吐き出された銃弾を斬り捨てながら突き進んで行く。

一方、ライブのベルト『ツーサイドライバー』から取り外した銃『ラ

イブガン』のトリガー部分『ツーサイドトリガー』を引いて放った光弾を電王は紙一重で避けながら近接し、デンガツシャアのパーツを組み立てながら回し蹴りを鳩尾みぞおちに入れて、銃身に仕立てたパーツ二番から銃弾を放つ。

ライブ「…っ！」

『ジャツカル！コンフアームド！バーサスアーツ！Overdrive！ Power dive！仮面ライダーライブ！（ジャツカル！）』

ライブは装填スロット『バイスタンプスロット』に装填されているバットバイスタンプを取り外しながら新たに取り出したピンクと黄緑のバイスタンプの起動装置『アクティベートノック』を押して印面『ゲノミックスタンパー』をドライバーの左側にある押印式情報入力装置『オーインジェクター』に押印。そのままスタンプをスロットに装填し、トリガーを引く。

頭部が蝙蝠の羽から犬科のピンクの複眼に変わり、胸部装甲の縁取りが黄色から黄緑に変色。

リバイスとは違うジャツカルゲノムにフォームチェンジしたライブは起動力を活かして電王を翻弄する。

電王G「うわあっ!?こいつ、凄く早いよ！」

ウラタロス『リユウタ、交代するね』

『ROD FORM』

電王R「急に変わって悪いけど…僕に、釣られてみる？」

即座にロッドフォームへとフォームチェンジし、刃『ロッドヘッド』をライブガンの銃身を押し返して胸部装甲に突き出す。

距離が空いたところをオーララインで絡め取り、そのまま釣りの要領で掬い上げるがライブは宙を舞う様な挙動で体勢を立て直しながら緑の光弾を放つ。

キンタロス『ウラの字、交代や！』

『AXE FORM』

電王A「俺の強さにお前が泣いた！」

オーララインから解放されたライブのスピードに翻弄されながら

もアックスフォームにフォームチェンジした電王は決め台詞を言い放つ。

ローズマリー『… 右よ！今度は左斜め！』

息の合ったコンビネーションでアックスモードに変形させたデンガツシャーを振り下ろす電王。爪のエフェクトが入っているライブとの鏝迫り合いも電王の方が押して行き、再び距離を開けられる。

ローズマリー『トドメよ！』

モモタロス『だあゝッ！さつきから黙ってたがオカマ！主役はこの俺だ！』

『SWORD FORM』

トドメの一撃を刺そうとライダーパスをセタッチしようとしたが、割り込んだモモタロスによってソードフォームにフォームチェンジする。

電王S「俺、久々に参上！」

ローズマリー『ちよつと!?この姿じゃ余計倒し切れないわ！』

電王S「うるせえ！いいか？戦いつてのは… ノリのいい方が勝つんだよ！行くぜ行くぜ行くぜッ!!」

龍玄「……………」

『ロックオフ！キウイ！』

無鉄砲にソードモードにしたデンガツシャーを振り上げる様子を見ていたのか、俺と交戦していた龍玄はブドウの描かれた錠前の様なアイテム『ロックシード』のボタン式のスイッチ『アンロックリリーサー』を押して解除。

ブドウアームズの鎧と兜が消滅し、腰に巻いているベルト『戦極ドライブ』の左側のホルダーから『L. S. 13』の文字が刻まれているキウイのフロントパネルを持つスライド式のロックシードのアンロックリリーサーを押す。

『キウイ！ロックオン！ハイ〜！』

ドライブバーの中央にある『ドライブベイ』に格納させ、ロックシードの制御回路『スライドシャックル』を押し込む。

ブレード型のスイッチ『カッティングブレード』を降ろす事で輪切

りにした果物の様に上下二つに分かれた表示パネル『シードインジケーター』を露わにさせる。

『キウイアームズ！撃・輪！セイヤツハツ！』

頭上から降って来たキウイの鎧が被さり、輪切りの様に肩装甲として左右に分かれる。

エリマキトカゲの襟を思わせる兜を被っているキウイアームズとなった龍玄は、輪切りにしたキウイを模した乾坤圏『キウイ撃輪』を両手に持ちながら回転させる事でライドブツカーと大橙丸の二刀流を受け流す。

デイケイドB「フォームチェンジか。その様子だとデイエンドのドライバーもそろそろ進化しそうな感じだな」

「フォームライド 鎧武 イチゴ！」

『イチゴアームズ！シュシュつとスパーク！』

目には目を。和風には和風。オレンジアームズの鎧と兜が粒子となって消滅し、新たに苺を模した鎧が覆い被さる。

鎧の肩装甲の形状が異なる鎧武 イチゴアームズとなった俺は両手に持つ苺の苦無『イチゴクナイ』を龍玄の足元に投擲。

苦無が地面に刺さった事で爆発し、龍玄のバランスを崩す。

『ロックオン！一・十・百！イチゴチャージ！』

デイケイドB「クナイバースト！」

龍玄「…っ！」

胸部装甲の『ツブテスリーブ』による素早い動きで距離を詰めながら鎧が銃身となっている黒い刀剣『無双セイバー』の格納ベイ『ドライブランチ』にイチゴロックシードを装填して引き金『ブライトリガー』を引きながら空中に振るうと、刀身部『ハモンエツジ』から生成したイチゴクナイのエネルギー体がイチゴの形に変化させ、そのまま無数のイチゴクナイとなって龍玄の頭上に降り注ぐ。

キウイ撃輪で防御する龍玄だが、それ以外は空きだらけだ。黄色いスイッチ『バレットスライド』を引いてもう一度ブライトリガーを引く。

『イチゴパワー！』

『FULL CHARGE』

電王S「俺の必殺技… パート1ダツシュ！」

デイケイドB「はあぁーッ!!」

ガトリングガンの様に放たれたイチゴクナイを受けた龍玄は消滅。同時に電王もライブを撃破した様だ。

電王S「ふうっ！ やっぱ久々に暴れたらスッキリしたぜ！」

デイケイドB「よしモモタロス、俺達はC達の援護に向かおう。成る可く浅倉を食い止めるぞ」

電王S「言われなくても、俺もまだまだ暴れ足りなかったからな！」
俺達は王蛇と白髭しろひげバグスターと応戦しているCのところへ向かった。

□

C SIDE

デイケイドC「ぐあぁッ!？」

王蛇「デリシヤスフィールドに破壊者の分身は要らない…！」

???「はあッ!!」

王蛇「ぐッ!？」

ベリーマンが起こした地割れでバランスを崩されたところをメタルゲラスの突進で吹き飛ばされた俺にトドメを刺すべく、王蛇はベノバイザーに犀の顔を模したファイナルベントのアドベントカードを装填を阻む者がいた。龍玄とライブを倒して合流を果たしたBと雄大だった。

デイケイドB「こっちは終わった。お前はバグスターに集中しろ」
デイケイドC「悪いな二人共。俺いっつも助けられてばっかだ…」
クウガ「良いんだって。分身だろうとライダーは助け合いだしな
！」

デイケイドC「… そつちは任せたぞ！」

「おう！」

Bと雄大は王蛇とメタルゲラスを惹きつける。これで両者一対一だ。

ベリーマン「成る程な。オラとの一騎打ちで本気を出すという作戦だべか？」

デイケイドC「… ああ。少し俺も本気を出そうと思ってたところだ。お望み通り、本気を出してやるよ！」

仮面の下で目つきを変えながら俺はライダーカードを装填しながらベリーマンに向かって行った。

□

A S I D E

ゆつくりと近付いて来るモットウバウゾーに対し、ライダーカードを装填しようとした矢先にあの時と同じ黒いエネルギー弾が着弾。

同じく駆け付けたジュニラムが背後から近付き、右脚を引つ掛けててんぷく転覆させる。

ヤムヤム「あっ！ブラペとジュニっぺ！」

ジュニラム『雄大ニ「アキノリノトコロニ行ケ」ツテ頼マレタんだ

！』

ナルシストルー「又お前らか…！丁度良い、叩きのめせ！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

起き上がったモットウバウゾーの攻撃と、ブラックペツパーとジュニラムの攻撃が打つかり合う。

□

B SIDE

電王は王蛇を、サゴーズコンボとなつた俺はメタルガラスと交戦しているが、駆け付けたブラックペツパーを見てローズマリーは呟く。

ローズマリー『やっぱり似てるわ…』

デイケイドB「何がだ？」

ローズマリー『…いえ、何でもないわ。先ずは目の前の敵に集中しなくちゃ!』

気を切り替えたローズマリーに応えた俺達は戦闘を続行した。

□

A SIDE

ブラックペツパー「うつ…ぐう…っ!」

デイケイドA「不味いッ!プレシヤス、移動するぞ!」

プレシヤス「うん!」

『フォームライド ウィザード ランドドラゴン!』

『ダンデンドン!ズッドツゴン!ダンデンドツゴン!』

そのまま地面に叩き潰されると予測した俺はプレシヤスを巻き添えにオーロラカーテンを使用してブラックペツパーのところへ瞬間移動し、更にはランドドラゴンにフォームチェンジして杓文字による攻撃を受け止める。

デイケイドA「よお…プリンスさん。プレシヤス達がお前にいつも助けられてるからこつちも恩返ししなくちゃな」

ブラックペツパー「サンk…有難う」

デイケイドA「気にすんな。人間は助け合いだろ?」

一瞬素が出てしまったブラックペツパーを咳込みながら俺達に礼を言う。

ヤムヤム「ヤムヤム達も!」

その隙にスパイシーとヤムヤムが上から攻めようとしたが、背後をちらりと向いたモットウバウゾーの後頭部から放つた無数のエネルギー

ギー弾が降り注ぐ。

ヤムヤム「ふえっ!?おたまからの攻撃く!?」

スパイシー「杓文字だけでも厄介なのに…!」

プレシヤス「これじゃ攻撃する隙がない…!」

デイケイドA「…:…:」

足だけを攻撃しようとしても、頭部によるエネルギー弾の雨を喰らうだけだ。流星にフライ返しノウバウゾーの様には行かないか。

いや、待てよ…: 確か杓文字にゴムっぽいもので縛っていたな。あれを解けば…:!

デイケイドA「…: 大体分かった」

プレシヤス「えっ…:?」

デイケイドA「スパイシー、ヤムヤム。聞こえるか!?杓文字とおたまの繋ぎ目を狙ってくれ!」

スパイシー「それなら私が気を引く!」

スパイシーがメロンパンシールドで防御している間にヤムヤムがカッターブレイズで繋ぎ目を緩くする。

デイケイドA「二人共、今だ!」

繋ぎ目が緩くなっている事を確認した俺はプレシヤスとブラックペツパーに合図を送り、そのまま押し返した。

プレシヤス「1000キロカロリーパンチ!!」

ブラックペツパーが繋ぎ目にエネルギー弾を放って更に緩くし、プレシヤスがカロリーパンチを叩き込む。

モットウバウゾー「ウ、ウバ…:…:!」

デイケイドA「さあて、一発引つ叩きますか」

【アタックライド ビッグ!】

デイケイドA「オラオラオラオラー!ッ!恨めオラー!ッ!」

モットウバウゾー「ウバウゾー!!!」

繋ぎ目が完全に解かれた事に同様するモットウバウゾーの杓文字を巨大化した右腕で持ちながら何度も叩き付ける。

デイケイドA「十分殴った。トドメだ!」

□ 「トリプルミックス！デリシヤスチャージ！」
プレシヤス 「プレシヤスフレイバー！」
スパイシー 「スパイシーフレイバー！」
ヤムヤム 「ヤムヤムフレイバー！」

□ デイケイドA 「仮面ライダーデイケイド！マスクドジャーニーミキサー！ライダー！トランス！ミックス！」

□ 「プリキュア！MIXハートアタック！！」

□ デイケイドA 「ライダー… トランスディメンションスプライス！！」

強化ウバウゾー 「お腹一杯！」
「(ご)馳走(お粗末)様でした！」
フルーツポンチのレシピッピ 「ピピ〜！」

□

プレシヤス「おかえり」

解放されたフルーツポンチ個体がプレシヤスのハートキュア
ウオツチに格納される。

ナルシストルー「ふん。まあ、コツは掴んだ…ん？」

捨て台詞を残したナルシストルーはデリシヤスフィールドを後に
した。

ヤムヤム「やな感じ！」

プレシヤス「何とか浄化出来たけど…」

スパイシー「危なかった…！」

デイケイドB「ナルシストルーはあの時、『次は覚悟しておけ』と呟
いていた。今日の戦いはまだ終わっていないという事が…？」

デイケイドA「その様だな」

デイケイドC「あの捕獲箱の左横にドラゴンレーダーみたいな機能が
備わっていたけど…若しかして、次はパフェのレシピツピが狙わ
れる可能性が高いって事か!？」

デイケイドA「…そう云えば、ウザツピが現実世界に居たまま
だった！不味いぞ…雄大、浅倉は!？」

クウガ「今は撤退した。まあ、あいつの事だ。山海食堂の件の様に、
又お客さんを巻き込みながらも俺達を殺しにやって来るだろう」

ブラックペツパー「ヤツベ。買い物途中だった…！」

用事を思い出したブラックペツパーがそう呟きながら去って行っ
た。お前、絶対品田だろ。

プレシヤス「お礼したかったのにな…！」

デイケイドA「そーいやB。白い髭のバグスターは如何した？ハー
トのアイテムは会長に預けてるが…」

デイケイドB「ああ。こいつか？ちよつと本気を出したら『もう悪
い事しねえだ』って急に乞うたから許してやった」

ベリーマン「流石のオラもお手上げだ。煮るなり焼くなり好きにす
るべ！」

デイケイドC「何言ってるんだよ。お前も人に優しい一面を持てる大

男だろ？そんな事でよくよすんな！まあ、お前が又暴れる様だったら俺達が倒すまでだけど」

ベリーマン「ひええ〜！それだけは勘弁してけろ〜!!」

こうして、本気を出したCによって改心したベリーマンは善玉バグスターとして俺に付き従う事となった。

□

Sakuya side

フルーツパーラーの外で俺達は会長を呼び出してハートの結晶体について話し合っている。

あまね「ほかほかハートの結晶体…？」

雄大「恐らく、それが反応してるといふ事は君が『プリキュアになる素質がある』って、マリさんの憶測なんだ」

「「ええっ!？」」

パムパム「四人目のプリキュアパム!？」

メンメン「メン!」

コメコメ「コメ〜!」

あまね「まさか…!」

それを聞いて会長は驚きの声を上げる。

咲夜「ソルトルーや王蛇バグスターと云った新たな敵が増えて、ブンドル団の戦力は更に増している。これから先、色々な困難に巻き込まれると思うが俺達と一緒に戦ってほしいんだ。レシピツピを…この街に居る皆の思い出を守る為にも!」

パフェのレシピツピ「ピピピ、ピツピピ〜!」

俺の言葉を聞いてウザツピが会長の周りを飛び回る。

パムパム『あまねならワタクシが文句なくてよ!』って言ってるパム!」

メンメン「一緒にレシピッピを守るメン！」
コメコメ「コメ！」

あまね「『レシピッピを守る』…？」
パフエのレシピッピ「ピッピ！」

だが、人の心はそう簡単には動いてくれない。

会長は自分の使命を呟くと、ハートの結晶体をローズマリーに突き返した。

〈ED曲『前島真由／No Man's Dawn』〉

あまね「…済まない。私にはその資格がない」

ゆい「あまねさん、如何して…？」

あまね「良かったら、中で話さないか？」

□

T O U K I S I D E

ソルトルー「本当に彼らを始末するのでしょうか？」

透糞「…ああ。僕は僕なりにやらなくちゃいけない事があるからね」

王蛇「此処かあ、次の祭りの場所は…？」

ゲンム「…」

僕達は次の戦いの準備として待ち伏せしていると、ナルシストルーが持っていた捕獲箱のレーダー機能が強く反応する。

ナルシストルー「こんなに早く次を試せるなんて…付いてる」

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア　く破壊者の食べ歩きく
あまね「私は・・・私を許せない！」

ナルシストルー「とくとご覧あれ！桁違いにパワーアップしたモツ
トウバウゾーの強さを！」

デイケイド「お前の中にお前は居た筈だ!!」

プレシヤス「明日は・・・どんな自分になりたい？」

あまね「私は・・・！」

デイエンド「これが僕の答えだ。ナルシストルー」

バアンツ！

デイケイド「レグレット!!」

第十八品：私、パフエになりたい！輝けキュアファイナーレ／僕の行
く先は僕が決める！破壊者の怪盗の最強コンビ

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十八品：私、パフエになりたい！輝け！キュアフィナーレ！／僕の旅の行く先は僕だけが決める！破壊者と怪盗の最強コンビ！！

□

Sakuya side

先程会長に店内で話さないかと言われたが、俺は別の場所で話す事にした。

ゆい「咲夜君、さつきからドアで立ち止まってるけど、如何かしたの？」

咲夜「しっ！もうちよつと静かにしてろ」

俺は声を掛けるゆいを制止させながらライダーパスを左手に持ちながら時計を見る。

咲夜「……よし、今だ！」

15時15分15秒と、同じ時計の数字が並んだ瞬間にドアを開けた。

其処には空が七色に輝く砂漠でデンライナーゴウカが停車していた。

あまね「何だ？此処は……」

「???」あつ、アキちゃん。久しぶり〜！早速だけどコーヒー如何いかが?」
咲夜「ナオミさん。今の俺は咲夜だつて何度も忠告してるでしょう？まあ、今回はこっちで話がしたいと思ひまして……」

未来風の制服を着ている女性乗務員のナオミさんは、無邪気な笑顔を
を見せながら俺達をデンライナーに招待してくれた。

勿論、ライダーパスは見せている。一応礼儀だからな。

自動的にドアが開くと其処にはタロスズやオーナー、白と黒の服を
着ている女の子 コハナが居た。

コハナ「あれ、アキノリ？あんた、さつきデンライナーに乗ったば
かりでしょ？」

咲夜「悪い、直ぐに話を終わらせたいんだ。ナオミさん、七人分の
コーヒーお願いします」

ナオミさんがコーヒーの上に俺達のイメージカラーに合わせたク
リームを上から派手に盛り付ける。

ウラタロス「あれ？あのバグスター、あの時のだよね？」
リュウタロス「ホントだ！何で何で!？」

モモタロス「てめえ、妙な真似したらただじゃおかねーからな？」

咲夜「大丈夫だモモタロス。こいつはもう俺達に敵意はない様だ」
そう。Cはあの時、Jにカメンライドしてジャンボフォーメーション
でベリーマンを一発で捻じ伏せてみせたのだ。

やっぱジャンボフォーメーションは伊達じゃないな。色んな意味
で。

ローズマリー「あら、クリーム山盛りね。とても可愛いわ！」

ナオミ「ふふつ。有難う御座います！それでは端と召し上がつて
下さーい！」

らん「これって飲めるのかな……？」

あまね「わ、割と派手だな……」

モモタロス「つべこべ言わずさつきと飲め。ナオミのコーヒーは美
味いぞ？」

咲夜「モモタロスの言う通りだ。まだ食った飲んだ事もないモンに
決めつけはなしだからな」

デンライナーのテーブルに置かれたコーヒーを見て全員が渋そうな顔をするが、モモタロスと俺の一言でゆい達は試しにコーヒーを一口飲んだ。

ゆい「クリーム山盛りだけど、デリシヤスマイル〜!!」

咲夜「うん、美味い」

ここね「美味しい……………!」

らん「クリームの甘味とコーヒーの苦味が合わさった究極のフュージョン…………… 甘〜い露天風呂に入った気分〜!!」

ベリーマン「甘い果物の味を思い浮かべるのも悪くはないべな」

ナオミ特製コーヒーのレシピツピ「ピピピ〜!」

らん「あっ!新しいレシピツピ〜!」

デンライナーの食堂内にほかほかハートが満ち溢れ、ナオミさん特製コーヒー個体のレシピツピが現れると華満はハートキュアアウトチで連写する。

ローズマリー「ところで咲夜。何で、あまねさんと話したい場所を態々此処にしたの?」
わざわざ

雄大「店の中でプリキュアの事を誰かに聞かれたら不味かったんだと思います」

ローズマリー「そういう事だったのね……………」

雄大がゆい達をデンライナーに乗せた理由を察する。

咲夜「なあ会長、生徒会長を辞退するって言ったのはジェントルーになった事と関係があるのか?」

俺の問い掛けに、既にクリームが溶けていた会長のコーヒーカップに波紋が広がる。

あまね「私は余りにも多くのレシピツピを、人を傷付けた。レシピツピに関わって言い訳がない……………」

ゆい「そんな…………… それはジェントルーがした事だよ!」

あまね「分かってる!!分かってるんだ。でも、頭でも分かっているもジェントルーの犯した罪が自分の肌に染み付いている様で忘れられない。私は…………… 私を許せない!!」

会長が吐露したのは自分の意志とは関係なく、怪盗としての使命を

無理やり与えられ、心も体も蝕まれ、徹底的に自由を奪われ、自分自身も失おうとしている様な重い言葉だった。

会長には何の咎めもないが、自分のしてきた事は確かに許されないだろう。そんなトラウマから解放するには、誰かの救いの手が必要だからな。

「ここね「若しかして、だから生徒会長を辞めようよ……？」」

あまね「ああ。私では生徒の代表に相応しくない。プリキュアと仮面ライダーはレシピツピを守る唯一の存在、そしてほかほかハートはお料理への感謝の気持ちから生まれる……そんな神聖な物に相応しい筈がない」

咲夜「そうか。だが、本当にそれでいいのか？」

あまね「えっ……？」

咲夜「お前は幼い頃、人々を笑顔に出来る様な存在になりたいと願った。違うか？それとも、お前は人々を笑顔にする事を諦めるのか？」

指摘された会長はそのまま去って行こうとした矢先、ハートキュアウオツチの警告音がデンライナーの食堂内に鳴り響いた。

液晶画面にはフルーツポンチ个体とウザツピが映っていた。会長はハートの結晶体を持っているから何の影響もなかった。

ローズマリーの言葉で我に返った俺は、直ぐにデンライナーから降りてレシピツピが奪われた場所へ赴いた。

オーナー「その前に、一つだけお渡ししたい物があります」

咲夜「渡したい物……？」

ゆい「ナルシストルー！」

咲夜「ソルトルー！」

俺達の声で体を向き直すナルシストルー達。社長さんと浅倉も居るな。

ソルトルー「貴方方とはよく会いますねえ。若しや、ワタクシ達に興味があるのかと？」

「んな訳ないでしょ!?!」

ナルシストルー「おやあ？誰かと思えば、ジェントルーじゃないか。同じ裏切り者のベリーマンが居ないのはちよつと不自然だけど、まあ良いや」

あまね「ナルシストルー：。レシピッピを返してくれ！」

俺達が対峙している間に後を追っていた会長がナルシストルーにレシピッピを返す様に堂々と言う。

ソルトルー「ふん。返してと言われて返す馬鹿が何処どこにいるというのです？」

ローズマリー「思い出を奪われていない：。まさか、あの子を守っているの!?!」

ゲナム「丁度いい。君達にも私が隠し持っていた力を見せていなかったな」

ローズマリー「隠し持っていた力：。？」
『ガッチョーン！』

突き放したハートの結晶体が会長を守っている事を示唆するローズマリー。

ゲナムはガシャコンバグヴァイザーと黒いベルト『バグスターバツクル』を重ね合わせ『バグルドライバー』に合体。

ゲーマドライバーと付け替えて不気味な変身待機音が鳴り響く中、白いガシャットを右側に突き出す様にプレイングスターターを起動する。

『デンジャラスゾンビィ：。！』

ナルシストルー「得とご覧あれ。桁違いにパワーアップしたモット

ウバウゾーの誕生だ！混ぜれ、モットウバウゾー!!」

ゲムム「グレードX^{テン}……」

『ガシヤットー・バグルアアア……ッブ!』

ガシヤットを裏返し、ガシヤットスロットに差し込んで左側の赤いボタン『バグルアアップトリガー』を押すゲムム。

液晶画面『ハイフラッシュモニター』には新たな姿を象徴とされる赤い絵柄が浮かび上がる。

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

『デンジャー！デンジャー！(Genocide!) デス・ザ・クライシス！デンジャラスゾンビ！(Wooooo……!)』

誕生したのは前に戦った寸胴のモットウバウゾーかと思いきや、幾つかの相違点があった。

鬼の様な角、ナルシストルーのイメージカラーに沿った角張った仮面。そして何より注目すべきポイントは右腕には泡立て器が付いている事だ。

ゲムムの前に這い上がるゾンビが映っている等身大のパネルが現れ、背後ではゲムムを黒い霧で包み込んでいる。

数秒足らずにゾンビのパネルを突き破ったのは、刺々しい白い左手。パネルが完全に破壊されると、ゲムムは新たな姿となっていた。

骨を連想とさせる左右非対称の白い装甲。赤いゴーグルの左側は割れており、さながらオッドアイの様にも見える。

ゲムム「私は……仮面ライダーゲムム レベルX^{テン}」

ナルシストルー「随分と刺々しい姿になったなゲムム。如何だいジェントルー？ブンドル団だった頃を思い出した？」

あまね「くっ……!」

ナルシストルーの言葉に会長は言葉を失う。ゲムムがいきなりレベルXになるなんて、高難易度にも程があるぜ……!

咲夜「お前な、トラウマ^{よみがえ}蘇らせるのも程々にしろよ……!!」

ゆい「あまねさんはジェントルーじゃない！マリちゃん!!」

ローズマリー「ええ！デリシヤスフィールド!!」

ナルシストルー「……せつかくだから、もつと楽しませてよ」

「!!」

デリシヤスフィールド発動直前にモットウバウゾーの伸縮した左腕が会長を襲った。

ローズマリー「嘘……!!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー」

ゆい「あまねさん！」

俺達が転送すると、ブンドル団側も転送してきたが、その左腕には会長が人質に取られていた。

ゆいが名前を呼び掛けた直後に銃声が鳴り響く。現れたのは、俺達のクラスメイトである海詠透冀。

右手にはシアンカラーの変身銃 ゼロデイエンドライバーVer.

0.3が握られていた。

ナルシストルー「やつと来たか。デイエンド」

『!?!』

ゆい達は衝撃の言葉に驚愕する。

らん「ほえっ?!海詠君?何で此処に居るの!?!」

ローズマリー「ちよっと待って!そのドライバー、デイエンドが持っていたのと同じよ!」

らん「ホントだ!それじゃあ、まさか……!」

透冀「御免ね、今まで騙だましてて。でも、こうでもしなくちゃ……この世界のお宝が手に入らなかつたから」

ゆい「そんな……!」

ここね「海詠君がデイエンドだった何て……!」

ローズマリー「皆、変身よ!」

□ 「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！」

□ ゆい「にぎにぎ！」
コメコメ「コメコメ！」
ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□ ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□ らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□ 「「シエアリンエナジー！」」

コメコメ「コメ〜！」

パムパム「テイステイ！」

メンメン「ワンターン！」

咲夜「ブフオツ!？」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「「デリシヤスパーティ♡プリキュア！」」

□

「「変身！」」

『SWORD FORM』

電王S「俺、参上！」

クウガ「口上はカットだ。行くぞ！」

□

プレシヤス達はモットウバウゾーを、電王は王蛇を、そしてクウガはゲラムを相手に向かつて行く中、俺は海詠と対峙する。

透冀「こういう雰囲気も悪くはないね。でも、そんな事は長く続かない……。」

咲夜「デリシヤスファイールドに入った状態でオーロラカーテンを潜ってみたが、やはりデリシヤスファイールドの中でしか瞬間移動出来なかった」

透冀「試したんだ。つまりそういう事だね？」

咲夜「そんな感じだ。話はこれくらいでいいか？とつととやろうぜ」

俺は未装着状態のゼロデイケイドライバーにライダーカードを装填しながらオーロラカーテンを展開。

海詠もそれに合わせてゼロデイエンドライバーにライダーカードを装填させながらフォアエンドを前に突き出す。

【カメンライド……】

咲夜「変身！」

透冀「変身……」

そのまま俺達は、敵意の目を向けながらオーロラカーテンを潜り抜けた。

NO SIDE

プレシヤス達の変身が完了したと同時にデイケイドオーズ ガタキリバコンボの分身三体が駆け付けにきた。

モットウバウゾー「モットウバウゾー…！」

ガタキリバB「何とか間に合ったな」

プレシヤス「ガタキリバ！咲夜君は？」

ガタキリバB「Aは今、デイエンドと交戦中だ。俺がお前達のサポートをする。CとDは雄大達を頼む」

ガタキリバC「いよっしゃ来た！」

ガタキリバD「久々の戦いだ。張り切って行くぞ！」

モットウバウゾー「ウバーツ!!」

モットウバウゾーの展開した右腕からエネルギー波を避ける六人。

瞬時にBはプレシヤス達のサポートに向かい、CとDは王蛇達と交戦中のクウガ達のところへ向かって行った。

スパイシー「生徒会長を助けないと…！」

ヤムヤム「よおし…バリバリカッターブレイズ!!」

ヤムヤムが放った電撃の空刃の一つがモットウバウゾーに直撃し、もう一つが地面に当たった衝撃で砂塵さじんが捲かれるが、人質になっていたあまねにも被害が加えられてしまった。

ガタキリバB「ヤムヤム。下手に攻撃すれば会長にも危険に晒されるぞ」

プレシヤス「そうだった！」

ヤムヤム「じゃあ、如何すれば…!?ひよええっく!?」

モットウバウゾーが背後から右腕から放たれた伸縮自在の攻撃を間一髪で避ける。

スパイシー「ピリっつてoへヴィーサンドプレス！」

モットウバウゾー「ウバ！」

スパイシー「えっ!？」

スパイシーがサンドプレスで横からモットウバウゾーを拘束しようとするが、あまねを盾にした事で挟み撃ちにする直前に解除した。ナルシストルー「何でやらないの?ジエントルーへの恨み、晴らせ

るのに……」

ガタキリバB「俺達は晴らす気なんてさらさらない！」

「フォームライド ウィザード ハリケーンドラゴン！」

『ビュービューー！ビュービューービュービューー！』

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

身体を動かしながら寸胴すんどうの蓋ふたを投擲とうてきするモットウバウゾー。プレシヤスを弾き飛ばした寸胴をスパイシーが蹴り落とした。

モットウバウゾー「ウバーツ！」

ガタキリバB「不味いッ！」

『アタックライド ビッグー!』

瞬時にモットウバウゾーは伸縮した右腕をビッグの能力で右腕を巨大化させたガタキリバBが寸胴で防ごうとしたが蛇の様に追尾させ、そのままスパイシー共々吹っ飛ばした。

ヤムヤム「はあぁーっ!!」

その隙に背後からあまねを救出を図るヤムヤムだが、右腕から放たれたエネルギー弾を食らってしまう。

ヤムヤム「……えっ?」

ベリーマン「大丈夫だべか?お嬢さん」

ヤムヤムを庇ったのは、改心したばかりのベリーマンだった。

彼も何かしらの方法でデリシヤスフィールドに転送されていたのだ。

ベリーマン「まだ若くてめんこい女子おなごに手エ出すんなら、オラが相手になるべ！」

ゲナム「そうか……私のバグヴァイザーの中に入っていたか。だが、君は私達を裏切った。此処で排除する」

『ガシヤコンスパローー!』

ベリーマン「うおおおおーっ!!」

ゲナムのガシヤコンバグヴァイザーに潜んでいた事を察したゲナムはベリーマンを静粛対象とすると、弓モードにしたガシヤコンスパローのエネルギーの矢を放ちながら向かって行く。

ガタキリバC「不味い、ベリーマンが……!」

クウガ「ジュニラム！」

ジュニラム『任せテ！』

王蛇「させるか…！」

『ADVENT』

クウガとガタキリバCはエビルダイバーの相手をジュニラムに任せながらゲムムの方へ向かおうとするが、王蛇が召喚したベノスネーカーが尻尾で薙ぎ払ってタイタンフォームになったクウガを締め付け、メタルグラスがCに突進を仕掛けてくる。

ジュニラムはクウガを捕縛したベノスネーカーに特攻を仕掛けるが、直後にベノスネーカーが吐いた毒液で機動をずらされ、エビルダイバーの鱗ひれによる斬撃をもろに喰らってしまう。

ジュニラム『雄大！クソツ！オマエ邪魔ダ！』

ジュニラムは溶解されたところを我慢しながらベノスネーカーに特攻していく。

一方、ベリーマンは赤い右腕で特攻しながらゲムムに左腕を振り下げるもゾンビの様な動きで躡かわされてしまい、左脚を引つ掛けられて仰向けに倒れたところを死体蹴りされてしまう。

ガタキリバD「らああッ！」

ゲムム「ふんッ！」

『スッパーン！』

ガタキリバD「ぐうっ!？」

トドメを刺そうとゲムムはAとBのボタン『アタックラッシュユパッド』を同時に押そうとした矢先にDのカマキリソードによる不意打ちを受け止め、鎌モードにしたガシヤコンスパローの二刀流で斬撃を与えた。

ゲムム「絶望と共に、闇に追放してやる…！」

『クリティカルデッド！』

アタックラッシュユパッドのABボタンを同時に押し、Bボタンを押す事でゲムムの足元に黒いゾンビの幻影が多数出現し、Dを取り囲もうと少しずつ近付いてくる。

直前に決死の覚悟で身を投げ出したベリーマンがDを庇う形で投

げ飛ばし、自らが身代わりとなってゾンビの幻影に取り囲まれし
う。

ガタキリバD「おい… お前！」

ベリーマン「とてもみじけえ間だったが、オラにとっては… あ
んでは命の恩人だったべ」

自分を助けてくれた恩人への感謝の言葉を告げた刹那、ベリーマン
は断末魔と共に爆発に巻き込まれた。

暫く経って爆発が収まると其処にはゲンムの姿が立ってはいたが、
ベリーマンの姿は何処にも見当たらなかった。

ガタキリバC「ベリーマン!!」

ガタキリバB「嘘だろ… おい!」

ナルシストルー「へえ。裏切り者にしては良い散り様だったな」
ソルトルー「所詮は善人になり損ねただけに過ぎなかった決壊品で
したね。一応データは回収しておきましょう」

ガタキリバD「や、野郎…!」

あまね「止めてくれ!!」

『!!』

ベリーマンの散り様を嘲るナルシストルーとソルトルーがデータ
の残滓を回収する様子に、堪忍袋の尾が切れたDが憤慨する直前にあ
まねは絶叫する。

あまね「お願いだ… もう嫌なんだ! 私のせいで誰かが犠牲になる
のが…!」

プレシヤス「あまねさん…!」

目の前で犠牲になった絶望を思い知ったあまねは自分の心情を吐
露する。周囲の人々を笑顔にしようと生きていた筈が、ジェントルー
として自分が周囲を苦しめ傷付けた事。

そんな自分を助ける為に、又誰かが犠牲になるのが怖くて耐えられ
なかったのだ。

デイケイドA「会長！」

デイエンド「行かせないよ」

デイケイドA「寧ろ行かせろオツ!!」

デイクライドの姿に戻ったAがプレシヤス達の方へ向かおうとしたところをディエンドの銃撃をオーロラカーテンで防ぎながらプレシヤス達と合流する。

其処には地獄絵図と呼ぶべき光景が目に見えた。

モットウバウゾーに人質を取られたあまねを見て立ち竦むプレシヤス達、王蛇とゲナムに圧倒されるクウガと電王。

ナルシストルー「ブンドル団だった癖に何を今更……！」

ソルトルー「ワタクシ達が此処で観戦している間に絶望の味がたっぷりと染み込んできた様だね。ジェントルーさん！」

あまね「……その通りだ、私は皆を傷付けた。ずっと皆を笑顔にしたいと思つて……生きてきたのにつ……！」

ナルシストルー「はっ！つまらない生き方だな！」

デイクライドA「ナルシストルー!!何度も何度も、お前らは人の心を踏み躪りやがって……！お前の言っていた言葉、そっくり言わせてもらうぞ。俺は今でも……虫唾が走りそうだ!!」

「フォームライド オーズ ラトラーター！」

『ラツタ・ラツタ・ラトラーター！』

あまねの人生を侮辱するナルシストルーにAの堪忍袋の尾は完全になぶつ切れた。

黄色いメダルのオーラが並び立ち、彼をオーズの新たな姿へと変える。

ライオンの立髪を想起とさせるパーツと青い複眼を持つ頭部、タトバコンボと同じくトラクローが備えられている胴体、そしてチーターの身体の模様を施した脚部。

嘗て800年前の王が光熱放射で邪魔な湖を蒸発させて進軍し、更には消音スキルを効果的に使用する事で敵国に侵入して国王を暗殺したとされる『オーズ ラトラーターコンボ』。

デイクライドA「つまらない人生なんてこの世の何処にあるってんだ！リボルスピッキック!!」

オーズ ラトラーターコンボとなったAはモットウバウゾーの右腕の攻撃に対して、自身の激昂を込めた連続蹴りを繰り出す。

プレシヤス「そうだよ。そんな事ない！」

ヤムヤム「生徒会長の想いを馬鹿にするなーっ!!」

プレシヤスとヤムヤムが加勢するも纏めて吹き飛ばされ、右腕による攻撃を上空にいたスパイシーが防ぐ。

スパイシー「生徒会長の想いは真っ直ぐ！」

ローズマリー『そしてお料理も愛してる！レシピツピ愛されてるのがその証拠よ！』

クウガ「彼女は誰かの笑顔の為に使命を全うする事だって出来る強い女の子だ！」

ジュニラム『ソレヲ^{ケナ}貶ス才前ダツテ、ツマラナイ人生ヲ送ツテタンジャナイノ？マルデ人ノ事言エナイネ!!』

クウガ「おいジュニラム。それを言うのはまだ早いぞ」

ジュニラム『エツ？ソウダツタ？』

ナルシストルー「相変わらず虫唾を走らせるカブトムシだな。良いだろう、お前を始末するのは後だ。モットウバウゾー！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー！」

ジュニラムに対して静かな怒りを見せながらモットウバウゾーに攻撃の指示を下す。

寸胴の中に赤い液体が溜まって行き、それを右腕でかき混ぜると熱度が増して行く。

ナルシストルー「合体タイプの本気、見せてあげるよ！」

モットウバウゾー「ウバ：：！モットウバウゾー!!」

熱度が増した事で身体が赤くなったモットウバウゾーはエネルギーを溜め込んだ勢いで噴火した火山弾の雨をプレシヤス達は後退して避ける。

プレシヤス「地面が溶けた!？」

デイケイドA「溶岩だからな。喰らえば骨身残さず溶かされるぞ！」

ヤムヤム「マシマシにデンジャラス！」

メンメン「でも、今までにない攻撃だったメン：：！」

パムパム「蒸し焼きにされそうパム〜！」

デイケイドA「いや、もうデンジャラスの領域は越してるし、蒸し焼きにはならないぞ」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

今度は右腕で火山弾を飛ばすモットウバウゾー。Aはすかさずライダーカードを装填する。

【フォームライド ウィザード ウォータードラゴン!】

『ザバザババシャーん!ザバンザバーん!』

【アタックライド スペシャル!】

【ブリザード!】

デイケイドA「ブリザードテイル!」

Aはブリザードの冷気を纏わせたドラゴテイルで火山弾を薙ぎ払った。

プレシヤス「早くあまねさんを助けなくちゃ...!」

スパイシー「でも、如何どうやって...!?

ガタキリバB「大丈夫だ!」

『!』

あまねを如何やって助けるか悩んでいたが、ゲンム達と交戦していたガタキリバ達が圧を掛ける。

ガタキリバC「何思い止まってんだよ!今此処で止まったら会長は如何なんだ!?!」

ローズマリー『自分を信じて、お互いを信じれば道は開くわ!』

電王S「粹いきのいい事言ってくれるじゃねえかオカマ... おい雄大、カブト小僧!まだやれんだろうな!?!」

クウガ「勿論!」

ジュニラム『出来テルケド、一ツダケ言ワセテ。クワガタ!』

ガタキリバD「浅倉達は俺達が如何にかする。だからお前らは会長を助ける事だけに集中しろ!」

「ニうん(ああ)!」

ローズマリー達の激励を受けて早速四人は作戦通りに動く事にした。

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

スパイシー「はああつ！」

モットウバウゾー「ウバツ！」

ナルシストルー「はあ!？」

モットウバウゾーが再び飛ばした火炎弾をAがブリザードテイルで薙ぎ払う。

上空からスパイシーが空きっぱなしの頭頂部を防いだ。その状況にナルシストルーも驚かすにはいられなかった。

スパイシー「シンデレラフィット！」

デイケイドA「敢えて言うなら雪の女王フィット！」

ヤムヤム「ホワチャー!!」

モットウバウゾー「ウバ!?ウババババ…！」

続けてヤムヤムがモットウバウゾーの動きを拘束させる。これはジェントルーとの決戦前に編み出した技だ。

「フォームライド フォーゼ ファイヤヤー！」

プレシヤス「あまねさん！」

デイケイドA「会長！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー…!!」

ヤムヤムライズを辿ってプレシヤスとフォーゼ にカメンライドしたAは人質になっている会長を解放しようと救出を図るが、拘束を解こうとするモットウバウゾーが抵抗すると体の温度が上昇する。

コメコメ「あっちゅいコメ〜！」

デイケイドA「けっぱれコメコメ。もう一踏ん張りだ！」

コメコメは上昇していく温度に苦しそうな声を上げる。「コップ等小さな容器一杯200mlの水と、21ペットボトル一杯の水とどちらが早く沸騰するか」と聞けば理解出来る問題だ。

あまね「プレシヤス、デイケイド、もういい。君達が私の為に怪我をする必要はない！」

デイケイドA「お前はそう思ってるがよ… 生憎、僕… 俺達はタチが悪いんだ。大体こんな愚か者でも、転んで怪我してみないと分からないものだろ!？」

プレシヤス「あまねさん優しいね。だからこそジェントルーだった

事、許せないんだよね？」

ナルシストルー「ふん。無駄な事を…。モットウバウゾー、とつとと振り払っちゃいな」

あまねの心が一瞬にして揺らぐが、ナルシストルーの指示でモットウバウゾーの蓋から溶岩が溢れ出ている。

パムパム「二人共、急ぐパム！」

デイケイドA「分かっているぜクソ犬！後少しなんだ…。後少し…!!」

あまね「頼む…。逃げてくれ二人共!!」

プレシヤス「お婆ちゃん言ってた…。『昨日食べた物が今日の自分を作る、今日食べた物が明日の自分を作る』！過去は変えられない…でも！未来はこの瞬間から作っていけるんだよ！」

デイケイドA「お前の中にお前は居た筈だ！心の奥底に…。必死で夢を叶え様としていたお前が!!」

あまね「…！」

プレシヤス「あまねさん…明日はどんな自分になりたい？」

デイケイドA「はつきり答えを言いやがれ…！」

生徒会長 菓彩あまね!!!」

あまね「私は…。私は！皆を笑顔に出来る…。…。パフェの様な人になりたいっ!!」

デイケイドA「…。その言葉を待っていた！ローズマリー！」

ローズマリー『ええ!』

「ファイナルフォームライド デ、デ、デ、電王!」

自分のやりたい事を思い出したあまねは感極まりない涙を流しながら叫ぶ。

仮面の下で笑みを浮かべたAはデイケイドの姿に戻って、電王のファイナルフォームライドのカードを装填する。

電王S↓モモタロス「おいおい、またかよオ!」

ローズマリー「とうっ!うおおおーっ!!」

ファイナルフォームライドにより収納された電王の頭部から飛び出したローズマリーは、器用な手先でモットウバウゾーをくすくす擦り始めた。

ナルシストルー「何だあ!」

ソルトルー「ほう…意外ですね」

モットウバウゾー「ウウ…ウへへ…ウバアツハハハ…!」

デイケイドA「ローズマリーに続けえええッ!!だりやあああッ!!」

遂にモットウバウゾーの手の内から解放されたあまねをお姫様抱っこするA。

拘束が解除され、メロンパン型の盾ごと噴火による攻撃が再開される中、ローズマリーの胸ポケットからハートの結晶体が飛び出した。

挿入歌『前島麻由／No Man's Dawn』

ナルシストルー「何だあれは…!」

その発した光は火山弾を防ぐと同時にあまねを包み込んだ。

□ ふと目を開けると、あまねは謎の空間に居た事に気付く。

あまね「あの時の想いがこれを…!?!」

過去がフラッシュバックし、パフェのレシppiと約束を交わした事を思い出し、自分の思いでハートの結晶体を生み出していた事を知ったあまね。

あまね「お前は…キバーラ!?如何して此処に…?」

キバーラ「ハートの結晶体が光つたのを見計らって貴女の髪の中に入ったのよ。如何も貴女の事が心配で…」

あまね「そうだったのか…」

謎の声の正体はキバット族のキバーラ。彼女もベリーマンと同じく密かにデリシヤスフィールドに侵入しており、その後はタイミングを見計らってハートの結晶体が光を発する直前にあまねの髪の中に潜んでいたのだ。

あまねはキバーラをハートの結晶体と共に両手で掬すくいながら問い掛けた。

あまね「そうだな…キバーラ。こんな私だが、力を貸してくれないか?」

キバーラ「力は、合わせる、ものよ。人間も仮面ライダーも、互いに助け合って生きていけないと。そんな事よりも、早くナルシストルーをギャフンと言わせるのが先でしょ?」

あまね「力は合わせるもの、…か。本当に頼もしい仲間を持つたな」

キバーラ「ふふっ。ありがとう!」

談笑するあまねの気持ちに応えたのか、ハートの結晶体が衣を脱ぎ捨てる様に變化した。

光が天に昇り上がり、周囲に花卉が舞い散る。

あまねの手元にはイチゴやブルーベリー、パインやメロンなどのフルーツの装飾が施されているハートキュアウオッチが握られていた。

プレシヤス「あまねさん……！」

ローズマリー「綺麗……！」

あまねのハートキュアウオッチから発する虹色の輝きに呆気を取られるローズマリー。

プレシヤスは明日へ進む決意をした彼女に喜びの声を上げる。

デイケイドA「やはりローズマリーの目に間違いはなかった。會長、覚悟を決めたんだな！」

あまね「ああ。私はもう目を逸らさない。自分の過去からも……自分の願いからも……そして、お前達の悪事からも！」

ナルシストルー「その目、気に入らないな……ジエントルーの綺麗事は分かったが、そろそろお前の意見も聞かせてもらおうかデイエンド。ジエントルーを始末しろ。奴をプリキュアにさせるな」

デイエンド「そうだね。僕達を裏切った罪は……死んで償ってもらわなきゃ」

ナルシストルーに指示されたデイエンドはプレシヤス達の前に立ち止まり、デイエンドライバーのフォアエンドを下げて、ファイナルアタックライドカードを装填し、そのままフォアエンドを親指で突き出す。

「ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイエンド！」

『!?!』

「デイエンド「……」」

そして砲身を胸部装甲に突き付けた。後はトリガーを引く事で自害する……

事はしなかった。ローズマリーが自害するのかと勘違いして駆け出そうとしたローズマリーに合わせて手首をずらし、銃身『ブツカーマズル』を左脇の方へと持って行きながらナルシストルーが立っている岩壁にエネルギー波を放ったのだ。

ナルシストルー「なっ!？」

ナルシストルーは間一髪で岩壁から離れる。

ナルシストルー「何の真似だデイエンド!遂に目元が狂ったか!？」

デイエンド「目元が狂ってるのはお前の方だろ?」

ナルシストルー「この口調は……まさか……!」

デイケイドA「そのまさかだよ」

焦燥するナルシストルーに少し変わった態度と口調で話すデイエンド。

二人が変身を解除すると、其処にはネオデイエンドライバーを片手で持っている咲夜とゼロデイケイドライバーを腰に巻いている透冀の姿が立っていた。ジュニラムが隙を見てボロボロになっていた雄大を回収しながら咲夜達の元へ行き着く。

スパイシー「デイエンドが咲夜……!？」

ヤムヤム「デイケイドが透冀君!？」

ローズマリー「如何いう事?」

透冀「オーロラカーテンに飛び込んだ矢先でお互いのドライバーを入れ替えて変身していたのさ。声色を変えるのにも好都合だったよ」
プレシヤス「それじゃあ、今のは…!？」

透冀「僕達が敵を欺く為の演技さ」

ナルシストルー「…まさかこの俺様が、お前如きに騙されたなど…!!」

透冀「出来るさ、狐や狸は人を化かす。僕も嘗てアキノリに救われた…元セカンドロイミュードだからね!」

透冀の歴然とした態度にナルシストルーは今でも血が上りそうになっっていた。

透冀「菓彩少女、君の思い出のレシピッピを助けよう。プリキュアに変身だ!」

あまね「ああ!」

□

あまね「プリキュア! デリシヤスタンバイ! パーティーゴー!!」

「フルーツ! ファビュラス・オーダー!」

「シエアリンエナジー!」

「トツピング!」

「ブリリアント!」

「シャインモア!」

□

??? 「ジェントルに、ゴージャスに、咲き誇るスイートネス! キュアファイナーレ! 食卓の最後を、この私が飾ろう」

□

DIEND SIDE

プレシヤス「キュアファイナーレ…！」

ナルシストルー「ジェントルーがプリキュアだと…!?」

ローズマリー「ファイナーレ！最高よ！前兆激突盛りに最高よ!!」

結ばれた金色の長髪が靡なびき、オカマさんは感涙なみの声を上げた。

咲夜「レグレット！」

アキノリは僕に駆け寄る。

透冀「君のやりたい事は大体把握している。行くよ！」

アキノリが僕の右側に並び立つと、直ぐに変身の準備に取り掛かる。

【「カメンライド」】

【「変身!!」】

【「デイケイド！」】

【「ディエンド！」】

アキノリはデイケイドに、僕はゼロディエンドライダーを頭上に向けてトリガーを弾いてブツカーマズルから放った銃弾がディエンドのライダーズクレストを思わせるライドプレートが回転。

三原色の影が僕に重なるのと灰色の鎧を形成させ、頭上から降って来た十枚のライドプレートが頭部に刺さり、灰色からシアンへと変色した。

挿入歌『molfonica / Nameless Story』

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！」

旅の語らい… 始めようか!!」

ディエンド「後を継すらず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択を！仮面ライダーディエンド！僕の旅の行先は… 僕だけが決めるッ!!」

「全てを破壊し、全てを繋ぐ！我ら！仮面ライダー!!」ドカーン！

スーパー戦隊の如く背後から地面が爆発する。

デイケイド「目にももの見せてやる。破壊者と怪盗の最強コンビ… 今此処に復活だ!!」

王蛇「血迷ったかあ… レグウ!!」

ゲムム「ヴエアアアーツ！」

デイエンド「悪いけど、今は君達の相手をしてる暇はないんだ！」

「カメンライド バツファア！」

「カメンライド ジャンヌー！」

デイエンド「僕の新しい力、たとえ召し上がれ」

『Hell! crush out! ZOMBIE... (Woooo...
!~)』

『Ah~! Going my way! 仮面ライダー...: 蛇・蛇・蛇
! ジャーンヌー!!』

『Ready... Fight!』

ファイナーレは華麗なステツプで躲し、僕は王蛇とゲムムの攻撃を避けながらVer0.4にアップデートされたゼロデイエンドドライバーに新たなライダーカード一枚を含めて二枚装填してトリガーを弾く。

紫を基調とした水牛の頭部を持つライダー。腰に巻いているベルトの左側にはゾンビの手が飛び出している大型バツクルが装填されている。右手にはチェーンソー型の武器、左腕には大きな鉤爪^{かぎづめ}。胸部装甲は助骨を思わせ、さながらゾンビの様にも見える。

もう一体は黒をベースに山吹色と青を加えた色合いの女性ライダー。青い複眼の仮面はコブラの背面となっている。

全てのライダーを倒す力を入れる為に戦う『仮面ライダーバツファ』と本当の強さを見せ付ける空手のコブラライダー『仮面ライダージャンヌ』の二体にゲムムと王蛇の相手を任せた。

モットウバウゾー「ウバ!ウバウゾー!!」

モットウバウゾーの伸縮自在な腕による攻撃をファイナーレが華麗なステツプで躲しながら地面を大きく蹴り上げる。

ファイナーレ「はああああつ！」

モットウバウゾー「ウツ!!ウバウ...!」

そのまま中段回し蹴りを繰り返し、更には伸縮した腕を足場にして強く蹴り上げてモットウバウゾーの攻撃を受け流しながら拳を叩き込む。一発だけではなく何度も。

僕達も後に続き、展開したオーロラカーテンを潜り抜けてモットウバウゾーの頭上に瞬間移動。

イリユージョンで二人に分身したデイケイドは、昆虫ライダーのカードを装填する。

デイケイドA「昭和完全解禁だ。行くぞー！」

デイケイドB「ああー！」

【カメンライド カブト！】

【カメンライド スーパー！】

『Change Beetle.』

A個体はカブトに、B個体は煌びやかな光と共に蜂を模した白銀の惑星開発用ライダー『仮面ライダースーパー』へと姿を変えた。

【アタックライド クロックアップ！】

【アタックライド パワーハンド！】

デイケイドB「レグレット、肩借りるぞー！」

続けてA個体はクロックアップで加速させながら打撃を喰らわせ、B個体が両腕を燃え上がる炎の様な深紅『パワーハンド』に変えながら僕の左肩装甲を蹴り上げて飛び上がった。

勿論、僕も透かさずファイナーレと個体Aに当たらない程度に銃撃した。

スパイシー「戦う姿まで華麗だわ…！それにあのデイエンドも昼夜との息がピッタリに合ってる…！」

雄大「当たり前だ。あの二人は初めて会った時から、何度も打つかり合った事もあった…！」

ジュニラム『最初ハチヨット仲違いダツタンダケド…色んな世界デ一緒ニ戦ツテイク内ニ、オ互イヲ信頼スルヨウニナツテイツタンダ。僕モ雄大ト喧嘩シタコトガアツタカラ、何トナク分カルンダ』

スパイシー「そんな事が…！」

モットウバウゾー「ウ…ウバウゾー!!」

ファイナーレ「はあッ！」

ナルシストルー「何だと!？」

ファイナーレの手刀で体制を崩されたモットウバウゾーにナルシス

トルーは驚きの声を上げる。

「ファイナルアタックライド ス、ス、ス、ス、スーパー！」

プレシヤス 「1000キロカロリー…！」

デイケイドB 「スーパーライダーブラッドムーン…！」

「パーンチ!!」

1000kcal分の右拳を突き出したプレシヤスと、500tもの腕力を誇る赤い拳で放つB个体の一撃でモットウバウゾーをジェット機の如く吹っ飛ばした。

ローズマリー 「今よ！ファイナーレ、デイエンド！」

デイエンド 「言われなくとも！」

「ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイエンド！」

ファイナルアタックライドのカードをドライバーに装填し、デイエンドライバーの銃身に数十列にカードのエネルギーが並び立つ。

□

ファイナーレのハートキュアウオッチが光を発し、果実の装飾が入っているレイピアに近い絞り袋型の武器が生成される。ファイナーレは迷いなく武器を手取る。

ファイナーレ 「クリーミーフルーレ！」

先端を下に向け、捻り部分を回すと、黄色、ピンク、黄緑、紫の順で丸いエネルギー体が浮かぶ。

ファイナーレ 「ブルーミン・ダンシンフルーツ！」

無限の字を描く様に振りながら先端を向ける。

ファイナーレ 「プリキュア！デリシヤスファイナーレファンファーレ!!」

デイエンド 「デイメンションシユート！」

ボタンを押し、丸いエネルギー体と共に浄化技を放つ。そのタイミ

ングに僕はトリガーを引いてエネルギー波を放ち、モットウバウゾーを浄化させる。

モットウバウゾー「お腹一杯！」

デイエンド「此処で一言。スイカとメロンは瓜科だけど、甘い部分が違うらしいよ。それでは大変……」

「「ご馳走様でした（よく出来ました）！」」

パフェのレシピツピ「ピピ〜！」

ハートの花火にデイエンドの紋章が浮かび上がる。

モットウバウゾーの消滅に伴い捕獲箱は破壊されてパフェのレシピツピが解放されると、ファイナー専用のハートキュアウオッチに格納される。

ファイナー「よかった……！」

デイエンド「君の組織とは今日限り縁を切るよ。ゴータツツに宜しく」

ナルシストルー「面白くなりそうだ……」

ソルトルー「これからはお互い敵同士ですね。又お会いしましょう……」

坊つちやま「

ナルシストルーの期待の声とソルトルーの奇妙な声と共に召喚されたバツファとジャンヌは消滅し、ゲンムと王蛇も姿を消した。

デイエンド「……」

プレシヤス「ファイナー〜！」

デイケイドA「レグレット！」
やつとだ。やつとこの世界の地獄から抜け出せた…。悔いはない。

□

Sakuya side

モットウバウゾーの撃破に伴い、フルーツパーラーKASAIのパ
フェの記憶消失騒動は収まった。

ローズマリー「よかったわ…」

あまね「有難う」

透冀「お礼はオカマさんじゃなくて、此処にいる皆だよ」

ゆい「これから宜しくね。あまねちゃん！それと…」

透冀『『レグ』でいいよ。この呼び名の方がしっくりくるからね』

ここね「とても心強い…」

らん「うわあ〜！デザートのプリキュアって夢がある〜！ライダー
を召喚出来る怪盗のわだぷーと、ライダーに変身出来る破壊者のアキ
ぼんの最強コンビ結成〜！」

咲夜「わだぷー？」

らん「海詠の『わだ』で、わだぷー！」

咲夜「…！」

華満が付けた渾名の理由に笑いそうになっている俺は口を緩ませ
まいと抵抗する。

雄大「アキノリ… 相変わらず顔に出てるぞ…」

咲夜「…うぐっ！」

あまね「ふふっ」

ローズマリー「でも、あまねちゃんとレシピッピの想いがほかほかハートの結晶体を作ってたなんて吃驚だわ」

パフェのレシピッピ「ピピピ〜！」

ローズマリーの言葉に首に掛けられたハートキュアウオッチの魔法陣からパフェのレシピッピことウザッピが出現する。

あまね「レシピッピ！」

パフェのレシピッピ「ピピピ。ピッピピ！」

透冀「そのハートキュアウオッチ、果物の飾りも付いてるペンダントみたいだから『ハートフルーツペンダント』ってのは如何かな？」

あまね「ハートフルーツペンダント…？」

パフェのレシピッピ「ピピピ！ピピピピ〜！」

パムパム『流石は透冀様！ネーミングセンスもバッチリですわ！』
と言ってるパム」

「、様!？」

ゆい「美味しそう〜！」

パフェのレシピッピ「ピピピ、ピッピッピ〜！」

メンメン『貴女達、頭が高くてよ！』メン」

相変わらずの態度で傲慢振るうウザッピの言葉を翻訳するクソ犬とドラジカ。

パフェのレシピッピ「ピピピピ。ピッピピピ〜！」

キバーラ『このワタクシ達三人と高貴なるペンダントの前に平伏しなさい！』って、何よこいつ！あたしより偉そうじゃない!!」

透冀「あ、キバーラ。君もブンドル団と縁を切ってきたんだね」

キバーラ「縁を切って来たって…もう既に切ったわよ！」

雄大「これから更に賑やかになりそうだな」

咲夜「ああ。その様だ」

パムパム「控えよろ〜パム」

『はは〜っ！』

キバーラ「冗談じゃないわよ！あたし、こんな奴に絶対平伏さない

わ！」

俺とレグレット、ここねと菓彩、雄大とキバーラ、そしてタロスズ以外は一斉に平伏し、ウザツピは菓彩に擦り寄ってくる。

笑顔が戻った喜びにレグレットは口を緩めながら言った。

透冀「…アキノリ」

咲夜「何だ？」

透冀「ただいま」

咲夜「ああ。おかえり」

□

フィナーレ「今日はグレープジュース。私と乾杯だ」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア く破壊者の食べ歩きく

透冀「まだまだ話したい事が沢山あるけど、これから宜しくね」

あまね「自分一人で考えるより、一緒に考えてもらったらって…」
デイケイドA「派手に盛り付けるぞ！」

第十九品：皆でデコレーション！お兄さんへの贈り物／破壊者流デ
コレーション!? 美味しいバグスターの刻み方
海に詠い、透かない冀望を抱け！

透冀 設定資料

透冀 わたなが とうき

生年月日：10月9日（仙台牛の日）

年齢：14歳（自称）

学年：2年3組

身長：170.0cm

口癖：無し

一人称：僕

二人称：君

好きな食べ物：無し

嫌いな食べ物：無し

音楽以外の趣味：戦闘鑑賞

家族構成（転生前）：不明

特典：仮面ライダーディエンド

役割：私立新鮮中学校の生徒

ICV：まだ未定

仮面ライダーディエンドに変身する咲夜と瓜二つの少年。その正体は『レグレット』と呼ばれてるセカンドロイミュード（ボディはプロトゼロと同様）。

咲夜と初めて出会った時から何度も打つかり合っていた様で、後に改心して仲間になった。一人称は『僕』。

誰かの影響か、旅仲間以外は男女問わずに『○○少年』『○○少女』と呼ぶ（但し大人に対しては、さん付けする事が多い）。

とある世界にて咲夜と同じく一生涯を取らない人間になるが、ロイミュードとしての能力は健在である。

咲夜と雄大からは『レグレット』、召喚したライダー達からは『レグ』と呼ばれている。

転生（記憶喪失）前の咲夜を深く知っているとされる。茶色に染髪した丸刈り頭が特徴で、尻部にある大きな黒子があるのは咲夜と同様。

名前の由来は仮面ライダーディエンドの変身者 海東大樹の振り。

ゼロディエンドライダー

ネオディエンドライダーが旅をしていく内に進化したディエンドライダー。ライダーカードに描かれたライダーを召喚する事が出来る。カラーリングはネオと同様で、ゼロディケイドと同じくライダー以外の敵も撃破可能となっている。また、変身しなくてもライダーの召喚が可能となっているはいるが、偶に自我が芽生えているライダーも多い。十八話ではVer. 4にアップデートされ、ギーツに登場したサブライダーを召喚出来る様になる（一話前に脱落したライダー達は除く）。

仮面ライダーディエンド（ゼロディエンドライダーVer.）

身長：194cm

体重：88kg

パンチ力：30.5t

キック力：44.4t

ジャンプ力（一飛び）：78.2m

走力（100m）：3.8秒

通称：ゼロディエンド。スペック設定は初期のディケイドからネオに加算かさなされた数値を二倍にしたもの。

同じくディエンドライドウオッチによって本来の力が半分となっただけに過ぎず、若し本来のスペックとして半分の力も足されたら、パンチ力61t、キック力88.8t、ジャンプ力（一飛び）156.4m、走力（100m）1.9秒となる。

ディケイド同様小説、S.I.C、ファイナルステージ、番外及びリメイク作、戦闘描写の乏しいライダーのカードも存在する。

ディエンドライダーによる遠距離射撃と高速移動によるヒット&アウェイが基軸になっており、銃ライダーではあるものの近接戦もこなっている。

第十九品：皆でデコレーション！お兄さんへの贈り物
／破壊者流デコレーション!? 美味しいバグスターの
刻み方

□

Sakuya side

かいちよとレグレットが仲間になり、和実家で白玉フルーツポンチを食うと云ったパーティーを開催。

え？何で”会長”を”かいちよ”に言い直したって？ピノコ方式だよ！

ガラスボウルに入れてあったフルーツにはサイダーが入っており、其処から白玉をゆいが入れる。

「出来たー!!」

らん「おおく！良いね！」

ここね「うん…」

あまね「白玉入りフルーツポンチの完成だな」

白玉フルーツポンチのレシピ「ピピピく！ピピピく！ピピピく！ピピピく！ピピピく！」

新たに白玉フルーツポンチ個体が新たに生まれ、相変わらずに食い意地を張るゆい。

ゆい「美味しそく。早く食べたいね、あまねちゃん！」

あまね「… ああ」

「それじゃ… 乾p」

『「ちよつと待った！」』

フルーツポンチをテーブルに並べて乾杯しようとした直前に俺達三人（+ジュニラム）は静止する。

ジュニラム『ソウイヤ、マリサン。今日ハ大事ナ事ガアルツテ皆集マツタンダケド… マサカ、忘レテタリシテ?』

ローズマリー「… 危うく忘れるところだったわ！フルーツポンチを食べる前に先ずはクッキングダムに報告しないと！」

クツキングダムへの報告で俺達はクツキングのジジイと面会する事になった。

クツキング『おおくっ！君が新たなプリキュア キュアファイナーレじゃな？それと、こっちは…』

咲夜「暫く報告してなかったからな。そりや戸惑うのも無理はない。こっちは仮面ライダークウガこと小野寺雄大と…」

透冀「仮面ライダーディエンド 海詠 透冀です。先程はお世話になりました」

クツクイーン『あの時の方でしたか… これまで大変でしたね。けれど、よく乗り越えてくれました』

あまね「操られていたとはいえ、過去の自分をなかつた事には出来ない… だからこそ、これから透冀達と一緒に頑張っていけます」

クツキング「うむ。ゴードッツからレシピボンを取り戻すべく、是非力を貸してほしい！」

咲夜「あのな、力は合わせるモンだ。俺が気に入らねえ言い方しねえでくんないかなア…？」

雄大「まあまあ。そう言わずに…」

苛つきそうになった俺を宥める雄大。ローズマリーは眠くなったメモコメに毛布を被せた。

フェンネル「成る程。つまりアジトは異空間にあると？」

元ブンドル団である怪盗組の話によれば『アジトはおいしいーナタウンやクツキングダムとは違う異空間に存在する』、『行き来のゲートはランダム』だと云う事を報告。

ローズマリー「それじゃあ、アジトの特定は難しいわね…」

フェンネル「その事実が分かっただけでも収穫だ。他には何か知っている事はあるかい？」

咲夜・雄大（!?!）

突然にフェンネルが何かを隠しているかの様に意味深な発言をする。

フェンネルの意味深な発言に対して、俺と雄大は顔を顰める。

これ以上は何も知らないという事で、かいちよは首を左右に振つ

た。

今の発言は流石にウソ臭かったぞフェンネルさんよオ…！まあ、一応警戒はしておこう。

ローズマリー「私も、もっと手掛かりを探してみるわ」
らん「マリツペって調査とかしてたの!?!」

ローズマリー「してるわよ！おいしいなタウンにもいっぱい友達が出来たんだから！」

クツクイーン『皆さんが頼りです。此方も全力を尽くします』
クツキング『キュアファイナーレとデイエンドも一緒に、これから宜しくの〜!』

ハートキュアウオッチの通信映像は途切れるのを確認した俺は、レグレットに何故この世界に来たのかを問う。

咲夜「そーいやレグレット。この前言った話の続きなんだけだよ… 如何やって、この世界に来たんだ？」

俺はレグレットに何故この世界に来たのかを問う。
野菜スープの件で聞く事が出来なかったからな。今度こそ、その理由が聞ける。

透冀「そろそろ潮時かな？僕はアキノリより先にこの世界に来ていたんだ。その時、偶然クツキングダムに訪れちゃって。色々あったけど、如何にか誤解を解く事は出来たけどね」

雄大「因みにどんな風にだ？」

雄大の問い掛けに俺は既に察しが付いていた。

咲夜「まさか、俺をクツキングダム中に危険人物として見做した訳じゃないだろうな…!?!」

透冀「それは本当に悪かったと思ってるよ。でも大丈夫だから！ちゃんと王族のお二人方にも僕の事情を聞いてくれたし、『ブンドル団のスパイになってくれ』って勅命が下されたんだ」

ゆい「ねえ、マリちゃん。ちよくめい、って何？」

ローズマリー「クツキング様のような王様への命令って意味よ」
言葉説明ナイスだローズマリー… ってか、通りでクツキングダム

の奴等が俺を警戒してた訳だ。

レグレットも俺を何度も世界を敵に廻まわさせたモンだ。全宇宙に指名手配させられるわ、顔と見た目関係無しで有名人にされるわ、とある異世界でSS級の冒険者として有名になった代償として悪い輩ともからに狙われるわ、もう散々だ。

透冀「デイケイドは世界を巡る度に様々な役割が与えられるんだ」
らん「役割!? 因みにどんなのをやってたの!?!」

透冀「華満少女も流石に食い付くか。アキノリも結構役割を与えられたよ? ある世界では応援団長になったり…」

らん「うんうん!」
透冀「ある世界では保健室の先生になったり…」

らん「うんうん!」
透冀「ある世界では水族館のスタッフになったり…」

らん「うんうん!」
興味津しんしん々に首を振り続ける華満。レグレットは嫌らしい目で俺を凝視ぎょうしする。

咲夜「… ある世界で三つ歳が離れた少女の幼馴染みで天文台の職員になったりと、戦っていく内に職員の気持ちを改めて実感させられてるって訳だよ」

ここね「咲夜。ソレ、クワシクキカセテモラエナイカシラ?」

咲夜「早まるなここね! 急にハイライト消すな!?! あの時は俺でも幼馴染み設定が追加されるなんて思いもしなかったんだ! だから誤解はしないでくれ!!」

ここね「… そう」

パムパム(さっきのここね、凄く怖かったパムく…!)
俺の説得で正気に戻るここね。

その様子を終始見ていたクソ犬はガクガクと震えていた。

咲夜(助かった…)

透冀「あれ? 僕、何か変な事言ったかな?」

咲夜「半分お前のせいだからなレグレット!?!」

透冀「… という感じで、僕もアキノリと同じく役割を与えられた

のは、このデイクイドライドウォッチの影響だと予測している」

確かに士さんも世界を巡る度に多くの役割を担^{にな}ってきた。レグレットがオーロラカーテンを使えるのも、俺と同じく役割を担われたのもデイクイドライドウォッチの影響と言ってしまうてもおかしくはない。

透冀「少し話を戻すけど、僕はデイクイド…アキノリや雄大と一緒に世界を旅してたんだ。とある世界の役目を終えてオーロラカーテンで次の世界に行こうとしてただけど、その世界の惨劇もあって僕達は離れ離れになってしまったんだ。まあ、僕だけは偶々^{たまたま}デイクイドに会って一緒に戦ったりしたけどね。勘違いしてもらっちゃあ困る」

雄大「やっぱりあの時の事、まだ根に持ってたんだな」

透冀「うん。あれは僕達四人にとっては最悪な出来事だった…だからデイクイドの力の半分を、これに収めざるを得なかった」

レグレットが更に取り出したのは形状が異なる時計型のアイテム『ライドウォッチ』。

マゼンタと黒で構成された横長い『デイクイドライドウォッチ』と、黒で構成されている三つのライドウォッチ『ブランクウォッチ』だった。

ローズマリー「これって…時計かしら？」

透冀「これはライドウォッチといって、『ライダーの力』が宿っているアイテムなんだ」

デイクイド組以外『ライダーの力を!』

咲夜「ああ。このブランクウォッチと呼ばれてる空っぽの黒い三つは、過去に戦ったライダーの変身用ウォッチを無力化させた物なんだ。試しに雄大で実験してみたいところだが、力の半分を取っちゃうと今後の戦いが不況になるから止めておこう」

俺とレグレットは過去に、別次元の常磐が戦っていた歴史の管理者『クオーツァー』と名乗る集団の変身用ウォッチを使っていた奴等と戦った事がある。

その三つをレグレットが回収して、俺が破壊の力で無力化させたの

透冀「まあ、そうなるね」

ローズマリー「……………」

俺達の会話にローズマリーは何気に浮かかない顔をしていた。

透冀「オカマさん。何か矛盾むじゆんしてるみたいだけど大丈夫？」

ローズマリー「ううん、何でもないわ。心配してくれて有難う」

透冀「気にする事ないよ。まだまだ話したい事は沢山たくさんあるけど、これから宜しくね」

□

TOUKI SIDE

翌日、僕と菓彩少女は生徒会室を出ると、アキノリ達三人と遭遇した。

咲夜「この前の話だが、お前生徒会辞めるのか？」

あまね「いや、やはり続けさせてもらう事にしたよ。皆を笑顔にしたいから」

雄大「俺と同じだな。お互い頑張ろう！」

あまね「ああ。それと一つ相談があるんだが、放課後いいか？」

その帰り道、菓彩少女は僕達に相談を持ちかけてきた。

あまね「もう直ぐ兄達の誕生日だな。お祝いとお礼を兼ねて、ケーキを用意しようと思うんだ」

咲夜「ケーキか……」

ゆい「素敵！でもケーキって、色んな美味しいがあるから迷っちゃいそう」

あまね「そうなんだ…」

雄大「ま、好みは人それぞれって事だよ」

どのケーキを作るかを迷っている和実少女を見て、菓彩少女はフルーツポンチを食べている途中で貰った Pretty Holiday のチークを取り出す。

あまね「君達から心の籠もったプレゼントを貰って、凄く嬉しかったから…自分一人で考えるより、一緒に考えてもらったらって」

ゆい「閃いた！デコレーションケーキ！」

「デコレーションケーキ？」

ゆいの発案に、菓彩少女は心を弾ませた。

咲夜「…と云う訳で、ゆあんともつきの二人にデコレーションケーキを作る事にした」

キバーラ「あたしも前にグミを貰ったから事があるから、その恩返しって事になるわね」

咲夜「そういう事。お前ら、賛同してくれるな？」

雄大「勿論、此間の件もあつた事だし！」

ここね「いつも美味しいパフェをご馳走してくれるし…手伝いたい！」

あまね「有難う。スポンジを用意するから其処に皆でデコレーションしてほしいんだ」

らん「まっかせて〜！」

ゆあんくんはチョコクリームで、みつきくんが生クリームの為、菓彩少女がスポンジを二つ用意する事になった。

パフェのレシピピ「ピピピピピピピピ！ピッピピ〜！」

説明をし終わると、ハートフルーツペンダントからパフエ個体が飛び出してきた。

改めて見返してみると、スターカラーペンダントを思い出すね。懐かしい。

パムパム『あまねのセンスに任せておけば問題なしですわ!』パム? それなら、ここねのセンスだって負けないパム!』

ここね「えっ?」

メンメン「センスなら僕はらんちゃんの独創的なアイデアが必要だと思うメン」


らん「独創的だなんて照れるなく」

パフエのレシピツピ「ピピピピピ! ピッピピピ!」

キバーラ『あまねのお兄様への贈り物よ。最高の物にしななければ!』ね? こんな時に、冬美、が居れば、もっと楽しかったのに!』

ジュニラム『ソノ時ハ今頃、アキノリガ何カヤラカシテタラツボ押サレテタケドネ』

冬美か。懐かしい名前を聞くね。

、光 冬美、。彼女も嘗ては僕達三人と一緒に旅をした仲間であキノリの初恋の人だ。

現在は元の世界に戻って、夏海さんや栄次郎さんを手助けしながら実家である光写真館の手伝いに励んでいる。

らん、冬美、って、さつき、わだぷーが言っていた四人目の人!』透冀「うん。彼女の僕達と一緒に旅をした仲間だったんだ。アキノ

リの初k...」

咲夜「レグレット。それ以上言ったらマジでしばき殺すぞ?」

透冀「御免...」

指をポキポキと鳴らしながら僕を黙らせる。『芙羽少女がこれ以上病んだら如何する?』と言わんばかりに。

パムパム「こういう時はここねの出番パム!」

メンメン「らんちゃんのアイデアメン!」

キバーラ「いや、此処はあたしの出番よ」

ジュニラム『僕ダツテ、料理ニハ余リ自信ハナイケド... 戦闘以外

デモ全力デサポートルヨ!』

コメコメ「ゆいも、さきゆあもちゆくつて」

咲夜（可愛ああああくっ! 其処に痺れる癒されるウ〜!!）

デレ顔全開で二眼カメラでおねだりする小狐少女の写真を一枚撮るアキノリ。完全にケモノナーになりかけてるけど…大丈夫?

キバーラとジュニラムが、おパム少女とトナカイ少年くんの二匹と揉めそうになっていたところをオカマさんが猫騙しの要領で沈黙させた。

ローズマリー「それじゃあ、逸そ二チームに分けて作ればいいんじゃない?」

ゆい「二チーム?」

透翼『ケーキは二つあるから分かれて作る』って事か。賢明な判断だね」

パムパム「キバーラ、此処はお前と手を組むしかないパム。メンメン、何方が最高のデコレーションが出来るか勝負パム!」

メンメン「燃えてきたメン〜! ジュニラム。お互い間違えられる者同士、一緒に頑張ろうメン!」

ジュニラム『ウン!』

キバーラ「まさかクソ犬ちゃんと組む事になるとはね。精々足引つ張らないでね?」

コメコメ「ゆい! さきゆあ!」

パフェのレシピツピ「ピピピ!」

五体もやる気満々の様だね。

らん「はわわ〜。メンメン達燃えてきちやってる…」

ゆい「皆、頑張ろう!」

あまね「出来上がりが楽しみだ」

ローズマリー「それじゃあ決まり、チーム分けはグーパーで決めるわよ。グーとパーで…」

「「「「分かれましょ!」」」」」

□
NO SIDE

ゴードアツツ『四人目のプリキュアが現れたか…』

ナルシストルー「まさかジェントルーがプリキュアになるとはね。キュアファイナレだっけ？」

セクレトルー「ほかほかハートの力でしようか？デイエンドが裏切り、邪魔者が増えて煩わしい事この上ない」

ソルトルー「ですが、我々の目的に変わりはありません」

セクレトルー「仰る通りです。ナルシストルー、ソルトルー」
ソルトルー「はい…」

ナルシストルー「はいはくい」

忠実な態度で接しているソルトルーに対して、気怠げな態度を見せるナルシストルーを注意するセクレトルー。

その光景はまるで家族の様なやり取りの様にも見えた。

セクレトルー『はい』は一回で結構ですよ。少しはソルトルーを見習って、そろそろ結果を出して下さい」

ナルシストルー「捕獲箱の改良とか、結構役に立ってると思うけど？王蛇はトレーニングルームで修行中だし、ゲムはゲームの開発で忙しいし…」

セクレトルー「それは結果とは言いません。っていうか、早く行けっつーの…」

ナルシストルー「ははっ。まあ、任せといてよ」

セクレトラー「それでは参りましょう。せーの…。」
「「ブンドル・ブンドル!!」」

□

Sakuya side

調理前の消毒を終えて俺と雄大は食い馬鹿二人とチョコクリームのケーキを、レグレットとキバーラはここねとかいちよの二人と生クリームのケーキを作る事となった。

そして審査員はローズマリーが担当。エナジー妖精組、ジュニラム、キバーラの五体も俺達の様子を見届ける事にした模様。

ゴングが鳴り響き、俺達は早速調理に取り掛かった。

ゆい「いちじもみかんも美味しそ〜！」

咲夜「美味いと言って、つまみ食いとかするなよ？」

ゆい「そう言われるとますます食べたくなっちゃうよ〜！」

咲夜「駄目だ。今回ばかりはケーキが完成するまでつまみ食いは一切なしだ」

ゆい「ええ〜っ!?!」

らん「ゆいぴよん。らんらん、こんな物持って来たんだけど…。」

華満が持って来たのは、ごま胡麻団子が入っている横長の箱だった。

今回は一推しの食材を持ってきてもいいルールとなっている。

らん「よく考えたら、ケーキに胡麻団子デコるのって難しいよね？」

雄大「それは上手く工夫すればいいんじゃないかな？例えば、二分の一に切ってケーキの上に並べるとか」

らん「確かにそれアリかも！有難うゆーゆー！」

雄大「まあ、如何って事はないけどね」

咲夜「俺達も丁度いい具材を持って来たんだ」

俺と雄大は板チョコ二個で、レグレットは色んな種類の果物だった。

一方ここね、かいちよ、レグレットの青系組の方は順調に進んでいる。

あまね「間に挟むフルーツはシンプルにして、見える部分は華やかにしたら如何かなと思うんだ」

ここね「フルーツの種類は決めてるの？」

あまね「それは、君達二人と一緒に相談しようと思って」

ここね「それじゃあ、ラズベリーは？」

あまね「うん。いいね！レグは？」

透冀「桃やチェリー、メロンも良いと思う。レモンは…正直止めておくよ」

ここね「如何して？」

透冀「意外と呪われるから」

「？」

意味深な事を言うレグレットに首を傾げる二人。俺が消した転生の記憶を引き継いでいる以上、何か事情があっただろう。

咲夜「さあて、三人共。この板チョコを四当分に切ったスポンジの上に乗せたいんだが…」

ゆい「デリシヤスマイル〜！」

らん「どれも美味しく迷っちゃうよ〜！いでっ!？」

咲夜「何を食うちよるか食いバカ共。もうちよつと真面まともにやろうぜ」

ゆい「ううっ…。咲夜君の鬼ーっ!!」

咲夜「なんとでも言え。それと、俺は鬼じゃなくて『悪魔』だ」話を逸らした食いバカ二人に軽くチョップをお見舞いし、改めて

ケーキの具材決めを実行させた。

生クリームとチョコクリームを塗り終え、ケーキの完成を待ち切れなかったゆいは早く食いたい様子だった。

ゆい「ゆあんさんのチョコクリームも、みつきさんの生クリームも何方も美味しそうだね！」

ここね「何となく双子って食の好みも似るのかと思っていただけ、それでもないのね」

あまね「・・・誕生日ケーキを巡って大喧嘩した事があってね」
らん「喧嘩ってあのお兄さん達が？」

透冀「ああ。実は僕もブンドル団を裏切る前は、内緒で菓彩少女のお見舞いに行ってたんだ。その時は色々な話を聞かせてくれたんだ」
咲夜「因みにどんな話だ？」

俺がそう尋ねると、かいちよは小さい頃の思い出を語ってくれた。

あまね「まだ幼かった時に『誕生日ケーキ』は二人で一個。自分が好きなケーキの違いで喧嘩になって・・・それ以来、我が家では兄達の誕生日ケーキは二つ用意する事になったんだ」

ローズマリー「あら。可愛い思い出ね！」

ゆあん「そろそろ休憩にしないかー？」

ドアのノックでゆあんが声掛ける。

休憩中、俺達はコーヒを堪能している。勿論俺は砂糖多めで。

ゆあんは急に誕生日ケーキの話に持ち掛けてきた。

ゆあん「それにしても、ケーキの完成が楽しみだ」

『!?!』

みつき「こら」

透冀「二人共、まさかとは思うけど聞いてたの？」

あまね「覗くなんて無粋だ！」

口走ったゆあんに憤慨するかいちよ。

ゆあん「ふん。甘い香りとキッチン占拠せんぎょから想像したまで… 済まん、余りにも楽しみでな！」

みつぎ「覗のぞいてなんてないよ。楽しみ過ぎて、つい口に出しちゃったんだ。許してね？」

咲夜「よかったな、かいちよ。楽しみだとよ」

あまね「もう、全く兄さん達は…！」

咲夜「可愛い… おい二人共、可愛い妹の膨ふくれ顔撮ったから見てみる。何たって永久保存版だぞ… うっ!？」

「!？」

兄達に照れながらも呆れ顔を膨らます写真を撮られた菓彩少女は、ゆあんくん達に写真を見せようとしたアキノリの首の右側を親指で突いた。

咲夜「ハハハハハハハハ…！アツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

俺は窒息しかねない程に笑い転じた。

雄大「今のって…」笑いのツボ!？」

透冀「夏海さんや栄次郎さんしか使えない筈の技を如何やって…!？」

キバロー「あたしと変身した影響で使える様になった様ね。まあ、女の子限定だけど」

咲夜「かいちよ… てんめエ！」

かいちよに掴み掛かろうとした俺を紙一重に避け、足を引つ掛けて転ばせる。

雄大「この様子だと相当辛そうだぞ…」

透冀「彼女は空手を習っていたからね。これはかなりの効力だ」

咲夜「おめエら、見てねえで早く止めてくれエ…!!」

俺が笑いのツボの効力を止める様に要求しようとした矢先で、ハートキュアウオツチの警報音が室内に響き渡らせる。

笑いを堪えながらも液晶画面に映っていたのは、生クリームケーキ个体とチョコクリームケーキ个体のレシピツピの二体。

ゆあん「何だ…?」

みつき「あれ?何だか…」

ゆあん「大事な事を忘れてしまった様な…」

咲夜「マ、マジかよ!」

透冀「まさか…!」

あまね「誕生日ケーキで喧嘩した事、覚えてるよな!」

兄達の異変に気付いたかいちよは喧嘩した日を覚えてるかと聞く。だが、思い出を失いつつある二人にとっては意見がバラバラだった。

ゆあん「当然、チョコクリームだろ?」

みつき「それはないね。生クリームでしょ?」

透冀「不味い…皆、ちよつとどんよりするけど良い?」**重加速!**「意見が擦れ違い、空気が悪くなりそうだと判断したレグレットは口イミュードお馴染みの重加速を使用する。

「うっ!」

レグレットは物体の動きが遅くなる空間の中で早歩きしながら二人の背後に移動すると迅速な手刀で気絶させた。

透冀「御免ね、これしか手立てはなかったんだ」

咲夜「**重加速**か。通りで加速系のライダーカードを奪えた訳だ」

透冀「奪えたというよりは、高速移動するタイミングで**重加速**を使っただけけどね」

重加速とは、ロイミュードの誰しもが持つ能力。発生中はあらゆる物体の動きが遅くなり、重加速を使用したロイミュード以外は身体がゆっくりとしか動かせない。ポケモンのトリックルームの様な物だと思ってくれ。

レシピツピが奪われた現場へと赴くべく、俺達は自身の愛用バイクに跨った。

俺はマシンデイクイダー、雄大はビートジュニラム、そしてレグレットはマシンデイクイダーの色違い『マシンデイエnder』で移動する。

レシピツピを捕獲して立ち去って行こうとしていたナルシスト

ルーとソルトルーに追い付くと、俺達はバイクを駐車する。
今回は浅倉と社長は居ないみたいだ。

ゆい「ナルシストルー！」

咲夜「ソルトルー！」

あまね「大事な思い出、返してもらおうぞ！」

ナルシストルー「はっ！もうすっかりとプリキュアとライダーだな。ジエントルー、デイエンド、それとキバーラ！」

キバーラ「何度も言うけど、あたしはあんたなんかと一緒にされた覚えはないわ！」

あまね「キバーラの言う通りだ。そんな揺さぶり、今の私達には効かない！」

ソルトルー「甘くないですね三人方。こうなれば最高の隠し味をお見せする時……！」

『シミーシエイクタイム！』

ソルトルー「出でよ、ワタクシのバグスター!!」

『ガシャット！』

ナルシストルー「混ぜれ、モットウバウゾー！」

ナルシストルーはケーキ屋にあったふるいのモットウバウゾーを生み出す。

合体タイプの為か、ゴムべらが蝶の両翅りょうばねとなっていた。

バグヴァイザーⅢから紫の球体が地面に着弾し、バグスターウィルスがバグスターを形作る。

カーファアと同じく建築物を走行に見立てた胸部を持つが、御伽噺おとぎばなしに出て来そうな城をデザインにした襪はくろ切れのドレスは、まるで食い物が腐っているかの様に濁にごった箇所が多く見られる。

その黄色い目を見た者には残忍さを感じさせ、アイスコーンの様な王冠を被っている。

モットウバウゾー「モットウバウゾー！」

???「私はシミー、レベルは20よ」

咲夜「久し振りだなシミー。お前と別の世界で戦うのはルパニカル以来だが……罪深すぎてついに腐ってきたか？」

シミー「甘い言葉なんて掛けないわ。貴方達にレシピツピとやらを取り返す見込みがないもの！すこやか市では随分と手こずってくれたみたいだけど、今度はそう簡単に甘くはないわよ？」

咲夜「そうか。そりゃあ、楽しみだな！」

ローズマリー「デリシヤスフィールド！」

実は肉じゃがの一件で召喚されたルパニカルバグスターのトリオとは花寺達の世界で一度戦った事がある。

ローズマリーがデリシヤスフィールドを展開し、俺達は変身に移行する。

□

「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！」

□

ゆい「にぎにぎー！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

□
ここね「オーブン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
「「シエアリンエナジー！」」
コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフォツ!？」

あまね「其処は吹くところなのか!？」
雄大「アキノリは笑いのツボが出易いからなあ…」
透冀「、致し方なし、だね」
あまね「は、はあ…?」

□
コメコメ「コメコメ！」
パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

□

あまね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！」

「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

「シエアリンエナジー！」

「トツピング！」

「ブリリアント！」

「シャインモア！」

□

フィナーレ「ジェントルに、ゴージャスに、咲き誇るスイートネス！キュアフィナーレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

「『デリシヤスパーティ♡プリキュア！』」

□

「『変身！』」

【カメンライド デイケイド！】

【カメンライド デイエーンドー！】

『ROD FORM』

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！

旅の語らい……始めようか!!」

電王R「お前、僕に釣られてみる?」

クウガ「ゼロから始まる古代のエナジー!仮面ライダークウガ!皆の笑顔は……俺が守る!!」

デイエンド「後を継らず全てを撃ち抜く!新たな旅に悔いなき選択を!仮面ライダーデイエンド!僕の旅の行先は……僕だけが決めるツ!!」

デイケイド「全てを破壊し、全てを繋ぐ!」

「二」我ら、仮面ライダー!」ドカーン!

【アタックライド イリユージョン!】

□

B SIDE

ナルシストルー「お手並拝見と行こうじゃないか」

シミー「んふふふ。遠慮なんて要らないわよ?」

モットウバウゾー「ウバ!」

デイエンド「僕はAとオカマさんでバグスターを。Bと雄大はウバウゾーをお願い」

デイケイドA「死ぬなよ?」

デイエンド「それはお互い様でしょ?」

俺と雄大はウバウゾーを。Aはローズマリーとレグレットと共にバグスターの相手を任せる事にした。

モットウバウゾーはゴムべらの両翅りょうばねで飛行しながらカッターを放つ。

【カメンライド オーズ!】

『タトバ、タ・ト・バ!』

クウガ「超変身!」

俺はオーズ タトバコンボに姿を変えて両脚であるバツタレッグを素早く踏み込む。

雄大もドラゴンフォームに超変身。ウバウゾーのカッター攻撃が迫って来たタイミングで地面を強く蹴り上げて高度地点まで飛び上

がり、ドラゴンロッドによる棒術で光弾を掻き消しながら後方へ下が
る。

ヤムヤム「バリバリカッターブレイズ！」

スパイシー「ピリツモへヴィサンドプレス！」

それに合わせてヤムヤムが、『カッターにはカッターだ』と言わんば
かりにカッターブレイズを放つ。

お互いのカッター攻撃が相殺され、スパイシーがサンドプレスで
上方の両翅を潰すといった連携を見せたのだった。

ファイナーレ「二人共、やるじゃないか」

プレシヤス「よし。1000キロカロリー…！」

デイケイドB「待てよ。このバグスターは粉ふるいをメインに…
まずい！」

モットウバウゾーの能力に察した俺は警告しようとしたが、時既に
遅し。

計画通りと笑みを浮かべたモットウバウゾーは回転しながらプレ
シヤスを捕獲し、そのまま揺すぶった。

プレシヤス「うわあくっ?!粉じゃないよ〜！」

ナルシストルー「ハハハッ。君がケーキになっちやうのかな?」

ブラックペツパー「プレシヤス!!」

ファイナーレ「プレシヤス。こっちだ！」

プレシヤス「はひ〜」

悲鳴を上げるプレシヤスをブラックペツパーが助けようとしたが、
それよりも早くファイナーレがお姫様抱っこで救出した。

ブラックペツパー「新しいプリキュア…!?!」

ファイナーレ「何者だ…!?!」

モットウバウゾー「ウバウゾー!ウバツ！」

気配を感じ取ったのか、ファイナーレはブラックペツパーと対峙す
る。

それも数秒ほどでしか叶わず、よくも人質を解放してくれたなど激
怒するモットウバウゾーは下方の両翅から光弾を撃ってきた。

デイケイドB「本来ならシャウタでやりたかったが…手間が省け

た！」

「フォームライド オーズ タジャドル！」

『タ〜ジャ〜ド〜ル〜！』

縦に連なる赤いメダルのオーラが俺に重なり、オーズの胸部プレート『オーラングサークル』には不死鳥の姿が描かれていた。

頭部のタカヘッドも『タカヘッド・ブレイブ』として強化され、薄く鋭い刃状のプレートが層のように重なる腕部、かかと踵付近と爪先部分つまさきに存在する鋭い爪状の外骨格を持つ脚部。その姿は猛禽類もうきんを連想とさせる。

かつて800年前の王が高空からの空爆で敵を奇襲したり、村を焼き尽くしたりした炎のコンボ『タジャドルコンボ』となった俺は背中に孔雀くじやくの羽を模した光弾を発射してモットウバウゾーの光弾を相殺する。

ヤムヤム「はわ〜。煌びやかマシマシ〜！」

スパイシー「奇麗…！」

その姿に見惚れているスパイシーとヤムヤムも無理はないだろう。プレシヤス、ファイナーレ、ブラックペツパーの三人と共に跳び上がり、雄大もモットウバウゾーとの距離を測るべく、ジュニラムを高度地点まで飛行させる。

ファイナーレ「プリキュア・ファイナーレブーケ！」

ファイナーレはクルーミーフルールの捻り部分を一回だけ回し、紫色のエネルギー波でモットウバウゾーを無力化させる。

俺はクジャクアームの両肩装甲『クジャクシオルダー』から展開した六枚の翼で高く舞い上がり、オーズのファイナルアタックライドカードを装填する。

「ファイナルアタックライド オ、オ、オ、オーズ！」

『スキヤニングチャージ！』

デイケイドB「プロミネンスドロップ！」

クウガ「ジュニラム、これくらいでいい。飛ばせ！」

ジュラニム『照準しょうじゆんヨシ！飛ンデケー！！』

クウガ「うおりやあああー！ーッ！！」

プレシヤス「1000キロカロリーパーンチ!!」

急降下しながら燃え盛る爪で叩き込む両脚、古代エネルギーを収束させた炎の飛び蹴り、ダイナマイト5本分の威力を誇る右拳^{うけん}でモットウバウゾーを勢いよく吹っ飛ばした。

□

DIEND SIDE

シミー「やっちゃいなさい!」

パティシエの服装をしているバグスター戦闘員が僕達に襲い掛かってくる。

カメくんはロッドモードにしたデンガツシャーでバグスター戦闘員達の攻撃を受け流し、回りながら薙ぎ払う。

A個体はソードモードにしたライドブツカーでバグスター戦闘員達を峰打ちで次々と倒していく。

僕も後に続いて襲い掛かって来たバグスター戦闘員の一体が振り下ろした三本槍をゼロデイエンドライダーで受け止め、右腕を持って行きながらセロ距離で銃撃を放ち後退させる。

「アタックライド ブラスト!」

更には手から離れた三本槍を奪い取ってそのまま空中に投げ、左脇にあるカードホルダーからライダーカードを装填したゼロデイエンドライダーを左手に持ち換えながら素早く突き出す事でポンプアクション。

奪い取った槍で後退させ、上に向けて放った光弾の雨がバグスター戦闘員達に降り注ぐ。

ボウルを頭に被って防御していた個体もブラストの追尾効果で胸部を撃ち抜かれる形で一人残らず駆逐された。

残る敵はシミーだけとなり、僕はライダーカードを二枚装填する。

シミー「喰らいなさい！」

シミーがステツキを上突き出すと、キャンデイステツキから収束させたホイップクリームを飛ばす。

電王R「リユウタ。交代だよ」

リユウタロス『オツケー！』

『GUN FORM』

電王G「お前、倒すけどいいよね？答えは聞いてない！」

カメくんからリユウくんに交代し、ガンモードにしたデンガツシャアの銃撃が通る直前にホイップクリームを撃ち抜くが逆効果。

シミー「…掛かったわね！」

電王G「えっ？うわあっ!!」

シミー「これだけじゃ物足りないわ。そおれっ!!」

『アタックライド バリアー！』

シミーは不適な笑みを浮かべると、キャンデイスティックから放たれたホイップクリームが雨の様に降り注ぐ。

僕はバリア、A個体はオーロラカーテンで防ぐ事は出来た。

だが逆にリユウくんがホイップクリームを撃ち抜いた事で視界を塞がれ、更には生成したドーナツ型の輪っかで拘束されてしまった。

電王G「何これ…!?!前が見えないよ!!」

シミー「んふふ、これで電王は無力化されたわ。私はね、憎たらしいガキなんて死んでも食べる気はないの。甘〜いお菓子だけ…さあ、次はあなたの番よ」

デイエンド「流石はお菓子のゲームから生まれたバグスター…そんな君に敬意を評して、僕達が美しくデコレーションしてあげるよ。但し、その代償として臭いが取れなくなるけどいい？」

シミー「…はあ？」

十五年もの戦闘経験を持つ電王をいとも簡単に無力化させたシミーに、僕は軽く称賛する。

デイケイドA「ああ。派手に盛り付けるぞ！」

『フォームライド ガイム ジンバーチェリー！』

『ジンバーチェリー！ハハーツ！』

A 個体がゼロデイケイドライダーに装填して鎧武にカメンライド。頭上に出現したオレンジアームズと、桜桃さくらんぼを模した鎧が融合。

そのまま被さり、赤い果汁かじゅうと共に陣羽織じんばおりの形をした黒いアーマーを纏う。

相違点としては、クラッシュャー部分と兜の色が黒、角と飾りは銀に変色している事である。

鎧武 ジンバーチエリーアームズとなったA 個体は、赤い弓の形状をしている武器『創生弓ソニックアロー』を持ちながら構える。

「カメンライド ナイト！」

「カメンライド ブレイブ！」

『タドルメグル、タドルメグル、タドルクエスト〜！』

僕はライダーカードを二枚装填し、トリガーを引いて銃口から三原色の影がライダーの姿を作り出す。

黒に近い紺色を基調としたアンダースーツを着ている騎士のライダー。その仮面の中には鋭い青い目が存在しており、馬上槍型ばじょうやりの大剣を手に持ち、ベルトの左側には、両翼を閉じたコウモリが描かれているレイピアレイピアを携たずさえている。

もう一体はシアンとシルバーを基調とした西洋騎士の様なライダー。左腕には七角形の小さな盾が装備されており、右手にはオレンジと水色のA Bボタンが存在するの剣『ガシヤコンソード』のグリッブを順手で握っている。

デイエンド 「鏡先生、オペのお手伝いをさせてください」

??? 「あまり足を引つ張るなよ？これより、バグスター切除手術を開始する」

意識不明の恋人の意識を取り戻すべくライダーになった騎士『仮面ライダーナイト』と、甘いスイーツが大好きな天才外科医『仮面ライダーブレイド』はシミーの前に姿を現す。

デイケイドA 「お前をデコレーションして食うケーキは…フルーツチョコレートケーキだ！」

シミー 「ほぎきなさい！」

調理宣言したA 個体はシミーが再び放ったホイップクリームを、ガ

ンモードにしたライドブツカーの銃撃で相殺。

ブレイブがガシャコンソードのコントロールパネル『アタックラッシュパッド』にあるAボタンを三回押して、炎の刀身『フレイムエリミネーター』から炎の衝撃波が放たれる。

女王は甘くはないとシミーがチョココの壁を生成した直後にオーロラカーテンが出現。

おそらくジンバーチェリーの加速能力で背後に回ったと同時に、出現させたオーロラカーテンで突き飛ばしたのだろう。

放たれた炎の衝撃波がシミーを襲い、A個体はソニックアローの鋭利な刃『アークリム』で連続で斬り付ける。

シミー「よ、よくもやってくれたわね…。！って、ああ！私のステイツクがあゝ!?!」

チョコまみれとなつてでもキャンデイスティックを突き出すシミー。

だが、キャンデイスティックは炎によって溶解した事で本来の形を失い、まるで吸血鬼の心臓を突き刺す釘の様な形状へと化した。

シミー「よくも…。よくも私のステイツクを!!」

『NASTY VENT』

ヤケになつてステイツクを振り上げるシミーに、突然の超音波に襲われる。

それはナイトの契約モンスター『闇の翼 ダークウイング』がシミーの周りを飛び交いながら超音波を放っていたのだから。

『コ・チーン!』

シミーの攻撃が鈍っている隙にブレイブはアタックラッシュパッドのBボタンを押して氷の刀身『ブリザードエリミネーター』に切り替え、EXPグリップを逆手に持つ。

炎剣モードの時と同じ様に今度はBボタンを三回押して地面に突き立てると、氷の結晶のエフェクトと共にシミーを足元から凍らせる。

『フォームライド キバ ドガバキ!』

体に流れる波紋と共にA個体は、キバにカメンライド。

□

B SIDE

ファイナーレの浄化技でモットウバウゾーは消滅し、捕獲箱からショートケーキとチョコレートケーキの個体のレシピツピがハートフルーツペンダントに格納される。

ナルシストルー「キュアファイナーレか……」

ソルトルー「デイケイドも坊つちやまも中々の腕前でしたよ。さあて、今度のゲームでは如何^ど抗うか。楽しみが増えるばかりです……！」

ナルシストルーの後を追う様に、ソルトルーは俺とレグレットの腕前を称賛しながらデリシヤスワールドを後にした。

ローズマリー「待って！貴方、シナモンと関係があるの……？」

ブラックペツパー「シナモン……？」

ローズマリー「若し、そうなら……あの人に謝りたいの！」

ファイナーレの後ろ姿を見て、立ち去ろうとしたブラックペツパーを呼び止めたのは、変身を解除したローズマリー。

やつぱり、あの『シナモン』って奴と深い関わりがありそうだな。

ブラックペツパー「……何の事かさつぱりだ。私とは関係ない」

そう返答すると、ブラックペツパーは飛び去って行った。

□

T o u k i s i d e

咲夜「よっしやあ！バースデーケーキ完成だ！」

あまね「此方も！」

ここね「出来た…！」

戦いが終わり、僕達はバースデーケーキが完成させる事が出来た。チョコレートケーキには華満少女が持ち込んだ胡麻団子と雄大の板チョコ。

生クリームケーキには芙羽少女と菓彩少女が意見を出したブルーベリーとラズベリーがあしらわれている。

何？僕が用意したフルーツは何処だつて？ちゃんとケーキの中に入ってるよ。

ローズマリー「何方もケーキも素敵だわ！」

ゆい「うん。美味しそ〜！」

咲夜「まだだぞ。まだだかな」

パムパム「パムパム達のも出来上がったパム！」

メンメン「プリキュア&ライダーケーキ完成メン！」

コメコメ「コメコメ！」

パフェのレシピツピ「ピツピ！」

おパム少女達も勝負の事は忘れて、こつそりとケーキを作っていた様子だ。

上には苺、キウイ、パインのフルーツがあしらわれ、クリームの色もピンク、緑、黄色で信号機の色を彷彿ほうふつとさせている。

咲夜「お前ら、いつの間に作ってたのか!？」

ローズマリー「愛とパッションメガ盛りじゃない！」

ゆい「すごく美味しそう！」

ジュニラム『オパムチャン達、スツカリ勝負ノ事忘レチャツテルネ』
キバーラ「当たり前前よ。お料理に勝ち負けなんてないもの」

あまね「皆、頑張ったな」

パフェのレシピツピ「ピピピ！」

パフェ個体が労いの言葉を掛ける菓彩少女に何かを伝える。

パムパム『このケーキはワタクシ達からあまねへのプレゼントですわ』
パム!?!違うパム!皆へのパム!」

あまね「∴ 皆、有難う」

透冀「菓彩少女。そろそろゆあんくん達を呼んでいい頃合いだと思
うよ」

あまね「ああ！」

協力してケーキを作ってくれた僕達に、謝意の言葉を伝える菓彩少
女。

ゆあんくんとみつきくんを呼んで、皆でケーキを堪能したのだっ
た。

□

N o s i d e

??? 「鳴滝さん。本当にアキノリ達は、この世界に居るの？」

鳴滝 「ああ、吉木君もこの街の何処かに居る。一先ずは和食スト
リートの『福あん』に泊めてもらおうといい。きつとあの三人に会える
筈だ」

??? 「分かった。雄大とジュニラムも貴方によってこの世界に飛ばさ
れたって聞いたけど、まさかあたしまで呼び出される事になるなんて
ね」

鳴滝「ブンドル団の料理人 ソルトルーは元財団Xの一人だ。意的に何を仕出かすか分からない…。夏海君には既に事情は話している」
???「そっか、それなら安心した。先ずはキバーラと合流するのが優先位だね。それにしても、又四人揃う日が来るなんてね…」

早く会いたいよ。アキノリ」

□

デイエンド「今日はバターフライピー。僕と乾杯だ」
オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア　く破壊者の食べ歩きく

冬美「アキノリ、レグレット。久し振り」

あまね「『思いやりこそマナー』… きつと、今の私に必要な言葉だ」

咲夜「記念すべき完全復活だ！」

第二十品：あまねのマナーレッスン！憧れのレストラン！／四人目

の旅仲間！キバーラ、完全復活

海に詠い、透かない冀望を抱け！

第二十品：あまねのマナーレッスン！憧れのレストラン！／四人目の旅仲間！キバーラ、完全復活

□
Sakuya side

ゆい「ん〜！デリシヤスマイル〜!!」

あまね「待たせて済まない。生徒会の仕事に手間取ってしまったて…」

俺達七人は昼飯を堪能しているところで生徒会の仕事で遅れたか
いちよと合流する。

雄大「生徒会長の仕事も忙しそうだね」

あまね「ああ。でも皆のためなら如何^{どう}って事ない…。それに、忙^{いそが}しいのは私の性に合っている」

らん「お疲れ様です!」

華満が^{ねぎら}労いの言葉を掛けると、ここねは両親が俺達を『レストラン
デュ・ラク』へ招待したいと申し出があった事を話した。

らん「ほわ〜!ここぴーん家のレストランって、全おしい〜なタウ
ンの憧れの的『レストラン デュ・ラク』だよね!」

ここね「ちよつと大袈裟^{おおげさ}すぎない…?」

ゆい「大袈裟^{おおげさ}じゃないよ。あたしも前から行ってみたかったもん!
湖^{みずうみ}の辺りに立つお城見たいなレストラン…」

「行けるなんて夢みた〜い!!」

あまね「私も是非伺いたい…。咲夜?どうかしたのか?」

咲夜「かいちよ。ゆいと華満^{ほとん}が殆^{ほとん}ど『食いバカ』だって事分かって
ないだろ…」

あまね「く、”食いバカ”…?」

俺はかいちよの肩を置きながら耳打ちしたタイミングでゆいの腹
の虫が鳴る。

ゆい「レストランの事考えたら、またまたハラペコった〜。定食お
かわりしちやおっと!」

あまね「えっ、『定食おかわり』…!?!」

らん「はふ〜。らんらんはソフトクリーム盛り盛りで食べちゃおっ
かな〜?空に浮かぶ真っ白なソフトにダイブしてフワフワ浮かびた
い。えへへ〜!」

あまね「『ソフトにダイブ』!?!」

咲夜「…ほらな。言った通りだろ?」

あまね「…急用を思い出した。失礼する!咲夜も昼食を食べ終
わったら直ぐに図書室に来い!」

俺は左手で顔を覆^{おお}う。あの食いバカ二人がマナーを学ばずにレス
トランに行ったら、恥をかく事になるのは確実だ。

危機感を覚えたかいちよは俺の口にたまごサンドを啜えさせると、
その場を立ち去った。

咲夜「流石にヤバくなってきたな。俺も急いで食わないと…!」

透冀「いや、此処はゆっくり食べた方が賢明だと思うよ」

雄大「そうそう。時間は待つてはくれないって言うけど、今は味
わって食べるのが身のためだぞ?」

咲夜「ううっ…!」

俺も後を追うべく昼飯を急いで食おうとしたが、レグレットと雄大
にゆっくり食った方がいいと注意された。

透冀「…食べ終わったのはいいけどさ、何で僕まで!?!」

咲夜「決まってるだろ。かいちよは俺達に助けられた身だ。だから
今度は…!」

透冀「アキノリ、前!」

咲夜「えっ?うわあっ!?!」

俺はレグレットに声を掛けられるが時既に遅し。そのまま誰かと
打つかってしまう。

打つかった反動で散らばった教科書と筆箱を一人の女子生徒に渡

す。

咲夜「悪い、大丈夫か!？」

???「ううん、こっちは大丈夫。せつかちなのも相変わらずだね」

透翼「君は、まさか…!」

咲夜「どうしたレグレット?あの女子生徒に違和感でも感じ…!
」

レグレットは女子生徒を見て、驚愕しながら声を上げる。

俺も女子生徒の顔を見ると、其処には見覚えのある顔があった。

???「アキノリ、レグレット。久し振り」

咲夜「冬美…!？」

身長は150くらいですみれ董色のロングヘアーに真紅の瞳を持つ少女。

かつて俺達と一緒に世界を旅した四人目の旅仲間 光 冬美。

俺の初恋の人物だ。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める?

□
T O U K I S I D E

あまね「：： という事で、『レストラン デュ・ラク』に行くに当たって：： 高級レストランに必要なマナーを教えたいと思う」

アキノリと菓彩少女はマナーレッスンを開始する。

恐らく、和実少女と華満少女がレストランで赤っ恥を搔いてしまうと危惧したのだろう。

なごみ亭の看板を『準備中』にしておいたため、心おぎなくやれる。

らん「はうく。マナーって：：!?!」

ゆい「例えば、『いただきます』とか『ごちそうさま』とか挨拶するのもマナーだよな?」

あまね「ああ。今回は上級の：：” m a n n e r , ” だ」

咲夜「俺より発音いいな」

ここね「そんなに肩肘張かたひじらなくても：：」

咲夜「考えが甘いぞここね。この食いバカ二人にはマナーというものを徹底的に刻み付ける：：!」

あまね「アシスタントの皆さん。此方こちらへ」

苦笑する芙羽少女だが、二人は『絶対にこいつらにマナーというものを叩き込む』と言わんばかりの眼差しを向ける。

コメコメ「コメ!」

メンメン「メン！」

パムパム「パム！」

「それではマナーモナー… レッスン1!!」

エナジー妖精組がアシスタントとしてレクチャーを実施する。

一問目はテーブルナプキンをスカートの様に首に巻く子狐少女と、両膝に置くおパム少女。

アキノリは子狐少女の可愛さに嘖き出しそうになっているが、今はその時じゃないと必死に我慢している。

ゆい「ええつと、ナプキンは…？」

らん「やつぱり服を汚さないために…」

ここね「……………」

あまね「さあ、答えは？」

和実少女と華満少女は子狐少女。僕は芙羽少女と雄大と同様、おパム少女の顔が描かれたプレートを取り出す。

あまね「正解はパムパムの『膝の上に置く』だ」

「ええ…つ!?!」

後でトナカイ少年君とキバーラがまるばつのシールを貼り付ける採点役となっている。

咲夜「レッスン2。お店の人を呼ぶ時は？先ずはコメコメ、次にクソ犬」

パムパム「すみませーんパム！」

向き合ったトナカイ少年君に対して沈黙しながら挙手する子狐少女と、声を出しながら挙手するおパム少女。

咲夜「三秒間待つてやる… 時間だ。答えを聞こう」

雄大「ちよつと早過ぎないか!?!」

咲夜「正解はコメコメの『黙って手を挙げる』だ」

「ええ…つ!?!」

ここね「呼ばなくても、お店の人が先に気付いてくれる事も多いから…」

咲夜「流石、レストランの娘。マナーに関しては大体把握しているな… 続けて行くぞ。レッスン3」

□

Sakuya side

あまね「流石ここね、全問正解だ」

咲夜「雄大とレグレットもやるな」

雄大「一緒に旅した時にマナーも習ったからな」

レグレット「こんなの朝飯前だよ。それに比べて…」

「きゅ…！」

あまね「二人は、やはり私達の心配していた通りだったか」

ローズマリー「どんよりオーラが広がってるわね」

結果としてはレグレット・雄大・ここねの三人が九問中全問正解にしたのに対し、食いバカ二人は全問不正解でぐったりとしていた。

店のドアが開き、ローズマリーが苦笑しながら様子を見に来ていた。

ゆい「どうしようマリちゃん！レストランの美味しい料理がどんどん逃げて行くよ!!」

らん「マナー無理、マナー怖い、マナー苦手、マナー駄目、マナー無理…」

ここね「そんなに気にしなくても…！」

あまね「いいや、マナーは大事だ」

咲夜「…いや、かいちよ。それぐらいにしとけ、とつくにゆいと華満の精神は0だ。気分転換で俺達がドレスを買ってやるよ」

あまね「ドレス？」

ローズマリー「それもそうね。レストランに相応しい格好をするのもマナーの一つでしょ？」

□

NO SIDE

セクレトルー「バツ、バツ、バツ… ナルシストルーめ。レシピツピを奪い損ねてばかり…！」

ソルトルー「牛、野菜、巨人、お菓子。そろそろ空中戦が得意なバグスターを生み出さねばなりません…」

場面は変わってブンドル団アジト。セクレトルーはナルシストルーが生み出した合体タイプのウバウゾーにレシピツピを奪い損ねた結果として、専用のタッチペンでこれまでの記録にばつ印を付けていた。

ソルトルーも四度の失敗を重ね、そろそろ空中戦が得意なバグスターを生み出そうと考案していた。

ソルトルー「おや？ナルシストルー、挨拶はどうしたのですか？挨拶はマナーの基本ですよ」

ナルシストルー「『マナー』ねえ…？」

小馬鹿する様な態度を取ったナルシストルーに、ソルトルーは少し不機嫌そうな表情をする。

ソルトルー「仕方ありませんね。セクレさん」

セクレトルー「…ええ。ああ、これはこれはゴータツ様！
ナルシストルー「ご機嫌麗うるわしゆう、ゴータツ様。次こそは必ず、レシピツピを集めて参ります…って、居ないし!？」

セクレトルー「やれば出来るじゃないですか」

ナルシストルー「お前ら！俺様を騙だましやがったな!？」

ソルトルー「坊っちゃんまが…。デイエンドが前に言っていたじゃないですか、『狐と狸は人を騙す』と。まあ、騙されるのは一回だけで十分ですからね」

ナルシストルーを評価したセクレトルーはシユプレヒコールを行うのを一瞬躊躇ためらっていたが、一度でも行わなければブンドル団の名に反する事を意味していた。

「ブンドル・ブンドル!!」

□

S a k u y a s i d e

ゆい「うわあ。すごい！」

らん「はう。色々ある〜！」

レンタルドレス専門店『R e n t a l | D r e s s | S t u d i o』に訪れた俺達。勿論、ジュニラムやキバーラも一緒に同行している。

レグレットの情報によると、レストランに行くためのスーツや装飾品だけではなく、何と着ぐるみまで取り扱っている模様。

あまね「レストランに行く時は清潔感が大事…。」

ここね「可愛い！グッズも素敵！こっちもキユート…！」

かいちよは図書室から借りた物だと思われる『すてきなマナー』の本を内容の一部を朗読していると、ここねが置いてあった商品に目を

付ける。

あまね「ここねにも、あんな面があるんだな…」

パムパム「ここねは一見クールに見えて、可愛い物が大好きパム！」
ここねの意外な一面を目の当たりにするかいちよ。

それから俺達はドレスやスーツを見る事にした。

ゆい「へえ、色々あるんだね〜」

らん「はう〜。キラキラすぎて、らんらんクラクラする〜！」

ローズマリー「ちよつと。コメコメ達にも着れそうなドレスあるわよ！」

雄大「俺も丁度、ジュニラムとキバーラが着れそうな物がありました。試着してみた方がいいですか？」

キバーラ「何言ってるの。まずは、物は試し、よ！」

ジュニラム『服ハ着レナイケド、付ケラレル物ナラ何デモイイヨ！』
エナジー妖精組は着れそうなサイズの服を、キバーラとジュニラムは装飾品を試着した。

その後は自分のイメージに合った色の服をレンタルする事にした一方、俺とゆいは鏡で試着中のここねに声を掛ける。

咲夜「色的に似合ってるじゃねーか」

ここね「そ、そうかな？有難う…／＼／二人はスーツの色決まった？」

咲夜「それがまだなんだ。スーツの長袖とズボンの色をネイビーにするかブラックにするかで迷うんだよ」

ここね「咲夜ならデイケイドの時と同じピンクが似合うんじゃない？」

咲夜「あのな、デイケイドの色はピンクじゃなくてマゼンタだ。褒められて顔が赤くなったから、遂に目元が狂ったか」

ゆい「そんなのどつちでもいいよ。ここねちゃんのお父さんとお母さんに会えたら、お礼言わなきゃだね！」

ゆいはそう言うが、ここねの両親は明日海外で出張旅行になってしまったため、自分が代わりに伝える事にした。

らん「見て見て〜！これすっごい可愛いよ！パンダ度満点だし。こ

の眼鏡を付けると更に……！じゃーん！パンダのらんらんだよ〜！」
ゆい「へえ〜。ちゃんと尻尾も付いてる！」

咲夜「パンダもいいが、その格好だと高級レストランには入れないぞ？」

俺達三人は声がした方角へ向くと、華満がパンダの着ぐるみを来て座っていた。

ここね「すごく可愛い〜！」

咲夜「……は？」

らん「だよね〜!？」

ここね「うん。でも、その服だと食事しづらいかも」

らん「確かに、そう言われてみれば……」

ここね「レストランに行く服装は食事する時の事を考えた物が良いと思う。食事を楽しむための場所だから……」

ここねの言う通りかもな。俺もトリコ達の世界で『食は生きる』という事を改めて学んだ。

その名残もあるからこそ、今でも理解出来る。

らん『『食事を楽しむ』？』

ゆい「それって、さっきあまねちゃんが教えてくれたマナーと一緒に？」

ここね「そう、父と母がよく言ってた。『食事を楽しむために周りが嫌だと思ふ事をしてはいけない』……そんな思いやりこそ、マナーだって」

ゆい「じゃあ、服の身嗜みみだしなもマナーも皆『ご飯は笑顔』になるためなんだ！」

ここね「そういう事」

ゆい「だったら、マナーも頑張れそうだよ！」

咲夜「おつ、早速やる気満々だな。それじゃあ、俺が今日の振り返りとしてまた問題を出してやるよ」

俺は立ち直ったゆいにマナー問題を復習しようとして提案を持ち掛ける。

華満はパンダの着ぐるみを着る事を諦めていたが、代わりにパンダ

の髪飾りをここねに見立ててあげたら大変喜んだ。

透糞「そういえば、菓彩少女にも似合いそうなドレスを芙羽少女が見つけたそうなんだ」

あまね「…そうか。後でここねにお礼を言わないとな」

ゆい「あれ？そういえばマリちゃんと雄大先輩は…？」

らん「メンメン達も…」

ローズマリー「こっちよ！」

ローズマリーが俺達に声を掛ける。

ゆい「ええっ！そんなに借りるの!?!」

レンタルした服が入っている持ち袋は合計19個。

見事な買いつぷりにゆいは仰天するが、俺は雄大の持つ持ち袋が八つになっている事に気付く。

恐らく八つの中の二つが冬美の分のドレス。如何やらレグレットは俺達が冬美と再会した事を話していたようだ。

□

T o u k i s i d e

ここね「じゃあ、明日レストランで」

『はーはー』

咲夜「……」

ゆい「咲夜君、さつきから浮かない顔してるけど大丈夫？」

咲夜「ああ、ちよつとな。帰ったら話す」

雄大「悪いレグレット。ゆいちゃんともりさんにも、この事は話しておくが」

透冀「うん、恩に着るよ雄大。さあ、僕達も行くか」

マシンデイケイダーとビートジユニラムに乗った二人の姿が見えなくなるまで見届けた後、僕は芙羽少女と菓彩少女の二人を家まで送るべくマシンデイエンダーに跨またがって走行させた。

あまね「ここね。どうしてもここねにお礼を言いたくて…！」

実家の付近で降りた芙羽少女を菓彩少女が名前で呼び止める。

彼女は今日の事を振り返る。自身のやり方に囚われ和実少女と華満少女を危うくマナー嫌いにさせていたところを、芙羽少女の『思いやりこそマナー』で救われた事に感謝の言葉を述べた。

あまね『思いやりこそマナー』…きつと、今の私に必要な言葉だ」

ここね「私のは、父と母の受け売りだから…。」

透冀「芙羽少女の両親は急用だと聞いたけど？」

ここね「うん。いつもそんな感じ…。」

寂さみしげに目を伏せる芙羽少女だが、その目は心なしか潤うるんでいた。

アキノリは転生前、当時1歳の家庭環境はとても穏やかとは言えない。父親はパチンコで母と祖父母は借金を課せられ、僕達の面倒うごも碌ろくに見てくれやしなかった。

当然裁判沙汰となり、離婚後の影響で母と叔父おじは両親ありがたに対する有難みありがたみを失う程に性格が一変した。

当時一歳の赤ん坊だった自分がこんな過去を背負っていたなら、自分なんて生まれなきやよかったと何度も思い、何度も悔やんだ。彼は転生前の記憶を代償にデイケイドの力を得たが、その過去をとおある財団に利用されてしまい、次世代型ロイミュード『セカンドロイミュード』が生まれてしまった。

だから僕は、芙羽少女の様な人間の気持ちを一倍理解出来る。

透冀「どんなに離れてしまっても人の心は繋がっている」

ここね「！」

透冀「僕とアキノリもかつて雄大と一緒に旅をしてたんだけど、と

ある出来事が原因で離れ離れになってしまったんだ…。でも僕は思うんだ。ここまで歩いてきた道はそれぞれ違うけど、今でも同じ朝日に照らされている。この赤い夕日や日常という青い日々も忘れたいはしないし、消えたりはしない」

あまね「ここねは既に両親から大切な物を受け取っている…。私もお陰で勉強になったよ。これからは思いやりという言葉を大切に…。！」

ここね「有難う！」

あまね「ええっ!?それは私の言葉だ。思いやりを教えてくださいましたお礼を…。！」

轟「ここね様。おかえりなさい」

感謝の言葉を先んじられて困惑する菓彩少女だが、その様子を一部始終見たと思われる轟さんがお出迎えしていた。

ここね「じゃあ、また明日！」

あまね「……………」

そんな芙羽少女の背中を見て、菓彩少女は手を振りながら佇んだ。

菓彩少女を家に送った僕は福あんに帰宅すると、アキノリが上から四番目のドアの前で体育座りをしていたのを目撃する。

その表情は後悔でいっぱいになっており、足元には白と紫の紙袋が置かれてあった。

二つの紙袋に入っているのは恐らく冬美の分と思われるドレス。彼女を仲間外れにさせたくはなかったのだろう。

雄大「レグレット。今帰ってきたのか？」

透冀「そっちでも何かあったみたいだね？」

咲夜「……………」

雄大「ああ。あの時の事をゆいちゃんともりさんに話したら、アキノリが急に怒鳴って…。今でもこの状態だ」

ゆい「冬美さんの事、雄大先輩から聞いたよ。透冀君、咲夜君と雄大先輩達が別れちやつた原因つて…！」

咲夜「ゆい、それ以上言うな。元はと言えば、俺がしたことなんだ…。」

アキノリはくぐもつた声で過去の過ちを自責する。やつぱり、まだあの時の事を根に持ってたんだね。そう。あれはアキノリのデイケイドライバーがまだネオに覚醒していない時の事だ。

野々少女の親友であるエリ少女を虐める様に仕向けていた真犯人が変身したドーパントに怒りを買われた事が引き金となり、激情態に変身した。

デイケイド激情態『地獄でも二度と俺に顔を見せるな…。人間の皮を被つた化け物が!!』

【アタックライド ポーズ！】

【サイドバツシャー！】

【コピー！】

【ギガント！】

一斉射撃を受けてもドーパントをメモリブレイク出来なかったが、致命傷を負ったのは確か。それに対して当時のアキノリはこう言った。

デイケイド激情態『ご自慢の再生能力があるのだろうか？ならば、その姿を灰塵と化すまでだ』

【ファイナルアタックライド ファ、ファ、ファ、ファ、ファイズ！】

クウガ『止める、アキノリ!!』

キバーラ（冬美）『アキノリ、止めて!!』

デイエンド『アキノリ!!』

デイケイド激情態『…死ね』

僕達三人はオーロラカーテンに閉じ込められたため、ただひたすら叫ぶ事しか出来なかった。ファイズの必殺技である『クリムゾンスマッシュ』を受け、ドーパントはその言葉通り灰と化した。

更にはエリ少女を虐めていた女子生徒達をも殺そうとした事は現在でも覚えている。

デイケイド激情態『虐めなんて言葉を使ってたんじや、虐めは永遠に無くならない。だったら、俺がこの腐敗した世界を破壊し……創造するまでだ』

野々少女に『この世の残酷さに気付かないお前はエリを虐めた奴らと同じだ』と突き放すと、アキノリはクライアス社の新入社員として行動する様になる。何とか僕達で正気を取り戻す事には成功したけど、この出来事がトラウマになってしまった。

クライアス社との最終決戦後、アキノリは雄大と冬美を今後の戦いに巻き込ませないがためにオーロラカーテンで元居た世界に送った。恐らく、この頃のアキノリは激情態の力を制御出来なかった事を責めていたのだろう。

アキノリ『俺はもう、激情態の力は使わない……いや、二度と使いたくない』

その後の一人旅では、紫怨やゴブタ君の同胞を生き返らせるための賭けとして激情態に変身した事もあった。

あの時もまだ力を制御出来ていなかったためか、リムルが説得せざるを得なかった。

リムル『待て、アキノリ！今のお前を見たら、紫怨達はどう思う?!』
はつきり言って、アキノリが変身するデイケイド激情態は、対象をカードに封印するかしないかは自分の意志で決められる。

激情態のカードがライドブツカーに遺っていた事を踏まえると、相当の力を持っている事が窺^{うかが}える。

雄大「アキノリ、今日はもう遅い。明日はレストラン当日だから、早めに寝よう」

咲夜「……分かった」

頷いたアキノリは雄大に支えながら、自分の部屋に戻って行った。

冬美の分のドレスが入っている紙袋を置いて……。

□

Sakuya side

ローズマリー「いいじゃない皆。とつても可愛いわ！」

ゆい「マリちゃんもね！」

ローズマリー「んふふ。ありがと！」

レストラン当日。俺達はレンタルしていた服を着こなしていた。

ゆいはピンクを基調とした和風のドレス、ここねは青を基調とした洋風のドレス、華満は黄色を基調としたチャイナドレス調のドレス、かいちよは濃い紫と薄紫を基調としたワンピース。

俺は黒スーツ、レグレットは水色のスーツ、雄大は赤いスーツ。ローズマリーも俺達男子と同じくスーツで、色はワインレッドを基調としている。

レストランの従業員と思われる男性が来ると、コメコメ達はカバンの中に隠れた。

男子従業員「ようこそお嬢様。少々お待ち下さいませ」

ここね「ええ」

らん「ふひょく！マシマシに緊張してきたく!!」

客A「うん、美味しい」

客B「ああ。思い出の味だもんな」

客C「昔はお金を貯めて食べに来たっけ？」

緊張感を保ちながら華満と雄大は偶然にレストランで料理を堪能している客の様子を窺う。

ローストチキンのレシピッピ「ピピピッ！」

客の一人がチキンを口に運ぶとほかほかハートが溢れ出し、それに反応したのかローストチキン个体が姿を現す。

ゆい「皆笑ってる…！」

あまね「ああ。緊張する必要はなさそうだ」
らん「うん！」

ここね「そう言ってもらえて、嬉しい」
咲夜「……………」

問題なのは、まだ冬美が来ていないという事だ。

俺はあいつと再会した時に、話もせずとその場から逃げてしまった。

情けないな……本当は嬉しい筈なのに、自然と体が震えてしまう。

雄大「大丈夫だアキノリ、冬美は絶対に来る」

透翼「ジユニラムとキバーラは冬美のところに居る。今は彼女を信じよう」

ここね「そういえば、その”冬美”って人は前に聞いたんだけど……
咲夜達と何か関係があるの？」

咲夜「ここねと華満にもまだ話してなかったな。実は……」

ローストチキンのレシピツピ「ピピピく!!」

俺が冬美の事を話そうとした矢先にローストチキン個体が謎の吸引力に引つ張られ、そのまま擦り抜けて行つた。

客A「ローストチキン？」

客B「何か大事な思い出があつた様な……」

咲夜「んだよ、こんな肝心な時にツ……！」

俺達はナルシストルーとソルトルーの二人と対峙する。
勿論、今回は浅倉も同行している。

あまね「待て。レシピツピを返すんだ！」

ナルシストルー「ふん、お断りだ」

ソルトルー「来ましたねライダーの皆さん。今回のバグスターは一味違いますよ……」

『アビアーバーード！』

ソルトルー「出でよ、ワタクシのバグスター！」

ナルシストルー「混ざれ、モットウバウゾー！」

今回のモットウバウゾーは胴体となっているボウルを基準に両腕の器具は弓状の赤い銃となっている。後でレグレットに何の器具の

名前か聞こう。ソルトルーもバグヴァイザーⅢに装填されたライダーガシヤットを装填し、着弾した青い光弾がバグスターの姿を形作る。

両肩装甲は刺の付いた卵の殻からとなっており、仰向けになった鳩時計はとに嵌まり込んだ様な姿をしている赤い頭部の鷲わし。

右手には巨大な釘を、銃と一体化していると思われる左手は手袋を嵌めているせいで銃の形をジェスチャーしてる様にも見える。

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

??? 「ワシの名はウオブリー。レベルは20や!」

ローズマリー「デリシヤスフィールド!」

大鷲のバグスターはどうやら関西弁の様だ。

ゆい「皆さん。準備は宜しくて?」

「「勿論ですわ!!」」

ローズマリーがいつものパターンでデリシヤスフィールドを展開し、ゆい達は変身に移行する。

□

「「プリキュア・デリシヤスタンバイ!パーティーゴー!!」」

□
ゆい「にぎにぎー！」
コメコメ「コメコメ！」
ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□
ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
「「シエアリンエナジー！」」
コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフオツ!？」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

□

あまね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー!!」

「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

「シエアリンエナジー！」

「トツピング！」

「ブリリアント！」

「シャインモア！」

□

ファイナーレ「ジェントルに、ゴージャスに、咲き誇るスイートネス！キュアファイナーレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

「『デリシヤスパーティ♡プリキュア！』」

□

ナルシストルー「ご機嫌よう。プリキュア」

ソルトルー「それに、仮面ライダーの皆さんも」

ヤムヤム「ひよへっ!?何か挨拶してる…!」

ソルトルー「何を言うのです。挨拶はマナーの基本ですよ?」

ローズマリー「確かに言ってる事は正しいわ…」

ナルシストルー「行け、モットウb…!」

ジュニラム『オ待セテ致シマシター!緊急デリバリーデ御座イマース!!』

ローズマリーの正論に応える様にジュニラムが急降下しながら間に入ってくる。

冬美「アキノリ!皆!」

雄大「冬美!」

透翼「その様子だと、覚悟を決めたんだね?」

俺達も変身しようとした刹那、白いドレス姿の冬美が飛行中のジュニラムから降りて駆け寄って来た。

冬美「うん。それに、アキノリとまだちゃんと話せてなかったから…」

雄大「…アキノリ。ちよつと借りるぞ」

咲夜「ちよつ、おい。待てつて!ゼロデイケイドライバーは俺とレグレットだけにしか使えないんだぞ!」

雄大「レグレットがブンドル団を裏切った際にデイケイドライバーで変身した事があつただろ?それと一緒にだ。お前とレグレットがデイケイドに変身出来たなら、俺だって変身出来る筈。そう確信したんだ」

雄大は物は試しと言わんばかりに腰に巻いたゼロデイケイドライバーのサイドハンドルを開き、ライドブツカーからデイケイドのカードを取り出す。

雄大「アキノリ、冬美との話が終わったら直ぐに加勢しろ。俺もレグレットもお前を信じてるぞ」

【カメンライド デイケイド!】

【「デイエーンド！」】

【「変身！」】

『GUN FORM』

電王G「お前達、倒すけど良いよね？答えは聞いてない！」

雄大は無数の人影と重なる事でデイケイドに変身。レグレットとローズマリーも変身を完了する。

デイケイド(雄大)「レグレットとリュウタはバグスターを、俺はプレシヤス達のサポートに入る」

デイエンド「ちよつと待つて。浅倉君は常に君を狙っている…彼は執念深い性格だ。此処はイリユージョンを使った方が妥当だろう」

デイケイド(雄大)「えつと、イリユージョン…イリユージョン…あつたあつた！」

雄大はライドブツカーを開くと、イリユージョンのカードが取り出した。ライドブツカーは変身者の任意で好きなライダーカードを引き出せる便利な武器だ。

早速、雄大はライドブツカーにイリユージョンのアタックライドカードを装填した。

【アタックライド イリユージョン！】

デイケイドA(雄大)「うわあつ!?本当に増えた！」

デイケイドB「その声は雄大か!」

デイケイドC「マジか…！リーダーはどうした!」

Cは本体であるAの変身者に違和感を感じ、俺が何処にいるのかを尋ねる。

やつぱりデイケイドが分身した人格は、流石に俺の声にはならなかった。

デイケイドA(雄大)「今回は俺が変身者だ。アキノリが冬美との話を着け次第、何とか持ち堪^{こた}えるぞ！」

デイケイドB「分かった。そういう事ならお手のものだ」

デイケイドC「リーダーが話を着けてくるまで、俺達でどうにかしよう！」

本体である雄大はプレシヤス達のサポートを、Bとレグレットはバ

グスターを、Cと電王は浅倉の相手を任せる事にした。

ナルシストルー「気を取り直して行け！モットウバウゾー!!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー！」

咲夜「……………」

冬美「さてと、あたしと雄大抜きの旅がどうだったか感想聞かせてもらおうか？」

□

DIEND SIDE

ウオブリー「ほな、喰らいな！」

ウオブリーは滑空しながら左手の銃口を向ける。

足場を撃つ事度に砂煙を巻き上げ、視界を晦まされた僕達に鋭利な翼で特攻してきた。

【フォームライド ドライイブ テクニック！】

【アタックライド ドア銃！】

ドア銃を右手に持ち、タイプテクニックにカメンライドしたB個体は頭部のメイン視覚センサー『マルチハイビームアイ』による強力な発光機能でウオブリーを牽制させる。

ウオブリー「うわっ!?眩しっ！」

デイケイドB「冷凍食品にしてやる！」

【アタックライド ロードウインター！】

ウオブリーの両翼りょうよくが砂煙を無意識に払い退けてしまい、怯んだ隙にBはライダーカードを装填する。

タイプテクニックのタイヤが前方に雪の結晶が描かれた円盤がぶら下がる白いタイヤに変化し、同じくシフトブレスに装填してあるシフトテクニックが車体中央の氷をイメージした装飾が特徴的な白いシフトカ『ロードウィンター』に変化する。

タイヤに装着された瞬間冷凍装置『フロストリーマー』から内部機能を停止させる程の冷凍粒子が放たれるが、ウオブリーは両翼を大きく羽ばたかせながら飛翔する。よく見てみると両脚の爪が完全に凍結しているのが分かる。

ウオブリー「ようやくってくれたな。だが、この凍った足を上手く利用させてもらうで！」

意気揚々としたウオブリーは、氷の鉤爪かぎづめを使った足技で僕達を翻弄ほんろうする。

銃弾を避けながら距離を詰めたところで左脚による踵落かかととしを僕は左腕で受け止めるが、ウオブリーがほくそ笑むと左腕が一瞬で凍結した。

デイエンド「まさか、これを狙って…?!」

ウオブリー「せや、ワシは空の支配者や。荒鷹も恐れるところをワシは飛ぶんや！はあッ!!」

今度は連続で後ろ蹴りを繰り出し、僕の装甲が掠かすれると同時に凍結させる。

体の温度を奪う程の凍傷を耐える根性を持つてるバグスターは初めて見たけど、このままだと凍傷するどころか体力と視力を同時に奪われてしまう。

そう判断したBはライダーカードを装填しながら駆け出した。

デイケイドB「自ら冷凍食品になりかけても戦うその根性… 気に入った！」

「フォームライド ゼロウワン… フレイミングタイガー！」

『Gigant flare! フレイミングタイガー!』 Explosive power of 100 bombs. 』

ゼロワンの仮面が二つに分かれ、両腕の手甲となる。

両肩・胸部・両手・両腿に真紅のアーマーが装備され、頭部は青い複眼を持つ虎の顔を模している。

熱を纏ったゼロワン フレイミングタイガーとなったBは高い柔軟性を備えた両腕とウオブリーの凍結した両脚が打つかり合う。

打ち込まれた箇所は熱を浴び、切り裂かれた箇所は一瞬で凍結する。だがフレイミングタイガーは常に熱を纏まとっているため、凍り付いた箇所がみるみる溶けていった。

ウオブリー「あんた中々やりよるな。せつかくワシが作った氷の鉤爪は溶けたかつてな！だが、お前らはまだまだ嵐の中やで！」

氷の鉤爪が無効化されても遣り甲斐があったウオブリーは両翼で飛翔しながら、俺達に提案を持ち込んだ。

ウオブリー「空中戦で決着つけたる！デイエンド、あんたも来いや！」

デイエンド「いいの？僕も君との戦いに混ざれば、それは正々堂々とは言わないけど……」

ウオブリー「ワシはええ。こうやって胸たかぶが昂たかぶってる奴と戦ったの生まれて初めてや！敵さん来よったら二人でも三人でも堂々と受け入れる。それがワシの遣り甲斐なんや」

僕達がこれまで戦ってきたバグスターの中でも意欲的だ。

僕もかつては怪物だった。彼の意見を鵜呑うのみにしない訳がない。

デイエンド「：分かった。それが君の礼儀だと言うのなら僕も参加させてもらうよ」

ウオブリー「おおきに！」

『フォームライド ゼロウワン… フライイングファルコン！』

『Fly to the sky! フライイングファルコン!』 Spread your wings and prepare for a force.』

分割されたゼロワンの仮面が側頭部に移動し、スカーレットからマゼンタカラーの装甲はやぶせに差し替えられる。

緑の複眼を持つ隼はやぶせを模した頭部。ゼロワン フライイングファルコ

ンになったBは付加された飛行能力でウオブリーに向かって行く。

【カメンライド アギト！】

【ファイナルフォームライド ア、ア、ア、アギト！】

ゼロディエンドライバーで召喚したアギトが背後から黄色い衝撃波を受けると、浮かび上がったアギトの紋章と共に変形をし始める。『マシントルネイダー』のスライダーモードを模した『アギトトルネイダー』に変形を果たすと、僕は台座の上に乗ってウオブリーに向かって行った。

□

A (YUUDA) SIDE

【フォームライド クウガ ドラゴン！】

ディケイドA「やっぱクウガ一択だな」

両腕の銃口に向けたモットウバウゾーは、鞭の様なレーザーを放つ。

当然飛び上がったプレシヤス達に避けられた事で地面に着弾し、土煙が発生する。

プレシヤス「1000キロカロリーパー…ンチ!？」

頭上を見上げたと同時にプレシヤスはカロリーパンチを、俺はドラゴンロッドの先端に封印エネルギーを込めてモットウバウゾーの腹部に叩き込もうとした。

「うわあーっ!？」

ぽっこりとした腹部がお腹に力を入れる様にその形を変化させ、皿の見込みの形状となる。

そして腹部を元の形状に戻す勢いで俺達を吹っ飛ばす。

ヤムヤム「バリバリカッターブレイズ！」

モットウバウゾー「ウゝバゝツ！」

ヤムヤムもカッターブレイズを放つも、きつきと同じパターンで技を相殺されてしまう。

ジュニラム『アノポツコリオ腹デ相殺出来ルナンテ聞イテナイヨ！』

デイケイドA（雄大）「まあ、基もととなつた器具の一つがボウルだからな。腹部が駄目なら頭で……！」

???「私に任せろ！はああーツ!!」

モットウバウゾー「ウ……バ……!」

突如乱入してきたブラペの飛び蹴りがモットウバウゾーの頭部に直撃。

よろけた事で隙が生まれ、ファイナーレはクルーミーフルーレによるファイナーレブーケを放つ。

ファイナーレ「プリキュア・ファイナーレブーケ！」

モットウバウゾー「ウババババババ……ウバツハー!」

モットウバウゾーはきつきの攻撃で千鳥足になっていたため、跳ね返す暇もなく転倒した。

ファイナーレ「又あの男……!?!」

ジュニラム『ブラペダ！来テクレタンダ！』

デイケイドA（雄大）「来るタイミングが合い過ぎてるな」

ナルシストルー「全く……無関係な女を連れて来たカブトムシに続いて割り込んで来るなんて。マナー違反だよ」

ファイナーレ「思い出を滅茶苦茶にした貴様に、マナーを語る資格などない！」

ジュニラム『ソーダソーダ！猫舌！食ワズ嫌イ！口ナシ芳一！』

『ADVENT』

ジュニラムの罵倒ばとが気に入らなかつたのか、C達と交戦していた王蛇はベノバイザーにアドベントカードを装填。

召喚されたエビルダイバーとジュニラムによる空中戦が繰り広げられた。

会話中のアキノリと冬美に、そしてナルシストルーに憤慨するファイナーレにモットウバウゾーのレーザーが不意に放たれる。

「「「危ない!!」「」」」

咲夜「チツ！」

話の途中だったアキノリが舌打ちをしながら左手でオーロラカーテンを壁として展開し、スパイシーがメロンパン型のバリアを貼って二人を守った。

更には右手を翳^{かぎ}してオーロラカーテンをもう一度展開し、モットウバウゾーを弾丸の雨で牽制^{けんせい}させた。

咲夜「話の途中だ。邪魔するな…！」

モットウバウゾー「ウバく!!」

プレシヤス「はあああー…ツ!!」

モットウバウゾー「ウ！ウバ！ウババ！ウバーツ!!」

ヤムヤム「ホワチャー!!」

モットウバウゾー「ウバーツ!?ウバ！ウババババ！ウバーババババ！」

プレシヤスはモットウバウゾーが振り下ろした右腕を馬跳びの要領で助走を付けながら右拳を叩き込もうとするが、残った左腕で受け止められる。

彼女に続く様にブラペとヤムヤムが加勢し、格闘技でモットウバウゾーで攪乱^{さくらん}させる。

□

Sakuya side

冬美「やっぱ変わってないね。そのウザったいところ」

咲夜「そういうお前こそ、生意気な態度は相変わらずだな…ぐっ!?ハハハハハハハツ…!!」

俺は自分の態度を指摘された冬美に右側の首を突かれてしまい、そのまま窒息しかねない程に爆笑する。

そんな笑い転げる俺を見て、冬美はふふっと笑ってみせた。

冬美「… はあ、もうなんだろ。あんたと一緒に笑ってたら、もう何を話してたのか忘れちゃった」

咲夜「… 冬美。済まなかった!!」

俺は冬美に土下座をしながら謝意を述べる。

咲夜「俺、本当は寂しかったんだ! 雄大とお前を突き放して後悔してたんだ!! 俺は… 俺はただ、四人でもっと旅をしたかった」

冬美「… 人の命を奪う必要なんてなかった」

咲夜「そうだ。そうすれば、こんな事にはならずに済んだ。お前らと別れてから、一人旅をしてる途中で出会った褐色かちいろの少女が言ったんだ…」

えれな『うちの弟と妹もよく喧嘩してき、ホント参っちゃうんだよね。でも、いつも言ってるんだ『先ず、相手の話を聞いてあげな』って』

俺はひかる達の世界でえれなの言葉を思い返す。あの言葉は当時、雄大と冬美を突き放した俺の心に深く突き刺さった。

あの時、激情態に暴走する前の俺が逸早く相談していたら、こんな悲劇は起こらなかった。二人を突き放さずに済んだ。

後悔の念に押されながらも俺は続けて声を出した。

咲夜「あのドーパントを自分の手で殺めた時、何で心が滾たぎっていたのかよく分からなかった。他人の存在価値を否定する様な奴がどうしても許せなくて、頭ん中が混雑してて、自分勝手に辺りに怒鳴り散らして… あの時の俺はお前らに迷惑を掛けまくったし、取り返しのつかない事をしてしまったんだツ!!」

本音を言う度に俺の目には大粒の涙が流れていた。

咲夜「ごめんなさい… ごめんなさい… ごめんなさいっ!!」

ガキの様な慟哭どうこくを上げてても、冬美は黙然としている。

地べたを付きながら泣き、鼻水を垂らした情けない姿を見ても流石に許してもらえないだろうな…。

冬美「… なんだ。ちゃんと素直に言ってるじゃん。人を殺す事が怖いって感じたあんたは、それほど恐い思いをしてたって事でしょ? あんたには命をかけがえのないものだって理解することが出来る、誰

にでも優しく接することが出来る思いやりの気持ちがある。だから……あの時あんたを止める事が出来なかったあたしも、雄大も、一緒に罪を背負って……いや、一緒に分かち合いながら償うつもりであるから」

咲夜「冬美。こんな俺を許すっていうのか？人を無惨に殺めてしまった俺を……」

冬美「当たり前でしょ？でも、これだけは約束して。今度激情態になってあたし達を突き放したら、一生旅してあげないから」

そう警告した冬美はぐしゃぐしゃになった俺の顔をハンカチで拭い、差し伸べた手で立ち上がらせる。

かつてはながエリの涙を拭った様に……

咲夜「有難う冬美。俺はまだまだ未熟だ……やっぱり、お前と雄大が居ないと駄目だよ」

冬美「まだそうとは決まってるでしょ？キバーラ」

キバーラ「はいはい！」

冬美が一声掛けると、キバーラが姿を現す。

冬美「行くよ」

咲夜「ああ……ってか、ちよつと待て。今雄大がデイケイドに変身してるんだ！雄大！雄大ー！！」

俺が強く呼び掛けても、レグレットと雄大は目の前の敵と応戦中だったため無理だった。

咲夜「駄目だ、全然聞こえない……」

冬美「あたしも多分そうなるかなって予想してた。鳴滝さんからある物^をを借りてきて正解だった」

咲夜「ある物[？]」

冬美が取り出したのは、右側に金のラインに囲まれた赤い球体が埋め込まれているベルトとナックルダスターの様な形をした変身アイテムだった。

咲夜「これって……『イクサベルト』!?よく借りてくれたな……」

冬美「キバの鎧はファンガイアの血を引いていない人間には負担が掛かるんでしょ？だから、これしかなかった」

咲夜「これで俺も戦えると言いたいところだが、問題はスーツに適合出来るかどうか……いや、俺なら変身出来る。こうなりや一か八かだ！」

冬美はキバーラを摘み、俺はイクサベルトを腰に巻いてジエネレーター発動機キー『イクサナツクル』の電気接点『マルチエレクトロターミナル』を左掌ひだりてに当てる。

『レ・ゲ・イ?』

咲夜「よし、鳴った！」

上手く適合に成功し、機械音声が鳴った事を確認した俺は喜びの声を上げる様子を冬美は少々驚いていた。

イクサナツクルを持った右手を突き出し、腰を少し落として八極拳を思わせる構えを取った。

この変身ポーズは俺が変身していたデイケイドの変身ポーズを彷彿ほうふつとさせている。

「変身！」

『フィ・ス・ト・オ・ン!』

キバーラ「チュツ！」

イクサナツクルをイクサベルトの左側に接続させると、赤い宝玉『イクサジエネレーター』から金色の十字架が俺の目の前に飛び出す。

そして十字架を基点に形成されたスーツと一体化した俺を、仮面ライダーイクサイクサ セーブモードに変身させる。

冬美もキバーラの眩きと共に無数のハートに包まれ、仮面ライダーキバーラへと姿を変えた。

イクサ「雄大、レグレット!遅れて済まかった！」

デイケイドA(雄大)「仮面ライダーイクサ!?いや違う……その声はアキノリか!？」

デイエンド「それはイクサベルト……それを何処で!？」

イクサ「説明は後回しだ!せっかく四人揃ったんだ……久々の決め台詞、行くぞ！」

今度は届いた様でレグレットと雄大は目の前の敵と戦いながら決め台詞を言う。

イクサ 「歴史を繋ぐ継承のパワー！仮面ライダーイクサ！その命、神に返しな！」

キバーラ 「世界に輝く女騎士ヴァルキリー！仮面ライダーキバーラ！貴方あんたの野望、止めてあげる（わ）！」

デイケイドB・C 「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語り始めようか！」

デイケイドA（雄大） 「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダーデイケイドクウガ！皆の笑顔は…俺が守る!!」

デイエンド 「後を継らず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択を！仮面ライダーデイエンド！僕の旅の行先は…いや、僕達の旅の行先は！僕達が決めるツ!!」

電王G 「僕はもう言ったからいいよ」

リュウタロス は既に変身後の台詞を言ったから、無理に言う必要はない。

イクサ 「全てを破壊し、全てを繋ぐ！」

「「「「我ら、仮面ライダー！」「」「」」

挿入歌 『夢乃ゆき／BWL AUTE BEIRRD』

イクサ 「さあて、記念すべき完全復活だ！デカブツにはデカブツで対抗しないとな」

俺は白いラインが左右に走っている『フェッスル』と呼ばれるアイテムを、イクサベルトの左側にある読み取り装置『フェッスルリリーダー』に差し込んで右側のイクサナツクルで押し込む。

『パ・ワ・ア・ダ・イ・ザ・ア』

地面から土煙を巻き上げながら出現したのは、白いティラノサウルス型の巨大重機『パワードイクサー』だった。

俺は直ぐに左側のコックピットに乗り込み、ベルトから取り外したイクサナツクルをセットする。

ナルシストルー 「ふん、思いやりなど反吐へどが出る…ライダーが増えても結果は同じだ。やってしまえ！モットウバウゾー!!」

モットウバウゾー 「ウバツ！」

モットウバウゾーの声と共にパワードイクサーの偏光へんこうグラス『パー

『テイクルアイ』が真昼の如く発光する。上手く起動出来て良かった。プレシヤス、ヤムヤム、ブラックペツパーの三人は既に疲弊状態ひへいとなっているが、雄大達もまだまだ行ける様だ。

鞭状のレーザーをサンドプレスで挟んで相殺するスパイシー。それに続いて俺はコックピットにセットしたイクサナツクルの操作に連動している左右八発もう設けられた次世代電子モニター『パワードサーボモーター』が、液体爆薬やナパーム弾薬などが詰められているマルチポッド『イクサポッド』を上顎部あご『ザウルクラッシャー』と下顎部『アンダークラッシャー』で掴み、モットウバウゾー目掛けて投擲とうてきする。

モットウバウゾー「ウバツ!？」

モットウバウゾーが投擲されたポッドの爆発で怯んでいる隙にキバラーが愛剣のキバラーサーベルを逆手で持ちながら背中に紫の粒子を翼に変えて飛翔する。

キバラー「ハ、笑いのツボ!」

モットウバウゾー「ウバツ!?!ウバーハツハツハツハツハ…ウバハハハハハハハハハ!!」

ファイナーレ「離れてろキバラー。プリキュア・デリシヤスファイナーレファンファーレ!」

サーベルの柄で右側の首を突かれて爆笑するモットウバウゾーにファイナーレは浄化技を放つ。

モットウバウゾー「お腹いっぱい!」

「ごちそうさまでした!」

ローストチキンのレシピッピ「ピピピ〜!」

モットウバウゾーの消滅に伴い、ローストチキン個体は解放された。

しかしこれだけでは飽き足らず、俺はイクサナツクルのマルチエレクトロターミナルに似ている銀のフェッスルをイクサドライバーに読み込ませながらパワードイクサーのアームに乗り込み、放り出された勢いでイクサナツクルを構える。

『イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ライ・イズ・アツ・プ』

イクサ「ブロウクン・フアング！」

B達との距離を空けながら銃撃するウオブリーの背後からイクサナツクル振り下ろすが、案の定右側に避けられてしまう。

ウオブリー「不意打ちのつもりやったが、惜しかったなあんちゃん…ぐっ、何やて!？」

だが、俺はこれしきの事で諦めたりはしない。イクサナツクルのグリップ部分『パワーグリップ』を左手に持ち返ながら右手でウオブリーの胸元を掴み、五億ボルトの電流を流し込む。

ウオブリー「うおおあああッ!？」

ウオブリーは電流が体中に走るあまり、苦痛の声を上げる。

このグリップはイクサの掌に確実に吸い付くため、脱落を防止出来る。

両翼の安定が崩れた事で、俺はBとレグレットに合図を送った。

イクサ「今だB、レグレット!」

【ファイナルアタックライド　ゼ、ゼ、ゼ、ゼロウワアン…!】

【ファイナルアタックライド　ア、ア、ア、ア、アギト!】

デイケイドB「言われなくてもそのつもりだ。レグレット、使え!」

デイエンド「有難く使わせてもらうよ。デイエンドトルネイド!は

あああ…はあッ!!」

ファイナルアタックライドのカードを装填したBに手渡されたライドブツカーをレグレットはウオブリーにすれ違いざまの横一文字斬りをお見舞いする。

Bも続いて背中に両翼を生やした状態でウオブリーに組み付いて地面に大きく叩き付ける。

イクサ「ぐっ!？」

ウオブリーは最後の足掻きとして両翼から飛ばした青い羽を、俺の左の脹脛はざひに命中させる。

フ

ト ク パ ン イ グ ン イ ラ

「デイケイドB「はあああ…
はあああーっーっーッ!!」

フ
ラ
イ
ン
グ
インパクト

ウオブリー「ぐあああーっ!!」

飛行して追撃する超高速の飛び蹴りでトドメを刺し、ウオブリーは断末魔を上げながら爆散した。

□

I X A S I D E

ファイナーレ「おかえり」

ナルシストルー「やれやれ。次は挨拶抜きで行くか」

ソルトルー「今回は良い学びになりましたよ。またお会いしましょう、坊っちゃん」

ローストチキン個体がハートフルーツペンダントに格納されると、ナルシストルー達は姿を消した。

ウオブリー『後は頼んだで。我が息子よ…』

バグヴァイザーⅢの液晶画面越しのウオブリーが意味深な言葉を残していた事はまだ知らなかった。

BとCは役目を終えたのか、ぼやけながら消滅する。俺はさつき左脚に突き刺さったウオブリーの青い羽を確認してみると、羽柄うへいのところがオレンジ色に小さく発光している。

恐らく、この小さな光はバグスターウイルスで、俺の体内に流れ込んでいる。俺以外に感染する確率はきわめて低いが、変身解除後は無闇に引き抜かないでおこう。

若しも羽を引き抜いてしまえば、バグスターウイルスが溢れ出るだけでなく、デリシヤスフィールド内に居る…。いや、デリシヤスフィールド外にいる人達を感染させてしまう虞おそれがあるからだ。

イクサ（…）これは、後でレグレット達に診みてもらおう)

デイケイドA（雄大）「冬美。やっぱりお前もこの世界に飛ばされたのか？」

キバーラ（冬美）「うん。鳴滝さんに『ソルトルーには気を付けろ』って警告されたから…。今言ってもいいかな？」

デイエンド「丁度僕も知りたかったところなんだ。何故君達二人がこの世界に来たのか、ブンドル団の料理人 ソルトルーは一体何者なのかを…。やっぱり、『財団X』と何か関係があるの？」

イクサ「財団X!？」

その言葉に俺は声を上げる。

財団X。百年以上前に存在しており、俺の失っていた記憶の感情を利用してレグレット達セカンドロイミュードを生み出した元凶とも呼ぶべき闇の組織。

はな達の世界で雄大達と別れた後、セカンドロイミュード最後の一体となってしまったレグレットはひかる達の世界で戦った元ノットレイダー ドラクルとの戦いにて、イマージジュエルに『フワを元の姿に戻して自分を一生歳を取らない人間にしてほしい』との願いで事実上人間になり、セカンドロイミュードは撲滅した。

キバーラ（冬美）「うん。レグレットが察してた通り、ブンドル団の料理人 ソルトルーは元財団Xのメンバーなの」

デイケイドA（雄大）「俺もその事は鳴滝さんから聞いたけど、言いそびれてさ。本名は確か、塩谷しほだった気がするけど…。」

「デイエンド、」塩谷、だつて…!?!」

雄大から告げられたソルトルーの本名にレグレットは驚く。

レグレットは俺の転生前の記憶の全てを持っている唯一の存在だからな。ソルトルーの正体を聞けるのはこのタイミングが一度きりだ。

イクサ「レグレット、何か知ってるのか？」

デイエンド「ああ、塩谷祐平^{しおやゆうへい}。僕にとっては良き父親の様な存在だつたんだ…通りで顔が似ていたし、僕がセカンドロイミュードだつた事も知っていた訳だ。それにしても、何故あの人ブンドル団なんかに…？」

話によると、ソルトルーは財団Xに所属していた頃にセカンドロイミュードの記念すべき第一号であるレグレットを『坊つちやま』と呼びながら我が子の様に育てていた。だが……!

祐平「坊つちやま! 例え別の世界に放り出されようとも、必ずやワタクシが貴方を見つけ出してみせます。それまではどうか! どうかご無事で…!」

レグレット『塩谷ー!』

『セカンドロイミュードの個体数を増やすための道具』と他の財団メンバーに称されていたレグレットを全力で庇っていた事もあったが、組織に違反した事で別世界に繋がる空間に飛ばされてしまった。

その空間に繋がっている世界は指定ではなくランダムで、恐らく飛ばされた場所が偶然か否かクツキングダムである可能性が高い。

そこで何らかの経緯でゴータツツと出会い、レグレットとの再会を果たすためにブンドル団に加入した…。

真相はまだ闇の中だが、これから明らかになっていくだろう。

プレシヤス「あれ? ブラペも消えちやつてる…。」

ファイナーレ「ブラックペッパー… 奴は一体何者なんだ?」

プレシヤスが辺りを見渡しても、ブラックペッパーの姿はなかった。

更なる疑問を抱くファイナーレ。状況はどうあれど、レストランに居た客達の思い出を取り戻した事に変わりはない。

俺達はデユ・ラクに戻る事を優先した。

□

Sakuya side

「あまね！」

あまね「どうして兄さん達が…!?」

突然の黒と紺のタキシードを着ていたゆあん達にかいちよは驚く。

実は昨日、ローズマリーがここねに頼んで二人を呼んでおいたのだ。

ローズマリー「二人共、メガ盛りに似合ってる〜！」

ゆあん「お招き頂き、辱い…。」

みつき「皆、湖畔こはんに咲く可憐かれんの花の様だね」

???「すみません！遅刻してしまつて…！」

背後から唐突に声が聞こえる。

白いタキシードを着た品田が俺達の方へ赴くと、膝を突きながら息を切らす。

ゆい「マリちゃん。拓海も呼んでたんだ！」

拓海「いいだろ、別に…ん？」

ゆい「？」

拓海「な、何でもね〜！／／／つてか、何だよ門津！その顔！顔を紅潮する品田を見て俺は顔がにやけてしまうが、親指を立てた

冬美を見て首元を押さえる。

本来ならゆいが品田に『どう？似合ってる？』って言う立場だが、食いバカを卒業出来るまではまだまだ時間が掛かりそうだ。

「ここね」では、頂きましよう…。」

少し時間が経ってから、俺達はデュ・ラクの料理を堪能する。

ナプキンを膝の上に置き、皿の中心に置いてある料理を左手のフォークで抑えながら、右手のナイフで一切れ程度に切る。

そして切った料理をフォークで口に運び、その味を噛み締める。なるべくゆつくりと味わつとかないと。

唇と歯と舌の三つのコンビネーション。それは魚料理を口に入れた時にも想像出来るだろう。

ゆい「デリシヤスマイルく…！」

ゆいもいつもの口癖をマナーとして控えめな声量で言った。

俺達ライダー組四人も、ゆい達のテーブルの右側で料理を堪能している。

透冀「…うん、美味しい。悪くないね」

雄大「しっかし驚きだなあ。まさかレグレットがセカンドロイミュードから人間になったなんて、俺でも予想外だったさ」

冬美「ホントだよ。あたしと雄大が居ない間にそんな事があつたなんて…アキノリ？何で急に泣いてるの!？」

咲夜「うっ…うぐっ…えぐっ…ううっ…！」

俺は嬉し涙を流しながら料理を口に運んだ。もう二度と揃う事もないと思つていた光景が、こうして再び俺の目の前に映っている。

こんな嬉しい事にはない。

咲夜「俺、嬉しいんだ…こうして四人揃って飯を食べる事なんて、もう二度とないかと思つてたからっ…！」

透冀「アキノリ…。」

咲夜「冬美、雄大。済まなかった…お前らを突き放して」

冬美「もういいよ、そんな話。もう過ぎた事でしょ？」

雄大「冬美の言う通りだ。今度お前が激情態になった時は全力で止めてやるからさ、もうあの出来事を引き摺らなくてもいい。俺達

は……いつでもお前の味方だ」

俺は二人の肩を寄せながら組んだ。

咲夜「もう二度と、お前らの期待を裏切る様な真似はしないと誓う。だからもう一度、俺と一緒に戦ってくれるか？」

冬美「言われなくても」

雄大「俺も冬美と同意見だ」

透翼「僕からも、また宜しく頼むよ」

和解を果たし、新たな仲間が加わった事にゆい達は歓迎した。

ゆい「これから宜しくね。冬美ちゃん！」

らん「らんらんも。ふゆゆん！」

女子「あのお姉さん達、綺麗……お城の舞踏会みたい！それに、あつちのお兄さん達も……！」

母親と一緒にデュ・ラクに来ていた女の子が俺達を称賛すると、ローズマリーがある事を提案する。

ローズマリー「いいわね。だったら踊りましょう！」

ここね「えっ、本当に……!?!」

咲夜「ここね。今こそ、ピクニックの時の失敗を挽回ほんかいする時だ……と言いたいところだが、先ずは料理を食べてからだな」

食事を食い終えてから数分後、即席の舞踏会で俺達は楽しく踊ったのだった。

□

キバーラ（冬美）「今日はレッドワイン。あたし達と、乾杯！」
キバーラ「乾杯〜！」

オリジナルED『吉武千颯 / DELICIOUS HAPPY
DAYS♪』

□

次回、デリシヤスパーティ♡プリキュア　〜破壊者の食べ歩き〜
雄大「俺、もっと強くなりたいんだ…。」
咲夜「先ずは相手の話を聞いてやれ」
フィナーレ「はごろも堂を想う気持ちは… 私と同じだ!!」
第二十一品…この味を守りたい…!…らんの和菓子大作戦／付け足す
金のカ！雷のライジングフォーム
全てを破壊し、全てを繋げ！

冬美 設定資料

光 ひかり
冬美 ふゆみ

生年月日：2010年6月10日

年齢：15歳

学年：私立新鮮中学校3年1組

身長：152.9cm

口癖：無し

一人称：あたし

二人称：あんた

好きな食べ物：洋菓子

嫌いな食べ物：大蒜にんにく（理由は口が臭くなるから）

家族構成：父（士）、母（夏海）、曾祖父（栄次郎）

役割：私立新鮮中学校の生徒（音楽部所属）

ICV：金子有希

かつて雄大と同じく咲夜と共に世界を旅した仲間。光夏海と門矢士の一人娘。

雄大と同じく咲夜がネオに覚醒したと同時に元の世界へと帰還したが、元財団Xのメンバーだったソルトルーを倒すために呼び出される。

一人称は「あたし」。生意気な態度が目立つ様な口調で話すが、目上に対しては敬語で話す。

また、女子っぽい一面もあり、お化け屋敷は大の苦手である（咲夜曰く、それが原因でゴーストにカメンライド出来なかった）。

自分と雄大を突き放した咲夜の事を気に掛けており、自分達が居なくても一人で突っ走っていないかどうかを透翼と密かに連絡を取り合っていた。

モットウバウゾーとの戦いにて『今度激情態になった後に突き放したら一生旅してやんない』と圧を掛けながら和解し、ソルトルーを倒すまでは咲夜達と一緒に戦う事となった。

愛用バイクはマシンキバーを紫にリペイントした『マシンキバー

ラ』。

キバーラ

CV：沢城みゆき

冬美の相棒的存在。キバットバットⅢ世の妹とされるが、違う世界出身の可能性が高いとされる自称『謎の女』。

ジュニラムに好意を抱かれており、かつて雄大の父親であるユウスケをクウガの世界からキバの世界に移動させたり、彼の首を噛んでアルティメットフォーム（ブラックアイ）に変身させたりといった能力を持つ。

エナジー妖精組の事を『クソ犬ちゃん』、『ドラジカちゃん』、『コメちゃん』などと独特の渾名で呼んでいる。

パムパムとは家庭科室の一件で不機嫌そうな態度を取られているが、偶たまに協力する事がある。

仮面ライダーキバーラ（冬美Ver.）

身長：192cm

体重：76kg

パンチ力：31t

キック力：36t

ジャンプ力（一飛び）：121m

走力（100m）：3.9秒

冬美とキバーラが変身したライダー。姿は光夏海が変身したキバーラとほぼ同じ。専用武器キバーラサーベルの柄で『光家秘伝 笑いのツボ』を駆使して戦う。また、必殺技のソニックスタップの要領で背中に紫の粒子で生成した翼を展開させて空中戦を可能とし、その気になればアームズモンスターを呼び出して武器として戦う事もある。

第二十一品：この味を守りたい…！らんの和菓子大作戦／付け足す金の力！雷のライジングフォーム

□

Touki side

らん「ああくっ！頭が爆発しそうく!!」

雄大「あれ？今の声ってらんちゃんじゃないか？」

透冀「華満少女。一人街で物騒な声を上げてどうしたの？」

らん「ゆーゆーにわだぷー！それにあまねんまで！夏にぱんだ軒のメニューでかき氷を出す事になって、どんなのにしようかと考えてるんだけど全然思い浮かばなくて…」

夏に近付いてきている6月26日。

僕と雄大は菓彩少女と共に街を歩いていると、一人で思い悩んでいる華満少女と遭遇する。

あまね「かき氷かあ…」

雄大「かき氷の上から違う味のシロップをかけるつてもアリだけど、それをやるのはアキノリぐらいだな」

雄大はかき氷のシロップについて苦笑する。まあ、店の個性とかは大事だね。

実は僕達旅仲間三人はとある世界でアキノリ特製のかき氷を食べた事がある。でも、やっぱり僕は種類は一つに限るね。

あまね「に、二色のシロップを上にかける!? 咲夜の奴、そんな事までしてたのか…!?」

透冀「うん。でも、どうせ二色にするなら上と下に分けた方が都合が良いと思うよ？」

らん「それじゃ雰囲気が出ないよ。何かこう、ぱんだ軒特製って感じがほしいんだけど…って、うわあくっ!!!」

あまね「急にどうした!？」

唐突に悲鳴を上げる華満少女。ショックを受けながら指を指したのは、時代劇並みのお店。

本日休業中の看板の左側に引貼られているチラシには、『当店は休日をもって閉店致します』と記載してあった。

華満少女は冷や汗を掻きながら店の前まで駆け出し、チラシの文章を朗読する。

らん『日頃、ご愛顧頂き有難う御座います。当店は今月をもって閉店致します』…へ、閉店!? ほげえくっ!!』

あまね「馴染みの店なのか?」

らん「あのお菓子めちやくちや美味しくて、よく来てた! 何で閉店…!?」

通行人「今度近くにてつかいデパートが建つんだよ。そこに沢山和菓子屋さんが入るみたいで、六十年も仕事に愛されてきたのにねえ…。」

そう華満少女が意見を言っていると、五十代近くの男性が悲しげな表情で閉店する理由を語る。

雄大「六十年…!? そんな昔からあつたんですか?」

通行人「うん。君達も寂しいよねえ…?」

らん「そ、そんな…!」

更にショックを受け、華満少女は再び悩みながら唸り出した。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める?

イメージOP2 『MYTH&ROID/VORACITY』

□
Sakuya side

らん「うーん…」

あと数分で数学の授業が始まろうとする中、華満がハートキュア
ウォッチの液晶画面をアップさせながら悩んでいた。

ゆい「らんちゃん。何してるの？」

咲夜「あれだろ？確か『はごろも堂』って店が今月で閉店するって
話…」

らん「うん、大好きな和菓子屋が閉店しちゃうの。だからどうやっ
たらお客さんを沢山呼べるか考え中…」

やはりな、雄大とレグレットから聞いた通りだ。

咲夜「それなら——」

ここね「キュアスタで宣伝するって事？」

らん「そう！何か良いアイデアない？」

ゆい「あまねちゃんにお願いして全校放送で流して、皆に宣伝する
のは？」

らん「はにゃー！それ良いアイデア！」

生徒会室にてかいちよに許可を得られたが、何故だか戸惑ってる様
子だった。

□

Y u d a i s i d e

ローズマリー「此処、激盛りに来てみたかったのよ！」
放課後に俺達は、はごろど堂を訪れる。

二枚の散らしには今月の和菓子の内容が記載されていて、引き戸を開けるとらんちゃんが目を大いに輝かせた。

??? 「いらっしやい」

『こんにちは』

赤い暖簾のれんを潜りながら出てきたのは、優しそうな雰囲気を持つ年配の女性だった。

恐らくこの人が、このはごろも堂を経営してる咲枝さんだと思われる。

らん「はわ！かき氷！」

らんちゃんうじきんときが右側の壁を見てかき氷や宇治金時の壁紙が貼られてある。

咲枝「ちよつと早いけど、楽しみにしてるお客さんがいらっしやるから」

らん「そうなんですネ…！」

コメコメ「早く食べたいコメ」

咲枝「有難う」

雄大「此処の和菓子って、中で食べられるんですか？」

咲枝「ええ。是非食べて行ってください…！」

何かこのおばあさん、栄次郎さんみたいな温厚な人だな。

そう思いながら俺達は和菓子と堪能する事にしたところだが、豆饅頭まんじゅうに目を付けたコメコメを優先する事にした。

ゆい「コメコメ、最近いつぱい食べる様になったね！」

コメコメ「おいちいコメ！」

ローズマリー「買って帰るのもいいけど、この場で食べられるっていうのもいいわよね」

らんちゃんがはごろも堂の店内をハートキュアウオッチで撮影し始めた。

ここね「キュアスタ用？」

らん「うん。最近イートインのお店も載のせる様にしたんだ」

アキノリが真面な表情でカウンターの左側に配置してあった招き猫に目を付けていた。

本来ならコメコメを見て恍惚こうこつになる筈はずが、何かそつち側に大して違和感を感じさせる。

咲夜「……………」

冬美「アキノリ、どうかしたの？」

咲夜「ああ。あの招き猫、なごみ亭に置かれてあつた置き物と同じだと思つてさ……………」

咲枝「お待たせしました」

咲枝さんが持つていたお盆に置かれていたのは、水無月みなづきと宇治金時だった。

らん「ほけえ、何と美しい緑！そして頂上からの曲線は豊かな京都の山の霊山のように……………」

咲夜「このかき氷、上に抹茶のシロップがかけてあるぞ。それに餡子や白玉も相まって、まるで生しげい茂しげった森みたいだ……………」

あまね「これは宇治金時だな」

冷静にあまねちゃんは答えると、アキノリは首を傾げる。

咲夜「ウジキントキ？くりきんとんみてーな名前してんな……………うっ!? ハッハッハッハッハッハッハ……………冬美、何しやがる!？」

冬美はアキノリに笑いのツボを容赦なく押しそっほして外方そっほを向き、らんちゃんはハートキュアウオッチで写真を撮つてから宇治金時をス

プーンで口に運ぶ。

あまね「・・・あの二人、いつもこんな感じなのか？」

雄大「ああ。アキノリが勝手な行動をする度に押されてたから・・・」
メンメン「皆、ここからがらんちゃんの凄いとこころメン！」

らん「ふおわあ〜！口の中に京都が広がる〜！時折感じる抹茶の苦味がその奥にある甘みを引き立ててくれる・・・まるで慣れない着物でゆっくりしか歩けないけど、その分じっくり観光出来た感じ〜!!」
そう表現しながららんちゃんは宇治金時を食べ終えていた。

らん「結構なお手前で・・・」

あまね「凄いな。宇治金時を食べてここまで感動し、そしてそれを表現するとは・・・！」

メンメン「僕もこの情熱にいつも感動してるメン！」

咲夜「そういや、かいちよとレグレットの方は何だ？そのはんぺん・・・じゃなくて、小豆あずきがのつてる四角い菓子物は？」

笑いのツボの効果が収まったアキノリは、再び冬美が立てた親指に背筋が凍らせながら訂正する。

あまね「私と透翼が選んだ和菓子は水無月だ」

ゆい「ミナヅキ？」

咲夜「水無月って、六月の旧暦の言い方だよな？」

雄大「それとこれは全く別だ。でも、和菓子の方の水無月と旧暦の方の水無月には少しだけ共通点があるんだ」

ゆい「共通点？」

あまね「ああ。これは郡こわりの節句に無病息災を願って食べられるものだったそうだ」

郡の節句というのは旧暦の六月一日の事で現在は六月三十日。

その日に行われる夏越祓なごしのはらえに過ぎた半年の穢れけがを祓はらい、あまねちゃんがさつき言った様に来る半年の無病息災そくさいを願いながら、この水無月を食べる人が多いそうさ。

雄大「夏に氷を食べられる様になったのは、最近の話なんだ」

咲夜「ちよつと待て。旧暦の明治五年は冷蔵庫や冷凍庫もなかった時代だ。それで昔の人はどうやって氷を作ってるんだ・・・？」

疑問を打ち払う様に、アキノリは質問を投げ掛ける。

雄大「良い質問だアキノリ。明治時代の人達は当時、氷室ひむろって呼ばれる藁わらの貯蔵庫で氷を保存していたんだ」

あまね「そしてこの水無月を、その氷室の中の氷に見立てて作られた物だと言われている…。」

ゆい「あまねちゃんと雄大先輩、詳しい！」

雄大「何、父さんや夏海さんに歴史の勉強を教えてもらってるから寧ろ得意分野さ」

俺も父さん達に歴史の勉強を教えられたから、国語も得意だ。

あまね「食には歴史がある。それを知る事でより深くその味を堪能出来る…。私は歴史を食していると思っている」

らん「『歴史を食べる』…あまねん凄い！どんな物にも歴史ってるんだよね？このはごろも堂だって、六十年の歴史がある。だから守らなくちゃいけないんだ！」

咲夜「『守らなきゃいけない』…か。気持ちは分からなくもないが、そう簡単には行かないんだよな」

らん「えっ、アキぽん。何か言った？」

咲夜「ただの独り言だ。さ、お前ら。気を取り直して食おうぜ」

これを機に確信したらんちゃんだったが、本人には聞こえない程度でアキノリが独り言を呟く。

俺達も和菓子を食べ終え、はごろも堂を出る直前に背後から咲枝さんの声が聞こえた。

咲枝「えっ、宣伝？家の？」

らん「はい！私、キュアスタっていうのをやってるんですけど…」

咲枝「これを書いているの!?凄いなえ…！」

ハートキュアウオッチの液晶画面を見ても違和感を感じない咲枝さんは本当に尋常だよ。

らんちゃんを目を輝かせながら、はごろも堂の宣伝交渉の話を続ける。

らん「此処で是非、このお店を紹介させて下さい。それから学校の皆にもはごろも堂さんに来てもらう様に宣伝します！」

咲枝「そんな事まで……！」

らん「こんな素敵なお店が閉店だなんて寂しすぎます。私達に任せ
て下さい！」

咲枝「そんなに思ってくれて、ありがと有難う……」

「……」

その様子を見ていたアキノリとあまねちゃんは黙然と冷ややかな
視線を向けていた。

□

NO SIDE

ナルシストルー「ガレット…… カヌレ…… クグロフ……」

ブンドル団アジトにて、ナルシストルーは左右を徘徊はいかいしながら次に
狙う夏のデザートに相応しい料理の名前を舌巻きしながら呟く。

セクレトルー「何をぶつぶつ言っているのですか？」

ナルシストルー「次に狙うレシピをね。クラフティ……」

セクレトルー「横文字ばかりですね」

ナルシストルー「俺様に相応しい」

ソルトルー「明日は夏になりますからね。かき氷のレシピを奪
うのはどうでしょう？」

ソルトルーが提案を出すも、ナルシストルーは南米のお菓子を告げ
るばかりだった。

ナルシストルー「フォンダン・シヨコラ……」

ソルトルー「聞く耳持たずですね。もう一度言いますよ…ゴードアツ様のお好きな甘味であるかき氷は如何いたしましょう？ 噂では、はごろも堂という和菓子店が今月を持って閉店するので、奪うには持って来いかと？」

ナルシストルー「なるほど…ではゴードアツ様のために、華麗にかき氷のレシピを奪ってきてやろう！」

セクレトルー「期待してます…って言うか、いつもそんな事言ってますね？」

ソルトルーは薄紫と水色のライダーガシヤットを取り出す。

ソルトルー「さて、あのお二方が夏の当日に相応しいこのゲームをどう攻略するか…高みの見物と行きましようか」

ナルシストルー「俺様の歴史を、お前達に見せつけてや…！」

セクレトルー「では！」

「ゴンドルー・ゴンドルー!!」

□

No side

あまね「らん！ちよつといいか…？」

上機嫌ならんは雄大達と別れて鼻歌混じりに帰路を辿っていたが、急で駆け付けたあまねに呼び止められる。

公園のベンチで話す内容は『はごろも堂の事をキュアスタに書き込むのはいいが、学校では宣伝するな』との事だった。

らん「何で？はごろも堂の人は『有難う』って…！」

あまね「それはらんに大してのお礼だと思う」

らん「そんな…じゃあ、はごろも堂閉店しちゃうよ!？」

あまねは目を閉じる。その表情はジェントルーだった頃の名残か、なごりはごろも堂を思う気持ちへの同情か。

客観的に引き止めようとしたあまねの言葉を、らんは否定する。

らん「あまねんはそれでもいいの!？」『水無月美味しかった』って言うてたじゃん!!」

あまね「ああ。だが、はごろも堂にははごろも堂の事情というものがある…閉店を決めたのは——」

らん「デパートに和菓子屋さん沢山入って、お客さん取られちゃうからでしょ？じゃあ、お客さんをはごろも堂に沢山呼べば大丈夫じゃん！」

あまね「……」

らんは必死で抗議するが、あまねは黙然としたままだった。

らん「何で黙ってるの!？六十年も続けてきたのに…！」

あまね「兎に角、我々が干渉すべき事ではない」

らん「らんらんは嫌だよ。絶対はごろも堂を守るんだもん！」

あまね「らん、私は…！」

反論して沈黙しているばかりか、両者の意見が対立してしまう。

らん「もういいよ。学校に放送してもらわなくていい!らんらん自分で考えるから！」

呼び止めようとしたあまねを無視して、らんは一人沈む夕日に向かって歩みを進める。

その様子を上空で監視していたジュニラムとキバーラは深刻な表情を浮かべていた。

ジュニラム『アワワ。二人ガダンダン気不味クナツチャツテルヨ…!』

キバーラ「…先ずはアキノリ達に知らせなくちゃね」

上空にて監視していたジュニラムとキバーラはベンチを後にしながら、咲夜と雄大に報告しに行った。

□

K i v a l l a s i d e

あたしはジュニラムの背中にしつかりと捕まりながら二人の気持ち
を率直に考える。

多分あまねは咲枝ちゃんの気持ちも代弁して言ってくれたんだと
思う。あの人はもう年配よ、真面に働ける体じゃないわ。

らんちゃんが守りたい気持ちも分からなくはないけど、だからと
言つて、お店を続けていい理由にはならない…。はつきり言つて自己
中心的よ。

元ブンドル団の一人であるあたしが言うのも難だけど、貴女はまだ
ジエントルーの件を引き摺^ずっているの？

過去に他人と関わらない様にしてたつてアキノリから聞いたけど、
それはもう過ぎ去った出来事にじゃない。一人で何でも解決出来る
なんて思ったら大間違いよ…。！

それにしてもあたしつて、何でこんなにも感情的になつてるんだろ
う？当時はこんな筈じゃなかった。あたしは自分の異変に対する疑
問をどうしても打ち払えずにいた…。

□

Sakuya side

七月初日。華満が昨日の事で落ち込んでいた。喧嘩というよりは意見が対立してしまったと言えるだろう。

らん「あまねんなら分かってくれると思ってたのに…。」

ここね「私は、あまねの言う事も分かるな…。」『始まりがあれば終わりもある』。お店を経営している咲枝さんにどうして閉店するかちゃんと聞いた？らんが思っているのとは、また違う理由があるのかも…。」

らん「ここぴーまでそんな事言うの…。!?ゆいぴよん達は…。!?」

ゆい「若し、他に理由があるならその人から直接話を聞きたいな。お婆ちゃんがよく『果物を育てる時に元気がないとお水をあげちゃうけど、それも原因じゃない時もあるからちやんと様子を見ないとダメだよ』って言った」

透冀「要するに『相手の状態や気持ちを察する事も大事だ』ってことだね？」

ゆいの助言を与えられるも、華満は更に落ち込んでしまう。

らん「らんらんが間違ってるって事…。？」

ゆい「そうじゃないけど…。」

らん「もういい！一人で何とかするもん！」

咲夜「… 全く、世話を焼かせる」

教室を飛び出した華満に、俺は溜息ためいきを吐く。

自己中心的というか、聞く耳を持たないと言うか。デイケイドとして未熟だった俺と比較してみると、不快感と不信感せいしんまに苛まれる。

らん「はごろも堂、とっても美味しいよ！お持ち帰りもお店で食べる事も出来るんだよ！是非お店に行ってみて！はごろも堂、とっても美味しいよ！」

咲夜「… はあ」

二度目のため息を漏らす。一人で何でも解決出来る程、世の中は甘くねーよ。

何とも自分勝手な行動に眉まゆを顰しかめ、右足を小刻みに動かしながら組

んでいた手を強くする。

これはもう、雄大に知らせるしかないな……。

Y u d a i s i d e

らん「来ない。学校の皆、全然来てくれてない……何で？こんなに
もチラシ配ったのに……」

咲夜「よお、華満」

らん「！」

雄大「やっぱり此处に居たんだね」

電柱の後ろに隠れて様子を窺うかがっている華満を、俺とアキノリは声
を掛ける。

咲夜「思い出に愛執あいしゆうしてるみたいで何よりだな華満。にしても、無
様なモンだ……これだけ学校の生徒にチラシ配っても、一人も来ない
だなんて」

雄大「アキノリ、その言い方は余計過ぎるって……ゆいちゃんここ
こねちゃんに聞いたよ、君がはごろも堂を失いたくない気持ちは分か
る。でも、だからと言ってあの店を無理に続けさせなくても……！」
らん「アキぼんやゆーゆーまではごろも堂がどうなつてもいいって
思ってるの!?!らんらんはただ……！」

咲夜「一人で何でも出来ると本気で思ってたのか!?!」

らん「!!」

独り善よがりで自分勝手な言い分だと解釈したのか、遂に堪忍袋の尾

が切れたアキノリの一喝いっかつがはごろも堂辺りに響き渡る。

咲夜「俺の仲間はない。レグレットも雄大も冬美も！衝突しそうになった時は一緒に助け合って、支え合って、そして不利な状況に陥った時には手を取り合いながらも解決してきた！『仲間』ってのはそういうモンだろうが!?それなのにお前はまるで人の話を最後まで聞かずに早とちりして、勘違いして、他人の気持ちを尊重しようとしていない…。エゴイストも良い事だ。じゃあお前は、あのばーさんが『死ぬまで働け』って言いたいのか!?!」

らん「そ、それは…！」

咲夜「お前の食い物に対する情熱は認める…。けどな、例え無意識でも人の安息を妨げようとする身勝手な言動はブンドル団と同じだ。人の気持ちを無碍むげにする程の欠けた想像力で命を軽く見てんじゃねえツ!!!」

怒りに満ちた形相が、仲間を想う熱意と命を重んじる優しさが、心の奥底に刻み付けるくらいくらいの音量を引き出す。

真っ赤に染まつた憤怒の表情は今でも泣きそうで、食い縛った歯を剥き出しにしながら荒い息を吐く。

らんちゃんらんちゃんは泣き崩れ、絶望の表情を浮かべた。自分が店を守ろうとした想いは全て無駄だったのかと思ひ知らされる程に。

俺はアキノリの肩を置きながら宥なだめる。

雄大「アキノリ、それくらい言えば十分だ。少しは冷静になれ」

咲夜「…ああ。悪い、少しカツとなりすぎた」

らん「……………」

雄大「御免ね。アキノリはカツとなると、こういう言い方しか出来ないんだ。らんちゃんらんちゃんがはごろも堂を想う気持ちは決して間違いないと思ってる…。でも、きつとその気持ちは、あまねちゃんも同じだったんじゃないかな?」

らん「らんらんが、あまねんと同じ…?」

雄大「うん。俺さ、目標だった父親の背中を追っていたんだ。大切な人の笑顔を守れる様なヒーローに…。同じ目標を持つ友達が出来て、毎日が楽しかった。でも、そんな日々は長くは続かなかった…」

そう、これは俺がアキノリと出会う前の出来事だ。今でも脳裏に焼き付いている…。小学6年生だった頃の話だ。

仲が良かった同級生が両親揃って首吊り自殺をした日だ。起因は俺がその子を虐めていたのを庇った事だった。

いじめっ子の家族か親族関係の誰かが金に目が眩んでいる弁護士や警察だったため、冤罪を掛けるのも容易でもあった。

その事をいじめっ子達に聞いても知らないフリをされたが、運悪く俺の怒りに触れる引き金を引いてしまう。

数日後、いじめっ子達の家族とグルだった教師の悪行がバレてクビになり、学校内では厳しくいじめに対する対策が徹底的に行われた。それでも心の傷が癒えなかった俺は、その子を救えなかった後悔を払い除ける事は出来なかった。

別の学校に転校しても、新しい友人は一人も出来なかった。自分がこれまで築き上げてきた道のりは全て無駄だったのかと父さん達に慟哭を上げた。

ユウスケ『どんな旅にも無駄はないさ。どんな人生にも無駄がないのと同じ様にな』

そんな俺を慰めてくれたのは父さんや母さん、そして士さん達。あの人達が居たからこそ、今の俺が居る。

アキノリやレグレット、冬美という掛け替えのない仲間達にもこうして出会えたのだから。

俺は決して一人じゃない事を教えてくれた事に、今でも感謝したいくらいに。

俺の背中を旅の仲間達や亡くなってしまったその子が何度も背中を押してくれるくらいに。

雄大『その時、俺は生まれて初めて思い知らされたんだ…。『たった一人の笑顔を守れなければ、世界中の人々を笑顔に出来ない』と。『誰かに報復させるためじゃなくて、誰かを守るために力はあるんだって』分かったんだ』

らん「ゆーゆーにも、そんな過去が…。」

雄大「ブンドル団に酷い思いをさせられたらんちゃんに同情出来る

あまねちゃんだからこそ、昨日の事を言うのが一瞬だけ躊躇ためらったんだと俺は思うんだ」

らん「そうだったんだ… あまねもらんらんと同じ、はごろも堂の事を思ってたんだね。それなのにらんらん、いつも自分勝手です…！」

再び咽むせび泣くらんちゃんに俺はもう一つの真実を告げようとした時、はごろも堂の引き戸が開く。

咲枝さんが出た客を見送っていたところで、奇遇に俺達と目が合った。

咲枝「あら！昨日、来てくれた人ね？お友達を連れてきているみたいだけど…何かあったの？」

雄大「…小野寺雄大です。外で怒鳴り声が聞こえたのなら、ご迷惑お掛けしました。それと、昨日は後輩の咲夜君が貴女あなたにお時間を取らせて頂いた事、真に感謝申し上げます」

らん「えっ、アキぽんが…!？」

実は昨日、らんちゃんにあまねちゃんが喧嘩した事を知ったアキノリが22時ぐらいに起きて、咲枝さんと話をしていたそうだ。

アキノリは下に落ちていたはごろも堂の散らしを咲枝さんに見せる。

咲枝「こんなものまで作ってくれたの？」

咲夜「この店を想ってくれてる人が居るだけで、あんたは寧ろ幸せなもんだ」

咲枝「有難う。気持ちはとても嬉しいんだけど、もう閉店は決めた事だから」

らん「えっ…？」

咲枝「私ももう歳だし、新しい店が沢山たくさん来るんだったら此処に譲ろうかなと思っただの。何でも古いのと新しいのは入れ替わって行くもんだから…」

らん「じゃあ、はごろも堂の味はどうなるんですか…？」

咲枝「それだけは少し寂しい気もするけど…でも、お客さんの記憶に少しでも残ってもらえたらいいかな？」

咲枝さんは引き戸を開けながら、らんちゃんにはごろも堂の様子を見させる。

此処に来る人達は皆常連の人ばかりで、子供達に思い出を語るために食べに来ていた。

人の記憶だつてそうだ、その歴史を知る事で人間である俺達が語り継いでいくのだから。

頭を冷やし切ったアキノリがらんちゃんの肩を置きながら、冷静な声色でアドバイスを送る。

咲夜「…俺から言う事は一つ。仲間と喧嘩しそうになった時、先ずは相手の話を聞いてやれ…。さつきは勝手に人前で怒鳴って悪かったな」

らん「ううん、らんらんも御免ね。勝手な事言つて…。」

雄大「別に構わないさ。素直に言えたならそれで良いんだし。女の子は常に笑顔でないとい！」

咲枝「ふふ、仲直り出来たみたいね。さ、あなた達も思い出に食べてつて」

らん「…はい」

涙を拭いたららんちゃんに続いて俺達ははごろも堂に足を踏み入れた。

その直後、水無月と宇治金時のレシピツピが謎の吸引力で引き寄せられる。

恐らくナルシストルーはソルトルーの算段で、はごろも堂の閉店を狙ったのだろう。

「ピピピく!!」

らん「レシピツピ!」

咲夜「んだよ、こんな肝心な時に…!」

店内に鳴り響くハートキュアウオツチの警報音。俺達がブンドル団に釣られる側となつてしまい、数秒足らずで出入口にある紫の暖簾を潜りながら外へ戻る。

らん「何処!?ブンドル団!!」

ゆい「あつ、らんちゃん！」

するとレグレット達がゆいちゃん達を乗せて専用バイクで駆け付けていたのだ。

冬美にも一応専用のバイクは持つてるが、まだ16には至っていないため、ジュニラムの上に乗って移動している。

らん「ゆいぴよん、皆！何で…!?!」

ゆい「あまねちゃんが心配だから一緒に見に行こうって…!」
自分を配慮してくれている仲間達の思いに目を潤ませるらんちゃんに、アキノリは少しだけ圧を入れながら肩を置く。

咲夜「お前の事を心配している奴らがいるんだ。一人で解決するのも良いが、少しは頼れよな。俺達と言う仲間が存在を！」

雄大「もし、一人で突っ走る様な事があつたら、その時は俺達が止めるよ」

らん「アキぽん、ゆーゆー…!」

「又お揃いで！」

「話は済みましたか？」

『!!』

声が出た方向へ向けると、はごろも堂の後ろにある高層ビルの頂上にナルシストルーとソルトルーが立っていた。

咲夜「聞いたぞソルトルー。お前、元財団Xのメンバーだったとはな」

ソルトルー「おや、その話はぼっちゃまから聞いたのですか？まあ、この店は閉店するも同然ですから、奪って当然でしょう？」

雄大「確かにはごろも堂は閉店になるかもしれない…でも誰かが思い出を覚えてくれていたら、俺はその事実を受け入れる。覚えてる限り、はごろも堂は消えたりしない！」

ナルシストルー「反吐が出るな。やはり其処に居るカブトムシと同様、俺様にとっては危険人物だ…クウガ。やるぞソルトルー」

ソルトルー「ええ。今回はひんやりとしたもので行きましよう！」
『ダジャレイキング!』

ソルトルーは起動した紫のガシャットをバグヴァイザーⅢのス

ロツトにセットし、銃口を向ける。

ソルトルー「出でよ、ワタクシのバグスター!!」

ばら撒かれたバグスターウィルスが人の姿を形作る。

その姿は紫の魔法帽を被った西洋式の雪だるま。

裏で何かを企てている様に裂けた口はジャック・オー・ランタンを彷彿させ、上半身は黄色いボタンが付いている紫の魔導服を着用している。

眉や髭は氷柱そのもので、胸部に埋め込まれている水晶玉が陽に当たった事で宝石の様な輝きを発している。

ナルシストルー「混ざれ、モットウバウゾー!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

ナルシストルーも捕獲箱から放たれたエネルギーで融合型モットウバウゾーを生み出す。

かき氷機を基にしているが、よく見てみると木型の刻印が施されている。

カルマ「ワシの名はカルマ。レベルは20じゃ!」

ソルトルー「ダジャレイキングは、宗教に入った主人公がダジャレによって発動出来る魔法を駆使しながら次世代教祖を目指すゲーム。貴方達にこの方の寒さに果たして耐えられるかどうか...」

雄大「そんな寒さ、俺達の熱い思いで吹き飛ばしてやる! マリさん、お願いします!」

ローズマリー「ええ! デリシヤスフィールド!」

マリさんがデリシヤスフィールドを展開し、俺達は変身に移行した。

□ 「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴ―！！」

□ ゆい 「にぎにぎー！」

コメコメ 「コメコメ！」

ゆい 「ハートを！」

コメコメ 「コメコメ！」

□ ここね 「オープン！」

パムパム 「パムパム！」

ここね 「サンド！」

パムパム 「パムパム！」

□ らん 「くるくる！」

メンメン 「メンメン！」

らん 「ミラクル！」

メンメン 「メンメン！」

□

「「シエアリンエナジー！」」

コメコメ「コメ〜！」

パムパム「テイステイ！」

メンメン「ワンターン！」

咲夜「ブフォツ!？」

冬美「そこで吹くの!？」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンドde心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

□

あまね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー!!」

「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

「シエアリンエナジー！」

「トツピング！」

「ブリリアント！」

「シャインモア！」

□

フィナーレ「ジエントルに、ゴージャスに、咲き誇るスイートネス！キュアフィナーレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

「「デリシヤスパパーティ♡プリキュア！」」

□

「「「変身！」」」

【カメンライド デイケイド！】

【「「「デイエンド！」」」

キバーラ「チュッ！」

『ROD FORM』

デイケイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイケイド！旅の語らい始めようか！」

「「「「「後を継らず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択を！仮面ライダーデイエンド！僕達の旅の行先は…僕達が決める！」」」」

クウガ「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は…俺が守る!!」

キバーラ「世界に輝く女騎士！仮面ライダーキバーラ！あんた貴方の野望、止めてあげる（わ）！」

電王R「お前、僕に釣られてみる？」

デイケイド「全てを破壊し、全てを繋ぐ！」

「「「「「我ら、仮面ライダー！」」」」」ドカーン！」

□

DECADE SIDE

ヤムヤム「はごろも堂の大事な思い出、返して！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

ヤムヤムの言葉を無視して放ったモットウバウゾーの黄色い光線を避けるプレシヤス達。

地面に着弾した光線が色取り取りの木型に変わると、瞬時に粒子と
なって消滅する。

カルマ「これでも喰らえ！」

カルマが投擲したタロットカード型の武器が地面に突き刺さると、
1秒足らずに爆発した。

キバーラ（冬美）「雄大、これ使って！」

クウガ「有難う冬美。超変身！」

俺と冬美は斬り伏せ、レグレットは撃ち抜く。

雄大は投げ渡されたバッシュャーマグナムを手にとるとペガサスポ
ウガンに変化。ペガサスフォームにフォームチェンジし、トリガーを
弾いて射出した空気弾をカルマに命中させる。

視力と聴力を極限にまで研ぎ澄ますこのフォームは全身の神経が
極限の緊張状態に陥るから、体力の消耗が激しい。

更には50秒が過ぎると二時間は変身出来ないという諸刃の刃と
も云えるデメリットを持っているが、ユウスケ兄ちゃんが変身するク
ウガにはそんなデメリットはない様だ。いや、能力がある程度抑えら
れていると言ったところか。

そのため、雄大が変身するクウガも同様にペガサスフォームの能力
がある程度に抑えられていると思われる。

カルマ「ギヤアツ!？」

クウガ「ウラタロス！」

電王R「任せて。はあツ!!」

ウラタロスはデンガツシャアのオーララインで絡ませたカルマを
勢いよく引き上げ、地面に叩き付ける。

【アタックライド イリユージョン！】

今の内に俺はイリユージュョンのカードを装填して三人に分身する。
デイクイドA「BとCはプレシヤス達のサポートに入れ。こっちは
簡単に終わりそうにもないからな」

デイクイドB「構わない。大事な思い出を守るためなら、この命……
惜しくはない」

デイクイドC「かつての四人が再び揃ったんだ。今の俺達は負ける
気がしないし！」

デイクイドA「それは俺も同じ気持ちだ。頼んだぞ」

BとCにプレシヤス達のサポートを任せた俺はモットウバウゾー
の攻撃を避けながら能力を考察する。

恐らく、あの攻撃を受けた対象を木型に閉じ込める技なのだろう。
それだけじゃない。何よりも恐ろしいのは……基の素材に『かき氷
機』が含まれているという事だ。

氷の代わりとして人間がかき氷機の中に入ってみる。地獄で獄卒
によって石臼うすに放り込まれた罪人が、ドロドロの血肉と化して地獄の
番犬達に喰われる様なもんだ。想像させられるだけでも背筋が凍る。
そんな中、怒りの形相でカルマは俺達にギャアギャアと喚き立て
る。

カルマ「お主ら、老いぼれであるこのワシに対する礼儀というもの
がないのか!?!」

デイクイドA「は? そんな言い訳クソもねえよ。あんただって偉大
な教祖様を元にして実体化したバグスターだろ? 喚く暇があるなら
真面まともに戦おうぜ」

カルマ「いいだろう。そこまでして言うなら仕方がない! 氷はこう
折り返すという事を教えてやるわい。はアツ!!」

モットウバウゾー「ウ……バ……バ……!!」

キバール(冬美)「寒っ! 物理的に寒いつて意味じゃないけど……!
兎に角寒いツ!!」

クウガ「ぐっ、これは寒いどころじゃないぞ……!」

デイエンド「一先ず、あの人には一役買わせてもらおう!」

攻撃を避けるプレシヤス達を集結させるモットウバウゾー。全員

寄り集まったところでハンドル式の両腕を回転させる事で猛烈な吹雪を放出させる。

気合を入れたカルマも寒いギャグを言いながら放つ吹雪も付加され、より強大な猛吹雪として俺達を襲う。

「カメンライド シザース！」

デイエンド「頼むよ、蟹^{かに}刑事さん」

レグモットウバウゾーの攻撃を分析しながら迅速に対応するレグレットはライダーカードを装填したゼロデイエンドライダーをポンプアクションし、読み取り装置である『ライドリーダー』から蟹の全身を模したライダーズクレストが浮かび上がる。

ブツカーマズルから三原色の人影が重なって実体化したのは蟹を模したメタリックオレンジのライダーで、左腕には鋏^{はさみ}が付いた召喚機を、右手には同じく蟹の鋏を象った武器を装備している。

デイエンド「皆、蟹刑事さんの後ろに隠れて！」

デイケイドA「…いや、避けるッ!!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

かつて鏡の中の世界で行われる戦いに参加したが、最終的には契約モンスターに頭から捕食されてしまった極悪刑事『仮面ライダーシザース』の後ろに胸部装甲『ボルチェスト』は超高空の落下や深海一万mの水圧にも耐えられるため、俺達ライダー組はレグレットの合図で隠れながら反撃の準備をしようとした直前にモットウバウゾーが型抜き部分から黄色い光線を放つ。

ギリギリのところまで左側に避けると、シザースとプリキュア組が木型に貼り付けられてしまった。

ナルシストルー「いいねえ！ハツハツハツハ！」

プレシヤス「動けないく！」

ソルトルー「いい気味ですねえ、プリキュアの方々。先ずは手始めにキュアプレシヤス…貴女を真っ赤な血色に染め上げましょう。ついでですから、あそこにいるシザースも一緒にやってみましょうか…！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー！」

木型に貼り付けられていたプレシヤスとシザースを二枚重ねにして掴み、そのまま投入口に入れてハンドルと一体化している両腕を回そうとする。

ローズマリー『ああっ！まさか……！』

電王R「これは色々とまずいね……キンちゃん、よろしく！」

キンタロス『任しとき！』

『AXE FORM』

状況を察した電王は地面を蹴りながらアックスフォームにフォームチェンジし、モットウバウゾーの右側のハンドルにしがみ付いて全力で阻止する。

やっぱり俺が予想してた通りだ。

ローズマリー『かきプレシヤスなんてダメよ〜！』

モットウバウゾー「ウババババババババババ……！！」

電王A「ぐっ！こいつ、なんちゆうパワー持つとるんや……！」

モットウバウゾー「ウバ〜ツ！！」

電王A「俺の強さは……泣けるでええええツ！！」

横槍を入れる様に黒いエネルギー弾がモットウバウゾーを吹き飛ばし、同時にプレシヤス意外の三人が木型から解放される。

ローズマリー『プレシヤス！』

宙に舞うモットウバウゾーから解放されたプレシヤスをお姫様抱っこで救ったのは、言うまでもないブラックペッパーだった。

同じく解放されたシザースは自動的に消滅し、モットウバウゾーが地面に転倒したタイミングでナルシストルーと対峙する。

ナルシストルー「又貴様か!？」

デイケイドB「よし、今だ！」

デイケイドC「変身。ブイスリヤアツ！」

【カメンライド V3!】

【カメンライド ライダーマン!】

Bは旋回する風力エネルギーで緑の複眼を持つ赤い頭部のライダー『仮面ライダーV3』に、V字が付いている青いヘルメットを被ると元デストロンの科学者が自ら製作した強化スーツが纏われたC

は『ライダーマン』となる。

カルマ「お主らがワシのメンバーになるのは、冬分堪えんばーならんな。じゃが…！」

カルマがバグスターユニオンを放出し、赤いバケツを持ったバグスター戦闘員が三十体並んでいた。

カルマ「見よ！ワシを守りし絶壁ぜつぺきの盾を！これでお主らも終わりじゃな！」

デイケイドA「戦闘員で体力を減らした上でお得意の水魔法をお見舞いする。やはりあんたは完璧な策士だ、カルマのじーさん。けどな…！」

俺はライドブツカーから一枚のカードをレグレットに投げ渡す。

デイケイドA「相手を倒していないのにも関わらず自分の勝ちを宣言した時点で、あんたは既に敗北してるって事さ。使え、レグレット！」

デイエンド「これは…！どうやら試す価値があるね。雄大、痛みは一瞬だよ」

『フォームライド クウガ ライジングマイティ！』

ジュニラム『待ツテ！僕モライジングニナリタイ！』

ゼロデイエンドライバーから放たれた赤い波動を浴びた雄大の全身に電気が迸った赤い生体装甲に金の縁取りが施される。

右足にはアンクレット、変身ベルトであるアークルには金色こんじきのパーツが追加された。

更には自身のライジング化を狙って割り込んできたジュニラムもパワーアップを果たし、金の装飾そうしよくが追加された仔馬の雷鎧らいがい『ライジングジュニラム』へと変化する。

クウガ「これがライジングフォーム…！」

ジュニラム『スゴイ、カガ漲ツテクル…！』

デイケイドA「おいおいマジかよ。ジュニラムまでパワーアップしちゃったじゃあねーか…！」

キバーラ（冬美）「でも、これなら大分行けるかも！」

デイエンド「皆、雄大とジュニラムに続くよ！」

俺達はカルマが率いているバグスター戦闘員達に向かって行つた。

□

B SIDE

ヤムヤム「バリバリカッターブレイズ！はごろも堂の思い出は、ヤムヤムが守るツ!!」

カッターブレイズでパイシーとファイナーレに木型の光線を相殺したヤムヤムは飛び蹴りを放つてモットウバウゾーの攻撃を避ける。三回目辺りで攻撃を受けそうになったが、ファイナーレが重量挙げの要領で防いでいた。

ヤムヤム「ファイナーレ……！ファイナーレ、ごめんね。ヤムヤムが自分勝手な余りに……！」

ファイナーレ「謝るのは後だ、ヤムヤム。はごろも堂を想う気持ちは私も同じだ！一緒に思い出を取り戻そう！」

ヤムヤム「……うんっ！」
デイケイドC「和解成立だな。んじゃあ、俺達も少しくらいは活躍しときますか！」

Cはファイナルアタックライドのカードを装填する。

「ファイナルアタックライド ラ、ラ、ラ、ライダーマン！」

デイケイドC「ロープアーム！はあッ！」

モットウバウゾー「ウバツ!?ウババババババツ!!」

デイケイドB「三人共、決めろ！」

「ファイナルアタックライド ブ、ブ、ブ、V3！」

Cが右腕に装備された瓢箪ひょうたん型のアタッチメント『ロープアーム』の先端の鉤爪かぎづめでモットウバウゾーを絡め取った上で足を強く踏み込み、俺はファイナルアタックライドのカードを装填する。

デイケイドB「V3！錐揉きりもみ回転キーーーーック!!」

「はああああ…！はああああッ!!」

走り高跳びをしながら空中で錐揉み状に回転。

そのまま急降下した飛び蹴りを、手を握り合ったヤムヤムとフィナーレの合体技と共に見舞わせてやった。

仰向けに転倒したモットウバウゾーに、フィナーレは即座に浄化技を放つ。

フィナーレ「プリキュア！デリシャスフィナーレファンファーレ!!」

モットウバウゾー「お腹一杯！」

「ご馳走（お粗末）様でした！」

「ピピピ〜！」

モットウバウゾー消滅に伴い、水無月と宇治金時のレシピッピが解放された。

□

A S I D E

ジュニラム『コレデ全部ダネ… 雄大、派手ニ決メチャッテ!』

クウガ「ああ。これで決める！ふっ、はっ!!」

バグスター戦闘員の最後の一体を突進で倒したジュニラムの合図で、雄大はライジングマイティキックの構えを取る。

いや待てよ。確かライジングフォームって、敵が爆散すると被害が出る奴だよな…!?俺達まで爆発に巻き込まれたらまずい!

デイケイドA「ジュニラム！雄大と冬美を頼む！」

ジュニラム『ハイハイ！僕ニ任せテ!』

助走する度に炎を纏った足裏に電気が帯びている。

俺はオーロラカーテンでローズマリー達を巻き込みながら3km以上離れたところへ瞬間移動し、ジュニラムはレグレットと冬美の体

重に耐えながら成る可く高いところへ避難させる。

クウガ「うおりやあああッ!!!」

カルマ「ぐっ?!?ぬうっ!ぐあああーッ!!!」

リントの古代文字が浮かび上がり、断末魔と共にカルマは爆散。

ゼロディエンドライバーのトリガーを押した刹那、核爆弾並みの爆風が発生した。

数分して爆風が収まったところで俺達はオーロラカーテンで雄大と合流する。

ディケイドA「雄大!」

クウガ「これがライジングフォームの力だという事は分かった。でも、威力が激しすぎないか?」

キバーラ(冬美)「ホントそれ。技の威力が『エグい』の領域越してちやつてるし...」

ディエンド「これって、又撃つ時に対策とか考えておかないと敵味方構わずに被害が出るね」

ディケイドA「雄大をライジングフォームにさせたのは賭けだったけどな。次はちゃんとした対策を練っておくか」

ナルシストルー「チツ、かき氷はくれてやるさ。やはり俺様には西洋のドルチェがよく似合う...」

ソルトルー「これがクウガの『金の力』とも呼ばれているライジングフォーム...フッフッフ。今後の展開が楽しみです...!」

俺達の様子を窺っていたナルシストルー達は、捨て台詞を残してデリシャスフィールドを後にした。

一方、プレシヤスを救出したブラックペッパーは静かに立ち去ろうとしたが、心優しき戦士である雄大に呼び止められる。

ブラックペッパー「.....」

クウガ「待つて。君、ブラックペッパーだよね?どうして俺達に手助けをするんだい?何か事情でもあるなら、話してもらえないかな?」

ブラックペッパー「... 別にお前達と話すつもりはない。私はただ、『助きたいから助ける』。それだけだ」

それだけを言い残すと、ブラックペッパーは改めてデリシャス
フィールドを後にした。

デイケイドA「ツンデレな奴め。レシピッピを助けたいなら俺達と
一緒に戦えばいいのに……素直じゃねえな」

□

Sakuya side

客A「パパは此処のお菓子を食べて育ったんだよ！」

客B「よく此処のモナカ半分こしたよね」

かき氷と水無月の個体が店内に飛び交う中、はごろも堂を訪れた来
客達は此処に来た思い出を語っていた。

あまね「歴史というものは、単に出来事が継承されていく訳ではな
い。人々の瞬間瞬間の思いが其処にはある。人は人にそれを伝えた
くなるんだ。そしてそれが積み重なり、歴史となっていく……」

咲夜「……怖えよ」

冬美「何が？」

咲夜「誰かに台詞を取られると、自分の出番が無くなってくる気が
して怖えよ」

雄大「ああ……確かに。否定はしない」

雄大は台詞を取られた俺に対して苦笑する。

冬美「でも、あんたが言う『スーパ―説教タイム』はレグレットの
専売特許でもあるでしょ？」

透冀「うん、僕達四人も最初は未熟だったさ。良い事も悪い事もあった…僕達の時代の歴史は確かにバラバラで、凹凸おうちつで、醜いかもしれない。でも、だからと言って人が歩んできた道のりを誰かに否定される権利はない」

あまね「らんの食べ物への思い、そしてはごろも堂への思いは、この店を…街の歴史として人々の胸に刻み込むだろう」

元ブンドル団の二人に俺の立場を全部持って行かれたが、その言葉に否定はしない。

物事は一人で解決出来ないなら、他人の手を借りてでも解決すべきだと俺は思ってるしな。

人の事言えないけど、自分が起こした問題に正面から向き合えない人格者は猫を被ったところで一生報われねーってこった。

おっと。雑談はここまでとして…これで華満も少しは相手の気持ちを理解し、ちゃんと話を聞ける様になる事だろう。

らん『はごろも堂が歴史になる』…?」

ゆい「キュアスタにはごろも堂の事、書こつ!」

ここね「そうすれば、はごろも堂が消える事はない…」

ゆいとここねに推奨された事で華満は自信とやる気に満ちていった。

らん「ふおくつ!最高の投稿にするぞくつ!!」

咲夜「やる気満々だな」

雄大「…俺も、父さんの意思を誰かに継いでいきたい。だって俺、父さんと同じクウガだし!」

冬美「こら、小さい子が居るんだから大声で宣言しないの。せつかくだから、あたし達も食べてこうよ!」

透冀「うん。僕も悔いが残らない様にしたいからね」

俺達もはごろも堂の和菓子を堪能しようとした時、ゆいのハートキュアウオツチからコメコメが人間体となって出て来た。

コメコメ「ハラペコったコメ」

ゆい「よーし…食べよー!!」

咲枝「…有難う」

数日後の夕暮れ時。俺は閉店したはごろも堂の引き戸を少し開けると、咲枝ばーちゃんは感謝の言葉を述べていた。

見ているのは言うまでもない華満のキュアスタ。六十年間続いたこの店の思い出は、街の歴史としてこれからも語り継がれていくだろう。

透冀「アキノリ。そろそろ行くよー！」

咲夜「ああ。今行くー！」

俺はレグレット達が待機していたマシンデイエンドーの後ろに跨またがろうとした直後、急に体がふらつき始める。

咲夜「うっ…!?!」

ジュニラム『アキノリ!?アキノリ、シツカリシテ！アキノリ!!』

ジュニラムが呼び掛ける中、俺の体の箇所にはノイズが走っている。

咲夜「大丈夫だ。これくらい…!」

冬美「無理に意地張んなくていいから…まさか、あの鳥のバグスターの!?!」

雄大「恐らくウオブリーの羽毛うもに付着したバグスターウイルスが今、アキノリの全身に流れ込んだらうな」

挿入歌ED『前島麻由／No Man's Dawn』

ジュニラム『流れ込んだッテ…アキノリ、ゲーム病デ死ンジャウ

ノ!？」

咲夜「馬鹿言え。たかがゲーム病で死にかけるのは、二度と御免だからな……！」

透翼「羽毛を抜かない限りは、僕達を含めた人間に感染する事は先ずない。一先ず、和実少女のところに……！」

冬美「……！」

雄大「冬美。どうかしたのか？」

冬美は俺の体の異変に気付いたのか、青褪あおぞめながら目を大きく見開いていた。

冬美「アキノリ。左脚……！」

咲夜「左脚？いや、特に何も異変はない筈はずだが……!？」

俺も左脚に違和感を感じたのか、下半身を見つめてみると、衝撃的な事に左脚が……

猛禽類もうぎんの足へと変化していた。

咲夜「何だよ、これ……!？」

To be continued...

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア く破壊者の食べ歩きく

拓海「俺のやってる事って、余計なお世話なのかな...？」

透冀「右脚の異変が治るまでは車椅子で生活をしてもらうしかないね」

あまね「案外、世話焼きなんだな」

ナルシストルー「あの黒胡椒こしょう、椰揄からかうと面白いなく。ミスを付けば足元救えるかも」

咲夜「こいつはただ、自分にとって大切な思い出を守ろうとしただけだ！」

第二十二品：ブラペ引退!?伝説のクレープを探せ!／無力な自分を振り払え!ウオブリーの置き土産

全てを破壊し、全てを繋げ!

第二十二品：ブラペ引退!? 伝説のクレープを探せ! /
無力な自分を振り払え! ウオブリーの置き土産

□

KUGA SIDE

俺と冬美は今、浅倉とゲムムの二人と戦っている。レグレットとプリキュア組は丸板と小匙こさじスプーンを素体にしたモットウバウゾーを、BとCはローズマリーと共にスネイガーという蝸牛のバグスターと交戦中だ。アキノリは車椅子に座りながら興奮しない程度に応援している。

キバーラ（冬美）「来て、ドツガハンマー!」

ドツガハンマーを召喚した冬美はサンダーフィンガーを展開させる事で充血した赤い単眼を露出。魔皇力まおうによる赤い光を浴びた浅倉とゲムムの身体機能を一定時間だけ麻痺まひさせる。

キバーラ（冬美）「雄大!」

クウガ「超変身! ふっ! はっ! うおりやあッ!!」

王蛇「ぐっ!?!」

ゲムム「ぬあぁっ!?!」

その隙に召喚したガルルセイバーを手を取ってタイタンフォームに超変身した俺は地割れの如く重量に抗いながら斬り付けるも、まるで蘇ったかの様にあっさりと起き上がった。

王蛇「どうした。お前らの力はそんなもんか?」

ゲムム「レベル10になった私にダメージは通用しない。光冬美、君の力も私の会社を復活させる糧かてとなれエ!!」

キバーラ（冬美）「別に糧かてなんかにされたくないんですけど!?!」

□

DECADE (Touki) SIDE

モットウバウゾー「ウバウゾー！ウバーツ！！」

スパイシー「プレシヤス！」

デイケイドA (透冀)「まずいッ！！」

【カメンライド ウィザード！】

『ヒー！ヒー！ヒー！ヒー！ヒー！』

【アタックライド テレポート！】

着地したプレシヤスに右拳^{うけん}を振るうモットウバウゾー。デイケイドウィザードにカメンライドした僕はアタックライドカードを速やかに装填し、空間を操って生成したワープホールでプレシヤスの元へ瞬間移動する。

【アタックライド ビッグ！】

デイケイドA (透冀)「ふんッ！！」

続けてアタックライドカードを素早く装填し、赤い魔法陣を通して巨大化させた右腕がモットウバウゾーの右拳と打つかり合い、衝撃波が発生。このタイミングを好機^{みな}と見做^なしたのか、颯爽とブラックペツパーが現れる。

咲夜「ブラックペツパー、左右のスプーンには気を付けろ。エネルギー弾を跳ね返されるぞ！」

両手から生成した黒いエネルギー弾をアキノリの警告を無視して放つが時既に遅し。モットウバウゾーは体を一回転させながら右側の小さじスプーンでエネルギー弾を受け止め、それを反射する様に跳ね返した。

ブラックペツパー「何ッ!？」

モットウバウゾー「ウバウゾー！ウバーツ！！」

地面に着弾したエネルギー弾が土煙を起こし、今度は両側のスプーンからマシンガンの如く紫のエネルギー弾を連射しているところをブラックペツパーが背後に回ってエネルギー弾を放つも、再度受け止めた上でプレシヤス達を狙っている。まるで自分が足手纏^{まと}いになっているかの様に。

□

Takumi SIDE

拓海「俺のやってる事って、余計なお世話なのかな…？」

蝉の鳴き声と蒸し暑い外の空気の中、俺は新鮮病院の近くにあるベンチに座りながら溜め息を吐く。

別に頼まれた訳でもない。前にローズマリーが言っていた事を振り返る。

ローズマリー『貴方、シナモンと関係があるの？』

拓海「一体、どうしたら…！」

???'「どうしたらいいんだーッ!!」

若し、あれが父さんの事なら下手に関わらない方がいいのだろうか。右手に持っていたデリシャストーンを握り締め、重なる様に聞こえる苦悩の呟きが俺を向き直させる。

長袖を半分捲った黒いハイネックワークシャツと紺色のズボンを着ている筋肉質の男性。赤いキャップを逆に被り、首元には黄色いタオルを掛けている。それは俺の知人でもあり、行きつけのお店『ここに青果店』の店主である湊陽佑さんだった。

どうやら手には上にキャラメルソースが掛けてあるバナナクレープとイチゴクレープを持ちながら悩んでいる様だ。知人であるこの人をこのまま放つては置けず、俺は声を掛けた。

拓海「湊さん。どうかしたんですか？」

陽佑「拓海、『伝説のクレープ』って名前の通り伝説になったんだな…。」

その言葉に俺は目を見開く。『伝説のクレープ』は、神出鬼没のキッチンカー形式の店で開店から数分で完売する程の人気の会ったクレープ。

海外移転してしまった事で陽佑さんの前述通り、おいしーなタウンでは『伝説のクレープ』の名称が付いてしまった。

陽佑「実は、麻恵^{あさえ}が怪我で入院しちまって… だから、あいつが好きな伝説のクレープを持って行こうと思ったら、お店が海外に移転したとかで本当に伝説になっちまったんだ」

麻恵さんは陽佑さんの幼馴染みで、俺の自宅の近隣^{きんりん}に住んでいる。まさかあの人が入院していたなんて…。

拓海「それで似た様なクレープを？」

陽佑「ああ。けど、あの味に似た様な物がなくてさ…。」
クレープをやけ食いした陽佑さんは弱音を吐く。

陽佑「はあ、やっぱり無理かあ…！」

何か良い方法はないのか…いや、待てよ。あのクレープは確か、ゆいと食べた記憶があるぞ。それなら…！

拓海「湊さん。何とかなるかもしれない！その事、俺に手伝わせてください！」

陽佑「えっ？でも、あのクレープは…！」

拓海「大丈夫、任せてください。又連絡します！」

陽佑「あ、おい！」

そう宣言しながらベンチを後にした。これが俺に出来る事なら。

□

Sakuya side

ゆい「あーん……デリシヤスマイル〜!!」

あまね「うん、甘さも控えめで美味しい。ちよつと大きい気もするが……?」

フルーツパーラーKASAIにて、俺達は特大パフェを堪能たんのうしている。

本来なら俺達の分のパフェはフェルミラーで増やしたかったが、実際に作った方が楽しいとの事であつさり冬美に止められてしまった。

因みに先程のはごろも堂の件で俺が華満を泣かした事が冬美にバレてしまい、こつ酷く叱られた。今後は泣かさないう程度の説教をする様に俺も用心するつもりでいる。

ゆい「えへへ。一度でもいいから、お腹一杯パフェを食べてみたかったんだ〜!」

ローズマリー「インパクトがあつて良いじゃない。色々な味も楽しめるし!」

らん「和洋中のスイーツ全部乗せてみました〜!」

ここね「可愛い顔も付けてみた……」

あまね「皆の発想は面白いな。お陰で新しいメニューが出来そうだよ」

透冀「人間の想像力って、本当に面白いね」

コメコメは自分も特大パフエを食いたいと思ったのか、両手で頭を二回撫でて人間体に化ける…。のだが、何と見た目が6〜7歳くらいに変化していた。

コメコメ「コメコメも食べたいコメ！」

咲夜「ブフォツ!?ゲホツ!ゴホツ！」

冬美「こらこら。咽せつてるんだから、ちゃんと手で抑えないと駄目でしょ?」

咲夜「ああ、有難ありがとな。冬美」

あまりの展開で噴き出さない程度に俺は口を懸命に閉じたが、含んでいた炭酸飲料を鼻の奥に達した勢いで咽せってしまった。

らん「えっ、誰!？」

雄大「誰って、コメちゃんだよ?でも、何か前と全然違う様な…」

咲夜「コメコメ自身の心が成長すると、容姿も変化するんだ」

透冀「大きくなったというよりも、精神的に成長したって感じだね」
椅子から離れて少々困惑する華満。無邪気にテーブルの端で燥いでいるコメコメの様子を、クソ犬とドラジカは推測する。

メンメン「最近よく食べると思ったメン…」

パムパム「化ける能力が上がったパム」

あまね「それで大きくなったのか?」

キバーラ「まるで桃太郎ね」

ここね「可愛い…!」

それな同意はするぜ。コメコメの成長を讃えるゆいはスプーンで掬ったパフエを食べさせる。

ゆい「凄いね!はい、パフエ。あーん!」

コメコメ「あーん…んん〜!これ好き美味しいコメ!」

ローズマリー「お喋りも上手になって…!」

コメコメの成長を見て、ローズマリーがハンカチを噛みながら感涙する。保護者かよ。

咲夜「前よりも流暢りゅうちやうに喋なってるな。これも成長の証あかしってやつか」
冬美「コメちゃんを見てもデレないアキノリって何だか珍しいね。
普段なら可愛かわいいってデレまくるのに」

咲夜「バグスターウイルスが落ち着おいている影響えいさうかはまだ断定出来
ていないが、感情が抑制おさされてる感じかんじって言うか…なあ、レグレッ
ト。俺の左脚はいつ治なおるんだ？」

俺の問い掛けにレグレットは顎あごに手を当てる。俺が車椅子で生活
をする様ようになつてから二・三日が経たつた。特に左脚以外の部位ぶいが変化
する事はなかつたけど、変化へんかした右脚で歩くと市民しみんに怖おそがられる虞おそれが
あつたため、敢あえて車椅子で生活する事こととなつた。

因よみに左脚はバレない程度たに包帯おびでグルグル巻まきにし、男子バドミ
ントン部の皆みなには『怪我けがはしたが、成なる可べく大会たいかいにまでは必ず戻もつて
くると』伝えておいた。旅の仲間も部活仲間も、両方共見捨みすてる訳わけに
は行いかないしな。早い内に治なおしておかないと…！

透冀とけい「あの日以来、君の代わりに僕がデイケイドとして戦たたかっている
けど…兎うに角かく、右脚の異変いへんが治なおるまでは車椅子で生活くわんしてもら
うしかないね」

冬美「でもだからと言って、ずっとこのままままって訳わけにも行いかないで
しよ？」

雄大「この二・三日。レグレットがバイオリダーにカメンライド
して、バグスターウイルスを取り込んだ抗体たいしで作つくつた点滴てんていを打うつても
元もとに戻もらないなんてな…」

怒りの王子『バイオリダー』は体内たいに打ち込まれた未知みちのウイル
スや毒素どくすを取り込む事ことで、その構成こうせいする因子いんしを解明かいめい出来れば体内たいから
抗体たいしを生成せいせい可能かする。

その生成せいせいした抗体たいしを応用おうようした点滴てんていを今俺が打うっている状態じょうだ。ま
ともに戦たたかえない訳わけではないが、ゼロディエンドライバーによるサポー
トぐらいはお手の物ものだ。

咲夜「なあと安心あんしんしろ。レグレットにゼロディエンドライバーを借
りてもらってるから、別に俺が戦たたかえない訳わけでもない。だから脚あしの事ことで
くよくよすんな！」

雄大「アキノリ：：」

冬美「ホンツト、あんたって人は：：でも、有難うアキノリ。あたし達を慰めてくれて」

仲間達の笑顔を見る。そういや、あいつらにも何度も支えられた事があつたな。罪滅ぼしとして、今度は俺があいつらを支えてやらないと。

そう思いながら目を横に泳がすと、ガラス越しで品田が様子を窺^{うかが}っていた。

拓海「男子バトミントン部のメンバーから聞いた：：門津、本当に足を怪我してたんだな。痛みはないのか？」

咲夜「問題ない。この通り、怪我しても俺は元気だ！」

拓海「元気なのは良いんだけどさ、普通に怪我してんなら松葉杖で歩くだろ？」

咲夜「ああ、これには深い訳があるんだ。それよりも用件はなんだ？」

俺が問い掛けると、品田は少し時間を置きながら用件を話した。

拓海「実は俺、『伝説のクレープ』を作りたいたんだ。ゆいなら覚えてるよな？あれを再現したいんだ」

咲夜「『伝説のクレープ』？何だそれは？」

ゆい『伝説のクレープ』はあたしと拓海が小さい頃に食べた事があるんだけど、急で海外に移転しちゃって：：でも、当時は数分で完売する程に人気だったんだよ！」

咲夜「成る程、大体分かった。それで俺達に作るのを手伝いたくて此処へ来たと？」

拓海「あ、いや。別にそういう訳じゃ：：」

咲夜「幼馴染みなんだろう？少しは気い使ってやれよ」

俺の言葉に品田の表情が少し和らいだ様に見えた。品田がブラッ

クベツパーに変身している可能性が高いからな… さっきの戦いでナルシストルー達に煽られた影響か否か、余程躊躇ためらっていたのだろう。

ゆい「拓海とお料理するの久しぶりだね。楽しみだなあ〜！」

拓海「… そつか。じゃあ、頼むわ」

品田と久々に料理が出来るのが待ち遠しくて張り切っているゆいを見て、流石に遠慮せざるを得なくなった品田は俺達と一緒にクレープ作りに取り掛かった。

らん「らんらんももう一度食べたいって思ってたんだよね〜！」

あまね「是非、協力させてくれ」

ゆい「良かったあ…！ね、拓海！」

拓海「ああ。有難う！」

華満とかいちよの協力を得て、感謝の言葉を述べる品田に冬美は伝説のクレープに関する情報を尋ねる。

冬美「ねえ。その伝説のクレープって、そんなに人気だったの？噂によれば、海外に移転した事でその名称が付いたって聞いたけど」

ここね「うん。神出鬼没のワゴン車のお店で販売して数分で完売してた…」

らん「そうそう。いろんなフルーツ盛り盛りでね、一口食べると常夏のリゾートに居る様なトロピカった気分になれるんだ〜！」

咲夜「『トロピカった』… か。またまた懐かしい言葉を聞いたな」
雄大「そういえば、アキノリは俺達が居ない間に別のプリキユアの世界も旅してたんだってな。確か、あおぞら市だっけ？ゆいちゃんによると、一度だけ訪れた事があるって聞いたけど…」

咲夜「あいつらの顔を拝みたくなっただよ。気紛れと言うか何と
言うか、一緒に戦った仲間だからな」

あおぞら市。まなつが進学のために故郷である南乃島引つ越してきた海沿いの町で、かなり温暖の地に所在している。さんごの実家でもあるPretty Holyicの店舗が、このおいしーなタウンに存在していたのも、俺にとつてはその名残とも言える場所だった。

あいつら、今頃何してるんだろなあ…。ゆいも一応、まなつ達と対面を果たしているが、自分と同じプリキュアである事には大抵気付けなかった。

まあ、あの時はハートキュアウオッチの警報音が鳴っていたから、ほんの少ししか喋れなかった。今度はちゃんとした展開で再会したい。あおぞら市の思い出を振り返っていると、コメコメが縫いぐるみのフリをしたクソ犬とドラジカを左腕に抱えながら挨拶をしてきた。

コメコメ「こんにちはコメ！」

拓海「こんにちは。あれ？この子は…。」

優しく挨拶をした品田が人間体になったコメコメを見て違和感を覚える。実はカレーの件で二人は面識がある。此処で正体がバレたら堪ったモンじゃない。

ローズマリー「えっと、私の従兄弟の再従姉妹の、そのまた従兄弟のお子さm…。」

咲夜「ただの獣人のコスプレが大好きな女の子なんだ。最近ゆいの家にちよくちよく遊びに来る様になって、其処の犬とシk…。ドラゴンの縫いぐるみはその子のために作った物だ」

拓海「は、はあ…？」

実際そうじゃないだと品田は呆れ顔で困惑する。その後はたわいもない話をしながら、ゆい達は手を洗った。

勿論俺は点滴中のため、除菌ウェットティッシュで軽く手を拭いた。

らん「伝説に近付けるかなあ？」

ここね「同じ物を作るのは難かしそう…。」

咲夜「失敗は成功の元だ。何度も挑戦して、何度も研究して、伝説のクレープとやりに近い味を編み出すんだ」

拓海「兎に角、作ってみるか！」

品田が粉ふるいを振って薄力粉をボウルに振るう。其処から砂糖10g、牛乳220ml、溶き卵を入れて泡立て器で滑らかに混ぜ合わせる。

らん「拓海先輩、凄い！」

ここね「手付きが慣れてる…！」

咲夜「割と器用だな」

ゆい「拓海はお料理が得意なんだ！」

ホットプレートで混ぜた生地を薄くなる程度に流し込み、後は中にホイップを入れてフルーツで盛り付けをするだけだ。

勿論、味見担当は俺達ライダー組も参加する事になったのだが、冬美は太るから味見は程々にしておくそうさ。

拓海「さあ、出来たぞ！」

咲夜「よし、実食開始！」

一回目はイチゴ、葡萄、マスカットを上に乗せたパフエだ。

ゆい「あーん。デリシャスマイル〜!!」

咲夜「味は美味いが、生地が少しサクツとし過ぎてるな」

ここね「うん。もつとモチモチしてた…」

らん「生地が美味しかったもんね〜」

あまね「そうだな、粉の調節がポイントかも。モチモチなら強力粉、パリって焼くなら薄力粉。溶かしバターや油の違いでも味が変わってくる」

冬美「パフエは生クリームや具材とかじゃなくて生地が基本だからね。生地の調節をしていけば、伝説のクレープに一步近付けるかも」らん「おおっ！流石あまねんとふゆゆん！」

冬美「ふっふーん。これでも曾お祖父ちゃんやママに鍛えられてるからね！」

冬美は自身の経験を自慢する。一応女子だから体重は気にするタイプだが、料理に関するプライドは誰にも譲れない程に栄次郎じーちゃんと粗同じだからなあ…。

拓海「成る程、問題は粉の調節か…！」

二回目はキウイを追加。今度は生地がモチモチし過ぎてる事から、

粉を微調整。更には蜜柑を追加し、中央に乗せたアイスの左右側に星形のトッピングを刺す。そのおまけにホイップクリームと桜桃を付けて、よりゴージャス感を溢れ出させる。

拓海「さあ、どうだ!？」

冬美「・・・これは、案外行けるかも！」

ここね「生地のもちもち感も似てる・・・！」

雄大「バター具合も丁度良いね」

らん「大分、伝説に近付いてきた！」

拓海「よし。後は粉を微調整して・・・ああ、ちよつと作り過ぎたか？」

試行錯誤を繰り返した結果なのか、16皿分のクレープを作り過ぎた事に気が付かなかった品田だったが、ゆいの期待に答えて気合を改める。

ゆい「もうちよつと・・・！」

咲夜「待った。其処で止め・・・ぐっ!？」

意気込んだゆいが小麦粉を量を測り、俺がそのグラムを見る事にする。しかし余りにも慎重し過ぎたのか、手の力が抜けると小麦粉が煙の様に巻き上がった。

俺は直前にエプロンの半分を脱いで小麦粉を防ぐ。

ゆい「げほっ、げほっ、げほっ！」

咲夜「ふう、”備えあれば憂いなし”、ってな」

拓海「ほら、タオル。門津もエプロン拭いとけよ？」

ゆい「あ、有難う・・・」

あまね「案外、世話焼きなんだな」

冷やかすかいちよに続いて、俺も^{からか}揶揄いの爆弾を一つ投げてみる事にした。

咲夜「気が利くぜ品田。お前は将来、誰かのお婿さんむこになれるかな」

『!?!』

拓海「お、お婿さん!?!べ、別にそんな訳じゃ・・・!／／／」
ゆい「?」

俺の言葉で照れ隠しながら再び生地を泡立て器で混ぜる品田の様子を見る食いバカ1号ことゆい。少し爆弾にしては言い過ぎたかな？

□

NO SIDE

場面は変わりブンドル団アジト。ナルシストルーとソルトルーは、ブラックペッパーを今後のプリキュアとの戦いにてどう利用するかを考えていた。

ナルシストルー「あの黒胡椒、こししょう 揶揄うと面白いな。ミスを突けば足元掬えるかも」

セクレトルー「ブラックペッパーの事ですね。何か良い案が？」
ナルシストルー「まあね。さてと、次は何のレシピツピを狙おうかな？」

ソルトルー「やはりかき氷の次に美味しい夏の食べ物と言えば、ズバリ！あんみつ 餡蜜か、それともジェラートか。どちらにするか迷いどころですねぇ……」

すると、セクレトルーが唐突な提案に出る。

セクレトルー「クレープ！」

「……えっ？」

セクレトルー「クレープにしましょう！クレープが良いです！」

ナルシストルー「は？クレープ!？」

セクレトルー「『伝説のクレープ』なる物があつたそうです、かなり人気のお店だったとか。つて言うか、私も食べてみたかった…！」
セクレトルーの呟きでソルトルーは十年くらい前に伝説のクレープを実食した経験を振り返る。彼にとつては忘れられない味の一つがこの伝説のクレープで、速やかにクレープのレシピを狙う事に決行した。

ソルトルー「懐かしいですねえ、伝説のクレープ！ワタクシも思い出しただけで、もう一度あの味を堪能したいと思つていたところでした！」

ナルシストルー「ええつ、クレープ!?つてか、ソルトルー。お前、人の話で切り替えるのはちよつと…！」

ソルトルー「では！」

「『ブンドル・ブンドル!!』」

□

Sakuya side

品田が知人である湊さんをフルーツパーラーKASAIに呼び出して試食させた。『生地がモチモチなところが伝説のクレープに似ている』と、とても好評だった様だ。

陽佑「これって、若しや俺の為に…？」

拓海「俺も湊さんにいつもお世話になってるから、力になりたいと

思って…」

陽佑「そうだったのか… 済まん！」

拓海「えっ、どうかしたんですか？」

突然に湊さんが謝罪する。

陽佑「実はちよつと話そびれたんだけど、麻恵が入院する前に大喧嘩しちやって…」

咲夜「成る程。悩んでいた本当の理由はそれだったのか」

陽佑「あ。いや、でも！せっかく拓海が仮面ライダーである咲夜達の協力を得て作ってくれたんだし、行くよ。この伝説のクレープは見舞いに行く切っ掛けになると思って探してたし…」

拓海「クレープの事は気にしないで下さい。俺が勝手に作っただけなんで」

陽佑「いや、拓海の気持ち^{むげ}を無碍にする訳にやあいかねえ！ただ問題は麻恵だ、会った時に何て言えば。又余計な事言っ^てて怒らせるかも…」

早とちりをしてしまったのか、品田は壁に手を当てながら落ち込んでしまう。

咲夜「そうやって後先考えるから何も出来ないんだ」

『！』

咲夜「麻恵さんはあんたの幼馴染みなんだろう？ごつつい体した良い大人のあんたがふしだらなく落ち込んでどうすんだ。やりたい事あるなら突っ走ってみろよ、結果なんてどうだっていいじゃねえか。ま、いぎつてなった時は品田がケツ拭いてくれるし」

雄大「何で女の子の前で汚い発言してんだよ…」

背後では冬美が笑いのツボを押すタイミングを凶っていた。相変わらず準備が早すぎるだろ。俺は左腕で首を抑えながら言葉が続ける。

咲夜「まあまあ、そう言わずに。だから湊さん、あんたが決める。このまま麻恵さんと仲直りせずに別れてもいいのか？」

陽佑「俺は… やっぱり、このまま麻恵と仲直りせずに縁を切るのは絶対に嫌だ。だから、ちゃんと謝ってくるよ！」

咲夜「ふっ、そうでなくっちゃ」

あまね「それなら、このクリスタルシユガーボトルにメツセージを添えてみては？」

かいちよにアドバイスを送られた湊さんは、早速メツセージを書く事にした。

陽佑「これなら、受け取ってくれっかな？」

ローズマリー「拓海君は麻恵さんともお知り合いなのよね。一緒に行つてあげたらどうかしら？」

陽佑「いやいや。其処までは悪いし…」

拓海「…そうだな。ローズマリーの言う通り、これは俺が乗り掛かった船だ。最後まで付き合うよ！」

咲夜「せっかくだし、俺も一緒に行こう」

陽佑「気持ち嬉しいとこなんだが、仮面ライダーである咲夜にも無理はさせたくねえ。此処は俺と拓海の二人で行くよ」

咲夜「…そうか。一度顔を合わせたかったけど、仕方ないか。品田、俺の分まで頼んだぞ」

拓海「任せとけて！」

湊さんと品田はもう既に腹を括くっていた。本当は俺も面会に行きたかったが、せっかく点滴で抑制したバグスターウイルスが悪化したら元も子もないとレグレット達に止められている。

「行つて来ます！」

『いってらっしゃい（コメ）！』

二人を見送つた後、クソ犬とドラジカは縫いぐるみのフリを止めた。

パムパム「はあ、はあ、流石に縫いぐるみのフリはキツ過ぎるパム…！」

メンメン「疲れたメン…」

キバーラ「二人共、お疲れ様。お水でも飲む？」

パムパム「ありがとパム…」

メンメン「メン…」

キバーラの気遣いでクソ犬とドラジカはペットボトルの蓋に入れ

た水がぶ飲みしている中、ゆいはクリスタルシユガーボトルに目を付ける。

ゆい「あ、そうだ！あたしもメツセージを書きたいんだけどいいかな？」

コメコメ「コメ…？」

□

Takumi side

新鮮病院へと赴いた俺は、麻恵さんの居る病室へ足を運ぶ。

拓海「麻恵さん！」

麻恵「あら、拓海君。来てくれたの!？」

拓海「こんちには、お久しぶりです。ほら、早く！此処まで来たんだから！」

陽佑「え、あ、いや、その…」

麻恵「陽ちゃん!？」

麻恵さんの呼び掛けと共に湊さんの背中を押した。

陽佑「わ、悪かったな…／／／」

頬を赧めながらクレープを差し出す湊さんに麻恵さんは笑顔を見せた。話によると、湊さんは『優しいガキ大将』だったとの事で、中学の頃に風邪で寝込んでしまった時に伝説のクレープを持ってくれたそう。

陽佑「が、ガキ大将は余計だ／＼／」

麻恵「けど、又この味が食べられるなんて…二人共、本当に有難う！」

だが、そんな時間は長くは続かなかった。どす黒い緑のオーラが一瞬だけ湊さんと麻恵さんを纏い、異変が起きる。

麻恵「あれ？どうして私、クレープが好きなんだっけ？」

陽佑「そういえば、何でクレープを届けに来たんだっけ？」

拓海「あいつらの仕業か…!!」

その異変がブンドル団の仕業だと確信した俺は、二人に聞こえない程度に呟いて憤慨した。

病院から出てブンドル団の幹部二人と対峙していたゆいと門津の姿を目撃する。

ナルシストルー「混ざれ、モットウバウゾー！」

『ギヤング・インセクト！』

ソルトルー「出でよ、ワタクシのバグスター！」

ブンドル団のシンボルが調理器具を押印する事で四角いまな板とおおきし大匙のスプーンをマーキングし、左腕を握ると二つの器具が融合。緑の炎を噴き出し、合体タイプのウバウゾーが誕生した。ソルトルーも自身が持っている武器の砲身から散らばったオレンジ色のウイルスが怪人の姿を形成させる。

姿は至ってシンプルだ。オレンジのメガホンを手に持った黄色いスーツを着ている蝸牛^{かたつむり}…と思っていたが、実際は蝸牛の殻を彷彿^{ほうふつ}とさせる金属製の装甲を外れない様に鎖や杭で固定されているため『蝸牛の殻を無理やり被った蛞蝓^{なめくじ}』と過程しても良さそうだろう。モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

スネイガー「またまた主役のスネイガー様の復活だ！今度のレベル

は20から30に出世だぜ！」

ローズマリー「デリシヤスフィールド！」

ローズマリーの掛け声で出現した虹色のオーロラがゆい達を転送させる。俺もデリシヤストーンを持ちながら向かおうとするが、ブンドル団に言われた事がフラッシュバックし、そのまま飛び込むのを躊躇ちゆうちよしてしまう。クソ、こんなとこで何立ち止まってんだ。俺：
！

□

Sakuya side

モットウバウゾー「ウバウゾー！」

ゆい「皆、行こう！」

咲夜「行くぜ、野郎共！」

『うん！（ああ！）』

モットウバウゾーと蝸牛バグスターと対峙した俺達は変身に移行した。

□ 「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！」

□ ゆい「にぎにぎ！」
コメコメ「コメコメ！」
ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□ ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□ らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□ あまね「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

□

「「シエアリンエナジー！」」

コメコメ「コメ〜！」

パムパム「テイステイ！」

メンメン「ワンターン！」

咲夜「ブフォツ!？」

□

ファイナーレ「トツピング！ブリリアント！シャインモア！」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

ファイナーレ「ジェントルに、ゴージャスに、咲き誇るスイートネス！キュアファイナーレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

「「デリシヤスパ〜テイ♡プリキュア！」」

□ 「二「変身！」二」

【カメンライド デイクライド！】

キバーラ「チュッ！」

『SWORD FORM』

デイクライド（透冀）「後を継すがらず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択を！仮面ライダーデイクライド！僕達の旅の行き先は…僕達が決める!!」

クウガ「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は…俺が守る!!」

キバーラ「世界に輝く女騎士！仮面ライダーキバーラ！貴方あんたの野望、止めてあげる（わ）！」

電王S「俺、参上！」

咲夜「全てを破壊し、全てを繋ぐ！」

「二「我ら、仮面ライダー！」二」 ドカーン！」

□

Sakuya side

ヤムヤム「はにや？あのウバウゾー、この前のウバウゾーと似てるね」

ファイナーレ「似てるけど、まな板の形が違う…」

デイクライド（透冀）「敢えてバランスを保ち易くしてるのかな？」

ローズマリー『確かにそうね。それにスネイガーの殻だって、この前戦った時よりもゴージャス特盛りになってるわ』

変身完了後、ヤムヤムとファイナーレはモットウバウゾーの見た目に疑問点を指摘する。

ナルシストルー「流石にディエンドとジェントルーでも気付くか。だが、それだけじゃない。小匙だった計量スプーンが大匙に変わっているだろう?」

咲夜「確かに。眼鏡掛けてるから、少しデカく見える!」

メンメン「いや、流石に分かり難いメン!」

モットウバウゾーの違和感に逸早く気付いた俺の反応に対して、ドラジカはスプーンの大きさに対する疑問点を打ち払えていない様子だった。

ヤムヤム「スプーンの大きさはまだしも、二度目ならマシマシで余裕!」

咲夜「余裕振ってるのもいいが、見た目で判断するのは控えた方がいいぞ」

ローズマリー『そうね。まな板の形やスプーンの大きさが違っても、油断は禁物よ!』

モットウバウゾー「モットウバウゾー! ウーバーツ!!」

両側のスプーンが上に展開し、エネルギー弾の雨が俺達に降り注ぐ。スパイシーも両手を翳して防御態勢に至るも、弾幕の量が大き過ぎて避けるという選択肢をするしか他ならなかった。

ナルシストルー「見た目は微妙な違いでも、パワーは数倍アップしているのさ」

30にレベルアップしたスネイガーも鈍足な身体なのにも関わらず、目にも止まらぬスピードで俺達に突進を何度も仕掛けて来る。その速さはまるで新幹線やフォーミュラー並みと言っているだろう。俺は突進を避けながら血管を切らない程度に点滴の針を抜き、車椅子を素早く畳んでグルグル巻きにした包帯を外す。

ソルトルー「おや? その左脚は... さては、あの時ウオブリーさんの羽に含まれたバグスターウイルスの効果が効いているようですね。それにしても違和感があります。本来ならば体内に回ったバグスターウイルスは、二日足らずでバグスターとなる筈!」

咲夜「レグレットが変身したバイオライダーで作った点滴でバグスターウイルスを抑制していたのさ。それにしても、あの蛞蝓野郎。B

とCの記憶が正しければ、あんなスピードはなかった筈だ……！」

ソルトルー「それはワタクシが『ガーテンオブバンバン』というゲームに出て来る『スローセリーヌ』のデータをインプットしたのですよ。その結果、背負っている殻が金属製にアップグレードした代償でスピードが鈍くなっているスネイガーさんは、より有利に戦い易くなっているという事です」

『ガーテン オブ バンバン』。記憶喪失前の俺がインターネットで見ていたホラーゲームの一種。主人公が疑わしい程に空のままにされた施設『バンバン幼稚園』の謎を、自分の子供の為に解明するゲーム。そのキャラクターの一体が『スローセリーヌ』だ。性別は女性で、座右の銘には『私は遅いけど、誰かが困っていたらすぐに駆けつけるよ！』と書いてある通り、鈍足な黄色い蝸牛の姿をしているのにも関わらず、さっきのスネイガーと同じく新幹線並みのスピードを持っている。だが俺は鎖で縛られている金属製の殻に注目すると、ある事に気付いた。

咲夜「……そういう事かよ。それと今気付いたんだが、前に俺が戦ったマイマイゴンのデータも入ってるのか？まさか、黎斗社長が俺をバグスターウイルスに感染させたと同時にその遺伝子情報……所謂、その記憶を基に他のゲームだけじゃなく、俺がこれまで戦ってきた敵のデータもインプット出来た。違うか？」

マイマイゴンは嘗て俺がカービィの世界で戦った魔獣だが、実際はカスタマーサービスが転送した殻を付けたエスカルゴンが魔獣化した姿。

倒されても結局はエスカルゴンの殻の中身は永久に闇の中という形で終わった。まあ、実際に蝸牛の殻の中は内臓が詰まっているから取ったらマジで死ぬ。ソルトルーは俺の憶測に正解と示したのか、拍手を送りながら称賛する。

ソルトルー「察しが早いですねえ、貴方や坊っちゃんのような勘の良い人は大好きですよ。さあ、ライダーとプリキュアを倒すのです！」

スネイガー「任せとけてソルトルー！パワーアップした主役の晴れ舞台ってところを見せてy……うおわあっ!？」

モットウバウゾー「ウバツ!?ウバアーツ!」

言い終えようとした直前に発生した突風がスネイガーを無数の羽で牽制させ、計量スプーンのエネルギーが充填完了直前となったモットウバウゾーに不意打ちの飛び蹴りをかますブラックペツパー。

それともう一人。俺の目前に立っていたのは、ウオブリーをより幼くした外見のバグスターだった。

咲夜「ウオブリー…なのか?いや、違う。確かに姿はウオブリーに似てるけど…なんとなく容姿が幼い感じだし、左腕が銃と一体化していない…!」

???「ウオブリーは僕のお父ちゃんの名前や」

咲夜「うわっ、喋った!」

???「当たり前や。普通の鳥が喋れるのは大体鸚鵡おうむくらいやで?それと、自己紹介忘れとったわ。僕はジュブリーJr、『ジュブリー』って呼んでくれるととても助かる」

キバール(冬美)「ジュニア?それって若しかして、貴方はウオブリーの息子って事!」

ジュブリー「まあ、そんな感じやな」

クウガ「通りで関西弁も父親譲りって訳か…」

ウオブリーJr. 改めジュブリーバグスター。幼さ故なのか、翼と一体化している両腕の代わりに両脚が発達しており、首元には鳥の巣を彷彿させるリースを付けている。

ソルトルー「これは驚きました。まさか、ウオブリーさんの子供がこんなにも早く成長していたとは…!」

ジュブリー「外見はそうでも、実質的に子供やからな」

ソルトルー「ほお、これは又素直で」

ナルシストルー「そんな事よりもさ、又邪魔しに来たんだ。ウオブリーの息子は兎も角、プリキュアやライダーの味方って訳でもないんだろ?正体が分からない奴に手を出されても、プリキュアもライダーも迷惑だよ」

再び対峙したナルシストルーはお構いなしに正論をかまされた歯ぎし軋りを立てたブラックペツパーを後押しする様に、俺は破壊者として

格言をかます。

咲夜「誰の味方でもないとか、正体が分からないとか、そんな単純な理由に義理はない。こいつはただ、自分にとって大切な物を守ろうとしただけだ！」

ナルシストルー「反吐へどが出る言い方だな。そんなちっぽけな思い出を守って何になる？」

ジュブリー「食べ物のおいしさを奪おうとする泥棒猫の君らに言われる筋合いはないで。それに…ちっぽけだから守らなくちゃいけない、この子はそのために戦ってるんや」

続け様にジュブリーも格言を言い放つ。お前、一体何様だよって心の中で思いながら。

ソルトルー「生み出されたばかりなのに大口を叩きますねえ。一体何処の誰に似たのやら…」

デイケイド組「『アキノリ』」

咲夜「わっ、悪かったな！俺が生意気で!!ってか、左脚が元に戻ってる…！」

よく見てみると、俺の左脚が何事もなかったかの様に戻っている。ブラックペツパー「そうだ…！例え迷惑だったとしても、大事な思い出は必ず取り返す！」

地面を強く蹴り、黒いエネルギー弾を投擲するブラックペツパー。だが、前回と同じ様に左側の大匙スプーンで受け止められてしまう。スネイガーもジュブリーに高速移動を仕掛けるのに対し、受け身のまま攻撃を耐え切る。

スネイガー「ふははははっ！どうしたあ、ウオブリーの息子さんよお！お前が早く攻撃しなければ、主役であるこの俺がお前をサンドバックとして倒すだけだぜえ!？」

ローズマリー『この前と同じ手を…皆、逃げて！』

咲夜「いや、その必要はなさそうだ」

ローズマリー『えっ…？』

ブラックペツパー「…ふっ！」

モットウバウゾー「ウバツ…!？」

ナルシストルー「何ッ…!?!」

ブラックペツパーはマントをひるがえ翻す事で黄色いオーラを纏って受け止められたエネルギー弾を反射し、ナルシストルー達はエネルギー弾によって崩落した岩陰から間髪離れながら、ブラックペツパーが隠し持っていた技に驚愕する。

ジュブリーはラリアットをかまそうとしたスネイガーの手を掴んで一本背負いに入って地面に大きく叩き付ける。更には立ち上がったところでボディブローを一番効きやすい右の脇腹を打ち込んだ。

挿入歌『The people with no name/RIDER CHIPS Featuring m.c.A.T』

ブラックペツパー「残念だったな。私に同じ手は通用しないッ!!」
隙を突いたブラックペツパーはアッパーカットでモットウバウゾーに尻餅を突かせる。

スネイガー「ぐうっ!?!ば、馬鹿な…!?!」

ジュブリー「自分自身におぼ溺れた事が仇となったような。それに、君はお父ちゃんをこげにした…絶対許すつもりはないから覚悟しとき」

スネイガー「ま、待て!話せば分か…ぐうっ!?!」

ジュブリー「命乞いはせん方がええで。時間の無駄や…はあッ!!」

スネイガー「ぐはああっ!?!」

ぬき貫手で喉を潰されたスネイガーはウオブリーが続けて繰り出した上段回し蹴りを喰らう。流星に地獄突きからの回し蹴りはキツいだろ
うな。

クウガ「あのバグスター、翼が発達していない代わりに格闘技が熟知してる…!」

キバーラ(冬美)「若し、この子が敵だったら、雄大と互角な戦いをしてたかもしれないね」

咲夜「感想は後回しだ。野郎共、ジュブリーに続くぞ!変身!」

【カメンライド デイエーンド!】

プレシヤス「あたし達もブラペに続こう!」

ファイナーレ「ああ。一気に攻める！」

俺はデイエンドに変身し、モットウバウゾーに立ち向かう。

ヤムヤム「クレープのレシピツピを返して！」

スパイシー「伝説のクレープを食べていた皆の大事な思い出を！」

プレシヤス「絶対、取り戻す!!」

ブラックペツパー「俺も、『ご飯は笑顔』を守ってみせる…！」

その言葉に俺は仮面の下で目を見開きながら確信した。ブラックペツパーは品田である事を。

デイエンド（咲夜）「そうか。やっぱり、お前は…！」

モットウバウゾー「モットウバ…！」

デイエンド（咲夜）「Oh・no・you・Don't！」

【アタックライド ブララスト！】

デイエンド（咲夜）「オラアツ!!」

モットウバウゾー「ウバツ!!」

初期組に対して小匙スプーンにエネルギーを充填するモットウバウゾー。そうはさせまいと俺は懐に入り込んでデイエンドブラストをお見舞いしてやった。

キバーラ（冬美）「はい固定。ファイナーレ！」

ファイナーレ「はあああツ!!」

同じく懐に入り込んでいた冬美が召喚したドツガハンマーでモットウバウゾーの身体機能を麻痺させ、ファイナーレが正拳突きによる強い衝撃波でエネルギー弾が発射する位置を地面へとズラした。

ジュブリー「ライダーの皆。後は任せたで！」

デイケイド（透翼）「恩に着るよ。このチャンス、絶対に逃さない！」

【カメンライド ファイズ！】

『Complete.』

血液の様に走る赤いラインが眩い光と共にレグレットの姿を変えた。ギリシヤ文字のφを象った黄色い複眼が刹那に光り、銀のアーマーを纏った黒いスーツ全体には赤いライン『フォトンストリーム』が流動経路として伸びている。罪を背負いながら戦う『夢の守り人』仮面ライダー555へと姿を変えた。

「アタックライド オートバジン！」

続けてライダーカードを装填。強制的に転送されたマシンデイクイダーが銀のオートバイ『オートバジン』への変身から更に人型に変形を果たすと、手に持った前輪部分に当たる盾『バスターホイール』が回転。秒間96発もの12mm弾を発射してスナイガーを牽制させる。

その間にレグレットは引き抜いたオートバジンの左グリップ部分を剣型の武器『ファイズエッジ』として左手で逆手持ちにし、フォームライドカードを装填する。それは俺が地獄兄弟と戦っていた際に使い損ねたライダーカードだった。

「フォームライド ファイズ アクセル！」

胸部装甲の『フルメタルラング』が展開した事で赤いコアが埋め込まれている内部機能が露出。複眼である『アルティメットファインダー』が黄色から赤へ、フォトンストリームが銀色の『シルバーストリーム』へと変化する。『ファイズ アクセルフォーム』となったレグレットは左腕に装着している時計型デバイス『ファイズアクセル』に付属しているプログラムキー『アクセルキー』をファイズエッジに装填。ブレード部分である『フォトンブレード』には、根本から切っ先までエネルギー『フォトンブラッド』が駆け巡る。

『Ready.』

オートバジンの左グリップ部分を剣型の武器『ファイズエッジ』として引き抜き、左腕に装着している時計型デバイス『ファイズアクセル』に付属しているプログラムキー『アクセルキー』をファイズエッジのスロットに装填する。

クウガ「雷変身！」

ライジングアークルから流れ出た電気を浴びて金の縁取りが追加されたペガサスフォーム『ライジングペガサス』へとフォームチェンジし、更には冬美から既に受け取っていたバツシャーマグナムが変化したペガサスボウガンにも電気が伝った事で銃身に金の装飾が付加された『ライジングペガサスボウガン』となる。グリップを引き、雄大は銃の構えに入る。

デイケイド（透翼）「雄大、遅れは取らないで」
クウガ「ああ。10秒間だけな！」

『START UP』

掛け合いを終えたレグレットは右手にソードモードにしたライドブツカーを持ち、白い蒸気を纏ったまま1000倍の高速移動でスネイガーを何度も斬り付けて宙に打ち上げ、無数に固定された円錐状の赤いマーカー『ポインティングマーカー』がスネイガーの体を突き抜ける様に粒子化する。

『3, 2, 1...』

クウガ「ライジング：ブラストペガサス！はあッ！」

精神を最大まで研ぎ澄まし、タイムアウト直前にライジングペガサスボウガンから空気弾の三発中全弾が命中。撃ち込まれた箇所^{かしよ}に封印エネルギー三つとゆのギリシャ文字が浮かび上がる。

スネイガー「ぐおあああッ!!!」

『Time out... Refomatation...』

断末魔を上げながら爆散したスネイガーのデータはバグヴァイザーⅢに回収されたと同時に、時間切れの通告で自動的にファイズの通常形態に戻る。

ローズマリー『一気に決めるわよ！』

ブラックペツパー「プレシヤス、電王！」

プレシヤス「うん！」

電王S「行くぜ。俺の必殺技パート5！」

『FULL CHARGE』

電王S「せいっ！うりゃっ！」

モットウバウゾー「ウバツ！ウボアツ！」

オーラソードを風車の様に回転させながら左右に斬り付け、プレシヤスとブラックペツパーは必殺技に移行する。

プレシヤス「1000キロカロリパーンチ!!」

ブラックペツパー「ペツパーミルスピンキック!!」

電王S「でりゃあああーっ!!」

ダイナマイト5本分の威力を持つパンチ、靴裏^{くつ}に光弾を纏ったドリ

ル状の飛び蹴り、更には回転により威力が倍増した切り上げでモット
ウバウゾーを戦闘不能にする。

プレシヤス「スパイシー、ヤムヤム、咲夜君！」

「うん！」

デイエンド（咲夜）「久々のハートジューシーミキサーだな。よし、
やるか！」

□

「トリプルミックス！デリシヤスチャージ！」

プレシヤス「プレシヤスフレイバー！」

スパイシー「スパイシーフレイバー！」

ヤムヤム「ヤムヤムフレイバー！」

デイエンド（咲夜）「仮面ライダーデイケイド！久々のマスクド

ジャーニーミキサー！ライダー！トランス！ミックス！」

「プリキュア！MIXハートアタック！！」

デイケイド（咲夜）「ライダー… トランスディメンションスプライ
ス！！」

モットウバウゾー「お腹一杯！」

デイケイドA「皆も大匙と小匙、ちゃんと使い分けて料理しよう。
それでは、皆さん久々に…！」

「ご馳走（お粗末）様でした！」

クレープのレシピッピ「ピピピ〜！」

□

ファイナーレ「おかえり…」

クレープ個人のレシピツピが解放され、ハートフルーツペンダントに格納される。

ナルシストルー「今回も楽しかったよ」

ソルトルー「味方陣営のバグスター、実に興味深いですねえ。やはり貴方達はこうでなければ!」

ブンドル団に続いてデリシヤスフィールドを後にする。

ブラックペツパー「…:…:」

プレシヤス「あ。ちよつと待って!」

デイエンド（咲夜）「おい、ブラックペツパー!」

同じく立ち去ろうとしたブラックペツパーを俺とプレシヤスは呼び止める。

□

S a k u y a s i d e

コメコメ「ゆい、咲夜!はいコメ!」

ゆい「えっ?これって、あたしと咲夜君に!?!」

あまね「コメコメ達も、ゆいと咲夜にクリスタルシユガーボトルをあげたくてメッセージを書いたんだ」

夕方となり、和実家にてコメコメが俺とゆいにクリスタルシユガーボトルを手渡す。

ジユニラム『ソレヨリモ、ナンテ書イタカ見セテ!』

らん「らんらんも!」

キバーラ「二人共せかささないの。ええつと、何々… あらまあ!『ゆい だいすき』ですって!」

ローズマリー「何て尊いの〜!」

透冀「心が籠もってるね」

ここね「可愛い字…！」

ゆい「有難う！あたしも大好き！」

咲夜「俺もだぜ。コメコメ！」

コメコメ「嬉しいコメ〜！」

メツセージに感激したゆいと俺はコメコメを抱き締める。

ジュブリーは今、俺の体内でゆっくり休んでいる。それにしてもウオブリーの奴、飛んだ置き土産をくれたモンだな。

これからあいつの活躍に期待したいところだ。ウオブリーが繋いだ命は俺が引き継いでみせる…そんな決意を胸にした。

あまね「直接伝えてくれるのも嬉しいが、文字にしたメツセージも心に響く…。」

ゆい「うん。湊さんの気持ちも届いて良かった！」

ここね「……………」

かいちよの格言に、ここねは何故か顔を俯うつむいていた。そういやレグレットの情報によれば、ここねはゆい達と出会う前は『いつも一人だった』と聞いていた。あの寂さみしげな表情、過去の何かあったんだろうな。

パムパム「そういえば、ゆいと咲夜もメツセージ書いてたパム」

透冀「和実少女とアキノリの気持ち、彼にも伝わるといいね」

ゆい「うん！」

咲夜「… ああ」

□

NO SIDE

陽佑「よつこらせと！」

拓海「うわっ！こんなに!？」

場面は変わり、福あんにて陽佑が拓海へのお礼とばかりにトマトやパプリカと言った夏野菜が入っている段ボールを降ろす。拓海は段ボールに入っている大量の野菜に驚愕していた。

陽佑「これでも足りないくらいだ。本当に有難う！」

拓海「いや、そんな…」

陽佑「拓海も何か悩んでたっぽいけど、その様子じゃ解決したんだな？」

拓海「ああ、うん。色々悩んだけど、俺がやってきた事は間違っ
なかつたみたい」

自室にはクリスタルシュガーボトルが置いてあり、ガラスの窓から夕日が射した事で宝石の様な輝きを発している。そして二枚のメッ
セージには、こう書かれていた。

『ブラックペッパーさん いつもありがとう プレシヤスより』

『ブラックペッパー、お前の正体はまだ俺達には分からないが…こ
れからも宜しく頼む。デイケイドと愉快な仲間達より』

□

パムパム「ここね、どうしたパム？」

外で蟋蟀こむぎせむしが音色を奏かなでる中、ここねはテーブルに置いてあったクリスタルシユガーボトルを誰かに贈るべくメツセージカードに『お仕事がんばってね　ここね』と認めると、何かを思ったのかその手は止まってしまう。

ここね「……………」

思い止まったここねにパムパムが優しく呼んでも、自室には静寂な空気が漂った。

□

ジュブリー「翼を授けるレッドブル！僕と乾杯や！」

オリジナルED曲2『ココロデリシヤス』

□

次回、デリシヤスパーティ♡プリキュア　く破壊者の食べ歩きく

ここね「何を話したら良いんだろう……？」

冬美「あたしき。アキノリに突き放されたあの日、一晩中泣いてたんだ」

デイケイドA「ドラゴンスタイルの真骨頂、見せてやる!!」
第二十三品：ここねの我儘!? 思いつきのボールドーナツ! / 過去の鎖
をぶっ壊せ! ドラゴンスタイルの真骨頂!
全てを破壊し、全てを繋げ!

第三章まで… 後、二話。

第二十三品：ここねの我儘!? 思い出のボールドーナツ
! / 過去の鎖をぶっ壊せ! ドラゴンスタイルの真骨頂!

□

SAKUYA SIDE

ゆい「ハラペコった。早く食べたいな〜!」

あまね「まだ、香り付けの料理を入れていないしな」

冬美「こういう時こそ、ローリエの定番。らんちゃん、お願い」

休日のなごみ亭にて、俺達八人はミートソースを作っていた。熱した鍋で杓文字で混ぜて煮込まれる度にトマトの良い匂いが湯気と共に鼻に通る。

らん「ローリエ選手。ミートソースの海にジャ〜ンプ!」

ミートソースのレシシピ「ピピ〜!ピピピ〜!」

あきほ「あ、皆揃って何作ってたの?」

華満の一声でミートソース個体のレシシピが刹那に姿を消すと、あきほさんがミートソースの中に入れたローリエの香ばしい匂いに釣られてやって来た。

冬美「ミートソースパスタです。昼飯に皆で食べようと思っていましたので」

あきほ「へえ。じゃあ、ちよつと味見させてもいい?」

ゆい「ダメダメ。完成まで全部あたし達がやるって決めてるから」
咲夜「漫画とかでよく言うじゃないですか。『切り札は最後までとっておく』って、だから此処は俺達に任せてください」

あきほ「そっか。二人がそこまで言うなら、楽しみにしとくか!」

ゆい「うん、有難う!」

笑い合うゆいとあきほさんのやり取りを見て、羨ましそうにここねは静かに笑みを浮かべる。

あきほ「そうだ。ここねちゃん、『アレ』見た?」

「ここね「えっ…?」

あきほ「これこれ。ここねちゃんのママのインタビュー記事」

『インタビュー?』

俺達にとある記事のページを見せるあきほさん。写真にはここねに似た容姿端麗な女性ようしたんれいが写っており、縦文字で『神の舌の異名を持つ芙羽ふわはつこさん』と記載されていた。

かいちよの朗読によると芙羽グループのレストランメニューの開発者や食材の買い付けを担っており、その味覚の切迫せつぱくさで『神の舌』と呼ばれているそうだ。

らん「うひょく! 『神の舌』ってマシマシにカツコいいく!」

あきほ「結構有名だよね。ここねちゃんのママ」

ここね「はい。多分…」

あきほさんに母親の事を褒められたここねは少しだけ頬を染める。

ゆい「神の舌だなんて、きつとお家でも家族ですつごく美味しいお料理を食べてるんだね〜!」

らん「だねだね」

食いバカ共はここねが毎日家族と美味しい料理を食っているんだなと妄想していたが、そんな柔な理由ではないとここねは首を横に振った。

ここね「ううん。父も母も出張が多くて、あまり家に居ないから…」

透冀「だから執事である轟さんと一緒に居る事が多かったんだね」

あまね「だがそれは、寂しい時もあるんじゃないか?」

ここね「寂しい…?」

かいちよに問い返されたここねは寂しいという感情に理解が追い付かないでいた。

咲夜「分からないのか? 例えば、突然行方不明になった子供を両親が数年掛けてでも探してみたいに。ほら、サスペンスでもよくある展開だし」

雄大「アキノリ。そんな例えじゃここねちゃんを混乱させるだけだぞ」

咲夜「そうか？」

冬美「……………」

浮かない顔をしていたレグレットと冬美はここねの気持ちを同情して居る様にも見えた。開閉ドアが開く。

あきほ「御免なさい。今準備中で… あ！」

何と来店してきたのは、先程インタビュー記事に写っていた『神の舌』の異名を持つ女性、芙羽はつこその人だった。

「『神の舌だ!!』『神の舌だ!!』『神の舌だ!!』」

ここね「ママ！」

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメージOP2 『MYTH&ROID/VORACITY』

□

F u y u m i s i d e

あきほ「じゃあ、海外出張は暫くしほキャンセルに？」

あきほさんが理由を尋ねる。海外への出張は突然キャンセルと

なったため、暫くの間は家に居られる様になった事。そして轟さんの情報を通じて、なごみ亭に直接伺いたいがために来たとの事だ。

ゆい「良かったね、ここねちゃん。お父さんとお母さんの二人と一緒にいられて！」

らん「でもって、一緒に美味しい物もいっぱい食べられる！」

咲夜「結局それかよ。全く、困った食いバカ共だぜ」

ここね「一緒に… ゆっくり…」

両親と一緒にいられる事にここねちゃんは少し顔を俯うつむきながら囁ささやく。静寂な空気が漂う中、その様子にはつこさんは声を掛ける。

はつこ「ここね…？」

ゆい「ここねちゃん？」

ここね「ううん、何でも」

ここねちゃんはゆいの声掛けで我に返って首を振ると、あたしの自慢の嗅覚きゆうかくが丁度良い頃合いでトマトの匂いを伝わせた。雄大にミートソースの具合を見てもらうのを任せておいて正解だった。

雄大「冬美。ちよつと味見してもらえないか？」

冬美「うん、今行く！」

あたしは雄大の元に駆け寄り、味見の小皿に淹いれたミートソースを口に含ませる。

冬美「うん、大丈夫みたいね。話に釣られて放つたらかしてたらどうなってた事やら…」

ここね「でも、焦げてなくて良かった… ふふっ」

はつこ「ここねがあんな風に笑うなんて…」

あきは「？」

冬美「……」

普段はこういう事はなかったと、はつこさんは呟く。そんな心配性な言葉があたしの不安を駆り立てた。

はつこさんが帰る際にキバーラには、ここねの家に潜入して様子を見て来てほしいと頼んでおいた。おパムちゃんも不安がちだったけど、人の気持ちを中心に心配せざるを得ないのが、あたしの専売特許だ。『あまねの双子の兄弟の次にバレなきやいいけど』と心の中で強く懇望こんもうし

た。

□

K i v a — l a S I D E

あたしは冬美に頼まれてここねちゃんの家のお食卓に潜入して様子を窺^{うかが}っているわ。ここねちゃんのお母さんはミートソースパスタをご馳走^{ちそう}になったため、晩ご飯は控えている様子ね。

左側のテーブルに隣接していたのはここねちゃんのお父さん。複数の高級レストランを経営していて、料理人としてはかなりの腕があると聞いているわ。神の舌の異名を持つ母親と料理の腕を持つ父親、まさに最高のコンビネーションと言っても過言ではない。

しょうせい「あむつ。んん〜！これだよこれ。やっぱり日本のお寿司はいいな」

食べているのは和食ストリートで買った高級お寿司。その味は料理人である彼にとつてはとても絶賛だったみたい。

はつこ「私は昼間食べたミートソースパスタでお腹いっぱい」
しょうせい「ミートソース？」

はつこ「ええ。なごみ亭に伺ってみましたら、『一緒に食べていきませんか』って誘われて…。お言葉に甘えたわ。とても美味しかった」
しょうせい「…そうか」

穏やかな表情で笑みを浮かべるここねちゃんのお父さ。何よりも家族と一緒に居られる時間を無駄にしてはいけなく深く心に誓っていたけど、何処かしらと後悔してる様にも見えた。きつと、何か

あつたのね。

はつこ「ここねは本当にパンが好きね」

しょうせい「ここねは何か、気になる物とかあるのかい?」

ここね「えっ? うーん… Pretty Holidayの夏の新しい」

しょうせい「おおーっ! それはどんな食べ物なんだ?」

料理人としての情熱が湧き上がってしまったのか、ここねちゃんのお父さんは無意識に自分を急^せかしてしまふ。

ここね「ううん。いいの」

首を小さく横に振って、ここねちゃんは両手付きの豪華なスープカップの持ち手を持ちながらスープをゆっくりと口に含ませる。

はつこ「…ここね。スープ、美味しい?」

ここね「うん」

はつこ「そう。このお水も美味しいわ」

ここね「うん」

しょうせい「いやあ、ハツハツハツハツハツハツハ…!」

家族と久々に食卓を囲んでいるというのに、お互いの会話が弾んでいない。何を話せばいいのか戸惑っているのね、きつと何かあつたに違いないわ。

ここね「ご馳走様でした。その、宿題があるので部屋に戻ります…」

はつこ「……………」

重ねた食器をキッチンシンクに置こうとしたここねちゃんに、お父さんが一声掛ける。

しょうせい「…ここね」

ここね「何?」

しょうせい「ああ、勉強頑張れよ!」

食器を置いて部屋に戻る様子を見て、ここねちゃんのお母さんは自分の愛娘^{まなむすめ}を心配していた。

□
P a m p a m s i d e

ここねが部屋に戻って来たパム。だけど鏡越しに写る自分の顔を見て俯いていたところをパムパムは膝の上に乗って訪問したパム。

ここね「何話したらいいんだろう…?」

パムパム「パム…?」

溜め息と共に呟いた一言にパムパムは首を傾げたパム。

□
K i v a l l a s i d e

はつこ「はあ。何を話したらいいのかしら…?」

しょうせい「最近のここねの事、何にも知らないしなあ…」

溜め息を吐く妻を見て、ここねちゃんのお父さんはテーブルの椅子に背中を付けて軽く貧乏揺すりをする。

しょうせい「…うん。何かここねが興味ありそうな事、調べてみるよ」

はつこ「私も、心当たりを充^{あた}てみるわ」
キバーラ「…」

□

Sakuya side

翌日となり、公園の広場にあるベンチに座っていたここねのところへ集合した俺達にクソ犬とキバーラは昨日の出来事を語った。

キバーラ「… という事があったわ」

パムパム「つまりここねは、パパさんとママさんと一緒にいると何だか緊張しちゃうパム」

ここね「……………」

ここねは無言で頷く。

冬美「キバーラに偵察を任せておいて正解だったけど、何だか複雑な気分ね」

ゆい「緊張？ どうして？」

問い掛けるゆいの言葉に、俺はここねの気持ちを代弁する。

咲夜「暫く会わないと距離感が縮むって、よく言われているだろ？」

それでここねは孤独に慣れ過ぎてしまったんだ。自分が寂しい事に気付かないくらいに」

らん「ほへ？ こうして皆と居られるのはオツケーだよね？」

咲夜「ああ。けど、両親とは話は別だ」

人間体になったコメコメとドラジカが水たまりでパシヤパシヤと足をバタつかせて遊んでいたのを無視して、ここねの話を聞く事にした。

ここね「私、ゆいとゆいのお母さんを見て『こんな親子も居るんだな』って驚いた。友達同士の様にお喋りして…」

ゆい「あたしはただ思った事を話してるだけだよ。それで喧嘩しちゃう事もあるけどね」

コメコメ（人間体）「しちゃうコメ！」

水たまりで遊んでいたコメコメがゆいに抱き付く。

らん「らんらんも発見した美味しいお店の話とかよくしてるよ」
メンメン「してるメン！」

華満の気持ちに賛同するドラジカ。

あまね「私も家で兄達にあれやこれやと甘えてばかりだな…。」

らん「ええ？あまねん、どうやって甘えるの〜？」

あまね「ひ、秘密だ！／＼／＼」

華満に^{からか}揶揄われて無記になるかいちよ。

透冀「意外だね。でも、ちゃんと甘えたいなら遠慮せずに甘えてもいいよ。何たって、あの二人は君と同じ血の繋がった兄妹なんだから」

咲夜「色々と雑談させて悪いが、そろそろ本題に入ろうか。ここね、お前と両親の間に何があった？」

俺が質問すると、ここねは頷いて自分の過去を素直に打ち明けた。

□

Y u d a i s i d e

はつこ「結局その日、ボードーナツは買ってあげませんでした。それ以来、ここねは私達に何か遠慮してる様になったというか…。」

雄大「そんな事が…。」

透冀「……………」

レグレットは『予想した通りだと』少し俯きながら眉を^{まゆ}顰^{しか}める。あ

いつも孤独な人間の気持ちを理解してるから、自分が予想していた事が的中したとなると不安にならずにはいられなかった。

はつこさんの話によると、幼少期時代のここねちゃんはある店の『ポールドーナツが食べたい』と言い出したのだが、はつこさんの姉……所謂伯母いわゆるおばに『あまり甘やかすと我儘わがままになる』と言われて買ってもらえなかったそう。

はつこ「丁度その頃から仕事で家に居られない事が多くなって、夫も私もここねの気持ちも少しずつ分からなくなってしまったのです」「なるほど」と同じく話を聞いていたマリさんとあきほさんが納得する。

ここねちゃんの実家……レストラン デュ・ラクは高級レストランでお金持ちだ。恐らくここねの伯母さんは欲しい物を何でも買ってしまう事で何れは我儘いすな子供に育ってしまうと心配して言ったのだろう。

だが、それを当時のここねちゃんが間違ったメッセージとして受け取り、今の性格に至ってしまった。

はつこ「皆さんと楽しそうにしているのを見て、あんな笑顔を私も見られたらとヒントを探しに此方へ来たのです」

あきほ「ううん、ヒントねえ……」

雄大「俺だったら、一緒に勉強を教えてもらったり、自分の悩みを家族とかに打ち明けたりしてます。何たって家族は家族ですから……」

はつこさんが自分のバックからある物を俺達に見せる。それは『お仕事頑張ってるね ここね』とメッセージが書いてあったシュガークリスタルボトルだった。それを見たマリさんは目を見開く。

ローズマリー「クリスタルシュガーボトル？」

雄大「これって……！」

はつこ「ここねが出張先に送ってくれたんです『お仕事頑張ってるね』と。でもこれも何か無理をさせているのではと、心配で……」

透翼「芙羽少女が書いた言葉に嘘偽りはありませんよ」

はつこ「えっ……？」

ここねの事が心配なはつこさんに、レグレットは口を開いた。

ローズマリー「私もここねがお仕事頑張ってる貴女達両親を、誇りに思ってるんじゃないかと思ってるわ」

あきほ「取り敢えず、美味しい物でも食べたらいんじゃない？うちの母が言ってた。」「ご飯は笑顔、だつて」

はつこ「、ご飯は笑顔、…？」

透冀「はい。例え離れ離れになっても心は繋がっているというのが『家族』だと僕は思っています。芙羽少女は貴女達両親にとつては大切な家族の一員なんですから」

ロイミュード時代のレグレットは、アキノリが転生直後に消した記憶を保持した影響で、家族に対する憎悪に捉とらわれていた時期があった。

それでアキノリと何度も打つかり合った末に自分も家族に愛されていた事に気付き、ロイミュードであるのにも関わらず生まれて初めて涙を流した。

透冀「僕も、貴女の娘さんと同じ様な経験をしています。まあ、こつちはちよつとした勘違いですけどね」

レグレットは照れ隠す様に笑って言った。機械だつて笑う時は笑うし、泣く時は泣く。ルーラーの様なサイボーグでもない完全な口ポットだろうと。まあ、今は元セカンドロイミュードなんだけどな。

自分を連れ戻そうとした財団Xのメンバーに反抗し、改めて仲間に加わったレグレットはちよくちよく笑顔を見せる様になった。時々アキノリと喧嘩したり、自分の気持ちを躊躇ためらいながらも打ち明けたりと、旅を続けていく内に性格が丸くなっていった。

透冀「自分の気持ちを伝える事は決して我儘なんかじゃありません。だから、芙羽少女に貴女あなた自身の気持ちを伝えてあげてください。あの子は貴女達両親にとつて、唯一たった一人の宝物娘なんですから」

はつこ「、自分の気持ちを伝える事は我儘じゃない、…何か、今まで悩んでいた自分の気持ちが晴れやかになった気分ね」

透冀「気持ち整理出来てきた様で何よりです。若し僕で良ければ連れてつてあげますよ。芙羽少女が好きな場所へ」

アキノリが俺と冬美を突き放したあの日から、レグレットも成長していったんだなと俺は感心した。

□

No side

セクレトルー「うーん…」

場面は変わりブンドル団アジト。セクレトルーはタブレットを専用のタッチペンを操作して、これまでナルシストルーが生み出した合体タイプのモットウバウゾーの戦績を見ながら悩んでいた。同じくソルトルーが生み出したバグスターのデータはバグヴァイザーⅢに装填されていた白いライダーガシャットに内包されている。

左手に持っている深緑とフォーンのライダーガシャット。ガシャットラベルには、犬を模した戦闘機に乗っている軍人服を着たブルドッグが描かれていた。

ソルトルー「遂にこのゲームが完成しました。後はこのバグスターの性能を観察するのみ…！」

ナルシストルー「そんなに真面目にやる事ないさ」

セクレトルー「どういう意味ですか？」

ナルシストルー「ゴードアツツ様はちつとも顔を見せないじゃないか。どうせ我々の事も忘れてるんだろう」

ソルトルー「いいえ。ゴードアツツ様はワタクシ達の事をお忘れになるなどある筈がない！例え此処を離れる事があるうとも！」

意気消沈となっているナルシストルーを寛大に接するソルトルー

の言葉に、ゴータッツが顔を見せる。

ゴータッツ『お前の言う通りだ。ソルトルー』

「ゴータッツ様！」

ゴータッツ『お前達三人の事はずっと気に掛けている。これからもレシピツピ集めに勤^{つと}しみ、レシピボンを満たすのだ。頼んだぞ』

ナルシストルーとセクレトルーはゴータッツの称賛の言葉に自信とやる気に満たされた。

ソルトルー「有難きお言葉！それではお二方^{ふたかた}！」

ナルシストルー「ああ！今日は何だか自信が湧いてきた気分だ!!」

セクレトルー「ええ！張り切って参りましょう！せーの！」

「ゴブンドル・ブンドルー!!」

□

K o k o n e s i d e

女の子「わあ〜！どれにしようかな〜？」

私はハートベーカーリーへと訪れると、一人の少女と母親を見掛ける。

母親「んふふ。どれも美味しそうね」

ドーナツを食べたくて期待を膨^{ふく}らませていた少女はお盆に乗っているボールドーナツを花柄の爪楊枝で刺し、口に入れる。

女の子「あーん。美味しい！」

家族と一緒に食べる喜び。羨ましい、私もパパとママとボールドーナツ食べたかった。そんな後悔と羨望さが又しても私の心を駆り立てる。

その時、私の視界を誰かが背後から埋め尽くした。

???「だーれだ?」

穏やかで柔らかな声が自分の名前を問い掛ける。

ここね「…冬美?」

冬美「当たり前。やっぱり此処に居たんだね」

背後を振り返る。艶やかな顔立ちと風で靡く銀色の長髪。ルビーの様に輝く赤い瞳。嘗て、咲夜と一緒に旅をしていた少女。光冬美が私の目の前に立っていた。

ここね「どうして此処が…?」

冬美「アキノリの代わりにあたしが心配でついできたの。全く、あのバカには呆れたよ。ホントは自分が説得しに行けばいいのに、あたし達が居ると直ぐに面倒臭くなる…。でも、その態度が憎めないのもいいところね」

冬美は咲夜との関係を語った。三百年前に咲夜とは激情態と呼ばれる姿になった事で別れたって聞いている。

冬美「あたしは、アキノリに突き放されてから一晩中泣いてたんだ。その時何て言われたと思う?『もうお前らとの旅はしたくない』って」
ここね「……」

冬美「本当は激情態の力を制御出来なかった自分が許せなくて、あたし達を今後の戦いに巻き込ませたくがなかったためにわざと嘘の言葉を吐いた。自分の本当の気持ちに蓋をして一人で旅をしてきた。今のここねと同じくらいに」

私が咲夜と同じ…?」

冬美「再会した時は嬉しそうだったよ?でも、その時は突然な事で自分の気持ちを整理出来なくて、何て言えばいいのか迷ってたんだから」

ここね「…!」

私と、同じだ。三百年前の咲夜も私と…!

パムパム「ここねは、あんな風に食べたかったパム？」

ここね「私は・・・」

???「ここね」

パムパムの指摘で何かを思った私に声を掛けたのはママだった。どうしてこんなところに・・・!?

はつこ「丁度見掛けたものだから・・・」

女の子「ドーナツ美味しい！」

母親「そう？」

はつこ「あ、あのね。良かったら、私達も食べない？まあいいボールドーナツ！」

ここね「えっ・・・!?」

突然の宣言で私は驚く。

はつこ「冬美ちゃんだったかしら？貴女も一緒にどう？」

冬美「はい。お言葉に甘えさせて頂きます」

数分後、丸いベンチでママと向き合っている私を冬美はその様子を見ていた。でも今はママと話さなくちゃ。

ここね「・・・可愛い」

はつこ「まだここねが小さい頃、ボールドーナツが食べたいって言われた事があって・・・でも、その時買ってあげなかったの」

冬美「その日からずっと、ボールドーナツと一緒に食べたいと思っただけど何故か遠慮していたんですね」

冬美の質問にママは頷く。

はつこ「ええ。でも、今日は嬉しい気持ちよ」

ボールドーナツのレシピ『ピピピ、ピッピく！』

ママはボールドーナツを口に運び、美味しいの言葉と溢れ出したほかほかハートによって青いリボンが付いているボールドーナツのレシピが現れた。

ここね（幼少期）『ここね、ボールドーナツ食べたい！』

あの日の光景がフラッシュバックしながらも、私はボールドーナツを口に入れる。

冬美「良かったね。お母さんとボールドーナツを食べれて」

ここね「…うん。多分、私もずっとこうして——」

女性店員「ねえ、ちよつと。あの人、神の舌、じゃない？」

男性店員「神の舌がうちのドーナツを食べて下さってる…！」

女性店員「しかも、さつき美味しいって…！」

突然にざわつき始める声が聞こえる。辺りを見渡すと、いつの間にか人集りが出来ていた。

はつこ「あらら。集まって来ちゃったわね」

冬美「気にしないで下さい。さ、まだ食べてないドーナツもありますから——」

はつこ「…あれ？どうして私、ポールドーナツを食べてるのかしら？」

ここね「ママ…!?!」

はつこ「何か、ずっと大切にしていた物があつた様な…」

ポールドーナツを見ながら俯いている眼差しは虚無に等しかった。異変に気付いた私のハートキュアウオッチが警報音をけたたましく鳴り響かせる。

ここね「ママの思い出が…！」

冬美「行こう、ここね！」

ここね「うん！」

冬美「ジュニラム、来て！」

冬美の声を通じて何処からかやって来たジュニラムは私を背中に、冬美を両腕で持ちながら移動する。

二人分は流石に重すぎたのか、普段の移動速度が大幅にダウンしているのにも関わらずジュニラムは根性でそれを挽回した。

ここね「ナルシストルー！」

ジュニラム『オイ其処ノ塩デブト、サデイスト仮面！止マレ!!』

ナルシストルー「ん？誰かと思えば、キュアスパイシーとキバラーの変身者じゃないか。それとクウガのところのカブトムシ…」

ソルトルー『塩デブ』とは随分と人聞きの悪い渾名を思い付くものですねえ、ジュニラムさん」

ジュニラムの毒舌に対してマイペースなナルシストルーは兎も角、

ソルトルーは今でも怒りそうな程に眉間に皺を寄せている。

ジュニラム『ウツサイ、毒舌八元カラナノ。ココネチャンノオ母サントノ大事ナ思イ出ハ返シテモラウヨ!』

ナルシストルー「生憎だが、そう簡単に譲らせる俺様達じゃないんでね」

話が終わったタイミングで咲夜達が専用のバイクで駆け付けてきた。咲夜に至ってはゆいとマリちゃんを後ろに乗せていた。キツくないのかと疑問に思いたいけど、今はそんな事考えている場合じゃない!

咲夜「ここね、冬美、無事か!？」

冬美「こっちは大丈夫。それより、来るよ!」

ナルシストルー「漸く役者のお出ましか…。混ざれ、モットウバウゾー!」

ソルトルー「やつとの事で完成したシューティングゲームの力、お見せしましょう!」

『イヌネコ大空争!』

『ジエツトコンバット!』

『ガシヤット!』

ソルトルー「出でよ、ワタクシのバグスター!!」

ナルシストルーはモットウバウゾーを召喚する。ドーナツメーカーを彷彿とさせ、両腕は恐らく麵棒。

ソルトルーはバグヴァイザーⅢに二つのガシヤットを装填し、筋肉質な二足歩行のブルドッグのバグスターを召喚。

迷彩のベレー帽を被り、顔には大きな傷痕。着ている服はベレー帽と同じ色の迷彩服で、その上にオレンジの戦闘服を装備している。

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

ブルドー「我輩の名はブルドー!本来のレベルは20だが、装備が追加されて30に跳ね上がりだ!」

冬美「マリさん、お願い!」

ローズマリー「ええ。デリシヤスフィールド!」

マリちゃんがデリシヤスフィールドを発動し、私達は変身に以降す

る。

ゆい「行こうー」

「」「」「うん（あぁ）（おう）！」「」「」

□

「「プリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！」」

□

ゆい「にぎにぎー」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

□

ここね「オープン！」

パムパム「パムパム！」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

□
らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
あまね「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

□
「「「シエアリンエナジー！」「」」
コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフォツ!？」
ジユブリー『さくやん、今完全に吹いたよね…。？まあ、細かい事はええか』

□
ファイナーレ「トツピング！ブリリアント！シャインモア！」
□
コメコメ「コメコメ！」
パムパム「パムパム！」
メンメン「メンメン！」
プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい

笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！
分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの
独り占め、許さないよ！」

ファイナレ「ジェントルに、ゴージャスに、咲き誇るスイートネス！
キュアファイナレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

「「「デリシャスパーティー♡プリキュア！」」」

□

「「「変身！」」」

「カメンライド デイクライド！」

「「「ディエンド！」

キバーラ「チュツ！」

『SWORD FORM』

デイクイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイクイド！
旅の語り始めようか！」

「「「ディエンド」後を継らず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択
を！仮面ライダーディエンド！僕達の旅の行先は…僕達が決める
！」

クウガ「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダークウガ！皆
の笑顔は…俺が守る!!」

キバーラ「「世界に輝く女騎士！仮面ライダーキバーラ！貴方の野
望、止めてあげる（わ）！」」

電王S「俺、参上！」

デイクイド「全てを破壊し、全てを繋ぐ！」

「「「我ら、仮面ライダー！」」」ドカーン！」

□
D E C A D E S I D E

ナルシストルー「見ててください、ゴードッツ様！」

ソルトルー「必ずや！プリキュアとライダーを倒し、レシピッピを持って帰って見せましょう！」

ヤムヤム「ほへ？」

ナルシストルー「奴は何を言ってるんだ…？」

気合の入った宣言をするナルシストルーとソルトルーに対して、俺達は違和感を持ち始める。

デイエンド「状況は兎も角、ゴードッツが本気を出させたんだろうね」

ナルシストルー「まあ、それはこっちの話さ。さあ行け！モットウバウゾー!!」

モットウバウゾー「ウーバーツ!!」

戦いの火蓋ひふたが切って落とされる様にモットウバウゾーは右腕を振り下ろす。バリアを張って防御体制に入るスパイシーだが、麵棒が素材となっていたためか難なくそれを押し切られて吹っ飛ばされそうになる直前に粒子の翼を畳んだ冬美が身代わりとなった。

キバーラ（冬美）「ぐっ…！やあああッ!!」

体勢を整えながら広げた翼で吹っ飛ばされた反動を掻き消して地面に着地する冬美はキバーラサーベルを構えながらモットウバウゾーに立ち向かう。

「「はあああッ!!!」」

モットウバウゾー「ウバ！」

プレシヤス「うっ…!!?」

電王S「でえりやあッ!!」

ヤムヤム「モモっペナイス！やあああっ！えっ、うわあああっ!？」

モットウバウゾー「ウバーツ!!」

フィナーレ「ぐっ…！」

それに続いて右拳を振るったプレシヤスをモットウバウゾーは逆に左腕で弾き飛ばし、モモタロスがデンガツシャーを振り下ろしている隙に背後から攻めに入ったヤムヤムを右腕で対処。更には防衛体勢に入ったファイナーレをも殴り飛ばす。

冬美は迫り来る両腕をモモタロスと共に攻撃を避けつつ斬撃を与えるが、片足を狙おうとしたところで地面に叩き付けられてしまう。

デイケイド「冬美、モモタロス!!」

ブルドー「おっと。破壊者様が他人を心配している場合か!？」

ブルドーは装備しているオレンジの飛行奇襲ユニット『コラボストラジェット』で飛行しながら、右腕からの電磁竜巻で俺を牽制させた上で右肩のガトリング砲から放たれた銃弾の雨が地面に付着した事で砂煙が巻き上がっていく。

クウガ「超変身!」

右肩のガトリング砲から放たれた銃弾の雨を、タイタンフォームになった雄大が防ぐ。

「アタックライド ブラスト!」

今度は左腕のミサイルを放たれるが、間を割って出たレグレットが追尾効果を付加させた水色の弾幕で対処し、右腕の装備が破壊されて右手が露わになる。

その隙に俺はイリユージョンのライダーカードを装填してBを呼び出す。今回は王蛇とゲンムが出る気配がないからな。

デイケイドA「Bはプレシヤス達の援護を頼む!」

デイケイドB「ああ。成る可く早く終わらせる」

Bがプレシヤス達の援護に向かったと同時にジユブリーが実体化する。

デイケイドA「後はガトリング砲を破壊するだけだな!」

ジユブリー「よし、そうと決まれば...!」

デイケイドA「おい待て、ジユブリー!」

ブルドー「ウオブリーの息子か。お前の宿主に油断はさせられた。だが!」

ジユブリー「なっ、何やて!?!ぐああっ!?!」

圧倒的な跳躍力で飛び蹴りを放つジュブリーを、ゴムの様に伸縮自在に避けたブルドーは背後からミサイルを喰らわせる。

デイケイドA「ジュブリー！大丈夫か!? ったく、無闇に敵に突っ込んでんじやねえよ……！」

ジュブリー「すまん、さくやん。あんたの性格に似てきてもうたからつい……」

何処ぞの海賊王になる男だよと仮面の下で驚きながら俺はジュブリーに駆け寄ると、ソルトルーがブルドーの能力を説明する。

ソルトルー「おっと。一つ言い忘れておりましたが、ブルドーさんはスパイクという『トムとジェリー』に出て来るキャラクターの腕が伸びる描写をそのまま能力にしました。これなら、幾ら下からの銃撃を食らいそうになっても四肢を伸ばせばあら不思議！ カウンターありの生きたシューティングゲームの出来上がりです！ 貴方達にこれを攻略するのは、さそ困難でしょう?」

デイケイド「寧ろ上等じやねえか。それに、伸縮自在はこいつの専売特許じやねえぞ?」

「フォームライド ダブル ルナジョーカー！」

幻想の切り札 ダブル『ルナジョーカー』へと姿を変えた俺は鞭むちの様に地面を叩き付けた勢いで伸縮した右腕を斜め右、次に左へと薙なぎ払う。

だが、ブルドーは左腕から発射したミサイルを飛ばしながら伸縮した右腕で回避し、地面に着陸する。

ブルドー「俺と同じ能力を使える奴だったとは驚きだぜ。どっちが本物の伸縮スターに相応しいか勝負と行こうか！」

デイケイドA「伸縮スターは大袈裟過ぎだ。若し、お前がベリーマンやジュブリーと同じ善良なバグスターだったらもつと頼もしかったのに」

ブルドー「バカを言うな、俺は最初からソルトルーに忠誠を誓う様にプログラミングされてある。主人を裏切る様な行いをしてしまえば、軍人は務まらんからな」

デイケイドA「そうか。そりゃあ残念だ！」

俺はブルドーとの交渉は不可能だと察していたが、奴もウオブリーやベリーマンと同じ強い覚悟を持っていた。互いを認識した上で俺は伸縮した腕を振り上げ、ジュブリーと雄大も後に続いた。

□

B SIDE

【カメンライド ZX!】

赤と銀を基調としたライダー。首には緑のマフラーを靡かせており、頭部は天^{カミキリムシ}牛を彷彿とさせる。

【アタックライド 十字手裏剣!】

ナチス残党によって結成された悪の組織『バダン』に改造された99%のサイボーグ忍者ライダー『ゼクロス』へと姿を変えた俺は、肘の部分にくっ付いている『十字手裏剣』を投擲^{とうてき}する。この飛び道具はダイヤモンドより硬い刃を持っているため、1km先の標的を的確に命中させる。

モットウバウゾー「ウツ、ウババババツ!」

ディケイドB「更におまけだ!」

【アタックライド 衝撃集中爆弾!】

モットウバウゾーの足元に膝に装着されている『衝撃集中爆弾』を接着。加勢しに来たブラックペツパーのエネルギー弾と接触した事で大きな爆発力を生み出す。

ブラックペツパー「気を抜くな」

プレシヤス「有難うブラペ!」

ブラックペツパー「礼は後だ。来るぞ!」

伝説のクレープの一件で成長した事を誇りに思ってしまう。見事な不意打ちだ。

モットウバウゾー「モット...!」

デイケイドA「まづいッ…！」

【アタックライド…】

モットウバウゾー「ウバウゾー!!」

デイケイドA「ぐっ、うおわあああッ!？」

さっきの爆発で大きく後退し、転倒しかけたモットウバウゾーは体勢を立て直す。両腕による衝撃波で吹き飛ばしたプレシヤス達を岩盤に衝突させる。

俺はアタックライドカードを装填してサイドハンドルを閉じようとしたが間に合わず、同じく岩盤に衝突してしまった。

ナルシストルー「ゴータツ様。これでボールドーナツのレシピッピは頂きです！」

「『そんな事させない!!』」

【カメンライド BLACK!】

ナルシストルーの勝手な勝利宣言を否定したスパイシーは忍者の如く地面に着地。眩い光によって砂煙が晴れ渡ると、Bは茶色い関節が露出している黒い飛蝗ばったを模した世紀王『仮面ライダーBLACK』へと姿を変えていた。

スパイシー「ママもボールドーナツを覚えていた。私も、同じ気持ちだった！」

キバーラ（冬美）「その家族の気持ちを利用する奴は、あたし達が絶対に許さない!!」

ローズマリー『冬美、スパイシー…!』

拳を強く握ったBの茶色い関節から蒸気が溢れ出る。

ブルドー「中々やる様だな。だが、貴様の實力はそんなものではないだろう?」

デイケイドA「流石は軍人、感が鋭いな。見破ってくれた褒美だ…ドラゴンスタイルの真骨頂、見せてやる!!」

【フォームライド オーズ ガタキリバ!】

『ガッタキリバ!』

デイケイドA「ブレンチシェイド・クアトロ!」

ガタキリバコンボにカメンライドしたAはブレンチシェイドで四体に分身し、ウィザードの全ドラゴンスタイルのカードをドライバ―に装填する。

【フォームライド ウィザード フレームドラゴン!】

【ウォータードラゴン!】

【ハリケーンドラゴン!】

【ランドドラゴン!】

『ボーボー!ボーボー!』『ザバザバザシャン!ザバンザバーン!』『ビュービュー!ビュービュービュー!』『ダン、デン、ドン、ズツ、ドツ、ゴーン!ダン、デン、ドツ、ゴーン!』

火・水・風・土といった属性を纏った異色の龍達がガタキリバ達を囲みながら彼らをドラゴンスタイルの姿に変化させる。

ガタキリバA「頼むぜ、レグレット!」

デイエンド「ああ。四人纏めて、少し寝違えるよ!」

レグレットが一枚のライダーカードを取り出す。書かれていたのは『UNITE VENT』。

【アタックライド ユナイトベント!】

ブッカーマズルから発生した赤い波動を受けたドラゴンスタイル達が磁石の様に引き寄せられる形で融合を果たす。

頭頂部は丸い赤、左右は形状が異なる尖った青と緑、そして顎部分は角ばった黄色。額に付いているドラゴンの装飾『エクストラゴロツド』に埋め込まれている宝石はダイヤモンドの如き輝きを放つ。

その影響か、赤いローブ『ウィザードローブ』の色が金に変色しており、ラインは銀。同じくオールドドラゴンの銀の部分がそれぞれ属性の色を宿す。

デイケイドA「サンキューなレグレット。この姿を名付けて言うなら… デイケイドウィザード 『エレメントドラゴン』!」

ブルドー「フフツ。フハハハハハハハハハッ!!これだ!我輩が求めていたのは正にこれよ!!デイケイド。貴様は我輩にとって強者!何処までも我々バグスターを楽しませてくれる…!」

口を限界まで吊り上がらせるブルドー。更なる力をAを自分自身における強者と認め、どんな強さを持っているのか楽しみで仕方がないのだ。

デイケイドA「ああ。これでお互い遠慮はなしだ!!」

ブルドー「フハハハッ!来いッ!!」

両者がぶつかり合った反動で強い風圧が吹き飛ばされそうな程に届いた。

デイケイドB「こつちも負けてられないな。行くぞ冬美、スパイシー!」

スパイシー「ええ!私達の… 大事な大事な思い出を、この手で絶対に取り戻す!」

ナルシストルー「いきなり何言ってるんだあ?行け、モットウバウゾー!!」

モットウバウゾー「ウバウゾー!!」

地面を蹴って俺達に襲い掛かるモットウバウゾー。俺はライダーカードを装填する。

デイケイドB「少しの間だけ目を閉じてろ」

【アタックライド キングストーンンフラッシュユ!】

モットウバウゾー「ウバツ!?ウババババババツ!?!」

ゼロデイケイドライバーから放たれた眩い真紅の光でモットウバウゾーの視界を眩ませている

デイケイドB「今だ!」

スパイシー「プリキュア・スパイシーサークル!」

キバーラ（冬美）「バツシャーマグナム!!」

その隙に、スパイシーがハートキュアウオッチの液晶画面をタツチして発動したスパイシーサークルを投擲、冬美は召喚したバツシャーマグナムから放たれた弾丸をモットウバウゾーの左腕の砲身に連射する。

ファイナーレ「…よし!」

好機と見做したファイナーレはクルーミーフルーレで煙を振り払い、もう片方の砲身にファイナーレブーケを命中させる。

煙が上がってはいるが、これでさっきの衝撃波は使えない。

モットウバウゾー「ウツ、ウバ!」

「ファイナルアタックライド ブ、ブ、ブ、ブラック!」

デイケイドB「ライダーパンチ…!」

キバーラ（冬美）「ドツガハンマー!」

エネルギーを収束させた右拳をモットウバウゾーの中心目掛けて跳躍しながら繰り出す。同時にプレシヤスとヤムヤムが頭頂部と右足を狙った事で大きく転倒させる…。直前に飛翔した冬美が勢い良くドツガハンマーをフルスイングで振り下ろす。

モットウバウゾー「ウババババババ…!」

家族との大切な思い出を守りたいという思いで頭がいっぱいになつており、最早重さなんてどうでもよかつた。

モットウバウゾー「ウツ!ウバーツ!!」

『Full charge』

電王S「おっと。俺達の事も忘れんなよ!」

キバーラ「同時に合わせるよ、アキノリ!」

デイケイドB「ああ!」

モモタロスがエネルギーを収束させた飛び蹴りを放とうとしている。勿論、ブラックのファイナルアタックライドはこれで終わりじゃない。

俺は30m程に跳躍して右足にエネルギーを収束させる。

電王S「行くぜ!俺達の超必殺技!」

「「ライダーキーツク!!」」

モットウバウゾー「ウバツハア!」
ブラックペツパーのエネルギー弾と共に、ライダーでお馴染みである必殺のキックをかました。

□
A s i d e

デイケイドA（クソツ！両腕がドラゴヘルクローになってるから、アタックライドカードを使えない。いや、待てよ。若しかしたら…：試す価値はありそうだ！）

ブルドー「はあッ！」

デイケイドA「スモール！」

ブルドーが右腕から放ったミサイルが迫る中『スモール』と唱えてみると、体が縮小。すれ違う様に地面に着弾したミサイルの爆発音が背後から木霊する。

デイケイドA「やっぱりそういう事か…！」

どうやらこのフォームはウィザードリングの名前を言うだけでその能力を発動出来るらしい。そうと決まればこっちのものだと飛翔しながら察していると、ブルドーの肩のガトリング砲から銃弾の雨が降ってくる。俺は続けてウィザードリングの名前を唱える。

デイケイドA「リキッド、、バインド！」

ブルドー「何ッ!？」

リキッドで全身を液状化させて銃弾の雨を擦り抜け、バインドでブルドーの四肢を拘束させる。

デイケイドA「ビッグ、、ブリザード!!」

間近となった距離でドラゴテイルを四スタイルの色が重なった虹色の魔法陣を通して巨大化。

冷気を纏わせ、全身を一回転させて地面に叩き付けると、追加効果

で右腕のミサイルを凍結させたのだ。バインドの効果もブルドーを叩き付けたと同時に解除している。

ブルドー「隙あり！」

デイケイドA「なっ…!?」

隙を突いたブルドーが俺の両肩をゴムの要領で伸ばした凍結されていなかった片腕をガツチリと固定する。

ブルドー「やるな！ならば、これは耐えられるか!？」

後方へと後退していくブルドーが全体重を掛けていたのか、後退していく度に俺の体が前方へと引き寄せられていく。

あの時バインドを解除しておかないでトドメを刺しておくべきだったと後悔している間もなく、ブルドーの両手が震え、今でも離れそうになっている。

幾ら伸縮自在であろうとも、伸ばすのにも限度がある。

デイケイドA「エクステンド！」

ブルドーが足を宙に浮かしたタイミングで俺は下から出現した魔法陣を潜り抜け、伸縮自在となったドラゴテイルを岩山の天辺に突き刺して片足で地面を蹴る。

伸縮自在の敵が腕を離さない限り、空中への逃走経路がないのは承知の上だ。

デイケイドA「サイコキネシス」、スペシャル!!」

俺は両手のドラゴヘルクローを突き出し、念動力で押し返しながらドラゴスカルから強力な火炎『ドラゴンブレス』を浴びせる。

ブルドー「ぬっ!ぐぐぐ…ぬおおおおッ!!!」

だがブルドーは軍人たる根性で念力と火炎を打ち破り、ジェット機の如く猛烈なスピードによる肘打ちを俺の腹部に炸裂させた。

デイケイドA「ぐはあっ…!?」

ブルドー「これは我輩からの選別だ!!」

デイケイドA「…ぐっ!エクスプロージョン!!」

手榴弾を押し付けられた俺はブルドーの腹部に出現させると、魔法陣が強力な爆発を起こす。

爆発によってお互い後方に吹っ飛ばされた。

ブルドーは左腕の爪を地面に食い込ませる事でブレーキを掛け、俺はドラゴテイルの先端を岩盤に突き刺して何とか岩盤との衝突を防いだ。

その後は怯む事なく地面を蹴り上げて空中戦に移行。攻撃が何度も打つかり合い、爆発音が鳴り響く。

デイケイドA「…次で決めようぜ」

ブルドー「来いッ！我輩が放つ全力の一撃で、貴様の希望とやらを打ち砕いてやろう!!」

距離を取り、俺は体力の限界を悟る。ブルドーの感情を昂らせ、刺激させたのは紛れもない闘争本能。

それは自分より強い者と闘う事で更なる力を発揮させたのだろう。敵を天晴れながらも称賛し、自らの限界を見極める熱い闘争心が俺の心に火を付けた。これは…ベリーマンやジュブリーの次に敬意を評したくなかったぜ。

そう思いながらトドメの一撃を放つべく、俺はファイナルアタックライドのカードをドライバーに装填する。

「ファイナルアタックライド ウィ、ウィ、ウィ、ウィザード！」

デイケイドA「ストライクエレメントドラゴン！」

俺の足元に四大元素の魔法陣が浮かび上がり、ドラゴウイングで約200mに急上昇する。ブルドーも伸縮した両腕で数10m先にあった岩壁をゴムが千切れる様な勢いで約400mに後退する。

デイケイドA「ハイスピード！」

発砲された弾丸の如き速さで飛び蹴りと突進が打つかり合う。激しい押し合いによってスパークが生じ、今でも押されそうになっている。

「うおおおおッ!!!」

気合を入れて声を上げる。

デイケイドA「これで切り上げだ!!ドリル!!」

激しい押し合いの中、仕上げにドリルの効果で体を高速回転させて押し切る。

押し負けたブルドーの胴体には、大きな風穴が出来ていた。

ブルドー「ふふつ、ふははははははは…！見事だデイケイド、我輩の役目は此処で終わる。だが、我らの計画はまだ終わつたわけではない。ブンドル団と、財団Xに、栄光あれえええッ…！！！！」
戦いには敗れたが、自分より強い者と戦えた事に満足したブルドーは最期の断末魔と共に爆散し、データはバグヴァイザーⅢに回収された。

デイケイドA「はあ、はあ、はあ、何とか勝てた…！」

ユナイトベントの効果が自動的に解除されて、俺はデイケイドの姿に戻る。ガタキリバによつて召喚された分身達も消滅済みだ。

分身して受けたそのダメージが四倍となつて返つており、体がふらつく。

「アキノリ（さくやん）！！」

俺の背中を支えてくれたのは、雄大とジュブリーだった。

デイケイドA「有難うな二人共。流石にガタキリバからのユナイトベントはキツ過ぎたか…！」

やはりこの姿は一つのデメリットとして、ウィザードリングの効果を使い過ぎると変身が強制的に解除され易くなるらしい。

デリシヤスフィールドの地面に着いて息を整えようとしていると、ライドブツカーから一枚のカードが飛び出す。

クウガ「これは…！」

色が彩られる。手に握られていたカードには『WIZARD ELEMENT DRAGON』の英文字、下には『FORM RIDE』と記載されていたライダーカードだった。

デイケイドA「…つたく、まさかオリジナルフォームのライダーカードまで生成出来てしまうとは。デイケイドライバーの進化は止まらないモンだなあ…」

そう思いながら俺は仰向けになつて、デリシヤスフィールドの空を眺めた。

□

K i v a l l a s i d e

ここね「それじゃあ、行って来る！」

気持ちを整えたここねの背中を見送ったのだけれど、あたしはどうも心配でこっそり様子を伺う事にした。物事の一部始終を確認しないと気が済まないもの。

ここね「ママ！」

蝉せみの鳴き声が小さく小刻むテーブルに佇んでいたはつこちゃんにここねちゃんが声を掛ける。ボールドーナツのレシピツピを取り戻したから、大丈夫そうね。

ここね「ママ、あのね…！」

???'「おうい！」

ここね「！ パパ！」

後ろから声を掛けたのはしようせいさん。両手にはプリティホルツクの袋を持っていた。

しようせい「ほらこれ、夏の新色リップ。ここねはこの事を言っていたのか」

ここね「有難うパパ。でも、どうしてこれを…？」

しようせい「ここねのお気に入り場所を、轟さんに聞いたんだ。そう、この店の事もね」

その事を聞いて、ここねちゃんは笑みを浮かべる。

ここね「パパ、ママ。私、パパとママと一緒にボールドーナツを食べたい。我儘かもしれないけど…。」

はつこ「そんなの、我儘なんかじゃ…。」

しようせい「だったら、パパだって我儘言うぞ…。」

パパとママにここねの事を教えてほしい」

ここね「えっ…!?」

真剣な表情で、しようせいさんは我儘でもない本心で謝罪した。

しようせい「御免。ここねの事、知らな過ぎて…でも、ここねと話がしたいんだ。お気に入りのお店とか、好きな物とか」

ここね「そんなの、ちつとも我儘じゃ…！」

ここねちゃんが察したのを見て、しようせいさんは頷く。

しようせい「うん。これは我儘でも何でもない。パパの本当の気持ちだ」

はつこ「『自分の気持ちを伝えるのは我儘じゃない』、ってね」

両親の本当の気持ちを知れたここねちゃんは、二人に自分の好きな事を話し始めた。

ここね「…うん。ええっと、私が最近好きな事はね…」

□

キバーラ「愛が詰まったブラッドオレンジジュース！あたしと、乾杯！」

オリジナルED曲2『ココロデリシヤス』

□

次回、デリシヤスパーティ♡プリキュア　く破壊者の食べ歩きく
パムパム「コメコメなんか嫌いパム！」

???「君が俺をどうやって感動させるか見せてくれよ」

デイケイドA「さあ、此処からが…」

「ハイライトだ!!」

第二十四品：コメコメなんか知らない！波乱のピザパーティー！／
喧嘩もすれば危険に当たる!?新たな仮面は白狐！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第三章まで…後、一話。

第二十四品：コメコメなんか知らない！波乱のピザパーティー！／喧嘩もすれば危険に当たる!? 新たな仮面は白狐！

□

Sakuya side

らん「こんにちはー!」

コメコメ（人間体）「いらっしやいませコメ〜!!」

ローズマリー「ぶへあっ!?」

玄関の前で華満が挨拶あいさつをしながら引き戸を開けると、コメコメがお出迎えしながらローズマリーの顔に飛び付いてきた。

エナジー妖精達はローズマリーと同じくクツキングダムにいたからな... 一種の愛情表現と覚えておこう。

コメコメの声を頼りに、俺とゆいはローズマリー達を迎え入れる。

ゆい「いらっしや〜い!」

らん「やつほ〜!」

ローズマリー「コ、コメコメ。日に日にパワフルになってる気がするわ...」

食いバカ二人が掛け合う中、ローズマリーは肩車されていたコメコメの成長振りに苦笑する。

ゆい「毎日あたしと同じくらい食べてるの!」

らん「ほへえ〜!」

ここね「それは... かなりね」

ここねと華満も苦笑する。今回、ライダー組とプリキュア組が全員なごみ亭に来たのと言うまでもない。食いバカ二人の夏休みの宿題を手伝うために、態々わざわざ此処へやって来たのだ。

因みに俺とレグレットは雄大と冬美の助力もあつてか、逸早くいち終わらせる事が出来た。

ここね「... 全然やってない」

らん「ふんぬう〜!」

ゆい「えへへへ。全然やってなかった…。」

咲夜「やってなかったって、お前らホントにやる気あんのか?」

冬美「あんたも人の事言えないでしょ、アキノリ」

宿題をやっていなかった事を指摘された華満は机でうつ伏せになり、ゆいは照れながら自分の行いを自覚している。

勿論、夏休みの宿題を終わらせたレグレットと冬美も二人をサポートする事となり、俺と雄大はデリシヤスフィールドでトレーニングをする予定だ。ジュブリーのトレーニングと面談もあるから、とても都合が良かった。

あまね「さあ、やろう」

ここね「まずは数学から…。」

ここねがゆいのノートを見せると、ページの左側には問題集が。その下には握り飯が描かれていた。さては自棄やけになって書きやがったな。

それを見た食いバカ二人は絶望の表情へと変わった。

らん「ふんめえく。文章問題く!!」

ゆい「あたしも苦手く!!」

雄大「大丈夫。ちゃんと問題集を見れば解けるかもしれないよ」

冬美「それとアキノリ。国語の問題集になったらマリさんが合図をするから、ちゃんと来なさいよ?」

咲夜「分かってるって」

俺は冬美の承諾しょうだくを柔順じゆうじゆんに受け入れる。転生前に漢字検定をやっていた経験があるから、準2級までの部首や読み方ならまあまあ行ける。

コメコメ（人間体）「コメ…?」

エナジー妖精組はその様子を見てきよとんとしていた。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、この世界にて何を噛み締める？

イメージOP2 『MYTH&ROID／VORACITY』

□

Touki side

ゆい「太郎君と花子さんは公園から図書館へ、時速5kmで歩いて向かった」、しかし太郎君は途中で忘れ物に気づき、一度家に戻った」..」

らん「暫くしてから、太郎君は時速10kmで花子さんを追いかけた」、太郎君は何分で花子さんに追い付くでしょう」..」

「「コメ（パム）（メン）？」」

文章問題を恐る恐る朗読している和実少女と華道少女を見ていた小狐少女達は、目を見開きながら首を傾げる。

らん「ふんぬう。さっぱりだよお..！」

ここね「文章問題は自分に置き換えてみれば分かるかも」

ゆい「自分に置き換える..？」

らん「成る程！」

芙羽少女のアドバイスを受けて何かを閃いたのか、二人は物は試し

と言わんばかりに問題集を自分達に置き換えて例えてみる事にした。
ゆい「あたしとらんちゃんは学校で待ち合わせをして、ハートベーカーリーに向かいました」

ゆい『行こー!』

らん『おおー!』

らん「でも、その途中でゆいぴよんが忘れ物をした事に気付きました」

ゆい『ああーっ! 御免らんちゃん。あたし財布忘れちゃった!』

らん『はぬう!? でも大丈夫。らんらん持つてるから』

ゆい『ホント!? ありがとうー!!』

「ストツプ」

此処で違和感を感じたのか、菓彩少女と冬美が一旦止めに入る。

冬美「何でゆいが財布忘れたから、らんが財布持つてるから大丈夫な訳?」

あまね「家に戻らないと、数学の勉強にもならないからな」

らん「だつて早く行きたいんだもん〜!」

ここね「問題の内容は勝手に変えちゃ駄目!」

話を戻した二人は、問題集の通りに話を進行させる。

ゆい『先に行つて。追い掛けるからー!』

らん『は〜い!』

らん「家に着いて六分してから、ゆいぴよんはらんらんを追い掛けました」

雄大「… ちょっと待つて。後の説明が何か抜けてるよ」

ゆい「えっ? あたし、六分も何してたの?」

ここね「財布を探してたんじゃない?」

ゆい「財布はいつも同じところに置いてるし…」

冬美「もう何でもいいから」

ゆい「何でも!? じゃあ… おやつ食べよー!」

再び話に変な方向へと脱線する。

ゆい『あー… ガラツ

らん『… ゆいぴよん。せつかくハートベーカーリーで待つてたのに

おやつ食べてるなんてえ〜……!!」

冬美「ちよつと待って。何でらんが家に來てるの？」

らん「いやあ〜」

冬美「もう置き換えとか、そういうのは置いて。こういう時は方程式を使って考えるのが一番だから」

ローズマリー「方程式!? 難問ね…!」

二人が方程式で解けるかを憂懼ゆうくするオカマさんは顎あごに手を当てる。

コメコメ「頑張るコメ〜! 頑張れ頑張れコメ〜!」

ゆい「応援してくれて有難う。コメコメ」

小狐少女達は暢気に和実少女達を応援する。気持ちは分かるけど、彼女達は色々忙しいからね。

ローズマリー「コメコメは、宿題を終わらせた後のピザパーティーが楽しみなだけでしょ?」

ゆい「えっ、そうなの!」

コメコメ「頑張れ頑張れゆーい! が…」

あまね「コメコメ、ゆいとらんは勉強中なんだ。少し静かにしてもらえないか?」

僕と菓彩少女は、勉強後のピザパーティーが目当てだった小狐少女を優しく嗜たしなめる。

自分が邪魔だったのかと不安に思ってしまった彼女に、僕は同調して言った。

透冀「別に君が邪魔だと言っている訳じゃないんだ。宿題が終わったら、思う存分にピザパーティーを楽しもう。それまで、おパム少女とドラジカ少年君と一緒に庭で遊ぶといい。キバーラ、ジュニラム… ってあれ? ジュニラムは…?」

キバーラ「ジュニラムなら、アキノリと雄大のトレーニングに同行してっただわ。『ライジング化した自分を鍛えたい』って言うから、あたしは止めなかったけど」

冬美「そっか。あの二人も結構な負けず嫌いだったのかもね」

□

Sakuya side

ジユブリー「ふっ！はっ！やあッ!!」

咲夜「： 思った以上に動作が早くなつたな。流石はウオブリーの息子だ。けど、焦りは禁物だぜ？」

ジユブリー「分かつとる、僕もいつかは父ちゃんを越える漢おとしになるんや。こんなところで挫くじけたら、せつかくの努力が水の泡になるからな！」

俺と雄大はデリシヤスフィールドで肉弾戦の特訓をしている。

レグレットがこんな事もあるうかと、ブンドル団を裏切る前に黎斗社長が製造した五つのガシヤコンバグヴァイザーⅢ。

その内の一つで先程入手したバーコードウオリアーデイクイドのデータを体内に注入した形でデイクイドの力が三分の二となった。

後はデイクイドライドウオツチの力も入れて本来のスペックに戻るのだが、激情態による暴走を恐れたレグレットがウオツチを持つているため、戻す事が出来なかつた。

ジユブリー「けどなあ、まさか僕が飛べない鳥のデータが多くあつたなんて驚いたわあ…。」

ジユブリーは四肢を動かしながら自分が知った事実もっぎんに声を低くする。

猛禽類もっぎんのデータと飛行能力を有するウオブリー。それに対してジユブリーは、飛べない鳥のデータと格闘術を有している。

これはレグレットがガシヤコンバグヴァイザーⅢに対応する機械

で調べたら判明した。

最初は少し落ち込んでいたが、俺が「例え空が飛べなくても、お前にはお前だけの戦い方がある筈だ」と激励したら少しずつ自分の短所を見直す様になった。

頭の回転と相手の技を利用するところは父親譲りであり、これは好都合だと思った俺は試しに色々なゲームのキャラクターのモーションを見せた。

すると瞬く間に、そのキャラクターの動作を一瞬にして覚えてしまったのだ。まさに天才と言っても過言ではないくらいに。

ジュブリー「でりやあツ!!」

咲夜「ふっ、はあツ!!」

ジュブリー「ぐうっ?!?そうらよっど!」

地面を強く蹴ってからの上段回し蹴りを右腕で受け止めた俺は、残った左腕で鳩尾みぞおちに叩き込んだ。

その刹那、鳩尾に打ち込んだ右の手首を軽く捻らせた事で俺の視界は360度回転する。

ジュブリー「今度は僕の番や!はあツ!!」

咲夜「あぶねっ!」

顔面に打ち込もうとした右拳うけけんに対して、俺は両腕を交差させる。

小石を池に投げて波紋を生ずる様に俺は後方へと大きく吹っ飛ばされ、跳ね飛ばされる度に砂煙が発生。

俺は直ぐに体勢を整え、砂埃を軽く両手で落とした。

間合いを詰めるジュブリーの振り上げた拳を、俺は両膝ひざを限界まで落として正拳突きせいけんつきの構えに入る。

雄大「二人共、それまでツ!!」

「!」

互いの拳が顔面に打ち込まれる事は叶わず、届くまでの数ミリで戦闘中断の音が掛かる。

どうやら其方もトレーニングが終わったみたいだな。

全身の力を抜いて深呼吸をした俺とジュブリーは休憩を取った。

雄大「二人共、凄い格闘戦だったな」

咲夜「ああ。まさか、ジュブリーが格闘術における才能があったなんてな。其方はどうだ？」

雄大「ライジンググタイタンでもまだ余裕で受け止められるけど、ジュニラムも大分パワーが上がってきたな」

ジュニラム『確力ニ僕モ自力デライジングニナレルヨウニナツタケド、マダカヲ制御出来テナイカラ油断ハ禁物ダネ』

雄大「それは俺も同じだ。ライジングの力を一通りに使い熟せる様になつたら次はアメイジングだな」

咲夜「おいおい。急にアメイジングまでなつたらキック後の爆発の範囲がより大きくなるだろ？」

雄大「それもそうだな。アメイジングの変身はさておいて、今度はジュブリーとジュニラムがチームになつて俺達とやるつてのはどうだ？」

雄大の提案にジュニア組は賛成するが、俺はジュブリーにも言っておきたい事があった。

ジュブリー「ジュニア組とライダー組の対戦かいな？上等や、やつたる！」

咲夜「その前に俺もジュブリーに一つだけ言っておきたい事がある」

ジュブリー「言っておきたい事？何やそれは？」

咲夜「其処でお前に一つ問題を出そう。若しもお前の前に幹部級の敵が二体現れたとする。その時はお前は どうする？」

ジュブリー「勿論、両方共相手になるで！」

慢心に即答するジュブリーだが、そういう事ではない。

俺は手で顔を覆いながら溜め息を吐いた。

咲夜「そうじゃない。いいか、ジュブリー…その戦闘で俺達の中の一人と共闘する様な事があるかもしれない。その中で一番大事なのは…『チームワーク』だ」

ジュブリー「チームワーク…？」

咲夜「そうだ。どんな状況であっても、必ず心を一つに出来るとは限らない。俺達人間の心というのは、そう都合良く動いてくれな

い……それは、人間ではない奴も一緒だ」

嶋田しまださんの世界で浅村先生が嘗てかつ辻ノ宮中学にて虐め問題を解決しようとして最善を尽くすも、上手く対応出来ずに状況を悪化させてしまった時と同じ様な事は起きてほしくない。

だからこそ、生みの親である俺がウオブリーに代わってこれまで経験した事を教えなければならぬ。それが俺に与えられたもう一つの役目なのだから。

雄大「僕には自分の意見を言えればいい。俺もジュニラムと喧嘩した事があったてき……アキノリが闇堕ちしてクライシス社に加入した時にもそうだった。時に傷付いて、裏切って、何度も打つかり合って……でも、だからこそ相手の心が分かる様になる。これは絶対に嘘じゃない」

ジュニラム『自分ガ言イタイコトハチャント言ツテヨ？ソウデモシナクチャ、ジュブリーガドウイウバグスターナノカラ僕モ雄大モ知ル事ガ出来ナイカラ』

ジュブリー「経験者は語れるってヤツか？でも、ありがとうな。雄大、ラム君。そして……さくぼん」

ジュブリーは立ち上がり、謝意の言葉を言いながらお辞儀をする。それから休憩を終えた俺達は、戦闘態勢に入った。

咲夜「ジュブリー、ジュニラム。戦闘中の喧嘩は必ず足手纏まといになるという事を意識しておけ。『一人が隙を作り、もう一人が攻撃を加える』……それがチームワークというものだ。互いに協力し、力を最大限に生かせ！」

ジュニラムの突進と共に地面を蹴る。

タイミングは略同時。俺達は気合の雄叫びをデリシヤスフィールド内に響き渡らせた。

□

K i v a l l a s i d e

あたしはエナジー妖精組と庭でダルマさんが転んだを遊ぶ事にした。コメちゃんが鬼で、あたし達はタッチする側になった。

コメコメ（人間体）「だ、る、ま、さ、ん、が、転んだコメ！」

コメちゃんが振り向いた瞬間、あたし達は動作を止める。

だけど、クソ犬ちゃんの左耳が微かに動いてしまう。

コメコメ（人間体）「パムパム、アウトコメ！」

パムパム「えっ、パムパムは一回も動いてないパム!？」

コメコメ（人間体）「耳が動いてたコメ〜！」

キバーラ「厳しいわね。狐にはターゲットハッドがついてるかもしれないから、あの子の目の前に誤魔化す事はないわ」

メンメン「ターゲットハッド、って何メン？」

メン君が知らない単語に質問する。

キバーラ「ターゲットハッド、っていうのは… ああ、今は説明が難しいから無しで。狐の雪原などで行われるジャンプ狩りを研究者達が分析した結果によると、ジャンプの方向が北に偏かたよっている事が発見されたわ。そのジャンプ狩りの成功率を調べたところ、正確には北北東へ向けたジャンプ狩りの成功率は74%に対して、それ以外の方向へジャンプした場合の成功率が18%未満… つまりは狐のジャンプ狩りの精度は北向きに行うと上がるという事よ」

パムパム「それでパムパムの耳が動いてたのも見抜けたパムね。うう、厳しいパム…。」

あたしの説明にクソ犬ちゃんは納得し、ドラジカちゃんは仰向けに倒れる。

暫く経って、今度はクソ犬ちゃんが鬼を担当する事にした。

パムパム「だ、る、ま、さ、ん、が…： 転んだパム！」
コメちゃんとドラジカちゃんがバランス性の高いポーズで動きを
静止する。

パムパム「コメコメ動いたパム！」

コメコメ「…： 動いてないコメ」

パムパム「今カクつてしたパム！」

コメコメ「気のせいコメ。昨日から全く動いてないコメ」

パムパム「そんな訳ないパム」

まだこの姿に慣れていないためか、バランスを崩し、一瞬にして動
いてしまったコメちゃんは必死に抗議する。

まあ、妖精の姿と歩幅が大きく違うから割と不公平なだけけれど
も…：。

その間に流石に限界がきたのか、ドラジカちゃんはどうも伏せに倒れ
た。

パムパム「…： ダルマさんは転んだはもうやりたくないパム」

コメコメ「じゃあ、おままごとコメ〜！」

気を取り直して御飯事に切り替える事になる。このまま喧嘩にな
らなきゃいいけど…： ちよつと心配だわ。

□

No side

場面は変わってブンドル団アジト。

セクレトルー「…はあ」

ナルシストルー「俺様の美しさに溜息も出るか。そういえば肝心なソルトルーとゲンムは見当たらないが、何かあったのか？」

王蛇バグスター「あいつと自称神ならゲームの開発とやらに戻った。『偶には休息も必要だ』と言ってたらしいが…まあ、そんな事は俺には興味ないがな」

セクレトルーの溜息に対して擲揄する様に言うナルシストルー。

ゲンムとソルトルーはゲームの開発に戻ったが、戦う事にうずうずしている王蛇にとつては関係のない事だ。

セクレトルー「失望の溜息です。つて言うか、いつまで御飯事続けるつもりだよ？」

ナルシストルー「…失望？」

セクレトルー「貴方達の実力は本来、こんなものではない筈です。もつとご自分を見つめ直して、長所を活かしてください」

王蛇バグスター「ああ？何か言ったか…？」

ナルシストルー「…俺様に命令する気か？」

ナルシストルーはセクレトルーを白い目で見る。その睨みは自分の行動を妨げる口振りを否定するかの様だった。

聞く耳を持たない彼だが、セクレトルーは続けて言う。

セクレトルー「後はありませんよ？これ以上結果が出ないのであれば、此処を出て行ってもらいます」

ナルシストルー「…ふっ。お前は何様だ？俺はナルシストルーだ。俺様の意見は…誰にも奪わせない！」

王蛇バグスター「ああああ…！そろそろ行くかア。祭りの場所へ…！」

王蛇バグスターは不気味に笑い、首を回しながらナルシストルーの背中を追う。

セクレトルー「…では。せーの！ブンドル、ブンドルー!!」

二人の去り際に、セクレトルーはいつものシユプレヒコールをするのであった。

□
T o u k i s i d e

ゆい「解けた〜！答えは18分！」

ここね「正解」

後ろで見守っていたオカマさんは問題が解けた事に拍手を小さく鳴らす。

らん「ひえ〜。難しいかった〜！」

冬美「全く…理解するのがちよつと遅かったけど、ちゃんと問題を読めば分かるでしょ？」

らん「うん、一回休憩するね。じゃないと頭がパンクしちゃうよ〜…」

やつとの事で解答にこじづけた華満少女は、両腕を伸ばして達成感を実感する。

緊張感も抜けたのか、背後にあつたベットで上半身を仰向けにさせる。

それにしても、彼女にも柔軟性があつたとは。今度それを応用したトレーニングでもさせてみるか。

透冀「さてと。僕達はキバ〜ラ達の様子を見つつ、お茶を淹れてこようか」

あまね「そうだな」

僕達は一階で全員分のお茶を淹れて二階に戻ろうとしたところで、何やら騒動が起こっていた。

パムパム「もう嫌パム！何でコメコメはいつもママで、パムパム

はいつも…『話す事の距離感が近すぎるおばさん役』パムく!!」
成る程、どうやらおままごとの役柄の事で喧嘩をしているみたいだ
ね。

コメコメ（人間体）「もうちよつとしたら交代するコメ」

パムパム「そう言つてずつと交代してくれないパム！もういいパム
！コメコメなんて嫌いパム。帰るパムく!!」

メンメン「パムパム！」

キバーラ「え、ちよつとクソ犬ちゃ!?待ちなさいよ！」

暢気に即答する小狐少女の態度におパム少女はやけくそになり、そ
のまま和実少女の家を飛び出す。

元々敵対関係だったキバーラも彼女の後を追って行った。

コメコメ（人間体）「コメコメだってパムパムの事嫌いコメ！」

メンメン「そんな事言わないでほしいメンく…。」

透冀「… 菓彩少女。ちよつといいかな？」

ドラジカ少年君も必死に説得する姿に、菓彩少女は小狐少女の隣に
座りながら状況を尋ねる。

あまね「パムパムと喧嘩したのか？」

コメコメ（人間体）「パムパムが酷い事言ったコメ」

あまね「パムパムはいつもそんな事を言うのか？」

コメコメ「… 言わないコメ」

諭された言葉に小狐少女は一瞬だけ顔を頷くと、おパム少女を探し
に家を飛び出した。

コメコメ（人間体）「… っ！」

メンメン「あつ、コメコメ！」

透冀「… やはりね」

あまね「透冀。急にどうしたんだ？」

透冀「恐らくだけど、小狐少女の第一次反抗期が来たんだと思う」

あまね「反抗期：！?だが、それは2く3歳頃に見られる筈
じゃ…。」

透冀「本来ならね。確かに小狐少女は姿が成長してもまだ子供だ。
でも、姿的に6く7歳程度の姿だった場合は…それが少し遅れてき

てしまったんだろう」

反抗期というのは本来『自立の為の過渡期』であるため、大人になるためには必要不可欠な段階だ。

自我が安定するまでの『変化』の過程というのは心の不安定を意味する。今の小狐少女の様に、誰より苦渋な時期でもある。

だがそれは『これまで積み上げてきたものを一回崩して再構築する』という無理難題が含まれているからだ。

結局のところ、反抗期というのは決して単純な作業ではなく、難解を伴いながら自分と向き合って行く段階だという事だ。

僕の推測を聞いて菓彩少女は納得する。

僕達はマシンディエンダーに跨またがり、走行させながらハートフルーツペンダントで和実少女達のハートキュアウオッチを介して状況を伝える。

あまね「ゆい達に告ぐ、緊急連絡だ。コメコメとパムパムが喧嘩して家を飛び出した」

透冀「ついでにキバーラもおパム少女の行方を追っている」

ゆい『えっ!?!コメコメとパムパムが喧嘩!?!どういう事!?!』

あまね「説明は後だ。私と透冀が様子を見てくるから、心配ない」

透冀「和実少女と華満少女は宿題の解答を続行してくれ。冬美もマシキバーラでオカマさんと一緒に搜索そうさくを頼む」

冬美『了解、あたしもマリーさんと様子を見てくる』

冬美も搜索してくれるそうで、通話を切った僕はマシンディエンダーを走行させた。

□
S a k u y a s i d e

雄大のスマホの着信音が鳴り響く。どうやら問題集が国語に突入してみたようだ。

雄大「もしもし？冬美…何だって!？」

慌てぶりの声を上げる雄大。音声スピーカーではないため、内容を把握出来ない。

雄大「…分かった、成る可く手短に済ませる。それじゃ」

咲夜「ブンドル団が現れたのか？」

雄大「いや、コメコメとパムパムが喧嘩した」

咲夜「はあ!?!この機に限って何てこった!?!俺達も今直ぐ其方に向かわないと…!」

雄大「いや、冬美には『万が一、ブンドル団の出現に合わせられる様にバイクに跨って待機してろ』って言われた」

咲夜「まあ、あいつならそう言うよな。いつでも駆け付けられる様にエンジンでも掛けとくか」

俺達はオーロラカーテンで出現させたマシンデイケイダーとビートチエイサーに跨ってそのまま待機した。

ジュブリー「…何か暇やな」

ジュニラム『ソダネ〜』

咲夜「おい。寛ぐ暇があるならちやんと戦闘に備えろよ」
『ハイ』

気怠げな返事が返って来る。ジュブリーは俺の体内に戻り、ジュニラムはビートジュニラムに合体した事は言うまでもなかった。

咲夜「待機中は暇だな…」

雄大「…イメージトレーニングでもするか？」

咲夜「そうしとこう」

□

K i v a l l a s i d e

キバーラ「クソ犬ちゃん！」

パムパム「キバーラ：： 何しに来たパム？」

あたしはクソ犬ちゃんを見つける事が出来たけど、何故か外方を向いてるばかりだった。

キバーラ「探したわよ。さあ、帰ってコメちゃんと仲直りして」

パムパム「：： 嫌パム」

キバーラ「どうして!？」

パムパム「あんな言い方するなんてコメコメじゃないパム。だから嫌いパム！」

キバーラ「じゃあ、コメちゃんはいつもそんな事を言ってるって言うの!？」

パムパム「パムつ：：！」

向きになってクソ犬ちゃんに怒鳴ってしまう。

キバーラ「：： あ、御免なさい。ちよっと向きになっちゃって」

パムパム「：：：：」

キバーラ「あたしね。ブンドル団の時もそうだったけど、冬美の両親とは敵対関係だったのよ？」

パムパム「キバーラが、敵？」

キバーラ「まあ、違う意味でもあるんだけど。あの頃はアキノリとは違うディケイドを監視しろって命令されてただけなんだけどね。

それから旅をしていく内に…。もうそんな事はどうでもよくなっ
ちやつて」

あたしは自分の経験をクソ犬ちゃんに軽く語った。

キバーラ「アキノリはこうも言ってたわ。『例え睨み合っていても、
同じ旅を続ければその道はいつか交わる。時に傷付け、時に裏切り、
何度も打つかり合って…。だからこそ相手の心が分かるようになる』つ
て」

パムパム「咲夜がそんな事を…。？」

キバーラ「ええ。貴女^{あなた}だつて、エナジー妖精の中でも最年長として
コメちゃんに合わせて遊んでくれたのよね。良いお姉さんしてる
じゃない」

パムパム「パムパムが、お姉さん…。パム？」

キバーラ「大事ななのは、年上として優しく接してあげる事。ただ意
地を張ってるだけじゃ、とてもお姉さんらしくないもの。コメちゃん
やメンちゃん、ここねちゃん達だつて貴女の大切なお友達なんだか
ら、素直に話し合った方が少しは気が楽になるわよ？」

クソ犬ちゃんは少し頷いて黙り込むけど、何かを決意したのかゆっ
くりと立ち上がった。

パムパム「…。負けたパム」

キバーラ「えっ…。？」

パムパム「パムパムは褒められると直ぐ調子に乗っちゃうから、皆
の前では中々素直になれなかったパム。でも、キバーラのさっきの言
葉を聞いてたら益々^{ますます}自分が情けないと思つて…。！」

キバーラ「クソ犬ちゃん…。」

経験の差で自分はまだまだ未熟だと嫉妬するクソ犬ちゃんの目に
は涙が溢^{あふ}れている。

だが、今は泣いている暇はないと片手で涙を拭^{ぬぐ}った。

パムパム「…。でも、今は泣いてる場合じゃないパム。パムパム、コ
メコメに謝ってくるパム！」

キバーラ「うん、その方が一番いいわ。その事なんだけど…。ご
よごによごによ」

あたしはクソ犬ちゃんにコメちゃんと仲直りする作戦について耳打ちをする。

その内容に大袈裟げさに驚く。

パムパム「パムっ!?でも、それだと仲直りとは言えないパム!」

キバーラ「大丈夫よ。ほら、ブンドル団が居るわよ」

パムパム「パム…?」

あたし達はゆいちゃんの家に戻ろうとした時には、一瞬たりとて現れた魔の手によって捕まってしまう。

パムパム「パムく!!」

王蛇バグスター「フハハハハ!自ら墓穴ほけつを掘ったのはお前らの方だったな!」

ナルシストルー「二匹仲良く内緒話か?俺様達にも聞かせてくれよ」

キバーラ「あんたは…ナルシストルー!!」

パムパム「何で王蛇まで此処こゝに居るパム!?

王蛇バグスター「お前、バカか?戦うのに理由はない。それがライダーけだるってモンだろオ…?」

気怠けだるげな声を上げながら首を回したのは、凶悪殺人犯 浅倉威が変身した極悪非道のミラーライダー 王蛇。

観客A「王蛇だ!前に山海食堂さんかいを襲撃した王蛇だアーー!!」

観客B「こんなところで喰われたくねえよおおおツ!!!」

王蛇バグスター「ああああ…!」

鬱憤うつぶん晴らしと言わんばかりにお店のテーブルを壊していくと、その音を頼りに観客達は次々と逃げ惑う。

前の山海食堂の件でおいしーなタウンでは王蛇とゲムムの噂とは疾うに広まっていたようね。

ナルシストルー「せつかくだ。一緒に楽しもうじゃないか…トルン・トルン・ブンドルー!!」

ピザのレシピツピが捕獲箱に捕まった影響で、周りのお客さん達が放心状態となっていた。

パムパム「離すパムく!」

ナルシストルー「止めないよ。、。パムウ、ゝ！」

足をじたばたさせて抵抗するクソ犬ちゃんに対して小馬鹿な態度で口真似をするナルシストルー。

其処で王蛇はある事を思い付く。

王蛇バグスター「そういえばこいつらには、此間の件でまだ何も喰わせてやれなかったなあ…！ たっぷり喰わせてやるよ」

【ADVENT】【ADVENT】【ADVENT】

王蛇はカードデッキから取り出したミラーモンスターが描かれた三枚のカードを、蛇の顔を模した杖型の召喚機に装填。

そのまま押し込むとコブラ・犀・のミラーモンスターが鏡を擦り抜ける様に出現し、王蛇の左右付近に並び立つ。

威嚇する三匹。明らかに餌である人間を沢山食べて飢餓状態を逃れようとしてるわね。

きつと浅倉の事だから最初のデイナーはレグレットか雄大の何方か。

でも、肝心の雄大は現在デリシャスフィールドで待機中だから、こつちには戻って来てない。

早くしないとお客さん達が三体のミラーモンスターに全員食べられてしまう。そんな中、一人の少女の声飛び交った。

コメコメ「パムパム！」

パムパム「パム…？」

人間の姿になったコメちゃんだった。息が少し乱れていたから、よっぽど探し回ってたのね。

クソ犬ちゃんは助けを求めようと手を伸ばす直前、あたしは小さく声を掛ける。

キバーラ「…クソ犬ちゃん」

パムパム「パム？」

クソ犬ちゃんがコメちゃんと仲直りする切っ掛けを作るのが今回のあたしの役目。それは喧嘩した手前で意地を張るフリをする事だった。

頷いたあたしを見て、クソ犬ちゃんは直ぐに実行に移してくれた。

パムパム「…助けてもらわなくてもいいパム」
コメコメ（人間体）「コッ…!？」

パムパム「パムパム自分で何とか出来るパム！」
コメコメ（人間体）「じゃあ知らないコメー！」

せつかく助けに来たというのに、その気持ちを裏切られたコメちゃん
は外方を向く。

ごめんねコメちゃん。これも貴女がクソ犬ちゃんと仲直りするた
めよ。

パムパム「パム…パムパムパムパムパムパムパムパムパムパム
!!」

クソ犬ちゃんは振り下ろした右腕を起点にラツシユで抵抗する。

けれど体の小ささが災いしたのか、その距離は3cm程度しか届か
ず、ラツシユによる微風がナルシストルーの前髪をフワリと靡なみかせ
た。

ナルシストルー「あー、涼しい。最っ高」

パムパム「パムウ〜!!」

更には後ろ側のフードを掴まれているため、お得意の噛み付き攻撃
を仕掛けるのは困難であった。

クソ犬ちゃんを遇あらうナルシストルーに呆れたのか、王蛇はミラー
モンスター達に指示を下す。

王蛇「…面倒だ。おいお前ら、こいつ食っていいぞ」

三体のミラーモンスターが一齐にコメちゃんに襲い掛かる。

その刹那に何処からか飛んできた火球がミラーモンスター達を牽
制させた。

上を見上げると、機械的な見た目をした赤い東洋龍が咆哮を上げな
がらミラーモンスター達へ接近していく。

あまね「コメコメー！」

透翼「小狐少女、無事か!？」

その間に背後からは、排気音と共にデイケイドとキバのライダーマ
シンをリペイントした様なバイクが走行して来た。

シアンカラーのライダーマシン『マシンデイエンダー』に跨ってい

冬美「あれはジェノサイダー。浅倉の契約モンスター達が合体したミラーモンスターだよ」

ローズマリー「ジェノサイダー、何て禍々しい姿なの…!!」

王蛇バグスター「ハハハハハ！此処からが本気の祭りだ…!!」

犀は胴体と頭部。コブラは尻尾・首・顔部。そして☒は背中にへばり付く形で鱗を展開させ、まるで翼の様に見せかけている。

ベノスネーカー・メタルゲラス・エビルダイバーの三体が合体した融合ミラーモンスター『獣帝^{じゅうてい}ジェノサイダー』の誕生に、あたし達は強く警戒する。

ローズマリー「デリシヤスフィールド！」

マリちゃんがデリシヤスフィールドを展開し、レグレットとあまねちゃんは変身へ移行する。

□

あまね「プリキュア！デリシヤスタンバイ！パーティーゴー!!」

「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

「シエアリンエナジー！」

「トツピング！」

「ブリリアント！」

「シャインモア！」

□
ファイナーレ「ジエントルに、ゴージャスに、咲き誇るスウィートネス！キュアファイナーレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

□

【カメンライド】

透冀「変身!!」

【ディエンド!】

ディエンド「後を継らず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択を！仮面ライダーディエンド！僕達の旅の行先は… 僕達だけが決めるツ!!」

□

DIEND SIDE

「はああああーーツ!!」

ナルシストルー「動くんじゃない。こいつらがどうなってもいいのか？」

「!」

変身が完了した僕達は地面を蹴って攻撃しようとした時、ナルシストルーがおパム少女とキバーラを人質に取るといった卑怯な戦法を仕掛けてきた。

ローズマリー「何てメガ盛りに卑怯なの!？」

王蛇バグスター「ハハハハハハ…！戦いってのはこういうモンなんだろ？違うのか…？」

ナルシストルーの突然の行動にオカマさんは抗議する。

小狐少女の見守り役を任せられ、動くなど言われている以上、電王に変身せざるを得ない状況であった。

それを見ていたリュウキドラグレッツダーは敵意の雄叫びを、ジエノサイダーは王蛇の意見に賛同を示す様に威嚇する。

ナルシストルー「面白くなってきたな。やれ、モットウバウゾー！」
下された指示でモットウバウゾーは右腕による攻撃を仕掛けてくる。

『STRIKE VENT』

更には追い討ちを掛ける様にガイの契約モンスターであるメタルゲラスの頭部を模した右手甲『メタルホーン』を装備した王蛇が僕の胸部装甲を突き、ファイナーレの正拳突きを表面で受け止めながら右脚によるフロント・ハイキックで蹴り飛ばす。

ナルシストルー「動くなど…！」

王蛇「ふんツ!!」

デイエンド「ぐあっ!?ぐっ…！」

火花を散らして突き飛ばされた僕は胸部装甲を見てみると、今でもスーツに届きそうなくらいに螺旋状の凹凸が出来ていた。

メタルホーンは60cmのある鉄塊を粉々にする程の頑強さを持ち合わせているだけでなく、表面の硬さを利用した盾として応用出来るから攻撃にも防御にも使える優れアイテムだ。

ナルシストルー「言った筈だ」

パムパム「パムウゝ…！」

コメコメ（人間体）「パムパム！」

ファイナーレは後方に後退するも、又してもナルシストルーは脅しを掛け、おパム少女の両頬を強く抓る。

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

ファイナーレ「ぐうっ!?ぐっ…!!」

『SWING VENT』

振り下ろされるモットウバウゾーの左腕に受け止められて身動きが取れず、エビルダイバーの尻尾を模した鞭『エビルウィップ』を召喚した王蛇の猛攻を僕は交差した両腕で耐え切っているため上手く

メンメン「ドラグレッダー!!」

ドラグレッダーに唯一憧れを持っていたドラジカ少年君も、虫の息になっていたリュウキドラグレッダーの姿を見て声を上げる。

小狐少女は絶望的な光景を目に膝を付きながら妖精の姿に戻ると、自身の行いを自責する。

コメコメ「コメコメが…優しくなかったからっ…！」

「泣くのはまだ早いぞッ!!!」

コメコメ「コメっ…?」

僕達はそんな小狐少女に声を飛ばす。

デイエンド「自分のせいだと思えば、その責任を行動で示せ。お
パム少女を助けたのならその意気込みはある筈だ!」

ファイナーレ「パムパムは大事な友達なんだろう?どうしたい?」

コメコメ「コメコメは…！」

デイエンド「おパム少女を助けたのかと聞いているんだ!ただ指
を啜すえながら僕達が敗北する姿を見た君が、一生後悔してもいいの
か!」

コメコメ「っ…！」

僕は小狐少女に転生前の過去を語りながら叱咤しっただする。

デイエンド「…転生前の僕は指を啜すえて見ただけの木偶でくの坊
だった。そんな自分を見返すために仮面ライダーになった!でも、ア
キノリ達と打っかかり合っあっていく内にそんな考えは無意味だった事に

気付いた。責任とはただ使命を全うするだけじゃない…。自分を見つめ直し、判断力を持って行動する事だ！だから小狐少女、君の意見を聞きたい。君はおパム少女を助けたいのか？助けられないのか？！」「どうしたいんだ!?」

コメコメ「…パムパムに謝りたい…。助けたいコメ！」

ファイナーレ「…ふっ」

デイエンド「その言葉を待っていたよ!!」

一念発起した小狐少女の姿を見て微笑したファイナーレはモットウバウゾーに打ち上げられるも、オカマさんと冬美の視線にサインを送った。

僕はゼロデイエンドライバーから吐き出された銃弾を王蛇の胸部装甲に連射し、怯んだ隙にエビルウィップを持った右腕を引つ張りながら腹部に蹴りを入れた。

距離が離れたところでライダーカードを取り出し、そのままゼロデイエンドライバーに装填させてポンプアクション。

「カメンライド ジーン！」

デイエンド「はッ！」

『Z I I N L O A D I N G』

新たに手に入れたライダーが実体化する。

黒をベースに無作為に白いラインが走る左右非対称のボディに、同じく二本の青いラインが走っている黒いプレートが突き出した頭部。横から見ると、何故か後ろを向いた狐にも見える。

???「君かい？俺を呼んだのは」

デイエンド「ああ。銃ライダー同士、一緒に戦ってほしい」

???「そうだな。でも、一つだけ言っておきたい事がある。俺が求めているのはただ一つ…。『感動』だけさ」

デイエンド『感動』…。か。君が求める感動というのはどんな物か拝見させてもらうよ。成る可く動かず^にお願いね」

僕はSF風のギンギツネライダー『仮面ライダージーン』は頷くと、ベルトに付いている銃を王蛇に向けて決め台詞を言い放つ。

ジーン「分かった。接近戦は不利だけど、成る可く動かない様には

するよ…。(英寿、まさか君の言葉を借りる時が来るとはね)さあ、ハ
イライトだ！」

『READY FIGHT』

戦闘開始のゴングが鳴り、王蛇へ向かって行った。

□

Fuyumi side

ナルシストルー「苦しむ顔も見せてくれよ…！」

ファイナーレとレグレットがあたし達を見てサインを送っていた様
にも見えた。

あの二人、ナルシストルーと王蛇の注意を引いてくれてたんだ。

冬美「マリーさん、今の内に！」

ローズマリー「ええ。コメコメ！メンメン！」

コメコメ「コメ！」

メンメン「メン！」

ローズマリー「うおりやあああああッ!!!」

同じく二人の意図を察していたマリーさんは、コメちゃん達をナル
シストルー目掛けて投げ飛ばす。

『パ・ワ・ア・ド・イ・ク・サ・ア』

冬美「これでも喰らいなさい!!」

イクサベルトを腰に巻いたあたしは、召喚したパワードイクサーに
乗り込んで内臓されていた弾幕をジェノサイダー目掛けて投げる。

怯ませた隙にそのまま前進させ、高層ビルを粉碎する程の威力を誇
る突撃用の爪で攻撃。

ブラックホールによる吸引は当然やらせず、そのまま両顎でぶん投
げてやった。

あたしは直ぐにパワードイクサーから降りてリュウキドラグレッ
ターの方へ駆け寄る。

冬美「大丈夫？」

リユウキドラグレッダー『グルオオオ…』

冬美「此処まで良く頑張ったわ。後はあたし達に任せて」
小さく頷いたリユウキドラグレッダーは消滅した。

此処までよく頑張ったんだもん。あの子の勇姿を絶対に無駄にはしない！

そう決心していると、メン君がコメちゃんを二段ロケットみたいに投げ飛ばしていた。

メンメン「メーン！」

コメコメ「コメエエエエエツ!!」

ナルシストルー「っ！何を無駄な事を…!!」

コメコメ「コツ…」

パムパム「コメコメーツ!!」

コメちゃんがパムちゃんを右手ではたき落とす形で救出するも、今度は自分が捕まってしまう。

ナルシストルー「次は君と遊んであげようか…？」

コメコメ「コメ」

ナルシストルー「なっ…!!」

キバーラ「もうあったま来たわ！ガアブツ!!」

ナルシストルー「イツタア!?!」

簡単に捕まる程にコメちゃんとキバーラはバカじゃない。

コメちゃんは頭を二回叩いて人間の姿になって脱出。

急激な体重変化で手元が緩んだ隙にキバーラが思いつきりナルシストルーの人差し指をガブリと噛み付いて脱出し、お礼と言わんばかりにおでこに体当たりしてあたしと合流する。

ローズマリー「やったわ！」

キバーラ「冬美く！」

冬美「キバーラ！早くコメちゃんを！」

キバーラ「ええ！」

変身が解除されたコメちゃんを合流を果たしたあたし達は変身しようとした時、忍び寄った謎の影が浮遊している黒い物体の裏面を蹴

る。
軽快な動きでコメちゃんを救出し、近くにあつた岩盤を軽く蹴つて着地した。

その正体は紫を基調とした忍装具を衣装を着た黄色い複眼のライダー。顔の中央部、胸部装甲には手裏剣を模した銀のパーツが付いている。

ゆい「コメコメ、大丈夫？」

コメコメ「ゆい！」

???「一時はどうなるかと思つたわ。一秒でも蹴るのが遅かったら、コメちゃんが怪我どころじゃなかつたしな」

ジュニラム『ヤツパリ、トレーニングシタ甲斐ガアツタネ！』

冬美「えっ？あんたまさか、ジュブリー!?何でジュブリーがデイケイドになつてんの!？」

其処へ追いついたゆい達も合流を果たし、違和感のある口調の正体を聞いたあたしは驚く。

ジュニラム『ジュブリーハ元々アキノリカラ生マレタバグスターダカラ、体ヲ借りテ変身シテモオカシクハナカッタンダ』

デイケイド(ジュブリー)「そういうこつちや。これであんたらとも一緒に戦える訳や！」

デイエンド「プリキュア組、全員集合だね」

フィナーレ「いや、まだ肝心な雄大がまだ来ていない…」

雄大「俺ならもう来てるぞ！」

『!』

ビートチェイサーに走行していた雄大も合流を果たす。これで役者は全員揃つた。

デイケイド(ジュブリー)「平成ライダーの大先輩は遅れてやってくるつてか?ナイスタイミングやで！」

王蛇バグスター「やつと来たか。坊や…」

雄大「待たせたな浅倉。これが本当の第二ラウンドだ」

ローズマリー「いよっしやあッ!メガ盛り…いや、テラ盛り揃つたあ!!」

そのまま変身しようとしたあたし達だけど、アキノリがジュブリーに話しかける。

咲夜『ジュブリー、選手交代だ』

デイケイド(ジュブリー)「はあ!?こっからが僕達のハイライトやつてのに… まあ、ええわ。それに、ゼロデイケイドライバーのアップデート条件はもう達成したんやる?」

咲夜『ああ、お陰様でな。一応カードの確認もしたいからな』

デイケイド(ジュブリー)「分かった。偶には僕にも戦わせてくれな?」

二人の掛け合いが終わると、デイケイドの主導権はアキノリに再び譲られた。

デイケイド「いよっし、元の体に戻ったぞ。さあてと、肝心の新カードは…」

アキノリの言葉に応じてライドブツカーから三枚のカードが飛び出し、手に取ると同時にカードの内容を彩らせる。

描かれていたのは、マスクの上に白い狐面を被せた様なライダー。ファイナルアタックライドはそのライダーが被っている狐面が紋章となり、ファイナルフォームライドの右下には白い九尾狐のロボットが描かれていた。

それを見たアキノリはライドブツカーに収納すると、BとCが駆け寄る。どうやらイリキュージョンはカメンライド前に使用したみたい。

ゆい「行くよ!」

「二」ああ(うん)！「二」

気を取り直してあたし達は変身に移行した。

□
ゆい「にぎにぎー！」
コメコメ「コメコメ！」
ゆい「ハートを！」
コメコメ「コメコメ！」

□
ここね「オープン！」
パムパム「パムパム！」
ここね「サンド！」
パムパム「パムパム！」

□
らん「くるくるー！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
「「シエアリンエナジー！」」
コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」

デイケイド「ブフオツ!？」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

「「「デリシヤスパーティ♡プリキュア!」「」」

□

「「変身!」」

『SWORD FORM』

デイケイドA「忍びと書いて、刃の心。仮面ライダーデイケイドシノビ！旅の語らい……いざ書き記さん!!」

電王S「俺、参上！」

クウガ「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は……俺が守る!!」

キバーラ「世界に輝く女騎士！仮面ライダーキバーラ！あんた貴方の野望、止めてあげる（わ）！」

デイケイドB・C「今回、俺達は省略させて頂きます！」

デイケイドA「全てを破壊し、全てを繋ぐ！」

「「「我ら、仮面ライダー!」「」」ドカーン！」

□

DECADE SIDE

ナルシストルー「行くぞ、モットウバウゾー！」

モットウバウゾー「モットウバウゾー!!」

ナルシストルーとモットウバウゾーが岩山から飛び降りる。

構える俺達だが、レグレットとキバーラがファイナーレと共に地面を蹴ってナルシストルーと対峙した。

ナルシストルー「裏切り者三人が相手か…せつかくだ。纏めて相手をしてやる」

拳と拳が打つかり合い、黒緑色のスパークが発生する。

デイケイドA「俺とローズマリーはジェノサイダーの相手を、Bはプレシヤス達のサポート。C、ローズマリー、雄大は浅倉を頼んだ！」

デイケイドC「分かったよりリーダー。ジェノサイダーはブラックホールと衝撃波が厄介だから、慎重に倒さないと。出来ればユナイトベントが解除される前に倒して、浅倉も一緒に倒す！」

要するに三体のミラーモンスターが融合した一体のミラーモンスター扱いになっているジェノサイダーを倒せば、ブランク体に弱体化した王蛇を倒せるという事だ。

デイケイドB「リーダー。浅倉とジェノサイダーを同時に倒せなかった手段として、契約モンスターのどれか一体を倒せ。そうすれば、ジェノサイダーへの合体は出来なくなる筈だ」

デイケイドA「助言ありがとなB。よっしゃあ、ジェノサイダーの様子を成る可く浅倉に気付かれずに倒すぞ！」

「「おう!!」」

プレシヤス達のサポートをBに、浅倉はC・ローズマリー・雄大の三人に任せ、俺はジェノサイダーのところへ向かって行った。

□

B SIDE

デイケイドB「なっ…！うわあっ!?」

俺はプレシヤス達と合流するが、突然にモットウバウゾーのピザピールを模した右腕で宙に打ち上げられてしまう。

更に近付く事でプレシヤス達をピザ窯の火力で焼こうと接近する。

デイケイドB「三人共、地面に着地だ!」

プレシヤス「う、うん!」

「フォームライド フォーゼ ファイヤー!」

頷いた三人は宙返りをして地面に着地し、俺はフォーゼ ファイヤステイツへとカメンライド。

ファイヤーステイツの外装部『ヒースタックガードメント』は外部から伝わった熱をエネルギーの一部として取り込める機能を持っているため、モットウバウゾーの熱を吸収するのにも都合が良かった。

デイケイドB「残念だったな。お前が焼こうとしていた相手は、どんな炎をも受け止めるプリンス様だ!」

『アタックライド フリーズ!』

『アタックライド ウォーター!』

右脚にライトグレーのフォーゼモジュール『フリーズモジュール』を、左脚は蛇口を模したライトブルーのフォーゼモジュール『ウォーターモジュール』を装備する。

俺は左肘と突き上げた左脚以外の四肢でピザ窯の角を抑えながら蛇口型制御ハンドル『ターニングタップ』を左側に捻る。

吐水口『シャワーポリング』から水流を放出し、同時にフリーズモジュールの断熱ドア『フラットシャッター』が開く。

ウォーターモジュールから放出した水流を凍結させる事でモットウバウゾーの火を一時的に無力化させる。

モットウバウゾー「ウバツ!?ウババババツ!!」

ヤムヤム「バリバリカッターブレイズ!!」

それを阻止しようとモットウバウゾーはピザ窯で俺を摘み出そうとしたが、ヤムヤムがカッターブレイズで両腕を攻撃し、麺状のエネ

ルギーで両足を拘束させてそのまま仰向けに転ばせる。

その反動で俺は脱出した。

スパイシー「ピリツtのヘヴィーサンドプレス!!」

其処からスパイシーがサンドプレスで上から窯の炎を抑える様に押し潰して行動不能にさせようとするが、モットウバウゾーは右腕で防御。

鏝迫り合っている隙に、スパイシーはプレシヤスに声を飛ばす。

スパイシー「プレシヤス、B。今よ!」

「ファイナルアタックライド フォ、フォ、フォ、フォーゼ!」

デイケイドB「プレシヤス!受け取れ!」

プレシヤス「任せて!1000キロ燃焼^{ねんしょう}カロリーパーンチ!!」

モットウバウゾー「ウバツハー!?!」

爆熱シュートと合わせたプレシヤスのカロリーパンチでモットウバウゾーにダメージを与えた。

プレシヤス「あちやちやちやちやちやちやちやちやちやちやちやちやちや...!」

カロリーパンチを打った後でもプレシヤスのグローブに残った火をファイヤーステイツの特性で残さず吸収。

ヒーハックガンのフロントユニットとリアユニットを分割させる事で、タンク部分『エクステイングタンク』が露出。

ヒーハックガンは消化器モードへとモードチェンジ。

トリガースイッチ『ハックトリガー』をこまめに引きつつ消化剤を吐き出し、プレシヤスの火傷^{やけど}の消化^{治療}を行う。

プレシヤス「ふう〜。ありがとう〜」

デイケイドB「どう致しまして。やっぱり、炎系の合わせ技は流石にマズかったか...?」

プレシヤス「ううん、別にいいよ。何だか心が熱くなった気分になっただし!」

モットウバウゾー「モットウバウゾー...!!」

立ち上がったモットウバウゾーは能力を封じられた事に怒りを露^{あら}わにし、凍結した窯を再び炎で満たす。

ヤムヤム「ひよえ〜！まだ倒れないの!？」

スパイシー「いや、今のでかなりダメージを受けてる。B、さつき
の攻撃をもう一度やって！もう一度動きを封じて、一気に叩き込む
！」

デイケイドB「…よし。二度目は摘み出されない様に、俺達も少
し本気で行くぞ!!」

「うん!」

□

D I E N D S I D E

ファイナーレ「はあああーッ!!」

ファイナーレは上段蹴りを放つも、紙一重かみひとえに躲かわしたナルシストルーに
華麗なサマーソルトキックで後退させられると、左手を軸じくにブレーキ
を掛ける。

其処からどす黒い緑のエネルギー弾を翳かきした手から放たれる。

後退されていくファイナーレと擦れ違う様にペツパー君がクリーム
色のエネルギー弾で放つ。

ナルシストルー「何人掛かりでも…無意味、無意味!!」

だが、ナルシストルーは物ともせずに蹴り返してみせた。

ブラツクペツパー「け、蹴ったあ!？」

自分の技を蹴り返された事に驚きを隠せなかったペツパー君はそ
のまま受けそうになるが、冬美のバツシャーマグナムによる水の銃弾
で相殺された。

キバーラ（冬美）「大丈夫?」

ブラツクペツパー「ああ。済まない!」

ナルシストルー「ホントはクウガと戦いたかったけど、手間が省け
た。はあッ!!」

岩の壁を蹴って黄色いエネルギー弾を避けたナルシストルーは、両
手によるエネルギー弾で距離を詰めようとした僕とファイナーレに防

御体勢を促され牽制させる。

続いてペツパー君に放つも、デリシャストーンの輝きによって全身が黄色いオーラを纏われ、翻したマントで反射させる。

ナルシストルー「デリシャストーンを使い熟せる様になったからつて、調子に乗るんじゃない…！」

嫉妬深い言葉を吐きながら背後に瞬間移動したナルシストルー。

ブラツクペツパーを岩陰に蹴り飛ばすが、これで大分隙が出来た。

「はあああーっ！！」

僕達三人は一斉攻撃を放ち、スパークが発生する。

ファイナーレの拳は左手で、冬美のキバーラサーベルは右手。僕は右足で頭から踏み付けて攻撃を受け止めていた。

ナルシストルー「お前らは知らない仲じゃない。どうだ、もう一度俺様と組んでみるか…？」

ファイナーレ「誰がお前と！」

キバーラ（冬美）「手を組めるもんですか!!」

ディエンド「僕も君の様な人間と手を組むのは御免だ」

ナルシストルー「…だよな」

交渉不可能の判断したナルシストルーは受け止めた拳を軽く退かすと、セロ距離でエネルギー弾をファイナーレに浴びせる。

更にはキバーラサーベルを上弾き返してのエネルギー弾を冬美に浴びせ、最後に下顎を強く蹴って僕を打ち上げた。

ナルシストルー「俺様は誰よりも強く、美しい。それが俺様の長所だ!!」

ディエンド「ホントに、エゴイストなんだね君は。だったら、僕達が君の短所を指摘してあげるよ…！」

ファイナーレ「お前の短所は…直ぐに自惚れ、油断するところだ」
キバーラ（冬美）「それで攻撃の隙を突かれてしまう。言ってる意味

分かった？」

ナルシストルー「あ？」

キバーラ（冬美）「トウシュ！」

キバーラがサーベルをナルシストルーの顔目掛けて真正面に突く

も、ナルシストルーの頬を一瞬だけ掠^{かす}らせた。

ナルシストルー「おおっと、何処を狙^{ねら}って…!?」

掠らせた傷口からは血が流れ出ており、ナルシストルーを昂^{たか}らせると同時に焦りを覚えさせる。

ナルシストルー「…ぐっ!? 貴様!!」

流れた自分の血を見て怒号を上げている隙に、僕達は特技を打つける。

「ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイエーンド!」

デイエンド「デイメンション!」

ファイナーレ「ファイナーレブーケ!!」

ナルシストルー「ツ…!!」

螺旋状の青紫のエネルギー波をナルシストルーはギリギリのラインで回避するも、技の衝撃で結んでいた髪留めを解かす事は出来た。

□

A SIDE

「アタックライド メガトン忍法!」

巨大な紫色の竜巻でジェノサイダーを怯^{おそ}ませた俺は、交戦していたライダーと鉢合わせる。

デイケイドA「おい! あんた、俺と同じライダーだろ?」

勿論、そのライダーの姿を見るのは初見だ。後頭部と胸部にはプレートがぶつ刺さっている白と黒のツートンカラー。

ジーン「そうだけど、君は?」

デイケイドA「俺は仮面ライダーデイケイド、咲夜でいい」

ジーン「(デイケイド。そうか、さっき俺を呼んだデイエンドっていうライダーの仲間か)…俺は仮面ライダージーン、気軽にジーンでいいよ」

俺はジーンと呼ばれるライダーとの自己紹介を終えて、状況を尋^{たず}ね

た。

デイクイドA「それにしてもお前、俺達が変身してる間によくこんなデカブツを相手に戦ったのか？先輩ライダーとしてはなんだが、少しは尊敬するよ」

ジーン「まあね。俺も同じ様な敵と戦うのにも慣れてるから…さて、君が俺をどうやって感動させるか見せてくれよ」

デイクイドA「ああ。勿論、もちろん感動させてやるよ。一発でな」

ライドブツカーから取り出した新たなライダーカードを見て、ジーンは驚愕する。

ジーン「そ、そのカードは…!？」

デイクイドA「おつ、どうやらこのカードに描かれてるライダーを知ってるみたいだな？何なら変身ポーズも教えてほしい。ちゃんとジェスチャーするからさ」

ジーン「…分かった、俺が全力を持って教えよう。ギーツの推しとして！」

デイクイドA「決まりだな」

【カメンライド…】

ライダーカードを装填し、俺はジーンの動きを手本に逆向きでジェスチャーする事にした。

右腕で弧を描いた後にジェノサイダーに向けて指で狐の影絵を作り、そして中指と親指でフィンガースナップして叫ぶ。

ジェノサイダー『ギシャアアアアアアアアアッ!!!』

【変身!!】

【ギーツ！】

サイドハンドルを閉じると、ジェノサイダーが口から衝撃波を撃ってくるが、ワールドファインダーから出現した赤い銃弾六つがそれらを全て相殺。

煙が晴れた左右側にはアイコンが表示され、右側の白いシリンダーには『MAGNUM』、左側の炎のエフェクトには『BOOST』と描かれている。

挿入歌『神様の言うとおりに／タケヤキ翔（ラトウラトウ）』

赤い銃弾がシリンダーのエフェクトを打ち抜き、同じくワールドファインダーから左側に噴き出した炎が文字を焼却。

分解された文字が白い胸部装甲と赤い脚部装甲へと新たに形成され、上下に分割した丸いコアらしきエフェクトが俺を黒い素体に変化させる。

『GET READY FOR, BOOST&MAGNUM』
『MAGNUM SHOOTER 40X』
フォーゼロエックス

背後にはロボットの腕を模したホログラムが出現し、左右に浮遊していた装甲が装着。

同時に狐の反仮面も頭上に被さり、オレンジの複眼が変身完了を合図する。

白い胸部装甲に付いている紅白のマフラーが風によって靡なびき、真紅の脚部パーツには銀の排気口が付いている。

右手にはいつの間にか、白いライフル『マグナムシューター40X』を手に持っていた。

ジーン「君もなれるのか。英寿と同じ姿に…！」

デイケイドA「これが、俺の新しい力だ。さあ、此処からが…」

「ハイライトだ!!」

『READY.: FIGHT!』

ジェノサイダーの衝撃波を、左右に分かれた時計回りに何度も周回した俺達は銃口を向ける。

ジーンはレーザー光線の起動を変えて胸部以外を集中攻撃し、俺は展開した両腕の短銃をマグナムシューターとの二丁銃による銃撃を浴びせてやった。

銃撃を受けたジェノサイダーはブラックホールによる吸引で俺達を引き寄せようとしていた。

デイケイドA「おっと、さっきのブラックホールか！」

ジーン「俺も一応戦ってみたけど、あのモンスターの機動力はかなり鈍にぶい…」

デイケイドA「そりゃあ、合体元であるモンスターの強みを打ち消してしまってるからな。それが奴の弱点だ！」

ジーン「ブラックホールによる攻撃は空中にいれば何ともない。咲夜！」

『SUPPORT MODE』『LASER CHARGE』

デイケイドA「えっ、足場!? 乗れって事か…? いやっどー！」

ジーンはレバーを二回倒した銃のトリガーを上空に向けて引くと、カード状の足場を生成。

『RIFLE』

デイケイドA「おっ。この武器、スナイパーライフルにもなれるのか! よおし…」

俺はその足場に乗ってジェノサイダーのブラックホールによる吸引力から免れ、砲身が拡張したライフルモードとなったマグナムシューターのスコープで照準しょうじゆんを定める。

トリガーを引き、吐き出された加速弾を上空から超精度で狙撃。

そのままカード状の足場がジェノサイダーに正面から向かって行く。

ジーン「咲夜、接近する時に逆立ちで『リボルブオン』って言うてみてくれ！」

デイケイドA「えっ…? リボルブオン！」

『REVOLVE ON』

ジェノサイダーとの距離が間近となると、逆立ちになった俺は足場を両手で押してハンドスプリング。

ジーンに言われた通りに用語を叫ぶと、背後に輪の出現と同時に視界が上下に逆転し、先程白い装甲だったのか赤い装甲に変わっていた。

デイケイドA「…うらアツ!!」

ジェノサイダー『グギャアアアアツ!』

噴き出した炎の推力で威力を底上げした右フックを頭部に打ち込み、20mくらいに後退させる。

おまけに脚部装甲となったマグナムシューターの銃撃を一発お見舞いして怯ませた。

デイケイドA「リボルブオン！」

『REVOLVE ON』

再度リボルブオンした俺は地面に着地する。

デイケイドA「成る程な。装甲の位置を反転させる事で、回避にも防御にも使えるのか…。中々やるじゃんか。お前の世界の仮面ライダー！」

ジーン「嬉しいよ、そんな風に褒めてくれるなんて。さあ、盛大に打ち上げと行こう！」

デイケイドA「おう！」

「ファイナルアタックライド ギ、ギ、ギ、ギーツ！」

『FINISH MODE』

レバーを一回倒したジーンが必殺技をチャージしている間に、俺は助走を付けた勢いで跳躍。

『LASER VICTORY』

ジーンが放たれた青いレーザーをわざと腹部のブラックホールに当てている隙に後転し、脚部の排気口から噴き出したエネルギーの力で加速。

右足を突き出し、飛び蹴りに移行する。

『MAGNUM BOOST VICTORY』

デイケイドA「はあああああああ…。！だあああああああツ！！！！」

着地時に軸足じくあしとなった右足を左側に回転させ、前に突き出した左足でブレーキを掛ける。

背後で咆哮を上げていたジェノサイダーは爆発四散。

これで浅倉は全ての契約モンスターを失った事で、ブランク体に弱体化している頃だろう。

□

C SIDE

王蛇バグスター「ハハハハハハ…！うっ!?何だ、何がどうなっている!?まさか…！」

体の異変に気付いた王蛇が急に脱力したかの様にうつ伏せに倒れる。

手に持っていたベノサーベルが消滅し、徐々に装甲の色が紫から灰色に変色していく。

デイケイドC「リーダーの奴、遂にやりやがった！」

雄大「ああ、アキノリならやってくれと信じていた。やるなら今しかない！」

古代エネルギーを右拳に収束させたクウガは、ブランク体となった王蛇に王蛇に向かって走り出す。

王蛇バグスター「ウオオオオオオオオッ…！！！！」

デイケイドC「決めろ、雄大!!」

クウガ「うおりやあああああアッ!!!」

助走を付け、地面を蹴って拳を振り上げる。

だが、その拳が王蛇に届く事はなかった。何故なら乱入してきたゲムムがゾンビゲーマーとなってクウガの必殺技を受け止めたのだから。

『ガシャコンスパロー!』『スツパーン!』

ゲムム「ふんツ！」

クウガ「ぐっ!?!」

分割したガシャコンスパローの攻撃を受けたクウガはよろめきながら後退する。

王蛇バグスター「お前…何故俺を助けた？」

ゲムム「此処で君が倒されたら、私達にとっては都合が悪い。そして、あのミラーモンスター達も同類だ」

バグスターバツクルから取り外したガシャコンバグヴァイザーを、ジェノサイダーが倒されていたと思われる場所に向けてバグスターウイルスを回収する。

液晶画面に映っていたのは、ジェノサイダーの融合が解除されたベ

そう宣言してデリシヤスフィールドを後にするナルシストルー。
ゲムもバグスター化しているベノスネーカー達の液晶画面を見
つめながら、弱体化した王蛇の腕を組んで姿を消した。

クウガ「、本当の遊び」って……！」

キバーラ（冬美）「うん。やな予感しかしない」

ディケイドA「……」

□

S a k u y a s i d e

コメコメ「御免ごめんなさいコメ」

パムパム「パムパムも、酷い事言つて御免パム」

戦闘が終わつて、コメコメとクソ犬が互いに謝り合っている。

コメコメ「いや、コメコメが悪かったコメ」

パムパム「いいや、パムパムが悪かったパム」

コメコメ「いやいやいやコメ！」

パムパム「いやいやいやいやパム！」

ジユブリー「キリないなあ。せつかく仲直りしたつてのに、又喧嘩
腰になってどうすんねん？」

「もうしないコメー」とはつきり宣言するコメコメ。

メンメン「仲直りメン！」

ジュニラム『コレヲ機ニ、モウ喧嘩スル事ハナイデシヨ』

ゆい「お婆ちゃん言つてた。『雨降つて』……何が固まるんだっけ？
ゼリー？」

ゆいの間違えた諺に、俺は盛大にズッコケる。

咲夜「全然違ってるぞ」

ここね「固まるのは『ゼリー』じゃなくて『地面』ね」
らん「雨降って地固まる！」

咲夜「おつ、今回は間違えなかったな。やっぱ俺が教えた甲斐があつたぜ」

冬美「それはあんたじゃなくて、レグレットでしょ？」

俺は華満が諺を間違えなかった事に感心した。

まあ冬美によれば教えたのはレグレットの方だが、今回はちゃんと覚えてくれて何よりだ。

あまね「喧嘩してもちゃんと仲直りすれば、もっと友達になれる…」

透糞「まるで、昔の僕達みたいだね」

ローズマリー「さあ、皆。お待ちかねのピザパーティーよ！」

ローズマリーの掛け声で俺達は四角い木のプレートに置いてあるピザを用意すると、早速皆が食うき満々になっていた。

パムパム「食べ終わったら一緒に遊ぼうパム！」

コメコメ「コメ！何して遊ぶコメ？」

パムパム「パムパムのしたい事も聞いてくれるパム？」

コメコメ「勿論コメ！ジュブリーとジュニラムも一緒に遊ぶコメ？」

ジュブリー「おつ、ええんか？それじゃあお言葉に甘えときますわ」

ゆいとここねは和解した二匹の様子を見て安堵する。

咲夜「…んじゃあ、野郎共。犬科妖精の和解と俺の新しい力を手にした記念だ。せーの…！」

『乾杯！』

俺達はピザを口に運びながら味わう。

咲夜「あむつ。うん、美味い」

ゆい「あーん。デリシャスマイル〜!!」

ジュブリー「これがピザか…具の中に肉が盛り付けられてるだけやない。こんがり焼かれたチーズがゴムみたいに伸びてておもしろい

なあ〜！」

咲夜「だからと言って、食いもんで遊ぶんじゃないぞ？」

ジュブリー「はいはい、分かってるで。さくぼんは冷淡やなあ〜」
意地を張る様な言い方をするジュブリーだが、中身は素直で従順じゅうじゆんな性格の持ち主。

俺から生まれたバグスターだが、努力家で自分の悩みを直ぐに伝えられる正直者…。まるで転生前の俺とは正反対だ。

冬美「ジュブリーったら、急に明るくなっちゃって…」

雄大「自分自身の悩みも打ち明けたみたいだし、結果オーライって感じだな。今回の戦いでジュニラムとの息が合ってたし…」

ジュブリーも自分の悩みを打ち明けられたのか、気分が高揚している。

自分自身は飛べなくても、こうして未来に向かって飛べる様なバグスターを目指す志しを向けている。こいつが仮面ライダーになれる日が今でも待ち遠しくなってきたな。

ジーン「今の戦いは最っ高に感動したよ。世界の破壊者がまさかギーツと同じ姿に変身出来るなんて…。俺を感動させたのは、英寿に続いて二人目だ！」

鈴○福君に似ている青メツシユの入った青年が俺の実力を評価している。こいつがジーンの変身前の姿と認識しても大丈夫そうだな。

咲夜「耳がガンガンするなあ…。そーいやギーツって、お前がサポートしている仮面ライダーの事か？」

ジーン「ああ。嘗て運営達が『デザインアグランプリ』っていうゲームを開催してたんだ。話すと長くなるけど、流石に時間がないかな？それじゃ、検討を祈るよデイケイド。」

「幸せを求める人を応援するために」

役目を終えたジーンの体が徐々にぼやけていく形で消滅した。恐らく元の世界へ帰ったのだろう。

咲夜「『幸せを求める人を応援するために』…か」

そのためのこの力か。確かに力というのは使い方次第では善にも悪にもなる。今回新しく手に入れたギーツの最強フォームは、神にも等しい全知全能の力である事は間違いないと俺自身の憶測を広げる。今のところフォームライドは解禁されてはいないが、使用する度に連れて解禁される筈だ。

「しっかり何だろうな？『デザイアグランプリ』って。今度ゴードッツ倒したら、ジーンに聞いてみるか。」

咲夜「…ホントに人騒がせな青狐だったな。まあ、この力にはまだ慣れてないからな。暇な時に呼んでやるよ」

コメコメ「美味しいコメ〜！」

俺が呟くと、コメコメがピザの美味さに頭を二回叩く。

人間の姿に化けるが見た目は10歳近くに成長し、赤いリボンで結んでいた左右のお団子ヘアが垂れた狐の尻尾に近い形状へと変化していた。

ゆい「コメコメ!?!」

らん「ほんげ〜！また大きくなった！」

ここね「可愛い…！」

同意はするが、俺は赤子と幼児の方がよかった。今更だけどき。

コメコメ「あむつ。美味しいコメ〜！」

ローズマリー「立派になったわね〜!!」

キバラー「もう、マリちゃんったら、相変わらず大袈裟おおげさね〜」

ローズマリー「だってえ、こんなに感動的な事なんて滅多にないのよお〜!!」

ピザをもう一口入れると、ほかほかハートが溢れ出した。ローズマリもその成長振りに感涙している。

また一つ成長と遂げた事を所懐して微笑みかけるかいちよと、雄大に憑依しながら外方を向いて口元を緩めていたモモタロスにコメコメは満面の笑顔で微笑み返した。

その笑顔を忘れぬ様に、俺は二眼カメラのシャッターを押した。

□

No side

セクレトルー「…はあ」

ソルトルー「ワタクシが留守の間にやられたのですか？プリキュアとライダーを倒すなら、少しは本気を出したらどうなんですか？」

場面は変わってブンドル団アジト。レシピッピを奪う事に失敗して帰還してきたナルシストルーと契約後の色を取り戻した王蛇バグスター。

彼らが失敗した姿を見たセクレトルーは溜息を吐く。

王蛇バグスター「…うおおあああああッ!!!」

ゲナムに八つ当たりすべく左拳さけんを振り下ろす王蛇バグスターだが、当然受け止められてしまう。

ゲナム「随分と横暴だな。王蛇」

王蛇バグスター「お前が邪魔さえしなければ、あの坊やとの決着は

着いていた筈だ。モンスターが倒されようが知った事か！今戦えればそれで良いんだよ。俺は……！俺はまだ負けてない……！！負けてなんか、いないッ……！！！！」

王蛇バグスターはゲナムに救出されなければ、雄大と最後まで心おぎなく戦えていた。

だが、自身の契約モンスターを全て倒された事で弱体化し、皮肉にも助けられる側になってしまおうとは思ってもいかなかったのだ。

ソルトルーの掌を押し出し、荒れた息を整える王蛇バグスター。

ナルシストルー「……もつと遊びたかったけど、次会った時はプリキュアとライダーの最期かな？昔っから好きな玩具程、遊びすぎて壊しちゃうから」

ソルトルー「……そうですか」

背後でナルシストルーが全身の力を脱力させ、右腕を掲げながら自身の過去を語る。

億劫そうな態度と静寂な怒りの裏側に咲夜達を本気で潰す覚悟が見えた。

セクレトルー「……なら、これを使って長所を活かしてください。

これが最後のチャンスです」

ソルトルー「若し、ワタクシを失望させる様な行為をすればどうなるか……分かっていますね？」

最後のチャンスを与える様に、セクレトルーとソルトルーは二人にある物を投げ渡す。

王蛇バグスター「これは……？」

ゲナム「私達からの神の恵みだ。これをどう使うかは、君達次第だ」
ゲナムに投げ渡された一枚のアドベントカードを見て、王蛇バグスターも同じく仮面の下で笑う。

まるで自分の勝利を確信したかの様に。

ナルシストルー「ふっ、分かってる……」

王蛇バグスター「戴くぜ。根っからの悪党は、手癖が悪いんだ……！」

内部からどす黒いオーラを放っている黒紫色の宝玉と、まだデータ

が内包されていない白いライダーガシャット、ナルシストルーが不適な笑みを浮かべた。

プリキュアとライダーを倒すという決意を固めながら。

王蛇バグスター「おい神。お前に少し頼みがある…。」

□

モモタロス「ナオミ特性コーヒー！俺と乾杯だ！」

オリジナルED曲2『ココロデリシャス』

□

次回、デリシャスパーティ♡プリキュア　く破壊者の食べ歩きく

咲夜「夏のバーベキューじゃい!!」

スピリットルー「おいどんはスピリットルー！」

電王S「お前ら、全員纏めてクライマックスだ!!」

第二十五品：新たな怪盗!?!にこここキャンプでごわす!／お化け不祥事案件!?!四身一体、クライマックスフォーム!

全てを破壊し、全てを繋げ!

□
S a k u y a s i d e

ピザパーティーが終わり、ゆいとコメコメが寝静まった午後10時すぎ。俺達は一階のテールで密かに会議を開いていた。

冬美「それにしても、あの時ナルシストルーが立ち去る側に放った言葉。明らかに奇妙さを感じるけど、やな予感しかしない……」

『次会った時は、~~××~~本当の遊び~~、~~を教えてやる……！』

あの言い様からして見れば、あの二人はガチで本気を出してくるに違いない。

雄大「奴等もゲムムや王蛇というライダーを味方に付け、徐々に戦力を蓄^{たくわ}えてきている。俺達も空いた時間にトレーニングをしておかないと後から困難だぞ」

俺が早めに倒していればと後悔する暇もない。一刻も早く黎斗社長と浅倉を倒して、ゴードッツとソルトルーを倒す。それが俺達がこの世界に与えられた使命だ。

だが、各ライダーの中間フォームの第二形態以降どころか、歩くライダー凶鑑も解禁していない。

咲夜「……………」

透冀「？ どうしたの、アキノリ」

咲夜「……レグレット、ちよつと頼みがある。こいつをアップデートしてもらえないか？」

俺はレグレットにギーツのライダーカードと、ある物を差し出す。全体的なカラーリングは黒く、各部にマゼンタのラインが施されて

いる。更には21の文字が中央のタッチパネルを挟む様にして大きく描かれている携帯電話型アイテム『ケータッチ21』。

雄大「これって…ケータッチ？」

冬美「でも、配色がコンプリートフォームに大分近くなってるけど…？」

透翼「そっか。冬美と雄大はまだ知らないんだっけ？このケータッチはデイケイドライバーがネオに覚醒した時に変化した物なんだ。それに、どうしてギーツのライダーカードまで？」

レグレットが問い掛けるが、答えは疾うに決まっていた。

咲夜「ジーンの言葉を聞いて、少しだけ気付いた事がある。自分でも何だが…これから先の未来、俺達が絶望の淵ふちに追いやられる事だつてあるかもしれない。それでも、俺は誰かの幸せを応援したいんだ。俺は世界を救う救世主でも、ましてや世界を破壊する悪魔でもない。皆の幸せを守るためなら、俺は何だってやる。けど、与えられたこの命だけは絶対に無駄にはしたくない」

冬美「アキノリ…」

雄大「そこまで皆の事を思ってたんだな」

透翼「…分かった、そこまで言うなら僕は止めないよ。ナルシストルーと王蛇との決戦まで、成る可べく間に合う様にはする。でも、ギーツのライダーカードはまだ持っていてくれ。このカードは仕上げに使う予定だから」

咲夜「！ 感謝する」

更なる希望が見えてきた事に、俺は握り拳を作りながら固く誓った。

例え更なる絶望が降りかかったとしても、何度でも立ち上がってやる。

咲夜（目に物見せてやるよ。ナルシストルー！そして、浅倉！）

See you next chapter 3…

ジュブリー 設定資料

ジュブリーバグスター

身長：181.0cm

体重：81.6kg

特色／力：熟知した格闘能力／羽による近距離攻撃

生年月日：2022年7月3日

一人称：僕

二人称：君

好きな食べ物：肉類

嫌いな食べ物：子供が嫌ってそうな野菜

家族構成：ウオブリー（父）、咲夜（義父）、透翼（伯父？）

ICV：島崎信長

モチーフ：オオトリ・タマゴロウ、ベビーオペラ、ブルース（アン
グリーバード）

主人公の幼い鳥が、ロック鳥を討伐するために様々な鳥と戦う横スクロールシューティングゲーム『アビアーバード』から生まれたバグスター。ウオブリーが飛ばした羽が咲夜に刺さり、羽柄から拡がったバグスターウィルスが実体化して誕生したバグスターで、ウオブリーの実の息子。本名はウオブリー Jr. ジュニアバグスター。

陽気かつ従順じゅうじゆんな性格。頭の回転と相手の技を利用したり、口調は関西弁であったりとした点はウオブリー譲り。

父親であるウオブリーや自身を生み出した咲夜を侮辱ぶじよくされると、相手を容赦なく打ちのめす程の冷酷非道な一面を持つ。

近距離戦法が得意とし、リアットやボディブローといったプロレスやボクシングなどの格闘戦術を駆使して戦い、偶に両腕から飛ばした羽を相手の目眩しや牽制けんせいに使ったりしている。

だが、飛べる猛禽類もうきんのデータと飛行能力を有するウオブリーに対して、飛べない鳥類のデータと格闘術を有している。

その事で一時は落ち込んだが、咲夜に励まされたことで少しずつ自分の欠点を克服し、短所を見直していった。

当初はそのまま羽柄うへいを引き抜こうとしたが、流れ出ているバグスターウイルスがゆい達に感染してしまう虞おそれがあると悟った咲夜の判断で敢えて引き抜かないでおいた。

はごろも堂から立ち去ろうとした咲夜の左脚が変化する形で実体化を果たし、部活のメンバーに迷惑を掛けない様にバグスターウイルスを抑制する点滴を打ちながら車椅子生活をするといつた対処法で誤魔化ごまかしていた（変化した左脚は包帯でグルグル巻きにされたが）。

スネイガーとの二回目の戦闘で完全に実体化を果たし、父親であるウオブリーを侮辱したスネイガーを熟知した格闘能力で一方的に叩きのめした。

戦闘後は初陣ういじんで疲れたため咲夜の体内で休憩し、その後は度々ブンドル団との戦闘に加担する様になった。

24話では咲夜の体の主導権を借り、デイケイドシノビにカメンライドした上でコメコメを救出。

この件で咲夜もジュブリーが仮面ライダーになる日が待ち遠しくなり、予定としてはレーザーかパラドクスに変身させようしているのかなんとか……。

第三章：歩く道筋に絆あり

第二十五品：新たな怪盗!?にここここキャンピングでごわす！／お化け不祥事案件!?四身一体、クライマックスフォーム！

□

No side

ナルシストルー「後はコレを入れれば…」

ブンドル団アジトのとある研究室にて、ナルシストルーはスクリュードライバーの一本を置く。

片手で摘^{つま}んでいた紫の球体を丸い窪^{くぼ}みに嵌め込むと、作成が完了していたとされたロボットが起動する。

ナルシストルー「頼んだよ、”スピリットルー、”」

???「…ブンドル！ブンドルー!!」

”スピリットルー”と呼ばれていたロボットは起き上がると、ブンドル団のシュプレヒコールを行う。

□

王蛇バグスター「はっ！ふっ！おらアツ!!」

同じくブンドル団アジトの専用トレーニングルーム。

王蛇バグスターは手に持ったベノサーベルで、ライアやシザースなどミラーライダー達を圧倒していた。

巨大火砲『ギガランチャー』を両手に、牛の角を模したアンテナを持つ緑のライダー『ゾルダ』。

メタルホーンを右腕に重量級の装甲を纏った犀のライダー『ガイ』。ダイヤモンドをも切り裂く手甲鉤『アストクロ』を装備している

白虎ライダー『タイガ』。

契約モンスター『ギガゼール』が操る多数のレイヨウ型ミラーモンスターを通じて使役する茶色いライダー『インペラー』。

この六体のライダーは、かつて王蛇が——浅倉威が倒したライダーでもあり、戦っていたライダーでもあった。

王蛇バグスター「この感じだ…！死ぬか生きるかの命の奪い合い、生きてるって感じがするぜ！」

嘗て自分が倒した相手を見て懐かしく思った王蛇バグスターは、自身の高揚感が最大限に高めながらミラーライダー達へと向かって行く。

影は見えれど、その戦況は彼のみぞ知る。

□

S a k u y a s i d e

ゆい「あーん。んん〜！デリシヤスマイル〜!!」

咲夜「家で育てた採れたての胡瓜キュウリは格が違う程美味エ！こんな時、味噌みそがあればなあ…」

ジユブリー「味噌もええけど、マヨネーズや○ユーピーも美味しいで？」

蝉せみの鳴き声が響き、暑い風が漂う夏。

俺はゆいとジユブリーと一緒に、河童きゆうりに成り切った気分きぶんで胡瓜を一口かじ齧る。

らん「はにや。美味しそ〜」

コメコメ（人間体）「コメく…」

ここねは本の読書、華満はキュアスタ弄り、かいちよはコメコメに字の書き方を教えていた。

レグレットはケータツチ21のアップデート及びゼロデイエンドライバーの手入れ、雄大はジュニラムに伸し掛からながらの腕立て伏せ100回、冬美はキバーラと一緒に料理関連の雑誌を見ていた。

咲夜「何か暇だなあ…」

ジュブリー「せやなあ…」

俺達の眩きを聞いたゆいは何かを発案すると、俺達全員にある提案をしてきた。

ゆい「…ねえ。せつかくの夏休みだし、皆でぱあーつと何処かに行こうよ！」

あまね「何処かとは？」

ゆい「ええつと。楽しくて涼しくて…でもって、とても美味しいところ！」

咲夜「全つ然分からん」

冬美「それで、その場所は一体…？」

漠然とした即答で返すゆい。

冬美が行きたいところについて尋ねようとしたタイミングで、あきほさんが襖を開けて一枚の散らしを見せてきた。

あきほ「ねえ、ゆい。こんなの興味ある？あたしの知り合いがキャンプ場を始めたんだって」

ゆい「キャンプ!？」

キャンプ場に興味を持ったゆいは、早速目を輝かせた。

世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、その瞳には何を
見る？

OP 『愛美／LIFE For LIFE 狼たちの夜』

□

早速あきほさんに教えてもらったキャンプ場へ向かうべく、一台の
赤い車が林道を通行。

後から追跡する様に、俺達はライダーマシンで走行している。

前回のピザパーティーの件で冬美はマシンキバーラに跨っていた
が、今後はバイク免許を取るまでの間はジュニラムの背中に乗ること
となった。

ジュニラム本人は『アキノリよりマシンな重さだから全然平気だよ
！』と平然と言われて、俺がキレかけたのは言うまでもないが。

ゆい「マリちゃん、免許取ったんだ」

ローズマリー「んふふ。運転出来れば、レシピボンの捜索にも使え
ると思って。車は借り物だけどね」

透翼「オカマさんらしい判断だね。デンライナーにもバイクはある

それが原因で俺とレグレットは幽霊やお化けをモチーフとした霊属性のライダーを召喚し辛くなっている。

勿論それが妖怪モチーフであろうと、彼女の前ではゴーストにもカメンライドすることも許されないとはいわれない。

話を戻して、笑いのツボの効力が消えたレグレットを起点に俺達はニコニコキャンプ場へと辿り着いた。

らん「すっごい！自然マシマシ！」

ここね「緑がいっぱい気持ちいい……」

あまね「ああ」

ゆい「それにこの辺、結構涼しいね！」

自然豊かな場所を評価するプリキュア組。

この辺りには清涼な風が漂っており、緑が生い茂っている。

ローズマリー「チェックインしてきたわよ。まずは思いつき楽しんでみましょう！」

『オツケー！』

チェックインが完了し、俺達は自然を堪能することとなった。

ゆいとかいちよはfrisbee。華満はローズマリーが見守る中でナメケモノの要領で木に捕まり、ここねは木のベンチに座って背伸びをしていた。

俺達ライダー組は川遊びをしながら生物の観察をしていた。

ジュブリー達マスコット組は来ていた人達に見つかれば騒ぎが起きるため、俺が相応な対応をさせてもらった。

キバーラは冬美の胸ポケットに隠れ、ジュニラムはビートチェイスー2000と合体して雄大と一緒に見回りをさせてもらい、ジュブリーはレグレット専用のバグヴァイザーⅢに格納されている。

コメコメの人間体は湊さんの件と同様、『ケモミミのコスプレが好きな女の子』と誤魔化したのは言うまでもなかった。

コメコメ（人間体）「カニさんコメ！」

???「何処でござすー？」

「[?]:[?]

川の中にいた蟹に指を差している無邪気な姿を見たかいちよは優

しく微笑む。

すると、林の中から怪しげな声が聞こえてきた。

音量はかなり太めに低く、さながら力士。

どうやら道に迷っている様だが、当然その声は俺とかいちよ以外の耳には入ってこなかった。

あまね「今、何か言ったか？」

ゆい「え？あたしは何も言っていないよ？」

あまね「…そうか」

近くにいたゆいにも聞こえていない。

違う声も含めて再度あの声が聞こえてきた。今度は決して冗談では済まされない物騒な内容でだ。

???「完全に迷ったでござす。逸そ、この林を吹き飛ばすでござすか！」

???「んじゃあ、核ミサイルでも打ち込んどくか？」

「核ミサイル!!!」

某未来世界の猫型ロボットを連想させる毒舌で遣り取りをする様は、まるでコントの様にも聞こえるが、俺の脳内はブラックジョークに置き換えられた。

何故なら、この地点ごとミサイルを打ち込むことは大被害に及びかねないからだ。

あまね「いいや！今、確かに声が聞こえた…!!」

らん「あまねんも気にし過ぎだよ」

ここね「鳥か何かじゃない？」

奇妙な声を聞いて狼狽うろたえているかいちよに平然と返す華満。

ここねにも信じてもらえず仕舞しまいだったが、気持ちを切り替えて早速キャンプの用意に取り掛かった。

ローズマリー「張り切っていくわよ！」

「おおーッ!!」

「頑張れコメ（パム）（メン）！」

俺達は早速それぞれの分担に取り掛かる。

冬美、ゆい、かいちよ、ローズマリーの四人はテントの準備。

雄大と華満は管理棟とくで台車を借りに行き、俺とここねは車から荷物を持ち運ぶこととなった。

キャンプの飯が楽しみでせっかちのあまり急ぎ過ぎたのか、足のスピードを落とすタイミングを逃した俺は転んで荷物の一つを落としてしまう。

ここねも荷物を落としてしまい、丁度通りがかりの者が拾ってくれた…。のだが、その相手は人間ではなく、丸っこい奇妙なロボットだった。

??? 「ほい、頑張るでござす！」

咲夜「ど、どうも」

ここね「有難ありがとう御座ごさいます…」

ロボットが立ち去る側に一瞬ではあったが、見た目がバンドル団に似ていた。

… 少しは警戒した方が良さそうだな。

□

Y u d a i s i d e

らん「ふんぬ。重い！ゆーゆー、手伝って〜！」

雄大「今行くからちよつと待つて」

??? 「おらよ。これでいいか？」

俺は管理棟に行つて台車を借りて、一緒に来ていたらんちゃんの元へ駆け寄る。

荷物を載せたので車輪が石の間に挟まって動けなかったが、直ぐに持ち上げて後押ししようとしたところを猫の着ぐるみを着た人が突然割り込んで後押ししてきた。

らん「あ、有難う…」

??? 「ふん。礼には及ばねえよ」

雄大「口、ロボット？何か誰かに似てる様な色合いだな…」

疑問を感じる俺だが、このまま見ているわけにはいかないので、ロボットの横に並んで台車を後押しした。

□

Sakuya side

ローズマリー「こつちが前よ！」

あまね「いいや。此方が前だ」

ゆい「ああ… ちょっと待って！」

冬美「二人共、ゆいが困惑してるから少し落ち着いて！」

ここね「何してるの？」

らん「うわあ〜！何か楽しそう…！」

咲夜「いや、どう見てもテント貼ろうとしてるだけだろ」

ローズマリーとかいちよがテントの向きで一悶着いちもんちやくしている様子を華満は遊んでいるのかと勘違いをしまっているが、その誤解はテントを貼った後に解けた。

ゆい「完成！」

冬美「向きに関してはちよつと手こずっちゃった」

らん「らんらん、てつきり四人がグルグル回って遊んでるかと思っ
たよ〜」

「そんな訳ないでしょ!?!」

ゆい「よおし、早速ご飯作りを… あれ？」

ゆいは折り畳みたたテーブルの前に立って早速食材の調理に取り掛かろうとしたが、ふと何かを思い出したかの様に不審な声を出す。

そのことに気付いた俺は即座に問い掛ける。

咲夜「… ゆい。若しかしてだが、肝心の鍋忘れてきたんじゃない
だろうか？」

ゆい「そ、そうみたい…」

『ええ〜〜〜ッ!!!?』

咲夜「何やっとなんじや食いバカー1号!ちゃんと持ってく物を見直せって、出掛ける前に言ったじゃねーか!」

ゆい「皆、御免!必ず何とか...!」

せつかくのキャンプだというのに肝心な鍋を忘れたという大失態を犯したゆいを一時的に責めてしまったが、今はそんな場合ではなかった。

咲夜「仕方がない。此処は瞬間移動で...!」

???「おーい!」

俺は人差し指と中指を額の中心に乗せてあきほさんの気を感じしてゆいの家に戻ろうとした。

すると、何処からか聞き覚えのある声が飛んできた。ブラックペーパーこと品田だ。

ゆい「拓海?そのバック...若しかして!」

拓海「ゆいの母さんに『持ってって』って頼まれたんだ。ったく、大事なモン忘れんなよな」

ゆい「...拓海、本当に有難う!」

肩に背負っていた緑のバックから取り出したのは、ゆいが家に忘れたとされる鍋が。

ゆいに礼を言われた品田は、少し視線をずらして頬ほおを紅潮こうちようさせる。

拓海「いや...まあ、湊さんの配達の車で乗っけてもらえたから」

ゆい「ねえ、拓海もご飯に食べてってよ!」

拓海「でも、俺明日早く用事あるし...」

あまね「食べるだけなら大丈夫じゃないか?帰りのバスもまだあるだろう」

幼馴染みの勧誘にかいちよの提案もあって、品田はその意見に同意してくれた。

拓海「それは、まあ...」

ローズマリー「じゃあ、決まりね!」

咲夜「おっしやあ、夏のバーベキューじゃい!!」

冬美「バーベキューは後。まずはパエリアを作るのが先決でしょ?」

咲夜「あ、そうだったな。悪い… つい先走ってよ」

ゆい「早速美味しいパエリア、作っちゃうよ〜!」

ハートキュアアウオッチに描かれた作り方を参考に、ゆいは玉葱とシーフードミックスを炒めた鍋に泊夫藍入りのスープを入れて俺が蓋をした。

一方、ローズマリー達はキャンプ用のコンロで点火を試みるも中々点かずにいた。

かいちよが新聞紙、品田が割り箸の点火を試みるが、どちらも解決策にはならなかった。

ここね「火を点けるって、案外難しい…」

咲夜「こんな時、ドラジカの熱血モードが役に立つんだがなあ」

上手く点火出来ない悪戦苦闘の不安に対して、俺は心の声を漏らす。

此処でドラジカの熱血モードが役立つのだが『年に一度あるかないか』であり、そう直々に出せるものではない。

あまね「普段は当たり前だと思っていた事が、こんなに大変だとは…」

かいちよはそう呟くが、その当たり前前のが出来る有難みも含まれていた。

ゆい「そういえば、お婆ちゃん言ってた『おむすびはコメだけにしなならず』って。お米だけじゃなく、ご飯を炊くお鍋も、火も、お水も、お塩も… 全部に感謝しないとって!」

透冀「つまりは生産者、流通、販売、消費者の全てがあって成り立っているって事だね。君の祖母も良い語録を発想するものだよ」

らん「うう〜。もうこうなったら祈るしかない!」

レグレットがゆいの語録の意味を察しながら感心する。

華満は自棄になったのか、コンロに向かって『燃えろ燃えろ』とかめはめ波の要領で勝手に祈り始めた。

呆然とした俺は猫背になって手で顔を覆い、雄大は苦笑する。

祈ったところで何も変わらないってのに、せめて着火剤を分けてもらえる人が居れば…。

念のため、レグレットと冬美に『若しコンロに点火出来なかった場合は、着火剤を分けてもらえる人を探しに行つてきつてほしい』つて頼んでおいた。

冬美「皆、注目。着火剤分けてもらえる人、見つかったよー！」
丁度良いタイミングでレグレットと冬美は眼鏡を掛けた女性を連れてきた。

透冀「喜屋武ヒロ子さん、初心者の方々にキャンプの基礎を一から教えてくれる人だよ。出掛ける前に確認しといて正解だった」

ヒロ子「私のこと知ってるんだ。確か、君は仮面ライダーの… 咲夜君？」

透冀「… あの、僕は咲夜じゃなくて透冀ですが？」

完全に人違いだとレグレットは右の親指を俺に向けた。

ヒロ子「そうなの？ 御免ね。顔が似てるから、つい双子かと思つて。話を戻すけど、着火剤使いますか？」

ローズマリー「まあ、助かります！ 有難う御座います！」

ヒロ子「こういう時はお互い様ですよ」

こうして念願の着火剤を手に入れた俺達は、疾走感が溢れるリレーで渡していく（因みに順番はローズマリー↓品田↓ここね↓かいちよ↓華満↓ゆい↓冬美↓雄大↓レグレット↓俺）。

『やったあ（いよっしやあー）!!』

ローズマリー「ありがたや、ありがたや。ありがたや、ありがたや…」

らん「ファイヤー！ ファイヤー!!」

着火剤で何とか点火に成功。

ローズマリーは謝意を唱え、華満は諸手を上げて喜ぶ。

ここね「キャンプって、何だか面白い…！」

ゆい「うん！」

咲夜（あれ？ 冬美とかいちよが居ないぞ。確かに二人の気を感じられるが、他の気が二つある… 先ずは冬美達と合流するのが優先だな）

ゆいとここねもキャンプの楽しさに気付けたみたいだが、かいちよ

と冬美の姿がなかった。

二人の気は兎も角、他に新たな気を二つ感じ取れる。

ブンドル団による新たな手先かどうかは分からないが、一応警戒心は怠らないでおこう。

瞬間移動をする前に、俺はレグレットと雄大に二人の行方を尋ねる。

咲夜「なあ、二人共。冬美とかいちよ見なかったか？」

透冀「僕は見えてないよ」

雄大「二人ならお手洗いに行つたよ」

咲夜「大体分かった。サンキューな！」

居場所を特定出来た俺は、早速二人の気を感じて瞬間移動した。

透冀「ちよつと待って。瞬間移動で直接二人に会うのは……行つちやつたよ」

雄大「まあ、それがアキノリって感じだな……そういえばレグレット。マリーさんにアレはまだ渡してなかったよな？」

透冀「うん、アレは今もアキノリが預かってる。『合体タイプのモットウバウゾーとは違うタイプのモットウバウゾーが来た時に渡す』って言ってたけど……僕もそろそろ、てんこ盛りを解禁した方が良いと思ってるよ」

□

F u y u m i s i d e

あたしとあまねは近くのお手洗い場で消毒してところ、背後にいた二人の少女の話を小耳に挟んだ。

女子A「ねえ。このキャンプ場、何か出る噂よ。さつきも見た人居るって」

女子B「えっ？何かって、お化け？」

女子A「それがはつきりとは…ただ、丸っこい形をしてたって」

冬美「…今の聞いた？」

あまね「…ああ。冬美も見たんだな？」

冬美「うん。やっぱり噂は本当だったんだ…!!」

どうやらあまねもあのお化けを見ていた。

その時、身の毛がよだつ程に身震うあたしの背中を一瞬にして背筋を凍らせた。背後に聞こえる一つの足音によって。

冬美「ひいっ?!?嫌あああああッ!!!」

???「ぐええっ!!!」

あたしは恐怖のあまりに背後に居た奴の正体を確認せずに、目を閉じながら全身を捻って笑いのツボを押した。

ゆっくりと目を開けると、其処には首の右側を抑えながら左右に笑い転げるアキノリの姿があった。

あまね「咲夜？お前、いつの間に居たのか!?!」

咲夜「アツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ…！おい、冬美！いきなり不意打ちで押すのは…反則だろ!?!アツハハハハハハハハ…!!」

冬美「…もう！お化けかと思つて冷や冷やしたじゃない！成る可^べく声くらい掛けてよね!!」

咲夜「悪かった！悪かったって！アツハハハハハハハハ…!!」
笑いのツボの効果が切れたアキノリに瞬間移動でゆいちゃん達のところへ送ってもらった。

あまね「大変だ！丸っこい形をしたお化けを見た人が居るらしい！」

ローズマリー「本当？」

あまね「ああ。車から見たのも、川で聞いた声もお化けだったんだ…！」

あたしとあまねは丸っこいお化けについて動揺しながら報告したところ、マリーさん以外がそれを目撃していた事が次々に判明した。らん「丸っこい？ 違う方なら、らんらん達見たかも」

ここね「私も、咲夜と一緒に荷物を運んでた時に見た…」

あまね「ええっ?! い、一体どんなのだ…?!」

あたしと同じく冷静さを失ったあまねは、そのお化けはどういう姿をしていたのかを問う。

ここね「お相撲さんみたいな口調で『頑張れ』って励ましてくれた…」

「えっ…?!」

らん「それって、若しかして… 目がパツチリキョロキョロしてる卵の国の腕白王子わんぱくみたいなの？」

咲夜「俺とここねが見たのはそんな感じだった。雄大や華満も見ただろう？」

雄大「いや、俺とらんちゃんが見たのは、猫の着ていたけど…」

拓海「何だそりゃ!」

一人一人の証言が噛み合わない会話を聞いた拓海君は声を上げる。

冬美「もう、何が何だか分かんないよ〜!」

ゆい「皆〜!」

蹲ったあたし達の恐怖心を、ゆいちやんの一声によつて掻き消された。

どうやらパエリアが完成したみたい。

咲夜「先ずは一旦飯でも食つて気分を落ち着かせろ」

キバーラ「そうよ。いつもの冬美とあまねらしくないわ」

冬美「… うん。分かった」

落ち着きを取り戻したあたし達は完成したパエリアを食べるべく、一先ずは安堵あんどした。

□
No side

場面は変わってブンドル団アジト。

片手に持っていた白とピンクを基調にした専用の捕獲箱を見て、ナルシストルーは鼻で笑った。

最後のチャンスを与えられている以上、今はまだ出撃する時ではない。

ナルシストルー「上出来だ。こいつが完成すれば、これまでとは別の次元のウバウゾーが作れる筈…」

セクレトルー「その捕獲箱、期待しています。にしてもあのロボット、方向音痴の様ですが…付き添いのバグスターがそれを補^{おぎな}っている感じですね。大丈夫ですか？つていうか、せつかく例の物、使ってるつーの…」

セクレトルーはナルシストルーとの目線を逸らす。

先程渡された物を、ロボットの起動に使用していたことに対して呆然としていたからだ。

ナルシストルー「まあ、見ててご覧よ。あのロボットの方向音痴性を補うために、態々ソルトルーがバグスターを生み出してくれたんだからさ。案外こいつが完成する前に…あの二体がプリキユアとライダーを全員片付けちゃうかもしれないよ？それに、王蛇もまだ暴れ足りなくてトレーニングルームに籠りつきりだし、ゲムは俺様専用のライダーガシャットとバグヴァイザーⅢの開発に手が離せなくてね」

ナルシストルーが言う様に、王蛇バグスターは未だにトレーニング

ルームから出て来る様子がない。

ラストチャンスと称したアドベントカードの性能を試すべく、彼が満足するまでルーム内の音は鳴り止まない。

ゲムムはナルシストルー専用のライダーガシヤットの開発に手が離せなくなっており、まさに自分では手に負えない状態であった。

だからこそソルトルーはゲムムとの共同でライダーガシヤットを作る前に、ロボットの方向音痴性を補正するバグスターを態々生み出しておいたのだ。

ナルシストルー「せつかく与えられたラストチャンスなんだ。無理に飢えさせるつもりはない…。しっかりと準備を整えたその時は、俺様と王蛇が片っ端から潰してやるまでだ…。！」

一方、キャンプ場の茂みにて二つの影が森を彷徨さまよっている。

ロボットの体に内包されている捕獲箱のリーダーがレシピツピの居場所を感知すると、早速向上心を高める。

「キタキタキター！レシピツピの気配でござす!!」

「やつとか。それで、この後はどうするんだ?」

「決まっているでござす。さつさと捕まえて、プリキュアとライダーが現れる前にアジトに戻るでござす!」

「…。よし。そうと決まれば、さつさと捕まえに行くぞ!邪魔立てする奴はこの俺様がぶっ潰してやる!!」

□

Sakuya side

『いったただつきまーすー!』

パエリアとバーベキューが完成し、俺達は舌鼓を打つ。

透き通る肉の匂いが充満し、コンロの上に置かれたバーベキュー串の具材が良い感じに焼けている。

焼き加減は大体ウエルダンくらいだろう。

因みにパエリアの具材は魚介類ぎょかいが多く、猛禽類もうきんバグスターである
ジュブリーもちゃんと食える仕様となっている。

ゆい「あーん。デリシャスマイル〜!!」

ローズマリー「ホント美味しい〜!」

咲夜「意外とイケるな。バーベキューの具材と一緒に食うと丁度いい感じになった」

ジュブリー「空は飛べなくとも、肉は猛禽類にとって主食みたいなモンや」

咲夜「それはそうと、ちゃんと野菜も食べよ?」

ジュブリー「うぐっ?!い、言われなくともわーつとるで…!」

俺は品田に聞こえない声量でジュブリーに声掛ける。

野菜の単語に少しだけ怖気おじけ付き、マスコット組やエナジー妖精組と一緒に木の上でパエリアやバーベキューの具材を堪能していた。

…が、何やら赤や黄色いピーマンなどの野菜は省いている。俺達が目を離している間に何かあったのか?

ジュニラムは元から金属成分が大好物なため、俺達と再会する前に持ってきたとされるブラックタニウムなどの黒い金属を取り込んでいた。

ライジングに物足りず、今度はアメイジングを目指すつもりか。

まあ、それも良しとしよう。

「ピピピ〜!」

その刹那、レモンを中心にムール貝・海老・アスパラガスが乗っかっている黄色い飯の個体と、ピーマン・玉蜀黍とうもろこし・肉・玉葱たまねぎの順で串に刺された個体のレシピツピが辺りに満ち溢あふれたほかほかハートにつら

れてやって来た。

外見的にはパエリアとバーベキューらしいな。

ゆい「外で食べるご飯って、何だか特別美味しいね！」

あまね「ああ」

雄大「一人で食べるよりも、皆と一緒に食べた方が格が違うからね」
ゆいの意見に同調したかいちよと雄大。

そんな中、パエリアをおかわりしようとした華満が鍋の前で声を上げる。

らん「はうつ!? もう空っぽだ! それに写真撮るの忘れてた! 皆の初スパーメモリアルご飯だったのに...!」

ここね「遊んでる時も、みんなと写真撮れば良かった...」

咲夜「良いじゃねえか、写真が撮れなくても。美味かったんだろ?」

ここね「それはそうだけど...」

俺の言葉に不審に思うここねだが、ローズマリーが代弁する様に言ってくれた。

ローズマリー「写真がなくても大丈夫。こんなに盛り盛りで素敵な一日、大人になってもずっと忘れないものよ」

ゆい「だと良いね!」

拓海「ご馳走様。俺、そろそろ行くわ。バスの時間あるし」

咲夜「そうか。悪いな品田、俺達の我儘わがままに付き合ってもらって」

拓海「別に... どうってことねえよ」

ゆい「あたしも、拓海と一緒に食べれて嬉しかった!」

拓海「お、おう... // //」

礼を言っておくと、品田は頬を少し赤らめた。

品田が帰って行ってから数分後、俺達はバーベキューの肉を堪能しようとした直前にハートキュアウオッチの警報音が鳴り響く。

液晶画面にはバーベキューの個体が映っている。

ここね「見て、バーベキューが...!」

らん「はわわ~!」

ここねが差した指の方向には紙皿の上に乗っていたバーベキューの肉や、まだ鍋に残っていたパエリアの米粒などが四角いブロッコ状

に変化した。

俺達は専用のライダーマシンにゆい達を後ろに乗せて跨り、正面にはキャンプ場から立ち去ろうとした二体が俺の声で向き直る。

咲夜「おい、其処のお前ら、止まれ！」

???「ああ？何だテメエらは…？」

左右に並び立っている二体が背後に振り返ると、その外見が露わになる。

黄緑を基調とした丸っこいボディのロボット。

両手足は厚みのあるグローブや長靴を模しており、ブンドル団特有のシルクハットとマントを覆っている。

もう一体は猫の皮をパーカーの纏った、子供向け番組に出てきそうななどともシンプルなバグスター。

毛並みは雨に濡れていたかの如く逆立っており、口には齧齒類げっしの前歯が剥き出しとなっている。

まるで自らの正体を隠している様にも見え、その証拠に鼠ねずみの尻尾らしきものが生えている。

雄大「君は…さっきの!？」

咲夜「あいつだ！俺らが見た奴つてのは…！」

あまね「あんな奴等、見たことはなかったが…!？」

ローズマリー「でも、何で二体共ロボット…？」

透翼「恐らく、ナルシストルーと王蛇の身代わりの存在だろうね。皆、気を抜かないで！」

『うん！』

???「チツ、面倒な事になりやがった…おい、スピリットルー。テメエも何か言ったらどうなんだ？」

レグレットの言葉で全員が緊張を高める中、呼び掛けていたバグスターが『スピリットルー』と呼ばれているロボットの両目にデータの羅列られつが表示される。

???「…データ照合、一致。

おおっ！お前らがプリキュアとライダーでござるか!？」

ゆい「ごわす…?」

透冀「何で、よりによって博多^{はかた}弁なの？」

???'「やっと動いたか。ボンコツめ」

毒舌を吐いた猫のバグスターはロボットの頭を手の甲で叩く。

すると、ローズマリーが首に掛けていたスペシャルデリシヤストーンが共鳴したかの様に^{びこう}微光を発した。

ローズマリー「何で!?まさか、あの石…!!」

???'「くつつくでござす!モットウバウゾー!!」

モットウバウゾー『モットウバウゾー!!』

ブンドル団共通のマークのエネルギーが鍋に、もう一つは何と調理具ではないスパナを^{もと}基となったモットウバウゾーを生み出す。

ローズマリーは即座にデリシヤスフィールドを展開。ブンドル団のロボットとバグスターは自己紹介を始める。

スピリットルー「おいどんはブンドル団の怪盗、スピリットルー。ナルシストルーと王蛇に代わって、手合わせ願おう!!」

ドランジャ「同じく、俺様はドランジャ。スピリットルーの付き添いでも言ったところか?」

透冀「どうやらジュブリーと同じバグスターの様だね… 毎回のお約束だけど、君は何のゲームから生まれたんだ?」

ドランジャ「人間に捨てられた過去を持つ指名手配犯のロボット

が、心の優しいロボットと入れ替わった日常謎解きゲーム『ユアロボットネーム』。俺様はその主人公『ジャデン』がモデルとなった…。」

『ジャデン』か。名前的にはドラダヌキと体を入れ替わったデンジャを連想させる名前だな。

あまね「お化けでなければ怖くはない！行くぞ！」

プリキュアトリオ「うん！」「」

お化けの正体がブンドル団であることを知ったかいちよは一転して強気になる。

咲夜「問題其処かよ!?!」

キバーラ「お化けじゃなくて良かったわね。冬美、行けそう?」

冬美「う、うん…。何か化け猫っぽい見た目だけど、やれるとこまでやってみr「よし、言質^{げんち}取ったからな。今更取り消しはなしだぞ！」ちよつと!?!「行くぜ野郎共!!」」

冬美以外のライダー変身組「「ああ（ええ）！」「」

冬美「…。ああもう！アキノリ、後で笑いのツボ十回押してやるから覚悟しなさい!!」

冬美の警告を無視して、俺達は変身に移行した。

□

変身バンクBGM『林ゆうき／竜の戦士』

「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴ－！！」

□

ゆい「にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

□

ここね「オープン！」

パムパム「パムパム！」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

□

らん「くるくる！」

メンメン「メンメン！」

らん「ミラクル！」

メンメン「メンメン！」

□

あまね「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

□

「ココシエアリンエナジー！」」

コメコメ「コメ〜！」

パムパム「テイステイ！」

メンメン「ワンターン！」

咲夜「ブフォツ!?!」

ドラランジャ（あのデイケイドと呼ばれてるガキ、あのシカ野郎の言葉で吹き出しやがった・・・まあ、変身完了まで待ってやるか）

□

フィナーレ「トツピング！ブリリアント！シャインモア！」

□

コメコメ「コメコメ！」

パムパム「パムパム！」

メンメン「メンメン！」

プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」

スパイシー「ふわふわサンドde心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」

ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味しいの独り占め、許さないよ！」

フィナーレ「ジェントルに、ゴージャスに、咲き誇るスイートネス！キュアフィナーレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

「ココデリシヤスパーティ♡プリキュア！」」

□

「『変身！』」

「カメンライド デイクライド！」

「『ディエンド！』」

キバーラ「チュッ！」

『SWORD FORM』

デイクイド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイクイド！旅の語り始めようか！」

ディエンド「後を継らず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択を！仮面ライダーディエンド！僕達の旅の行先は…僕達が決める！」

クウガ「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は…俺が守る!!」

キバーラ「世界に輝く女騎士！仮面ライダーキバーラ！貴方（あんた）の野望、止めてあげる（わ）！」

電王S「…俺も少し長めに名乗るか。仮面ライダー電王。俺、参上！」

デイクイド「全てを破壊し！」

「『全てを繋ぐ！』」

「『『我ら、仮面ライダー！』』』 ドカーン！」

□

DECADE SIDE

ローズマリー『皆、気を付けて！スピリットルードランジャの力は、今までのモットウバウゾーやバグスターとは桁違いよ!!』

プレシヤス「どういふこと…!?」

スピリットルード「さあ、気合で頑張るぞ。モットウバウゾー！」

プレシヤスが問おうとしたが、スピリットルーが突然モットウバウゾーに応援を送った。

腹部に嵌め込まれてあった黒紫の玉が光り出し、両腕を掲げる。

俺達は警戒態勢に入ったが、数秒後にスピリットルーの能力を知ることとなった。

スピリットルー「頑張れー！頑張れー！ウ・バ・ウ・ゾー！ファイトファイトー！ファイトー！ド・ラ・ン・ジャー！」

スパイシー「これって…」

ヤムヤム「応援団…？」

スピリットルー「ほれ！頑張れ頑張れウバウゾー！押せ押せドランジャー！！」

日本の象徴である日の丸が描かれた専用の扇子せんすを取り出したスピリットルーの応援に、モットウバウゾーとドランジャにオレンジ色のオーラが纏われる。

モットウバウゾー『ウバウゾー！！』

ドランジャ「…よし。行くぜエー…っ！！」

応援によつて強化されたモットウバウゾーとドランジャ。

スパナを模したモットウバウゾーの片腕から充填じゅうてんしたエネルギーをオーラごと凝縮ぎょうしゆくし、そのまま放出。

プレシヤス達が攻撃を避けると、背後にあつた岩山に直撃した。

俺達もプレシヤス達と同じくエネルギー弾を回避していた刹那、ドランジャが鋭い爪を研ぎながら距離を詰める。

【アタックライド イリユージョン！】

イリユージョンでBとCを召喚した次の瞬間、ドランジャのスピードが上昇した。

俊敏な動きでの引つ掻き攻撃は、まるで妖怪鎌鼬の斬撃を喰らつていた様にも感じる。

キバール（冬美）「来て。バツシャーマグナム、ガルルセイバー！」

クウガ「超変身！俺が盾になる。冬美とレグレットはその間に！」

デイエンド「分かった！」

【アタックライド イリユージョン！】

「アタックライド ブラスト！」

召喚したガルルセイバーを受け取ってタイタンフォームにフォームチェンジした雄大が防御体制になっている間に、レグレットはライダーカードを装填して最大五人に分身。

一斉射撃による銃弾の雨を降らせてドララン ज्याを怯ませ様と試みる。

更に冬美がドララン ज्याのバランスを崩そうと、バツシヤーマグナムから吐き出したアクアバレットの軌道を変化させる。

ドララン ज्या「へっ！そんな茶番戦略、俺様には通用しねえよ！うおらアツ!!」

デイエンド「があっ!？」

クウガ「ぐっ…!？」

キバール（冬美）「ううっ!？」

何とドララン ज्याは自身の爪を伸縮自在に伸ばす事でそれらを全て相殺し、落雷にも匹敵する速度で続け様に三人にダメージを与える。仰反る三人の装甲に深い傷痕きずあとが出来ており、喰らったら細切れになるレベルの切れ味だ。

俺達はドララン ज्याの視線が合うよりも早く、取り出したライダーカードを装填する。

「カメンライド カブト！」

『Change Beetle.』

「フォームライド ダブル ルナトリガー！」

「フォームライド ジッソーウ！Ⅱ！」

『ジオウ！ジオウ！ジオウ！Ⅱ！』

ダブル ルナトリガーにフォームライドしたBはトリガーマグナムの銃口『ガイアマズル』から吐き出した秒間240発もの弾丸をドララン ज्याに向けて発射し、ジオウⅡにカメンライドしたCは時計の針を模したアンテナ『プレセデンスブレード』の長針『バリオンプレセデンス』を回転させる事で未来予知能力を発動させながらファイナルアタックライドのカードを装填する。

「ファイナルアタックライド…！」

「アタックライド カブトクナイガン！」

「アタックライド クロックアップ！」

その間に俺はカブトにカメンライド。

左手に持った甲虫を模した武器『カブトクナイガン』の鞘『クナイフレーム』を外して『クナイモード』に移行。

直ぐ様にクロックアップを発動し、右手に持ったライドブッカーと合わせた高速移動で、電気を帯びた斬撃でドラランジャの爪を細切れにする。

『Clock Over.』

『ジ、ジ、ジ、ジッオーウー！』

『トウワイスタイムブ레이크！』

デイケイドC「はああっ!!」

ドラランジャ「ちいっ！」

そのまま間合いを詰めて十字に切り付け、未来予知が完了したCはサイドハンドルを閉じてピンクのエネルギーを纏った打撃を放つ。

直前に実体化したジュブリーの踵かかと落としが隙を作った甲斐があったため、ある程度は吹っ飛ばす事に成功した。

だが、ドラランジャは相当頭が切れていたのか、瞬時に生え替わった爪を地面に突き刺して反動を抑える。

更には地面から上に突き出す形で不意打ちを仕掛けてきた。

一方ローズマリーはプレシヤス側のサポートに入っているが、応援によって強化されたモットウバウゾーにダメージを与えるのは程遠い様だ。

フィナーレ「何てパワーだ…！」

プレシヤス「あたしの1000キロカロリーパンチがまるで効いてない！」

ローズマリー『やっぱり強過ぎ…！』

電王S「クソッ！あのモットウバウゾー、意外と倒し難にくくなってやがるな」

二体の強さを評価した俺達にスピリットル―は意地を張って見せた。

ドランジヤも伸縮した爪を戻すと、着ぐるみに付いた汚れを手で払い除ける。

ドランジヤ「今のは流石に痛かったぞ。だが、まだまだだな。その気になれば、お前らを細切れにする事だって出来る…。」

スピリットルー「お前さんらに勝ち目はないでござす。レシピツピ集めの邪魔をせんでもらおう！」

プレシヤス「邪魔をしてるのはそっちだよ。皆の美味しい笑顔を奪うなんて！」

電王S「おむすび女の言う通りだ。俺達も前にプリンの味を奪われたことがあったからな」

デイケイドA「モモタロス、お前まだそれ根に持ってたのか…。」

電王S「当たり前だ！あの思い出の味まで奪われて、未来永劫プリンが食えなくなるのは俺にとって地獄なんだよ！」

抗議しているプレシヤスとモモタロスに対して、スピリットルーは不思議に思う。

美味しいとは何か、その思い出とは何か、まるで理解出来ていなかった。

スピリットルー「ん？美味しい？ふん、抑も食べる事すら時間の無駄！一分一秒、全身あるのみでござす！」

ジュニラム『ナンカ、ルールート正反対ナコト言ッテル気ガスルナ。

コノガ○ヤピンロボ…』

食そのものを威張りながら見下すスピリットルー。

若しこの場で食に対する思想が真逆なルールーが居たら、間違いなく対立はしていただろう。

スピリットルーは再度モットウバウゾーとドランジヤに声援を送る。

スピリットルー「頑張れー！頑張れー！ウ・バ・ウ・ゾー！ファイトファイトー！ファイトファイトー！ド・ラ・ン・ジャー！！」

モットウバウゾー『ウバアー…！！！！』

デイケイドA「お前ら、一旦距離を取るぞ！」

ドランジヤ「姿を消したか。だが、奴らはその程度のダメージを受

けてもくたばらねえのは明白だ。一定の距離に近付いた瞬間、一瞬で切り刻んでやる」

炎の様に滾ったモットウバウゾーは両腕から弾幕を四方八方に撃ちまくり、ドラランジャはその場で待機している。

それは無闇に特攻すれば、爪による斬撃で切り刻まれるのが落ちであることを意味していた。

展開したオーロラカーテンで岩陰に隠れていた俺達は何とか打開策があるか悩んでいた。

ヤムヤム「どうしたらいいの…?」

プレシヤス「近くから強いパンチが出せれば…!」

電王S「クソツ、こんな時に、てんこ盛り」になれさえすれば、あの猫野郎をギャフンと言わせられんのかなあ…!」

ローズマリー『てんこ盛り?何なのそれは…』

デイケイドA「モモタロス。お前がお目当てなのはこれか?」

愚痴を零したモモタロスに俺はあるものを見せ付ける。

折り畳んだ赤い携帯電話型のツールで、右側に二本の突起が付いている透明なディスプレイ画面。

中には電王のライダーズクレストを模したボタンが見える。

『ケータロス』。モモタロスが言う、『てんこ盛り』と呼ばれる姿になるための強化アイテムだ。

実はかいちよがプリキュアになった日に、手渡し人であるオーナーから『モモタロス君がてんこ盛りを必要となった時に渡してほしい』とのことだった。

電王S「ぬおおーっ!これは間違いなく、てんこ盛りのヤツ!」

デイケイドA「悪いな、渡すタイミングがどうしても見つからなくてさ。これならマトモに戦えるだろ?」

モモタロスは十五年間も重宝していた代物に目を付けると、童心に返りそうな勢いで手に取る。

ファイナーレ「これが、モモタロスの言うてんこ盛りになるアイテム…」

ヤムヤム「でも、何で携帯?」

ローズマリィ『でも、何だか少し変わったデザインね』

電王S「まあ、よく見とけオカマ。こつからが俺達のクライマックスだつてとこをよ!」

モモタロスがケータロスを開き、下から右に3・6・9・#の順に押しした後、コールボタンを押す。

『モモ・ウラ・キン・リユウ』

ウラタロス『行くよ!』

キンタロス『よっしゃ、行くで!』

リユウタロス『久し振りのてんこ盛り!』

変身待機音中にウラタロス達の掛け声と共に、右上の透明ボタン『フォームスイッチ』を押す。

『CLIMAX FORM』

ケータロスをデンオウベルトに装着すると、収納されてあつた突起が飛び出し、さながら鬼の角を連想させる。

転車台を模した赤い『オーラアーマー』の一種『ターンブレスト』が形成され、フリーエネルギーとなつて出現したロッド・アックス・ガンフォームの電板面が右肩、左肩、胸部の順に装着されていく。

「皮が剥けたコメ（パム）（メン）く!?」

黄色いシグナルパーツ『Oシグナル』が分割されると、青い六角形・黄色い菱形・紫のラブリィ矢印が刻印されたものになる。

最後にソードフォームの電板面も左右に展開し、オレンジの複眼『ペルシアスキャンアイ』が露出される。

これぞモモタロスが言う、電王の中間形態『クライマックスフォーム』だ。

電王「俺達、てんこ盛りで参上!」

ローズマリィ『え、ええ〜!?何よこれえ〜!?』

プレシヤス「マリちゃんもモモタロス達が…」

ヤムヤム「合体した!」

食いバカ組がクライマックスフォームの変身に驚愕する。

そりやそうだ。此間湊さんの件で作った巨大パフェのライダー版とでも思つていてくれ。

挿入歌『Climax Jump DEN—LINER form

(平成ベスト RE—ARRANGE ver.)』

ウラタロス『やっぱり、僕達と言えばこれに限るね』

キンタロス『カマの字、ちよいと狭くなるが我慢しとき！』

リュウタロス『でも、これ相変わらず気持ち悪い！』

電王「馬鹿野郎！つべこべ言わずにやるぞ!!行くぜ行くぜ行くぜーッ!!」

無鉄砲にデングツシャーを振り上げたモモタロス達は、ドランジャの方へと接近していく。

その姿を見たドランジャは、明らかに動揺していた。

ドランジャ「その姿は電王か？だが、所詮は俺の敵では…ぐっ、何だ?!」

キンタロス『泣けるで!』

ウラタロス『僕に釣られてみる?』

リュウタロス『答えは聞かないけどね!』

切り掛かってくるドランジャの斬撃をデングツシャーで受け流し、腹部にフロントキックを入れるモモタロス。

続け様に左腕で押し出すキンタロスに、デングツシャーの剣先で突くウラタロス。

最後に得意のダンスで鍛えた足腰による回し蹴りを繰り出すリュウタロス。

四身一体であるこの形態こそが、モモタロス達イマジンスの最強形態とも言えるだろう。

スパイシー「凄い、まるで四人の息が合ってる…!」

フィナーレ「マリちゃんをベースにモモタロス達全員の力を結集させた形態とも言えるな。私達も行くぞ!」

プレシヤス以外『おう(ああ)(うん)!』

領いた俺達は、岩陰から駆け出す。勿論、陽動作戦だ。

モモタロス達がドランジャを注意を引き付けている間に、プレシヤスの必殺の一撃を叩き込む隙を作る。

プレシヤス「皆!?!」

スパイシー「進む道は私達が作る！」
ヤムヤム「プレシヤス、行っちゃえ！」
ブラックペツパー「プレシヤス！」
デイケイドA「行くぞ、プレシヤス！」
プレシヤス「…うん。分かった！」
スパイシー達の呼び掛けに俺とプレシヤスはモットウバウゾーへと駆け出す。

俺はBとCと共にライダーカードを取り出し、ゼロデイケイドライダーに装填する。

【カメンライド ブレイド！】

【カメンライド 龍騎！】

【アタックライド メタル！】

【アタックライド ガードベント！】

モットウバウゾー『ウバツ!?ウバア!!』

BとCはブレイドと龍騎にカメンライド。

メタルのラウズカードによる硬質化と、レッダーのボディの中では堅牢な腹部を模した盾『ドラグシールド』を構えて防御体勢に移る。

途中でヤムヤムが進行から抜けることで、モットウバウゾーは正面にいる俺達に集中砲火。

ブラックペツパーは翻したひらりマント擬きによる反射、スパイシーはパンバリアを展開する。

ファイナーレ「プリキュア・ファイナーレブーケ!!」

【アタックライド ブラスト！】

デイエンド「デイエンドブラスト！」

レグレットが装填したライダーカードの効果で追尾式のエネルギー弾を、ファイナーレがクルーミーフルーレから発生した螺旋状のエネルギー波で弾幕を相殺。

俺とプレシヤスは徐々にモットウバウゾーとの間合いを詰めていく。

だが、弾幕が偶発的に足元に着弾してしまい、ヤムヤムが怯む。
ヤムヤム「うわあっ!?!」

プレシヤス「!? ヤムヤム！」

ローズマリー『行きなさい！皆の思いを受け止めるのよ！』

ドラランジャ「させるかあッ!!」

ローズマリー達と交戦中だったドラランジャの両脚の爪が伸縮し、蛇の如く俺とプレシヤスを串刺しにしようと迫る。

クウガ「お前の相手は俺達だ！」

キバーラ（冬美）「アキノリとゆいには、指一本触れさせない！」

ジュブリー「行つたれ！さくぽん、ゆいちゃん!!」

ドラゴンフォームの跳躍力で横槍を入れた雄大は咄嗟とっさにタイタンフォームへ超変身して刺突を防ぎ、ガルルセイバーを持った冬美の唐竹割りが入ったことで事なきを得た。

ジュブリーも二人に加勢しながら俺達の背中を押す。

デイケイドA「サンキューな、お前ら。このチャンス、絶対に逃さねえ!!」

プレシヤス「おむすびは米だけにしてならず！」

『ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイケイド!』

「この一撃は！皆の熱い思い!!」

モットウバウゾーとの距離が間近となると、俺達は跳躍ちようやく。

俺はデイメンションキックを、プレシヤスは1000から二倍の2000に変化したカロリーパンチが繰り出す。

デイケイドA「デイメンションキック!!」

プレシヤス「2000キロカロリーパンチ!!」

渾身こんしんの一撃で地面が抉えぐれる程にモットウバウゾーをめり込ませ、スピリットルルもその威力に驚きを隠せなかった。

スピリットル「何っ!？」

電王「やるじゃねえか、おむすび女。俺達も決めるぜ！」

『CHARGE & UP』

電王「必殺、俺達の必殺技…クライマックスバージョーン!!」

ドラランジャに頭突きを喰らわせて吹っ飛ばしたモモタロスは、ケータロスの紋章が描かれたボタン『チャージアンドアップボタン』を押し、デンオウベルトにセタッチしたライダーパスを投げ捨てた。

デンガツシャーに虹色のオーラエネルギーが纏われると、通常のエクストリームスラツシユと同様に斬り付ける。

攻撃を防ぎ切っていたドランジャは伸縮した爪による斬撃で対応し、互角の勝負を繰り広げる。

電王「ずおりやあああアツ!!!」

ドランジャ「うおおおアツ!!!」

激しい鏝^{つばせ}迫り合いの末、見事に押し切ったのは言うまでもないモモタロス達だ。

三人のイマジンの力を上乗せされたことで、エクストリームスラツシユの威力は更に強化されている。

力負けしたドランジャは砂塵^{さじん}を巻き上げながら後方に大きく吹っ飛ばされ、ローズマリーはファイナーレにトドメを刺すよう急ぎ立てる。

ローズマリー『よし、今よ!』

頷いたファイナーレはトドメの準備に入った。

□

「ファイナルアタックライド デイ、デイ、デイ、デイエーンド!」

ファイナーレ「クリーミーフルーレ!」

ファイナーレ「ブルーミン・ダンシンフルーツ!」

ファイナーレ「プリキュア! デリシヤスファイナーレファンファーレ

!!」

デイエンド「デイメンションシユート!」

モットウバウゾー「お腹一杯!」

デイエンド「此処で久々に一言。着火剤のゼリータイプを使う時は、絶対に継ぎ足しはしないこと。それでは大変.:」

「「ご馳走様でした(よく出来ました)!」」

バーベキュアのレシピッピ」ピピ〜！」

□

ファイナーレ「おかえり…。」

スピリットルー「プリキュア。中々良い気合いだったでござす！」
ドランジャ「今日はこの辺で終いか。だが、次はもっと楽しませてくれよ」

バーベキュアの個体はハートフルーツペンダントに格納され、スピリットルーは満足したかの様にデリシヤスフィールドを後にした。

ドランジャも次回も俺達と戦える事を期待し、自身の体を粒子化させて姿を消した。

ローズマリー『あの石はデリシヤストーンである可能性は高いけど、どうしてブンドル団が…？』

リュウタロス『わーい！勝った勝ったー！』

電王「小僧！勝手に動かすんじゃねー！」

ウラタロス『先輩。やっぱり僕達にはこれがしつくり来るよね？』

キンタロス『てんこ盛りになれるまで、我慢しとった甲斐があったな！』

子供みたいなステップで燥ぎ、パントマイムの要領で左右に引つ張られたりと。

クライマックスフォームは常にモモタロスがメインとなっており、電仮面になったウラタロス達に好き勝手に動かされたのだった。

ファイナーレ「何だろうな。私もマリちゃんみたいにあの姿になつていたら、こうやって振り回されていたのだろうか…？」

□

Sakuya side

透冀「御免、アキノリ。ちよつと来てくれないかな？」

プリキュア組がランプに興じている間、有言実行した冬美に笑いのツボを押されかけた俺はレグレットに『話したいことがある』と呼ばれたので一時は事無きを得た。

何やら少し薄暗い表情をしている様で、深い森の奥で話すことになった。

咲夜「それで、話つて何だよ？急に此処に連れて何もないとか言わないよな？」

透冀「・・・これを見てほしいんだ。偶然に見た速報なんだけどき、これが予想以上の事件なんだよ」

俺はレグレットに態々森の奥深くに連れてきた理由を尋ねる。

すると、レグレットは普段の表情に戻しながら取り出したスマホを操作してとある事件の一端を見せる。

焦燥感しょうそうが含まれていた声色を聞いてみると、余程ヤバい内容であることが十分に想像出来る。

それを見た瞬間に俺は目を見開く。その記載されてあった内容は

日本中の死刑囚達が警官を含め、突如行方不明になっているということだった。

□

デイケイドA 「元気澁刺オロナミンC！俺と乾杯だ！」

オリジナルED曲2 『ココロデリシヤス』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア く破壊者の食べ歩きく

コメコメ「ピーマン怖いコメ!!」

咲夜「俺も海の牡蠣かきはちよつと…」

冬美「嫌いを好きに変えてやるんだから！」

第二十六品：ここねの約束！ピーマン大王へ挑戦／嫌いを好きに！

冬美の克服大作戦

全てを破壊し、全てを繋げ！

第二十六品：ここねの約束！ピーマン大王へ挑戦／嫌いを好きに！冬美の克服大作戦

□

Sakuya side

ゆいの家に集合した俺達にローズマリーは、欠けたハートのペンダントに埋め込まれていた宝玉に関する話を始めた。

どうやらスピリットルーの腹部に埋め込まれていた宝玉と何か関連性あるようだ。

因みにモモタロス達もこの世界で変身したクライマックスフォームの初陣以降、ローズマリーに憑依する事が多くなった。

『多くなった』と言うよりも、今回はデリシャストーンに関する話を聞くため、俺達が自ら憑依させたに過ぎない。

俺がモモタロス、レグレットがウラタロス、雄大がキンタロス、そして冬美がリュウタロスとなっている。

ジュブリーも『重要な話でもあるから、念のため聞いておきたい』とこのことで、本人の意に答えた上で実体化済みだ。

ゆい「デリシャストーン？」

ローズマリー「ええ。しかもあれは、”スペシャルデリシャストーン”。どうしてブンドル団があれを…？」

あまね「抑も、デリシャストーンとは何なんだ？」

かいちよはローズマリーにデリシャストーンについて尋ねる。

ローズマリー「クツキングダム of 戦士：クツクファイターに与えられる石よ。私達は、この石を使って戦うの」

ジュブリー「そういえば、あの黒胡椒君の帽子にもスペシャルデリシャストーンが付いてたよ。色はマリさんとは違って緑色やったけど…」

冬美『そういえば…！』

透冀『確かにあったね』

らん「ほへえ〜!?ブラペもクックファイターだったんだ!」

ジユブリーは品田が変身するブラックペツパーの帽子に緑色のスペシャルデリシヤストーンが付いていたことに勘付く。

俺達ライダー組も思っていたことは同じだった。

品田がデリシヤストーンを最初から持っていたのかは、雄大と再会した日からずっと疑問に残っていた。

若しかしたら品田は、実父である門平さんから何らかの経緯で手渡されていた可能性が高い。

だとすれば、あんさんとの距離を遠ざけていた理由が、レシピボン
を盗んだ悪人という濡れ衣を着せられたのにも辻褄が合う。

俺が暫く黙考していると、ローズマリーは続けて言う。

ローズマリー「で、更に特別な力を持つのがスペシャルデリシヤストーン。私とフェンネルにしか持っていないんだけど、スピリット
ルーに嵌め込まれていたデリシヤストーンはフェンネルの物でもないし。これを作る人は、もう居ないのに……」

U透冀「これは僕の臆測しれないけど、若しかしたらクッキングダ
ム内にスパイが居るかもしれないよ?だって、そうでもなければブ
ドル団がスペシャルデリシヤストーンを盗作してもおかしくはない
話だし……」

K雄大「確かにせやな。カマの字が持っていた筈の……デリシヤ
ストーンやったっけ?あれを扱えるのは試験に合格した奴にしか
渡されん代物やったとするなら、そのスパイがこっそり分取って複製
された可能性は大や」

M咲夜「要するに、クッキングダムの何処かにスパイが潜んでるっ
てことだな。よし、早速見つけ出して……!」

俺に憑依していたモモタロスがスパイを見つけると宣言して立ち
上がるも、瞬時にプリキュア組とライダー組の腹の虫が同時に鳴る。

ゆい「ハラペコった〜!」

R冬美「やーい、モモタロスのお腹が鳴った〜!」

M咲夜「うるせえ!テメエも鳴ってたろーが!」

U透冀「まあまあ先輩。、腹が減っては戦は出来ぬ、って言うし、

コメコメとジュブリーは素すつ頓狂とんな声を上げながら怯え出し、ここねの後ろにしがみつく。

同じく俺は催した吐き気を抑えるべく口を手で塞ぎ、ウラタロスに手渡された水筒の水を強引と取りつつ、ラツパ飲みで全て飲み干した。

パムパム「三人共、どうしたパム？」

「こピーマン怖いよ（コメ）〜!!」

『ええっ!?!』

らん「何で？」

ゆい「実は昨日…」

コメコメとジュブリーがピーマンが嫌いなことに驚愕きょうがくするプリキュア組だが、ゆいがその原因となった出来事を語った。

ゆいが夕食の具材を包丁で調理していた最中で、その具材の一つがピーマン。

どうやらゆいは『生で食べても美味しいよ』と言ってしまい、舌足らずで単純な説明を鵜呑みにしてしまったコメコメはどういう味覚なのかを質問もせずにそのまま興味本位で丸齧かじり。

俺が直様止めようとしたが、時既に遅し。生で食った苦味に悶絶もんぜつして今に至る。

ゆい「凄く苦かったらしくて…」

ジュブリー「ううっ…!」

コメコメ「怖いコメ…!」

パムパム「化ける能力が上がってもまだまだ子供パム」
顔を引きつらせるコメコメ。

生で食っても美味しいと発言してしまったゆいにも問題があるのだが、本来4〜5歳くらいのガキの舌は敏感な為苦味が強かったり、臭みの強い野菜を嫌う傾向にある。

それと対照的に、幼少期からピーマンを美味しく感じるゆいにとって苦味を認識していなかった事になる。

マジでさ。ゆい達和実家ってバケモンスペックだけでなく、タフさも超人並みって有り得るモンなのかね？

これ絶対病んだら、数秒足らずで捕まるレベルの速さになるやつじゃん。

ジュニラム『ソウイエバ、ジュブクンモアキノリニ「少シデモ野菜ヲ食ベナキヤ駄目ダゾ」ツテ言ワレテ、トテモ青ザメタ顔シテタケド・・・コメチャント同ジデ、ソノママ興味本位デ食ベチャツタノカモシレナイネ』

水筒の水を全て飲み干したことで吐き気が収まり、冷静さを取り戻した俺はジュブリーがピーマン嫌いになった原因が、此間こないだのバーベキューの件でピーマンを生で丸齧りしたのが原因だと推測する。

あまね「それにしても、何故咲夜は牡蠣が嫌いなんだ？ ゆい達から話によれば、透冀が咲夜と再会した時に『牡蠣を食べれる様になっただか？』と問い掛けてはいたそうだが・・・」

透冀「ああ、それについてでなんだけど・・・」

かいちよは俺が牡蠣嫌いである理由を疑問に思うと、レグレットは苦笑気味で頭を掻かいてその理由の経緯を語った。

転生前は『美味しい美味しい』と平然と食っていたが、熱を出したことが引き金となってしまう。

其処そこで運悪く腹を下してしまい、転生後も三百年は口にしていない。

パムパム「ピーマンや牡蠣なんて全然怖くないパム。ここねも何か言つてあげるパム！」

ここね「・・・ピーマンコワイ」

パムパム「そうパムそうパム・・・パム？」

細い呟きで上手く聞き取れなかったクソ犬が頭上を上げる。

何とここねが顔を青ざめ、大量の冷や汗を流して身震っていたのだった。

□ 世界の破壊者 デイケイド。幾つもの世界を巡り、その瞳には何を
見る？

OP 『愛美／LIFE For LIFE』狼たちの夜』

□ ここね「実は幼い頃…」
モモタロス達を、レグレット達の体から追い出してから数分が経過
した。

ここねは恐る恐ると、自分がピーマンが嫌いになった経緯を俺達に
打ち明けた。

幼少期にはつこさんが生のピーマンの味を確認しているのを真似
てそのまま食ってしまい、苦味に悶絶して今に至るといふ。

それ以降は食ってはおらず、見るだけで嫌がる程にピーマンを弾い
ていたとの事だ。

ここね「それ以来、食べてない…。」

ゆい「コメコメやジュブリーと同じだ」

ローズマリー「苦味をダイレクトに味わっちゃったのね」

あまね「まあ、無理に食べることはないと思うが…。」

かいちよの言う通り、嫌いな物は無理して食う必要はないのだが、一口でも食わなければ意味がない。

話を聞いていたスパイ担当のキバーラが、あることを思い出した。

キバーラ「そういえば、此間のバーベキューの時だって、ここねちゃんかピーマンを避ける様にしてアキノリのバーベキュー串の先端に刺してたわ」

咲夜「え、マジか!? 通りでピーマンが二つ刺さってたから、少し疑問だったんだよな…。」

此間のバーベキューの件で、俺のバーベキュー串の先端にいつの間にかピーマンが刺さっていたのを疑問に思っていた。

疑うつもりはなかったのだが、俺はプリキュア組にその事を話題に出すと、ここねが変にピクツと硬直していた。

やはりあの時のリアクションはそういう事だったんだな。

ゆい「でも、美味しく食べられた方がいいよ!」

咲夜「お前のその舌足らずな説明不足が今回の発端だろーが。

まあ、俺も人のこた言えないけど」

ここね「美味しく…? 私はあれ以来ずっと、ピーマンを避けてきた。だから、コメコメやジュブリー… 咲夜には私みたいな思いをしてほしくない」

ここねはコメコメを優しく抱き上げると、何かを決意をした。

ここね「… 決めた。私、ピーマン食べる!」

ゆい「ここねちゃん…!」

ローズマリー「よく言ったわ!」

ここね「私がピーマンを食べられれば、コメコメとジュブリーも食べられる様になる。コメコメ、ジュブリー。見てて」

コメコメ「… コメ」

ジュブリー「うん。分かったよ、ここちゃん」

自らピーマンを克服してみせると宣言し、決意の眼差しを見たコメとジユブリーは頷く。

ローズマリー「決まりね」

ゆい「協力するよ」

咲夜「…俺も食うよ、牡蠣。いつまでも食えないまままで旅を終わらせるのは、流石に後悔が残るだけだしな」

冬美「あんたがそういうと思った。あたし達も全身全霊で協力するから。その代わり、逃げたら承知しないからね？」

咲夜「ああ、お前と雄大の期待は裏切らないって約束したからな。俺も破壊者として、腹を括ろ^くう」

俺も牡蠣を克服すると意を決し、料理に詳しい冬美も協力に応じた。

メンメン「無理せず苦手な物を食べる方法を考えるメン！」

らん「ほえ？はうー。らんらんは何でも食べちゃうからなあ…」

あまね「私も余程辛い物でなければ…」

ゆい「うーん、苦手な物かあ…あ！拓海は小さい頃、ピーマン嫌いだった！」

「それだ!!」

□

F u y u m i s i d e

なごみ亭であたしとゆいは、拓海君が幼少期にピーマンが嫌いだった話を聞くことにした。

アキノリとジユブリーはここねとコメコメと一緒に、ゆいの部屋で待機してもらっている。

あんさんの話によると、門平さんが作ったハンバーグにピーマンが入っていた様で、当時の拓海君はそれを知らず食べていたとの事。

どうやら絶賛だったようで、『まずはピーマンを食べられる様になる
気持ちが大抵』だというコンセプトで試行錯誤の末に研究していたそ
うだ。

この時あんさんの旦那さんは、あたしと同じで料理関連の努力家で
あるイメージが頭の中で定着した瞬間でもあった。

ゆい「成る程！大体分かった気がする！じゃあ、皆で色んなお料理
を作ってみる！有難う〜！」

冬美「あたしも。参考になる様な話をさせて頂き、有難う御座いま
す」

あん「良いって事よ。せつかくだから、たつくんも手伝ってあげた
ら？」

ゆい「拓海が来てくれるなら嬉しい！」

拓海「・・・仕方ねーな。任せろ」

ゆいから視線を外した拓海君は、ピーマンと牡蠣の克服作戦に参加
することとなった。

あたしと拓海君を含め、ゆい達は早速調理の準備に取り掛かる。

拓海「・・・まずはピーマンの苦味を抑えるか」

ゆい「そんな事出来るの？」

拓海「繊維に沿って切れば、細胞が傷付かないから比較的抑えられ
る。で、何から作る？」

ゆい「実はね、さつき皆でレシピ考えてたんだ！」

ゆいがハートキュアオツチの液晶画面に映っていたのは、らんと
あまねが描いたとされるピーマン料理。

更に上へスライドさせるとピーマンカレーやピーマングラタン。
ピーマンのパウンドケーキが可愛いイラストで表示される。

つてか、拓海君にハートキュアオツチ見せても大丈夫なのか
なあ・・・？其処があたしにとってはかなり疑問に思ってる事なんだ
けど。

ゆい「コメコメのお弁当も作ろうと思って・・・」

冬美「・・・ちよつと待って」

ゆい「どうしたの？冬美ちゃん」

あたしが呼び止めたことにゆいは疑問を投げ掛けるが、これにはあたしなりの理由があった。

拓海君に「あたし達が戻って来るまでは何も手を出さないで」と声掛けてから、ゆい達を外に連れ出した。

ゆい「どうしたの、冬美ちゃん？急に外に連れ出して」

冬美「拓海君にコメコメの正体がただの狐じゃないって事がバレる虞おそれがあるから。カレーの件、覚えてる？」

ゆい「カレー？あつ！そういうえば、コメコメがあたし達に内緒で人参を買ってた時あつた！」

冬美「そう。前にアキノリから聞いたんだけど、お使いの帰り際に森に迷ってたコメコメを拓海君が目撃したみたいで…。この時はまだ初めて人間体になってなかったから、ただの小動物だと捉とらえてたみたい。でも、問題は其処から」

あまね「問題とは、一体何だ？」

冬美「…嗅覚きゆうかく」

あたしはあまねの問い掛けに一言だけで済ませる。

そう。あたしが今言った、嗅覚、と言うワードには、エナジー妖精であるコメコメのモチーフになった動物『狐』に当て嵌はまる。

冬美「今更だけどゆい。コメコメのモチーフの動物は何だか分かる？パートナーであるあんたなら、もう分かっているとと思うけど…」

ゆい「えっ？コメコメは狐だよ？」

冬美「…次に、狐は何科？これもアキノリから聞いたんだけど、コメコメを初めてあきほさんに見せた時に何て言ったか覚えてる？」

こんな事もあるうかと、アキノリにコメコメについての経歴を聞いておいて正解だった。

ゆい「えっ？コメコメをお母さんに見せた時？確か、猫か犬に見えただって言ってたけど…」

あまね「…そうか。そういうことか！」

らん「あまねん、何か分かったの？」

あまね「コメコメは狐…。つまりは犬科だ。犬の嗅覚は人間の100倍以上とされているから、ほんの少しの匂いにも敏感だとされて

いる」

冬美「流石はあまね、生徒会長になっただけある。コメコメにピーマンの匂においを嗅かがれない様にするためには、ピーマンの苦味を感じる臭みを消すしかない」

ピーマンの臭いの原因は『ピラジン』というアミノ酸の一種の香り成分にある。

実の中にある絮わたという種子の一部に多く含まれていて、その部分をギリギリのラインで全部取らないと臭くさみが残ってしまう。

更に言うと、ピーマンの臭みの成分には油に溶けるといった性質を持ち、油を通す事で臭みを抑える効果があるのだとか。

他にも風通しの良いところで数時間干したり、レンジで加熱したりと言った手段もある。

まあ、今のは時間的には上記より下記の方が効率的である。

方法としてはさつき拓海君が言った様に、繊維に沿って切ったピーマンの中にある種と絮を取り除く。

そして半分に切ったのをラップで一つずつ包み、500Wで40秒ほど加熱したらあら不思議！

ただ火で通したピーマンより、更に苦味が少なくなり、ほぼほぼ苦味を感じなくなるといふ。

物は試しにあたしが過去に一度試した結果、本当に苦味がなく優しい甘さがあつて美味しく食べられた。

あまね「成る程。コメコメのお弁当を作るには、ピーマンの臭いを消すのが優先ということか」

冬美「そういう事、因みに牡蠣の調理法は後でそっちで教えるから。さあて、嫌いを好きに変えてやるんだから！」

そう言つて、あたし達は拓海君の居る調理場に戻るのだった。

□
Sakuya side

一方、俺とジユブリーはここねとコメコメ共々ゆいの部屋で待機していた。

次いでにローズマリーやマスコット組も俺達を見守る形で待機させてもらっている。

ここね「やつぱり、私も手伝った方が…！」

咲夜「まだ出るな。不安になる気持ちは分かるが、此処は我慢だ」
ここね「でも…！」

咲夜「心配してるのは俺も一緒だ。今の内にシヨンベンも済ませたし、ジユブリーはイメージトレーニング中… お前がゆい達の手伝いに行つてしまえば、何の為に此処で待機してるのか余計に分からなくなるだろ？」

ここね「た、確かに…！」

コメコメ（人間体）「コメコメも行っちゃダメコメ！ピーマン大王とカキ女王に食べられちゃうコメ〜！」

俺に続く様にコメコメは頭を軽く叩いて人間体になると、ここねの腕を揺さぶって引き止める。

「ピーマン大王？」

咲夜「カキ女王って…！」

ジユブリー「ピーマン大王とカキ女王って、コメちゃんのイメージだとかんな感じか？」

コメコメ（人間体）「コ、コメ…！」

イメージトレーニングを終えていたジユブリーは僅か五秒足らずで絵を完成させたのを俺達に見せる。

描かれていたのはフォークとナイフを武器として手に持っている
ピーマン。

指の先端と足は絮で構成されており、割と太鼓の○人に出て来そう
なイメージである。

その右側に描かれているのは、夫人風のドレスを纏まとっている牡蠣。
纏まとっているドレス自体は牡蠣で構成されており、より防御力に特化し
ているデザインとなっている。

咲夜「こいつめ、俺より想像力が有り余ってやがる…！」

キバール「ええ。意外と才能あるわこの子」

ジュニラム『将来、フードアーティストナレルカモネ』

ジュブリー「えへへ。嫌いな食べ物でもある筈なのに、こうやって
可愛いイメージで描いてると怖くなってるのが嘘みたいが消え
ちやつて…。」

ローズマリー「いいじゃない。嫌いな食べ物をコンセプトに絵を描
けば、食べるのがだんだん怖くなる筈よ」

俺達に絵の才能を褒められて照れるジュブリーに、ローズマリーが
軽くフォローを入れる。

メンメン「らんちゃん達が張り切ってたし」

パムパム「怖がる心配はないパム」

クソ犬とドラジカも、ピーマンの怖さで抱き寄っているここねとコ
メコメに一言声を掛ける。

ローズマリー「皆、ここね達に美味しくピーマンと牡蠣を食べてほ
しいのよ」

ここね「マリちゃんは、苦手な物はないの…？」

ローズマリー「私は食べる事が好きだし、初めてな物でも食べてみ
る事にしてるの。その方が楽しいから」

コメコメ（人間体）「…楽しいコメ？」

ローズマリー「そう。コメコメや咲夜も、ピーマン大王とカキ女王
と仲良くなれたら楽しいんじゃないかしら？」

ローズマリーのアドバイスを聞いたここねは何かを感じたのか、心
配な表情でコメコメを見ていた。

□
No side

一方でブンドル団アジト。ナルシストルーによって作られたスピリットルーとドラランジャがゴードッツと対面している。

ゴードッツ『ほう？例の試作品を作ったのか』

セクレトルー「はい。それで此方こちらのスピリットルーとその補佐ドランジャを…」

スピリットルー「お前さんがゴードッツでござるか？会えて嬉しいでござす！」

ドラランジャ「俺様より割と活いかした顔だな。会えて光栄だぜ」

ゴードッツと謁見したスピリットルーとドラランジャは、まるで礼儀知らずなのかタメ口で会話を通した。

セクレトルー「ちよつと!?頭が高いツ!!」

ゴードッツ『ふん。面白い奴等だ…その石とガシヤットの力、存分に使え』

セクレトルー「はっ！」

投影されていたゴードッツの顔が消えると、セクレトルーは二体を怒鳴り付ける。

セクレトルー「…今の態度は何ですか!?ゴードッツ様に失礼ですよ!!」

ドランジヤ「まあ、良いじゃねえか。お前らのボスによって作られた石と来れば、これほど便利な物はない…。」

セクレトルー「あれは単なる模造品もそうに過ぎません。それより、今回狙うレシピッピは決まっていますのですか？」

ドランジヤ「ああ、勿論決まもちろつてるぜ。決まっまつてはいるが、何故だか思い出す度に嫌な気分になっちまう…。確か、'ピーマン'だったか？」

セクレトルーに今回捕獲すべきレシピッピは何かと問われたドランジヤは、思い出し半分でその名前を思い出そうとする。

セクレトルー「何故ピーマンを？」

スピリットルー「おいどんの頭の中に、抹消したい料理のリストがあるでござす。其処には苦くて嫌いであるでござーす!!」

ドランジヤ「… だそうだ」

セクレトルー「そうですか? っていうかそのデータ、ナルシストルーがインプットした訳…?」

スピリットルーとの目線を離しつつも、セクレトルーは小声でナルシストルーが抹消したいデータの一つであるピーマンが嫌いだと察する。

スピリットルー「それでは行くでござす」

セクレトルー「ああつ、それは私が…。」

スピリットルー「せーの！」

「ブンドル! ブンドル!!」

ドランジヤ「ふにやあ…。」

スピリットルーの自由奔放な態度に振り回されるセクレトルーの様子を見たドランジヤは、呑気のんきに背伸びをしながら欠伸あくびをした。

ここね「凄い・・・！」

ローズマリー「素敵！」

ジユブリー「こりや美味そうな匂いやなあ・・・！」

調理が完了し、食卓には沢山のピーマンと牡蠣料理が並んでいる。

ここねは驚愕の声を上げ、ジユブリーは興味深そうに顔を少し近付ける。

拓海「これだけあれば、口に合う物がある筈・・・！」

ゆい「うん！」

冬美達が全力を尽くしてくれた事に感謝だな。

その一方で、コメコメは引き戸に隠れながら警戒していた。

ゆい「コメコメもおいで。お弁当もあるよ」

ゆいが見せたのは、ピンクの弁当箱。

入っていたのは、コメコメの全身を象ったピンク色の混ぜご飯。

おかずとしてはポテトサラダ、ミニトマト、ピーマン入りのハンバーグが入っていた。

ハンバーグについては、ピーマンの欠片が微塵みじんも欠片もない様であった。

コメコメ（人間体）「このお弁当、コメコメが居るコメ！」

拓海「ん？何か大きくなってる!？」

成長したコメコメを見た品田は、自分がブラックペッパーである事を隠さんばかりに驚愕の声を上げる。

まあ伝説のクレープの件以降、人間体の状態で暫く会ってなかったから驚くのも無理はないが。

コメコメ（人間体）「可愛いコメ〜！」

冬美「可愛いのは良いけど、まずは食べてみて。あたし達が真心込めて作ったお弁当だから！」

コメコメ（人間体）「ホントコメ？いただきますコメ〜！」

自信满满的な冬美の意気込みに、コメコメは冬美から受け取った箸はしで弁当を実食。

まずはミニトマトの蒂を取って歯で噛み、次にポテトサラダ。

コメコメご飯の半分を食ったところで定番のハンバーグに目を付けた。

冬美（此処からが正念場！お願い、コメコメ。ピーマンが入ってる事に気付かないで…!!）

冬美は目を閉じて必死に祈る態勢を取っている。それほど料理に対する思いが強いのが分かる。

臭いを少しでも嗅がれてしまえば一発アウト。

ハンバーグが口に含まれるまで後数cm、数mm。

一回二回と咀嚼する音が入れた冬美は恐る恐るとゆつくりと開いた目が一気に開眼する。

冬美「……………」

その視点に映ったのは、ピーマン入りのハンバーグを問題なく食っているコメコメの姿があつたからだ。

コメコメ（人間体）「ご馳走様でしたコメ！」

冬美「…コメコメ。お弁当、美味しかった？」

コメコメ（人間体）「美味しかったコメ〜！」

冬美「…そう、良かった」

嬉しさの余り、今でも泣きそうなくらいに濁りかけた声で冬美は言った。

「どうやら何らかの方法でピーマンを粉微塵にした上で、臭みを完全に消す事に成功したらしい。」

咲夜「冬美も料理の腕を上げたな。まさかピーm「ふんツ!!」マアツ!!!?」

判断力を磨いていたのか、俺がピーマンの名を告げさせまいと冬美が笑いのツボを強く押す。

今度は普段とは違う押し方だ。

咲夜「ハツハツハツハツハツハ！冬美、いきなり何しやがんだあ!」

冬美「人が感動してるとここで種明かししないで…ここね、ジュブリー」

「ここね「うん。ピーマンは食べられるんだって事、私が証明する！コメコメ、見せて」

コメコメ（人間体）「…コメ！」

笑い転がっている俺の言葉を見無視して、視線をここねとジユブリーに向ける冬美。

ジユブリーは俺に憑依した上でここねと略同時の速度で箸を手に取り、摘んだピーマンに眼差しを向ける。

ジユブリー「行くで？セーのツ!!」

覚悟を決めた決死の掛け声で、ここねとジユブリーは口を開けた――

□

F u y u m i s i d e

轟「お嬢様、お帰りなさいませ。今日は咲夜様にお送られになられたですね…!？」

ここね「…ただいま」

あたしとここねはマシンデイクイダーでアキノリの後ろに跨り、家まで送迎される事となった。

千鳥足でマシンデイクイダーから降りて、リムジンの後ろ窓を雑巾掛けをしていた眼鏡を掛けたスーツの男性 轟さんに挨拶を交わす。でも余りの低いテンションの差に、轟さんは何かあったのかと言わんばかりに尋ねる。

轟「どうかなさったのですか…？」

咲夜「それが、色々あつてさ。話すと長くなる」

轟「そうですか、それは大変でしたね。おや？其方そちらにいらつしやるのは…」

冬美「あ、お初にお目に掛かります。ここねと咲夜の友人で、光冬美つて言います。轟さんの事は二人から聞いていましたので」

あたしは轟さんに軽く自己紹介をした。これで会うのは初めてとなる。

轟「一口も食べられなかったと？」

ジユブリーとコメコメがピーマンを、アキノリが牡蠣を食べられる様になったのは言うまでもないけど、ここねの方は一口も食べられずに終わってしまう。

因みに残してしまったピーマン料理はアキノリとジユブリーがもつたいないといった理由で全部平らげた。

ここね「うん。皆、私の為に頑張ってくれたのに…」

轟「…食べないと思う事が大きな一歩だと思えますよ。無理せず、少しずつ克服してみてくださいは？」

咲夜「なんか悪いな。俺、悪い事しちまったみたいで」

ここね「咲夜は悪くない。でも、早く食べられる様になりたい。これから成長しようとしているコメコメの為に…！」

轟「小さなお友達のためには？」

ここね「マリちゃんも言つたの、『何でも食べられると楽しい』つて。だからコメコメにも、その喜びを知ってほしくて…私自身も、皆と楽しめる事を増やしたい。皆で過ごす時間が楽しいから」

あの後、ハンバーグにピーマンが入っていた事がコメコメにバレちゃったけど、あたしは『頑張ったね』と褒めるだけで済ませた。

それでも騙だまされたと思う気持ちがいっぱいで、逆にピーマンを食べるのがもつと怖くなってしまった。

アキノリも悪気はなかったと思うけど、リアクションが激しい余りつい口が滑らせてしまった事に対する責任感と謝罪の気持ちでいっぱいだった。

せつかくピーマンを克服する機会を、このタイミングで失ってし

まったのだから。

それでも、食べる喜びを分かち合いたいという気持ちは他の誰よりも人一倍強かった。

轟「咲夜様のようなお友達たくさんが沢山増えて、お嬢様の世界はどんどん広くなつていきますね」

ここね「自分でも不思議。今までピーマンだけはずっと避けてたのに・・・」

今まで孤独に慣れすぎてしまったここねの世界はあたし達と出会い、喜びを分かち合う度に広がっていく。

そんな不思議な気持ちになっていたここねは、縫ぬいぐるみのフリをしていたパムパムの頭を優しく撫なでる。

冬美「ピーマンを食べられる様になるには、先ずはその生態から知る事が重要だけど・・・ん？ちよつと待って。、生態を知る、・・・」

生態を知る、〓歴史。歴史といえば農業！これだツ!!」

ここね「冬美？どうかしたの？」

冬美「うん。ここね、ピーマンが食べられる唯一の方法が見つかった！」

「ここね「・・・本当？」」

冬美「アキノリ、今直ぐピーマン農g——」

咲夜「それならもう済ませてある。お前が検索したかったのは・・・これだろ？」

□

俺は湊さんのところに行って、色取り取りのピーマンが沢山入っているダンボールの重さに抗いながらも一歩ずつ足を前に進ませる。芙羽には今度こそピーマン料理を食べてもらう。そう思っている、ブンドル団のロボットと猫の着ぐるみを被ったバグスターが走っているのを見掛けた。

スピリットルー「おいしいなタウンのメインストリートは何処でござす?」

ドランジャ「今ググってっからそんなに急かすな。ほらこっちだ！」

拓海「ブンドル団!」

目撃した俺は驚くが、追跡の前にピーマンをゆいの家に届ける事を優先した。

□

Sakuya side

農業員A「枝を折らない様に。蒂へたの部分で切って」

ここね「採とれた...!」

農業員A「うん!上手ですよ」

らん「ほわわ〜!おっきいピーマン!」

農業員B「それはジャンボピーマンです。パプリカに似た甘味と歯応えがあるんですよ」

農業員の優しいアドバイスでここねは農業用のハサミでピーマンの蒂を切り、華満もジャンボピーマンを見て驚いていた。

俺達は今、ピーマン農園に訪れている。

冬美や轟さんの助言もあってか、ピーマンの知識を得る事で交流を深めるといった作戦に出たのだ。

パムパム「ここね。ピーマン大丈夫パム?」

キバーラ「大丈夫じゃなかったら素直に言いなさいよ?」

ここね「ううん、大丈夫。収穫が楽しいから少し慣れてきた」

ピーマンの箱に入っていたクソ犬とキバーラが小声で声を掛ける。どうやらピーマンに対する親したしみを覚えたのか、昨日よりは気持ち改善している様だ。

透冀「さつきよりは、殆どほとんピーマンに対する恐怖心が改善したみたいだね」

あまね「成る程。ピーマンの知識を得る事で親しみを覚えるという戦法か?」

ここね「うん。『轟さんも皆で行って見たら?』って…」

その一方で、ゆいが採ったピーマンを見てコメコメは少し微妙な顔をしていた。

まだ粉微塵にしたピーマンがハンバーグに入ってた事を根に持っていたのだろうか…?」

だが、背後から様子を見るに、逃げる様子はなさそうだ。

ゆい「コメコメ、平気?」

コメコメ「コメ…」

メンメン「コメコメはお留守番じゃなかったメン?」

雄大「それもそうだったんだけど、ここねちゃんが頑張ってるから、今度はちゃんとピーマンと仲良くなりたいたんだってさ」

ドラジカがそう尋ねるが、ここねがピーマンを克服しているのを見て、めげずにはいられないとのこと。コメコメもピーマン農業に訪れていた。

同じくジュブリーも一つの体験にしたいとのことで、見学に来ている。

最初は農業員さん達は怪人が現れたと恐慌きょうこうしていたが、雄大が『彼は決して悪い怪人ではない』と説得した事で見学の許可が下りた。

ここねは両手に収穫したピーマンをコメコメに見せる。

ここね「コメコメ、ジュブリー。見て」

コメコメ「可愛いコメ!」

ゆい「ホントだ!」

ジユブリー「おおっ、とんがらしみたいで可愛いな！」

冬美「ピーマンは唐辛子の一種だから、ジユブリーの似てるっていう発言は間違いないかもね」

あまね「まさか、ピーマンにはこんなに種類があるとはな…。」

農業で育てているピーマン畑には、緑の他にもパプリカの赤と黄色の三色で構成されていた。

ローズマリー「どれもこれも可愛いし、とっても美しいわく!!」

「二有難う御座いますー!」

農業員A「私達農家は食べてくれる人の笑顔を思つて、大事に育てているんです」

ゆい「へえ〜!」

ローズマリー「愛が美しさの秘訣ひけつなのね」

どの野菜を育てるのも、食つてくれる人の笑顔や愛情を持つて育てるのが基本。

農業員さんの話を聞いていたコメコメは、どことなくピーマンに対する愛情を覚える。

農業員B「あのカフェに、うちのピーマンを使った料理もありますよ」

眼鏡の農業員さんに案内されたのは、農園に併設へいせつされているカフェ。

メニューのテンプレートには、全てピーマン料理が記載されてあった。

らん「ふええー。皆美味しそ〜!!」

ゆい「ううっ。ハラペコつた〜!」

あまね「ここね、食べられそうか?」

ここね「うん。今、凄くすご食べたい気分!」

ローズマリー「自分から食べる気になったのね…。」

それから数分後、ここ音が自ら注文したときされるピーマンの肉詰めが用意され、箸で摘むと詰められた肉による弾力が生み出される。

咲夜「そんじゃ、ジユブリー。二回目のピーマン料理実食、頼むぜ!」

ジユブリー「うん。もう食べられる様になっただけど、此処はここちゃんとコメちゃんの為や！」

ここねとジユブリーが口に含めようとした瞬間、ピーマンの肉詰めがブロック状に変換されてしまう。

ゆいのハートキュアオウツチが警報音を響き渡らせ、画面にはピーマンの肉詰め個体が移っていた。

ゆい「ブンドル団…!？」

ここね「何て事…!!」

冬美「よくも、せつかくのチャンスを手無しにしてくれたなあ〜！あのポンコツロボットと軟体ドラ猫お〜!!」

拳を強く握った冬美は憤慨し、カフェの外に出ると立ち去ろうとしたスピリットルードランジャの二人組と対峙する。

ここね「スピリットルードランジャ！」

スピリットルードランジャ「又来たでござるか？」

冬美「聞かなくても分かっているでしょ!？」

ここね「レシピッピを返して！」

ここねとジユブリーが抗議するも、スピリットルードランジャの目的は変わらない。

冬美「聞かなくても分かっているでしょ!？」

スピリットルードランジャ「ハッ！悪いがそれは…」

スピリットルードランジャ「断るぞわす！くっ付くでござす、モットウバウゾー!!」

モットウバウゾー『モットウバウゾー!!』

召喚したモットウバウゾーは中華鍋をベースとし、両腕はスピリットルードランジャの両腕と同様、オレンジのステップドリルが付いている。

ローズマリー「デリシャスフィールド！」

ゆい「行くよ！」

俺達は変身に移行した。

□ 変身バンクBGM 『林ゆうき／竜の戦士』

「コプリキュア・デリシヤスタンバイ！パーティーゴー！！」

□ ゆい「にぎにぎ！」

コメコメ「コメコメ！」

ゆい「ハートを！」

コメコメ「コメコメ！」

□ ここね「オープン！」

パムパム「パムパム！」

ここね「サンド！」

パムパム「パムパム！」

□

らん「くるくる！」
メンメン「メンメン！」
らん「ミラクル！」
メンメン「メンメン！」

□
あまね「フルーツ！ファビュラス・オーダー！」

□
「コシエアリンエナジー！」
「コメコメ「コメ〜！」
パムパム「テイステイ！」
メンメン「ワンターン！」
咲夜「ブフォツ!?!」

□
ファイナーレ「トッピング！ブリリアント！シャインモア！」

□
コメコメ「コメコメ！」
パムパム「パムパム！」
メンメン「メンメン！」
プレシヤス「熱々ご飯で漲るパワー！キュアプレシヤス！美味しい笑顔で満たしてあげる！」
スパイシー「ふわふわサンド de 心にスパイス！キュアスパイシー！分け合う美味しさ焼き付けるわ！」
ヤムヤム「煌めくヌードルエモーション！キュアヤムヤム！美味し

いの独り占め、許さないよ！」

ファイナーレ「ジェントルに、ゴージャスに、咲き誇るスウィートネス！キュアファイナーレ！食卓の最後を、この私が飾ろう」

「「「デリシヤスパーティ♡プリキュア！」」」

□

「「「変身！」」」

【カメンライド デイクライド！】

【ディエンド！】

キバーラ「チュツ！」

『ROD FORM』

デイクライド「全てを束ね、全てを創る！仮面ライダーデイクライド！旅の語り始めようか！」

ディエンド「後を継らず全てを撃ち抜く！新たな旅に悔いなき選択を！仮面ライダーディエンド！僕達の旅の行先は…僕達が決める！」

クウガ「ゼロから始まる古代のエネルギー！仮面ライダークウガ！皆の笑顔は…俺が守る!!」

キバーラ「世界に輝く女騎士！仮面ライダーキバーラ！あんた貴方の野望、止めてあげる（わ）！」

電王R「お前、僕に嘘に釣られてみる？」

デイクライド「全てを破壊し！」

「「「全てを繋ぐ！」」」

「「「我ら、仮面ライダー！」」」ドカーン！」

□
Decade side

『はああああああー……ッ!!!』
モットウバウゾー『ウバツ!』

出会い頭がしらならぬ変身頭でプレシヤス達の一斉攻撃をモットウバウゾーが、体の角度を九十度曲げて攻撃を防ぎ弾き返す。

ドランジャ「悪いが、スピリットルールの邪魔はさせねえ。うらアツ!!」

背後が空きだらけになり、俺達は背後に回ろうとした矢先でドランジャが遠距離から腕を伸縮させて刺突攻撃を仕掛けてきた。

俺はライドブツカーをソードモードし、片腕の爪をブツカーソードを引っ掛ける。

もう片方の爪も冬美が召喚したガルルセイバーでタイタンフォームに超変身した雄大が、タイタンソードの剣先こうぼうで後方に後退しながらも受け止める。

その隙にウラタロスがデンガツシャーからオーラインを伸縮させ、鉤爪を両足に引っ掛ける。

ドランジャ「何ッ!？」

【アタックライド ブラスト!】

デイエンド「ふっ!」

ドランジャ「……なーんてなあ。らアツ!!」

ゼロデイエンドライバーの銃弾よりも早く、ブツカーソードとタイタンソードを上弾くドランジャは迅速な動きで両腕を戻す。

その反動で俺と雄大は大きくよろめいてしまい、地面に突き刺した爪をドリルの様に回転させる。

激しい駆動音くどうが鳴らしながら砂煙まぎに紛れたドランジャの姿はない。恐らく、地中に身を潜めたのだろう。

クウガ「超変身!」

【フォームライド ジオウII!】

『ジオウ！ジオウ！ジオウ！II!!』

タイタンソードをペガサスボウガンに変化させた雄大はペガサスフォームに超変身し、目を瞑つむってドランジヤの気配を察知する。

俺もジオウIIにカメンライドした俺は即座に未来予知能力を発動させると、地面から出て来たドランジヤが土煙を巻き上げながら現れ、体を回転させて俺達に斬撃を与える。

悪いが、出て来た位置が特定した時点でお前は蜂の巣だ。

『ジカンギレード！ジユウ！』

『タイムチャージ！5...4...3...2...1...』

俺はワールドファインダーから片仮名でケンの字面が刻まれた剣『ジカンギレード』を召喚し、刀身『ギレードエッジ』を畳たたむと、形態を表すサイン『インパクトサイン』が『ケン』から『ジユウ』に変わる。

銃モードにした上で特殊攻撃発動スイッチ『ギレードリユーズ』を押してリミッター解除。

カウントダウンと同時に地面に亀裂が入った。

『...ゼロタイム！』

『ストレス撃ち!!』

ドランジヤが地面から出て来るより先に迅速な動作でペガサスボウガンのグリップを引いてトリガーを引く。

未来予知の通り、ドランジヤは体を回転させてペガサスボウガンから放った矢と、銃口『ギレードマズル』から吐き出した文字型のエネルギー弾ごと斬り払う。

デイケイド「伏せろツ!!」

瞬時に俺の合図で後ろに仰反った冬美はバツシャーマグナムを手にも、レグレットはしゃがみ込む直前に取り出したライダーカードを読み取り装置『ライドリーダー』に装填する。

【アタックライド ブラスト!】

デイエンド「ふっ!」

ドランジヤ「ぬうっ!?!」

キバーラ（冬美）「動かないで。動く痛いよ?。」

ゼロデイエンドライバーのブッカーマズルから吐き出したシアンの追尾弾を真横に斬り裂いたドラランジャを、冬美が召喚したドツガハンマーのトゥルーアイを開眼させて動きを封じる。

ドラランジャ「へっ！こんなモン、数秒で——『ジオウサイキョウー！』!!」

俺はサイキョーギレードのメインユニット『ギレードキャリバー』のレバーを上げると、フェイスに描かれた『ライダー』の文字が『ジオウサイキョウー』に置き換わる。

『霸王斬り！』

デイケイド「らあッ!!」

ドラランジャ「ぐおあッ!?!」

インデイアンな攻撃待機音声が流れ、引き金『サイキョートリガー』を引いて刃『サイキョーエッジ』から七色の斬撃波を飛ばす。

腕を交差させたドラランジャは後方へ大きく吹っ飛ぶも体勢を整えつつ爪を食い込ませ、爪跡が残るくらいに反動を抑える。

モットウバウゾー『ウババババババーーッ!!』

その一方で、モットウバウゾーも駆動音と共に回転させたステップドリルをプレシヤス達に突き出す。

防御体勢となったプレシヤス達は腕を交差させて視界を塞ぎ、更に地面に連続で突き出す光景はモグラ叩きを連想とさせた。

ブラックペツパーも加勢し、両手を翳して放ったエネルギー弾を三発お見舞いして一時的に怯^{ひる}ませる。

プレシヤス「今だ!」

怯んだところを一斉に畳み掛け、モットウバウゾーを転倒させた。

スピリットルー「負けるなでござす!頑張れー!頑張れー!ウ・バ・

ウ・ゾー!ファイトファイトー!ファイトファイトー!ド・ラ・ン・ジャー!!」

モットウバウゾー『モットウバウゾー!!』

スピリットルーの応援の力でドラランジャとモットウバウゾーにオレンジ色のオーラが纏われる。

丸い形状と化したモットウバウゾーは自らの体を前転させてプレ

シヤス達に襲い掛かる。

その威力は言わずもがな、デリシヤスフィールドの岩山を一瞬にして粉碎する程の威力を持つていた。

ドランジャ「力が漲みなぎってくるぜ……サンキューな、スピリットルー「はああああああー……ッ！たあーッ!!」……うおつとー！」

ドランジャ「流星はウオブリーの息子だな。動きが俊敏すぎていけねえなアツ！」

ジュブリー「僕が得意なのは、格闘技だけやないで!!」

追い討ちを掛けんばかりに実体化したジュブリーがドランジャに踵落としを繰り出す、伸縮した腕によるカウンターを追尾式で喰らってしまう。

カウンターで下顎にクリーンヒットしたジュブリーはバク転。距離を取りつつも地面に着地し、両手を広げて無数の羽を飛ばした。

ドランジャ「こんなもの、俺様には……『ウオリヤアアアアアアアアッ!!』いよつとー！」

ドランジャは再び両腕を伸縮させ、背後から不意打ちを仕掛けてきたジュニラムの突進は避けられ、ジュブリーが飛ばした羽を諸もろに喰らってしまった、ジュブリーと激突してしまう。

ジュニラム『イテテ……大丈夫、ラム君?』

ジュブリー「僕は大丈夫や。それより、ドランジャは?」

ジュニラム『又、地中ニ潜ツタミタイ……』

俺は再び未来予知を発動し、今度は地中からドランジャの両腕による斬撃が俺達を圧倒する光景を目にした。

デイケイド「……地中から来るぞ!攻防に備えろ!」

ローズマリー『ウラタロス、モモタロスに交代よ!』

電王R「了解!」

『SWORD FORM』

クウガ「超変身!」

俺の掛け声でライダー組全員が警戒体勢に入り、電王はソードフォームにチェンジ。

冬美はガルルセイバーとキバラーサーベルの二刀流で構え、雄大は

再びタイタンフォームに超変身。

ディエンド「雑な扱いだけど、君には盾役として担になってもらおうよ」

【カメンライド ガイ！】

三原色の人影がライダーを形作り、犀を模した灰色のミラーライダーが実体化される。

重厚な西洋甲かつちゆう冑の様な外見で召喚機が左肩装甲と一体化しており、まるで取り外しが効かなくなっている。

装飾として赤い一本角が目を引き、右腕にはメタルガラスの上頭部を模した武器かつ王蛇が使っていたメタルホーンが装備されている。

本性は残忍かつ凶悪。ゲーム感覚で命を弄もてあそんだダーティゲーマー『仮面ライダーガイ』をレグレットが盾として扱う。

壁貼りとして『バリア』があるが、範囲が少ないためにガイを選抜したのでらう。

ディケイド「ぐっ?!」

地面に亀裂が入り、砂煙を巻き上げながらドラランジャの両腕が突き上がる。

獲物を捕らえるは蛇の如く、執念深く伸縮自在に軌道を変えて行く。

俺達はそれぞれの武器で受け流し、レグレットはガイの装甲の中で最も強固な部分『メタルチェスト』で防ぎながら銃撃。

その間に俺はジカンギレードとサイキョーギレードを『サイキョージカンギレード』として合体させ、逆手で持って剣先を下に向ける。

立て続けに取り外したギレードキャリバーをジカンギレードの窪くぼみ部分『ライドウオツチスロット』に装填した。

『キング・フィニッシュタアーム!!』

仕上げて三度目の未来予知を発動。視点には足元からドラランジャの両足が俺に襲い掛かってきた。

両腕を囀もに使って、その隙に旋回させた足の爪先で俺を貫通させるって戦法か。

距離は僅か20cm程度。駆動音が間近になってきたところで、俺はドラランジャの位置を把握する。

デイクライド「其処かアツ!？」

『キングギリギリスラツシユ!』

ジカンギレードのグリップ部分『グリップコネクター』にあるトリガー『ブレードトリガー』を引き、地割れのように地面を一直線に切り裂く。

ドラランジャ「うおわあつ!？」

俺は全身を右側に捻り、ゴルフの要領でドラランジャを上空への打ち上げを試みた。

だが、ドラランジャは両足で白刃取りをしながら、最大まで旋回させた爪先で長大した光の刃を見事に叩き折ってみせた。

歯を食い縛り、サイキョージカンギレードを投げ捨てる。

『ファイナルアタックライド ジ、ジ、ジ、ジッオーウ!』

『トウワイスターイムブレード!!』

デイクライド「うおりやあツ!!」

ドラランジャ「ふっ、にやあああーっ!!」

透かさずジオウのファイナルアタックライドカードを装填し、左手で照準を定めた上でピンク色のエネルギーを纏った右正拳突きを放つ。

それを承知の上でドラランジャは不敵な笑みを浮かべ、伸縮した腕を新幹線にも及ぶ一気に振り下ろした右ストレートパンチを同時に放った。

クロスカウンター狙いかと思って、俺は頭部を右側に捻って受け流そうとしたが、それが大きな間違いだった。

デイクライド「なっ…!？」

ドラランジャの最大の目的はジオウⅡのアンテナ部分であるプレセデンスブレードを破壊し、未来予知能力を無力化させる事であった。それを破壊されてしまえば、未来予知を使えなくなってしまうのも同然だ。

キバラーラ（冬美）「アキノリ、避けて!はあああーっ!!」

ドラランジャ「何度来ようが同じだ!」

予想外の展開に俺は仮面の下で一瞬だけ動揺してしまうが、粒子の

翼で飛翔した冬美が飛び蹴りを放とうとする。

キバーラ（冬美）「ふんっ！」

ドランジャ「何いッ!?があ… ちいッ!!」

ドランジャが伸縮した腕で刺突しようとしたが、キバーラサーベルで受け流した事で事なきを得た。

背後から追撃してくる両腕よりも早く飛び蹴りが直撃し、更には自身の腕をまともに喰らったドランジャは後方に砂塵を巻き上げて大きく吹っ飛んだ。

直前に冬美はドランジャの体を蹴つてのバク宙で攻撃を躲かわしていたので、何の問題はなかった。

同時に盾役としての役目を終えたのか、ガイは消滅する。

スパイシー「逃げてるだけじゃ駄目だ。皆は前へ！」

モットウバウゾー『ウバツ!?ウババーツ!!』

プレシヤス「スパイシー…！」

ヤムヤム「やるう〜！」

一方でスパイシーの掛け声でプレシヤス達は岩壁に身を屈かがめると、スパイシーが岩壁に付きながらパンバリアを展開。

前転して襲い掛かるモットウバウゾーを跳ね返した。

キバーラ（冬美）「アキノリ、大丈夫？」

デイケイド「有難な冬美。お陰で助かった…。まさか、ジオウIIの未来予知能力を無力化させてくるとはな。洞察力も尋しんじょう常じゃない」

冬美に氣遣われながら、俺はカメンライドを解除してデイケイドの姿に戻る。

ドランジャは俺達が今まで戦ってきたバグスターより遥かに上だ。恐らく何らかの機能を用もちいて正確に攻撃を当てていたのだろう。

スピリットルー「ふん！確かにやるでござす」

ドランジャ「中々良い連携プレイじゃねえか、仮面ライダー。だが、攻撃の範囲はこつちが上だ！」

キバーラ（冬美）「あんた達の見栄みえっ張りなんてどうだっていい」

スパイシー「レシピツピを返して！」

スパイシーと冬美の抗議に、スピリットルーとドランジャはまるで

理解出来ていなかった。

スピリットルー「何故でござす？苦いピーマン料理がなくなれば、皆嬉しい筈でござす！」

ドラランジャ「お前らも嫌いな奴に会いたくねえと思った事が一度はあるだろ？それと同じさ」

プレシヤス「そんな事ない！ピーマンは美味しいよ！」

ブラックペツパー「栄養も豊富だ！」

プレシヤスが顔面に鉄拳を喰らわせ、品田がエネルギー弾を右側のドリルに着弾させて牽制させる。

ヤムヤム「食物繊維もあるし！」

ファイナーレ「ビタミンCも含まれている！」

ローズマリー『美容にも良いわ！』

電王S「でえりやあツ!!」

ヤムヤムのドロップキックとファイナーレの回転蹴りが炸裂し、憑依中のローズマリーが締め括りでモモタロスがオーラソードでドランジヤの爪を受け流す。

クウガ「確かにピーマンは苦いけど！」

ディエンド「諦めずにチャレンジする子供だって、世界に御満と居る!!」

ペガサスフォームに超変身した雄大とレグレットがモモタロスの肩を足場にして飛び上がる。

銃撃を浴びせて背後へと周り、再度タイタンフォームに超変身した雄大がタイタンソードで古代エネルギーを流し込む。

レグレットは素早くゼロディエンドライバーにライダーカードを装填し、トリガーを引いた。

「カメンライド ローグー」

『割れる！喰われる！砕け散る！クロコダイリンローグー！オーラア！（キヤーー！）』

三原色がライダーの姿を形作り、実体化したのは紫を基調とした水色の複眼を持つライダー。

両肩と頭部のは鰐の両顎を彷彿とさせており、頭部と胸部の黒い部

分にはまるで噛み砕かれたかの如く白い亀裂の模様。そして後頭部には割れ物注意の黄色いシールが貼られている。

「アタックライド クロスアタック！」

『クラックアップファイニッシュ！』

大義の為に戦う『仮面ライダーローグ』は、クロスアタックのライダーカードの効果で水色のベルト『スクラッシュドライダー』のスパナを模したレバー『アクティベイトレンチ』を押し上げて必殺技を発動。

右足に纏われた鰐のエネルギーでダメージを与えたドラランジャを捕捉した上で投げ飛ばし、ジュブリーが上段蹴りで打ち上げる。

電王S「よし、てんこ盛りだ！」

『モモ・ウラ・キン・リュウ』

『CLIMAX FORM』

デイケイド「こっちだつて！」

「フォームライド アギト トリニティ！」

最後にローズマリーがケータロス进行操作してクライマックスフォームに、俺がライダーカードを装填。

姿はアギトの基本形態である『グランドフォーム』そのものだが、右側はフレイムセイバーを手に持つ赤い腕が。

左側は薙刀状の斧槍『ストームハルバート』を手に持った、風の力を宿すスピード特化形態『ストームフォーム』の青い腕に変化していた。

電王「うおおつ、お前もてんこ盛りになれんのか!？」

ウラタロス『つていうかこれ、僕達がアキノリとは違うデイケイドが変化したライダーだよな?』

キンタロス『まさか、こっちもてんこ盛りになれるとはな! てんこ盛りライドパート1でも言ったとこか?』

リュウタロス『わーいわーい! アキノリもてんこ盛りだー!』

デイケイド「まあな。お前らより一つ足りてないだけだが、この姿になると割と動き難いんだよなあ…。」

左右非対称の腕を持つアギトの中間形態『トリニティフォーム』と

なった俺はフレイムセイバーとストームハルバートの剣先を地面に突き刺し、風を司る奇跡の拳『サイクロンナックル』に生成した風を最大限に溜め込む。

更にはもう片方の炎を司る奇跡の拳『バーニングナックル』の掌てのひらに炎を生成する。

デイケイド「トリニティテンペスト!!」

地面に翳かざした両手から炎の竜巻を発生させ、ドラランジャを飲み込む。

偶然に翳したのが地面だったのか、砂塵さじんも合わさって熱砂の竜巻と化す。

『CHARGE&UP』

電王「必殺、俺達の必殺技！クライマックスバージョン・パート3！」

セタツチしたライダーパスを投げ捨てた電王が、俺の必殺技 クライマックスバージョンの構えに入る。

ドラランジャ「こんなもの、クソッ。前が見えねえ…!!」

電王「てえい！でりやあッ！うりやあああッ!!」

パート3という事で、風車の如く回転させたデンソードでドラランジャを左右に斬り付け、真正面にデンガツシャーを振り下ろす。

キバーラ（冬美）「今だ！ソニック… スタツブ!!」

強く警戒していたドラランジャだったが、砂嵐によって視界を奪われていた。

その好機を逃さなかった冬美は紫の翼で熱砂の竜巻に特攻していき、すれ違い様にキバーラサーベルで切り裂いた。

ドラランジャ「し、しまった…!!」

キバーラ（冬美）「あたしのピーマン克服大作戦を邪魔した事、地獄の業火に焼かれて反省なさい！」

ドラランジャは切れ目を入れられた着ぐるみごと熱風にその身を焼かれ、熱砂の竜巻の中で苦鳴を上げた。

流石に消滅までは至らなかったが、より致命傷に近いダメージを与える事は出来た。

スパイシー「それに、農家さんの愛情も！」
パムパム「そうパム！」

スピリットルー「苦けりや同じでござす！」
モットウバウゾーが前転させて向かって来た。

スパイシーは前に出て、パンバリアを展開する。

スピリットルー「ドリルで打ち抜いてやるでござす！」

『最初からやれ』とも言わんばかりに両腕のドリルを旋回させ、バンバリアと拮抗。

激しく火花が散る中、バンバリアに罅が入り始める。

スパイシー「どんな食材もお料理も、なくなつていい物なんてない！『クラスティ・パンバリア』!!」

完全に碎け散る直前だったパンバリアが緑色のバリアに変化し、防御力を底上げてモットウバウゾーを弾き飛ばす。

ファイナーレ「プリキュア！ファイナーレブーケ！」

ヤムヤム「バリバリカッターブレイズ！」

プレシヤス「2000キロカロリーパンチ!!」

モットウバウゾー『ウバーツ!?!』

回転が収まったところを必殺技の連続攻撃を畳み掛ける。

ファイナーレブーケとカッターブレイズで迎撃し、最後に2000キロカロリーパンチで地面に大きく減り込ませた。

相変わらず亀裂が入る程の威力だな。

スピリットルー「ござす!?!」

ディケイド「よし、トドメだ「ちよつと貸して！」おい、ちよつ…!?!」

俺はそのままトドメに移行しようとするマスクドジャーニーミキサーを实体化させた刹那、冬美が火傷を負いながらもそれを分捕って地面に降着してきたのだ。

キバーラ（冬美）「使い方は大体分かつてる。行くよ、スパイシー！」
スパイシー「うん！」

□
スパイシー「キュアスパイシー！ハートジューシーミキサー！」
キバーラ（冬美）「仮面ライダーキバーラ！マスクドジャーニーミキサー！」

「シエアリン！エナジー！ミックス!!」
パムパム「パム〜!!」

スパイシー「プリキュア・デリシャススパイシーベイキン!!」
キバーラ「ライダー・トランスディメンションバードグラー!!」
モットウバウゾー「お腹一杯！」

キバーラ（冬美）「此処で一つ豆知識。ピーマンはコロンブスによってその種を持ち帰った事から広まったらしいよ。それじゃあ皆…」
「ゴ馳走（お粗末）様でした！」
ピーマンの肉詰めレシピッピ「ピピ〜！」

□
Decade side

スパイシー「お帰り…！」
スピリットルー「分かん。人間は何故、苦い物を態々^{わざわざ}食べるでござす？」

ピーマンの肉詰め個体がスパイシーのハートキュアウオツチに格納され、事件は収束した。

ドラランジャ「お前ら…！よくも、やりやがったな…!!」

ジュブリー「あんにやろう！あれだけのダメージを受けても、まだ立てるのか…えっ!？」

デイケイド「どうしたジュブリー…なっ!？」

頭を抱えながらも理解が追いつかないスピリットルーが姿を消すと、火傷を負いながらもドラランジャがよろよろと起き上がって俺達を睥睨^{へいげい}する。

だがその姿を見た俺達は愕然とし、一斉に目を見開く。

その姿は黄色い目を覗かせる金属製の黒いロボットそのもので、全身に身を纏っているのは鼠の骨格に似たメタリックな装飾。

尻部に垂れ下がっている尻尾で強く地面に波打つドランジャ。

奴の正体は猫の皮を被り、鼠の骨格を纏った漆黒のロボットバグスターであった。

デイエンド「骨？しかも、あれは鼠の骨格だ…」

クウガ「本当に、あのドランジャなのか？」

キバーラ（冬美）「… やっぱりね。思った通りだった」

ドランジャの正体に関して疑問に思う中、冬美は予想外の言葉を吐く。

デイケイド「どういう事だ？冬美」

キバーラ（冬美）「ドランジャは自分の腕が直撃した際に動揺してた。まるで自分の正体を必死に隠してる様なリアクションだった…それで試しに剣先で数箇所当てて、違和感のあるところを搔っ捌いたらこれが出てきた」

冬美が証拠として見せたのは、ゴムの如く手を自在に伸縮させる深緑色のエナジーアイテム『伸縮化』だった。

デイケイド「これは、エナジーアイテム…!？」

キバーラ（冬美）「そう。四肢の伸縮能力はこれのお陰ってわけ。因みに地中であたし達を正確に攻撃してきたのはこっちの方…」

デイエンド「それは慧眼のエナジーアイテム、通りで正確に狙っていた訳だ」

キバーラ「そういう事。やあッ!!」

伸縮化のエナジーアイテムをずらして見せたのは、左目が光っている紺色のエナジーアイテム『慧眼』。

そのままコイントスの要領で弾き、キバーラサーベルで二枚のエナジーアイテムを切り裂く。

これでドランジャの能力の種は完全に根絶された。

キバーラ（冬美）「悪いけど、もうあんたにこの能力を使わせる訳にはいかない。これ以上強くなったら、こっちが面倒になるだけだか

ら

ドラランジャ「この俺様を追い詰めるだけでなく、正体と能力まで暴くとはな。あの気持ち悪い姿になった電王と同じくらいにやるじゃねえか…。せめて名前だけでも聞いといてやるよ」

キバーラ（冬美）「光 冬美。それがあたしの名前…。言つとくけど、無理に覚えなくてもいいから」

ドラランジャ「光 冬美か、いい名前持つてんじゃねえか。その名前覚えといてやる…。それとウオブリーの息子に電王！お前らも首洗つて待つとけよ？」

新たな因縁を付けられ、ドラランジャはデリシヤスフィールドを後にした。

デイケイド「ドラランジャバグスター…。その正体がまさかのロボツトだったとはな」

デイエンド「うん。流石の僕も驚きを隠せなかったよ」

俺とレグレットはドラランジャの正体に関して話し合っていると、プレシヤスの腹の虫が鳴り響いた。

プレシヤス「ハラペコった〜！」

スパイシー「私も…。」

プレシヤス「そうだ、拓海も何か作ってるかも。三人の為に今日のレシピ考えるって言ってたんだ！」

ヤムヤム「そしたらさつきのお料理をテイクアウトして、拓海先輩と一緒に食べよう！」

ローズマリー『良いわね、それ！』

実はこつそりと立ち去ろうとした品田が、慌ててデリシヤスフィールドを後にしたのは言うまでもないだろう。

全く死刑囚行方不明事件といい、ドラランジャの正体といい、今は警戒を怠らないでおこう。

□

Sakuya side

ゆいの家にて、ジュブリーとここねはカフェでテイクアウトした
ピーマンの肉詰めを口に運ぶ。

俺達は真剣な目で見守る中、咀嚼し終えた肉詰めを飲み込む。
さて、かんじんかなめ肝腎要のお味は…！

ここね「…美味しい！」

ジュブリー「美味い！」

『やった（いよっしゃあ）ー!!』

ピーマンの生態を知れた甲斐があり、二人のピーマンの克服は達成
した。

俺達は両手を上げながら喜んだ。

ゆい「やったね、ここねちゃん！」

コメコメ（人間体）「コメ！」

パムパム「カッコいいパム〜！」

咲夜「ジュブリーもよくやったな」

ジュブリー「よくやった」って、僕はこれで二回目やで？」

俺は父親らしくジュブリーを褒めるとコメコメはピーマンの肉詰
めに目を付けて警戒する。

ここね「…食べてみる？」

コメコメ（人間体）「…コメ」

コメコメにとつては、二回目のピーマンチャレンジとなる。

慎重にうなず頷き、フォークで刺した肉詰めを口に入れて咀嚼。

コメコメ（人間体）「美味しいコメー！」

『うおおおおおおお〜ッ!!』

拓海「ほい。チンジャオロース青椒肉絲出来たぞー」

冬美「こっちは牡蠣の唐揚げだよー」

笑みを浮かべたコメコメもピーマンの克服が達成されると、俺達は黄色い歓声を上げた。

そして丁度良いタイミングで品田特製の青椒肉絲と、冬美特製牡蠣の唐揚げがテーブルに置かれる。

本人によると、今回は二人が共同で作ったとのことだ。

ローズマリー「それじゃ、私達も一緒に…」

『いただきます（タードラえモンゴル）！』

ここね「これも美味しい…！」

ゆい「デリシヤスマイル〜!!拓海、冬美ちゃん、有難う。すっごく美味しいよ〜!!」

拓海「ま、今回は俺と光が共同で作った自信作だからな！」

品田としては珍しく、ゆいに対して自慢気である。

自分の料理を美味しく食ってくれたみたいで何よりだ。

あまね「農家さんや漁師さんが愛情を込めて、作ってくれてると思うと更に美味しいな」

らん「はう〜!益々ますますピーマンと牡蠣が好きになってきたよ〜!」

ここね「美味しいが増えると楽しい…」

コメコメ「コメ〜!」

自分の思いを口にしたここねの表情は、笑顔で満ち溢あふれていた。

□

キバーラ（冬美）「赤くて真っ赤なトマトジュース!あたしと、乾杯!」

オリジナルED曲2『ココロデリシヤス』

□

次回、デリシヤスパパーティ♡プリキュア く破壊者の食べ歩きく
コメコメ（人間体）「コメコメの尻尾と耳を、らんの発明で消し
ちやつてほしいコメ」

らん「皆と違うところを良いって思えたら、きつとハッピーがマシ
マシになっちゃうよ！」

ジュニラム『僕ハオリジナルノゴウラムヲ越エルモノ、ソレガツ！
ゴウラムJr. トシテノ、生き様ダアアアアッ！！！！』

ナルシストルー「お前達の下らないパーティーも、今日でお開きだ
！」

第二十七品：コメコメ大変化!? らんのハッピー計画／ジュブリーと
ジュニラム！秘められしジュニアの称号！

全てを破壊し、全てを繋げ！